レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

No. 1
1969. 11. 28
大月書店

レーニン10巻選集
第七巻（第一回配本）を読んで

豊田四郎

この文章は、レーニンの論文集を解説したものではありません。私が第七巻を読んで、学び感じたことや多少とも参考になるのではないかと思うことを記し、なんらかの意味で、読者がみずからレーニンの著作に接するのに、いくぶんでも役だてようとしたものです。したがって、文責はまったく筆者個人にあります。

この第一回配本、第七巻には、一九一六年七月から、一九一七年九月までの時期に、レーニンが亡命中もしくは革命が開始されてから書いた諸著作がおさめられています。

この巻には、大別して、二つのグループの著作がおさめられています。

第一グループには、第二インタナショナル諸党の指導者——公然たる社会排外主義と中央派——の裏切りや、ブハーリン、ピャタコフらのロシア社会民主労働党内部の「帝国主義的経済主義」とのたたかいなどをつうじて、帝国主義、民族問題、民主主義をめぐる闘争などについて、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を究明した一連の論文——つぎの論文がおさめられています。『自決にかんする討論の総括』、『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」について』、『ペ・キエフスキー（ユ・ピャタコフ）への回答』、『帝国主義と社会主義の分裂』など。

第二のグループには、一九一七年の二月革命から十月革命の直前まで、ロシア革命の刻々の発展におうじて明らかにされた、戦術、方針、政治的経済的方策——マルクス・レーニン主義の情勢分析、戦術のみごとな模範、社会主義革命の理論の発展をしめす——についての論文がおさめられています。

『遠方からの手紙』、『現在の革命におけるプロレタリアートの任務について』、『戦術にかんする手紙』、『スローガンについて』、『革命の教訓』、『さしせまる破局、それとどうたたかうか』、『革命の一根本問題』など。

第一次世界大戦（一九一四年七月―一九一八年十一月）は、いずれの参戦国からみても、世界の領土再分割をめざす帝国主義戦争でした。

当時の社会主義諸党の国際組織であった第二インタナショナルは、この大戦の直前、シュツットガルト大会（一九〇七年）、臨時大会（バーゼル宣言、一九一二年）で、「帝国主義戦争反対」の決議をおこないました。しかし、すでに日和見主義におかされていた第二インタナショナル幹部は、この宣言を裏切り、結局は、「祖国擁護」の名のもとに自国のブルジョア政府の侵略戦争を支持し、公然と社会排外主義に移行してしまいました。

これにたいして、レーニンのひきいるロシア社会民主労働党のボリシェヴィキは、国の内外の革命運動のなかで帝国主義戦争にたいする正しい革命的態度と方針を堅持して、妥協しないでたたかいました。ボリシェヴィキは、戦争の即時停止を呼びかけただけでなく、戦争によって生じたすべての困難をツァーリズム打倒のために利用するよう呼びかけました。その基本スローガンは、「帝国主義戦争を内乱へ」です。

どちらの参戦国の側からみても帝国主義戦争としての性格をもつ第一次大戦は、ドイツに一九一八年十一月に革命がおこり、戦線での敗北もあって、ドイツ側の降伏におわりました。この大戦のさなかの一九一七年十一月に、当時、帝国主義の諸矛盾の集中点であったロシアで、ついに社会主義革命が成功し、資本主義世界体制の一角がくずれさりました。

もともと、帝国主義時代には、民族問題は社会主義革命の予備軍となっていました。帝国主義戦争の情勢は、民族・植民地問題を社会主義革命の焦眉の問題の一つとして、世界労働者階級の前に提起していました。

第二インタナショナル（国際社会党、一八八九―一九一四年）はその創設者であり指導者であったエンゲルスの死（一八九五年）後、日和見主義的幹部の指導のもとにおかれました。かれらは、マルクス主義を修正して、プロレタリアート独裁を回避し、帝国主義時代が世界プロレタリアートの前に提起した政治的任務――反戦平和、民族自決、プロレタリアート独裁と社会主義革命など――を解決できませんでした。日和見主義幹部は、マルクス主義、社会主義革命、プロレタリアート独裁に敵意をもち、労資協調と改良主義の政党となり、一九〇五年の第一次ロシア革命を正しく評価できず、レーニンの理論、綱領、戦術に反対し、ただ合法的闘争形態とくに議会主義だけにしがみつくようになりました。そして、シュツットガ

ルト大会（一九〇七年）、コペンハーゲン大会（一九一〇年）では、帝国主義の打倒、反戦平和と民族問題をめぐって革命派と日和見主義者との対立もうまれました。日和見主義幹部は、帝国主義戦争が開始されたとき、「祖国擁護」の名のもとに自国のブルジョア政府を擁護し、労働者を帝国主義者どうしの争いの血の海に投げこみました。

レーニンは、国の内外でこれらの左右日和見主義とたたかい、マルクス主義の純潔を守りつつ、帝国主義と社会主義革命の時代にマルクス主義を創造的に発展させたばかりでなく、ロシアで、また第二インタナショナルのなかで、これらの第二インタナショナル型の、古い型の党ではなく、新しい型の、革命的プロレタリア党をつくるために奮闘しました。

第二インタナショナルの破産した諸党の指導者やロシア社会民主労働党内部のトロツキー、ブハーリン、ピャタコフなどの左右日和見主義者は、レーニンに反対して、民族解放運動を社会主義革命の一構成部分とみとめず、革命運動を敗北の運命にみちびこうとしていました。

一九一五―一九一六年に、「民族自決」について、国際的な討論がくりひろげられました。

巻頭におさめられている『自決にかんする討論の総括』には、ポーランド社会民主党の新聞『ラボートニッァ』が発表した『帝国主義および民族的抑圧にかんするテーゼ』についてのレーニンの反論がおさめられています。レーニンは、このテーゼを完膚なきまでに批判し、民族問題にかんするボリシェヴィキの綱領的基本命題をいっそう発展させています。

『自決にかんする討論の総括』は、『帝国主義および民族的抑圧にかんするテーゼ』を反論しています。ポーランド社会主義者の「資本主義のもとでは自決は『実現不能』である」という基本命題の論拠は、すでに、ロシア社会民主労働党第二回大会の綱領委員会（一九〇三年）、『民族自決について』（一九一四年、本選集第五巻）で、すでに根本的に反駁されたものですが、レーニンは新しい情勢のもとで、この論争に終止符を打っています。

この論文で、レーニンは、民族自決という民主主義的性格をもつ一政治的問題が、資本主義――帝国主義時代から社会主義にいたる時代の、重大な課題であることをしめしています。とくに、私がこの論文から学んだ点は二つあります。一つは、レーニンがポーランド社会民主主義の、民族自決についての経済主義的誤りを批判している点です。一つは、マルクス主義者は民族自決の要求（民主主義的要求の一部）を、プロレタリア世界革命の

立場、独自の革命的闘争に従属させて提起しなければならないという古典的命題を明確にし、この命題を帝国主義時代（諸民族が抑圧民族と被抑圧民族に分裂している）にみごとに適用していることです。

ポーランド社会民主主義者が、例の基本命題から出発して、「社会主義はあらゆる民族的抑圧を一掃することを、われわれは知っている。なぜなら、社会主義は民族的抑圧をもたらす階級的利害をなくすからである」と主張したとき、レーニンは、政治的抑圧の一形態について論争しているときに、民族的抑圧を一掃するための経済的前提をもちだすところに、かれらの誤りの根源があることを指摘し、つぎのように書いています。

「資本主義のもとでは、民族的抑圧（一般に政治的抑圧）をなくすことができず、民族的抑圧をなくすためには、階級をなくすこと、社会主義を実現することが必要である。しかし、社会主義は、経済にその基礎をおきながらも、けっして、そっくり経済に帰着させられるものではない。民族的抑圧を排除するためには、土台――社会主義的生産――が必要であるが、この土台のうえで、さらに民主主義的な国家組織、民主主義的軍隊、その他が必要である。プロレタリアートは資本主義を社会主義につくりかえることによって、民族的抑圧を完全に排除する可能性をつくりだすが、この可能性は、「あらゆる分野で民主主義を完全に実行するばあいに『のみ』現実性に転化する」。

第二点では、レーニンは、民族問題におけるマルクスのプルードン主義批判から、古典を条件におうじて立場と観点を学ぶという模範を、つぎのようにしめしていることです。

「社会革命の名において」民族問題を「否定」したプルードン主義者に反対して、マルクスは、なによりも先進諸国におけるプロレタリアートの階級闘争の利益を念頭におきながら、他民族を抑圧する民族は自由ではありえないという、国際主義と社会主義の根本原則をもっとも重視しました。一八四八年にはマルクスは、まさにドイツの労働者の革命運動の利益の立場からして、勝利をえたドイツ民主主義派がドイツ人に抑圧されている諸民族の自由を宣言し実現するよう要求しました。一八六九年にはマルクスは、まさにイギリスの労働者の革命的闘争の立場からして、イギリスからのアイルランドの分離を要求し、そのさい、「たとえ分離してから連邦制をつくるにしても」とつけくわえています。ただこのような要求をかかげることによってのみ、真にイギリスの労働

者を国際主義の精神で教育したのでした。

論文『ペ・キエフスキー（ユ・ピャタコフ）への回答』は、民族自決にかんするキエフスキー論文への回答ですが、レーニンは、資本主義＝帝国主義と民主主義、社会主義と民主主義との関係について、多くを教えています。

レーニンは、キエフスキーが、資本主義（＝帝国主義）と民主主義、社会主義と民主主義との関係を理解していないことをあげて、帝国主義に反対する社会主義的蜂起の目ざめと高まりは、民主主義的な反抗と憤激の高まりと不可分に結びついていること、社会主義はあらゆる国家の死滅へ、したがってあらゆる民主主義の死滅へみちびくこと、およびこの点からみた、社会主義におけるプロレタリアートの独裁の役割についてのべています。

この論文は、民主主義の問題にかんするマルクス主義的態度――プロレタリアートが、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの勝利すなわちブルジョアジーの打倒を準備するために、すべての民主主義的制度とブルジョアジー反対の志向とを利用することの問題について、基本原則を明らかにしつつ、総論的に簡潔にまとめられています。

一八九四―一九〇一年の旧「経済主義者」（一八九四―一九〇一年にロシア社会民主労働党内部にあらわれた。かれらは、「資本主義は勝利した、だから政治問題を思いわずらう必要はない」として、けっきょく、ロシアにおける政治闘争を否定するにいたった）の思想的な延長である「帝国主義的経済主義者」は、「帝国主義は勝利した、だから民族自決権をふくむ政治的民主主義の問題を考える必要はない」という考えをひろめました。レーニンは、さきの『ペ・キエフスキー（ユ・ピャタコフ）への回答』で、「帝国主義的経済主義」の誤りについて概括し、論文『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」について』では、「帝国主義的経済主義」という新しい傾向の「核心」、キエフスキーの議論のもっとも「中心的な」点――「戦争と『祖国擁護』」とにたいするマルクス主義的態度」に論点をしぼり、当時の帝国主義の時代の民族戦争の現実的可能性と不可避性について論じています。

レーニンは、帝国主義の経済的本質とこれに照応する政治的上部構造は政治反動であるとしています。そして「自由競争には民主主義」が、「独占には政治的反動が照応する」ことをしめしています。

こうして民主主義と資本主義――帝国主義との全般的な関連を明らかにしたうえで、レーニンは、民族自決の問題を民主主義的要求の一つであると位置づけ、つぎの

ようにのべています。「対外政策でも、対内政策でも一様に、帝国主義は民主主義の破壊をめざし、反動をめざす。帝国主義が、民主主義一般、民主主義全体の『否定』であって、けっして民主主義的要求の一つである民族自決だけを否定するものではない」。

社会主義と民主主義についての原則的命題を、つぎのように明らかにしています。「社会主義は、つぎの二つの意味で、民主主義がなければ不可能である。㈠プロレタリアートは、民主主義のための闘争によって社会主義革命の準備をしていなければ、この革命を遂行することができない。㈡勝利をしめた社会主義は、民主主義を完全に実現しなければ、自分の勝利を維持し、人類を国家の死滅へみちびくことはできない。」民族自決は政治的民主主義一般の一部分であるから、資本主義、帝国主義のもとでも、民族自決の原則を堅持するとともに、社会主義のもとでも必要なものであり、「自決は社会主義のもとではよけいなものだと言うのは、社会主義のもとでは民主主義はよけいなものだというのと同様なナンセンス」である、としています。

レーニンは、以上のような首尾一貫した論理で、キエフスキーらの「帝国主義的経済主義」の誤りを厳重に批判しています。

論文『プロレタリア革命の軍事綱領』は、帝国主義時代における各種の戦争の可能性と不可避性を明らかにし、戦争にたいする原則的態度をしめしています。

レーニンは『資本主義の最高の段階としての帝国主義』(本選集第六巻)などで究明された資本主義の経済的、政治的発展の不均等性が帝国主義の段階で飛躍的に激しくなるという結論にもとづいて、帝国主義の時期には社会主義はすべての国で同時に勝利できない、社会主義の勝利ははじめは一つの国、またはいくつかの国ででも可能であるという結論をみちびきだしています。(『ヨーロッパ合衆国のスローガンについて』――本選集第六巻)。

論文『帝国主義と社会主義の分裂』は、当時のヨーロッパの労働運動におこった支配的現象――日和見主義(帝国主義戦争の開始とともに公然たる社会排外主義の形をとった)の勝利が、帝国主義の発展の結果であること、日和見主義と社会排外主義が同一の思想的=政治的内容をもっており、プロレタリアートに無縁なブルジョアジーの召使、手先であることを明らかにし、日和見主義との決定的な分裂以外に社会主義の勝利はないことをしめしています。論文『資本主義の最高の段階としての帝国主義』が主として経済的な面から帝国主義の分析を

おこなっているのにたいして、この論文はその重要な補足であり、政治的結論をしめすものです。

『一九〇五年の革命についての講演』は、レーニンが、一九一七年の革命を前にして、亡命先のスイスでの労働青年の集会でおこなったものです。このなかで、レーニンは、第一次ロシア革命の経過を概括的にのべ、革命の経験を深くまた全面的に分析しています。演説は、一九〇五年の革命が、社会経済的内容からみればブルジョア民主主義革命であったが、指導勢力からみればプロレタリア革命であったことを指摘し、「ヨーロッパ革命の序曲」としての世界史的意義を明らかにしています。この演説は、一九〇五年の革命についての理解を容易にするだけではなく、この演説の直後にむかえる二月ブルジョア革命、これにつづく十月社会主義革命――ロシア革命の全過程にわたる複雑な問題を予見するに足る、十分な根拠を簡潔にしめしています。

一九一七年の二月革命によって、長年にわたり、ロシアの勤労人民と諸民族を抑圧してきた帝制は崩壊しました。

『遠方からの手紙』は、レーニンが、スイスにあって、二月革命によって生まれた新しい情勢――革命の最初の段階から第二の段階への過渡――における階級闘争と階級勢力の相互関係を分析し、党の当面する任務とブルジョア民主主義革命から社会主義革命への展望をしめしたものです。ツァーリズムが打倒されてブルジョアジーが権力をにぎった以上、革命は終わったとして、ブルジョアジーへの支持を要求するエス・エルやメンシェヴィキにたいして、レーニンは、ブルジョアジーが権力をにぎったからこそ、かれらの欺瞞にたいして人民の目をひらかせ、自分の力、自分の組織、自分の武装だけにたよるように人民におしえなければならないことを指摘し、ブルジョア政府が警察を復活したり、君主制を救ったりしないようにさせるために、「当面のスローガンは、プロレタリア的組織でなければならない」とし、プロレタリア民兵の創設を提起しました。そして、当時の具体的情況のもとでは、この方向だけが、平和と社会主義への道であることをしめしました。

この巻には、五つの手紙のうち第一、第三信がおさめられています。

レーニンは祖国における革命的情勢の発展にあたり、四月はじめ亡命地から早々に帰国して、歴史的な四月テーゼ（『現在の革命におけるプロレタリアートの任務について』）を提示しました。ブルジョア民主主義革命を社会主義革命に成長転化させる党とプロレタリアートの

闘争計画でした。新しい革命の指導力と原動力を特徴づけ、プロレタリアート独裁の政治的形態としてソヴェト共和国を提起し、当面の時期における党の政治的経済的綱領をつくりあげ、社会主義革命にむかって大衆を組織し、動員する具体的方針をしめしています。

『戦術にかんする手紙』『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務』は、四月テーゼの思想をさらに詳細に展開したものです。

一九一七年二月、ロシアでブルジョア革命が勃発し、ボリシェヴィキ党は公然たる活動を開始しました。しかし、党は二月革命によって一変したロシアの情勢をまだ的確に分析することができず、手さぐりで前進しなければなりませんでしたが、この革命の全将来を決定する重要な時期に、レーニンは四月テーゼを発表し、党とプロレタリアートを社会主義革命をめざす闘争計画で武装しました。

党は、その決定をもって、大衆のなかにはいり、宣伝、扇動、組織活動をくりひろげ、大衆の支持を獲得してゆき、その全活動によって、十月社会主義革命を準備しました。

論文『ロシア農村労働者組合を設立する必要について』は、七月三—五日事件のおこる直前に書かれました。レーニンは、ここで、農村労働者組合の問題の原則的な意義と若干の実践的措置を指摘しています。レーニンは労働組合運動の基本原則を明らかにしながら、農村の賃金労働者、雇農、日雇、極貧農、半プロレタリアの運動を重視し、そのための第一歩として、農村プロレタリアートを独自の階級として組織することのかけがえのない重要性をのべ、全ロシア労働組合会議が最大のエネルギーでこの事業を取りくみ、ロシア全国に大声で呼びかけ、農村のプロレタリアに援助の手を、組織されたプロレタリア前衛の強力な手をさしのべるようにのぞんでいます。この事業は、ロシア革命を前進させ、ロシア革命の成果を守る点で、はかり知れない重要な役割をはたすことになりました。

七月事件は、諸事件の発展における転換点であり、七月デモンストレーションは武力で弾圧され、ボリシェヴィキ党は地下活動にうつり、レーニンはフィンランドに再亡命することをよぎなくされました。反革命的ブルジョアジーが単独の権力を掌握し、そして、小ブルジョア諸党に牛耳られたソヴェトは臨時政府の無力な付属物となりました。二重権力の時期は終わり、革命の平和的発展の道はとざされました。

レーニンは論文『スローガンについて』で、この情勢

の急転回を分析し、武装蜂起の方向が不可避となったことを党に明らかにしました。七月二十六日から八月三日まで（八月八日から十六日まで）ペトログラードで非合法に開催された第六回党大会は、武装蜂起の方針を採用し、「全権力をソヴェトへ」のスローガンを撤回しました。エス・エルとメンシェヴィキに指導されたソヴェトが、さしあたってブルジョアジーの陣営に転落してしまったからです。しかし、このことはソヴェトに権力を移すための闘争一般を放棄したものではありませんでした。

『立憲的幻想について』のなかで、レーニンは、七月事件によって、立憲的幻想が大きな誤りであることがますます明らかになったことをのべ、革命の経過と教訓を総括し、新しい情勢に対応して提起された戦術を説明しています。

『ボナパルティズムの始まり』は、出現したケレンスキー内閣を「ボナパルティズムの第一歩の内閣」としてとらえ、立憲的幻想にたいして痛烈な批判をあたえるとともに、七月事件後のロシアの政治的社会的状態について深い分析をくわえています。

二月革命後、七月事件にさきだつ時期に、四月二十四日から二十九日まで（五月七日から十二日まで）ひらかれたボリシェヴィキ党の四月全国協議会は、レーニンのテーゼを党の一般的方針として採択し、「全権力をソヴェトへ」というスローガンをかかげました。これは、当時の条件のもとでは、社会主義革命への平和的発展のための闘争を意味していました。ボリシェヴィキは、臨時政府の帝国主義的性格とエス・エルおよびメンシェヴィキの裏切りについて大衆的宣伝活動をおこない、ソヴェト内の多数者の獲得をめざし、労働者・農民の同盟をめざして、精力的な活動を展開しはじめ、大きな成功をかちとりました。臨時政府の反革命的な政策は、四月二十—二十一日（五月三—四日）、六月十八日（七月一日）、七月三—四（十六—十七）日のペトログラードのデモンストレーションをひきおこしました。これらはそれぞれ、大衆がエス・エルとメンシェヴィキから離反して、正確な革命の路線を堅持して奮闘する唯一の政党ボリシェヴィキの周囲に結集する過程における、里程標でした。ボナパルティズムの経過やこれらの運動の意義について論文『革命の教訓』は概括しています。

『妥協について』は、主要な階級敵であるブルジョアジー、プロレタリアートの身近の反対者である「支配的」な小ブルジョア民主主義諸党——エス・エルとメンシェヴィキ——と、革命的プロレタリアートの努力の相互関係のなかから、反革命的ブルジョアジーに支持され

たコルニーロフの反乱が瓦解した直後、ブルジョアジーの反革命的性格が明白となり、反動的ブルジョア分子が孤立している情勢のなかでのプロレタリアートとボリシェヴィキ党がとるべき戦術をしめしています。すなわち、プロレタリアートと党は、ブルジョアジーに反対することを目的にして、ソヴェトのなかでのエス・エルとメンシェヴィキと妥協・提携を実現することによって、きわめて短期間存在した革命の平和的発展の条件をとらえ、これを革命的に利用すべきことを主張しています。

レーニンが『さしせまる破局、それとどうたたかうか』を書いたのは、一九一七年九月十日から十四日にかけて、つまり人類史上最初の社会主義革命の直前のことです。

この著作にしめされた諸方策の体系は、(革命的情勢が存在する条件のもとでの)過渡期の経済綱領として普遍的な意義をもっています。

『革命の一根本問題』は、十月革命前にあって、革命的な情勢にふれながら、旧国家機構とプロレタリアートの独裁の問題について——国の行政と国の経済の統制とを労働者と農民に完全に引きわたす問題について、のべています。

以上、本巻に収録された論文の著作の時期は、第一次世界大戦の渦中にあって、ロシア革命の激動期であり、ロシアのツァーリ、地主階級、ブルジョアジー、小ブルジョアジー、プロレタリアートが、ブルジョア革命から社会主義革命にいたる過程で、めまぐるしい闘争にあけくれた時期でした。こうした情勢のなかで、レーニンが、そのときどきに、情勢について歴史的に、全面的に、科学的で、正確な分析をくわえ、これに対応した的確な戦術を明らかにし、ロシアのプロレタリアートとボリシェヴィキの革命的力量に依拠して、その力を強め、革命における指導的役割をはたすために発表した諸論文は、社会主義革命の理論の創造的発展をしめすというだけでなく、マルクス・レーニン主義の情勢分析、戦術の弁証法のみごとな模範であるといえます。

これらの論文を読みながら、私は、どのような具体的情況のもとで、どんな意図をもってこれらの論文が書かれ、当時の革命運動にどういう客観的役割をはたしたかということを深く学ぼうと努めました。たとえば、合法と非合法、革命の移行形態の選択の問題ひとつをとってみても、レーニンは、つねに現在の事件の経過のうちに、未来を予見し、深い理論、経験、政治的感覚をもって活動し、つねに具体的問題、現実の課題から出発して、マルクス主義の古典を謙虚な態度で学習し、熟慮しぬいて、事を処する革命家であったと思います。

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

第7巻

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン十巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権(ディクタトゥーラ)の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の巨大な人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から、久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

＊　＊　＊

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一　編集にあたっては、邦訳『レーニン全集』（第四版）および『レーニン選集』、国民文庫などの訳文を原則として使用し、全集第五版にもとづいて手をくわえた。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。

一　レーニンの原注は*をもって示し、本文の段落末にかかげた。

一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号(一)(二)……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』（全八冊）のものである。また、訳文については、若干手をくわえた。なお簡単な注は〔　〕に入れて本文中に示した。

一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。

一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

目次

自決にかんする討論の総括

ツィンメルヴァルト左派(一)のマルクス主義雑誌『先駆者』第二号(『フォールボーテ』第二号、一九一六年四月)に、わが党の中央機関紙『ソツィアル-デモクラート』(二)編集局と、ポーランド社会民主党反対派の機関紙『ガゼタ・ラボトニチア』(三)編集局とがそれぞれ署名した、民族自決にたいする賛否両方のテーゼがのっている。読者は、本論集のまえのほうに、第一のテーゼ(四)の再録と、第二のテーゼ(五)の翻訳とを見いだすであろう。国際舞台でこの問題がこれほど広範にとりあげられたのは、おそらくこれがはじめてであろう。いまから二〇年前、一八九六年のロンドン国際社会主義者大会をまえにして、一八九五ー一八九六年にドイツのマルクス主義雑誌『ノイエ・ツァイト』誌上で、ローザ・ルクセンブルク、K・カウツキーおよびポーランドの「ニエポドレグロシチョヴツイ」(ポーランド独立の支持者、ポーランド社会党)が、三つの異なる見解を代表しておこなった討論では、ただポーランドのことだけが問題にされた(六)。これまでのところ、われわれの知るかぎり自決の問題をいくぶんでも系統的に討議したのは、オランダ人とポーランド人だけであった。われわれは、いまやイギリス人、アメリカ人、フランス人、ドイツ人、イタリア人のあいだできわめて緊急なものになっているこの問題の討議を、『先駆者』が首尾よく前進させることを、期待しよう。「自国」政府のあからさまな支持者であるプレハーノフや、ダーヴィット一派や、さらに日和見主義のかくれた擁護者であるカウツキー派(アクセリロード、マルトフ、チヘイッゼ、その他をふくむ)によって代表される公認の社会主義は、この問題についてひどいうそをついてきたので、一方では、人々があくまでだまりとおし、言いのがれようと懸命に努力し、他方では、この「いまいましい問題」に「率直な回答」をあたえるように労働者が要求するという状態は、今後非常に長いあいだ避けられないであろう。外国の社会主義者のあいだの見解のたたかいの経過については、われわれは時期を失せずに読者諸君にお知らせするよう努力しよう。

だが、われわれロシアの社会民主主義者にとっては、この問題はなお特別に重要である。この討論は、一九〇三年

と一九一三年の討論(七)の継続である。この問題は、戦争中に、わが党員のあいだに若干の思想上の動揺を引きおこした。マルトフやチヘイッゼのような、グヴォズデフ労働者党もしくは排外主義的労働者党の著名な指導者が、事の核心を回避しようといろいろ奸策をめぐらしたため、問題はいっそう鋭いものとなった。だから、国際舞台で開始された討論の、せめて最初の総括だけでもしておくことが、必要である。

テーゼを見ればわかるように、わがポーランドの同志たちは、たとえばマルクス主義とプルードン主義とにかんするわれわれの論拠のうちの若干のものについては、直接の回答をあたえている。しかし、彼らは、たいていはわれわれに直接に答えないで、彼ら自身の主張を対置することで、間接に答えている。彼らの間接の答と直接の答の両方を考察してみよう。

一　社会主義と民族自決

われわれは、社会主義のもとで民族自決を実現することを拒否するのは、社会主義にたいする裏切りであろう、と主張した。彼らはわれわれに答えて言う。「自決権は社会主義社会には適用できない」と。意見のくいちがいは根本的なものである。では、その根源はどこにあるか？

われわれの論敵はこう反論する。「社会主義があらゆる民族的抑圧を一掃することを、われわれは知っている。なぜなら、社会主義は民族的抑圧をもたらす階級的利害をなくすからである……」と。政治的抑圧の一形態について、すなわち、ある民族の国家の境界内に他の民族を暴力的に引きとめておくことについて論争しているときに、このように、民族的抑圧を一掃するための経済的前提——ずっとまえからよく知られていることで、論争の余地のないもの——について論じるとは、いったいどうしたわけか？　これは、政治問題を回避しようとする試みでしかない！　そして、こうした評価が正しいという確信は、そのさきの議論を聞けば、いっそう強まってくる。すなわち、

「われわれには、社会主義社会で民族が経済的＝政治的単位の性格をもつだろうと予想する根拠はなにもない。十中八、九、それは、文化的ならびに言語上の単位の性格をもつだけであろう。なぜなら、社会主義的文化圏の地域的区分は、そうした区分が存在するかぎり、生産の要求にもとづいてしか起こりえないからである。その場合には、この区分の問題は、もちろん、個々の民族が自巳の権力を完全にたもって（「自決権」が要求するように）単独で解決すべきものではなく、利害関係をもつす

べての市民が共同でこれを決定するであろう。……」

自決ではなくて共同決定だという、この最後の論拠は、すこぶるポーランドの同志たちの気にいっているので、彼らはそのテーゼのなかでこれを三回も繰りかえしている！　しかし、繰りかえしをたびたびやったからといって、このオクチャブリスト〔一〕的な反動的論拠が、社会民主主義的な論拠に変わるわけではない。というのは、すべての反動派とブルジョアは、その国家の境界内に暴力的に引きとめられている諸民族にたいして、自分の運命を共通の議会で「共同で決定する」権利をあたえているからである。ヴィルヘルム二世も、ベルギー人に、共通のドイツ国会でドイツ帝国の運命を「共同で決定する」権利をあたえている。

まさに論争の的になっているもの、それだけが討論にかけられているまさにそのもの、すなわち分離の権利を、われわれの論敵は回避することに懸命になっているのだ。これは、もしこれほど悲しむべきことでなかったなら、笑止の沙汰と言えただろう！

われわれの第一テーゼには、被抑圧民族の解放は、政治の分野では二重の改革を前提する、と述べられている〔二〕。すなわち、（一）諸民族の完全な同権。これについては議論の余地はない。そして、これは一国家の内部の出来事にしか関係しない。（二）政治的分離の自由。これは、国家の境界の決定にかんするものである。これだけが論争の的になっているのである。ところが、まさにこの点について、われわれの論敵は沈黙している。国家の境界についても、いや国家一般についても、彼らは考えようとはしない。これは、資本主義が勝利した、だから政治問題は無用だ、と論じた一八九四―一九〇二年の昔の「経済主義」〔三〕に似た一種の「帝国主義的経済主義」である。帝国主義が勝利した、だから政治問題は無用だ！　この種の非政治的理論は、マルクス主義に根本的に敵対するものである。

マルクスは『ゴータ綱領批判』のなかでこう書いている。「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的執権（ディクタトゥーラ）以外のなにものでもありえない〔二二〕。」今日まで、この真理は、社会主義者にとって議論の余地のないものであった。そして、この真理のうちには、勝利した社会主義が完全な共産主義へ成長転化するまでは国家を承認することがふくまれているのである。国家の死滅にかんするエンゲルスの格言は、よく知られている。われわれは、同じ第一テーゼのなかでわざわざつぎのように強調しておいた。民主主義は国家が死滅するときにやはり死滅する国家形態である、と。そして、われわれの論敵が、マルクス

主義をなにか新しい「無国家的」見地とおきかえないかぎり、彼らの議論は徹頭徹尾誤りである。
国家について（したがってまた国家の境界の決定について！）語るかわりに、彼らは、「社会主義的文化圏」について語っている。すなわち、すべての国家問題が抹消されているという点で不明確な表現を、ことさらに選んでいるのである！　その結果は、もちろん、国家がなければ国家の境界問題もない、というこっけいな同語反復となっている。だが、そのときには民主主義的政治綱領全体が不必要である。国家が「死滅する」ときには、共和制もまたなくなるであろう。
ドイツの排外主義者レンシュは、われわれが第五テーゼ（注三）にあげておいた論文のなかで、エンゲルスの著作『ポーとライン』から一つの興味ある引用文をあげている。幾多の小さな、生命力のない民族を併呑した歴史的発展の行程のあいだに、「大きな、生命力のあるヨーロッパの大民族」の国境は、ますます住民の「言語と共感」とによって規定されるようになった（注三）、と。この国境を、エンゲルスは「自然的国境」と名づけている。だいたい一八四八年から一八七一年にいたる、ヨーロッパにおける進歩的資本主義の時代には、事態はそういうふうであった。今日、反動的な帝国主義的資本主義は、ますます頻繁に、この民主的に規定された国境を打ち破っている。すべての徴候は、帝国主義が、おのれにとってかわる社会主義にたいして、あまり民主的でない境界、ヨーロッパと世界の他の部分とにおける幾多の領土併合を、遺産として残すであろうことを物語っている。だが、そうだとすれば、どうなるのか？　勝利した社会主義が、全線にわたって完全な民主主義を復活させ、それを徹底させるとともに、国家の境界を民主的に決定することを拒否するだろうとでもいうのか？　住民の「共感」を考慮にいれたがらないだろうとでもいうのか？　わがポーランドの僚友たちがマルクス主義から「帝国主義的経済主義」へ転落していることをはっきりと知るためには、これらの質問を提出すれば十分である。
昔の「経済主義者」は、マルクス主義を戯画化して、マルクス主義にとってたいせつなのは「経済的なもの」「だけ」である、と労働者に教えた。新しい「経済主義者」は、勝利した社会主義下の民主主義国家は国境なしに存在するだろう（物質なしの「感覚の複合」のたぐいだ）とか、国境は生産の要求によって「のみ」決定されるだろうとかと考えている。実際には、これらの国境は、民主的に、すなわち住民の意思と「共感」とにもとづいて決定されるであろう。資本主義は、これらの共感に強圧をくわえ、そうす

ることで諸民族の接近の仕事に新しい困難をつけくわえている。社会主義は、階級的抑圧なしに生産を組織し、国家の全成員に幸福を保障し、そうすることで住民の「共感」に十分な活動の場をあたえ、まさにその結果として、諸民族の接近と融合を容易にし、それを大いに促進する。

読者がこの重くるしく不器用な「経済主義」からいくらか息ぬきをすることができるように、われわれの論争のそとにあるひとりの社会主義的著作家の所論を引こう。この著作家とは、オットー・バウアー(三)である。彼もまた、「文化的民族的自治」という「おはこ」をもっているが、しかし、幾多のきわめて重要な問題について非常に正しく論じている。たとえば、その著書『民族問題と社会民主党』の第二九章では、彼は、民族的イデオロギーによって帝国主義的政策がおおいかくされていることを、きわめて正確に指摘している。第三〇章「社会主義と民族原理」では、彼はこう言っている。

「社会主義的共同体は、幾多の民族をそっくり強制的にその構成にくわえることは、けっしてできないであろう。民族文化のあらゆる富を所有し、立法と行政に完全にまた積極的に参加し、そのうえ武器をあたえられている人民大衆を考えてみたまえ。——こういう民族を、彼らに無縁な社会的組織体の支配に強制的に服従させることが、はたしてできるだろうか？　あらゆる国家権力は武器の力のうえに立っている。現代の国民軍隊は、巧妙な仕組みのおかげで、ちょうど過去の騎士軍隊や傭兵軍隊と同じように、いまなお特定の人物、家族、階級の手ににぎられた道具となっている。だが、社会主義社会の民主的共同体の軍隊は、武装した人民にほかならない。なぜなら、それは、強制されずに公共の作業場で働き、国家生活のあらゆる分野に完全に参加する、高度に文化的な人々からなっているからである。こうした条件のもとでは、異民族支配の可能性はまったく消失する。」

これは、まったく正しい。資本主義のもとでは民族的抑圧（一般に政治的抑圧）をなくすことはできない。このためには、階級をなくすこと、すなわち社会主義を実現することが必要である。しかし、社会主義は、経済にその基礎をおきながらも、けっして、そっくり経済に帰着させられるものではない。民族的抑圧を排除するためには、土台——社会主義的生産——が必要であるが、しかし、この土台のうえで、さらに民主主義的な国家組織、民主主義的軍隊、その他が必要である。資本主義を社会主義につくりかえることによって、プロレタリアートは、民族的抑圧を完全に排除する可能性をつくりだす。この可能性は、住民の「共感」に応じた国家境界の決定までもふくめて、分離の

完全な自由までもふくめて、あらゆる分野で民主主義を完全に実行する場合に「のみ」——「のみ」だ！——、現実性に転化するであろう。ついで、この基盤のうえで、ごくわずかの民族的摩擦をも、ごくわずかの民族的不信をも絶対的に排除する過程が実際に発展し、諸民族の速やかな接近と融合が生まれるであろう、そして、この後者は国家の死滅によって完成されるであろう。これこそ、マルクス主義の理論である。わがポーランドの僚友たちは、この理論から誤って逸脱したのだ。

二　帝国主義のもとで民主主義は「実現可能」か？

民族自決に反対するポーランドの社会民主主義者の以前の論戦全体は、資本主義のもとでは自決は「実現不可能」だという論拠のうえに立てられていた。すでに一九〇三年に、ロシア社会民主労働党第二回大会の綱領小委員会でわれわれイスクラ派は、この論拠を嘲笑して、これは（いまに悪名をとどめる）「経済主義者」がやったマルクス主義の戯画化を繰りかえすものだ、と言った。われわれは、自分たちのテーゼで、この誤りをとくに詳しく論じておいた。ところが、論争全体の理論的基礎をなす、まさにこの点について、ポーランドの同志たちは、われわれの論拠のどれ一つにも答えようと思わなかったのである（それとも、答えることができなかったのか？）。

自決が経済的に不可能だというなら、機械の禁止や労働貨幣の実施などが実現不可能だということをわれわれが証明するさいにやるように、経済的分析によってそれを証明すべきであった。だれひとり、そういう分析をやろうと試みてさえいない。極度に野ばなしにされた帝国主義の時代に、一つの小国が例外的に戦争にも革命にもよらないで実現不可能な自決を実現できたように（一九〇五年のノルウェー）、ただ一つの国にもせよ、「例外的に」資本主義のもとで「労働貨幣」を実施することができると、主張しようとするものは、だれもいないであろう。

一般に政治的民主主義は、資本主義のうえに立つ上部構造の可能な諸形態の一つ（理論上は、「純粋」資本主義にとって正常な形態なのだが）にすぎない。事実が示しているように、資本主義も帝国主義も、あらゆる政治形態のもとで発展し、それらすべての形態を自分にしたがわせる。だから、民主主義の諸形態の一つ、またその諸要求の一つを「実現不可能」だと語ることは、理論上、根本的にまちがっている。

これらの論拠にたいするポーランドの僚友たちの回答が

ないので、この点にかんする討論は終結したものと認めざるをえない。われわれは、いわば問題を一目瞭然にするために、現在の戦争の戦略的要因やその他の諸要因しだいでは、今日ポーランドの再興も「実現可能」であることを否定するのは、「こっけい」であろうという、最も具体的な主張を提出した。だが、これにには回答がなかった！

ポーランドの同志たちは、次のように述べて、明らかにまちがった主張を繰りかえしただけである（第二部第一章）。「他国の地域を編入する問題では、政治的民主主義の諸形態は排除されている。公然たる強力がそれを決定する。……資本は、自国の国境問題の解決を、けっして人民にまかせないであろう。……」と。これではまるで、「資本」が自己の官吏、帝国主義に奉仕する官吏を選挙するのを「人民にまかせる」ことができるかのように聞こえる！あるいは、たとえば君主制を共和制に代え、常備軍を民兵に代えるというような、重要な民主主義的問題のどんなに大がかりな解決でも、一般に「公然の強力」なしに可能であるかのように聞こえる！　主観的には、ポーランドの同志たちはマルクス主義を「深め」たいと思っているのだが、そのやり方はまったくまずい。客観的には、実現不可能だという彼らの文句は日和見主義である。なぜなら、一連の革命なしにはこれは「実現不可能」であること、それは、帝国主義のもとでは民主主義全体、一般に民主主義のあらゆる要求もまた実現不可能であるのと同様だということが、暗黙のうちに前提されているのだからである。

ポーランドの僚友たちは、第二部第一章の末尾で、アルザスのことを論じるさいに、ただ一度だけ「帝国主義的経済主義」の立場を放棄し、「経済的なもの」を一般的に引合いにだすのでなく、具体的な回答をひっさげて、民主主義の一形態の問題をとりあげている。ところが、まさにこの取りあげ方がまちがっていた！　彼らはこう書いている。アルザスの一部がドイツ人に心を引かれていて、アルザスをフランスに編入すれば戦争を引きおこすおそれがあるのに、アルザス人が、フランス人の意向をたずねもしないで、自分たちだけでアルザスの編入をフランス人に「押しつける」とすれば、それは「地方主義的、非民主的」であろう!!!　と。混乱ぶりは、まったくおかしいほどである。すなわち、自決ということは、抑圧国家からの分離の自由を前提する（これは自明のことであり、われわれはこのことを自分のテーゼのなかでとくに強調しておいた）。経済で、資本家が利潤を取得することに「同意する」とか、労働者が賃金を受け取ることに「同意する」とかと、語ることができないのと同じように、政治で、ある国家への編入にその国家の同意が前提となるなどと語るのは「常のならわしでは

ない」！ そんなことを言うのはこっけいである。

もしマルクス主義的政治家であろうとするなら、アルザスについて語る場合には、ドイツ社会主義のろくでなしがアルザスの分離の自由のために闘争していない点を、フランス社会主義のろくでなしが、アルザス全体の暴力的編入を望んでいるフランス・ブルジョアジーとなれあっている点を、またこれら両者が、たとえ小さくとも独立の国家を恐れて、「自」国の帝国主義に奉仕している点を、攻撃しなければならない。そして、自決を承認する社会主義者が、どのようにして、アルザス人の意思を踏みにじらずに、数週間のうちにこの問題を解決するかを示さなければならない。そうせずに、フランス系アルザス人が自分をフランスに「押しつける」という恐ろしい危険について語るのは、まったくの珠玉の論である。

三　併合とはなにか？

われわれはわれわれのテーゼのなかでこの問題をきわめて明確に提起した（第七章）[一三]。ポーランドの同志たちはこれには答えなかった。彼らは、この問題を回避しながら、自分たちは（一）併合に反対である、と力をこめて言明し、また（二）それに反対する理由を説明した。これらが非常に重要な問題であることは、いうまでもない。しかし、これらは別個の問題である。われわれが自分の原則を理論的によく考え、それを明瞭に、明確に定式化するよういくぶんでも心がけるなら、併合の概念がわれわれの政治的宣伝扇動に姿をあらわす以上、併合とはなにかという問題をわれわれは回避することはできない。仲間どうしの討論でこの問題を回避することは、立場の放棄と解するほかはない。

なぜわれわれはこの問題を提起したのか？ この問題を提起するにあたって、われわれはその理由を説明した。それは、「併合にたいする抗議は自決権の承認にほかならない」からである。併合の概念のうちには、通常次の概念がはいっている。（一）暴力の概念（暴力的編入）。（二）他民族による抑圧の概念（「他国の」地域の編入、等々）。そして――ときには――（三）status quo〔現状〕侵害の概念。このことをわれわれはテーゼのなかで指摘した。そして、われわれのこの指摘は批判をうけなかった。

そこで疑問が起こる。社会民主主義者は一般に暴力に反対できるかどうか？ 明らかに、反対できない。すなわち、われわれが併合に反対するのは、それが暴力であるためではなく、別の理由からである。同じように、社会民主主義者でありながら、status quo に賛成することもできない。どう言いのがれをしても、併合は民族自決の侵害であり、

住民の意思に反する国家境界の決定である、という結論をまぬがれるわけにはいかない。

併合に反対するとは、自決権を支持することを意味する。「どんな民族をでも、ある国家の境界内に暴力的に引きとめておくことに反対する」ということ（われわれは、同じ思想をほんのすこし形を変えて言いあらわしたこういう定式をも、わざとわれわれのテーゼの第四章で用いておいた。(二〇)）そして、ポーランドの同志たちは、この点では、われわれに完全に明白な答をあたえ、彼らのテーゼの第一部第四章のはじめで、自分たちは「被抑圧民族を併合国家の境界内に暴力的に引きとめておくことに反対する」と言明している）——これは民族自決を支持するのとまさに同じことである。

われわれは、ことばについてとやかく争いたくない。もし、ある党がその綱領のなかで（もしくは全党員を拘束する決議のなかで——形式は問題でない）、自分たちは併合に反対し、＊被抑圧民族を自分たちの国家の境界内に暴力的に引きとめておくことに反対する、と言うなら、われわれは、そういう党との完全な原則上の一致を声明しよう。「自決」ということばにこだわるのはばかげている。もし、わが党内に、ことば、すなわちわが党綱領の第九項の定式を、こういう趣旨で変更しようと望む人がいるなら、われわれは、そういう同志たちとの意見の相違はけっして原則的なものではないと見なすであろう！

＊　カ・ラデックは、このことを『ベルナー・タークヴァハト』(二一)紙上の彼の論文のひとつで、「新旧の併合反対」と定式化している。

だいじなことはただ、われわれのスローガンが政治的に明瞭で、理論的に考えぬかれていることである。

この問題が今日戦争に関連してとくに重要だということは、だれも否定する者はいないが、この問題についての口頭の討論で、われわれは次のような論拠に出あった（出版物ではこれは見られなかった）。すなわち、ある悪にたいして抗議したからといって、その悪を排除する積極的な概念を承認したことにはかならずしもならない、というのである。この論拠は、明らかになりたちえない。この論拠が出版物の紙上にはどこにも再録されていないのは、明らかにこのためである。もし社会主義政党が、「被抑圧民族を併合国家の境界内に暴力的に引きとめておくことに反対だ」と言明するなら、そのことによって、この党は、権力についたときに暴力的な引きとめを放棄する義務を負うのである。

われわれは、次のことをかたときも疑わない。もしあすヒンデンブルクがロシアをなかば征服し、そして、このなかばの勝利の現われとして（ツァーリズムをすこしばかり

弱めたいという、イギリスとフランスの願望と結びついて）、新しいポーランド国家——それは、資本主義と帝国主義の経済法則の見地からみて完全に「実現可能」である——が出現し、ついで、あさってペテルブルグ、ベルリン、ワルシャワで社会主義革命が勝利するなら、ポーランドの社会主義政府は、ロシアやドイツの社会主義政府と同じように、たとえばウクライナ人を「ポーランド国家の境界内に暴力的に引きとめておく」ことを放棄するであろう。もしこの政府内に『ガゼタ・ラボトニチァ』の編集局員がいたなら、彼らは、疑いもなくその「テーゼ」を犠牲にし、そうすることで「社会主義社会には自決権は適用できない」という「理論」をくつがえすだろう。もしわれわれがこう考えなかったなら、われわれは、ポーランドの社会民主主義者との同志的な討論でなしに、排外主義者としての彼らとの仮借ない闘争を、日程にのぼせていたであろう。

かりに私がヨーロッパのある都市の街頭に出て、私が人間を買って奴隷にすることを許されないことにたいして、公然と「抗議」を声明し、ついで、新聞紙上でそれを繰りかえすとしよう。人々が私を奴隷所有者と、奴隷制の原理というか制度というか、ともかくそうしたものの支持者と見なす権利があることは、疑いをいれないであろう。奴隷制にたいする私の共感が、積極的な形式（「私は奴隷制を支持する」）でなしに消極的な抗議の形式につつまれていても、だれもそれでだまされはしまい。政治的「抗議」が政治綱領と完全に効力を同じくすることはきわめて明瞭なので、いまさらそれを説明さえしなければならないということは、いくらか気まりがわるいくらいである。いずれにせよ、第三インタナショナルには、政治的抗議を政治綱領から区別し、両者をたがいに対立させたりすることのできる人間のはいる余地はないであろうと言っても、すくなくとも、ツィンメルヴァルト左派——ツィンメルヴァルト派全体とは言わない。そこにはマルトフその他のカウツキー派がいるから——から「抗議」をうけることはないであろうと、われわれは確信している。

われわれは、ことばについて争いたくないので、あえて次のような強い希望を表明しておく。すなわち、ポーランドの社会民主主義者は、わが党の綱領（そして彼らの綱領でもある）から第九項を削除し、またインタナショナルの綱領（一八九六年のロンドン大会の決議）からも同じような削除をおこなうという彼らの提案をも、また、それに見合った、「新旧の併合」や、「併合国家の境界内に被抑圧民族を暴力的に引きとめておくこと」についての政治思想にかんする彼ら自身の定義をも、速やかに公けに定式化することに努力するように、と。——次の問題に移ろう。

四　併合に賛成か、反対か？

ポーランドの同志たちはそのテーゼの第一部第三章のなかで、あらゆる併合に反対すると、きわめて明確に言明している。残念なことには、同じ第一部の第四章で、併合主義的と認めざるをえないような主張に出あうのである。この節は、次のような……おだやかに言うには、どう言えばいいだろう？……奇怪な文句で始まっている。

「併合に反対し、また併合国家の境界内に被抑圧民族を暴力的に引きとめておくことに反対する社会民主党の闘争の出発点は、いかなる祖国擁護をも拒否すること（傍点は原筆者のもの）である。帝国主義時代には、祖国擁護とは、他民族を抑圧し略奪する自国ブルジョアジーの権利を擁護することである。……」

これはなにか？　どうしてそうなのか？

「併合に反対する闘争の出発点は、いかなる祖国擁護をも拒否することである。……」けれども、あらゆる民族戦争やあらゆる民族的蜂起は、「祖国擁護」とよぶことができるし、またこれまではそうよぶことが一般のならわしだったではないか！　われわれは併合に反対である。しかし、……われわれはこのことを、併合民族からの解放をめざす被併合民族の戦争に反対し、併合民族からの解放を目的とする被併合民族の蜂起に反対する、という意味に解する、というのだ！　これがはたして併合主義的な主張ではないだろうか？

テーゼの起草者たちは、彼らの……奇怪な主張を、「帝国主義時代には」祖国擁護とは他民族を抑圧する自国ブルジョアジーの権利を擁護することである、ということで理由づけている。しかし、このことは、帝国主義戦争についてだけ、すなわち、帝国主義的大国もしくは大国グループのあいだの戦争――この場合には、交戦国の双方が「他民族」を抑圧しているばかりでなく、どちらがより多く他民族を抑圧するかをめぐって戦うのだ――についてだけ、正しいのである！

どうやら、この起草者たちは、「祖国擁護」の問題を、わが党とはまったく違った仕方で提起しているようである。われわれは、帝国主義戦争における「祖国擁護」を拒否する。このことは、ドイツ語とフランス語との双方で出版された小冊子『社会主義と戦争』に再録されているわが党中央委員会の宣言およびベルリン決議[一〇]に、きわめて明瞭に述べられている。われわれはこのことを、われわれのテーゼでも、二回にわたって強調しておいた（第四章注および第六章注[一一]）。どうやら、ポーランドのテーゼの起草者たちは、

一般的に、すなわち民族戦争の場合でも、祖国擁護を拒否しているようである。おそらく、「帝国主義時代には」民族戦争は不可能だと考えているのであろう。「おそらく」と言うのは、ポーランドの同志たちは、そのテーゼのなかではそういう見解を述べていないからである。

そういう見解は、ドイツの「インテルナツィオナーレ」グループ(三〇)のテーゼや、本書中の独立の論文で論じたユニウスの小冊子(三一)のうちに、明白に表現されている。右の論文のなかで言っておいたことの補足として、次のことを述べておこう。併合国にたいする被併合地域または被併合国の民族的蜂起は、戦争とよばずに、まさに蜂起とよぶこともできるであろう(われわれはこういう反論を耳にした)。そこで、これをあげておくのだが、こういう用語上の論争を、われわれはまじめなものとは考えない)。それにしても、併合されたベルギー、セルビア、ガリチア、アルメニアは、併合国にたいする自国の「蜂起」を「祖国擁護」とよぶであろうし、そしてそうよぶのが正しいことを、あえて否定しようとする者はいないであろう。そこでわかることは、ポーランドの同志たちは、これらの被併合国にもやはりブルジョアジーがおり、このブルジョアジーもまた他民族を抑圧している、もっと正確に言えば抑圧する可能性をもっている——というのは、「その抑圧する権利」だけが問題にされているのだから——ということを根拠として、こういう蜂起に反対しているのだ、ということである。したがって、ある戦争またはある蜂起を評価するのに、それの現実の社会的内容(抑圧民族にたいする被抑圧民族の自己解放のための闘争)をとりあげないで、いまは抑圧されているブルジョアジーがその「抑圧する権利」を実現する可能性があることを、とりあげるのである。たとえば、ベルギーが、一九一七年にドイツに併合され、そして一九一八年に自己の解放のために蜂起するとすれば、ポーランドの同志たちは、ベルギーのブルジョアジーが「他民族を抑圧する権利」をもっているということを根拠として、蜂起に反対するだろう!

この所論のうちには、マルクス主義的なもの、一般に革命的なものは、ひとかけらもない。社会主義を裏切るまいとすれば、われわれは、われわれの主要な敵である大国のブルジョアジーにたいするあらゆる蜂起を、それが反動階級の蜂起でないかぎり、支持しなければならない。被併合地域の蜂起を支持することを拒否するなら、われわれは——客観的に——併合主義者となる。社会革命が開始する時代である「帝国主義時代」にこそ、プロレタリアートは、きょう被併合地域の蜂起をとくに精力的に支持するであろうが、それは、そういう蜂起によって弱められる「大」国

のブルジョアジーを、すぐあすに、あるいはきょう同時に、攻撃するためである。

しかし、ポーランドの同志たちは、その併合主義の点でもっとさきにすすむ。彼らは、被併合地域の蜂起に反対するばかりでなく、平和的な仕方によってであろうと、これらの地域の独立を回復することにいっさい反対する！　聞きたまえ。

「帝国主義の抑圧政策の結果にたいして責任を負うことをいっさい拒否し、そういう結果にたいして最も激しく闘争しながらも、社会民主党は、ヨーロッパに新しい国境標を設定すること、帝国主義によって撤去された国境標を復活することには、断じて賛成しない。」（傍点は原筆者のもの）

いま、ドイツとベルギーのあいだ、ロシアとガリチアのあいだでは、「国境標が帝国主義によって撤去されている」。ところが、国際社会民主主義は、どんな仕方でなされようと、およそ国境標の復活に反対しなければならない、というのだ。一九〇五年に、「帝国主義時代に」、ノルウェーの自治議会がスウェーデンからの分離を宣言し、そしてスウェーデンの反動派が説いたスウェーデンの対ノルウェー戦争がスウェーデンの労働者の抵抗と帝国主義の国際情勢のために不成功に終わったとき、社会民主党は、ノルウェーの分離に反対しなければならなかったというわけだ。なぜなら、これは疑いもなく、「ヨーロッパにおける新しい国境標の設定」を意味していたから!!

これは、もはやあからさまな、公然の併合主義である。これを論駁する必要はない。それは自分で自分を論駁している。すなわち、「われわれは併合一般に反対するが、しかしヨーロッパについては、併合がいったんおこなわれたからには、われわれはこの併合を承認し、もしくはそれを大目にみる……」という立場を、どんな社会主義政党も、あえて受けいれようとはしないであろう。

われわれはただ、わがポーランドの同志たちを、これほど自明な……「ありうべからざる立場」におとしいれた誤りの理論的源泉にだけ立ちいって論じなければならない。「ヨーロッパ」を特別あつかいにするなんの根拠もないことについては、あとで述べよう。テーゼのなかの次の二つの文句は、誤りの別の源泉を明らかにしている。

「……帝国主義のわだちが、既成の資本主義国家を押しつぶして進んだところでは、帝国主義的抑圧の残忍な形態のもとに、社会主義を準備する資本主義世界の政治的および経済的集積がおこなわれている。……」

併合をこんなふうに正当化するのは、ストルーヴェ主義（三）であってマルクス主義ではない。ロシアにおける一八九〇

年代を記憶しているロシアの社会民主主義者は、ストルーヴェ、クーノー、レギーン一派の諸君に共通するこのマルクス主義歪曲のやり口をよく知っている。ほかならぬドイツのストルーヴェ主義者、いわゆる「社会帝国主義者」については、ポーランドの同志たちの他のテーゼ（第二部第三章）にこう書いてある。

……（自決のスローガンは）「社会帝国主義者が、このスローガンの幻想的性格を証明することによって、民族的抑圧に反対するわれわれの闘争を歴史的法則に反した感傷主義のように見せかけ、それによって、社会民主党綱領の科学的根拠にたいするプロレタリアートの信頼をくつがえすことを可能にする。……」

これは、起草者たちがドイツのストルーヴェ主義者の立場を「科学的なもの」と考えていることを意味する！　いやはや、おめでたいことだ。

レンシュやクーノーやパルヴスのような連中のほうが正しく、われわれのほうがまちがっていると言ってわれわれをおどしつける、この驚くべき論証は、ただ一つの「瑣事」によって打ち砕かれる。すなわち、これらのレンシュどもは彼らなりに首尾一貫した人間であって、レンシュは、ドイツの排外主義派の『グロッケ』(三)紙の第八—九号で——われわれは自分のテーゼのなかで、まさにこれらの号をわざわざ引用しておいた——、自決のスローガンの「科学的根拠の欠如」を証明する（ポーランドの社会民主主義者は、前掲の彼らのテーゼのなかの議論からみてわかるように、明らかに、レンシュのこの論証を論破できないものと認めたのだ……）と同時に、併合反対というスローガンの「科学的根拠の欠如」をも証明しているのだ!!

というのは、ポーランドの僚友たちにたいしてわれわれが指摘した——ポーランドの僚友たちは、われわれの指摘に答えたがらないが——あの簡単な真理、すなわち、自決の「承認」と、併合にたいする「抗議」とのあいだには、「経済的にも政治的にも」、また一般に論理的にも、なんの差異もないという真理を、レンシュはりっぱに理解したからである。もし自決に反対するレンシュの論拠をポーランドの同志たちが論破できないと考えているのなら、レンシュ派のこれらすべての論拠は併合との闘争にも反対するものだという事実を、彼らは認めないわけにはいかない。

わがポーランドの僚友たちのすべての所論の基礎にある理論上の誤りは、彼らをついに首尾一貫しない併合主義者にならせたのである。

五　社会民主党はなぜ併合に反対するか？

われわれの見地からすれば、答ははっきりしている。併合は、民族の自決を侵害するからである。言いかえれば、それは民族的抑圧の一形態だからである。

ポーランドの社会民主主義者の見地からすれば、併合に反対する理由を、特別に説明しなければならなくなる。そして、この説明（テーゼ、第一部第三章）は、起草者たちを不可避的に新しい一連の矛盾にまきこんでいる。

なぜ（レンシュの「科学的根拠のある」論証にさからって）併合に反対するのか、それを「正当化」するために、彼らは次の二つの論拠をあげている。その第一は次のとおりである。

「……ヨーロッパにおける併合は、勝利した帝国主義国家の軍事的保障のために必要である、という主張にたいして、社会民主党は、併合は敵対を激しくし、それによって戦争の危険を増大させるだけであるという事実を対置する。……」

これは、レンシュ一派にたいする答としては不十分である。なぜなら、彼らの主要な論拠は、軍事的必要ではなくて、帝国主義のもとでの集積を意味する併合の経済的進歩性だからである。ポーランドの社会民主主義者が、こういう集積の進歩性を認め、ヨーロッパにおいて帝国主義によって撤去された国境標の復活を拒否しながら、それと同時に併合に反対するとすれば、いったいどこに論理があるのか？

つぎに、併合は、どういう戦争の危険を強めるのか？帝国主義戦争の危険ではない。というのは、帝国主義戦争を生みだすのは、他の諸原因だからである。現在の帝国主義戦争における主要な敵対がイギリスとドイツ、ロシアとドイツの敵対であることは、争う余地がない。そこには、併合はなかったし、またいまもない。ここで問題になっているのは、民族戦争および民族的蜂起の危険の強化である。ところで、一方では、「帝国主義時代には」民族戦争はありえないと宣言しながら、他方では、民族戦争の「危険」をもちだすことが、どうしてできるのか？　これは論理的ではない。

第二の論拠。

併合は「支配民族のプロレタリアートと被抑圧民族のプロレタリアートとのあいだにみぞをつくりだす。」……「被抑圧民族のプロレタリアートは、自国のブルジョアジーと結んで、支配民族のプロレタリアートを敵視するであろう。国際ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの国際的階級闘争ではなくて、プロレタリアートの分裂、彼らの思想的堕落が起こるであろう。……」

われわれは、これらの論拠には完全に同意する。しかし、

同一の問題についてたがいに排斥しあう論拠を同時に提出することは、論理的であろうか？　テーゼの第一部第三章には、併合をプロレタリアートの分裂の原因とみる前記の論拠が述べられているが、それとならんで第四章では、ヨーロッパでは、すでにおこなわれた併合を廃止することに反対しなければならず、「被抑圧民族と抑圧民族との労働者大衆を連帯的闘争の精神で教育すること」に賛成しなければならない、と述べられている。もし併合の廃止が反動的な「感傷主義」であるなら、そのときには、併合が「プロレタリアート」のあいだに「みぞ」を掘り、プロレタリアートの「分裂」を引きおこす、というふうに論じることはできない。そのときには、反対に、併合を、いろいろな民族のプロレタリアートの接近の条件とみなければならない。

われわれはこう言う。われわれが社会主義革命を遂行し、ブルジョアジーを打倒しうるためには、労働者はいっそう緊密に団結しなければならない。そして、自決のための闘争、すなわち併合反対の闘争は、この緊密な団結に役だつ、と。われわれは、どこまでも首尾一貫している。他方、ポーランドの同志たちが、ヨーロッパにおける併合の「廃止は不可能である」と認め、民族戦争は「ありえない」と認めながら、ほかならぬ民族戦争からとってきた論拠を用いて併合に「反対」して論争するとき、彼らは自分で自分をやっつけているのである！　それらは、まさに併合はいろいろな民族の労働者の接近と融合を困難にする、という趣旨の論拠なのだ！

言いかえれば、ポーランドの社会民主主義者は、併合に異議をとなえるために、彼ら自身が原則的に拒否している理論的ストックのうちから論拠を取りだしてこなければならないのである。

このことは、植民地問題にくると、ますます明瞭になる。

六　この問題で植民地を「ヨーロッパ」に対置できるか？

われわれのテーゼには、植民地の即時解放の要求もまた、資本主義のもとでは、民族自決、人民による官吏の選挙、民主的共和制その他と同じように「実現不可能」であること（すなわち、一連の革命なしには実現できず、社会主義なしには長つづきしないこと）が述べられており、また他方では、植民地解放の要求は「民族自決の承認」にほかならないことが述べられている。

ポーランドの同志たちは、これらの論証のどれにも答えなかった。彼らは、「ヨーロッパ」と植民地とのあいだに

区別を設けようと試みた。彼らは、ヨーロッパについてだけ、首尾一貫しない併合主義者となり、併合がいったんおこなわれた以上、それを廃止することを拒んでいる。ところが、植民地については、「植民地から手を引け！」という無条件の要求を宣言している。

ロシアの社会主義者は、「トゥルケスタン、ヒヴァ、ブハラその他から手を引け」と要求しなければならないが、しかし、ポーランド、フィンランド、ウクライナ、その他について同じような分離の自由を要求するなら、「ユートピア主義」、「非科学的な」「感傷主義」などにおちいる、というのである。また、イギリスの社会主義者は、「アフリカ、インド、オーストラリアから手を引け」と要求しなければならないが、アイルランドについてはそうしてはならない、というのである。まちがっていることが一目で明瞭な、こういう区別立ては、どういう理論的根拠によって説明できるのであろうか？　この問題を回避するわけにはいかない。

自決の反対者の主要な「拠りどころ」は、「実現不可能性」である。「経済的および政治的集積」をもちだしていることにも、これと同じ思想がすこしばかり色合いを変えて現われている。

明らかに、集積は植民地の併合によってもおこなわれる。植民地とヨーロッパの諸民族――すくなくとも後者の大多数――との経済的差異は、以前には、植民地が商品交換に引きこまれながら、まだ資本主義的生産に引きこまれていないところにあった。帝国主義はこれを変化させた。帝国主義は、とりわけ資本の輸出である。資本主義的生産はますます急速に植民地に移植されている。ヨーロッパの金融資本にたいする依存から植民地を切りはなすことはできない。軍事的見地からしても、また膨張（拡張）の見地からしても、植民地の分離は、通例社会主義とともにはじめて実現できるものであって、資本主義のもとでそれを実現できるのは、例外としてか、あるいは植民地ならびに本国における一連の革命と蜂起とを代償としてか、そのどちらかである。

ヨーロッパでは、従属民族は、植民地よりも、おおむね資本主義的にいっそう発展している（もっとも、すべての従属民族がそうなのではない。たとえばアルバニア人やロシアの多くの異民族はそうではない）。しかし、ほかならぬこのことが、民族的抑圧と併合とにたいするいっそう大きな抵抗を呼びおこしている！　まさにこのために、ヨーロッパでは、分離の場合をもふくめてあらゆる政治的条件のもとで、資本主義の発展は、植民地にくらべていっそう保障されている。ポーランドの同志たちは植民地について

こう言っている（第一部第四章）。……「そこでは、資本主義は、なお生産力を自主的に発展させる任務に当面している……」と。ヨーロッパでは、これはもっと目だっている。ポーランド、フィンランド、ウクライナ、アルザスでは、資本主義は、疑いもなく、インド、トゥルケスタン、エジプト、その他の最も純粋な型の植民地におけるよりも、より強力に、より急速に、より自主的に、生産力を発展させている。商品生産社会では、自主的発展も、一般にどういう発展も、資本なしには不可能である。ヨーロッパでは、従属民族には、自分の資本もあれば、多種多様な条件でそれを容易に獲得する可能性もある。植民地には、自分の資本はないか、もしくはほとんどない。金融資本の状況のもとでは、植民地は、政治的従属の諸条件による以外には、資本を獲得する道がない。すべてこういうことを思えば、植民地を即時、無条件に解放せよという要求は、いったいなにを意味するだろうか？「ユートピア」ということばを、ストルーヴェ、レンシュ、クーノーの諸君や、彼らにつづいて、遺憾ながらポーランドの同志たちまでが用いているような俗流的、戯画的「マルクス主義」の意味で用いるなら、この要求のほうがはるかに「ユートピア的」なことは、明らかではないか？　ここにいう「ユートピア主義」とは、もともと俗物の常軌からはずれているということであって、革命的なものはみなこれにはいる。だが、民族運動をふくめたあらゆる種類の革命運動は、ヨーロッパの状況のもとでは、植民地におけるよりも、もっと可能性があり、もっと実現性がありもっとねばりづよく、もっと意識的で、もっと打ちかちがたいものである。

ポーランドの同志たちはこう言う（第一部第三章）。社会主義は「植民地の後進民族を支配せずに、私心ない文化的援助を彼らにあたえることができるであろう」と。まったくそのとおりである。しかし、大民族、大国家が社会主義へ移行するさいに、「私心ない文化的援助」によってヨーロッパの弱小の被抑圧民族を引きつけることができない、と考える根拠はどこにあるのか？　ポーランドの社会民主主義者が植民地に「あたえている」分離の自由こそ、小さくはあるが、文化的で、政治的に高い志望をもつヨーロッパの被抑圧民族を、社会主義的な大国家との同盟へ引きよせるであろう。なぜなら、社会主義のもとでの大国家とは、一日の労働時間がこれこれの時間だけ短く、一日の賃金がこれこれの額だけ多いことを、意味するだろうからである。長いあいだ抑圧されてきた民族の、高度に発達した民主主義的自尊心を、きのうの抑圧者が侮辱さえしなければ、また国家建設をもふくめて、すなわち「自分たちの」国家を建設する試みをもふくめて、あらゆる点でこの民族に平

等をあたえさえすれば、ブルジョアジーのくびきから自己を解放する勤労大衆は、この「文化的援助」を得ようとして、先進的な社会主義的大民族との同盟、融合を、全力をつくして求めるであろう。資本主義のもとでは、この「試み」は戦争を意味し、特権的な小民族（オランダ、スイス）の孤立、閉鎖性、偏狭な利己心を意味する。社会主義のもとでは、勤労大衆自身が、前述した純経済的な動機から、どこでも閉鎖性には同意しないであろう。そして、政治形態の多様性、国家から脱退する自由、国家建設の試み、すべてこういうことは、――およそ国家一般が死滅するまでは、豊かな文化生活の基礎となり、諸民族の自発的な接近と融合の過程を促進する保障となるであろう。

植民地を特別あつかいにして、それをヨーロッパに対置することにより、ポーランドの同志たちは、彼らの誤った論証全体を一挙に打ち砕くような矛盾におちいっている。

七　マルクス主義か、プルードン主義か？

アイルランドの分離(註)にたいするマルクスの態度をわれわれが引合いにだしたことにたいして、ポーランドの同志たちは、例外的に、間接でなしに直接に応戦している。では、彼らの反論はどういうものか？　彼らの意見によれば、一八四八―一八七一年のマルクスの立場を引合いにだすのは、「三文の値うち」もないのである。このひどく憤然たる、断固たる言明は、マルクスが「それと同時に」、「チェコ人、南スラヴ人、等々」の独立の志望に反対していた(註)ということを理由としている。

この理由づけがとくに憤然としているのは、まさにそれがとくに根拠を欠いているからである。ポーランドのマルクス主義者によると、マルクスは相反することを「同時に」しゃべっていたたんなるとんまだったことになる！　これはまったくまちがっており、マルクス主義ではまったくない。ポーランドの同志たちが「具体的な」分析という要求を提出するのは、それを適用しないためなのだが、この「具体的な」分析という要求からして、われわれは、いろいろな具体的な「民族」運動にたいしてマルクスがとったさまざまな態度が、同じ一つの社会主義的世界観から出てきたものでないかどうかを検討する義務がある。

周知のとおり、マルクスは、ツァーリズムの力と影響にたいする――その無制限の権力と優勢な反動的影響にたいする、と言ってもよい――ヨーロッパ民主主義派の闘争の利益という見地から、ポーランドの独立を支持した。この見地の正しさは、一八四九年にロシアの農奴軍がハンガリーにおける民族解放の革命的・民主主義的蜂起を押しつぶ

したときに、このうえなく明白に事実によって確証された。そしてそのときからマルクスの死にいたるまで、いやもっとあとまで、すなわち、フランスと同盟を結んだツァーリズムが、帝国主義的でない、民族的に独立したドイツにたいして反動的な闘争をしかけるおそれのあった一八九〇年にいたるまで、エンゲルスは、なによりもツァーリズムにたいする闘争を支持したのである。マルクスとエンゲルスが、チェコ人と南スラヴ人の民族運動に反対したのは、このため、しかもただこのためであった。マルクス主義をふりすてるだけの目的でマルクス主義に興味をもっている人でないかぎり、だれでも、一八四八—一八四九年にマルクスとエンゲルスが書いたものを調べただけで、その当時にマルクスとエンゲルスが、ヨーロッパで「ロシアの前哨」となっていた「幾多の反動的民族」と、「革命的民族」であるドイツ人、ポーランド人、マジャール人とを、はっきりと、明確に対置していたことを、知るであろう。これは事実である。そして、この事実を指摘したことは、その当時にあっては議論の余地のない正しいことであった。すなわち、一八四八年には、革命的な諸民族は自由のためにたたかい、その自由の主要な敵はツァーリズムであったが、チェコ人その他は実際に反動的な民族であり、ツァーリズムの前哨であった。

マルクス主義に忠実でありたいと思うなら、この具体的な実例を具体的に分析しなければならないが、この実例はいったいなにを語っているか？　それの語っているのは、ただ次のことである。(一)ヨーロッパの若干の大きな、またきわめて大きな民族の解放の利益は、小民族の解放運動の利益に優越する。(二)民主主義の要求は、孤立的に取りあげないで、全ヨーロッパ的な——いまでは、世界的な、と言うべきであるが——規模で取りあげなければならない。

それだけである。ここには、ポーランドの諸君が忘れてしまい、そしてマルクスがつねに忠実に守った、あの基本的な社会主義の原則、すなわち、他民族を抑圧する民族は自由ではありえない、という原則を否認している影さえない。もし国際政治においてツァーリズムが優勢な影響力をもっていた時代にマルクスが当面していた具体的な情勢が、またも繰りかえされるなら——たとえば、若干の民族が(一八四八年にヨーロッパでブルジョア民主主義革命を開始したように)社会主義革命を開始し、他の民族がブルジョア反動派の主要な支柱となるというような形で——、われわれもやはり、後者にたいする革命的戦争に味方し、それらを「押しつぶす」ことに味方し、そこにどんな小民族運動が現われていようとも、それのすべての前哨陣地を破

壊することに賛成しなければならない。したがって、われわれは、マルクスの戦術の手本をけっして捨てさることなく――それを捨てさるのは、口さきでマルクス主義を信奉するととなえながら、実際にはそれと手を切ることになろう――、その手本の具体的な分析から、将来のための限りなく貴重な教訓を引きださなければならない。自決をもふくめた民主主義の個々の要求は絶対的なものではなくて、世界的な一般民主主義（今日では一般社会主義）運動の一小部分である。個々の具体的な場合には、部分が全体に矛盾することもありうる。そのときには、その部分を否認しなければならない。ある一国での共和主義的運動が、他の国々の教権主義的または金融的〃君主主義的陰謀の道具にすぎない場合もありうる。――そういう場合には、われわれはこの具体的運動を支持してはならないが、しかし、そのことを根拠にして、国際社会民主主義の綱領から共和制のスローガンを削除することは、こっけいであろう。

一八四八―一八七一年から一八九八―一九一六年（私は、時代としての帝国主義の最も大きな道標を取りあげているのである。すなわち、スペインとアメリカとのあいだの帝国主義戦争からヨーロッパの帝国主義戦争まで）までに具体的情勢はまさにどのように変化したか？　ツァーリズムは、第一には、国際金融資本、とくにフランスの金融資本から支持を受けている結果として、第二には、一九〇五年〔革命〕のおかげで、明らかに、争う余地なく、反動の主要な砦ではなくなった。以前には、大きな民族諸国家――ヨーロッパの民主主義諸国――の体系が、ツァーリズムにさからって、世界に民主主義と社会主義とをもちこみつつあった。* マルクスとエンゲルスは、帝国主義の時代までは生きなかった。いまでは、ひとにぎりの数の（五ないし六の）帝国主義的「大」国の体系が形成されていて、それらの「大」国のおのおのが他民族を抑圧している。その場合、この抑圧は、資本主義の没落を人為的に遅らせ、世界を支配している帝国主義的諸民族の日和見主義と社会排外主義を人為的に支持する源泉の一つである。以前には、最も大きな諸民族を解放しつつあった西ヨーロッパの民主主義派が、個々の小さな民族運動を反動的な目的に利用していたツァーリズムに対立していた。いまでは、ツァーリズムの帝国主義とヨーロッパの先進的な資本主義的帝国主義との同盟が、幾多の民族にたいする彼らの全般的な抑圧を土台として、社会主義的プロレタリアートに対立している。そして、このプロレタリアートは、排外主義的、「社会帝国主義的」なプロレタリアートと革命的なプロレタリアートとに分裂している。

* リャザーノフは、グリューンベルクの『社会主義史記録文

集』(一九一六年第一号)に、一八六六年に書かれたポーランド問題にかんするエンゲルスのきわめて興味ある論文を公表した。エンゲルスは、プロレタリアートがヨーロッパの強大民族の政治的独立と「自決」(right to dispose of itself)を承認する必要があることを強調し、「民族原理」(とくにボナパルティズムが利用した形での)がばかげていること、すなわち、なんらかの小民族をこれらの大民族と同列におくことがばかげていることを、指摘している。エンゲルスは言っている。「ロシアは膨大な量の盗品」(すなわち被抑圧民族)「所持者であり、審判の日にはそれを吐きださなければならない。[三六]」ボナパルティズムも、ツァーリズムも、自分の利益のために、ヨーロッパの民主主義に対抗して小民族の運動を利用している。

まさに以上の点に情勢の具体的変化があるのだが、ポーランドの社会民主主義者は、具体的に考えるという彼らの約束に反して、まさにこの具体的変化を無視している! この変化からして、同じ社会主義的原則の適用に、次のような具体的変化が生じるのである。すなわち、以前には、第一に「ツァーリズムに反対」して(またツァーリズムによって反民主主義的な方向で利用されていた若干の小民族の運動に反対して)、西欧の大民族の革命的国民に味方しなければならなかった。いまでは、帝国主義諸国、帝国主義的ブルジョアジー、社会帝国主義者の歩調を合わせた統一戦線に反対して、社会主義革命のためにあらゆる反帝国主義的民族運動を利用することに味方しなければならない。いまでは、全般的な帝国主義戦線にたいするプロレタリアートの闘争がいっそう純粋になればなるほど、「他民族を抑圧する民族は自由ではありえない」という国際主義の原則は、明らかに、いっそう切実なものとなるのである。

プルードン主義者は、空論主義的に理解された社会革命を名として、ポーランドの国際的役割を無視し、民族運動を鼻であしらった。ポーランドの社会民主主義者は、それとまったく同じように、空論主義的にふるまって、併合問題についての自分たちの動揺によって(客観的に)社会帝国主義者を援助し、社会帝国主義者にたいする国際的な闘争戦線を破壊している。なぜなら、ほかならぬプロレタリア闘争の国際戦線が、小民族の具体的な立場にかんしてそのあり方を変えたからである。すなわち、以前には(一八四八―一八七一年)、小民族は、「西欧民主主義派」および革命的諸民族の可能な同盟者か、それともツァーリズムの可能な同盟者か、そのどちらかの意義をもっていた。いまでは(一八九八―一九一四年)、小民族はそういう意義を失っている。今日では、彼らの意義は、「大国民族」の寄生主義の、したがってまたその社会帝国主義の、培養源の一つだということである。重要なのは、小民族の五〇分の

一または一〇〇分の一が社会主義革命以前に解放されるかどうかではない。重要なのは、帝国主義時代にプロレタリアートが客観的諸原因によって二つの国際的陣営に分かれていることである。すなわち、そのうちの一つは、大国ブルジョアジーの食卓からのおこぼれ、とりわけ小民族の二重、三重の搾取からのおこぼれで堕落させられており、もう一つの陣営は、小民族を解放せずには、排外主義反対、すなわち併合主義反対の精神、すなわち「自決主義」の精神で大衆を教育せずには、自分自身を解放できないのである。

問題のこの最も主要な側面を、ポーランドの同志たちは無視している。彼らは、帝国主義時代の中心的な立場から、国際プロレタリアートの二つの陣営という見地から物ごとを見ないのである。

彼らのプルードン主義を示す明瞭な実例をさらにいくつかあげよう。（一）一九一六年のアイルランドの蜂起にたいする態度――これについてはあとで述べる。（二）社会主義革命のスローガンは「なにによっても隠蔽されてはならない」というテーゼのなかの声明（第二部第三章、第三章の終り）。社会主義革命のスローガンを、民族問題をもふくむあらゆる問題における徹底的に革命的な立場に結びつけることによって、このスローガンが「隠蔽」されうるかのようにいうのは、まさに根ぶかい反マルクス主義的思想である。

ポーランドの社会民主主義者は、われわれの綱領を「民族改良主義的」なものとみている。次の二つの実践的提案を対比してみたまえ。（一）自治制に賛成の提案（ポーランド人のテーゼ、第三部第四章）、（二）分離の自由に賛成の提案。われわれの綱領と彼らの綱領とは、この点で、ただこの点でだけ、違っているのだ！　しかも前者こそ、後者と違って、改良主義的なものであることは、明らかではないか？　改良主義的な変化とは、支配階級がその支配を維持しながらおこなう譲歩にすぎず、支配階級の権力の基礎を掘りくずすことのない変化である。革命的変化とは、権力の基礎を掘りくずす変化である。民族綱領における改良主義は、支配民族のすべての特権を廃止せず、完全な同権をつくりださず、あらゆる民族的抑圧を排除しない。「自治」民族は、「主権」民族と同権ではない。もしポーランドの同志たちが、（昔のわが国の「経済主義者」とまったく同じように）政治的な概念やカテゴリーの分析を頑強に無視しなかったなら、彼らはこのことにかならず気がついたにちがいない。自治的なノルウェーは、一九〇五年まで、スウェーデンの一部として最も広範な自治を享有していたが、それでもスウェーデンと同権ではなかった。

同国の自由な分離がはじめてその同権を実際に表明し、それを証明したのである（ついでに言っておけば、この場合、まさにこの自由な分離によって、権利の平等に基礎をおく、いっそう緊密な、いっそう民主主義的な接近のための土台がつくりだされたのである）。ノルウェーが自治しかもっていなかったあいだは、スウェーデンの貴族は一つの余分の特権をもっていた。そしてこの特権は、分離によって「弱められた」のではなくて（改良主義の本質は、悪を根絶するのでなく、それを弱めることにある）、完全に排除されたのである（これが、綱領の革命性の基本的な標識である）。

ついでに言っておくが、改良としての自治は、革命的方策としての分離の自由とは、原則的に違ったものである。これは疑いをいれないことである。しかし、改良は、だれでも知っているように、実践においてはしばしば革命への一歩にほかならない。ほかならぬ自治こそ、ある国家の境界内に暴力的に引きとめられている民族に、最後的にみずからを民族として構成し、自分の力を結集し、それを知り、組織化し、最も適当な時機をとらえて、……「ノルウェー人ふうの」精神で次のように声明する可能性をあたえるのである。すなわち、われわれ、これこれの民族もしくはこれこれの辺区の自治議会は、今後全ロシア皇帝はポーランド国王、等々でないことを宣言する、と。これにたいしては、こういう問題は戦争で解決されるものであって、宣言で解決されるものではない、という「反論」が普通なされている。そのとおりである。つまり、それは、大多数の場合、戦争によって解決される（ちょうど、大国家の統治形態の問題が、大多数の場合、戦争と革命によってのみ解決されるように）。だが、革命党の政治綱領にたいするこの種の「反論」は論理的かどうか、すこし考えてみてもよいであろう。われわれはいったい、正しいもの、プロレタリアートにとって有益なもののための、民主主義のため、また社会主義のための、戦争と革命に反対しているであろうか？

「しかし、われわれは大国民相互のあいだの戦争には賛成できない。おそらく一千万ないし二千万の人口しかない小民族の、成功おぼつかない解放のために二千万人もの人人を殺戮することには賛成できない！」もちろん、できない！　だが、それは、われわれが自分の綱領から完全な民族的平等を削除するからではなくて、一国の民主主義派の利益は数個の、またすべての国の民主主義派の利益に従属させられなければならないからである。二つの大きな君主国のあいだに一つの小さな君主国が介在しており、その小国の国王が血縁その他のきずなでこの二つの隣国の君主に

「結ばれて」いると仮定しよう。さらに、この小国で共和制を宣言してその君主を放逐することが、実際には、だれを小国の君主として復位させるかをめぐって二つの隣接する大国のあいだに戦争が起こることを意味すると仮定しよう。疑いもなく、この場合には、国際社会民主主義全体も、またこの小国の社会民主党の真に国際主義的な部分も、君主制を共和制に代えることに反対するであろう。君主制を共和制に代えることは、絶対的な事柄ではなく、民主主義的諸要求のうちの一つであって、民主主義派（もちろん、それ以上に社会主義的プロレタリアート）全体の利益に従属したものである。たしかに、こういう場合には、どの国の社会民主主義者のあいだにも、ほんのわずかの意見の相違も起こらないであろう。しかし、このことを根拠として、ある社会民主主義者が国際社会民主主義の綱領から共和制のスローガンをまったく削除するように提案するなら、彼はきっと狂人と見なされるであろう。人は、彼にむかってこう言うだろう。とにかく、特殊的なものと一般的なものとの初歩的な論理上の区別を忘れてはいけない、と。

この一例はわれわれを、すこしばかり別の側面から、労働者階級の国際主義的教育にゆきあたらせる。こういう教育が必要であり、さしせまって重要であることについては、ツィンメルヴァルト左派のあいだに意見の相違があろうとは考えられないが、この教育は、大きな抑圧民族と小さな被抑圧民族、併合民族と被併合民族とで、具体的に同一でありうるだろうか？

明らかに、ありえない。あらゆる民族の完全な同権、その最も緊密な接近と将来におけるあらゆる融合という同じ一つの目標にいたる道は、ここでは明らかに、それぞれ違った具体的な道筋をとおってゆく。それは、たとえば、あるページの中央にある一点に向かう道は、ページの一端からは左に、その反対の端からは右に、進むのと同じである。もし、大きな抑圧民族、併合民族の社会民主主義者が、一般に諸民族の融合を信奉していても、「自国の」ニコライ二世、「自国の」ヴィルヘルム、ジョージ、ポアンカレその他もまた小民族との（併合による）融合に――ニコライ二世はガリチアとの「融合」に、ヴィルヘルム二世はベルギーとの「融合」に、等々――賛成していることを一瞬間でも忘れるなら、このような社会民主主義者は、理論のうえではこっけいな空論家となり、実践のうえでは帝国主義の助手となるであろう。

抑圧国における労働者の国際主義的教育の重点は、ぜひとも、労働者が被抑圧国の分離の自由を説き主張するようにならせることでなければならない。これなしには国際主義はない。われわれは、抑圧民族の社会民主主義者でこう

いう宣伝をおこなわない者を、すべて帝国主義者として、ろくでなしとして、取りあつかう権利があり、義務がある。たとえ分離の場合が、社会主義の実現以前には千度に一度しかありえず、「実現可能」でないとしても、これは無条件の要求である。

われわれは、民族的差異にたいして「無関心」となるように労働者を教育する義務を負っている。このことには争う余地がない。しかし、それは併合主義者の無関心であってはならない。抑圧民族の成員は、小民族が彼ら自身の共感にしたがって、その抑圧民族の国家に所属しようと、あるいは隣りの国家に所属しようと、それとも自立しようと、それには「無関心」でなければならない。こういう「無関心」がなければ、彼らは社会民主主義者ではない。国際主義的社会民主主義者であるためには、自分の民族のことだけを考えないで、すべての民族の利益、その全般的な自由と同権を自分の民族に優越させなければならない。「理論」のうえではみなこのことに同意しているが、実践ではまさに併合主義的無関心を発揮している。ここに悪の根源がある。

これとは反対に、小民族の社会民主主義者は、彼らの扇動の重点をわれわれの一般的定式の第二のことば、すなわち、諸民族の「自由意志による結合」におかなければならない。彼らが自民族の政治的独立に賛成しようと、自民族のX、Y、Zなどの隣接国家への編入に賛成しようと、国際主義者としての自分の義務に違反することにはならない。しかし、彼らは、どんな場合にも、小民族的な偏狭、閉鎖性、孤立に反対し、全体的なもの、全般的なものを考慮させるために、部分的なものの利益を全般的なものの利益に従属させるために、たたかわなければならない。

問題を深く考えたことのない人々は、抑圧民族の社会民主主義者が「分離の自由」を主張し、被抑圧民族の社会民主主義者が「結合の自由」を主張するのは「矛盾している」と考える。しかし、すこし考えてみれば、国際主義と民族融合とにいたる道、現在の状態からこの目標にいたる道は、ほかにはなく、またありえないことがわかる。

そしてここでわれわれは、オランダとポーランドの社会民主党の特殊な立場の問題にたどりついた。

八　オランダとポーランドの国際主義的社会民主主義者の立場における特殊的なものと一般的なもの

自決に反対しているオランダとポーランドのマルクス主義者たちが国際社会民主主義の最も優秀な革命的および国

際主義的分子に属していることは、すこしの疑いもいれない。では、以上に見てきたように、彼らの理論的考察が徹頭徹尾誤りの連続であり、正しい一般的な考察が一つもなく、「帝国主義的経済主義」以外にはなにもない、というようなことが、どうして起こりうるのか！

この問題は、けっしてオランダ＝ポーランドの同志たちの特別に悪い主観的資質によって説明されるものではなく、彼らの国の特殊な客観的諸条件によって説明されるのである。すなわち、(一) 両国ともに、列強の現在の体系のなかでは小さな、たよりない国である。(二) 両国ともに、地理的に、巨大な力をもち、最も激しく競争しあっている帝国主義的強盗（イギリスとドイツ、ドイツとロシア）の中間に介在している。(三) 両国ともに、自国が「大国」であった往時の記憶と伝統が、おそろしく強い。オランダはイギリスよりも強大な植民地支配大国であったし、ポーランドはロシアやプロイセンよりも文化的で、より強力な大国であった。(四) 両国ともに、今日にいたるまで、他民族を抑圧する特権をたもっている。オランダのブルジョアは、最も富裕なオランダ領インドを領有しており、ポーランドの地主はウクライナと白ロシアの「奴隷」を、ポーランドのブルジョアはユダヤ人その他を抑圧している。

この四つの特殊条件の結びつきからなる特異性は、アイルランド、ポルトガル（同国は一時はスペインに併合されていた）、アルザス、ノルウェー、フィンランド、ウクライナ、ラトヴィア辺区、ベロルシア辺区、その他多くのものの地位には、見いだされない。まさにこの特異性にこそ、問題の全核心がある！　オランダとポーランドの社会民主主義者が一般的な論証、すなわち帝国主義一般、社会主義一般、民主主義一般、民族的抑圧一般にかんする論証の助けを借りて自決反対の議論をおこなうとき、実際、彼らは誤りのうえに誤りをかさね、誤りにつぐに誤りをもってしているということができる。しかし、一般的論証のこの明らかにまちがった外被をはぎとり、そしてオランダとポーランドの特殊条件の特異性という見地から問題の本質を考察しさえすれば、彼らの特異な立場は理解できるものになり、まったく正当なものになる。逆説におちいる心配なしに、次のように言うことができる。すなわち、オランダとポーランドのマルクス主義者が口角泡をとばして自決に反対するとき、彼らは、かならずしも自分の言いたいことを言っているわけではない。言いかえれば、彼らはかならずしも現に言っていることを言いたいのではない、と。*

* ポーランドのすべての社会民主主義者が、ツィンメルヴァルトでの彼らの宣言では、ほんのすこし違った定式で自決一般を承認したことを、注意しておこう。

われわれは、すでにわれわれのテーゼのなかに一つの実例をあげておいた(三三)。ホルテルは、自国の自決には反対しながら、「自」国によって抑圧されているオランダ領インドの自決には賛成している！ われわれが、ドイツのカウツキー、わが国のトロツキーやマルトフのようなやり方で自決を承認する連中、すなわち口さきだけで、偽善的に自決を承認する連中よりも、ホルテルのほうを、いっそう誠実な国際主義者、われわれにいっそう近い同志とみるのは、驚くべきことだろうか？ マルクス主義の一般的な根本原則からは、「私自身の」民族によって抑圧されている民族の分離の自由のために闘争する義務が無条件に生じるが、しかし、ほかならぬオランダの独立をなによりも第一に重視する必要は、そこからはけっして出てこない。世界中が燃えようと、ままよ、われわれの知ったことではない、「われわれ」は自分の古い獲物とその最も豊かな「残存物」、インドで満足する、それ以上は「われわれ」にはなんのかかわりもない！ というような、狭い、頑固な、貪欲な、そして人間を愚鈍にする閉鎖性が、このオランダのなによりも大きな欠陥なのである。

もう一つの例。ポーランドの社会民主主義者カール・ラデックは、開戦後に、ドイツ社会民主党内で国際主義のために断固たる闘争をおこなって、とくに大きな功績をあげた人物であるが、そのラデックが、論文『民族自決権』(『リヒトシュトラーレン』(三四)――J・ボルヒャルトの編集になる左翼急進派の月刊雑誌で、プロイセンの検閲局によって禁止された――、一九一五年一二月五日付、第三年第三号所載)で、自決に猛烈に反対している。ついでながら、そのさい彼は、自分の裏づけとしてオランダとポーランドの権威者の言葉だけを引用しており、なかでも次のような論拠をもちだしている。それは、自決は「あらゆる独立闘争を支持することが社会民主党の義務であるかのような」思想をつちかう、というのである。

一般理論の見地からみれば、この論拠はまったく言語道断のものである。なぜなら、それは、明らかに非論理的だからである。第一に、民主主義のどんな部分的要求でも、部分的なものを全体的なものに従属させないなら、悪用を生みださないようなものは一つもないし、またありえない。われわれには、「あらゆる」独立闘争を支持する義務もなければ、「あらゆる」共和主義運動もしくは反僧侶運動を支持する義務もない。第二に、民族的抑圧にたいする闘争のどのような定式でも、これと同じ「欠点」をもたないものは一つもないし、またありえない。ラデック自身、『ベルナー・ターグヴァハト』(一九一五年第二五三号)で、「新旧の併合に反対」という定式を使用している。どのポ

ーランドの民族主義者も、この定式から当然次のような「結論を引きだす」であろう。「ポーランドは併合された国である。私は併合に反対する。つまり、ポーランドの独立に賛成する」と。またローザ・ルクセンブルクは、たしか一九〇八年の論文[29]では、「民族的抑圧反対」という定式で十分である、との意見を表明した。しかし、どのポーランドの民族主義者も、併合は民族的抑圧の一種であり、したがって、うんぬんと言うだろう、――しかも、そう言うのは完全に正当である。

しかし、これらの一般的な論拠でなしに、ポーランドの特殊条件をとってみたまえ。ポーランドの独立は、今日では、戦争または革命なしには「実現不可能」である。ただポーランドの再興だけのために全ヨーロッパ戦争に賛成するということは、最も悪質の民族主義者となり、少数のポーランド人の利益を、戦争に苦しむ幾億の人間の利益に優先させることを意味する。たとえば、口さきだけの社会主義者である「フラキ」[30]（ポーランド社会党右派）がまさにこれであって、彼らにくらべれば、ポーランドの社会民主主義者ははるかに正しい。いま、隣接する帝国主義諸大国の現在の相互関係の状況下で、ポーランド独立のスローガンをかかげるのは、実際にはユートピアを追いもとめ、偏狭な民族主義におちいり、全ヨーロッパ革命、あるいはすくなくともロシアとドイツの革命という前提を忘れることを意味する。それとまったく同じように、一九〇八―一九一四年のロシアで団結の自由のスローガンを単独のスローガンとしてかかげることは、ユートピアを追いもとめ、客観的にはストルィピン労働者党（今日ではポトレソフ＝グヴォズデフ労働者党、もっとも、これはまったく同じものだ）を助けることを意味していた。だが、社会民主党の綱領から団結の自由の要求をまったく取りのぞくことは、狂気の沙汰であろう！

第三の、おそらく最も重要な実例。ポーランドのテーゼ（第三部第二章の末尾）には、緩衝国家としての独立ポーランド国家という考えに反対して、次のように書かれている。これは、「無力な小グループの空虚なユートピアである。この考えが実現されるなら、小さなポーランド残骸国家の創立を意味するであろうし、そういう国家は、諸大国のいずれかのグループの軍事的植民地となり、それらの大国の軍事的および経済的利害のもてあそびものとなり、外国資本の搾取の領域となり、未来の戦争の戦場となるであろう」と。これらはみな、今日におけるポーランドの独立のスローガンに反対するものとしては、非常に正しい。なぜなら、革命でさえ、ポーランド一国に起こっただけでは、そこのなにものをも変えないであろうし、ポーランドの大

衆の注意を、彼らの闘争とロシアおよびドイツのプロレタリアートの闘争との結びつきという主要事からそらせるであろうから。今日、ポーランドのプロレタリアートが、そういう資格で社会主義の大業とポーランドの自由をもふくむ自由の大業とを助けることができるのは、彼らが隣接諸国のプロレタリアと共同して、偏狭なポーランド民族主義者にたいして闘争する場合だけであるということは、逆説ではなくて事実である。これらの民族主義者にたいする闘争においてポーランドの社会民主主義者が歴史的に偉大な功績を果したことは、否定できない。

しかし、現在の時代におけるポーランドの特殊条件の見地からみて正しいこの論拠も、それにあたえられているような一般的な形態では、明らかに正しくない。戦争があるかぎり、ポーランドは、つねにドイツとロシアのあいだの戦争の戦場となるであろう。しかし、このことは、戦争と戦争とのあいだの期間に、より大きな政治的自由(したがってまた、政治的独立)に反対する論拠にはならない。同じことは、外国資本による搾取についての考えや、外国の利害のもてあそびものという役割についての考えにも、あてはまる。ポーランドの社会民主主義者は、今日、ポーランド独立のスローガンをかかげることはできない。なぜなら、国際主義的プロレタリアであるポーランド人は、「フラキ」のように、帝国主義的君主国のどれか一つへの卑屈な下僕的奉仕におちいることとなしには、このスローガンのためになにひとつやれないからである。しかし、ロシアとドイツの労働者にとっては、彼らが将来ポーランド併合の参加者となるか(これは、最も卑劣な下司根性の精神で、他民族の絞刑吏の役割にあまんじる精神で、ドイツとロシアの労働者、農民を教育することを意味する)、それともポーランドが独立するかは、どうでもよいことではない。

事態はたしかにすこぶるこみいっているが、しかし、そこには、すべての関係者が国際主義者にとどまりうるような、一つの活路がある。すなわち、ロシアとドイツの社会民主主義者はポーランドの無条件的な「分離の自由」を要求し、ポーランドの社会民主主義者は、現在の時代または現在の時期には、ポーランド独立のスローガンをかかげずに、この小国のプロレタリア闘争と諸大国のプロレタリア闘争との統一のためにたたかうことが、それである。

九　カウツキーにあてたエンゲルスの手紙

そのころまだマルクス主義者であったカウツキーは、その小冊子『社会主義と植民政策』(ベルリン、一九〇七年)

のなかに、一八八二年九月一二日付の彼にあてたエンゲルスの手紙を発表した。これは、いまわれわれの関心をひいている問題にとって、非常に興味ぶかいものである。この手紙の主要な部分は次のとおりである。

「……私の考えでは、本来の植民地、すなわちヨーロッパ人の住民が住みついている国々、カナダ、ケープ植民地、オーストラリアは、みな独立するであろう。これに反して、現地民の住民がいて、ただ支配されているだけの国々、インドや、アルジェリアや、またオランダ、ポルトガル、スペインの諸領土は、一時プロレタリアートが引きついで、できるだけ急速に独立させるようにしなければならない。この過程がどうすすむかを言うことは困難である。インドはおそらく革命を起こすだろう。これは、大いにありそうなことでさえある。そして、自己を解放するプロレタリアートは植民地戦争をおこなうことはできないから、これは成りゆきにまかせるほかはないであろう。もちろん、この場合、あらゆる種類の破壊をともなわずにはすまないであろう。しかし、こうしたことはまさにあらゆる革命につきものの事柄である。さらにほかの場所でも、たとえばアルジェリアやエジプトでも、これと同じことが起こるかもしれない。そして、たしかに、それがわれわれにとっていちばんよいことである。われわれには国内にしなければならない仕事が十分にあるだろう。ヨーロッパや、また北アメリカが改造されれば、それは巨大な力をあたえ、すばらしい模範となるから、なかば開化した諸国民はまったく自分からそのあとについてすすむようになる。経済上の必要だけからでも、そうならざるをえないのだ。だが、そのあとで、これらの国々が同様に社会主義的組織に到達するまでにどのような社会的および政治的段階をとおらなければならないか、それについていま仮説を立ててみても、かなりむだなものにしかなるまいと思う。ただ次の一事だけは確かである。それは、勝利したプロレタリアートがどんな種類の幸福であれそれを他民族に押しつけるなら、かならず自分自身の勝利をくつがえすことになる、ということである。もちろん、こう言ったからとて、いろいろな種類の防衛戦争を排除するものではけっしてない。……」〔三〕

エンゲルスは、「経済的な要因」がひとりでに、直接に、あらゆる困難を取りのぞいてくれるとは、けっして考えていない。経済的変革がすべての民族をうながして社会主義に向かわせるであろうが、それと同時に革命――社会主義国家にたいする革命――も起こりうるし、戦争も起こりうる。経済への政治の適応は不可避的におこなわれるであろうが、しかし、それは一挙に、なめらかに、単純に、直接におこなわれはしないであろう。エンゲルスは、ただ一つ、

無条件に国際主義的な原則だけを「確かなもの」としてかかげ、それをすべての「他民族」に――つまり、植民地民族だけでなしに――適用している。すなわち、他民族に幸福を押しつけることは、プロレタリアートの勝利をくつがえすことを意味するであろう、という原則である。

プロレタリアートは社会革命をなしとげたというだけの理由では、聖人にもならなければ、誤りや弱点におちいらないという保障もない。しかし、おそらくおかされるであろういろいろな誤り（と、他人の背中におぶさろうとする利己的な私益）は、かならずプロレタリアートにこの真理をさとらせるであろう。

われわれツィンメルヴァルト左派はみな、次のことを確信している。これは、たとえばカウツキーにしても、一九一四年にマルクス主義から排外主義の擁護へと転向するまでは、やはり確信していた事柄である。すなわち、社会主義革命は、ごく近い将来に、この同じカウツキーがかつて用いた表現をつかっていえば、「きょうあすにも」、まったく可能だということである。民族的反感はそう急速には消滅しないであろう。抑圧民族にたいする被抑圧民族の憎悪、しかもまったく正当な憎悪は、なおしばらく残るであろう。それは、社会主義が勝利したのちに、そして諸民族のあいだにまったく民主主義的な関係が最後的に打ちたてられたのちに、はじめて消散するであろう。もし社会主義に忠実であろうと思えば、われわれは、すでに今日、大衆の国際主義的教育をおこなわなければならないが、この教育は、抑圧民族のあいだでは、被抑圧民族のための分離の自由を説くことなしには不可能である。

一〇　一九一六年のアイルランドの蜂起

われわれのテーゼが書かれたのは、この蜂起よりまえであって、この蜂起はさまざまな理論的見解を点検する材料とならなければならない。

自決に反対する論者の見解からは、帝国主義に抑圧されている小民族の生命力はすでに涸れており、彼らは帝国主義に対抗してなんの役割も果たすことができず、彼らの純民族的な志向を支持してもなんにもならない、等々の結論が出てくる。一九一四―一九一六年の帝国主義戦争の経験は、このような見解を事実によってくつがえしている。

戦争は、西ヨーロッパの諸民族にとり、また帝国主義全体にとって、危機の時期であった。あらゆる危機は、因襲的なものを投げすて、うわべの外被をはぎとり、寿命のすぎたものを一掃し、より深部にあるばねと勢力とを明るみにだすものである。では、被抑圧民族の運動の見地からみ

て、危機はなにを明るみにだしたか？　植民地には、幾多の蜂起の企てがあったが、もちろん、抑圧民族は、戦時検閲の助けを借りて、百方これを隠蔽することにつとめた。それにもかかわらず、よく知られているように、イギリス人は、シンガポールで自国のインド人部隊の反乱を残酷に処罰したし、フランス領安南（アンナン）（『ナーシェ・スローヴォ』[三一]を見よ）や、ドイツ領カメルン（ユニウスの小冊子を見よ）では蜂起の企てがあった。またヨーロッパでは、一方では、アイルランドが蜂起し、「自由を愛好する」イギリス人が処刑をもってこれを鎮定した。このイギリス人は、あえてアイルランド人を一般兵役義務につかせる勇気がなかったのである。他方では、オーストリア政府は、チェコ議会の代議士数名に「反逆罪」のかどで死刑の判決をくだし、また同じ「犯罪」を理由としてチェコ人の幾多の連隊をも銃殺に処した。

もちろん、ここにかぞえあげたのは、まだけっして全部ではない。それでもこれは、植民地でも、ヨーロッパでも、帝国主義の危機に関連して民族的蜂起の炎が燃えあがっており、民族的共感と反感が峻厳な威嚇や弾圧措置を押しきって現われでたことを証明している。ところで、帝国主義の危機は、まだけっしてその発展の最頂点に達してはいない。帝国主義的ブルジョアジーの威力は、まだくつがえされてはいない（「消耗」戦は、そういうところまでみちびきうるが、現在はまだそこまでゆきついていない）。帝国主義諸大国内部のプロレタリア運動は、まだまったく微力である。戦争が完全な消耗にいたったときには、あるいは、たとえある一つの大国ででも、プロレタリア闘争の打撃によって、ブルジョアジーの権力が一九〇五年のツァーリズムの権力のようにゆれはじめたときには、いったいどうなるだろうか？

数名の左派までもふくめたツィンメルヴァルト派の機関誌『ベルナー・タークヴァハト』紙の一九一六年五月九日号に、K・Rの略名で、アイルランドの蜂起について『歌は終わった』と題する論文がのった。ここでは、アイルランドの蜂起はまさしく「一揆」だときめつけられているが、その理由は、「アイルランド問題は土地問題であった」のに、農民は改良で満足させられており、民族主義運動はいまや「純然たる都市の小ブルジョア的運動」であり、「大騒ぎを引きおこしたにもかかわらず、社会的にはあまり支持者がなかった」からだ、というのである。

法外に空論的で衒学的なこの評価が、この蜂起を同じように「ダブリンの一揆」[三二]とよんだロシアの国権的自由主義者、カデット党員のア・クリシェル氏の評価（『レーチ』[三三]一九一六年五月一五日付、第一〇二号）と一致したのも、

不思議ではない。

「自決」を拒否し、小民族の民族運動にたいして軽蔑的な態度をとると、どんな泥沼に転落することになるかを理解しなかった多くの同志たちも、いまや、「とりえのない悪はない」ということわざのとおり、帝国主義的ブルジョアジーの一代表者の評価と一社会民主主義者の評価とのこの「偶然の」一致に心をうたれて、目をひらくものと期待してよいであろう!!

科学的な意味で「一揆」と言えるのは、蜂起の企てが、陰謀家またはばかげた狂信者の一サークルのほかにはなにも明るみにださず、大衆のうちになんの共鳴も呼びおこさない場合だけである。すでに数世紀の歴史をもち、いろいろな段階といろいろな階級利害の組合せとをとおってきたアイルランドの民族運動は、とりわけ、アイルランドの独立に賛意を表明したあのアメリカにおける大衆的なアイルランド民族大会(『フォールヴェルツ』一九一六年三月二〇日号)となって現われ、また長期にわたる大衆的扇動、デモンストレーション、新聞の発禁等々のあとで、一部の都市小ブルジョアジーおよび一部の労働者の市街戦となって現われた。このような蜂起を一揆と名づける人は、最悪の反動家か、さもなければ、社会革命を生きた現象として考える能力をまったくもたない空論家である。

というのは、植民地やヨーロッパにおける小民族の蜂起をともなわず、その偏見をすべてもったままの小ブルジョアジーの一部の革命的爆発をともなわず、また地主的、教会的、君主制的、民族的、等々の抑圧に反対する無自覚なプロレタリアならびに半プロレタリア大衆の運動をともなわないような社会革命が可能だと考えるのは、社会革命を放棄することを意味するからである。きっと、一つの部隊がある場所に整列して、「われわれは社会主義に賛成だ」と言い、他の一部隊が他の場所に整列して、「われわれは帝国主義に賛成だ」と言えば、社会革命になるのであろう! アイルランドの蜂起を一揆と罵倒するのは、ただこういう衒学的でこっけいな見地からだけ可能なことであった。

「純粋の」社会革命を待ちもうけている人は、いくら待ってもけっして革命にめぐりあえないだろう。そういう人は、真の革命を理解しない、口さきだけの革命家である。

一九〇五年のロシア革命は、ブルジョア民主主義革命であった。それは、不満をもつあらゆる階級、グループ、住民分子の幾多の戦闘からなりたっていた。彼らのうちには、きわめて野蛮な偏見をもち、きわめてぼんやりした、空想的な闘争目標をもった大衆がおり、日本人から金をもらった小グループがおり、山師、冒険主義者、等々がいた。し

かし、客観的には、大衆の運動がツァーリズムを打ち砕き、民主主義のための道をひらいたのであって、だからこそ自覚した労働者はこの運動を指導したのである。

ヨーロッパの社会主義革命は、抑圧され、不満をもつありとあらゆる人々の大衆闘争の爆発以外のものではありえない。小ブルジョアジーと遅れた労働者の一部も、不可避的にこの革命に参加するであろうし――こういう参加がなければ、大衆闘争は不可能であり、どんな革命も不可能である――、彼らは、同じように不可避的に、自分たちの偏見、自分たちの反動的な空想、自分たちの弱点と誤りを運動にもちこんでくるであろう。しかし、客観的には、彼らは資本を攻撃するであろう。そして、自覚した革命の前衛、先進的プロレタリアートは、色とりどりの、まちまちな意見をもった、雑多な、そして表面的には細分された大衆闘争のこの客観的な真理を表現して、この闘争を統合し、方向づけ、権力を獲得し、銀行を奪取し、すべての者ににくまれている（その理由はいろいろであるが！）トラストを収奪し、またその他の執権的方策――その総体においてブルジョアジーを転覆し社会主義の勝利をもたらすような――を実現することができるであろう。この社会主義の勝利も、けっして一挙に小ブルジョア的な残りかすを「掃除」しはしないであろう。

ポーランド人のテーゼ（第一部第四章）にはこう書かれている。社会民主党は「ヨーロッパにおける革命的危機を激化させるために、ヨーロッパの帝国主義に敵対する若い植民地ブルジョアジーの闘争を利用しなければならない。」（傍点は原筆者たちのもの）

この点でヨーロッパを植民地に対置することはけっして許されないということは、明らかではないか？　ヨーロッパにおける被抑圧民族の闘争は、蜂起や市街戦になるまでに発展し、軍隊の鉄の規律に違反し、戒厳の布告をみるところまですすむことができるのであるが、このような闘争は、遠隔の植民地におけるずっと大きく発展した蜂起よりも、はるかに強力に「ヨーロッパにおける革命的危機を激化させるであろう」。アイルランドの蜂起がイギリスの帝国主義的ブルジョアジーの権力にくわえる打撃は、その力は同じであっても、アジアまたはアフリカにおける蜂起よりも百倍も大きな政治的意義をもっている。

最近、フランスの排外主義的新聞は、ベルギーで非合法雑誌『自由ベルギー』(32)の第八〇号が発行されたと報じた。もちろん、フランスの排外主義的新聞は非常によくうそをつくが、この報道はどうもほんとうらしい。排外主義的で、カウツキー主義的なドイツ社会民主党が、戦時検閲のくびきを奴隷的に甘受して、二ヵ年にわたる戦争のあいだ自由

な出版物をつくりださなかったときに（ただ左翼急進分子だけが、あっぱれにも、検閲をとおさずに小冊子とビラを発行していた）、そういうときに、この抑圧された文化民族は、軍事的抑圧の前代未聞の暴虐行為にたいして、革命的抗議のための機関誌の発刊でこたえている！　反帝国主義闘争における自立的な要因としては無力な小民族が、真の反帝国主義勢力、すなわち社会主義的プロレタリアートの舞台への登場を助ける酵母の一つ、バチルスの一つとしての役割を演じているということ、これが歴史の弁証法というものである。

現在の戦争では、諸国の参謀本部は、敵の陣営内のあらゆる民族運動や革命運動を利用しようと注意ぶかく努力している。ドイツ人はアイルランドの蜂起を、フランス人はチェコ人の運動を、利用しようと努力している、等々。そして、彼らの立場からみれば、こういうやり方はまったく正当である。敵の弱点はどんな小さなものでも利用し、機会という機会はすべてとらえるのでなければ、真剣な戦争にたいして真剣な態度をとっているとはいえない。まして、あれこれの火薬庫が、まさにどの時機に、どれほどの力で、ここで「爆発する」か、向こうで「爆発する」か、まえもって知ることはできないのだから、なおさらそうである。社会主義をめざすプロレタリアートの偉大な解放戦争で、危機を激化させ拡大するために、帝国主義の個々の災厄に反対するあらゆる人民運動を利用することを解しないなら、われわれははなはだ悪い革命家だということになろう。もしわれわれが、一方で、あらゆる民族的抑圧に「反対」だと、いろいろな調子で声明し、それを繰りかえしながら、他方では、抑圧者にたいする被抑圧民族のいくつかの階級の最も活発な、知性ある部分の英雄的な蜂起を「一揆」と名づけるようなことをやりはじめるなら、われわれはカウツキー派と同じ愚か者の水準に身をおとすことになろう。

アイルランド人の不幸は、彼らが時機尚早に、すなわち、ヨーロッパにおけるプロレタリアートの蜂起がまだ成熟していなかったときに、蜂起したことにある。資本主義は、蜂起のいろいろな源泉が、失敗もせず、敗北もせずに、おのずから、一気に合流するほど、調和的な仕組みにはできていない。反対に、いろいろな蜂起の時期が異なり、種類が異なり、場所が異なるからこそ、全般的運動の広さと深さが保障されるのである。時機をえない、部分的な、細分された、したがって不首尾な革命運動の経験によってはじめて、大衆は経験を獲得し、教訓をまなびとり、力を集積し、自分たちの真の指導者、社会主義的プロレタリアを見てとり、そうすることによって総攻撃の準備をととのえるであろう。それは、個々のストライキ、都市のデモンスト

レーションと全国的デモンストレーション、軍隊内の暴動、農民のあいだの爆発、等々が一九〇五年の総攻撃を準備したのと同じである。

一一　結　論

民族自決の要求は、ポーランドの社会民主主義者のまちがった主張に反して、たとえば人民の武装や、教会の国家からの分離や、人民による官吏の選挙や、その他俗物どものいわゆる「ユートピア的な」条項におとらない重要な役割を、わが党の扇動のなかで演じた。また逆に、一九〇五年以後の民族運動の活発化は、当然にわれわれの扇動の活発化をも呼びおこした。すなわち、一九一二―一九一三年における一連の論文がそれであり、問題の本質について正確な、「反カウツキー主義的な」(すなわち、まったくの口さきだけの「承認」にたいして非妥協的な) 定義をあたえた、あの一九一三年のわが党の決議(三六)がそれである。

すでにその当時、回避することの許されない一事実が明るみにだされた。それは、いろいろな民族の日和見主義者たち、ウクライナ人のユルケーヴィチや、ブンド派のリーブマンや、ポトレソフ一派のロシアにおける召使であるセムコーフスキーが、自決に反対するローザ・ルクセンブルクの論拠を支持したことである！　ポーランド社会民主党にあってはポーランドの運動の特殊条件を不当に理論的に普遍化したにすぎなかったものが、もっと広い環境のなかでは、小国家でなく大国家の諸条件のもとでは、狭いポーランド的な規模でなく国際的な規模では、たちまち、実際には、客観的には、大ロシア的帝国主義にたいする日和見主義的な支持になったのである。政治思想の諸潮流（個々の人物の見解とは違った）の歴史は、われわれの綱領の正しさを確証したのである。

いまも、レンシュのようなおおっぴらな社会帝国主義者は、自決にたいしても、併合の否認にたいしても、まっこうから反対している。ところが、カウツキー派は偽善的に自決を認めている。わがロシアでは、トロツキーとマルトフがこの道を歩いている。二人とも、口さきではカウツキーと同じく自決に賛成である。だが、実際にはどうか？　トロツキーにあっては――『ナーシェ・スローヴォ』にのった彼の論文『民族の経済』をとってみたまえ――、一方では経済が諸民族を融合させるが、他方では民族的抑圧が彼らを分裂させるという、彼のいつもながらの折衷主義が見られる。その結論は？　ひろくゆきわたっている偽善は依然として暴露されず、扇動は依然として生命がなく、主要なもの、根本的なもの、本質的なもの、実践に近いもの、

すなわち「私の」民族に抑圧されている民族にたいする態度にはふれないということ、これが結論である。マルトフその他の在外書記局員は、彼らの同僚であり仲間であるセムコーフスキーの自決反対の闘争をあっさりと忘れたほうがいいと考えた。なんと都合のよい忘れぐせだろう！グヴォズデフ派の合法的出版物（『ナーシ・ゴーロス』[三]）で、マルトフは、自決に賛成すると書き、自決ということは、それだけではまだ帝国主義戦争に参加する義務を課するものでない、という争う余地のない真理を証明しているが、しかし、主要なことを回避している――しかも、非合法の自由な出版物の紙上でも、これを回避している！――。すなわち、ロシアは平和時にも、はるかに粗暴な、中世的な、経済的に遅れた軍事的＝官僚的帝国主義にもとづいて、民族的抑圧の世界記録を破った、ということがそれである。ロシアの社会民主主義者で、プレハーノフやポトレソフ一派の諸君が民族自決を承認するのとほぼ同じようなやり方で、すなわちツァーリズムによって抑圧されている諸民族の分離の自由のために闘争せずに、民族の自決を「承認する」者は、実際には帝国主義者であり、ツァーリズムの従僕である。

トロツキーとマルトフの主観的な「善」意がどのようなものであれ、客観的には、彼らは、そのあいまいな態度によってロシアの社会帝国主義を支持している。帝国主義時代は、すべての「大」国を多くの民族の抑圧者に転化させた。そして、帝国主義の発展は、かならずや、国際社会民主主義の内部でも、この問題をめぐって諸潮流のいっそう明確な区分をもたらすであろう。

一九一六年七月に執筆
一九一六年一〇月に『ソツィアル－デモクラート論集』第一号に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第三〇巻、一七―五九ページ所収
邦訳全集、第二二巻、三七二―四二二ページ所収

ペ・キエフスキー（ユ・ピャタコーフ）への回答[三]

戦争は——人間の生涯や諸国民の歴史上のあらゆる危機と同じように——ある者を打ちのめし、打ちひしぎ、他の者をきたえ、教育する。

この真理は、戦争についての、また戦争に関連した社会民主主義者の思考の分野でも、はっきり認められる。高度に発展した資本主義を基盤とする帝国主義戦争の原因と意義について、また戦争に関連した社会民主党の戦術上の諸任務、社会民主党の危機の諸原因、等々について、できるだけ根本的に考えめぐらすことと、戦争のために自分の思考を押しつぶされ、戦争の恐ろしい印象や、戦争の苦しい結果あるいは特質の重圧のもとに判断や分析をやめることとは、二つの違った事柄である。

このように戦争のために人間の思考が押しつぶされあるいは圧迫された形の一つが、民主主義にたいして「帝国主義的経済主義」が示している軽視的な態度である。ペ・キエフスキーは、このように戦争のために圧迫されおどしつけられて分析を放棄した状態が、彼の判断全体を赤い糸のようにつらぬいていることに、気がつかない。われわれの眼前でこのように凶暴な屠殺がなされているときに、祖国擁護についてなにをとやかく論じることがあろう！　むぞうさな、ひっきりなしの絞殺がさかんにおこなわれているときに、民族の権利についてなにを語ることがあろう！　まあ見たまえ、「独立」ギリシアがどんな目にあったかを。そんなときに、いったいどんな民族自決、民族「独立」があるというのか！　いたるところで、軍閥の利益のためにあらゆる権利が踏みにじられているときに、「権利」について語ったり、考えたりしていったいなんになろう！　この戦時に、最も民主主義的な共和制と最も反動的な君主制とのあいだに、どんな小さな差異も、絶対にどんな差異も、なくなっており、いくらまわりを見まわしてもどこにもその痕跡さえ見られないときに、共和制について語ったり考えたりしてなんになろう！　と。

ペ・キエフスキーに、君はすっかりおどしつけられてしまって、民主主義一般を否定するまでにわれを忘れていると指摘すると彼は、ひどくむかっぱらを立てる——腹を立

てて、こう反論する。自分はけっして民主主義に反対してはいない、ただ、「まずい」要求だと自分が考えている一つの民主主義的要求に反対しているだけだ、と。しかし、ペ・キエフスキーがどんなに腹を立てようと、自分はけっして民主主義に「反対」してはいないと、どんなにわれわれに(また、おそらくは自分自身にも)「うけあおう」と、彼の所論――もっと正しくいえば、彼の所論のなかのひっきりなしの誤り――は、それとは逆なことを証明している。

祖国擁護は、帝国主義戦争や革命戦争ではいつわりであるが、しかし民主主義的な戦争や革命戦争では、けっしていつわりではない。あらゆる戦争は権利を露骨な、直接の暴力とおきかえるものなのだから、戦時に「権利」のことをいろいろ言うのは、こっけいにみえる。しかし、だからといって忘れてならないのは、過去の歴史上に、戦時にあらゆる「権利」、あらゆる民主主義を暴力とおきかえながらも、その社会的内容の点で、その結果の点で、民主主義の事業、したがってまた社会主義の事業に役だったような戦争(民主主義的戦争や革命戦争)があった(そして、将来もきっとあるだろうし、あるにちがいない)ことである。ギリシアの実例は、あらゆる民族自決を「反駁する」もののようにみえる。しかし、ことばの響きで耳をつんぼにされたり、戦争の悪夢のような印象の重圧におどしつけられたりせずに、ものを考え、分析し、考えめぐらしたいと思う人間にとって、この実例は重大なものでも、説得的なものでもないことは、「民主主義的な」、最も民主主義的な共和国でさえ、フランスだけでなく、アメリカ合衆国も、ポルトガルも、スイスも、この戦争のあいだにロシアとまったく同様な軍閥の専横を打ちたてたし、また打ちたてつつあるという理由で、共和制を嘲笑するのと同じである。

帝国主義戦争が共和制と君主制との差異をぬぐいさることは事実であるが、しかし、そのことから、共和制を否定したり、でないまでも、共和制を軽視する結論を引きだすことは、戦争におどしつけられることを意味し、戦争の惨禍のために自分の思考を圧迫されることを意味する。だが「軍備撤廃」のスローガンを支持する多くの人々(ローラント-ホルスト、スイスの青年たち、スカンディナヴィアの「左派」その他)の所論がそれである。軍国主義がいたるところであのように恐ろしいことをやっているときに、軍隊または民兵の革命的利用――見たまえ、この戦争で、共和国の民兵と君主国の常備軍とのあいだにいったいどんな相違があるのか?――を論じてなんになろう?と。

これらはみな同じ考え方であり、同一の理論的および実践的=政治的な誤りである。ペ・キエフスキーは、彼の論文のなかで文字どおり一歩ごとにこういう誤りをおかしな

がら、それに気づかずにいる。彼は、自分では、自決だけに反対して論争しているつもりでいる。彼は、もっぱら自決だけに反対して論争することを望んでいる。ところが、それがどういう結果になっているかというと――まったく珍妙な話だが、彼の本意に反して、また自分では気づかずに！――、彼のもちだす論証のどれをとっても、同じ根拠で民主主義一般に反対して適用できないものは一つもないという結果になっている！

彼のあらゆる珍妙な論理上の誤り、すべての混乱――自決の問題についてばかりでなく、祖国擁護の問題、離婚の問題、「権利」一般の問題でも見られるところの――の真の根源は、彼の思考が戦争のために圧迫され、そしてこのように圧迫された結果、民主主義一般にたいするマルクス主義の態度を根本的にゆがめてしまった点にある。

〔つまりこういうのだ。〕帝国主義は高度に発展した資本主義である。帝国主義は進歩的である。帝国主義は民主主義の否定である。「したがって」民主主義は、資本主義のもとでは「実現不可能」である。帝国主義戦争は、遅れた君主国でも、すすんだ共和国でも、ひとしくあらゆる民主主義のはなはだしい侵害である。「したがって」、「権利」のことを（すなわち民主主義のことを！）いろいろ論じてもなんの役にも立たない。帝国主義戦争に「対置」することができるのは、社会主義「だけ」である。「活路」は社会主義だけにある。「したがって」、最小限綱領のなかで、すなわちおよそ資本主義のもとで民主主義的スローガンをかかげることは、欺瞞または幻想であるか、社会主義変革のスローガンをあいまいにしたり、遠ざけたり、等々することである。

これがペ・キエフスキーのあらゆる不幸の真の根源、彼の意識にのぼってはいないが、真の根源である。これが、彼の基本的な論理上の誤りである。この誤りは、この筆者には意識されていないが、それが根底にあるからこそ、くさった自転車タイヤのように、一歩ごとに「パンク」し、祖国擁護の問題であろうと、離婚の問題であろうと、「権利」についての空文句、すなわち、権利が問題なのではなく、長年の奴隷制度を破壊することが問題なのだというすばらしい（「権利」の蔑視の深さの点で、また問題の無理解の深さの点で、すばらしい）空文句のなかであろうと、「とびだしてくる」のである！

こういう文句を口にするのは、資本主義と民主主義、社会主義と民主主義の関係を理解していないことを、さらけだすものにほかならない。

一般に資本主義、とくに帝国主義は、民主主義を幻想に変える――だが、それと同時に、資本主義は、大衆のあい

だに民主主義的志向を生みだし、民主主義的諸制度をつくりだし、民主主義を否定する帝国主義と、民主主義をめざす大衆との敵対を激化させる。資本主義と帝国主義を打倒することは、どんな民主主義的改革、どんなに「理想的な」民主主義的改革によっても不可能であり、それは経済的変革によってのみ可能である。しかし、民主主義のための闘争で訓練されないプロレタリアートは、経済的変革を遂行する能力をもたない。銀行をにぎらないでは、生産手段の私的所有を廃止しないでは、資本主義に打ちかつことはできない。しかし、ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする全人民の民主主義的管理を組織することなしには、また全勤労大衆を、すなわちプロレタリアをも半プロレタリアをも小農民をも引きよせて、彼らの隊列、彼らの勢力、彼らの国事参加を民主主義的に組織する仕事にくわわらせることなしには、これらの革命的措置を実行することはできない。帝国主義戦争は、いわば三重の意味で民主主義の否定である（(a) あらゆる戦争は「権利」を暴力とおきかえる。(b) 帝国主義は一般に民主主義の否定である。(c) 帝国主義戦争は、共和制を君主制とまったく等しいものにしてしまう）。しかし、帝国主義に反対する社会主義的蜂起が目ざめ、高まるのは、民主主義的な反抗と憤激が高まるのと不可分に結びついている。社会主義は、あらゆる国家の死滅へ、したがって、あらゆる民主主義の死滅へみちびく。しかし、社会主義を実現するには、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）をつうじるよりほかに道がない。ところで、このプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、ブルジョアジーすなわち、住民中の少数者にたいする強力と、民主主義――すなわち、あらゆる国事に、また資本主義の廃止にともなうあらゆる複雑な問題に、全住民大衆が真に全般的に参加すること――の完全な発展とを結びつけるのである。

民主主義についてのマルクス主義の学説を忘れたペ・キエフスキーは、まさにこれらの「矛盾」のなかで混乱してしまった。比喩的な言い方をすれば、戦争が彼の思考をすっかり圧迫してしまい、その結果、彼は、あらゆる熟考をやめて、「帝国主義をたたきだせ」という扇動的な叫びとおきかえてしまったのである。それは、「植民地から」文明諸国民が「手を引く」ことが、本来――経済的および政治的に――なにを意味するかの分析をやめて、「植民地から手を引け」という叫びとおきかえるのと同じやり方である。

民主主義の問題のマルクス主義的解決は、階級闘争をおこなっているプロレタリアートが、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの勝利、すなわちブルジョアジーの打倒を準備するために、すべての民主主義的諸制度とブル

ジョアジー反対の志向とを利用することにある。この利用は、容易な仕事ではない。しかも、これは、「経済主義者」、トルストイ主義者等々には、往々にして、「ブルジョア的なもの」や日和見主義的なものにたいする不当な譲歩と思えるのである。それはちょうど、ペ・キエフスキーには、「金融資本の時代に」民族自決を擁護することが、ブルジョア的なものへの不当な譲歩と思えるのと同じである。マルクス主義はこう教えている。現在の資本主義社会で、ブルジョアジーによってつくりだされ、ブルジョアジーによってゆがめられている民主主義的諸制度の利用を拒否するという仕方で「日和見主義とたたかう」ことは、日和見主義に完全に降伏することである！と。

帝国主義戦争から最も急速に脱けだす道を示すと同時に、帝国主義戦争に反対するわれわれの闘争と、日和見主義に反対する闘争との結びつきをも示しているスローガンは、社会主義のための内乱というスローガンである。ただこのスローガンだけが、戦時の特殊性——戦争は長びいており、戦争時代という一「時代」になるおそれがある！——をも、平和主義と合法主義と「自国」ブルジョアジーへの適応とをともなう日和見主義に対抗するわれわれの活動の全性格をも、正しく考慮している。だがそのうえになお、ブルジョアジーにたいする内乱は、少数の有産者にたいする貧民大衆の、民主主義的に組織され、遂行される戦争である。内乱もまた戦争である。したがって、それもまた不可避的に、権利を強力とおきかえなければならない。しかし、住民の多数者の利益と権利のための強力は、別の性格をもっている。それは、搾取者、ブルジョアジーの「権利」を踏みにじる。それは、軍隊と「銃後」を民主主義的に組織することなしには実現できない。内乱は、一挙に、またまっさきに、銀行、工場、鉄道、農業用大領地、等々を強力的に収奪する。しかし、まさにこれらすべてを収奪するためにこそ、人民によるすべての官吏の選挙、人民による将校の選挙、ブルジョアジー相手に戦う軍隊と住民大衆との完全な融合、食糧の管理や食糧の生産と分配の仕事での完全な民主主義等々を実施する必要があるのである。内乱の目的は、銀行、工場等々の奪取であり、ブルジョアジーの抵抗のあらゆる可能性の根絶であり、彼らの軍隊の撃滅である。だがこの目的は、それと同時にわれわれの軍隊の内部やわれわれの「銃後」で民主主義を実現し、普及させ、そういう戦争の過程でそれを発展させることなしには、純軍事的な面でも、経済的な面でも、政治的な面でも、達成することはできない。われわれはいまや大衆にむかって次のように言う（そして、われわれが大衆にそれを言うとき、大衆はわれわれのことばが正しいことを本能的に感じる）。

「やつらは諸君を帝国主義的資本主義のための戦争へみちびきながら、この戦争を民主主義の偉大なスローガンでつつみかくして、諸君をだましている。」「諸君は、民主主義と社会主義を真に実現するために、真に民主主義的にブルジョアジーにたいする戦争をおこなわなければならないし、またおこなうであろう。」現在の戦争は、暴力と金融的従属を手段として、諸国民を結合し「融合させ」て連合をつくらせている。われわれは、ブルジョアジーにたいするわれわれの内乱のなかで、ループリの力によってではなく、棍棒の力によってではなく、暴力によってではなく、自発的な同意によって、搾取者に反対する勤労者の連帯によって、諸国民を結合し、融合させるであろう。あらゆる民族の同権の宣言は、ブルジョアジーにとっては欺瞞となったが、われわれにとっては、すべての民族をわれわれの味方に引きつけることを容易にし、促進する真実であるだろう。諸民族間の関係を実際に民主主義的に組織することなしには――したがってまた、国家的分離の自由なしには――、すべての民族の労働者大衆と勤労大衆のブルジョアジーにたいする内乱は不可能である。

　ブルジョア民主主義の利用をつうじて――ブルジョアジーに対抗し、日和見主義に対抗するプロレタリアートの社会主義的な、首尾一貫して民主主義的な組織化へ。これ以外の道はない。これ以外の「活路」は活路ではない。これ以外の活路をマルクス主義は知らない、現実の生活がそれを知らないように。われわれは、諸民族の自由な分離と自由な結合をもこの道のなかにふくめなければならず、それを頭から拒否したり、それが「純」経済的諸任務を「けがす」ことを恐れたりしてはならない。

一九一六年八―九月に執筆
一九二九年に、雑誌『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィア』第七号にはじめて発表
全集、第五版、第三〇巻、六八―七四ページ所収
邦訳全集、第二三巻、一四―二〇ページ所収

マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」について

「革命的社会民主主義派が自分で自分の名をけがしさえしなければ、だれもその名をけがしはしないであろう。」マルクス主義の理論上または戦術上のあれこれの重要な命題が勝利をおさめているとき、あるいはすくなくとも当面の日程にのぼっているときには、またあからさまな、まともな敵のほかに、マルクス主義の名をどうしようもないほど汚辱し——けがし——、それを戯画化するような味方がマルクス主義に「だきついてくる」ときには、いつでもこの金言を思いだし、念頭におかなければならない。ロシアの社会民主主義派の歴史上にも、たびたびそういうことがあった。前世紀の九〇年代のはじめに革命運動でマルクス主義が勝利したのにともなって、当時の「経済主義」あるいは「ストライキ主義」の形をとって、マルクス主義の戯画が現われてきた。もしこれと長い年月にわたってたたかわなかったならば、「イスクラ派」(三〇)に、小ブルジョア的ナロードニキ主義(三一)にたいしても、ブルジョア自由主義にたいしても、プロレタリア的な理論と政策の基礎を守りぬくことができなかったであろう。ボリシェヴィズムについてもそうであった。ボリシェヴィズムは、とりわけ、一九〇五年のロシア革命の最も重要な戦闘がおこなわれた時期、一九〇五年の秋に「ツァーリ国会をボイコットせよ」というスローガンを正しく適用したおかげで、一九〇五年の大衆的労働運動に勝利を占めたのであるが、一九〇八—一九一〇年にアレクシンスキーその他が第三国会への参加に反対して大騒ぎをおこしたとき、ボリシェヴィズムの戯画を身をもって体験し——そして闘争によってそれを克服し——なければならなかった。(三二)

いまでも事情は同じである。現在の戦争を帝国主義戦争と認め、資本主義の帝国主義時代と現在の戦争との深いつながりを指摘することにたいして、まともな反対者があるとともに、ふまじめな味方もある。後者にとっては帝国主義ということばはひとつの「流行」になっており、彼らはこのことばを丸暗記することによって、なんとも手のつけられない理論上の混乱を労働者にもたらし、往年の「経済主義」の往年の幾多の誤りを復活させている。資本主義が

勝利した、だから政治問題を思いめぐらす必要はない――こう一八九四―一九〇一年の昔の「経済主義者」は論じ、ついには、ロシアにおける政治闘争を否認するにいたった。帝国主義が勝利した、だから政治的民主主義の問題を考える必要はない――こう今日の「帝国主義的経済主義者」は論じている。このような気分の見本、このようなマルクス主義の戯画の見本として、まえのほうにのせたペ・キエフスキーの論文(三)は重要性をもつようになっている。この論文は、一九一五年のはじめから国外のわが党の若干のサークルのあいだに認められた思想的動揺を、はじめて、いくらかでもまとまった形で文書に述べようとしたものである。

社会主義の今日の大きな危機にさいして、断固として社会排外主義に反対し、革命的国際主義に味方してきたマルクス主義者の隊列のうちに、「帝国主義的経済主義」がひろがることは、われわれの傾向――とわが党――にたいする、このうえなく重大な打撃となるであろう。なぜなら、それは、党の名を内部から、党自身の隊列のうちからけがし、党を戯画的なマルクス主義の代表者に変えることになるからである。だから、ペ・キエフスキーの論文中にある無数の誤りのうち、せめて最も重大なものについてだけでも、詳しく論じなければならない。そのことが、それ自体としてどんなに「興味のない」ことであろうと、またそのことが、注意ぶかく思慮ぶかい読者にはすでにとっくの昔から知られている、明瞭な、あまりにもわかりきった真理を、ひっきりなしに、あまりにも初歩的な形でくどくど述べたてることになろうと、それを論じなければならないのである。

読者を、すぐさま「帝国主義的経済主義」という新しい傾向の「核心」へ引きいれるために、ペ・キエフスキーの議論の最も「中心的な」点から出発しよう。

一　戦争にたいする、また「祖国擁護」にたいするマルクス主義的態度

ペ・キエフスキーは、自分が「不同意」なのは民族自決にたいしてだけ、わが党の綱領の第九項にたいしてだけであると、自分でも確信しているし、読者にもそう確信させたがっている。ペ・キエフスキーは、彼が民主主義の問題でマルクス主義一般から根本的にそれているとか、なにか基本的な点でマルクス主義の「裏切者」（ペ・キエフスキーが恨みをこめてつけた括弧）であるとかいう非難を、憤然としてはねつけようと試みている。しかし、この筆者が、部分的な個々の問題についての不同意と称するものについて論じはじめ、論拠や理由その他をあげはじめるやいなや、

彼がまさに全線にわたってマルクス主義からそれていることが、たちまちはっきりしてしまったということ、まさにこの点に事の核心がある。ペ・キエフスキーの論文のｂ節（第二章）をとってみたまえ。「この要求」（すなわち民族自決）「はまっすぐに（!!）社会愛国主義につらなっている」と、この筆者は宣言し、こう説明している。祖国擁護という「裏切的な」スローガンこそ、「……民族自決から完全な（!）論理的（!）正当性をもって引きだされる」結論である、と。自決は、彼の意見によれば、「武器をとってこの独立」（フランスとベルギーの民族国家としての独立）「を擁護しているフランスとベルギーの社会愛国主義者らの裏切行為を是認することである。——彼らは、『自決』論者が口で述べているだけのことを実行しているのである。」……「祖国擁護は、われわれの最悪の敵の武器庫からとってきたものである。」……「どうすれば祖国擁護に反対すると同時に自決に賛成し、祖国に反対すると同時にそれに味方するというようなことができるのか、われわれには断じて理解できない」と。

ペ・キエフスキーは右のように書いている。彼が、現在の戦争における祖国擁護のスローガンに反対するわれわれの決議を理解しなかったことは、明らかである。そこで、われわれは、これらの決議に明々白々に書いてあることをとりあげ、はっきりしたロシア語の意味をもう一度説明しなければならない。

一九一五年三月のベルン会議で採択され、『祖国擁護のスローガンについて』という標題をもっているわが党の決議は、「現在の戦争の真の本質」はしかじかの点に「ある」ということばで始まっている（四三）。

ここで問題になっているのは現在の戦争である。ロシア語でこれ以上はっきりと言うことはできない。「真の本質」という言葉は、仮象と現実、外見と本質、言葉と行為を区別しなければならないことを示している。現在の戦争での祖国擁護という文句は、一九一四—一九一六年の帝国主義戦争、すなわち植民地の分割、他国の領土の略奪等々をめぐる戦争を、いつわって民族戦争のように見せかけるものである。われわれの見解をゆがめる可能性をいささかも残さないために、決議は、「とくに（とくに、というのは、もっぱらの意味でないことに注意せよ！）一七八九—一八七一年の時代に起こった真の民族戦争」について特別の一節をつけくわえている。

決議は、これらの「真の」民族戦争の「基礎」には、「大衆的な民族運動、絶対主義と封建制にたいする闘争、民族的抑圧の打倒……の長期にわたる過程があった」ことを明らかにしている。

これは明瞭だと思うが？　帝国主義時代のあらゆる条件によって生みだされている現在の帝国主義戦争、すなわち、偶然に現われたものでもなければ、例外でもなく、一般的なもの、典型的なものからの逸脱でもないこの戦争では、祖国擁護という文句は、人民を欺瞞するものである。というのは、この戦争は民族戦争ではないからである。真の民族戦争では、「祖国擁護」ということばはけっして欺瞞ではなく、われわれはこのような戦争にはけっして反対ではない。このような（真の民族）戦争は、「とくに」一七八九―一八七一年に起こった。そして、決議は、今日でもこのような戦争が起こりうることをひとことも否定してはおらず、真の民族戦争と、欺瞞的な民族的スローガンで隠蔽された帝国主義戦争とを区別することがどんなに必要であるかを、明らかにしている。すなわち、それを区別するためには、その「基礎」に、「大衆的な民族運動」の、また「民族的抑圧の打倒」の「長期にわたる過程」があるかどうかを、検討しなければならない。

「平和主義」についての決議には、「社会民主主義者は、革命的な戦争、すなわち帝国主義的でない戦争、たとえば」（この「たとえば」に注意せよ）「一七八九年から一八七一年までに、民族的抑圧を打倒……するためにおこなわれた戦争……のような戦争の積極的意義を否定することはできない[三四]」とはっきり述べている。もし、そういう戦争が今日でも可能であると認めていなかったとすれば、一九一五年のわが党の決議が、一七八九―一八七一年にその先例があったような民族戦争について述べ、そういう戦争の積極的意義をわれわれは否定しない、と述べるというようなことがありえたであろうか？　ありえなかったことは、明らかである。

わが党の決議の解説、すなわちその平易な説明は、レーニンとジノヴィエフの小冊子『社会主義と戦争』である。この小冊子の五ページには、「社会主義者は」、「異民族の抑圧の打倒」という意味でだけ、「祖国擁護あるいは防衛戦争を正当で、進歩的で、正しいもの」と「認めてきたのであり、いまでも認めている」とはっきり書いている。そこには、ペルシアがロシアにたいして「等々」〔戦争を宣言する〕という例をあげて、次のように述べている。「それは、どちらがはじめに攻撃をくわえたかにはかかわりなく、正義の戦争、防衛戦争であろうし、社会主義者ならだれでも、抑圧され、従属させられ、同権をもたないこれらの国家が抑圧者、奴隷所有者、略奪者である『大』国にたいして勝利をおさめることに共感をよせるであろう[三五]。」

この小冊子は、一九一五年八月に発行され、ドイツ語版とフランス語版が出版された。ペ・キエフスキーは、この

小冊子をよく知っている。ペ・キエフスキーにせよ、一般にだれにせよ、祖国擁護のスローガンにかんする決議にたいしても、平和主義にかんする決議にたいしても、小冊子におけるこれらの決議の解釈にたいしても、一度も反論したことがない。——一度もないのである！　そこでおたずねしたい。一九一五年三月以来、戦争についてのわが党の見解を反駁したことのないこの筆者が、一九一六年八月の今日、自決にかんする論文のなかで、すなわち部分的問題をとりあげたと称する論文のなかで、一般的な問題にたいするはなはだしい無理解をさらけだしているとき、彼はマルクス主義をまったく理解しなかったのだ、とわれわれが言うと、彼を中傷したことになるだろうか？

ペ・キエフスキーは、祖国擁護のスローガンを「裏切的」なものとよんでいる。われわれは、おだやかに次のように彼に確言することができる。どんなスローガンでも、それを機械的に繰りかえし、その意義を理解せず、事柄を深く考えず、意味を分析しないでことばをおぼえるだけにとどまっている人々にとっては、「裏切的」なものになるし、これからもいつでもそうであろう、と。

一般的にいって、「祖国擁護」とはなにか？　これは、経済または政治等々の分野に関係したある科学的概念であろうか？　そうではない。これは、戦争を正当化することを意味する、実にありふれた、一般につかわれている、ときにはまったく俗物的な表現である。それ以上のなにものでも、まったくなにものでもないのだ！　そこに「裏切的」なものがありうるとしたら、それは、俗物が「われわれは祖国を擁護する」という言い方でどんな戦争でも正当化しかねないということだけである。ところが、俗物根性に身をおとさないマルクス主義は、この戦争を、進歩的なもの、民主主義派あるいはプロレタリアートの利益に役だつもの、この意味で正当なもの、正しいもの等々と認めることができるかどうかを検討するために、それぞれの戦争を歴史的に分析することを要求するのである。

人々が、それぞれの戦争の意味を歴史的に検討する能力をもたない場合には、祖国擁護のスローガンは、しばしば俗物的に、それと自覚せずに、戦争を正当化することである。

マルクス主義は、そういう分析をおこなって、次のように言う。もし戦争の「真の本質」が、たとえば異民族の抑圧を打倒すること（これは一七八九—一八七一年のヨーロッパにとってとくに典型的である）にあるとすれば、その戦争は、被抑圧国家または被抑圧民族については進歩的である。もし戦争の「真の本質」が、植民地の再分割、獲物の分配、他国の土地の略奪（一九一四—一九一六年の戦争

がそうだ）であるなら——そのときは、祖国擁護うんぬんの文句は「国民を徹底的にあざむく」ものである、と。

　では、戦争の「真の本質」をどのようにして見いだし、どう規定すべきであろうか？　戦争は政治の継続である。戦争のまえの政治、すなわち、戦争にみちびいており、実際に戦争にみちびいた政治を、研究しなければならない。もし政治が帝国主義的なものであるなら、すなわち、金融資本の利益を擁護し、植民地や他国を略奪し抑圧するものであるなら、この政治から生まれる戦争も、帝国主義戦争である。もし政治が民族解放的なものであるなら、すなわち民族的抑圧に反対する大衆運動を表現するものであるなら、このような政治から生まれる戦争は、民族解放戦争である。

　俗物は、戦争が「政治の継続である」ことを理解しない。だから、「敵が攻撃してきた」、「敵がわが国土に侵入した」などと言うだけにとどまって、戦争がなにがもとで、どの階級によって、どんな政治的目的のためにおこなわれているかを検討しない。ペ・キエフスキーが、ドイツ軍がベルギーを占領したではないか、だから、自決の見地からいうと「ベルギーの社会愛国主義者は正しい」ことになるとか、あるいは、ドイツ軍がフランスの一部を占領した、だから、「ゲードは満足してよいわけだ」、なぜなら、「問題が当の民族（他民族でなしに）の居住する領域にまで及んでいる」からなどと言うのは、まったく右のような俗物の水準におちこんだものである。

　俗物にとっては、どこに軍隊がいるか、だれがいま勝利しているかが、たいせつである。マルクス主義者にとっては、現在の戦争がなにがもとでおこなわれているかがたいせつであって、戦争のさいには、あるときには一方の軍隊が勝利者となることもあれば、あるときには相手方の軍隊が勝利者となることもあるものである。

　現在の戦争は、なにがもとでおこなわれているか？　このことは、われわれの決議（交戦諸国が、戦前の数十年間に遂行してきた政治をよりどころにしている決議）のなかで指摘されている。イギリス、フランス、ロシアは、かすめあつめた植民地を維持し、トルコその他を略奪するために戦っている。ドイツは、植民地を奪取し、自分もトルコその他を略奪するために戦っている。かりにドイツ軍がパリとペテルブルグまでも占領したとしよう。そのために現在の戦争の性格が変化するだろうか？　すこしも変化しない。その場合、ドイツ人の目的と、——そして、このほうがもっと重要なことだが——ドイツ軍が勝利した場合に実現される政治の目的は、植民地を奪取し、トルコを支配し、たとえばポーランドその他の異民族の地域を奪取すること

等々であろうが、けっしてフランス人またはロシア人にたいして異民族の抑圧を打ちたてることではないであろう。現在の戦争の真の本質は、民族的なものではなく、帝国主義的なものである。言いかえれば、戦争は、一方が民族的抑圧を打倒しようとし、他方がそれを守ろうとしていることがもとになって、おこなわれているのではない。戦争は、獲物をどう分配するか、だれがトルコや植民地を略奪するかをめぐって、抑圧者の二グループのあいだで、二人の強盗のあいだでおこなわれているのである。

要するに、帝国主義的（すなわち、幾多の他民族を抑圧し、金融資本への従属の網等々で彼らをがんじがらめにしている）諸大国のあいだの戦争、あるいはそれらの大国と同盟しておこなわれる戦争は、帝国主義戦争である。一九一四—一九一六年の戦争はそれである。「祖国擁護」は、この戦争では欺瞞であり、この戦争を正当化することである。

帝国主義大国、すなわち抑圧国にたいする被抑圧者（たとえば植民地国民）の戦争は、真の民族戦争である。そういう戦争は、今日でも可能である。抑圧民族の国にたいして被抑圧民族の国が「祖国を擁護する」ことは、欺瞞ではない。だから、社会主義者は、このような戦争における「祖国擁護」には、けっして反対ではない。

民族自決とは、完全な民族解放、完全な独立をめざし、併合に反対してたたかうことと同じことである。そして、社会主義者は、社会主義者であることをやめるのでなければ、このような闘争——蜂起または戦争をもふくめて、どんな形態でおこなわれようと——を拒否することはできない。

ペ・キエフスキーは、自分ではプレハーノフとたたかっているつもりでいる。プレハーノフは民族自決と祖国擁護とのつながりを指摘したから、と言うのだ！　ペ・キエフスキーは、プレハーノフを信じて、このつながりがほんとうにプレハーノフの描いているとおりのものだと考えた。ペ・キエフスキーはプレハーノフの言うことを信じて、びくついてしまい、プレハーノフの結論からのがれるために、民族自決を否定しなければならないと決心した。……プレハーノフにたいする軽信ぶりははなはだしく、びくつきもまたはなはだしいが、プレハーノフの誤りがどこにあるかを熟考した形跡すらない！

この戦争を民族戦争と見せかけるために、社会排外主義者は、民族自決を引合いにだしている。彼らにたいする正しいたたかい方は一つしかない。すなわち、これは、民族解放をめぐるたたかいではなく、大略奪者のうちのだれがよけいに諸民族を抑圧するかをめぐる戦争であることを示さなければならない。しかし、真に民族解放のためにおこ

なわれる戦争を否定するところまですすむのは、マルクス主義の最悪の戯画を描くことである。プレハーノフとフランスの社会排外主義者は、ドイツの君主制にたいしてフランスを「擁護する」のを正当化するために、フランスの共和制を引合いにだしている。もしペ・キエフスキーのような議論の仕方をするなら、われわれは、共和制に反対するか、あるいは真に共和制防衛のためにおこなわれる戦争に反対するかしなければならない!! ドイツの社会排外主義者は、ツァーリズムにたいしてドイツを「擁護」するのを正当化するためにドイツの普通選挙権と、普通義務教育を引合いにだしている。もしペ・キエフスキーのような議論の仕方をするなら、われわれは、普通選挙権と普通義務教育に反対するか、あるいは、政治的自由を剥奪しようとする企てから真にこの自由を守るためにおこなわれる戦争に反対するかしなければならない!

K・カウツキーは、一九一四―一九一六年の戦争前はマルクス主義者であったし、彼の多くのきわめて重要な著述やことばは、永久にマルクス主義の模範として残るであろう。一九一〇年八月二六日に、カウツキーは、間ぢかにせまった戦争について、『ノイエ・ツァイト』のなかで次のように書いている。

「ドイツとイギリスとの戦争の場合には、民主主義でなしに、世界の支配、すなわち世界の搾取が問題になっているのである。これは、社会民主主義者が自国の搾取者に味方しなければならないような問題ではない。」(『ノイエ・ツァイト』第二八年、第二巻、七七六ページ)

これは、みごとなマルクス主義的定式であって、われわれの定式に完全に合致しており、マルクス主義から社会排外主義の擁護に向きをかえた今日のカウツキーの正体を完全に暴露しており、戦争にたいするマルクス主義的態度の原則をまったくはっきりと説明している(この定式については、われわれはなお出版物でたちもどって論じるつもりである)。戦争は政治の継続である。だから、民主主義のための闘争がある以上、民主主義をめぐる戦争もありうるわけである。民族の自決は、民主主義的要求のひとつにすぎず、原則的には、他の諸要求とすこしも違うものではない。簡単にいえば、「世界の支配」が帝国主義的政治の内容であり、帝国主義戦争はこの政治の継続である。「祖国擁護」を、すなわち民主主義的戦争への参加を否定することは、マルクス主義とは縁もゆかりもない、ばかげたことである。帝国主義戦争に「祖国擁護」の概念をあてはめることで、すなわち帝国主義戦争を民主主義戦争と見せかけることで、帝国主義戦争を美化することは、労働者をあざむくことを意味し、反動的ブルジョアジーの味方に変わ

ることを意味している。

二　「われわれの新時代観」

右の括弧にいれたことばはペ・キエフスキーのものであって、彼はたえず「新時代」を口にしている。遺憾ながら、この場合にも彼の議論はまちがっている。

わが党の決議は、帝国主義時代の一般的諸条件によって生みだされている現在の戦争について語っている。「時代」と「現在の戦争」との相互関係は、われわれによって、マルクス主義的に正しく設定されている。マルクス主義者であろうとするなら、それぞれの戦争を具体的に評価しなければならない。一七八九—一八七一年には、大国の多くは民主主義のための闘争の先頭に立っていたのに、それらの大国のあいだに、どうして帝国主義戦争、すなわちその政治的意義からみて最も反動的で、反民主主義的な戦争が発生することができたし、また発生せざるをえなかったのか、その理由を理解するためには、帝国主義時代の一般的諸条件を、すなわち、先進諸国の資本主義が帝国主義に転化した一般的諸条件を、理解しなければならない。

ペ・キエフスキーは、「時代」と「現在の戦争」とのこの相互関係をまったくゆがめてしまった。彼に言わせると、具体的に論じるというのは、「時代」について論じることなのだ！　まさにこれこそ、まちがいである。

一七八九—一八七一年という時代は、ヨーロッパにとって特別の時代である。これは、争う余地がない。その時代の一般的諸条件を理解しなければ、この時期にとってとくに典型的であった民族解放戦争は、どれひとつとして理解することができない。このことは、この時代の戦争がすべて民族解放戦争であったことを意味するであろうか？　もちろん、そうではない。そんなことを言うのは、とんでもないゆきすぎをやり、それぞれの戦争の具体的研究のかわりに、こっけいな紋切型をもちだすことを意味するであろう。一七八九—一八七一年には、植民地戦争もあれば、幾多の他民族を抑圧していた反動的帝国どうしの戦争もあった。

そこで問題が生まれてくる。——ヨーロッパ（とアメリカ）の先進的な資本主義が帝国主義の新時代にはいったことからして、いまや帝国主義戦争しかありえない、という結論が出てくるだろうか？　これはばかげた主張であり、当面の具体的な現象と、その時代に起こりうる多様な現象の総和とを区別する能力がないことであろう。ある時代が時代とよばれるのは、それが多様な現象ともろもろの戦争——典型的なものも典型的でないものも、大きなものも小

さなものも、先進国に固有なものも、後進国に固有なもの も——の総和をふくんでいるからである。ペ・キエフスキーのやっているように、「時代」というきまり文句をつかってこれらの具体的な問題をかたづけてしまうのは、「時代」の概念の濫用である。これが根も葉もない非難でないことを示すために、いますぐ多くの実例のうちのひとつをあげよう。しかし、まずはじめに述べておかなければならないのは、ある左翼グループ、すなわちドイツの「インテルナツィオナーレ」グループが、ベルン執行委員会(四七)の通報第三号（一九一六年二月二九日）に発表した彼らのテーゼの第五節で、「この野ばなしにされた帝国主義の時代には、もはやどんな民族戦争もありえない」という明らかにまちがった主張を提出したことである。われわれはこの主張を『ソツィアル−デモクラート論集』(四八)で検討しておいた。ここでは、次の点だけを指摘しておこう。すなわち、この理論的命題は、国際主義的運動に関心をもつ者ならだれでもずっとまえから知っているものであるが（われわれは一九一六年春のベルン執行委員会の拡大会議で、すでにこの命題とたたかった）、しかし、今日まで、それを繰りかえしたり採用したりしたグループは一つもないのである。そして、ペ・キエフスキーが彼の論文を執筆した一九一六年八月には、彼はこういう、あるいはこれに類する主張の趣旨のことは、ひとことも言わなかった。

このことは、次の理由からして強調しておかなければならない。このことは、このような、あるいはこれに類する理論的主張が表明されていたのなら、理論のくいちがいを論じることができるであろう。ところが、これに類する主張がなにも提出されていない場合には、ここにあるのは異なった「時代」観でも、理論のくいちがいでもなくて、勢いよく投げつけた空文句にすぎず、「時代」ということばの濫用にすぎない、と言わざるをえない。

その例はこうである。——ペ・キエフスキーはその論文の冒頭に次のように書いている。

「それ（民族自決）は、火星に一万デシャチーナ〔の土地〕を無償でもらう権利に似てはいないだろうか？　この問にたいしては、まったく具体的に、今日の時代全体の評価と結びつけて答えるよりほかはない。当時の生産力の水準のもとで生産力を発展させる最上の形態として、民族国家が形成された時代の民族自決権と、これらの形態、すなわち民族国家の形態が、生産力発展の桎梏となった時代の自決権とは、別のものではなかろうか。資本主義と民族国家とが自己を確立した時代と、民族国家が滅亡し、資本主義そのものが滅亡の前夜にある時代とのあいだには、非常に大きなへだたりがある。時間と空間

を離れて『一般』論を述べるのは、マルクス主義者のなすべきことではない。」

この議論は、「帝国主義時代」という概念を戯画的に適用した見本である。この概念が新しく、重要であるからこそ、われわれはこの戯画とたたかわなければならない！　民族国家の形態が桎梏となったうんぬんと言うとき、なにが問題となっているのであろうか？　先進資本主義諸国、なによりもまずドイツ、フランス、イギリスが問題となっているのである。すなわち、現在の戦争へのその参加がなにもましてこの戦争を帝国主義戦争とした当の国々が、問題となっているのである。今日まで人類を前進させてきたこれらの国々では、とくに一七八九―一八七一年に民族国家の形成過程が完了した。これらの国々では、民族運動は二度とかえらない過去のことであり、それを復活させようとするのは、ばかげた反動的なユートピアであろう。フランス人、イギリス人、ドイツ人の民族運動は、とっくの昔に終わっている。これらの国々で歴史の日程にのぼっているのは、別のことである。すなわち、自分を解放しつつあった民族は抑圧民族に、「資本主義の滅亡の前夜」をとおっている帝国主義的略奪民族に、転化したのである。

では、他の民族はどうか？

ペ・キエフスキーは、丸暗記した規則のように、マルクス主義者は「具体的に」論じなければならないと繰りかえして言っているが、しかし、その規則を適用してはいない。ところが、われわれは、われわれのテーゼのなかで、わざわざ具体的な解答の見本をあたえておいた。だから、もしペ・キエフスキーがそこに誤りを見いだしたとすれば、彼はわれわれの誤りをわれわれに指摘することを望まなかったということになる。

われわれのテーゼ（第六章）には、具体的であるためには、自決の問題についてすくなくとも三つの異なった国家型を区別しなければならない、と述べてある（一般的なテーゼのなかでそれぞれの国について述べるわけにいかないことは、明らかである）。第一の型は、西ヨーロッパ（とアメリカ）の先進諸国であって、そこでは民族運動が過去のものとなっている。第二の型は、東ヨーロッパであって、そこでは民族運動が現在のものである。第三の型は、半植民地と植民地であって、そこではこの運動はかなりの程度まで未来のものである。(四九)

これは正しいかどうか？　ペ・キエフスキーは、この点にその批判の鋒先を向けるべきであった。しかし、彼は、どこに理論問題があるのかに気づいてさえいない！　われわれのテーゼの前述の命題（第六章における）を論駁しないかぎり――ところで、それは正しいのだから、論駁する

わけにはいかない――、彼の「時代」論は、剣を「ふりまわし」はするが、宙を切るようなものであることが、彼にはわかっていない。

彼は、論文の終りに、こう書いている。

「ヴェ・イリイーン〔レーニン〕の意見とは反対に、われわれは、西ヨーロッパ（！）諸国の大多数（！）にとって民族問題は解決されていないと考える。」……

そうだとすれば、フランス人、スペイン人、イギリス人、オランダ人、ドイツ人、イタリア人の民族運動は、どうやら、一七、一八、一九世紀に、またそれ以前に、終わっていないということになるが？　論文のはじめでは、「帝国主義時代」という概念がゆがめられて、あたかも民族運動が、西ヨーロッパの先進諸国においてだけではなく、全体として終わったかのように言われている。その同じ論文の終りでは、まさにその西ヨーロッパ諸国で「民族問題」は「解決されていない」と言明されている!!　これは混乱ではないだろうか？

西ヨーロッパ諸国では、民族運動は遠い過去のものとなっている。イギリス、フランス、ドイツなどでは、「祖国」はすでにその歌をうたいおわり、その歴史的な役割を果たしおえてしまった。すなわち、民族運動は、ここでは、進歩的なもの、新たな大衆を新しい経済的および政治的生活に引きあげるものをあたえることができない。これらの国で歴史の日程にのぼっているものは、封建制あるいは家父長制的野蛮状態から民族的進歩へ、文化的で、政治的に自由な祖国へ移ることではなく、命数のつきた、資本主義的に爛熟した「祖国」から社会主義へ移ることである。

東ヨーロッパでは事情は別である。たとえば、ウクライナ人やベロルシア人について、ここでは民族運動がまだ完了しておらず、母語とその母語による著作とをもつこと（これは、資本主義が完全に発展し、交換がどんな片隅の農民の家庭へも完全に入りこむのに必要な条件であり、またそうなるのにともなって現われる現象である）にたいする大衆の覚醒がここではまだ進行中であり、「祖国」はここではまだその歴史の歌をすっかりうたいおわってはいないということを否定するのは、自分を火星の住人だと空想している人間でもなければやれないことである。「祖国擁護」は、ここではまだ、抑圧民族にたいし、中世的制度にたいして民主主義を擁護し、母語を擁護し、政治的自由を擁護することでありうる。これに反して、今日、イギリス人、フランス人、ドイツ人、イタリア人が現在の戦争における祖国擁護を口にするのは、うそを言っているのである。というのは、彼らが実際に擁護しているのは、母語ではなく、自分たちの民族的発展の自由でもなく、奴隷所有者と

しての自分たちの権利であり、自国の植民地であり、他国における自国の金融資本の「勢力範囲」その他だからである。

半植民地と植民地では、民族運動は、歴史的に東ヨーロッパよりもさらに年が若い。

「高度に発展した諸国」と帝国主義時代という言葉はなににについてのものなのか、ロシアの——またロシアだけに限られないが——「特殊な」地位（ペ・キエフスキーの論文、第二章e節の標題）はどんな点にあるのか、どこで民族解放運動がいつわりの空文句であり、どこでそれが生きいきとした進歩的な現実であるのか——ペ・キエフスキーは、これらのことを絶対になにひとつ理解しなかったのである。

三　経済的分析とはなにか？

民族自決の反対者の議論の中心点は、一般に資本主義のもとでは、あるいは帝国主義のもとでは、民族自決は「実現不可能」であるということを引合いにだす点にある。「実現不可能」ということばは、しばしば、厳密に規定されない、多様な意味につかわれている。だから、われわれは自分のテーゼで、どんな理論的討論の場合にも不可欠なことを要求した。すなわち、どういう意味で「実現不可能」と言うのかを説明するように要求したのである。そして、質問を提出するにとどまらないで、われわれはそういう説明にとりかかった。一連の革命がなければ政治的に実現が困難である、または不可能であるという意味では、民主主義のすべての要求は、帝国主義のもとでは「実現不可能」である。

経済的に不可能という意味で自決が実現不可能だと言うのは、根本的にまちがっている。

われわれの命題は右のようなものであった。ここに理論上のくいちがいの中心点がある。すこしでもまじめな討論では、われわれの論敵はこの問題にすべての注意を向けるべきだった。

さて、この問題についてペ・キエフスキーがどう論じているかを見たまえ。

実現不可能ということを、政治的理由によって「実現が困難である」という意味に解釈することを、彼ははっきり拒否している。彼はこの問題に、はっきり経済的に不可能だという意味で答えている。

彼はこう書いている。

「これは、帝国主義のもとでの自決が、商品生産のもとでの労働貨幣と同じように実現不可能だということを

意味するであろうか？」そして、ペ・キエフスキーはこう答えている。「そうだ、意味する！　なぜなら、われわれが論じているのは、『帝国主義』と『民族自決』という二つの社会的カテゴリーのあいだにある論理的矛盾についてだからである。それは、ちょうど、労働貨幣と商品生産という二つの別のカテゴリーのあいだにある論理的矛盾と同じような論理的矛盾である。帝国主義は自決の否定である。だから、自決と帝国主義とを両立させることは、どんな手品師にもうまくいかないだろう。」

ペ・キエフスキーがわれわれに向けてはなっているこの「手品師」という憤然たることばがどんなに恐ろしかろうと、やはりわれわれは、経済的分析とはなにを意味するかを彼がまったく理解していないことを、彼に注意してやらなければならない。経済的分析であろうが、政治的分析であろうが、そのうちに「論理的矛盾」が——もちろん、論理的思考が正しくおこなわれているという条件のもとでは——あってはならない。だから、政治的分析でなしに、まさに経済的分析をあたえることが問題となっているときに、「論理的矛盾」一般を引合いにだすことは、まったく当をえていない。経済的なものも、政治的なものも、どちらも「社会的カテゴリー」に属している。したがって、ペ・キエフスキーは、はじめに断定的にまたはっきりと「そうだ、意味する」（すなわち、自決は、商品生産のもとでの労働貨幣と同じように、実現不可能である）と答えながら、実際には、問題の核心にはふれずにお茶をにごしてしまい、経済的分析をあたえなかったのである。

労働貨幣が商品生産のもとで実現不可能だということは、なにによって証明されるか？　経済的分析によってである。この分析は、あらゆる分析と同じように「論理的矛盾」を容認しないのであるが、それは、経済的カテゴリーを、しかも経済的カテゴリーだけを（「社会的」カテゴリー一般ではなく）とりあげて、それらから労働貨幣の不可能性という結論を引きだす。『資本論』の第一章では、どんな政治も、どんな政治形態も、どんな「社会的カテゴリー」一般も、論じられていない。分析は、経済的なものだけを、商品の交換、商品交換の発展だけをとりあげている。経済的分析は、——もちろん、「論理的」推論によって——商品生産のもとでは労働貨幣が実現不可能なことを示している。

ペ・キエフスキーは、経済的分析にとりかかろうという試みさえしていない！　その論文の最初の段落の最初の文句からわかるように、彼は、帝国主義の経済的本質と帝国主義の政治的諸傾向とを混同している。次にあげるのがその文句である。

「産業資本は、前資本主義的生産と商業＝貸付資本との総合であった。貸付資本は産業資本に奉仕していた。いまや資本主義はいろいろな形態の資本を克服し、資本の最高の、統一された型、すなわち金融資本が成立している。だから、この時代全体を金融資本の時代とよぶことができるし、それに適合したこの金融資本の対外政策の体系こそ帝国主義なのである。」

経済的には、この定義全体はなんの役にも立たない。正確な経済的カテゴリーのかわりに空語だけがある。しかし、われわれはいまこれについて詳しく論じることはできない。肝心な点は、ペ・キエフスキーが帝国主義を「対外政策の体系」と公言していることである。

これは、第一に、実質上、カウツキーのまちがった考えをまちがって繰りかえしたものである。

これは、第二に、帝国主義の純政治的な定義、もっぱら政治的な定義である。ペ・キエフスキーは、商品生産のもとで労働貨幣が実現不可能なのと「同じように」、民族自決も帝国主義のもとでは実現不可能である、すなわち経済的に実現不可能であると言明して、経済的分析をあたえることを約束しながら、帝国主義を「政策の体系」と定義するという手段で、この経済的分析をまぬかれようとしているのである！*

カウツキーは、左派との論争で、帝国主義は「対外政策」（すなわち領土の併合）「の体系にすぎず」、資本主義のある経済的段階、発展段階を帝国主義とよぶことはできない、と言明した。

カウツキーはまちがっている。ことばについての争いは、いうまでもなく、愚かなことである。帝国主義という「ことば」をあれこれの意味につかうのを禁止することはできない。しかし、討論をしようというのなら、概念を精密に解明しなければならない。

経済的には、帝国主義（あるいは金融資本の「時代」——ことばが問題なのではない）は、資本主義の最高の発

* こういう「論理的手口」をマルクスがどんなぶしつけなことばでよんだか、ペ・キエフスキーは知っているのだろうか？　われわれは、このぶしつけなことばをペ・キエフスキーに適用するものではけっしてないが、マルクスがそれを「ぺてん師の手口」とよんだことを、ことわっておかないわけにはいかない。すなわち、ある概念を定義するにあたって、まさに論争の的となっている当の事柄、まさにこれから立証すべき当の事柄を、勝手にその概念にふくめる、というやり方である。

繰りかえして言っておくが、われわれは、マルクスのぶしつけな表現をペ・キエフスキーに適用するものではない。われわれは、ただ彼の誤りの根源を明らかにしているだけである。〔この文章は、手稿では抹消されている。〕

展段階、すなわち、競争の自由に代わって独占が現われるほどに生産が大規模になった段階である。この点に帝国主義の経済的本質がある。独占は、トラスト、シンジケートその他にも、巨大銀行の全能にも、原料資源の買占めその他にも、銀行資本の集積等々にも、現われている。経済的独占に、すべての問題がある。

民主主義から政治的反動への転換が、新しい経済のうえに、独占資本主義（帝国主義は独占資本主義である）のうえに立つ政治的上部構造である。自由競争には民主主義が照応する。独占には政治的反動が照応する。「金融資本は自由ではなく、支配をめざす」とR・ヒルファディングは、その著『金融資本論』のなかで正当にも述べている。

政治一般から「対外政策」を切りはなすこと、まして対内政策に対外政策を対置することは、根本的に正しくない非マルクス主義的、非科学的な思想である。対外政策でも対内政策でも一様に、帝国主義は民主主義の破壊をめざし、反動をめざす。この意味では、帝国主義は民主主義一般、民主主義全体の「否定」であって、けっして民主主義的要求の一つ、すなわち民族自決だけを否定するものでないことは、争う余地がない。

帝国主義は、民主主義の「否定」であるから、民族問題における民主主義（すなわち民族自決）をも同じように「否定する」。「同じように」というのは、つまり、帝国主義は民族問題における民主主義の侵害をめざすということである。帝国主義のもとでは共和制、民兵、人民による官吏の選挙、等々の実現が（独占以前の資本主義にくらべて）いっそう困難であるのと同じ程度に、また同じ意味で、帝国主義のもとで民族問題における民主主義を実現することは、より困難である。「経済的に」実現不可能だなどということは、問題にならない。

ここでペ・キエフスキーを誤りにおとしいれたものには、おそらくなお一つの事情（経済的分析の諸要求を総じて理解していないことのほかに）があったのであろう。すなわち、俗物の見地からは、併合（すなわち他民族の地域をその住民の意思に反して編入すること、すなわち他民族自決を侵害すること）は、より広い経済的領域へ金融資本を「拡大」（膨張）させることと同意義と見なされる、という事情があったのであろう。

だが、俗物的な概念をつかって理論問題に取りくんではならない。

帝国主義は、経済的には、独占資本主義である。独占が完全であるためには、競争相手を国内市場から（その国家の市場から）排除するだけでなく、国外市場、全世界からも排除しなければならない。「金融資本の時代には」他の

国家内においてさえ競争を排除する経済的可能性があるだろうか？　もちろん、ある。この手段は、金融的従属であり、原料資源と、ついで競争相手のすべての企業とを買い占めることとである。

アメリカのトラストは、帝国主義あるいは独占資本主義の経済の最高の表現である。競争相手を排除するためには、トラストは経済的手段に限ることなく、たえず政治的手段に、それどころか刑事犯罪的な手段にさえうったえる。しかし、純経済的な闘争方法では、トラストの独占は経済的に実現不可能であると考えるならば、それはとんでもないまちがいであろう。それどころか、現実は、このことが「実現可能」であることを、一歩ごとに証明している。すなわち、トラストは、銀行の手を借りて競争相手の信用を傷つける（トラストの支配者は、同時に銀行の支配者である――株式の買占め）。トラストは、競争相手への材料の供給を阻害する（トラストの支配者は、同時に鉄道の支配者である――株式の買占め）。トラストは、競争相手を没落させてその企業、その原料資源（鉱山、土地等）を買い占めるために、ある期間、原価以下に価格を切りさげ、そのために数百万の金を費やす。

これが、トラストの力とその拡大の純経済的な分析である。これが、拡大への純経済的な道である。――企業、経営、原料資源の買占め。

ある国の大金融資本は、政治的に独立している他の一国の競争相手をも、いつでも買い占めることができるし、またいつもそうしている。経済的には、このことは完全に実現可能である。経済的「併合」は、政治的な併合がなくとも完全に「実現可能」であり、これはまたたえず見うけられることである。帝国主義についての文献では、たとえば、アルゼンチンは事実上イギリスの「貿易植民地」であり、ポルトガルは事実上イギリスの「属国」であるなどという指摘に、一歩ごとにぶつかる。これは、ほんとうのことである。というのは、イギリスの銀行への経済的従属、イギリスへの負債、イギリスによる現地の鉄道、鉱山、土地その他の買占め、――これらすべては、前記の諸国の政治的独立を侵害することなしに、経済的な意味で、これらの国国をイギリスに「併合」しているからである。

民族自決というのは民族の政治的独立のことである。帝国主義は、政治的独立を侵害することにつとめる。なぜなら、政治的併合のもとでは、経済的併合が、しばしばいっそう都合よく、いっそう安あがりに（官吏を買収したり、利権を獲得したり、有利な法律を通過させたり等々することが、いっそう容易である）、いっそう便利に、いっそう支障なくおこなわれるからである。そして、このことは、

帝国主義が民主主義一般を寡頭制におきかえようと努力するのと、まったく同じである。しかし、帝国主義のもとでは自決は経済的に「実現不可能」であると説くのは、まったくたわけたことである。

ペ・キエフスキーは、ドイツ語で「書生ふうの」言いまわし——すなわち、学生の酒宴でよくつかわれる（そして、そこでは自然な）学生流の愚かしい、大ざっぱな言いまわし——とよばれている、きわめてお手軽な、皮相的なやり方で、理論上の困難を回避している。以下がその見本である。彼はこう書いている。

「普通選挙権、八時間労働日、いな共和制さえ、論理的には帝国主義と両立する。もっとも、これらのものは、断じて帝国主義の気にいる（!!）ものではなく、したがって、これらを実現することは極度に困難にされている。」

共和制は帝国主義の気にいらない、という書生ふうの言いまわし——愉快なことばが学問上の題材に魅力を添えることも、ときにはあるものだ！——には、われわれはなにも反対はしない。ただし、まじめな問題を論じるさいには、こうしたことばのほかに、さらに概念の経済的および政治的な分析があるとしてのことである。ペ・キエフスキーの場合には、書生ことばがそのような分析にとって代わり、分析欠如をおおいかくしている。

「共和制は帝国主義の気にいらない」ということは、なにを意味するか？ また、なぜそうなのか？

共和制は、資本主義社会のうえに立つ政治的上部構造の可能な形態の一つであり、しかも、今日の諸条件のもとでは、最も民主主義的な形態である。共和制は帝国主義の「気にいらない」と述べることは、帝国主義と民主主義とのあいだに矛盾がある、と述べることである。われわれのこの結論がペ・キエフスキーの「気にいらない」こと、「断じて気にいらない」ことさえ、大いにありそうであるが、それでも、この結論は争う余地のないものである。

そのさきにすすもう。帝国主義と民主主義とのあいだのこの矛盾はどういう種類のものであろうか？ 論理的なものか、それとも非論理的なものか？ ペ・キエフスキーは、「論理的」ということばを考えもせずにつかっている。だから、このことばが、この場合、自分で論じはじめたまさにその問題を（読者の目と頭脳からも、また筆者の目と頭脳からも）隠すのに役だっていることに、気づかないのである！ その問題というのは、経済と政治の関係、帝国主義の経済的諸条件および経済的内容と、ある一つの政治形態との関係である。人間の議論のうちに見られるあらゆる「矛盾」は、論理的矛盾である。これは空虚な同語反復で

ある。ペ・キエフスキーは、この同語反復を手段として、問題の核心を回避している。その問題とは、この「論理的」矛盾が、(一)二つの経済的現象または命題のあいだにあるのか？(二)あるいは、二つの政治的現象または命題のあいだにあるのか？(三)あるいは、経済的現象または命題と、政治的現象または命題とのあいだにあるのか？という問題である。

あれこれの政治形態のもとで経済的に実現不可能か、それとも実現可能か、という問題が提出された以上、核心はまさにこの点にあるのではないのか！

もし、ペ・キエフスキーがこの核心を回避しなかったならば、おそらく彼は、帝国主義と共和制とのあいだの矛盾が、最新の資本主義（すなわち独占資本主義）の経済と政治的民主主義一般とのあいだの矛盾であることを見てとったであろう。というのは、大きな、根本的な民主主義的方策（人民による官吏または将校の選挙、結社と集会の最も完全な自由、等々）のどれであれ、共和制よりも、帝国主義と矛盾することがより少ない（そう言いたければ、帝国主義により多く「気にいる」）ということを、ペ・キエフスキーはけっして立証できないだろうからである。

ここにあるのは、まさにわれわれがテーゼのなかで主張したその命題だということになる。すなわち、帝国主義は、一般に政治的民主主義全体と矛盾し、「論理的」に矛盾している、ということである。ペ・キエフスキーには、われわれのこの命題が「気にいらない」。それは、この命題が彼の非論理的な構成を破壊するからである。しかし、仕方がないではないか？じっさい、ある命題を反駁しようとしているかのようにふるまいながら、そのじつ、「共和制は帝国主義の気にいらない」という言いまわしをつかって、まさにその命題をこっそりもちだすようなことを、受けいれるべきなのか？

そのさきにすすもう。なぜ、共和制は帝国主義の気にいらないのであろうか？また帝国主義はどのようにしてその経済を共和制と「両立させている」のであろうか？

ペ・キエフスキーはこのことを考えてみなかった。われわれは、エンゲルスの次のことばに彼の注意をうながしたい。そこで問題にされているのは民主的共和制である。問題はこう出されている。富は、この統治形態のもとで支配できるか？すなわち、まさに経済と政治のあいだの「矛盾」の問題である。

エンゲルスはこう答えている。「……民主的共和制は、公式には、もはや」（市民のあいだの）「財産の差をまったく問題にしない。ここでは富はその権力を間接に、しかしそうであるだけにいっそう確実に、行使する。これは、一

方では、直接に官吏を買収するという形でなされる。」「その典型的な見本はアメリカである。[4]」「他方では、政府と取引所の同盟の形でなされる。……」

これが、資本主義のもとでの民主主義の「実現可能性」の問題にかんする経済的分析の手本である。そして、帝国主義のもとでの自決の「実現可能性」の問題は、右の問題の一部分なのである！

民主的共和制は、「公式には」富者と貧者とを同一視するから、「論理的には」資本主義と矛盾している。これは、経済構造と政治的上部構造とのあいだの矛盾である。共和制と帝国主義とのあいだにも同じ矛盾があるが、独占が自由競争にとって代わったことが、あらゆる政治的自由の実現をいっそう「困難にする」ため、この矛盾は深まり、または倍加する。

資本主義はどのようにして民主主義と両立するか？　資本の全能を間接に実現することによってである！　このための経済的手段は二つある。（一）直接の買収、（二）政府と取引所との同盟。（われわれのテーゼでは、このことは次のことばで表現されている。金融資本は、ブルジョア体制のもとでは「どんな政府や官吏をも自由に買い取り、買収する[5]」。）

商品生産、ブルジョアジー、貨幣の権力が支配しているかぎり、買収（直接の、または取引所をつうじての）は、どんな政治形態のもとでも、どんな民主主義のもとでも、「実現可能」である。

そこで、こういう質問が生まれる。帝国主義が資本主義にとって代わった場合、すなわち、独占資本主義が独占以前の資本主義にとって代わった場合に、いま問題にしている点でどういう変化が起こるであろうか？

取引所の権力が強化されるだけのことである！　なぜなら、金融資本とは、独占にまで成長して銀行資本と融合するにいたった巨大産業資本だからである。大銀行は取引所と融合し、これを併呑する。（帝国主義にかんする文献のなかでは取引所の役割の低下のことが述べられているが、それは、すべての巨大銀行そのものが取引所である、という意味でのみ、言われているのである。）

さらに、「富」一般にとって、買収と取引所を手段としてどんな民主的共和制をも支配することが、完全に実現可能であるとすれば、こっけいな「論理的矛盾」におちいることなしに、どうしてペ・キエフスキーは、トラストや数十億の金を運転する銀行の巨大な富が、他の共和国、すなわち政治的に独立した共和国にたいして金融資本の権力を「実現する」ことができないと、主張できるであろうか？

なんだって？　他の国家の官吏を買収することは「実現

不可能」だというのか？　また、「政府と取引所との同盟」というのは、自国政府とだけの同盟だというのか？

＊
＊＊

以上で読者もおわかりのように、もつれを解きほぐし、平易に説明するためには、一〇行の混乱にたいして約一〇ページが必要なのである。ペ・キエフスキー——彼には、混乱のない議論は文字どおり一つもない！——の一つひとつの議論を、いまのように詳しく検討するわけにはいかない！　それにまた、主要な点は検討ずみであるから、そうする必要もない。残りの点は、手みじかに述べることにする。

四　ノルウェーの実例

ノルウェーは、極度に野ばなしにされた帝国主義の時代に、一九〇五年に、実現不可能と称される自決権を「実現」した。だから、「実現不可能」を説くことは、理論的に背理であるばかりでなく、こっけいでもある。

ペ・キエフスキーは、これを論駁しようとして、憤然としてわれわれに「純理主義者」という悪名をきせている。（純理主義者がこれになんのかかわりがあるのか？　純理主義者は、論議、しかも抽象的な論議だけにとどまるものであるが、われわれはきわめて具体的な事実を示したではないか！　ペ・キエフスキーは、「純理主義者」という外国語を……なるべくおだやかに言うには、どう言ったらいいか？……「うまく」つかっているではないか？　ちょうどその論文のはじめに、「抽出的」ということばをつかって、自分の考えを「抽出的に」提出しているのと同じように。）

ペ・キエフスキーは、われわれが「現象の外見を重視して、真の核心を重視しない」と言って、非難している。では、真の核心というものを拝見しよう。

反駁は、実例で始まっている。トラスト取締法が公布されたという事実は、トラストの禁止が実現不可能だということを証明するものではない、と。もっともである。ただ、実例がまずいだけである。なぜなら、この実例は、ペ・キエフスキーの主張に反するものであるから。法律は政治的方策であり、政策である。どんな政治的方策をもってしても、経済を禁止することはできない。ポーランドの政治形態がどのようなものであれ、それが帝制ロシアまたはドイツの一部となるにせよ、あるいは自治地域となるにせよ、あるいは政治的に独立の国家となるにせよ、それによっては、帝国主義諸大国の金融資本にたいするポーランドの従

属や、この資本による同国の企業の株式の買占めを禁止することも、廃止することもできない。

一九〇五年に「実現された」ノルウェーの独立は、政治的な独立にすぎない。ノルウェーは、経済的独立を企てもしなかったし、またそれにふれることもできなかった。われわれのテーゼが述べているのはまさにこのことである。われわれが指摘したのは、まさに、自決が政治だけにかんするものであり、したがって経済的な実現不可能性の問題は、提起することさえまちがいであるということであった。ところが、ペ・キエフスキーは、政治的禁止が経済にたいして無力なことを示す実例をあげて、われわれを「反駁」している！　みごとな「反駁」だ！

さらに、

「小企業が大企業に勝利した実例を一つまたは多数あげても、資本主義発展の総過程が生産の集積と集中をともなうというマルクスの正しいテーゼを反駁するに足りない」と言う。

この論拠もまた、論争の真の核心から注意（読者と筆者の）をそらすために選びだされたまずい実例からなっている。

われわれのテーゼは、資本主義のもとで労働貨幣が実現不可能であるのと同じ意味で、自決が経済的に実現不可能だと言うのはまちがいだ、と述べている。このような実現可能性の「実例」は、一つだってありえない。ペ・キエフスキーは、この点にかんしてはわれわれが正しいことを暗黙のうちに認めているのである。なぜなら、彼は、「実現不可能」ということに違った解釈をあたえることに、とりかかっているからである。

なぜ、彼はあからさまにそうしないのか？　なぜ、自分のテーゼを次のように公然と、また正確に定式化しないのか？「自決は、資本主義のもとでは、経済的可能性の意味で実現不可能であって、発展に矛盾するものであり、したがって、反動的であるか、あるいは例外にすぎない」と。

それは、反対テーゼを公然と定式化すると、たちまちこの筆者の正体が暴露されるからであって、そこで、彼が身を隠すことが必要なのである。

経済的集積の法則、小規模生産にたいする大規模生産の勝利の法則は、わが党の綱領によっても、エルフルト綱領によっても、承認されている。だが、政治的あるいは国家的集積の法則はどこでも承認されていない事実を、ペ・キエフスキーは隠している。もしそれが同じような法則であるなら、またはそれもまた法則であるなら、なぜペ・キエフスキーはその法則を叙述して、わが党の綱領を補足する

ように提案しないのか？　この新しい国家的集積の法則、実践的な意義をもっている法則——というのは、それはわれわれの綱領からまちがった結論を取りのぞいてくれるだろうから——を発見したのに、われわれをまずい、不完全な綱領をもったままにほうっておくことは、彼として正しいやり方であろうか？

　ペ・キエフスキーはこの法則を全然定式化していないし、われわれの綱領を補足するように提案もしていない。なぜなら、そうすれば自分がもの笑いになることを、漠然と感じているからである。もし、この見地が明るみにだされ、大規模生産による小規模生産の駆逐の法則と平行して、大国家による小国家の駆逐の「法則」（まえの法則と結びついた、またはそれとならんでおこなわれている）が提出されるならば、みながこの奇妙な「帝国主義的経済主義」に大笑いすることだろう！

　このことを明らかにするために、ペ・キエフスキーにたいして一つの質問を提出するだけにとどめよう。括弧なしの経済学者が現代のトラストまたは大銀行の「分解」について語らないのは、このような分解の可能性、分解の実現可能性について語らないのは、いったいなぜなのか？　括弧つきの「帝国主義的経済主義者」までが、大国家の分解の可能性と実現可能性を、しかも、分解一般のそれだけでなく、たとえばロシアからの「小民族」の分離の可能性と実現可能性をも、承認せざるをえない（ペ・キエフスキーの論文の第二章e節）のは（この点を注意せよ！）、いったいなぜなのか？

　最後に、この筆者がどんなに羽目をはずしたことまで口ばしっているかを、いっそう明瞭に説明し、彼に警告をあたえるために、次の点を指摘しておこう。大規模生産による小規模生産の駆逐の法則を、われわれはみな公然とかかげており、「小企業が大企業にたいして勝利した」個々の「実例」を反動的現象とよぶことをはばかる者は、ひとりもいない。ノルウェーがスウェーデンから分離したことを反動的なものとよぶ決心をした者は、いまのところ、自決反対論者のうちにひとりもいない。それでも、われわれは、一九一四年以来この問題を文献のうえでとりあげているのだが。

　たとえば、手動機械がまだ残っているときには、大規模生産は実現不可能である。機械制工場が手作業の仕事場に「分解する」などと考えることは、まったくばかげている。大帝国をめざす帝国主義的傾向は、自主的な、そして政治的な意味で独立の諸国家の帝国主義的同盟の形でも、完全に実現可能であり、また実際にしばしば実現されている。このような同盟は、二国の金融資本の経済的癒着の形で可

能であり、また現に見うけられるばかりでなく、帝国主義戦争における軍事的「協力」の形でも可能であり、また現に見うけられる。民族闘争、民族的蜂起、民族的分離は、帝国主義のもとでまったく「実現可能」であり、また実際に見うけられており、強まってさえいる。なぜなら、帝国主義は、資本主義の発展と住民大衆のあいだの民主主義的傾向の成長とを阻止するものではなく、これらの民主主義的志向とトラストの反民主主義的傾向とのあいだの敵対を激化させるからである。

ただ「帝国主義的経済主義」の見地、すなわち戯画的なマルクス主義の見地からみる場合にだけ、たとえば、次のような帝国主義的政治の独特の現象を無視することができるのである。すなわち、一方では、政治的に独立した小国家をどのようにして金融上の結びつきと経済的利益との力によって大国間の闘争に引きいれることができるかという実例（イギリスとポルトガル）を、現在の帝国主義戦争がわれわれに示している。他方では、自分たちの帝国主義的「庇護者」にくらべてはるかに無力な（経済的にも政治的にも）弱小民族にたいしてくわえられた民主主義の侵害が、蜂起を呼びおこしたり（アイルランド）、敵方への何個連隊もの寝がえり（チェコ人）を引きおこしたりしている。このような事情のもとでは、「自国の」軍事作戦をそこなう危険をおかさないために、個々の弱小民族に、国家的独立をもふくめて、できるだけ多くの民主主義的自由をあたえることが、金融資本の見地からみて「実現可能」なばかりでなく、ときにはトラストにとって、トラストの帝国主義的政策にとって、トラストの帝国主義戦争にとって、直接に有利でさえある。政治的関係や戦略上の関係の特異性を忘れてしまって、一つおぼえの「帝国主義」ということばだけをところきらわず繰りかえすことは、けっしてマルクス主義ではない。

ノルウェーについては、ペ・キエフスキーは、第一に、同国は「つねに独立した国家であった」と、われわれに知らせている。これはまちがいである。そして、こうしたまちがいは、この筆者の書生ふう(ブルショ－ゼ)の無頓者と、政治問題にたいする不注意のためだというほかには、説明のしようがない。ノルウェーは、一九〇五年までは独立した国家ではなかった。同国はきわめて広範な自治をもっていたにすぎなかった。スウェーデンは、ノルウェーが同国から分離したのちにはじめて、ノルウェーの国家的独立を認めた。もしノルウェーが「つねに独立した国家であった」とすれば、スウェーデン政府は、一九〇五年一〇月二六日に、諸外国にむかって、今後ノルウェーを独立国として承認する、と通告するはずはなかったであろう。

第二に、ペ・キエフスキーは、ノルウェーがその目を西方に向けていたのに、スウェーデンのほうはその目を東に向けていたこと、一方の国では主としてイギリスの金融資本が、他方の国では主としてドイツの金融資本が「活動していた」こと等々を証明するために、いくつかの抜粋を引いている。そして、そこからもったいぶった結論が引きだされる。「この実例」（ノルウェーの）「は、そっくりわれわれの図式におさまるものである」と。

これこそ、「帝国主義的経済主義」の論理の見本である！　われわれのテーゼでは、金融資本は「どんな」国をも、「たとえ独立国であろうと」支配できること、だから、自決は金融資本の見地からみて「実現不可能」だとするすべての議論はまったくの混乱であることが、述べられている。ところが、そのわれわれにむかって、ノルウェーで分離以前にも、分離以後にも外国の金融資本が果たしてきた役割にかんするわれわれの命題を裏書きする資料をあげながら、まるでわれわれを論駁しているかのようなふりをするのである！！

金融資本についてしゃべり、それを理由として政治問題を忘れる――これは、はたして政治を論じるというものだろうか？

いや、そうではない。「経済主義」が論理上の誤りをおかしたからといって、政治問題は消えてなくなりはしなかった。ノルウェーでは、分離以前にも、以後にもイギリスの金融資本が「活動していた」。ポーランドでは、同国がロシアから分離する以前にもドイツの金融資本が「活動していた」し、また、それは、ポーランドの政治状態がどうなろうと「活動する」であろう。これは、まったくのイロハなので、繰りかえすのもきまりがわるいくらいだが、イロハを忘れているのでは、どうしようがあろう？

そのために、ノルウェーのあれこれの地位、同国のスウェーデンへの所属、分離問題が起こったときの労働者の態度といった、政治問題が消えてなくなるだろうか？

これらの問題は「経済主義者」にこっぴどい打撃をあたえるので、ペ・キエフスキーはこれを避けた。しかし、これらの問題は、実生活のなかで提起されていたし、また現に提起されている。ノルウェーの分離権を認めないスウェーデンの労働者は社会民主主義者でありうるかという問題が、実生活のなかで提起されたのである。いや、社会民主主義者ではありえない。

スウェーデンの貴族は、そして僧侶もまた、ノルウェーにたいする戦争に賛成であった。この事実は、ペ・キエフスキーがノルウェー国民の歴史のなかでそれを読み「忘れ」たからといって、消えてなくなりはしなかった。スウ

ェーデンの労働者は、分離に反対投票するようにノルウェー人に忠告したとしても、ひきつづき社会民主主義者であることができた（ノルウェーにおける分離問題についての人民投票は一九〇五年八月一三日におこなわれ、分離賛成が三六万八二〇〇票、分離反対が一八四票であって、しかも投票権をもった国民の約八〇％が投票に参加した）。しかし、スウェーデン人をぬきにして、スウェーデン人の意思とは無関係に、自分でこの問題を決定する権利がノルウェー人にあることを、スウェーデンの労働者がスウェーデンの貴族やブルジョアジーと同じように否定したとするならば、そのスウェーデンの労働者は、社会排外主義者であり、社会民主党内においておけないごろつきであろう。

これこそ、わが党の綱領の第九項の適用であるが、わが「帝国主義的経済主義者」は、この条項をとびこえようとした。諸君！　排外主義の手中におちいらずに、これをとびこえることはできない！

ところで、ノルウェーの労働者はどうか？　彼らは、国際主義の見地からみて、分離に賛成の投票をする義務があったであろうか？　けっして、そんなことはない。反対投票しても、彼らはひきつづき社会民主主義者であることができた。彼らは、ノルウェーの分離の自由に反対論をとなえるような黒百人組(註)的なスウェーデンの労働者に、同志として手をさしのべる場合にだけ、社会民主党員たる自分の義務にそむくことになろう。

一部の人間は、ノルウェーの労働者とスウェーデンの労働者との地位のこの基本的な差異を見ようとしない。しかし、われわれが彼らの鼻さきにつきつけているこの具体的なうえにも具体的な政治問題を、彼らが回避するのは、自分で自分を摘発するものである。彼らは、口をつぐみ、言いのがれをし、それによって陣地を明けわたしている。

「ノルウェー」問題がロシアで生じる可能性があることを証明するために、われわれは、純軍事的・戦略的性質のある種の条件のもとでは今日でも独立のポーランド国家がまったく実現可能であるというテーゼを、わざわざ提出したのである。ペ・キエフスキーは「討論」を希望しながら――沈黙している!!

つけくわえて言っておこう。フィンランドも、現在の帝国主義戦争がある種の結末（たとえば、スウェーデンがドイツ人に味方し、そしてドイツ人がなかばの勝利をえるといった）をとるときには、純軍事的・戦略的考慮にもとづいて、金融資本の操作の「実現可能性」をなにひとつそこなうことなしに、またフィンランドの鉄道その他の企業の株式の買占めを「実現不可能」にすることなしに、独立の国家となることが完全に可能である。*

＊　現在の戦争がある結末をとる場合に、帝国主義とその力の発展条件をすこしもそこなうことなしに――それどころか、金融資本の影響力、結びつき、圧力が強まりながら――、ヨーロッパにポーランド、フィンランド等々の新しい国家が形成されることが完全に「実現可能」であるとすれば、戦争がそれと違った結末をとる場合には、ハンガリー、チェコその他の新しい国家の形成が同じように「実現可能」である。イギリスの帝国主義者は、自国が勝利した場合を見こして、もういまからこの第二の結末の予定を立てている。帝国主義時代は、諸民族の政治的独立への志向をも、世界の帝国主義的相互関係の枠内でのこれらの志向の「実現可能性」をも、なくならせはしない。だが、この枠のそとでは、ロシアにおける共和制も、また世界のどこであろうと、およそいかなる大がかりな民主主義的改造も、一連の革命がなければ「実現不可能」であり、社会主義がなければ不安定である。ペ・キエフスキーは、民主主義にたいする帝国主義の関係を、まったく、まったく理解しなかったのだ。

ペ・キエフスキーは、彼の全「議論」の目だった特徴である次のような仰々しい文句の助けを借りて彼にとって不愉快な政治問題からのがれている。……「いつなんどき」……（第一章C節の終りでは文字どおりこうなっている）……「ダモクレスの剣[五]が落下して、『独立した』仕事場の存在」（これは、小国のスウェーデンとノルウェーを「ほのめかした」ものである）「を中断させるかもしれない」と。

これが、きっと、正真正銘のマルクス主義というものなのだろう。独立のノルウェー国家――それがスウェーデンから分離したことを、スウェーデン政府は「革命的な措置」とよんだものであるが――はわずか一〇年そこそこ存在しているにすぎない、と。だが、われわれがヒルファディングの『金融資本論』を読んで、小国家は「いつなんどき」――どうせ言う以上は、いっそずばりと言おう！――消えてなくなるかもしれないというふうに、それを「理解する」とすれば、前記の事実から出てくる政治問題を検討する値うちがあるだろうか？　また、われわれがマルクス主義をゆがめて「経済主義」にしてしまい、自分の政策を、真にロシア的な排外主義者の演説のむしかえしにしてしまったことに、注意をうながす値うちがあるだろうか？

一九〇五年に共和制を目標にしたロシアの労働者は、たぶん、ひどいあやまちをおかしたものなのだろう。当時すでにフランスでも、イギリスその他の国でも、金融資本が共和制に反対して動員されていたではないか、そして、かりに共和制が生まれたとしても、金融資本が「いつなんどき」「ダモクレスの剣」で共和制をなぎたおしたかもしれないではないか！

⁂

「民族自決の要求は、……最小限綱領にあってはユートピア的なものではない。この要求は、それが実現されても社会の発展が阻止されないという点で、この発展に矛盾するものではない。」このマルトフからの引用文にたいして、ペ・キエフスキーは、彼の論文のうちのノルウェーについての「抜粋」をのせたその同じ節で反論をくわえている。ところが、これらの「抜粋」は、ノルウェーの「自決」と分離が一般に発展をも、とくに金融資本の操作の増大をも、イギリス人のノルウェー買占めをも、阻止しなかったという周知の事実を、かさねて証明するものなのだ！

われわれのあいだには、たとえば一九〇八―一九一〇年当時のアレクシンスキーのようなボリシェヴィキがたびたびいた。この人たちは、まさにマルトフが正論を吐いているそのときに、これと論争したものであった！　こんな「同盟者」はまっぴらごめんである！

五　「一元論と二元論」について

ペ・キエフスキーはわれわれが「要求を二元的に解釈している」と非難して、こう書いている。

「インタナショナルの一元的な行動は二元的な宣伝によっておきかえられている。」

このことばは、まったくマルクス主義的、唯物論的に聞こえる。単一の行動が「二元的な」宣伝に対置されているのである。だが、遺憾ながら、詳しく調べてみると、これは、デューリングの「一元論」と同じような、ことばのうえの「一元論」だと言わなければならない。エンゲルスは、デューリングの「一元論」に反対してこう書いた。「靴ブラシを哺乳類という統一のもとに総括してみても、そのために靴ブラシに乳腺ができてくるわけではけっしてない。」(三六)

つまり、客観的現実のうちで統一的である事物、特性、現象、行動をしか、「統一的」とよぶことはできないのである。この筆者は、まさにこの「瑣事」を忘れたのである！

彼がわれわれの「二元論」としているのは、まず第一に、われわれが被抑圧民族の労働者に要求するものが――ここでは民族問題だけが問題になっている――、抑圧民族の労働者に要求するものと違っていることである。

ここでのペ・キエフスキーの「一元論」がはたしてデューリングの「一元論」でないのか、それを吟味するためには、客観的現実ではどういう事情になっているかを見なければならない。

抑圧民族の労働者の現実の地位と、被抑圧民族の労働者

のそれとは、民族問題の見地からみて同一であろうか？

いや、同一ではない。

(一)　経済上の相違は、抑圧民族のブルジョアが被抑圧民族の労働者をいつも二倍よけいにしぼりあげて手にいれている超過利潤から、抑圧国の労働者階級の一部がおこぼれをもらっていることである。そのうえ、経済的資料によると、抑圧民族の労働者のほうが、被抑圧民族の労働者よりも、「職長」に昇進する者の割合が大きいこと——すなわち、労働者階級の貴族に出世する者の割合が大きいことがわかる。* これは事実である、抑圧民族の労働者は、被抑圧民族の労働者（と住民大衆）を略奪するうえで、ある程度、自国のブルジョアジーの共犯者である。

* たとえば、アメリカにおける移民と労働者階級の状態にかんするグールヴィチの英文の著書（『移民と労働』）を見よ。

(二)　政治上の相違は、抑圧民族の労働者が、被抑圧民族の労働者にくらべて、政治生活の多くの分野で特権的な地位を占めていることにある。

(三)　思想上または精神上の相違は、抑圧民族の労働者が、学校でも実生活でも、いつでも被抑圧民族の労働者を侮蔑または軽蔑する精神で教育されていることである。たとえば、大ロシア人のあいだで教育されるか、生活してきた大ロシア人なら、だれでもこのことを経験している。

こうして、客観的現実では、全線にわたって区別がある。すなわち、個々人の意思や意識にかかわらない客観的世界における「二元論」がある。

こうなると、「インタナショナルの一元的行動」というペ・キエフスキーのことばを、われわれはどう取りあつかえばよいのか？

これは仰々しい空文句であり、それだけのことである。実生活で抑圧民族に属する者と被抑圧民族に属する者とに分裂している労働者たちからなっているインタナショナルの行動が統一的であるためには、前者の場合と後者の場合とでは、宣伝を同一のやり方でおこなってはならない——真の（デューリング式でない）「一元論」の見地、すなわちマルクスの唯物論の見地からは、まさにこのように論じなければならない！

その実例は、というのか？　われわれはすでに（二年以上もまえに、合法出版物で！）ノルウェーについて実例をあげておいたが、だれもわれわれを論駁しようとはしなかった。この具体的な、実生活からとってきた事例においては、ノルウェーとスウェーデンの労働者の行動は、「一元的」であり、統一的であり、国際主義的であったが、それはもっぱら、スウェーデンの労働者が無条件にノルウェーの分離の自由を主張し、他方、ノルウェーの労働者が条件

的に。この分離の問題を提起したからであり、もっぱらそのかぎりにおいてである。もし、スウェーデンの労働者が無条件にノルウェー人の分離の自由に味方しなかったならば、彼らは排外主義者になり、力づくで、戦争によってノルウェーを「引きとめておく」ことを望むスウェーデンの地主の排外主義の共犯者だということになったであろう。もし、ノルウェーの労働者が分離の問題を条件的に提起しなかったならば、すなわち、社会民主党員であっても分離に反対して投票し、宣伝してもよい、というふうに提起しなかったならば、ノルウェーの労働者は、国際主義者の義務にそむき、狭い、ブルジョア的なノルウェー的民族主義におちいったであろう。なぜか？　なぜなら、分離をおこなったのはプロレタリアートではなく、ブルジョアジーであったからである！　なぜなら、ノルウェーのブルジョアジーは（どの国のブルジョアジーとも同様に）、いつでも自国と「他」国の労働者のあいだを分裂させようと努力しているからである！　なぜなら、どんな民主主義的要求（自決をもふくめて）も、自覚した労働者にとっては、社会主義の最高の利益に従属しているからである！　たとえば、スウェーデンからのノルウェーの分離が、たしかに、あるいはたぶんドイツとイギリスの戦争を意味するような場合には、ノルウェーの労働者は、その理由によって分離に反対しなければならない。また、スウェーデンの労働者が、そのような場合に、社会主義者でなくなることなしに分離反対の扇動をおこなう権利と可能性とをもつのは、彼らが、ノルウェーの分離の自由のために、スウェーデン政府に反対して、系統的に、首尾一貫して、不断に闘争してきた場合に限られる。さもなければ、ノルウェーの労働者と人民は、スウェーデンの労働者の忠告が本心から出たものであるとは信じないだろうし、また信じることもできないであろう。

自決の反対者の不幸のすべては、生きた実生活からとってきた具体的な実例を、せめて一つでも徹底的に検討することを恐れ、死んだ抽象でお茶をにごしているところからきている。新しいポーランド国家は、純然たる軍事上、戦略上の諸条件が一定の形で組みあわされるならば、今日でも完全に「実現可能」[三]であるという、テーゼのなかのわれわれの具体的な指摘は、いまなおポーランド人からも、ペ・キエフスキーからも、反対をうけていない。だが、われわれの正しさをこのように暗黙のうちに認めることからどういう結論が出てくるかを、だれも考えようとはしなかった。ところで、このことからは明らかに次のような結論が出てくる。すなわち、国際主義者の宣伝は、もしそれがロシア人をも、ポーランド人をも、「統一的な行動」をとるように教育しようと思うなら、ロシア人のあいだとポー

ランド人のあいだとでは同一なものではありえない、ということである。大ロシア人（とドイツ人）労働者は、無条件にポーランドの分離の自由に味方する義務があるであろう。なぜなら、そうしないならば、彼らは実際上、今日では、ニコライ二世またはヒンデンブルクの従僕になるからである。ポーランドの労働者は、もっぱら条件的にのみ、分離に味方することができるであろう。なぜなら、どれかある帝国主義的ブルジョアジーの勝利に思惑をかける（「ポーランドの」フラキがやっているように）ことは、そのブルジョアジーの従僕になることを意味しているからである。インタナショナルの「一元的な行動」の条件であるこの相違を理解しないのは、たとえば、モスクワ付近でツァーリの軍隊にたいして「一元的に行動する」ためには、革命軍はニージニ－ノヴゴロドからは西進し、スモレンスクからは東進しなければならないことを理解しないのと同じである。

＊＊＊

第二に、デューリング式一元論のこの新しい信奉者は、われわれが社会変革にさいして「いろいろな国のインタナショナル支部をきわめて緊密に組織的に結束させる」ことに心をくばっていない、と言って非難している。

ペ・キエフスキーは次のように書いている。――社会主義のもとでは自決はなくなる。なぜなら、そのときには国家がなくなるからである、と。これは、われわれにたいする反駁のつもりで書いたことなのだ！　しかし、われわれのテーゼでは、三行で――われわれのテーゼの第一章の最後の三行で――「民主主義もまた国家の一形態であって、国家が消滅するときには消滅しなければならない」[六]と、正確に、明白に述べている。ほかならぬこの真理を、――いうまでもなく、われわれを「反駁」するために！――ペ・キエフスキーは、彼の論文の（第一章の）r節の数ページにわたって繰りかえしている、しかも、歪曲しながら繰りかえしている。彼はこう書いている。――「われわれは、社会主義制度とは、厳格に民主主義的に（!!?）中央集権化された経済制度であり、ここでは、住民のある部分が他の部分を支配する機関である国家は消滅するものと考えているし、またつねにそう考えてきた」と。これは混乱である。なぜなら、民主主義もまた「住民のある部分が他の部分を」支配するものであり、これもまた国家だからである。社会主義が勝利したのちに国家が死滅するというのはどういうことか、この過程の条件はどのようなものかを、この筆者は明らかに理解しなかったのである。

しかし、主要な点は、社会革命の時代にかんする彼の

「反論」である。この筆者は、「自決の経文読み」という恐ろしいおどし文句でわれわれをののしったのち、こう述べている！「われわれは、この過程（社会変革）を、ブルジョア（!!）国家の国境を破壊し、国境標を取りのぞき」（「国境の破壊」とは無関係に？）、「民族的共同体を爆破し（!!）、階級的共同体を打ちたてるすべての（!!）国のプロレタリアの統一行動と考えている。」

「経文読み」をさばく峻烈な裁判官の気にさわってはこまるが、ここには多くの空文句はあるが、「思想」はまったく見あたらない。

地球上の国々の大多数と人口の大多数が今日までまだ資本主義的発展段階にさえ達していないか、あるいはこの段階のはじめにあるにすぎないという簡単な理由からして、社会変革はすべての国のプロレタリアの統一行動ではありえない。このことを、われわれはわれわれのテーゼの第六章で述べておいた。ペ・キエフスキーは、たんなる不注意のためからか、それとも考える能力がないためからか、われわれがこの章をなんの理由もなしに取りいれたわけではなく、まさにマルクス主義の戯画的な歪曲を論駁するために取りいれたのだということに「気づかなかった」。社会主義を実現するまでに成熟しているのは、西ヨーロッパと北アメリカとの先進諸国だけであって、ペ・キエフスキーも、エンゲルスのカウツキーあての手紙（『ソツィアル－デモクラート論集』所載）[39]を一読すれば、「すべての国のプロレタリアの統一行動」[40]を夢想するのは、社会主義をギリシア暦のカレンダスの日まで、すなわち「永遠に」延期することになるという――たんに約束されているだけではなく、現実の――「考え」の具体的な例証を見いだすことができるであろう。

社会主義が実現されるのは、すべての国のプロレタリアの統一行動によってではなく、先進的資本主義の発展段階に到達した少数の国のプロレタリアの統一行動によってである。まさにこのことを理解しないことが、ペ・キエフスキーの誤りを引きおこしたのである。これらの先進国（イギリス、フランス、ドイツその他）では、民族問題はずっとまえに解決ずみであり、民族的共同体はずっとまえにその命数がつき、「全民族的な任務」は客観的に存在しない。だから、今日すぐに民族的共同体を「爆破し」、階級的共同体を打ちたてることができるのは、これらの国においてだけである。

未発展の国々、すなわちわれわれが（われわれのテーゼ第六章で）第二項と第三項に分類しておいた国々、すなわち東ヨーロッパ全体と、植民地と半植民地の全体では、事情は別である。通例、ここにはまだ資本主義的に未発展の

被抑圧民族がいる。これらの民族には、全民族的な任務、つまり民主主義的な任務、他民族の抑圧を打倒する任務が、客観的にまだ存在している。

まさにこのような民族の見本として、エンゲルスはインドをあげ、インドは勝利をえた社会主義に反対して革命を起こすかもしれない、と言っている。――なぜなら、エンゲルスは、先進諸国で勝利したプロレタリアートは「自動的に」、一定の民主主義的方策をとることなしに、いたるところで民族的抑圧を廃止するだろうと空想する、笑うべき「帝国主義的経済主義」とは、およそかけはなれていたからである。勝利したプロレタリアートは、自分が勝利をえたその国を改造するであろう。一挙にこれをやることはできない。ブルジョアジーにたいして一挙に「勝利する」ことはできない。われわれは、このことを自分のテーゼでわざわざ強調しておいた。ところが、またもやペ・キエフスキーは、なんのためにわれわれが民族問題に関連してこのことを強調しているのかを、考えてみなかった。

先進国のプロレタリアートがブルジョアジーを打倒し、ブルジョアジーの反革命的企図を撃退しているあいだ、未発展の被抑圧民族は、手をこまねいていはしないし、生きるのをやめるわけでも、消えてなくなるわけでもない。これらの民族は、社会革命にくらべるとまったくちっぽけな一九一五―一九一六年の戦争のような、帝国主義的ブルジョアジーの危機をさえ、蜂起のために利用しているのであるから（諸植民地、アイルランド）、まして彼らが先進諸国の内乱という大きな危機を蜂起のために利用するだろうことは、疑う余地がない。

社会革命は、先進諸国におけるブルジョアジーにたいするプロレタリアートの内乱と、未発展の後進的な被抑圧民族における、民族解放運動をもふくむ幾多の民主主義的、革命的運動とを結合した一時代の形でしか起こりえない。

なぜか？　なぜなら、資本主義は不均等に発展しており、高度に発展した資本主義的諸民族とならんで、経済的にごくわずかしか発展していないか、あるいはまったく未発展の民族が数多く存在していることを、客観的現実が示しているからである。ペ・キエフスキーは、社会革命の客観的諸条件を、いろいろな国の経済的成熟の見地から熟考することをまったくしなかった。だから、われわれが自決を適用できるような場所を「頭で考えだしている」という彼の非難は、自分の罪を他人に転嫁するというものである。

ペ・キエフスキーは、こんなことにはもったいない熱心さで、われわれは人類をいろいろな社会的災厄から救いだす手段を「頭のなかから考えだすのでなく、頭をつかって現存する物質的諸条件のなかに発見す」べきだという趣旨

のマルクスとエンゲルスからの引用文を、何回となく繰りかえしている。これらの引用文の繰りかえしを読むと、私は、いまに悪名をとどめる「経済主義者」を思いださずにはいられない。彼らもまた、ロシアで資本主義が勝利したという自分たちの「新発見」を、同じような退屈さで……くどくどむしかえしたのである。ペ・キエフスキーは、これらの引用文によってわれわれを「打ちのめそう」と考えているのだ。なぜなら、彼の言うところでは、われわれは帝国主義時代に民族自決を適用できる条件を頭で考えだしているというのだから！　しかし、当のペ・キエフスキー自身の論文に、われわれは次のような「不用意な告白」を読むのである。

「われわれが祖国擁護に反対している（傍点は原筆者のもの）という一事がすでに、われわれが民族的蜂起のあらゆる弾圧に積極的に抵抗するだろうということを、このうえなくはっきりものがたっている。なぜなら、そうすることによって、われわれは自分の不倶戴天の敵、帝国主義とたたかうことになるからである。」（ペ・キエフスキーの論文、第二章r節）

ある著述家を批判し、その著述家に答えようと思えば、その著述家の論文の最も重要な命題ぐらいは原文どおりに引用しなければならない。ところが、ペ・キエフスキーの命題をたった一つでも原文どおりに引用しようものなら、そのどの句をとってみても、マルクス主義をゆがめた二つ、三つの誤りか軽率な考えがたちまち見いだされるのが常である！

（一）ペ・キエフスキーは、民族的蜂起もまた「祖国擁護」であることに気づかなかった！　ところが、ほんのすこしでも思いめぐらしてみれば、だれでもまさにそのとおりであると納得するであろう。なぜなら、どの「蜂起する民族」も、抑圧民族にたいして自分を「擁護」し、自分の言語、自分の国土、自分の祖国を擁護するのだからである。

あらゆる民族的抑圧は広範な人民大衆のうちに抵抗を呼びおこすし、民族的に抑圧されている住民のあらゆる抵抗は、民族的蜂起への傾向をもっている。われわれは、被抑圧民族のブルジョアジーが民族的蜂起についておしゃべりするばかりで、実際には、自国の人民に隠れて、また自国の人民にそむいて抑圧民族のブルジョアジーと反動的な協定を結ぶのを、しばしば（とくにオーストリアとロシアで）見ているが、このような場合に、革命的マルクス主義者がその批判の鋒さきを向けるべきものは、民族運動ではなく、民族運動を矮小化し、俗悪化し、それをゆがめて、くだらない喧嘩にしてしまうことにたいしてである。ついでにいえば、オーストリアとロシアの非常に多くの社会民

主主義者はこのことを忘れてしまい、街頭の町名表示で何国語を上に書き、何国語を下に書くかをめぐる喧嘩口論のような、小さな、俗悪な、あさましい民族的いがみあいにたいする正当な憎しみ——こうしたことにたいする正当な憎しみから一転して、民族闘争への支持を否定するにいたっている。われわれは、モナコ公国とやらでのこっけいな共和制遊びや、南アメリカや太平洋上の某島の小国家の「将軍」連の「共和主義的」冒険を「支持し」はしないが、だからといって、真剣な民主主義運動や社会主義運動が共和制のスローガンを忘れてさしつかえないということにはならない。われわれは、ロシアやオーストリアにおける諸民族のあさましい民族的いがみあいや民族的小商人根性を嘲笑しており、また嘲笑すべきであるが、だからといって、民族的蜂起の支持、あるいは民族的抑圧にたいする全人民のあらゆる真剣な闘争の支持を拒否してさしつかえないということにはならない。

（二）もし「帝国主義時代」には民族的蜂起がありえないとすれば、ペ・キエフスキーがそれについて論じるのは根拠のないことである。また、それがありうるとすれば、「一元論」だとか、われわれが帝国主義のもとでの自決の実例を「頭で考えだしている」とか、その他そういったふうの彼の際限もない空文句は、すべて消しとんでしまう。ペ・キエフスキーは自分で自分をなぐりつけているのだ。もし、「われわれ」が「民族的蜂起」の「弾圧に積極的に抵抗する」のだとすれば——これは、ペ・キエフスキー「自身」がありうるものとしてとりあげている場合であるが——、これはいったいなにを意味するであろうか？

これは、二重の、「二元的な」——この筆者がこの哲学上の術語を見当ちがいにつかっているのと同じ見当ちがいな意味にそれを用いれば——行動があることを意味している。（a）第一に、民族的に抑圧されているプロレタリアートと農民が、民族的に抑圧されているブルジョアジーとともに抑圧民族に反対しておこなう「行動」。（b）第二に、抑圧民族のプロレタリアート、またはその自覚した部分が、抑圧民族のブルジョアジーとそれに追随しているすべての分子に反対しておこなう「行動」。

「民族的ブロック」、民族的「幻想」、民族主義の「毒素」、「民族的憎悪の扇動」等々に反対であるという際限もない文句——ペ・キエフスキーがしゃべりたてた文句は、くだらないものであることがわかった。なぜなら、この筆者は、抑圧国のプロレタリアート（われわれは、この筆者がこのプロレタリアートを重大な勢力と見なしていることを、忘れないようにしよう）に「民族的蜂起の弾圧に積極的に抵抗する」ように勧告することによって、とりもなおさず民

族的憎悪をあおりたて、被抑圧国の労働者と「ブルジョアジーとのブロック」を支持しているからである。

(三) もし帝国主義のもとで民族的蜂起がありうるとすれば、民族戦争もありうる。政治上では、前者と後者とのあいだには重大な区別はなにもない。軍事史家が蜂起をも戦争にふくめているのは、まったくもっともである。ペ・キエフスキーは、そのつもりもなしに、自分自身をなぐりつけたばかりでなく、帝国主義のもとでの民族戦争の可能性を否定するユニウスと「インテルナツィオナーレ」グループをもなぐりつけたのである。ところで、この否定は、帝国主義のもとでの民族自決を否定する見解の、ただ一つ考えられる理論的基礎づけである。

(四) なぜなら――「民族的」蜂起とはなにか？ それは、被抑圧民族の政治的独立を、すなわち別個の民族国家を、つくりだすことをめざす蜂起である。

もし抑圧民族のプロレタリアートが重大な勢力であるならば(この筆者が帝国主義時代について前提しているように、また前提しなければならないように)、「民族的蜂起の弾圧に積極的に抵抗しようとする」このプロレタリアートの決意は、独立の民族国家の創建を助けるものではないだろうか？ もちろん、そうである！

自決の「実現可能性」を勇敢に否定するこの論者は、先進諸国の自覚したプロレタリアートがこの「実現不可能」な方策の実現を助けなければならない、とまで口をすべらせたのである！

(五) なぜ「われわれ」は「民族的蜂起の弾圧に積極的に抵抗」しなければならないのか？ ペ・キエフスキーは、たった一つの論拠をあげるだけである。いわく「なぜなら、そうすることによって、われわれは自分の不倶戴天の敵、帝国主義とたたかうことになるからである」と。この論拠の力は、もっぱら「不倶戴天」といういきつい言葉に帰着するのであって、総じてこの筆者の場合には、きつい、仰々しい文句の力、「ブルジョアジーのふるえおののく身体に杭を打ちこむ」といったたぐいの、アレクシンスキーふうの文飾が、論証の力のかわりになっているのである。

しかし、ペ・キエフスキーのこの論証はまちがいである。帝国主義は、資本主義と同じように、われわれの「不倶戴天の」敵である。これはそのとおりである。だが、資本主義が封建制にくらべて進歩的であり、帝国主義が独占以前の資本主義にくらべて進歩的であることを、マルクス主義者ならだれも忘れないであろう。つまり、われわれが支持すべきなのは、あらゆる反帝国主義闘争ではないのである。帝国主義にたいする反動的階級の闘争を、われわれは支持しない。帝国主義と資本主義にたいする反動的階級の蜂起

を、われわれは支持しない。

したがって、この筆者が被抑圧民族の蜂起を助ける必要を認めるならば（弾圧に「積極的に抵抗する」ということは、蜂起を助けることを意味している）、彼はまさにそのことによって、民族的蜂起の進歩性を認め、この蜂起が成功した場合の、別個の新しい国家の創設、新しい国境の設定、等々の進歩性を認めているのである。

この筆者の政治的所論は、そのどれ一つをとってみても、文字どおりつじつまがあわない！

『フォールボーテ』第二号にわれわれのテーゼが発表されてからのちに起こった一九一六年のアイルランドの蜂起は、――ついでにいえば――ヨーロッパにおいてさえ民族的蜂起が可能であるというのが無責任な放言ではなかったことを証明した！

六　ペ・キエフスキーがふれ、そして歪曲したその他の政治問題

われわれは自分のテーゼのなかで、植民地の解放は民族自決にほかならない、と言明した。ヨーロッパ人は、植民地の人民もまた民族であることを、しばしば忘れているが、しかし、このような「健忘症」を大目にみることは、排外主義を大目にみることを意味している。

ペ・キエフスキーは、次のように「反駁」している。

純粋な型の植民地には「本来の意味のプロレタリアートはいない」（第二章г節の終り）。「では、だれのために『自決』をかかげるのか？　植民地ブルジョアジーのためか？　フェラー〔アラブ諸国の土着の農民〕のためか？　農民のためか？　もちろん、そうではない。植民地にたいして、社会主義者（傍点はペ・キエフスキーのもの）が自決のスローガンをかかげるのは、ばかげている。なぜなら、労働者のいない国のために労働者党のスローガンをかかげることは、総じてばかげているからである。」

われわれの見地を「ばかげたもの」と公言しているペ・キエフスキーの怒りがどんなに恐ろしかろうと、やはりわれわれは、彼の論拠が誤りであることを、あえて彼につつしんで注意したい。「労働者党のスローガン」は労働者のためにのみかかげられるものと考えたのは、あのいまに悪名をとどめる「経済主義者」だけである。*そうではないのだ。これらのスローガンは、すべての勤労住民、全人民のためにかかげられるものである。われわれは、われわれの綱領――ペ・キエフスキーは「総じて」この綱領の意義について考えなかったが――の民主主義的部分は、とくに全

人民に呼びかけたものであり、だからまた綱領のこの部分では「人民」について語っているのである。**

* われわれは、一八九九―一九〇一年にア・マルトィノフ一派が書いたものを読みなおすように、ペ・キエフスキーに勧める。彼はそこに、彼「自身の」論証を数多く見いだすであろう。

** 一部の奇妙な「民族自決」反対論者たちは、「民族」が階級に分裂しているという論拠によって、われわれを反駁している！ この戯画的マルクス主義者にたいしては、われわれは通例、われわれの綱領の民主主義的部分が「人民の専制」について語っていることを指摘することにしている。

われわれは、植民地と半植民地の人民の人口を一〇億と算定した。ペ・キエフスキーも、われわれのこの、きわめて具体的な主張を論駁する労はとらなかった。一〇億の人口のうち、七億以上（中国、インド、ペルシア、エジプト）は、労働者のいる国に属している。だが、労働者がおらず、奴隷所有者と奴隷等々しかいないような植民地諸国のためにも「自決」をかかげることは、すべてのマルクス主義者にとってばかげたことでないばかりか、義務である。すこし考えてみたなら、ペ・キエフスキーにも、おそらくこのことが理解できるであろう。――また、「自決」は、いつでも被抑圧民族と抑圧民族との両方の民族の「ために」かかげられるのだということも、やはり理解できるであろう。

ペ・キエフスキーのもう一つの「反駁」は、次のようなものである。

「だから、われわれは、植民地については、否定的なスローガンに、すなわち、社会主義者が自国の政府にたいして提出する『植民地から手を引け！』という要求にとどめるのである。資本主義の限界内では実現不可能なこの要求は、帝国主義にたいする闘争を鋭くし、しかも発展に矛盾しない。というのは、社会主義社会は植民地を領有しないだろうからである。」

この筆者が、政治的スローガンの理論的内容をほんのすこしでも考えてみる能力のないこと、あるいは考える意志のないことは、まったく驚くべきである！ 理論的に正確な政治的用語のかわりに扇動文句をつかうことによって、問題は変わるだろうか？ 「植民地から手を引け」と語ることは、理論的分析を避けて扇動文句のかげに隠れることを意味している！ わが党の扇動家ならだれでも、ウクライナ、ポーランド、フィンランドその他について述べる場合に、ツァーリズム（「自国政府」）にむかって「フィンランド等々から手を引け」と言う権利をもっているが、しかし、もののわかった扇動家なら、肯定的なスローガンにせよ、否定的なスローガンにせよ、「鋭くする」だけのため

にスローガンをかかげてはならないことを理解するであろう。「極反動国会から手を引け」という否定的なスローガンを正当なものとすることのできるのは、ある害悪とのたたかいを「鋭くし」たいという願望であるなどと主張できるのは、アレクシンスキー型の人間だけである。

たたかいを鋭くするというのは、主観主義者の空文句である。およそあるスローガンを正当なものとするためには、経済的現実をも、政治情勢をも、このスローガンの政治的意義をも、正確に分析することを、マルクス主義は要求していること、このことを主観主義者は忘れるのである。こんなことを噛んでふくめるように言うのは気まりがわるいが、そうするほかないのだから、仕方がないではないか？

理論問題についての理論的な討論を扇動的な叫びで打ちきること――われわれはこういうアレクシンスキーふうのやり方をさんざん見てきたが、しかし、これは悪いやり方である。「植民地から手を引け」というスローガンの政治的および経済的内容は一つであり、しかもただ一つである。すなわち、植民地民族にとっての分離の自由、別個の国家を創設する自由がそれである！　もし、ペ・キエフスキーの考えるように、帝国主義の一般法則が民族自決を阻止し、それをユートピア、幻想、等々に変えるものであるなら、ろくろく考えもせずに、世界の大多数の民族についてこれらの一般法則からの例外を設けることがどうしてできるのか？　明らかに、ペ・キエフスキーの「理論」は理論の戯画である。

商品生産や資本主義、金融資本の結びつきの糸は、大多数の植民地諸国に存在している。もし、「植民地から手を引け」ということが、商品生産、資本主義、帝国主義の見地からみて、「非科学的な」、ほかならぬレンシュ、クーノーその他の人々によって「論破」された「ユートピア的な」要求であるならば、いったいどうして諸国家や、帝国主義国の諸政府にむかって、「植民地から」出てゆくように呼びかけることができるのか？

この筆者の議論には思想のかけらもない！

植民地の解放が「一連の革命なしには実現不可能」であるということは、それが「一連の革命なしには実現不可能である」という意味でのみ言えることを、この筆者は考えてみなかった。植民地の解放は、ヨーロッパの社会主義革命と結びついて実現可能なのだということを、この筆者は考えてみなかった。「社会主義社会」は、植民地ばかりでなく、被抑圧民族一般をも「領有しないであろう」ということを、彼は考えてみなかった。ロシアがポーランドを「領有」しようと、トゥルケスタンを「領有」しようと、いまわれわれの考察している問題については、経済的にも政治的にもそのあいだ

に区別がないことを、彼は考えてみなかった。「社会主義社会」が「植民地から出て」ゆくことを望むのは、もっぱら自由に分離する権利を植民地にあたえるという意味においてであって、けっして、分離するよう植民地に勧告するという意味においてではないことを、彼は考えてみなかった。

ペ・キエフスキーは、われわれが分離する権利の問題と分離を勧告する問題とをこのように区別したというので、われわれを「手品師」とののしった。そして、労働者にたいしてこの判断を「科学的に基礎づけ」てみせるために、次のように書いている。

「サモスティーノスチ」（すなわち、ウクライナの政治的自立）「の問題にたいしてプロレタリアはどんな態度をとるべきか、と労働者が宣伝家に質問して、社会主義者は分離する権利の獲得につとめ、また分離反対の宣伝をおこなう、という答を受けとったなら、その労働者はなんと考えるだろうか？」

この問いにはかなり正確な答えをあたえることができると、私は考える。すなわち、ものわかった労働者ならだれでも、ペ・キエフスキーには考える能力がないと考えるだろうと、私は思う。

もののわかった労働者ならだれでも、次のように「考えるであろう」。当のペ・キエフスキーがわれわれ労働者に「植民地から手を引け」と叫べと教えているではないか。したがって、われわれ大ロシア人労働者は、モンゴル、トゥルケスタン、ペルシアから手を引くように自国政府に要求しなければならず、――イギリスの労働者は、イギリス政府がエジプト、インド、ペルシア、等々から手を引くように要求しなければならないわけだ。しかし、このことは、われわれプロレタリアが、エジプトの労働者やフェラーから、モンゴル、トゥルケスタンあるいはインドの労働者や農民から、分離したいと望んでいることを意味するだろうか？　これは、われわれが、ヨーロッパの自覚したプロレタリアートから「分離する」ように植民地の勤労大衆に勧告することを意味するだろうか？　けっしてそんなことはない。われわれは、先進諸国の自覚した労働者とすべての被抑圧国の労働者、農民、奴隷とがこのうえなく緊密に接近し融合することにつねに賛成してきたし、また現に賛成しており、将来も賛成するであろう。われわれは、植民地をもふくめたすべての被抑圧国のすべての被抑圧階級に、われわれから分離しないで、できるだけ緊密にわれわれに接近し融合するよう、つねに勧告してきたし、将来もつねに勧告するであろう。

われわれは、自国政府にたいして、植民地から手を引く

よう、――すなわち、扇動的な叫びで表現しないで、正確な政治的表現をつかえば、分離の完全な自由、真の自決権を植民地にあたえるように要求しており、また、われわれ自身、権力をたたかいとるやいなや、かならずこの権利を実現し、この自由をあたえるであろうが、われわれがそれを今日の政府に要求するのは、また、われわれ自身が政府となったあかつきにそれを実行するのは、けっして分離を「勧告する」ためではなく、反対に、諸民族の民主主義的な接近と融合を容易にし、はやめるためである。われわれは、モンゴル人、ペルシア人、インド人、エジプト人と接近し融合するために、あらゆる努力をはらうであろう。われわれは、そうすることが自分の義務であり、自分の利益であると考えている。なぜなら、そうしないなら、ヨーロッパにおける社会主義は不安定なものとなるだろうからである。われわれは、われわれ以上に後進的な、抑圧されているこれらの諸国民にたいして、ポーランドの社会民主主義者のみごとな表現を借りていえば、「私心のない文化的援助」をあたえることにつとめよう。すなわち、彼らが機械の使用へ、労働の軽減へ、民主主義へ、社会主義へ移ってゆくのを助けるようにつとめよう。

われわれが、モンゴル人、ペルシア人、エジプト人、例外なしにすべての抑圧された、同権をもたない民族のために分離の自由を要求するのは、けっしてわれわれが彼らの分離に賛成するからではなく、もっぱら、われわれが強制的な接近と融合に賛成せずに、自由な、自発的な接近と融合に賛成するからである。もっぱらそのためである！

そして、この点では、一方のポーランドまたはフィンランドの百姓と労働者、他方のモンゴルまたはエジプトの百姓と労働者とのあいだにあるただ一つの区別は、後者が高度に発達した人々であり、大ロシア人よりも政治的経験に富み、いっそう経済的素養の深い人々であることである。したがって、彼らは、大ロシア人が絞刑吏の役割を果たしていることを、今日当然に憎んでいる自国の人民に、きっと非常にはやく次のことを納得させるであろう。すなわち、この憎しみを社会主義的労働者と社会主義ロシアとにまで及ぼすのは愚かなことであり、経済的な計算も、国際主義および民主主義の本能と意識も、社会主義社会のすべての民族ができるだけはやくたがいに接近し融合することを要求する、ということである。ポーランド人とフィンランド人は文化の高い人々であるから、おそらく非常にはやく、この議論が正しいことを納得するであろうし、社会主義の勝利後におけるポーランドとフィンランドの分離は、ほんのしばらくしかつづかないであろう。文化のはるかに遅れたフェラー、モンゴル人、ペルシア人の場合には、分離は

もっと長期にわたるかもしれないが、われわれは、すでに述べたように、私心のない文化的援助によってこの時期をちぢめることにつとめるであろう。

　ポーランド人にたいする場合とモンゴル人にたいする場合とで、われわれの態度にはこれ以外にどんな区別もないし、またありえない。民族の分離の自由の宣伝、われわれが政府となったあかつきにはこの自由を実現しようという堅い決意と、民族の接近および融合の宣伝とのあいだには、なんの「矛盾」もないし、またありえない。――――――ものわかったすべての労働者、真の社会主義者、真の国際主義者は、われわれとペ・キエフスキーとの論争についてまさに以上のように「考えるであろう」*と、われわれは確信する。

* どうやら、ペ・キエフスキーは、ドイツとオランダの一部のマルクス主義者に追随して、「植民地から手を引け」というスローガンを繰りかえしただけで、このスローガンの理論上の内容や意義を考えなかったばかりでなく、ロシアの具体的特殊性も考えなかったらしい。オランダとドイツのマルクス主義者が「植民地から手を引け」というスローガンにとどまっていることは、――ある程度――許せることである。というのは、第一に、大多数の西ヨーロッパ諸国にとっては、まさに植民地抑圧が民族的抑圧の典型的な事例であり、第二に、西ヨーロッパ諸国では、「植民地」の概念はとくに明白かつ明瞭で、切実だからである。

　だが、ロシアではどうか？　「われわれの」「植民地」と「われわれの」被抑圧民族とのあいだの区別があいまいで、非具体的で、切実でないことが、まさにロシアの特殊性である！

　たとえばドイツ語でものを書くマルクス主義者がロシアのこの特殊性を忘れることは許せるにしても、それにひきかえペ・キエフスキーの場合には許すことができない。繰りかえすだけでなく考えることをも望んでいるロシアの社会主義者にとっては、被抑圧民族と植民地のあいだになにか重大な区別をつけようとする企てが、ロシアの場合、とくにばかげていることが、はっきりしていなければならない。

ペ・キエフスキーの論文全体を一つの根本的な疑念がつらぬいている。それは、発展全体が諸民族の融合の方向へすすむ以上、なぜ民族の分離の自由を宣伝し、そして――われわれが権力をにぎったあかつきに――実現するのか、という疑念である。われわれは次のように答える。それは、発展全体が、社会の一部分にたいする他の部分の強制的な支配を廃止する方向へすすんでいるにもかかわらず、われわれがプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を宣伝し、権力をにぎったあかつきにはこの執権（ディクタツーラ）を実現するのと同じ理由によってである、と。執権（ディクタツーラ）とは、社会の一部分による全社会の支配であり、しかも直接に強力に依拠する支配である。ただ一つの徹底的に革命的な階級であるプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）

は、ブルジョアジーを打倒し、彼らの反革命的な企図を撃退するために必要である。プロレタリアートの執権の問題は非常に重要であるから、執権を否定するか、あるいは口さきだけでそれを承認する人は、社会民主党員ではありえない。しかし、個々の場合に、例外として、たとえば、ある小国で、その隣の大国がすでに社会革命を遂行したあとで、ブルジョアジーが反抗しても無益だとさとって、首がつながるほうを選ぶなら、彼らが権力を平和的にゆずりわたすことがありうるのは、否定できない。もちろん、小国においても内乱なしには社会主義が実現されないことのほうが、はるかにありそうなことである。だから、われわれの理想からすれば人間にたいする暴力は許されないとはいえ、この内乱を承認することが国際社会民主主義のただ一つの綱領でなければならない。同じことは——mutatis mutandis（適当な変更をくわえて）——民族にもあてはまる。われわれは、民族の融合に賛成であるが、今日、分離の自由なしには、強制的な融合から、併合から、自発的な融合へ移ることはできない。われわれは経済的要因の優位を認める——そして、それはまったく正しいことである——が、しかし、それをペ・キエフスキー流に解釈することは、マルクス主義の戯画におちいることを意味する。現代の帝国主義のもとでのトラストや銀行でさえ、発展した資本主義のもとでは一様に不可避に現われるとはいえ、国が異なれば、その具体的な形は同一でない。まして、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツのような先進的帝国主義国の政治形態は、基本的には同質であるにもかかわらず、一様ではない。人類が今日の帝国主義からあすの社会主義革命へすすんでゆく道にも、同じような多様性が現われるであろう。すべての民族は社会主義にゆきつくであろう。それは避けられない。しかし、すべての民族がまったく同一のやり方でゆきつくとはかぎらない。それぞれの民族は、民主主義のあれこれの形態に、プロレタリアートの執権のあれこれの変種に、また社会生活のいろいろな側面の社会主義的改造のあれこれの速度に、独特なものをもたらすであろう。「史的唯物論の名において」、この点について未来を灰色への一色で描きだすほど、理論的に貧しく、実践的にこっけいなことはない。これはスーズダリ〔の聖像家〕式のぬたくり絵であって、それ以上のものではない。社会主義的プロレタリアートが最初の勝利をおさめるまでに解放をかちとって分離するものが、現在の被抑圧民族のわずか五〇〇分の一にすぎず、また社会主義的プロレタリアートがこの地球上で最後の勝利をおさめるまでに（すなわち、すでに開始された社会主義革命が幾多の転変をとげるあいだに）分離するものが、やはり被抑圧民族のわずか五〇〇

分の一で、それもほんのしばらくのあいだ分離するにすぎないことを、現実が示す場合でさえ——その場合でさえ、抑圧民族の社会主義者であって、すべての被抑圧民族の分離の自由を認めず宣伝しないような者は、自国の社会民主党のしきいをまたがせてはならないと、われわれがもういまから労働者に勧告するのが、理論的にも実践的＝政治的にも正しいであろう。なぜなら、どれだけの数の被抑圧民族が、民主主義の形態の多様性と社会主義への移行の形態の多様性とに各自の寄与をするのに、実際に分離を必要とするかを、われわれは実際に知らないし、また知ることもできないからである。しかし、今日分離の自由を否定することがはてしない理論的虚偽であり、実際には抑圧民族の排外主義者にたいする奉仕であることを、われわれは知っており、毎日のように見、感じている。

ペ・キエフスキーは、われわれが引用した箇所への注のなかでこう書いている。

「われわれは『……強制的併合反対』という要求を完全に支持するものであることを強調する。」

このような「要求」は自決の承認にひとしく、「併合」の概念は、それを自決の問題に帰着させないかぎり、正しく規定することはできないという、われわれのまったく明確な言明に、この筆者は一言も答えていない！　おそらく彼は、討論のためには、命題と要求をかかげれば十分であって、それを証明するにはあたらないと考えているのであろう！

彼はつづけて言っている。

「……一般にわれわれは、プロレタリアートの反帝国主義的な意識を鋭くする一連の要求を、その否定的な定式においては完全に受けいれるが、しかし、現存制度の基盤にとどまったままで、それらに見合った肯定的な定式を選びだすことはまったく不可能である。戦争には反対だが、民主主義的講和には賛成でない。……」

まちがっている——最初のことばから最後のことばまでまちがっている。この筆者は、われわれの決議『平和主義と平和のスローガン』（パンフレット『社会主義と戦争』四四—四五ページ）[六]を読んで、それを是認してさえいるようだが、明らかに、それを理解しなかった。われわれは、民主主義的講和に賛成であるが、ただ、決議に述べているように、それが「一連の革命がなくとも」現在のブルジョア政府のもとで可能であるという欺瞞にひっかからないようにと、労働者に警告するのである。われわれは、「抽象的に」平和を説くこと、すなわち交戦諸国の今日の政府の真の階級的本性、もっと正確にいえば帝国主義的本性を考慮にいれないで説くことは、労働者を愚弄するものだ、と

声明したのである。われわれは、『ソツィアル－デモクラート』紙（第四七号）のテーゼのなかで、もし革命がまだ現在の戦争がつづいているあいだにわが党を権力につかせるならば、わが党は、すべての交戦国に民主主義的講和を即時提議するであろう、とはっきり声明しておいた[63]。

ところが、ペ・キエフスキーは、自分は自決に反対する「だけ」であって、民主主義一般にはけっして反対でない、と自他にむかって断言しながら、「民主主義的講和に賛成でない」とまで言うにいたっている。これは、珍妙なことではあるまいか？

ペ・キエフスキーがあげているこれ以外の実例の一つひとつに立ちいって述べる必要はない。なぜなら、どんな読者をも失笑させるような、こういう幼稚な論理的誤りを反駁するのに、紙面を空費するにはおよばないからである。「プロレタリアートの反帝国主義的な意識を鋭くする」のに役だつだけで、社会民主党自身が権力をにぎった場合にその問題をどう解決するか、ということについての積極的な解答を同時にあたえないような「否定的な」スローガン、そういうスローガンは、社会民主党には一つもないし、またありえない。一定の肯定的な解決と結びつかない「否定的」スローガンは、意識を「鋭く」しないで、にぶらせる。なぜなら、このようなスローガンは、空語であり、まったくの絶叫であり、内容のない大言壮語だからである。

政治的害悪を「否定し」たり非難したりするスローガンと、経済的害悪を「否定し」たり非難したりするスローガンとの区別は、ペ・キエフスキーにはわからずじまいであった。この区別は次の点にある。すなわち、ある種の経済的害悪は、資本主義一般――どのような政治的上部構造をそのうえにいただくかにかかわりなく――に固有のものであって、資本主義を廃止しなければ、この災厄を廃止することは経済的に不可能であり、またそういう廃止の実例をただ一つでもあげることはできない。これに反して、政治的害悪は、民主主義からの逸脱をあらわしている。この民主主義は、「現存制度の基盤のうえで」、すなわち資本主義のもとで経済的には十分可能であり、そして、ある国家ではこの民主主義のある部分が、他の国家では別の部分がというふうに、資本主義のもとでも例外的に実現されるのである。この筆者は、またしても、まさに民主主義一般が実現可能であるための一般的諸条件を理解しなかったのである！

離婚問題についても同じである。われわれは、民族問題の討論で最初にこの問題にふれたのはローザ・ルクセンブルクであったことに、読者の注意をうながそう。われわれは、国家内部の自治（州または辺区等の自治）を擁護する

とともに、中央集権論者の社会民主主義者として、全国的権力、全国的議会が、離婚にかんする立法をもふくめて、最も重要な国家問題の解決にあたることを主張しなければならない、という正しい意見を、彼女は述べた。離婚の実例は、いまただちに離婚の完全な自由を要求しない者は、民主主義者、社会主義者でありえないことを、明らかに示している。というのは、この自由がないことは、抑圧されている性、すなわち婦人にたいする余分の圧迫だからである。――それでも、夫と別れる自由を承認することは、すべての妻に別れるように勧めることではないということを見ぬくのは、すこしもむずかしいことではない！

ペ・キエフスキーはこう「反論」している。

「もしこれらの場合に」（妻が夫と別れたがっている場合に）「妻がこの権利」（離婚の）「を実現できないとしたら、この権利はどんな印象をあたえるであろうか？　あるいはまた、この実現が、第三者の意思に、もっと悪くいって、その妻に結婚を申し出ている者の意思にかかっているとしたら、どうであろうか？　われわれは、このような権利を宣言させることにつとめるべきであろうか？　もちろん、つとめるべきではない！」

この反論は、民主主義一般と資本主義とのあいだにある関係をまったく理解していないことを示している。被抑圧階級が自分たちの民主主義的権利を「実現する」ことのできないような状態は、資本主義のもとでは普通であって、個々の事例ではなく、典型的な現象である。離婚の権利は、資本主義のもとでは、多くの場合に、実現されずに終わる。なぜなら、抑圧されている性は経済的に押しひしがれているからであり、また婦人は、どれほど民主主義があろうと、資本主義のもとでは依然として「家内奴隷」であり、寝室、子供部屋、台所に閉じこめられた女奴隷だからである。「自分たちの」人民裁判官、官吏、教師、陪審官、等々を選挙する権利もまた、資本主義のもとでは、まさに労働者農民が経済的に押しひしがれているために、多くの場合に実現できない。同じことは、民主的共和制にもあてはまる。資本主義のもとでは、どんなに民主主義的な共和制も、ブルジョアジーによる官吏の買収、取引所と政府との同盟へみちびくにすぎないことは、社会民主主義者ならだれでもはっきり知っているにもかかわらず、われわれの綱領は、「人民の専制」という形で民主的共和制を「宣言」している。

まったくものを考える能力がないか、マルクス主義をまったく知らない人間だけが、ここから次のような結論を引きだしてくる。共和制は役に立たない、離婚の自由は役に立たない、民主主義は役に立たない、民族自決は役に立た

ない！と。だがマルクス主義者は、民主主義が階級的抑圧を排除するものでなく、ただ階級闘争をいっそう純粋に、いっそう広範に、いっそう公然と、いっそう激しくするにすぎないことを知っている。そして、そのことこそわれわれに必要なのである。離婚の自由が完全であればあるほど、婦人の「家内奴隷制」の源が資本主義にあって無権利にはないことが、彼女たちにますますはっきりする。国家制度が民主的であればあるほど、悪の根源が資本主義にあって無権利にはないことが、労働者にますますはっきりする。民族同権（それは分離の自由がなければ完全でない）が完全であればあるほど、問題は資本主義にあって無権利にはないことが、被抑圧民族の労働者にますますはっきりする、等々。

またしても言う。マルクス主義のイロハを噛んでふくめるように言うのは気まりがわるいが、ペ・キエフスキーがそれを知らないのなら、仕方がないではないか？

ペ・キエフスキーは、組織委員会の在外書記のひとりセムコーフスキーが――たしかパリの『ゴーロス』紙上で[23]――論じたのと同じ仕方で、離婚を論じている。セムコーフスキーはこう論じた。なるほど、離婚の自由とは、すべての妻に夫と別れるように勧めることではないが、奥さん、どこの御主人もお宅のよりはましですよ、と妻にむかって証明するなら、けっきょく、そういうことになる、と!!

こう論じるさい、セムコーフスキーは、変わり者だということは社会主義者や民主主義者の義務に違反することにはならないことを忘れた。セムコーフスキーが手あたりしだいの人妻をつかまえて、どこの御主人もお宅のよりはましですよ、と説きつけはじめるとしても、だれもそれを民主主義者の義務に違反するものだとみるものはいないだろう。せいぜい言われることは、大きな党となると、たいへんな変わり者がいずにはすまないものだ、ということであろう！　しかし、離婚の自由を否認し、たとえば、出ていこうとしている自分の妻を裁判所か警察か教会に訴えるような人間を、セムコーフスキーが弁護し、これを民主主義者とよぼうと思いつくなら、セムコーフスキーの同僚である在外書記局員の大多数でさえ――彼らはたいへん悪い社会主義者ではあるが――、セムコーフスキーに連帯を表明することは拒絶するだろうと、われわれは確信する！

セムコーフスキーもペ・キエフスキーも、離婚について「おしゃべりし」、問題を理解していないことを暴露し、そして問題の核心を回避してしまった。離婚の権利は、例外なくすべての民主主義的権利と同じように、資本主義のもとでは、実現困難であり、条件的であり、制限されており、狭く形式的なものである。しかし、それにもかかわらず、

ちゃんとした社会民主主義者ならだれでも、この権利を否認する人間を社会主義者と見なさないのはもとより、民主主義者とも見なさないであろう。ここが肝心な点である。およそ「民主主義」は、資本主義のもとではきわめてまれに、きわめて条件的にしか実現されない「諸権利」を宣言し、実現することにある。しかし、このように宣言しなければ、いますぐこれらの権利のためにたたかわなければ、このような闘争の精神で大衆を教育しなければ、社会主義は不可能である。

このことを理解しなかったので、ペ・キエフスキーは、その論文のなかで、彼がとくに取りあげた主題にかんする主要な問題、すなわち、われわれ社会民主主義者はどのようにして民族的抑圧をなくすかという問題をも、回避するのである。ペ・キエフスキーは、どのように世界が「血にまみれるか」(これは問題にまったく無関係なことだ)などという文句でお茶をにごしている。実質上、あとにのこるのはただ一つ、社会主義革命がすべてを解決する！　あるいは、ペ・キエフスキーの見解の支持者たちがときどき言っているように、自決は資本主義のもとでは不可能であり、社会主義のもとではよけいなものである、ということだけである。

これは、理論的にはたわごとであり、実践的＝政治的には排外主義的な見解である。この見解は、民主主義の意義を理解していない。社会主義は、次の二つの意味で、民主主義がなければ不可能である。(一)プロレタリアートは、民主主義のための闘争によって社会主義革命の準備をしなければ、この革命を遂行することができない。(二)勝利をおさめた社会主義は、民主主義を完全に実現しなければ、自分の勝利を維持し、人類を国家の死滅へみちびいてゆくことができない。だから、社会主義のもとでは自決はよけいなものだと言うのは、社会主義のもとでは民主主義はよけいなものだと言うのと同様なたわごとであり、しまつにおえない混乱である。

自決は、資本主義のもとでは、民主主義一般以上に不可能ではなく、社会主義のもとでは、民主主義一般と同じ程度によけいなものである。

経済的変革は、あらゆる種類の政治的抑圧をなくすのに必要な前提条件をつくりだす。だからこそ、どのようにして民族的抑圧をなくすかが問題となっているときに、経済的変革を引合いにだしてお茶をにごすことは、非論理的であり、まちがいである。経済的変革がなければ、民族的抑圧をなくすことはできない。それは争う余地がない。しかし、それだけにとどめるのは、こっけいで、あわれむべき帝国主義的「経済主義」におちいることを意味している。

民族の同権を実行し、あらゆる民族の平等の「権利」を宣言し、定式化し、実現しなければならない。ペ・キエフスキーただひとりを除いて、すべての者がこれに同意している。しかし、ここで人々が回避している問題が生まれてくる。自分の民族国家をつくる権利の否認は同権の否認ではないか、という問題がそれである。

もちろん、そうである。そして、一貫した民主主義、すなわち社会主義的民主主義は、この権利を宣言し、定式化し、実現する。そして、この権利がなければ、諸民族の完全に自発的な接近と融合への道はないのである。

七　結び。アレクシンスキー式の手口

われわれは、けっしてペ・キエフスキーの議論のすべてを検討しつくしたわけではない。すべての議論を検討することは、この論文の五倍も大きな論文を書くことになろう。なぜなら、彼には、正しい議論はただの一つもないからである。彼の論文で正しい点は――数字に誤りがないものとして――銀行にかんする数字をあげている注ただ一つである。そのほかのものはすべて、しまつにおえない混乱の糸球のようなものであって、しかもそれは、「ふるえおののく身体に杭を打ちこむ」だの、「われわれはいま勝利している英雄たちを裁判にかけるばかりでなく、さらに死刑を宣告して、消えてなくならせる」だの、「激烈きわまる痙攣のうちに新しい世界が誕生するであろう」だの、「問題は、証書や法律、人民の自由の宣言にあるのではなく、真に自由な諸関係を設定し、長い年月にわたる奴隷制を破壊し、一般に社会的抑圧を、とくに民族的抑圧をなくすことにある」だの、そういったふうの文句で味つけがされている。

これらの文句は次の二つの「事柄」をおおいかくし、また表現している。第一に、これらの文句の根本にあるのは、「帝国主義的経済主義」――いまに悪名をとどめる一八九四―一九〇二年代の「経済主義」と同様な、マルクス主義の醜悪な戯画であり、社会主義と民主主義の関係を同様にまったく理解しないもの――の「観念」である。

第二に、これらの文句のうちに、われわれは、アレクシンスキーの手口の繰りかえしをまのあたりに見る。このことについてはとくに立ちいって論じておかなければならない。なぜなら、ペ・キエフスキーはもっぱらこういう手口で、その論文のなかの独立の一節（第二章f節「ユダヤ人の特殊な地位」）をまるまるつくりあげているからである。

すでに一九〇七年のロンドン党大会で、アレクシンスキーが、理論的論拠にたいする回答として、扇動家のポーズ

をとり、主題にはまったく関係のない、ある種の搾取や抑圧に反対する仰々しい空文句をたびたびわめきたてたとき、ボリシェヴィキがアレクシンスキーから離れるということがたびたび起こった。こういう場合には、「そら、金切り声が始まった」と、わが代議員たちは言うのを常とした。この「金切り声」は、アレクシンスキーによい結果をもたらさなかった。

これとまったく同じ「金切り声」が、ペ・キエフスキーにも見られる。テーゼのなかで提起されている一連の理論問題や考え方にどう答えてよいかわからないで、彼は、扇動家のポーズをとり、ユダヤ人の抑圧についての空文句をわめきたてはじめている。それにしても、いくらかでもものを考える能力のある者ならだれにでも、ユダヤ人問題一般も、ペ・キエフスキーのすべての「絶叫」も、主題とはなんの関係もないことは、はっきりしているのだ。

アレクシンスキー式の手口はよい結果をもたらさないであろう。

一九一六年八—一〇月に執筆
一九二四年にはじめて雑誌『ズヴェズダ』第一号と第二号に発表
署名——ヴェ・レーニン
全集、第五版、第三〇巻、七七—一三〇ページ所収

プロレタリア革命の軍事綱領

オランダやスカンディナヴィアやスイスで、この帝国主義戦争における「祖国擁護」という社会排外主義者のうそとたたかっている革命的社会民主主義者のあいだから、「民兵」または「人民の武装」という社会民主主義者の最小限綱領の旧来の条項を、「軍備撤廃」という新しい条項に代えるべきだ、という声があがっている。『ユーゲントトーインテルナツィオナーレ』[64]は、この問題についての討論を始め、第三号に軍備撤廃に賛成する編集局論説をのせた。同志R・グリムの最近のテーゼ[65]も、残念なことに、「軍備撤廃」の思想に譲歩している。評論誌『ノイエス・レーベン』[66]と『フォールボーテ』では、討論がひらかれた。そこで、われわれは軍備撤廃論者の論拠を検討してみようと思う。

一

主要な論拠は、軍備撤廃の要求こそ、あらゆる軍国主義とあらゆる戦争に反対する闘争を、最もはっきりと、最も断固として、最も首尾一貫して言いあらわしたものだ、というにある。

しかし、まさにこの主要な論拠のなかに、軍備撤廃論者の根本的な思いちがいがある。社会主義者は、社会主義者であることをやめずには、あらゆる戦争に反対することはできない。

第一に、社会主義者は、けっして革命戦争の反対者であったことはなく、またけっしてそうであることはできない。帝国主義的諸「大」国のブルジョアジーはいまや骨の髄まで反動的になっており、このブルジョアジーが現在おこなっている戦争を、われわれは、反動的、奴隷所有者的、犯罪的な戦争であると認めている。それでは、このブルジョアジーにたいする戦争はどうか？　たとえば、このブルジョアジーに抑圧され、これに従属している民族、あるいは植民地民族が自己の解放のためにおこなう戦争はどうか？「インテルナツィオナーレ」グループの『テーゼ』の第五節には、「この野ばなしにされた帝国主義の時代には、も

はや民族戦争はありえない」と書いてある。これは明らかに正しくない。

二〇世紀、この「野ばなしにされた帝国主義」の世紀の歴史は、植民地戦争にみちている。しかし、世界の大多数の民族の帝国主義的抑圧者であるわれわれヨーロッパ人が、われわれにもちまえの卑劣なヨーロッパ的排外主義から「植民地戦争」とよんでいるものは、多くの場合、これらの被抑圧民族の民族戦争または民族的蜂起である。帝国主義の最も基本的な特性の一つは、帝国主義がどんなに遅れた国々でも資本主義の発展を速め、そうすることで民族的抑圧にたいする闘争を拡大し激化させるということ、まさにこのことにある。これは事実である。そして、このことから不可避的に出てくることは、帝国主義はかならず民族戦争をしばしば生みだすということである。ユニウス〔ローザ・ルクセンブルク〕は、前記の『テーゼ』を彼の小冊子のなかで擁護して、帝国主義時代には、帝国主義的大国の一つにたいする民族戦争はすべて、その国と競争している、これまた帝国主義的な他の大国の介入をまねき、したがってあらゆる民族戦争は帝国主義戦争に転化する、と述べている。しかし、この論拠も正しくない。そうなるかもしれないが、いつもそうなるとはかぎらない。一九〇〇年から一九一四年までの植民地戦争で、こういう道をたどらなかったものも多い。また、たとえば、現在の戦争が交戦諸国のはなはだしい疲弊に終わる場合に、戦後に「どんな」民族的、進歩的、革命的な戦争——たとえば、中国がインド、ペルシア、シャムなどと同盟して列強にたいしておこなう戦争のような——もあり「えない」と、われわれが言明するとすれば、それはまったくこっけいであろう。

帝国主義のもとでの民族戦争の可能性をいっさい否定することは、理論的に正しくなく、歴史的に明らかにまちがっており、実践的にはヨーロッパ的排外主義にひとしい。すなわち、ヨーロッパ、アフリカ、アジアなどで数億の人民を抑圧している諸民族に属するわれわれが、被抑圧民族にむかって、「われわれの」民族にたいする彼らの戦争は「ありえない」と言明すべきだということになる！

第二に、内乱もまた戦争である。階級闘争を認めるものは、内乱をも認めないわけにはいかない。内乱は、あらゆる階級社会で、階級闘争の自然な、ある事情のもとでは避けられない継続、発展、激化をあらわしている。あらゆる大革命がこのことを確証している。内乱を否認すること、あるいは忘れることは、極端な日和見主義におちいり、社会主義革命を断念することを意味するであろう。

第三に、一国で勝利をおさめた社会主義は、一挙にあらゆる戦争一般を取りのぞくものではけっしてない。それど

ころか、それは戦争を予想する。資本主義の発展は、それぞれの国で、きわめて不均等におこなわれる。商品生産のもとでは、それ以外ではありえない。そうだとすると、社会主義はすべての国で同時に勝利することはできない、という結論が避けられないものとなる。社会主義ははじめは一国または数ヵ国で勝利するが、他の国々は、なおしばらくブルジョア的あるいは前ブルジョア的な国にとどまるであろう。このことは、摩擦を引きおこすだけでなく、社会主義国家の勝利したプロレタリアートを粉砕しようとする他の国々のブルジョアジーの直接の努力をも呼びおこさずにはおかない。このような場合には、われわれの側についてみれば、戦争は正当であり、正義であろう。それは、社会主義のための戦争、ブルジョアジーから他の諸民族を解放するための戦争であろう。エンゲルスが、一八八二年九月一二日付のカウツキーにあてた手紙のなかで、すでに勝利した社会主義が「防衛戦争」をおこなう場合が[三]ありうることをはっきり認めたのは、まったく正しかった。彼が言っているのは、他の国々のブルジョアジーにたいする、勝利したプロレタリアートの防衛のことである。

　われわれが、一国だけでなく全世界でブルジョアジーを打倒し、完全に打ち破り、収奪したのちにはじめて、戦争はありえないものになるであろう。また、われわれが、ブルジョアジーの抵抗の鎮圧という、ほかならぬ最も重要な仕事、社会主義への移行にあたっての最も困難な仕事、最も多くの闘争を必要とする仕事を回避したり、あいまいにするなら、それは科学的にみてまったく正しくなく、まったく非革命的であろう。「社会的」説教師や日和見主義者は、このんで未来の平和な社会主義を夢想したがる。だが、彼らは、このすばらしい未来を現実とするための激しい階級闘争や階級戦争のことは考えたがらず、そのために心をつかおうとしないという、まさにその点で、革命的社会民主主義者と区別される。

　われわれは、ことばにごまかされてはならない。たとえば「祖国擁護」という概念が多くの人々に憎まれているのは日和見主義者やカウツキー派が、現在の強盗戦争におけるブルジョアジーのうそを、この概念によっておおいかくし、あいまいにしているからである。これは事実である。しかし、だからといって、われわれが政治的スローガンの意義を深く考えるのをやめなければならないということにはならない。現在の戦争で「祖国擁護」を認めることは、この戦争を「正義の」戦争、プロレタリアートの利益に役だつ戦争と見なすことを意味する——そのことだけを、まったくそのことだけを意味する。というのは、どんな戦争の場合にも、侵入は起こりうるからである。帝国主義的大

国にたいする被抑圧民族の戦争で被抑圧民族の側の「祖国擁護」を否認したり、あるいは、ブルジョア国家のガリフェ式の人間にたいする勝利したプロレタリアートの戦争でプロレタリアートの側の「祖国擁護」を否認するのは、まったく愚かなことであろう。

すべて戦争は別の手段による政治の継続にすぎないということを忘れるのは、理論的にまったく誤りである。現在の帝国主義戦争は、二つの大国グループの帝国主義的政治の継続であり、そしてこの政治は、帝国主義時代の諸関係の総和によって生みだされ、つちかわれたものである。しかし、この同じ時代は、かならず、民族的抑圧に反対する闘争の政治と、ブルジョアジーに反対するプロレタリアートの闘争の政治を生みだし、したがってまた、第一に、革命的な民族的蜂起と民族戦争の、第二に、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの戦争と蜂起の、第三に、両種の革命戦争の結合等々の、可能性と不可避性を生みださざるをえないのである。

二

これにくわえて、さらに次の一般的な考慮がある。武器の知識を獲得し、武器の使い方に習熟し、武器を持とうとつとめないような被抑圧階級は、抑圧され、虐待され、奴隷として取りあつかわれても仕方がない。ブルジョア平和主義者や日和見主義者になりさがらないかぎり、われわれは、自分が階級社会に生活していること、そして階級闘争によらずにこの社会から救いだされることはありえないし、考えられないということを、忘れてはならない。どんな階級社会でも、その社会が奴隷制に基礎をおこうと、農奴制に基礎をおこうと、あるいは今日のように賃金奴隷制に基礎をおこうと、つねに抑圧階級は武装している。今日の常備軍ばかりか、今日の民兵もまた――スイスの民兵をもふくめて――、プロレタリアートに対抗するブルジョアジーの武装である。この初歩的な真理は証明するまでもないと思う。すべての資本主義国でストライキのさいに兵士が出動していることをあげれば十分である。

プロレタリアートに対抗するブルジョアジーの武装は、今日の資本主義社会における最大の、最も根本的な、最も重要な事実の一つである。しかも、このような事実を目のあたりに見ながら、革命的社会民主主義者は「軍備撤廃」の「要求」をかかげるべきだ、と彼らにせまる者がいるのだ！　これは、階級闘争の立場を完全に放棄し、革命の思想をいっさい放棄することであろう。われわれは次のように言う。ブルジョアジーに勝利し、彼らを収奪し、そして

武装解除するためのプロレタリアートの武装、と。これこそ、革命的階級のただひとつとりうる戦術であり、資本主義的軍国主義の客観的発展全体が準備し、基礎づけ、教えている戦術である。プロレタリアートは、ブルジョアジーを武装解除したのちにはじめて、自分の世界史的任務を裏切らずに、武器を屑鉄にしてしまうことができる。また実際にそのときには――だが、そのまえにではなく――、プロレタリアートはきっとそうするであろう。

たとえ現在の戦争が、反動的な社会的説教師や、泣き虫の小ブルジョアのあいだでは、恐怖をしか、おびえをしか、武器の使用や、死や、流血などにたいする嫌悪をしか、呼びおこさないとしても、われわれは、それとは反対にこう言う。資本主義社会は、つねに終りのない恐怖であったし、いまもそうである、と。そして、すべての戦争のなかで最も反動的なこの戦争が、現在、この社会を恐怖をもって終わらせる準備をしているとしても、われわれは絶望におちいる理由はすこしもない。ただひとつ正当な革命的戦争、すなわち帝国主義的ブルジョアジーにたいする内乱が、このブルジョアジー自身によって万人の目のまえで公然と準備されている現在では、「軍備撤廃」の説教や「要求」――もっと正確にいえば、夢――は、客観的には、こういう絶望の産物にほかならない。

そういうことは「灰色の理論」であり、「たんなる理論」であると考える人は、二つの世界史的事実を思いおこしてほしい。一つは、トラストや婦人の工場労働の役割であり、もう一つは、一八七一年のコミューンと、ロシアにおける一九〇五年の十二月蜂起(三)である。

トラストを発展させ、児童と婦人を工場に駆りたて、そこで彼らを酷使し、堕落させ、言いようのない窮乏におとしいれることは、ブルジョアジーの仕事である。われわれは、こういう発展を「支持する」ものでも、こういう事態を「要求する」ものでもなく、むしろこれとたたかう。だが、これとどうたたかうのか？　われわれはこう言明する。トラストや婦人の工場労働は進歩的である。われわれは、手工業や、独占以前の資本主義や、婦人の家内労働へあともどりしようとは思わない。トラスト等々をこえ、またそれらをとおって、社会主義へ前進しよう、と。

これと同じことは、mutatis mutandis〔必要な変更をくわえて〕今日の人民の軍事教育にもあてはまる。今日、帝国主義的ブルジョアジー――とその他のブルジョアジー――は、全〔成年〕人民ばかりか、青年にも軍事教育をほどこしている。あすには、彼らは、たぶん、婦人に軍事教育をほどこすであろう。われわれはこれにたいして次のように答える。ますますけっこうである！　どうか、もっと

もっと速くやってくれたまえ！——それが速ければ速いほど、資本主義にたいする武装蜂起はそれだけ近くなる、と。社会民主主義者は、コミューンの先例を忘れないかぎり、どうして青年その他の軍事教育におびえたり、意気消沈したりすることがあろう。これは「理論」でも夢でもなく、事実である。もし、社会民主主義者があらゆる経済的事実と政治的事実を無視して、帝国主義時代と帝国主義戦争はかならず、自然的必然性をもって、不可避的に、このような事実を反復させるということを疑いはじめるとすれば、それはほんとうにとんでもないことであろう。

一八七一年五月にイギリスの一新聞に次のように書いたのは、コミューンを目撃した一ブルジョアであった。「もしフランス国民が婦人だけからなりたっていたなら、彼らはどんなに恐るべき国民になるだろう！」と。コミューンのときには、婦人や一三歳以上の青年も、男子とならんでたたかった。そして、ブルジョアジーを打倒するためのきたるべき戦闘でも、これ以外ではありえない。すぐれた武装をもつブルジョアジーが、貧弱な武装しかもたないか、あるいはまったく武装していないプロレタリアを撃ちたおすのを、プロレタリア婦人は手をこまねいて傍観してはいないだろう。彼女たちは、一八七一年のときのように、ふたたび武器を取るであろう。そして、現在の「おびえた」、あるいは意気沮喪した国民のなかから——より正確にいえば、政府のためにというよりむしろ日和見主義のために解体させられている現在の労働運動のなかから、まったくたしかに、おそかれはやかれ、だがまったくたしかに、革命的プロレタリアートの「恐るべき諸国民」の国際的同盟が成長してくるであろう。

いまや軍事化は、公共生活全体に浸透しつつある。軍事化がすべてになろうとしている。帝国主義は、世界の分割と再分割のための列強の激しい闘争である。だから、帝国主義は、小国といわず、中立国といわず、あらゆる国でいっそうの軍事化にみちびかざるをえない。これにたいして、プロレタリア婦人はどうすべきであろうか？？　あらゆる戦争とあらゆる軍事的なものを呪い、軍備撤廃を要求するだけでよいであろうか？　被抑圧階級の婦人は革命的であり、彼女たちはけっしてこのような恥ずべき役割にあまんじないであろう。むしろ彼女たちは、その息子たちにむかってこう言うであろう。

「おまえはまもなくおとなになって、銃をあたえられるでしょう。銃をとって軍事知識をすっかり、しっかりと学びとりなさい。この知識はプロレタリアにとって必要なものです。だがそれは、いまこの強盗戦争でやられているように、そして社会主義の裏切者どもがそうしろと勧めてい

るように、おまえの兄弟たちを撃つためではなく、おまえ『自身の』国のブルジョアジーとたたかうために必要なのです。はかない願いによってではなく、ブルジョアジーに勝利し、彼らを武装解除することによって、搾取と窮乏と戦争を終わらせるために必要なのです」と。

　現在の戦争と関連して、このような宣伝、まさにこのような宣伝をやろうと思わないなら、どうか、国際的・革命的社会民主主義だの、社会革命だの、戦争に反対する戦争だのと、大口をたたくことはやめてもらいたい。

三

　軍備撤廃論者は、とりわけ次の理由をあげて、人民の武装に反対している。すなわち、この要求は日和見主義への譲歩にみちびきやすいというのである。われわれはさきに、最も重要な点である、大衆闘争や社会革命にたいする軍備撤廃の関係を検討した。こんどは、日和見主義との関係の問題を検討しよう。軍備撤廃の要求を受けいれることのできない最も重要な理由の一つは、まさに、この要求とそれによって不可避的に呼びおこされる幻想とが、日和見主義にたいするわれわれの闘争を弱め、無力にするという点にある。

　疑いもなく、この闘争はインタナショナルの当面の問題である。日和見主義にたいする闘争と切りはなせないように結びつけられないなら、帝国主義にたいする闘争は、空文句か、人をあざむくものとなる。ツィンメルヴァルトとキーンタール(六九)の主要な欠陥の一つ、第三インタナショナルのこれらの萌芽を失敗に終わらせるおそれのある主要な原因の一つは、まさに次のことである。それは、日和見主義にたいする闘争の問題を、日和見主義者と手を切ることが避けられないという精神で解決するどころか、この問題を公然と提出さえしなかったことである。日和見主義は、──しばらくのあいだ──ヨーロッパの労働運動内で勝利をえた。すべての大国で、日和見主義の二つの主要な色合いが形づくられた。第一は、プレハーノフ、シャイデマン、レギーン等々の一派や、アルベール・トマとサンバ、ヴァンデルヴェルデ、ハインドマン、ヘンダソンなどの公然たる、恥知らずな、それだけにかえって危険の少ない社会帝国主義である。第二は、隠蔽されたカウツキー主義的日和見主義であって、ドイツのカウツキー＝ハーゼと「社会民主主義同志団」(七〇)、フランスのロンゲ、プレスマーヌ、マイエラスら、イギリスのラムゼイ・マクドナルドと「独立労働党」(七一)のその他の指導者たち、ロシアのマルトフ、チヘイッゼら、イタリアのトレーヴェスその他のいわゆる左派改

良主義者がそれである。

公然たる日和見主義は、革命にたいし、始まりつつある革命運動と革命的爆発にたいして、公然と、あからさまに反対して活動しており、政府への参加から戦時工業委員会(三二)(ロシアにおける)への参加まで、形はいろいろであるが、政府と直接の同盟を結んでいる。隠れた日和見主義者であるカウツキー派は、労働運動にとって、これよりもはるかに有害であり、危険である。なぜなら、彼らは、第一種のことを聞こえのよい「マルクス主義的な」言辞や「平和」スローガンによって隠蔽し、もっともらしく見せかけているからである。支配的な日和見主義のこの両形態にたいする闘争は、議会活動、労働組合、ストライキ、防衛問題等々の、プロレタリア政治のあらゆる分野でおこなわないわけにはいかない。だが、支配的な日和見主義のこの両形態の主要な特徴は、革命の具体的な諸問題や、現在の戦争と革命との関連という一般的な問題について、口をつぐんだり、言を左右にしたり、あるいは警察の意向に添った「回答をあたえている」点にある。しかも、まさにこのきたるべき戦争とプロレタリア革命との関連については、この戦争の直前に、非公式には数えきれないほどたびたび指示があたえられ、公式にも、バーゼル宣言(三三)のなかで、まったく明確な指示があたえられているのだ! 軍備撤廃の要求の主要な欠陥も、やはりそれが革命のすべての具体的な問題を回避する手段となっている点にある。それとも、軍備撤廃論者は、まったく新しい種類の、武装のない革命を主張しているのであろうか?

さきへすすもう。われわれは、改良のための闘争に反対するものでは絶対にない。もし、大衆の激動と大衆の憤激との爆発がたびたび起こっているにもかかわらず、われわれが努力しているにもかかわらず、この戦争からまだ革命が生まれてこないとすれば、人類は、わるくすると、さらに第二の帝国主義戦争を経験する好ましからぬ可能性があることを、われわれは無視するつもりはない。われわれが賛成する改良の綱領は、かならず日和見主義者にも鋒さきを向けているような綱領でなければならない。もしわれわれが、改良のための闘争を日和見主義者だけにまかせて、自分はいやな現実から逃避して、「軍備撤廃」という雲の上のホトトギス国に隠れるなら、日和見主義者を喜ばせるだけである。「軍備撤廃」はまさにいやな現実からの逃避であって、これとの闘争ではけっしてない。

そういう綱領のなかで、われわれはおおよそ次のように言うであろう。「一九一四―一九一六年の帝国主義戦争で祖国擁護というスローガンを提出すること、またそれを

承認することは、労働運動をブルジョアのうそで堕落させるものにすぎない」と。具体的な諸問題にたいするこういう具体的な回答は、軍備撤廃を要求したり、祖国擁護を「いっさい」拒否するよりも、理論的により正しく、プロレタリアートにとってはるかに有益であり、日和見主義者にとってはるかに耐えがたいであろう！　また、次のようにつけくわえて言ってもよかろう。「すべての帝国主義的大国――イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、ロシア、イタリア、日本、合衆国――のブルジョアジーは、まったく反動化してしまい、世界支配の渇望にすっかりとりつかれているので、これらの国のブルジョアジーのおこなう戦争は、すべて反動的なものでしかありえない。プロレタリアートは、すべてこのような戦争に反対しなければならないだけでなく、戦争の阻止を目的とする革命的蜂起が成功しなかった場合には、このような戦争では『自国』政府の敗北を願い、この敗北を革命的蜂起のために利用しなければならない」と。

民兵の問題については、われわれは次のように言おう。われわれは、ブルジョア的民兵にではなく、プロレタリア的民兵にだけ賛成する。だから、合衆国、スイス、ノルウェーなどのような国においてさえ、常備軍ばかりでなく、ブルジョア的民兵にたいしても、一人の兵も一文の金も出してはならない。ことに、最も自由な共和国でさえ（たとえばスイスで）、とくに一九〇七年と一九一一年以来、民兵がますますプロイセン式のものにされ、ストライキの弾圧に出動する部隊として悪用されているのを、われわれは見ているので、なおさらそうしてはならない、と。われわれは次のような要求をだすことができる。兵士による将校の選挙、軍法会議の全廃、外国人労働者と現地労働者との平等の地位（これは、たとえばスイスのように、ますます多くの外国人労働者を恥知らずに搾取し、無権利におとしいれている帝国主義国では、とくに重要である）、さらに、軍事技術習得の目的で、たとえば国の住民一〇〇人ごとに自由な団体をつくる権利、教官の自由選挙、教官の報酬の国庫負担等々。こうしてこそはじめて、プロレタリアートは、自分の主人である奴隷所有者のためにではなく、真に自分自身のためにすべての軍事知識を習得することができるであろう。これは、プロレタリアートにとって絶対に利益である。そして、ロシア革命も証明したように、およそ革命運動の成功は、たとえそれが局地的な成功――たとえば、一都市、一工業地区、軍隊の一部の獲得というような――にすぎない場合でも、すべて自然的必然性をもって、勝利したプロレタリアートに、まさにこのような綱領を実現させるであろう。

最後に、日和見主義は、たんなる綱領によって打ち破ることのできるものではけっしてなく、行動によってはじめてこれを打ち破ることができることは、いうまでもない。崩壊した第二インタナショナルの最大の、最も致命的な誤りは、言行を一致させなかったこと、偽善と革命的空文句（バーゼル宣言にたいするカウツキー一派の現在の態度を見よ）を非良心的に横行させたことであった。社会思想――すなわち、たんなる個人的気まぐれではなくて、なんらかの社会的環境によって生みだされ、ある社会的環境に影響を及ぼしうるような思想――としての軍備撤廃は、明らかに、戦争という血なまぐさい世界的な道から離れたところにいて、今後も離れていたいと願っている、いくつかの小国のささやかな、例外的に「平穏な」諸関係から生じるものである。ノルウェーの軍備撤廃論者の議論を考察してみるがよい。われわれは小国である。われわれの軍隊は小さい。われわれは、大国にはまったくさからうことができない（だからしてまた、どれかの大国グループとの帝国主義的同盟に力ずくで引きこまれることにも、まったくさからうことができない……）。われわれは、今後も静かにこの片隅にとどまって、片田舎政治をやってゆきたい。われわれは、軍備撤廃や、強制的な仲裁裁判所や、「永世」（たとえば、ベルギーのそれのような？）中立を要求する、うんぬん。

局外にとどまっていたいという小国の願望、世界の大闘争から遠く離れていて、たまたま得られた自分の独占的地位を利用して、偏狭な受動的存在をたもってゆきたいというブルジョア的な渇望――、これが、いくつかの小国で軍備撤廃の思想がある程度成功し普及することを可能にしている客観的な社会的環境である。もちろん、こうした渇望は幻想的で反動的である。帝国主義は、いずれにせよ、諸小国を世界政治の渦中に引きいれるであろう。

たとえば、スイスの帝国主義的環境は、スイスに、客観的に労働運動の二つの方向を指定している。日和見主義者は、ブルジョアジーと同盟して、スイスを帝国主義的ブルジョアジーの観光客から利潤を受け取るための共和制的・民主主義的団体に変え、「平穏な」独占的地位をかなりのんびりと静かに守ってゆくことにつとめている。スイスの真の社会民主主義者は、スイスの比較的自由な状態やその「国際的」地位を、ヨーロッパの労働者諸党内の革命的分子のいっそう緊密な同盟の勝利を助けるために利用することにつとめている。幸いにも、スイスは、「独自の」一国語を話さず、三つの世界語、しかも、スイスと境を接している交戦諸国でつかわれている言葉をつかっている。もしスイスの党の二万人の党員が毎週二ラッペの「戦時特別税」

を払うと仮定すれば、われわれは、たとえば一年間に二万フランを手にいれることになろう。この額は、始まりつつある労働者の決起や、塹壕内での労働者の交歓や、彼らが武器を「自」国の帝国主義的ブルジョアジーにたいして革命的に使用する見込みなどについて真実を伝えるあらゆる文書を、交戦諸国の労働者と兵士のために三ヵ国語で定期的に出版し、参謀本部の禁止をおかしてそれを配布するのに十二分な額である。

これは新しいことではない。これはまさに、『サンティネル』[三四]、『フォルクスレヒト』[三五]、『ベルナー・ターグヴァハト』のような最良の新聞がすでにやっていることである。もっとも、残念なことに、十分になされてはいないけれども。このような活動によってはじめて、アーラウ党大会[三六]のりっぱな決定を、たんなるりっぱな決定以上のものにならせることができるのである。そこで、次の質問を提出すれば十分である。「軍備撤廃」の要求は、社会民主主義者の活動のこの方向に沿ったものであろうか？

明らかにそうではない。客観的には、軍備撤廃は、労働運動の日和見主義的な、狭い民族的な、狭隘な小国的な方向に沿ったものである。客観的には、軍備撤廃は、小国のきわめて民族的な、特有の民族的な綱領であって、国際的革命的社会民主主義の国際的綱領ではないのである。

一九一六年九月にドイツ語で執筆
はじめ一九一七年九月と一〇月に雑誌『ユーゲント・インテルナツィオナーレ』第九号および第一〇号に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第三〇巻、一三一―一四三ページ所収
邦訳全集、第二三巻、八〇―九三ページ所収
ドイツ語からの翻訳

帝国主義と社会主義の分裂

日和見主義（社会排外主義の形をとった）がヨーロッパの労働運動にたいしてかちとった奇怪な、いとうべき勝利と帝国主義とのあいだに、なにか関連があるだろうか？

これは、現代の社会主義の根本問題である。そして、われわれは、第一に、現代が帝国主義時代であり、現在の戦争が帝国主義戦争であること、第二に、社会排外主義と日和見主義とのあいだには切りはなすことのできない歴史的結びつきがあり、この二つは同一の思想的＝政治的内容をもっていることを、われわれの党文献のなかで十分に明らかにしてきたので、いまやこの根本問題の検討にとりかかることができるし、またとりかからなければならない。

まず、帝国主義のできるだけ正確で完全な定義から始めなければならない。帝国主義は、資本主義の特殊な歴史的段階である。この特殊性は三とおりのものである。すなわち、帝国主義は、(一) 独占資本主義、(二) 寄生的な、または腐敗しつつある資本主義、(三) 死滅しつつある資本主義である。独占が自由競争にとって代わったことが、帝国主義の根本的な経済的特徴であり、その本質である。独占主義は、五つの主要な形態をとって現われている。(一) カルテル、シンジケート、トラスト。生産の集積が、これらの独占的な資本家団体を生みだすほどの程度に達したのである。(二) 大銀行の独占的地位。三つないし五つの巨大銀行が、アメリカ、フランス、ドイツの経済生活全体を支配している。(三) トラストと金融資本と金融寡頭制（金融資本とは銀行資本と融合した独占的産業資本である）とによる原料資源の奪取。(四) 国際的カルテルによる世界の（経済的）分割が始まっている。世界市場全体を支配し、それを「むつまじく」分けあっている――戦争がそれを再分割するときまで――このような国際的カルテルの数は、すでに一〇〇をこえている！　非独占的資本主義のもとでの商品輸出と区別された、とりわけ特徴的な現象としての資本の輸出は、世界の経済的および政治的＝地域的な分割と密接に結びついている。(五) 世界の地域的分割（植民地）は終了した。

アメリカとヨーロッパにおける、ついでまたアジアにおける資本主義の最高の段階としての帝国主義は、一八八九

八—一九一四年ごろに完全に形成された。スペイン＝アメリカ戦争（一八九八年）、イギリス＝ブール戦争（一八九九—一九〇二年）、日露戦争（一九〇四—一九〇五年）、一九〇〇年のヨーロッパの経済恐慌——これらが、世界史の新しい時代の主要な歴史的道標である。

帝国主義が寄生的な、または腐敗しつつある資本主義であることは、まず第一に、生産手段の私的所有のもとでのあらゆる独占の特徴である腐敗の傾向に現われている。共和主義的＝民主主義的な帝国主義的ブルジョアジーと、君主主義的＝反動的な帝国主義的ブルジョアジーとの差異は、まさに両者ともに生きながら腐敗しつつある結果、消失しつつある（といっても、個々の産業部門、個々の国、個々の時期に、資本主義が驚くほど急速に発展することがないというのではない）。第二に、資本主義の腐敗は、金利生活者、すなわち「利札切り」で生活する資本家の膨大な層がつくりだされていることに現われている。四つの先進的な帝国主義国、イギリス、北アメリカ、フランス、ドイツでは、有価証券の形をとった資本の額は、それぞれ一〇〇〇億フランから一五〇〇億フランにのぼる。これは、一国あたり年所得が五〇億—八〇億フランをくだらないことを意味する。第三に、資本輸出は自乗された寄生性である。第四に、「金融資本は支配を志向するものであって、自由を志向するものではない」。全線にわたる政治的反動が帝国主義の特性である。収賄、大がかりな買収、各種の疑獄。第五に、領土併合と不可分に結びついた被抑圧民族の搾取、とりわけ、ひとにぎりの「大」国による植民地の搾取は、「文明」世界を、幾億人の非文明民族の肉体にくっついた寄生虫へとますます変えてゆく。ローマのプロレタリアは社会の費用で生きていたが、今日の社会は近代プロレタリアの費用で生きている、というシスモンディの深遠な評言を、マルクスはとくに強調した(注)。だが、帝国主義はこの事態をいくらか変えている。帝国主義的大国のプロレタリアートの特権的な層は、いくぶんは幾億人の非文明民族の費用で生きている。

帝国主義が死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義であるという理由は、明らかである。資本主義から生まれてくる独占は、すでに資本主義の死滅であり、資本主義から社会主義への移行の始まりである。帝国主義による労働の大がかりな社会化（弁護論者のブルジョア経済学者が「絡み合い」とよんでいるもの）も、やはりこのことを意味する。

帝国主義のこのような定義をかかげることによって、われわれはK・カウツキーと完全に対立する。カウツキーは、帝国主義を「資本主義の一段階」とみることを拒んで、帝

国主義とは金融資本の「このんでとる」政策であり、「農業」国を併合しようとする「工業」国の志向である、という定義をあたえている。* このカウツキーの定義は理論的には徹頭徹尾いつわりである。帝国主義の特殊性は、まさに産業資本ではなくて、金融資本の支配にあり、まさに農業国だけではなくて、あらゆる国を併合しようとする志向にある。カウツキーは、帝国主義の政治を帝国主義の経済から切りはなし、政治における独占主義を経済における独占主義から切りはなすことによって、「軍備撤廃」とか、「超帝国主義」、等々のたわごとのような、彼の卑俗なブルジョア改良主義への道をならしている。この理論上のいつわりの意味と目的は、まったく、帝国主義のきわめて深刻な諸矛盾をあいまいにし、こうして帝国主義の弁護論者である公然たる社会排外主義者や日和見主義者との「統一」という理論を合理化することに帰着する。

* 「帝国主義は高度に発展した産業資本主義の産物である。帝国主義は、そこにどんな民族が住んでいるかにかかわりなく、ますます大きな農業地域を隷属させ編入しようとするあらゆる産業資本主義的民族の志向である。」（カウツキー『ノイエ・ツァイト』一九一四年九月一一日）

カウツキーがこのようにマルクス主義と絶縁したことについては、われわれは『ソツィアル－デモクラート』でも、『コンムニスト』[七六]でも、すでに十分詳しく論じておいた。わがロシアのカウツキー主義者たち、アクセリロードやスペクタートルを先頭とする「組織委員会派」は、マルトフや、かなりの程度までトロツキーをもふくめて、流派としてのカウツキー主義の問題は黙殺したほうがよいと考えた。彼らは、カウツキーが戦争中に書いたことを擁護するだけの勇気はなく、たんにカウツキーをほめそやすか（アクセリロードがドイツ語で書いた彼の小冊子でやっているように。組織委員会は、この小冊子のロシア語版を発行すると約束している）、あるいは、カウツキーが自分は反対派の一員であると誓って、偽善的なやり方で自分の排外主義的な言明を打ち消そうと試みている私信を引用する（スペクタートル）だけですませている。

帝国主義についてのカウツキーの「見解」――それは、帝国主義の美化に等しい――は、ヒルファディングの『金融資本論』にくらべて退歩であるばかりか（いまヒルファディング自身は、どんなに熱心にカウツキーを擁護し、社会排外主義者との「統一」を擁護しているにせよ！）、社会自由主義者J・A・ホブソンにくらべてさえ退歩であることを、指摘しておこう。このイギリスの経済学者は、マルクス主義者とよばれたいという野心を露ほどももっていないのであるが、その一九〇二年の著作*で、はるかに深く帝

国主義を規定し、帝国主義の諸矛盾を暴露している。次にかかげるのは、この著作家（彼の著書には、カウツキーの平和主義的、「調停派的」俗論が、ほとんどそっくり見いだされる）が、帝国主義の寄生性という、とくに重要な問題について書いていることである。

＊ J・A・ホブソン『帝国主義論』ロンドン、一九〇二年。

ホブソンの意見によれば、古い諸帝国の力を弱めたものは、次の二種類の事情であった。（一）「経済的寄生」と、（二）従属民族で軍隊を編成したこととである。「第一の事情は、経済的寄生の習慣であって、この習慣によって支配国家は、自国の支配階級を富ませ自国の下層階級を買収しておとなしくさせておくために、その属領、植民地、従属国を利用したのである。」第二の事情については、ホブソンはこう書いている。

「帝国主義の盲目性」（帝国主義者の「盲目性」というこの聞きふるした文句は、「マルクス主義者」のカウツキーの口から出されるよりは、社会自由主義者のホブソンの口から出されるほうが、所をえている）「の最も奇妙な徴候の一つは、イギリス、フランス、その他の帝国主義諸国民がこの道をすすんでいるその無頓着ぶりである。この点でいちばんゆきすぎのはなはだしいのは、イギリスである。われわれがわがインド帝国を征服した戦闘の大部分は、現地民で編成されたわが軍隊によっておこなわれた。インドでは、また最近ではエジプトでも、大きな常備軍がイギリス人の指揮のもとにおかれている。われわれのアフリカ平定に関連した諸戦闘は、南部アフリカでのそれを除けば、ほとんどすべて、現地民がわれわれのためにおこなったものである。」

中国が分割されるという見とおしに面して、ホブソンは次のような経済的評価をおこなっている。「そのときには、西ヨーロッパの大部分は、今日これらの国々の一部、すなわち、南イングランド、リヴィエラ、さらにイタリアやスイスの最も観光客の多い地域や富者の居住地域がもっているのと同じ外観と性格をおびるようになるかもしれない。すなわち、そこには、極東から配当金や年金を受け取る富裕な貴族の一小群のほかに、おかかえ自由職業者と商人の、それよりいくらか大きな一群と、召使や運輸業および工業製品の最終の仕上げに従事する労働者のさらに大きな一群とがいるという状態である。だが、主要な産業部門は消滅してしまい、大衆消費用の食品と工業半製品はアジアや、またアフリカから貢物として流れこむようになるであろう。」「西欧諸国のいっそう広範な連合、諸大国のヨーロッパ連邦がわれわれのまえにひらく可能性は、右のようなものである。そういう

連邦は、世界文明の事業を前進させせないばかりか、西欧の寄生状態という巨大な危険を意味するものとなりかねない。すなわち、その上層諸階級がアジアや、またアフリカから膨大な貢物を受け取り、この貢物を用いて多数の手なずけられた従者や召使――もはや大衆消費用の農産物や工業製品の生産には従事しないで、新しい金融貴族の統制下に個人的サービスあるいは第二義的な工業労働に従事するところの――を養っている先進的工業諸国民の一群が分かれでるということである。このような理論」(見とおし、と言うべきところであろう)「を、考慮に値しないものとして鼻であしらおうとする者は、すでにこういう状態におちいっている今日の南イングランドの諸地区の経済的および社会的条件に思いをいたすがよい。また、金融業者、『投資家』(金利生活者)、政治の部面や商工業における彼らの役人や職員たちの同じような群が、中国を彼らの経済的支配に従属させ、世界がこれまでに知ったもののうちで最大のこの潜在的な貯水池から利潤を汲みだして、それをヨーロッパで消費するとき、このような制度がどんなに大規模に拡大されうるかを、考えてみるがよい。もちろん、情勢ははなはだ複雑であり、世界の諸力のうごきははなはだ予測しがたいものがあるから、こういう未来の解釈が、あるいは他のどのような解釈にしても、その一つの方向だけが、確実にありそうだというわけにはいかない。しかし、今日西ヨーロッパの帝国主義を支配している諸勢力は、この方向にうごいており、抵抗にあわないかぎり、他の方向にそらされないかぎり、まさにこのような過程の完成にむかってはたらくであろう。」

このような「抵抗」は、革命的プロレタリアートだけがおこなうことができ、しかも社会革命の形でのみおこなうことができるということは、社会自由主義者のホブソンには理解できない。それだからこそ、彼は社会自由主義者なのである! しかし、彼は、すでに一九〇二年に、「ヨーロッパ合衆国」の意義の問題をも(カウツキー主義者トロツキーのご参考までに言っておく!)、また各国の偽善的なカウツキー派があいまいにしている事柄のすべてをも、みごとに考察しているのである。すなわち、日和見主義者(社会排外主義者)は、まさにアジアとアフリカを踏台にして帝国主義的ヨーロッパをつくりだすために、帝国主義的ブルジョアジーに協力しているということ、日和見主義者は、客観的には、帝国主義的超過利潤によって買収されて、資本主義の番犬に、労働運動腐敗化の実行者に変えられてしまった一部の小ブルジョアジーと労働者階級の若干の層とをあらわしているということが、それである。

ほかならぬ帝国主義的ブルジョアジーと、いま（長期にわたって？）労働運動内で勝利をおさめた日和見主義とのこの経済上の最も深い結びつきを、われわれは、論文のなかだけでなく、わが党の諸決議のなかでも何度も指摘してきた。われわれは、このことから、とりわけ、社会排外主義との分裂が避けられないという結論を引きだした。ところが、わがカウツキー派は、この問題を回避するほうがよいと考えた！　たとえば、マルトフは、『組織委員会在外書記局通報』(三)（一九一六年四月一〇日付、第四号）に次のようなことばで書きあらわされている詭弁を、すでに彼の講演のなかで言いはなったのである。

──「……もし知的発達の点で『インテリゲンツィア』の水準に最も近づいた、最も熟練した労働者群が宿命的に革命的社会民主主義を捨てて日和見主義に身を投じたとすれば、革命的社会民主主義の事業ははなはだかんばしくなく、むしろ絶望的とさえ言えるであろう。……」

一定の労働者層が日和見主義と帝国主義的ブルジョアジーとの側に身を投じたという事実が、「宿命的」にという愚かしいことばとある種の「すりかえ」とによって回避されているのだ！　しかも、組織委員会の詭弁家たちに必要なものは、まさにこの事実を回避することにほかならなかった！　彼らは、カウツキー主義者のヒルファディングその他多くの人々がいま吹きたてている、あの「お役所式楽観論」でお茶をにごす。いわく、客観的諸条件は、プロレタリアートの統一と革命的潮流の勝利とを保障している！いわく、われわれはプロレタリアートにかんしては「楽観論者」である！

しかし、実際には、これらすべてのカウツキー主義者、ヒルファディング、組織委員会派、マルトフ一派が楽観論者であるのは、……日和見主義にかんしてなのである。これが肝心の点である！

プロレタリアートは、資本主義の子──ヨーロッパ資本主義だけでなく、帝国主義的資本主義だけでもなく、世界資本主義の子である。世界的な尺度で見れば、五〇年早いにせよ五〇年遅いにせよ──こういう尺度で測れば、これは部分的な問題である──、たしかに、「プロレタリアート」は統一を達成するで「あろう」し、プロレタリアートのあいだで革命的社会民主主義派が「不可避的に」勝利するであろう。だが、カウツキー主義者諸君。問題はそのことにはなく、いま諸君がヨーロッパの帝国主義諸国で日和見主義者に追従していることにあるのだ。この日和見主義者は、階級としてのプロレタリアートとは無縁のものであり、ブルジョアジーの召使、手先、その影響の伝達者であ

って、彼らから解放されなければ、労働運動はブルジョア的労働運動にとどまるのである。諸君が日和見主義者との、レギーンやダーヴィットら、プレハーノフら、またはチヘンケーリやポトレソフらなどとの「統一」を説いているのは、客観的には、帝国主義的ブルジョアジーが労働運動内の彼らのいちばん有能な手先を使って労働者を奴隷化するのを擁護することである。世界的な尺度で見れば革命的社会民主主義の勝利は絶対に不可避であるが、しかしこの勝利は、諸君にさからってのみ近づきつつあり、また近づくであろうし、諸君にさからってのみなしとげられつつあり、またなしとげられるであろう。それは、諸君にたいする勝利となるであろう。

一九一四―一九一六年に全世界であのようにはっきり袂を分かった今日の労働運動内の二つの傾向、むしろ二つの党は、エンゲルスとマルクスがイギリスで、およそ一八五八年から一八九二年まで、数十年のあいだ考察してきたものである。

マルクスもエンゲルスも、世界資本主義の帝国主義時代を見ずに死んだ。この帝国主義時代は、一八九八―一九〇〇年以後にようやく始まったのである。だが、イギリスの特殊性は、この国ではすでに一九世紀のなかばから、帝国主義のすくなくとも二つの最大の特徴が存在していたことにある。すなわち、(一)広大な植民地、(二)独占利潤(世界市場における独占的な地位の結果として)がそれである。このどちらの点でも、イギリスは当時の資本主義諸国のうちの例外であった。そして、エンゲルスとマルクスは、この例外を分析して、そのことと、イギリスの労働運動内での日和見主義の(一時的)勝利との関連を、まったく明瞭に、明確に指摘した。

一八五八年一〇月七日付のマルクスにあてた手紙のなかで、エンゲルスはこう書いている。「イギリスのプロレタリアートは、事実上ますますブルジョア化しており、そのため、すべての国民のうちで最もブルジョア的なこの国民は、ついにはブルジョアジーとならんで、ブルジョア的貴族とブルジョア的プロレタリアートをもつところまですすみたがっているように見える。全世界を搾取している国民としては、これは、たしかに、ある程度もっともなことである。(二)」一八七二年九月二一日付のゾルゲにあてた手紙で、エンゲルスは、ヘイルズ(Hales)が、マルクスが「イギリスの労働指導者たちは身売りした」と言ったという理由で、インタナショナルの〔イギリス〕連合評議会で大騒ぎをもちあげ、マルクスにたいする譴責決議をとおしたことを報じている。マルクスは、一八七四年八月四日付でゾルゲにあててこう書きおくっている。(イギリスの)「都市労

働者についていえば、その指導者の一味全体が議会にはいらなかったことは残念である。それが、この賤民どもをやっかいばらいするいちばん確かな道だったのに。」エンゲルスは、一八八一年八月一一日付のマルクスにあてた手紙のなかで、「ブルジョアジーに買収されたか、すくなくとも彼らから金をもらっている連中に引きまわされている最悪のイギリス労働組合」と言っている。一八八二年九月一二日付のカウツキーにあてた手紙のなかで、エンゲルスはこう書いている。「イギリスの労働者は植民政策をどう考えているか、とおたずねですね。さよう、一般に政治についてと彼らが考えているのとまさに同じように考えています。じっさい、当地には労働者政党はなく、保守党と自由主義的急進党とがあるだけです。そして、労働者は、イギリスの世界市場の独占と植民地独占とのおすそわけにあずかって、のんびり暮らしている。[二]」

一八八九年一二月七日には、エンゲルスはゾルゲにあててこう書きおくっている。「……当地で」(イギリスで)「最も胸くその悪いものは、労働者の血や肉まで深くしみこんだブルジョア的な『お上品ぶり』(respectability)である。……私がいちばんりっぱな男と思っているトム・マンすら、ロンドン市長閣下と昼食をともにするのだ、などと吹聴したがるしまつである。これとフランス人とを対比してみれば、革命というものがどんなに役に立つかがわかるであろう。」一八九〇年四月一九日付の手紙にはこう書いている。(イギリスの労働者階級の)「運動は地表の下ですすんでいて、ますます広範な層をまきこんでおり、まさにこれまで停滞していた最下層の(傍点はエンゲルスのもの)大衆のあいだで、それが最も顕著である。そして、この大衆が突然自分自身をさとる日、自分たちがこの動きつつある巨大な大衆なのだということに気づく日は、もう遠くはない。[三]」一八九一年三月四日——「崩壊した波止場労働者組合の失敗。古い保守的な労働組合、富んだ、だからこそ臆病な組合だけが場面に残っている。……」一八九一年九月一四日にはこう書いている。ニューキャスルの労働組合大会で古い組合主義者たち、八時間労働日の反対者たちが敗北を喫した。「そして、ブルジョア新聞も、ブルジョア的労働者党の敗北を完全に……認めている。」(傍点はすべてエンゲルスのもの)……

エンゲルスが、数十年のあいだ彼が繰りかえし述べてきたこれらの思想を、公けに、出版物のなかでも表明したことは、一八九二年の『イギリスにおける労働者階級の状態』第二版への彼の序言が証明している。そこには、「労働者の大多数」に対置して、「労働者階級中の貴族」のことが、「特権的な少数の労働者」のことが、論じられている。一

八四八年から一八六八年までのイギリスの特権的な地位から「持続的な利益」を受けたのは、労働者階級の「わずかばかりの特権的な、保護された少数者」だけであって、「大多数の労働者は、せいぜいのところその状態が一時的に改善されただけであった」。……イギリスの工業上の「独占の崩壊につれて、イギリスの労働者階級はこの特権的地位を失うであろう」。……「新しい」組合、不熟練労働者の組合の組合員は、「一つのはかりしれない長所をもっている。それは、彼らの心がまだ処女地であって、よりよい地位にある『古い労働組合員』の頭を混乱させている伝来の『お上品な』ブルジョア的偏見に、まったくとらわれていないことである」。……イギリスで「いわゆる労働者議員」とよばれているのは、「労働者といういわが資格を自分からすすんで自分の自由主義の大海のなかに沈めてしまいたがっているという理由で、労働者であることを大目にみてもらっている」連中である。(三)

われわれは、読者が全体としてそれを研究できるように、わざとマルクスとエンゲルス自身のことばをかなり詳しく抜き書きした。そして、これは研究されなければならない。これについては、注意ぶかく熟考する値うちがある。なぜなら、ここに、帝国主義時代の客観的諸条件が指示する労働運動の戦術の中心点があるからである。

この点でも、カウツキーはすでに、「問題の所在をくらまし」、マルクス主義を日和見主義者とのあまったるい調停にすりかえる試みをやった。この戦争はイギリスの独占を破壊するものだと言って、ドイツ側における戦争を正当化しているあからさまな、素朴な社会帝国主義者（レンシュのような）と論戦しながら、カウツキーは、この明白ないつわりを、同じように明白な別のいつわりで「訂正している」。彼は、鉄面皮ないつわりをあまったるいいつわりにおきかえているのである！ イギリスの工業上の独占はとっくの昔に打破されている、と彼は言う。それは、とっくの昔に破壊されていて、いまさら破壊するまでもなく、また破壊することもできない、と。

この議論のいつわりはどこにあるか？

第一に、イギリスの植民地独占の問題を回避していることにある。ところが、エンゲルスは、さきに見たように、いまから三四年前の一八八二年に、すでにまったくはっきりとこれを指摘している！ イギリスの工業上の独占は破壊されたが、その植民地独占はいまなお残っているばかりか、いちじるしく強まっている。というのは、地球全体がすでに分割されてしまったからである！ カウツキーは、そのあまったるい嘘によって、「戦争をする理由がない」というブルジョア平和主義的、日和見主義的＝俗物的な思

想をもちこんでいる。事実はその反対であって、今日資本家には戦争をやる理由があるばかりでなく、資本主義を維持しようと思えば、彼らは戦争をやらないわけにはいかないのである。なぜなら、植民地を暴力的に再分割せずには、新しい帝国主義国は、より古い（そして、より弱い）帝国主義的大国のもっている特権を手にいれることができないからである。

第二に、どうしてイギリスの独占ということが、イギリスで日和見主義が（一時）勝利した理由の説明になるのか？　独占は超過利潤を、すなわち、正常な、全世界で通常のものとなっている資本主義的利潤をこえた余分の利潤を、もたらすからである。資本家は、自国の労働者を買収し、ある種の同盟（ウェッブ夫妻が記述している、イギリスの労働組合とその雇主たちの有名な「同盟」を思いおこせ）――ある一国の労働者とその資本家とがほかの国々に対抗して結ぶ同盟――をつくりだすために、この超過利潤の一部分を（しかも、すくなからぬ部分をさえ！）投げあたえることができる。イギリスの工業上の独占はすでに一九世紀末に破壊されていた。このことは、争う余地がない。しかし、この破壊はどういうふうにおこなわれたのか？　あらゆる独占が消滅するようなやり方でおこなわれたのだろうか？

もしそうだったら、カウツキーの（日和見主義との）調停「理論」も、ある程度まで正当なものとなったであろう。しかし、そうでなかったところに問題の核心がある。帝国主義とは独占資本主義である。どのカルテル、トラスト、シンジケートも、どの巨大銀行も、すべて独占である。超過利潤は消滅せずに、いまなお残っている。特権的な、金融的に富んだ一国による他のすべての国々の搾取は、いまなお残っており、さらに強まった。ひとにぎりの富んだ国国――もし自立的な、真に巨大な、「近代的」な富を問題とするなら、そういう国の数はわずか四つである、すなわち、イギリス、フランス、アメリカ合衆国、ドイツ――は、独占体を膨大な規模に発展させ、幾十億でないまでも、幾億にのぼる超過利潤を得ており、他の国々の幾億の住民を「踏台にして」、特別に豪華な、特別に肥えた、特別に扱いやすい獲物の分けまえをめぐってたたかいあっている。

これが、帝国主義の経済的および政治的本質であるが、カウツキーは、この帝国主義の最も深い矛盾を暴露しないで、塗りかくしている。

帝国主義的「大」国のブルジョアジーは、年に一―二億フランの金を投じて、「自国の」労働者の上層を買収する経済的可能性をもっている。なぜなら、彼らの超過利潤はおそらく一〇億フランほどにのぼるからである。そして、

このわずかな施し物が、労働者大臣や、「労働者議員」（エンゲルスがこの概念にあたえたすばらしい分析を思いおこせ）や、戦時工業委員会の労働者側委員や、労働官僚や、狭隘なツンフト的組合に組織された労働者や、職員等々のあいだにどう分配されるかということは、すでに第二義的な問題である。

一八四八年から一八六八年にかけて、またいくぶんはそのあとでも、独占的地位をもっていたのはイギリス一国であった。だからこそ、イギリスでは、数十年にわたって日和見主義が勝利することができたのである。きわめて豊かな植民地をもつ国も、工業上の独占をもつ国も、ほかにはなかった。

一九世紀の最後の三分の一は、新しい帝国主義時代への過渡期であった。いまでは、一国だけでなく、きわめて少数ではあるが、いくつかの大国の金融資本が、独占的地位を占めている。（日本とロシアでは、軍事力の独占や、広大な領土の独占、あるいは異民族、中国その他を略奪する特別の便宜の独占が、現代の最新の金融資本の独占を、一部はおぎない、一部は代位している。）この相違からして、イギリスの独占が数十年のあいだ挑戦をうけなかったというようなことが、起こりえたのである。現代の金融資本の独占は激しい挑戦をうけており、帝国主義戦争の時代が始まっている。以前には、一つの国の労働者階級を数十年のあいだ買収し堕落させることが可能であった。いまでは、そういうことはありそうもなく、おそらく不可能でさえある。しかし、そのかわりに、おのおのの帝国主義的「大」国は、より小さな層ではあるが（一八四八―一八六八年のイギリスにくらべて）、「労働貴族」の層を買収できるし、また現に買収している。以前には、エンゲルスのすばらしく深遠な表現を借りていえば、「ブルジョア的労働者党」は一つの国でしか成立できなかった――というのは、一つの国だけが独占的地位を占めていたからである――が、そのかわりに、その党は長いあいだつづいた。いまでは、「ブルジョア的労働者党」は、すべての帝国主義国にとって不可避であり、典型的であるが、それらの国が獲物の分けまえをめぐって必死の闘争をやっているので、このような党が幾多の国で長いあいだ勝利を占めることができるということは、ありそうもない。なぜなら、トラスト、金融寡頭制、物価騰貴、等々は、ひとにぎりの上層分子の買収を可能にしながらも、プロレタリアートと半プロレタリアートの大衆をますます激しく押しつけ、抑圧し、滅ぼし、苦しめているからである。

一方では、ブルジョアジーと日和見主義者が、ひとにぎりの最も富んだ、特権的な民族を、残りの人類の肉体にと

りついた「永久の」寄生虫に変えようとする傾向、またすばらしい大量殺戮器材で装備された最新の軍国主義の助けを借りて、ニグロ、インド人、等々を隷属下に引きとめることによって、彼らの搾取のうえに「安逸な生活をむさぼろう」とする傾向がある。他方には、以前よりもいっそう激しく抑圧され、帝国主義戦争のあらゆる苦難をうけている大衆が、このくびきを振りおとし、ブルジョアジーを打倒しようとする傾向がある。今日では、労働運動の歴史は、不可避的に、この二つの傾向のあいだの闘争をつうじて展開されるであろう。なぜなら、この第一の傾向は、偶然のものではなく、経済的な「根拠」をもっているからである。ブルジョアジーは、すでにすべての国に社会排外主義者の「ブルジョア的労働者党」を生みだし、養い、確保している。たとえばイタリアのビッソラーティの党のような、すでに形をなした党、完全に社会帝国主義的な党と、ポトレソフ、グヴォズデフ、ブルキン、チヘイッゼ、スコーベレフの一派の、いわばなかば形をなしただけの、党まがいのものとの相違は、本質的なものではない。重要なことは、労働貴族の層のブルジョアジー側への経済的分離が成熟し完了したということであって、この経済的事実、諸階級の相互関係におけるこの移動が、なんらかの政治的形態をとるようになるのは、たいして「骨のおれる」ことではないであろう。

このような経済的基礎のうえに、最新の資本主義の政治的諸施設――新聞、議会、組合、会議、等々――が、いんぎんで、温順で、改良主義的で、愛国主義的な職員や労働者のための経済的特権や施し物に見合った政治的特権や施し物をつくりだしている。内閣または戦時工業委員会、議会や各種の委員会、「堅実な」合法新聞の編集局や、それにおとらず堅実で「ブルジョア的に従順な」労働者団体の指導部の収入の多い、安楽な地位――こういうものが、帝国主義的ブルジョアジーが「ブルジョア的労働者党」の代表者や支持者を誘惑したり、報賞したりする手段である。

政治的民主主義の機構も、これと同じ方向に作用している。今世紀では、なにごとも選挙なしにはすまされない。大衆なしにやってゆくことはできない。ところで、出版と議会制度との時代には、へつらいや、うそや、ぺてんや、俗うけのするはやり文句によるごまかしや、労働者になんでもすきな改良と福利をあたえるという――労働者がブルジョアジーの打倒のための革命的闘争を放棄しさえすれば――四方八方にふりまかれる約束の、複雑多岐な制度を系統的に実施し、しっかり整備することなしには、大衆をついてこさせることができない。私は、「ブルジョア的労働者党」の古典国におけるこの制度の最も先進的で巧妙な代

表者のひとりであるイギリスの大臣、ロイドージョージの名をとって、この制度をロイドージョージ主義と名づけたい。このロイドージョージは、第一級のブルジョア的実務家で、政治的狡猾漢で、人気のある雄弁家で、労働者の聴衆のまえで、どんなものでもお望みしだいの演説を、ときには革、革、革命的な演説をさえやることができ、従順な労働者のためには、社会改良の形で（保険その他）かなりの施し物をとってやることができる男であって、ブルジョアジーのためにすばらしい奉仕を、しかもまさに労働者のあいだで果たしており、大衆を精神的に従属させることが、どこよりも必要で、しかもどこよりも困難なところで、すなわちほかならぬプロレタリアートのあいだで、ブルジョアジーの影響を伝達しているのである。*

* 最近私はイギリスの一雑誌で、ロイドージョージの政敵である一トーリ党員の書いた『トーリ党の立場からみたロイドージョージ』という論文を目にした。戦争は、このロイドージョージがブルジョアジーのどんなにすぐれた番頭かということに、この政敵の目をひらいた！　トーリ党はロイドージョージと仲なおりした！

ところで、ロイドージョージと、シャイデマン、レギーン、ヘンダソンやハインドマン、プレハーノフ、ルノデルの一派との差異は、はたして大きなものであろうか？　次のように言って反論する人がいるだろう。このあとの部類の人々のうち何人かは、いつかはマルクスの革命的社会主義にかえってくるであろう、と。そうかもしれない。しかし、政治的尺度すなわち大衆的尺度でこの問題を取りあげるときには、これはとるに足りない差異でしかない。今日の社会排外主義的指導者たちのうちの個々の人間が、プロレタリアートの側にかえってくるということはありうる。しかし、社会排外主義的潮流、または（同じことだが）日和見主義的潮流が消滅することはありえないし、それが革命的プロレタリアートの側に「かえってくる」ことはありえない。マルクス主義が労働者のあいだで人気のあるところでは、この政治的潮流、この「ブルジョア的労働者党」は、マルクスの名で誓ったり断言したりするであろう。彼らがそうするのを禁止するわけにはいかない。これは、商事会社がどんなレッテル、どんな看板、どんな広告を使おうと、それを禁止できないのと同じである。被抑圧階級のあいだに人気のある革命的指導者の名まえを、彼の死後にその敵が自分のものにして被抑圧階級をだまそうと試みることは、歴史上いつでもあったことである。

じじつ、政治的現象としての「ブルジョア的労働者党」は、すでにすべての資本主義的先進国につくりだされており、これらの党――グループでも、潮流等々でも、まった

く同じことである――にたいして全線にわたって断固たる、容赦ない闘争をおこなわずには、帝国主義との闘争も、マルクス主義も、社会主義的労働運動も、問題になりえないのである。ロシア国内のチヘイッゼ派議員団、(六七)『ナーシェ・デーロ』(六八)、『ゴーロス・トルダー』(六九)も、国外の「組織委員会派」も、この種の一つの党の変種にすぎない。これらの党が社会革命以前に消滅するかもしれないと考える根拠はなにもない。反対に、この革命が近づけば近づくほど、それが力づよく燃えあがれば燃えあがるほど、革命の過程で転移と飛躍が急激に、強力になればなるほど、労働運動の内部では、日和見主義的＝小ブルジョア的潮流にたいする革命的＝大衆的潮流の闘争が、ますます大きな役割を果たすであろう。カウツキー主義は、なんら独立の潮流ではない。それは、大衆のなかにも、ブルジョアジーの側に寝がえった特権層のなかにも、根をもっていない。しかし、カウツキー主義の危険性は、それが過去のイデオロギーを利用してプロレタリアートと「ブルジョア的労働者党」とを和解させ、両者の統一を主張し、そうすることでこの党の権威を高めようと骨おっていることにある。あからさまな社会排外主義者には、大衆はもはやついてゆかない。イギリスの労働者集会ではロイド－ジョージは口笛でやじりたおされ、ハインドマンは脱党し、ルノデルとシャイデマンら、ポトレソフとグヴォズデフは警察の保護を受けている。カウツキー主義による社会排外主義者の隠れた擁護こそ、なによりも危険である。

カウツキー主義の詭弁のうちで最もひろまっている詭弁の一つは、「大衆」を引合いにだすことである。いわく、われわれは大衆や大衆組織から分離したくはない！　と。しかし、エンゲルスがこの問題を立てたやり方を熟考してみたまえ。一九世紀には、イギリスの労働組合の「大衆組織」は、ブルジョア的労働者党に味方していた。マルクスとエンゲルスは、それだからといってこの党と和解しないで、それを暴露した。第一に、労働組合組織が直接にはプロレタリアートの少数者しかふくんでいないことを、彼らは忘れなかった。当時のイギリスでも、今日のドイツでも、組織にはいっているのは、プロレタリアートの五分の一以下である。資本主義のもとでプロレタリアの大多数を組織に加入させることができると、本気で考えることはできない。第二には――これが主要な点であるが――、問題は組織の成員数よりも、むしろその組織の政策の現実の客観的意義にある。すなわち、この政策が大衆を代表するものであるか、大衆に、つまり資本主義からの大衆の解放に、役だつものであるか、それとも、少数者の利益を代表し、この少数者と資本主義との和解を代表するものであるか、と

いうことにある。一九世紀のイギリスはまさにこのあとの場合であったし、今日のドイツその他もそうである。

エンゲルスは、古い労働組合の「ブルジョア的労働者党」、特権的な少数者と、「下層の大衆」、真の多数者とを区別し、「ブルジョア的お上品さ」に感染していないこの大衆に呼びかけている。これこそ、マルクス主義的戦術の核心である！

プロレタリアートのまさにどの部分が社会排外主義者と日和見主義者のうしろについており、また今後もついてゆくかを、われわれは——まただれにしても——予測することはできない。闘争だけがこれを示すであろう。社会主義革命だけがこれを最後的に決定するであろう。しかし、われわれが確実に知っていることは、帝国主義戦争における「祖国擁護論者」が少数者をしか代表していないことである。だから、われわれがひきつづき社会主義者でありたければ、もっと下層に、もっと深く、真の大衆のところにはいってゆくことが、われわれの義務である。これこそ、日和見主義との闘争の全意義であり、この闘争の全内容である。われわれは、日和見主義者と社会排外主義者が実際には大衆の利益を裏切り、売りわたしていること、彼らが労働者の少数者の一時的な利益を守っていること、彼らがブルジョア思想やブルジョア的影響の伝達者であること、彼らが実際にはブルジョアジーの同盟者であり手先であることを暴露し、そうすることによって大衆に、彼らの真の政治的利益を見わけること、帝国主義戦争と帝国主義的休戦とのあらゆる長い、苦痛にみちた転変をつうじて、社会主義のために、革命のためにたたかうことを教える。

日和見主義との分裂が避けられず必要であるということを大衆に説明すること、日和見主義との容赦ない闘争によって大衆を革命へ訓練すること、国権的自由主義的な労働者政治のあらゆる醜行を隠蔽するためでなく、それを暴露するために、戦争の経験を利用すること——これが、世界の労働運動における唯一のマルクス主義的方針である。

次の論文では、われわれは、カウツキー主義と区別しての、この方針の主要な特徴をまとめてみよう。

一九一六年一〇月に執筆
一九一六年一二月に『ソツィアルーデモクラート論集』第二号に発表
署名——エヌ・レーニン
全集、第五版、一六三——一七九ページ所収
邦訳全集、第二三巻、一一二——一二九ページ所収

青年インタナショナル（覚え書）

右の標題で、「社会主義的青年組織国際連合の戦闘的宣伝機関誌」が、一九一五年九月一日からスイスでドイツ語で発行されている。この出版物は、全部ですでに六号出ているが、これは一般に注目すべき出版物であり、さらに、外国の社会民主諸党や青年諸組織と接触する機会をもっているわが党のすべての党員にたいし、同誌に注意をはらうようにぜひとも勧める必要がある。

ヨーロッパの公認の社会民主党の大多数は、現在、最も卑しい、卑劣な社会排外主義および日和見主義の立場に立っている。ドイツの党、フランスの党、イギリスのフェビアン派[8]の党と「労働党」[9]、スウェーデンの党、オランダの党（トルルストラの党）、デンマークの党、オーストリアの党などが、それである。スイスの党では、極端な日和見主義者が分離して、無党派的な「グリュトリ同盟」[10]をつくった（労働運動にとってはたいへんありがたいことだ）にもかかわらず、多くの日和見主義的、社会排外主義的指導者やカウツキー派の指導者が、社会民主党そのものの内部に残っていて、党の事業に非常に大きな影響を及ぼしている。

ヨーロッパのこういう事態のもとで、社会主義的青年組織連合には、帝国主義的ブルジョアジーの側に寝がえった支配的な日和見主義に反対して、革命的国際主義のため、真の社会主義のためにたたかうという、巨大な、やりがいのある——だが、それだけに困難な——任務が課せられている。『青年インタナショナル』には、革命的国際主義を擁護したよい論文がいくつも掲載されており、その全紙面は、現在の戦争で「祖国を擁護している」社会主義の裏切者たちにたいする燃えるような憎悪のすばらしい精神、国際労働運動からそれをむしばんでいる排外主義と日和見主義を清掃しようとする衷心からの熱望につらぬかれている。

もちろん、青年たちのこの機関誌には、まだ理論的な明瞭さや堅固さはないし、もしかすると、それがまさに沸きたち、沸きかえり、探求する青年の機関誌であるという理由で、これからもそういうものはけっして見られないかもしれない。しかし、このような人々が理論的明瞭さに欠けているということについては、わが「組織委員会派」、「社会革命

党」(九)、トルストイ主義者、無政府主義者、全ヨーロッパのカウッキー派（「中央派」）などの頭のなかにある理論的雑炊や、彼らの心のなかの革命的不徹底さにたいしてわれわれがとっている——また、とらなければならない——態度とは、まったく違った態度をとることが必要である。他人を指導し教えると称しているおとなたちがプロレタリアートを迷わせている——これにたいしては、容赦なく闘争しなければならない——のと、自分たちはまだ学んでいる途中であり、自分たちの基本的な仕事は社会主義政党の働き手を養成することだ、と率直に言明している青年組織とでは、話は別である。こういう人々にはあらゆる援助をあたえるべきであって、彼らの誤りにはできるだけ辛抱づよい態度でのぞみ、闘争の方法によってではなく、主として説得の方法によって、徐々にこの誤りをただすようにつとめなければならない。中年や老年層の代表者たちが青年にたいして正しい態度をとることを解しない場合がしばしば見られる。青年は、必然的に、彼らの父親たちとは違った仕方で、違った道によって、違った形で、違った状況のもとで、社会主義に近づいてゆくほかはないのである。これは、われわれが青年同盟の組織上の自主性を無条件に支持しなければならない理由の一つであって、日和見主義者がこの自主性を恐れているからだけではなく、問題の本質上、われわれはそれを支持しなければならないのである。なぜなら、青年の完全な自主性なしには、彼らをすぐれた社会主義者に仕上げることも、社会主義を前進させる準備をととのえることもできないからである。

青年同盟の完全な自主性のために、だがまた、彼らの誤りにたいする同志的批判の完全な自由のために！　われわれは青年に媚びてはならない。

前記のすぐれた機関誌の誤りとしては、まず第一に、次の三点がある。

（一）　軍備撤廃（あるいは「武装解除」）の問題でまちがった立場をとっているが、これについてはわれわれは、本論集のまえのほうにのせた特別の論文で批判しておいた(一〇)。この誤りを引きおこしたものは、もっぱら、「軍国主義の完全な絶滅」（これはまったく正しいことだ）につとめる必要を強調しようというよい願望なのだが、ただ社会主義革命における内乱の役割を忘れてしまったのだと考えてよい根拠がある。

（二）　国家にたいする社会主義者と無政府主義者との態度の相違の問題で、同志ノタ－ベネの論文（第六号）は非常に大きな誤りをおかしている（また他のいくつかの問題、たとえば、「祖国擁護」のスローガンにわれわれが反対してたたかう理由の問題でも）。筆者は、「国家一般にかんす

る明瞭な観念」(帝国主義的強盗国家の観念とならんで)をあたえようと望んでいる。彼は、マルクスとエンゲルスのいくつかの言明を引用している。とりわけ彼は、次の二つの結論に到達している。

(a)「……社会主義者と無政府主義者の相違を、前者が国家の支持者で、後者が反対者であるという点に求めるのは、まったく誤りである。両者の差異は、ほんとうは次の点にある。すなわち、革命的社会民主主義は、新しい社会的生産を、集中された生産、すなわち技術的に最も進歩した生産として組織しようと望んでいるのにたいして、分散された無政府主義的生産は、古い技術への、古い企業形態への一歩後退を意味するだけであろう、ということである。」これはまちがっている。筆者は、国家にたいする社会主義者と無政府主義者との態度の相違はどこにあるか、という問題を提起しながら、この問題に答えないで、将来の社会の経済的基礎にたいする両者の態度の相違はどこにあるか、という別の問題に答えている。もちろん、これは非常に重要で必要な問題である。しかし、だからといって、国家にたいする社会主義者と無政府主義者との態度の相違の肝心な点を忘れてよいということにはならない。社会主義者は、労働者階級の解放をめざす闘争において現代の国家とその諸施設を利用することを主張し、また、資本主義から社会主義への特異な過渡形態として国家を利用する必要があると主張している。そうした過渡形態――これもやはり国家である――が、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)である。

無政府主義者は、同志ノタ－ベネが一箇所でつかっている表現を借りていえば――ただし、彼は誤ってこの見解を社会主義者の見解だとしている――、国家を「廃止し」、これを「爆破し」(《sprengen》)ようと望んでいる。社会主義者は、――この筆者は、残念ながら、この点についてのエンゲルスのことばをあまりにも不完全な形で引用している――ブルジョアジーを収奪したのち、国家が「死滅し」、しだいに「眠りこんでゆく」ものと認めている。

(b)「大衆の教育者であり、すくなくともそうでなければならない社会民主党としては、いまやいかなるときにもまして、国家にたいする自己の原則的反対を強調することが必要である。……現在の戦争は、国家意識の根がどんなに深く労働者の心に食いこんでいるかを示した。」同志ノタ－ベネは右のように書いている。国家にたいする「原則的反対」を「強調する」ためには、国家をほんとうに「明瞭に」理解する必要がある。ところが、筆者にはまさにこの明瞭さがない。「国家意識の根」という文句がすでにまったく混乱したものであって、マルクス主義的でも社会主義的でもない。「国家意識」と国家意識の否定とが衝

署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第三〇巻、二二五―二二九ページ所収
邦訳全集、第二三巻、一七五―一七九ページ所収

突したのではなく、日和見主義的政策（すなわち、国家にたいする日和見主義的、改良主義的、ブルジョア的態度）と、革命的な社会民主主義的政策（すなわち、ブルジョア国家にたいする、また、ブルジョアジーを打倒するために ブルジョアジーに反対して国家を利用することにたいする革命的、社会民主主義的な態度）とが衝突したのである。この二つは全然違った事柄である。このきわめて重要な問題については、われわれは特別の論文でたちかえりたいとおもう。

（三）『書記局草案』として第六号に掲載された『社会主義的青年組織国際連合の原則的声明』には、個々の不正確な点が少なくないし、肝心なことが全然ぬけている。すなわち、いま、全世界の社会主義の内部でたたかっている三つの基本的流派（社会排外主義、「中央派」、左派）の明瞭な対置がまったくない。

もう一度言えば、これらの誤りを論駁し、解明し、全力をあげて青年組織との接触、接近をはかり、あらゆる援助を彼らにあたえなければならないが、彼らにたいしては、適切な態度をとらなければならない。

一九一六年一二月に『ソツィアル－デモクラート論集』第二号に発表

一九〇五年の革命についての講演(九三)

青年の同志諸君、党同志諸君！

きょうは、「血の日曜日」、すなわち正当にもロシア革命の始まりと見られている日の一二周年記念日である。

数千の労働者が――しかも、社会民主主義者ではなく、信心ぶかい、皇帝に忠誠な人々が――ツァーリに嘆願書を上呈するために、司祭ガポンに率いられて、あらゆる市区から首都の中心へ、冬宮まえの広場へ進んでいった。労働者たちは聖像をかかげて進んだ。そして、当時の彼らの指導者であったガポンは、書面で、ツァーリの一身の安全は自分が保証するから、人民の前に姿をあらわしてくださるように、とツァーリに願ったのである。

軍隊が出動した。槍騎兵とコザックは白刃をふりかざして群集を襲撃した。ツァーリのところへいかせてくれと、武器を持たない労働者がひざまずいてコザックに哀願するのに向かって、発砲した。警察の報告によれば、千人以上の死者と、二千人以上の負傷者があった。労働者の怒りは名状しがたいものであった。

これが、一九〇五年一月二二日、「血の日曜日」のあらましである。

諸君にこの事件の歴史的意義をもっとはっきりさせるために、労働者の嘆願書の二、三の箇所を読みあげてみよう。この嘆願書は次のようなことばで始まっている。

「われわれ労働者、ペテルブルグの住民は、陛下のところにまいりました。私たちは、貧しい、さげすまれた奴隷で、専制政治と専横のために窒息しております。がまんできるぎりぎりのところまできましたので、仕事をやめて、生きてゆくのが苦しみでないだけのものをあたえてくれるように、雇主に願いました。だが、なにもかも拒絶されました。工場主の考えでは、これはみな不法なのです。ここにいるわれわれ数千の者は、そしてロシアの全人民もまた、なんの人権ももっていません。陛下の官吏は、われわれを奴隷にしてしまいました。」

この嘆願書は、次のような要求をあげている。すなわち、大赦、政治的自由、標準賃金、土地を人民に徐々にわたすこと、普通・平等の選挙権にもとづく憲法制定議会の召集、――そして、次のことばで結んでいる。

「陛下！ 陛下の人民をお救いください！ 陛下と人民とをへだてる壁をお取りはらいください！……私たちの願いをかなえるように、お命じください。そうすれば、陛下はロシアを幸福になさるでありましょう。そうでなければ、私たちはここで死にましょう。自由と幸福か、でなければ墓場か、私たちにはこの二つの道しかありません。」

一人の家父長的な司祭にひきいられた、無教育で文盲の労働者たちのこの嘆願書をいま読むと、奇妙な感じがするであろう。この素朴な嘆願書と、社会平和主義者、すなわち社会主義者であろうと望んでいるが実際にはブルジョア的空言家にすぎない人々の、今日の平和決議との類似が、思わず知らず頭にうかんでくるのである。革命前のロシアの無教育な労働者は、ツァーリが支配階級、つまり数千の糸で大ブルジョアジーに結びついていて、あらゆる暴力手段にうったえて自分の独占、特権、利得を守ろうと決意をかためている大地主階級の頭目であることを知らなかった。「教養の高い」人士——ご冗談でしょう！——と見られたがっている今日の社会平和主義者は、帝国主義的強盗戦争をおこなっているブルジョア政府に「民主主義的」講和を期待するのは、血帝を平和な嘆願書で説きつけて民主主義的改革をやらせることができるという考えと同じくらい愚かなものだということを、知らないのである。

とはいえ、大きな相違は、今日の社会平和主義者の大部分が、温和な説諭によって人民を革命的闘争からそらせようとする偽善家であるのに、革命前のロシアの無教育な労働者は、彼らがはじめて政治意識に目ざめた正直な人々であることを、その行為によって証明したことである。

広大な人民大衆がこのように政治意識と革命的闘争とへ目ざめたことにこそ、一九〇五年一月二二日の歴史的意義がある。

「ロシアには、まだ革命的人民はいない」——ロシアの自由主義者の当時の指導者で、当時非合法の自由な機関誌を国外で発行していたピョートル・ストルーヴェ氏がこう書いたのは、「血の日曜日」の二日まえのことであった。ブルジョア改良主義者のこの「教養の高い」、高慢で、大まぬけな指導者には、文盲な農民の国が革命的な人民を生みだしうるなどという考えは、それほどばかげたものに思えたのである！ 当時の改良主義者は——今日の改良主義者とまったく同じように——、真の革命は起こりえないとそれほど強く確信していたのである！

一九〇五年一月二二日（ロシア暦の九日）以前には、ロシアの革命的諸政党はごく少数の人々からなっていた。——当時の改良主義者は（今日の改良主義者とまったく同

じように！）、われわれを罵倒して「宗派」とよんでいた。数百の革命的組織者、数千の地方組織メンバー、月に一回そこそこしか出ない半ダースの革命的新聞――それは、おもに国外で発行され、非常な困難をおかし犠牲をはらってロシアにこっそりもちこまれていた――、これが、一九〇五年一月二二日以前のロシアの革命的諸政党とその先頭に立った革命的社会民主党の状態であった。こうしたことが、見識の狭い、同時に高慢な改良主義者たちに、ロシアにはまだ革命的人民はいない、と主張する形式的な権利をあたえたのである。

数ヵ月で事態はまったく一変した！　数百の革命的社会民主主義者は、「突然」数千にふえ、数千のメンバーは、二、三百万にのぼるプロレタリアの指導者となった。プロレタリアの闘争は、五千万から一億にのぼる農民大衆のあいだに大きな動揺を、部分的には革命運動を生みだし、農民運動は軍隊内に共鳴を呼び、軍隊の反乱、軍隊の一部分と他の一部分との武力闘争をもたらした。こうして、一億三千万人の住民をもった膨大な国が革命に突入した。こうして、眠れるロシアから、革命的プロレタリアートと革命的人民とのロシアが生まれたのである。

この推移を研究することが必要であり、その可能性、いわばその方法または手段を理解することが必要である。

この推移のもっとも重要な手段は、大衆的ストライキであった。ロシア革命の特異性は、まさに、この革命がその社会的内容からみればブルジョア民主主義革命であったが、その闘争手段からみればプロレタリア的な革命であった点にある。それがブルジョア民主主義革命であったというのは、その直接にめざした目標、またそれが自力で直接に達成できる目標が、民主的共和制、八時間労働日、貴族の広大な大土地所有の没収であったからである。――これらはすべて、一七九二－一七九三年のフランスのブルジョア革命が大部分実現した方策であった。

それと同時に、ロシア革命は、プロレタリアートが指導勢力であり運動の前衛であったという意味だけでなく、プロレタリアに特有な闘争手段、すなわちストライキが、大衆をふるいたたせる主要な手段であり、決定的な諸事件の波状的経過のなかで最も特徴的なものであったという意味でも、プロレタリア的な革命であった。

ロシア革命は、世界史上の大革命のうちで、政治的大衆ストライキがなみなみならぬ大きな役割を演じた最初の――それは、たしかに、最後のものとはならないであろう――革命であった。じっさい、ロシア革命の諸事件、その政治的諸形態の交替は、これらの事件とこの交替との基礎をストライキ統計に求めないかぎり、これを理解すること

さえできないのである。
　無味乾燥な統計数字が講演にはどんなに不適当で、聴衆をどんなに僻易させるものであるかを、私はよく知っている。しかし、私は、諸君が運動全体のほんとうの客観的基礎を評価できるようにするため、二、三の大まかな数字を伝えないわけにはいかない。革命前の一〇年間のロシアのストライキ参加者数は、年平均四万三千人であった。したがって、革命前の全一〇年間をつうじてのストライキ参加者の総数は四三万人となる。一九〇五年一月、すなわち革命の最初の一ヵ月間のストライキ参加者数は、四四万人であった。つまり、ただの一ヵ月間で、過去の全一〇年間よりも多かったのである！
　世界のどの資本主義国にも――イギリス、アメリカ合衆国、ドイツのような最も進んだ国にさえ――、一九〇五年のロシアに起きたような大きなストライキ運動は、かつて見られなかった。ストライキ参加者の総数は二八〇万で、工場労働者総数の一倍半以上であった！　もちろん、これは、ロシアの工場労働者が、西ヨーロッパの兄弟たちよりも教養があったとか、強力だったとか、闘争能力があったとかいうことを、証明するものではない。その逆が正しいのである。
　しかし、それは、およそプロレタリアの眠れるエネルギーがどんなに大きなものでありうるかを、証明している。それは、革命期には、プロレタリアートが、――私は、ロシア史上の最も正確な資料にもとづいてこう言うのであって、すこしの誇張もない――普通の平穏な時代の百倍も大きな闘争力を発揮できることを証明している。それは、真に偉大な目的のために、真に革命的に闘争する段になれば、プロレタリアートの力の高まりがどんなにすばらしく、どんなに大規模なものになりうるか、またなるかを、人類は一九〇五年までまだ知っていなかった、ということを証明している！
　ロシア革命の歴史は、最大のねばりづよさと最大の犠牲心とを発揮してたたかったのが、ほかならぬ賃金労働者の前衛、精鋭分子であったことを、われわれに示している。工場が大きければ大きいほど、ストライキはますます頑強となり、同じ年度内にストライキが繰りかえされる場合がますます頻繁になった。都市が大きければ大きいほど、闘争におけるプロレタリアートの役割はますます高まった。最も知性に富んだ、最も多くの労働者をもつ三つの大都市、すなわちペテルブルグ、リガ、ワルシャワでは、労働者総数にたいするストライキ参加者数の割合は、農村はいうまでもなく、他のどの都市にくらべても、異常に高かった。(二四)
　ロシアでは――おそらく他の資本主義諸国でも同様であ

ろうが――、金属労働者がプロレタリアートの先進部隊であった。そして、ここでわれわれは次のような教訓に富む事実を見るのである。すなわち、一九〇五年には、一〇〇人につきロシアの工場労働者全体についてみると、労働者一〇〇人につき一六〇人のストライキ参加者を出した。これにたいして、金属労働者は、同じ年に一〇〇人につき三二〇人のストライキ参加者を出した！ ある計算によれば、ロシアの工場労働者は、一九〇五年にストライキの結果として一人あたり平均一〇ルーブリ――戦前の相場に換算すれば約二六フラン――を失った、いわば闘争の犠牲に供したのである。ところが、金属労働者だけをとってみると、その額はこの三倍になる！ 労働者階級のすぐれた分子は、ためらう者を引きつれ、眠っている者を目ざめさせ、弱いものを激励しながら、前進したのである。

革命期における経済的ストライキと政治的ストライキとの絡みあいは、まったく独特なものであった。ストライキのこの二つの形態の最も緊密な結合こそが、はじめて運動の強大な力を保障したことは、疑う余地がない。もし、種々さまざまな産業部門の賃金労働者が彼らの状態の直接の即時の改善を資本家からかちとった実例を、広範な被搾取大衆が毎日まのあたりに見なかったとしたら、この大衆を革命運動に引きいれることはけっしてできなかったであろう。この闘争によって新しい精神がロシアの全人民大衆のなかにはいりこんだ。いまはじめて、農奴的な、のろのろした、家父長制的な、信心ぶかい、従順なロシアは、ほんとうに生まれかわった。いまはじめて、ロシアの人民は、真に民主主義的な、真に革命的な教育を受けたのである。

ブルジョアの旦那衆やその無批判的な盲従者である社会主義的改良主義者があんなにもったいぶって大衆の「教育」をうんぬんするとき、彼らは、ふつう、なにか学校教師的なもの、衒学的なもの、大衆を退廃させるもの、大衆にブルジョア的偏見を植えつけるものを、「教育」ということばでさしているのである。

大衆の真の教育は、大衆自身の自主的な政治闘争、とくに革命的闘争とはなれて、そのそとでおこなえるものではけっしてない。闘争がはじめて、被搾取者を教育する。闘争がはじめて、彼らに彼らの力の限度を示し、彼らの視野をひろめ、彼らの能力を高め、彼らの知力を啓発し、彼らの意志を鍛えるのである。だから、反動派さえ、闘争の年である一九〇五年、この「狂乱の年」が、家父長制的なロシアを決定的に葬りさったことを、認めざるをえなかったのである。

一九〇五年のストライキ闘争のときにロシアの金属労働者と繊維労働者とのあいだにあった関係を、もっと詳しく

考察してみよう。金属労働者は、最も高い賃金を支払われ、最も知性に富む、最も文化水準の高いプロレタリアである。繊維労働者の数は、一九〇五年のロシアでは金属労働者の数の二倍半であったが、彼らは、最も遅れた、最も低い賃金を支払われていた大衆であって、往々にして、農村における自分の農民家族との結びつきをまだ決定的に断ちきっていなかった。ここでわれわれは、次のようなきわめて重要な事実を見るのである。

金属労働者のストライキでは、一九〇五年全体をつうじて政治的ストライキが経済的ストライキよりも優勢であったことが見られる。これは、とくにこの年の末においていちじるしかった。これに反して、繊維労働者のあいだでは、一九〇五年のはじめには経済的ストライキが非常に優勢であり、この優勢が、この年の末になってはじめて政治的ストライキの優勢に転化したことが見られる。したがって、経済闘争だけが、自分の状態を即時、直接に改善するための闘争だけが、被搾取大衆の最も遅れた層をふるいたたせることができ、彼らに真の教育をあたえ、彼らを――革命期には――わずか数ヵ月のうちに政治的戦士の軍隊につくりあげるということは、明らかである。

もちろん、そのためにはまた、労働者の先進部隊が階級闘争を上層の少数者の利益のための闘争と解しないこと――労働者をだましてそう思いこませるのが、改良主義者の常套手段であるが――、プロレタリアが真に被搾取者の多数者の前衛として現われ、この多数者自身を闘争に引きいれることが必要であった。これは、一九〇五年のロシアでおこなわれたことであり、また、きたるべきヨーロッパのプロレタリア革命でも、疑いもなく、おこなわれなければならないし、また実際におこなわれるであろう。[35]

一九〇五年の初頭には、全国にわたってストライキ運動の最初の大波が起こった。すでにこの年の春に、ロシアには、最初の大規模な農民運動――経済的なだけでなく、政治的な運動――が目ざめた。この転換がどんなに画期的な意義をもっているかは、次のことをはっきり意識する人々にしか理解できないであろう。すなわち、ロシアの農民は、ようやく一八六一年に最悪の農奴制から解放されたばかりで、大多数の農民は文盲で、恐るべき困窮のうちにあり、大地主によって圧迫され、坊主によって愚鈍にされ、遠く分かれて住み、ほとんどまったく道路がないために孤立した生活をおくっているということが、それである。

ロシアでは、一八二五年にはじめて、ツァーリズムにたいする革命運動が現われた。[36] この運動の代表者は、ほとんどまったく貴族であった。それ以来、アレクサンドル二世がテロリストに倒された一八八一年までは、中産階級出身

のインテリゲンツィアが運動の先頭に立っていた。彼らは、最高の犠牲心を発揮し、その英雄的なテロリスト的闘争方法によって全世界を仰天させた。これらの犠牲者は、たしかに、むだに倒れたのではなかった。たしかに、彼らは、――直接にも間接にも――ロシアの人民の将来の革命的教育に貢献した。しかし、彼らは、人民革命を目ざめさせるという彼らの直接の目標をなしとげなかったし、またなしとげることもできなかった。

プロレタリアートの革命的闘争がはじめてそれをなしとげることができた。帝国主義的な日露戦争の恐ろしい教訓に関連して、全国を席巻した大衆的ストライキの波がはじめて、農民の広範な大衆を昏睡から呼びさました。「罷業者」ということばは、農民のあいだで新しい意味をもつようになった。すなわち、それは、以前に「学生」ということばで表現されていた反逆者や革命家とほぼ同じものを意味していた。しかし、「学生」は、中産階級や、「学問のある」人々や、「旦那衆」に属していたので、人民にとってはよそものであった。これに反して、「罷業者」は、それ自身人民の出であり、自分も被搾取者の一員であって、しばしばペテルブルグを追放されて、農村にやってきては、農村の同志たちに、都市をとらえた大火のこと、資本家にも貴族にも鋒さきを向けた大火のことを、語ってきかせた。

ロシアの農村には、新しい型――若い農民、いわゆる「意識分子」が現われた。彼らは「罷業者」と打ちとけて話し、新聞を読み、農民に都市の事件を話してきかせ、農村の同志たちに政治的諸要求の意義を説明し、彼らを鼓舞して大地主貴族や僧侶や官吏にたいする闘争に立たせた。

農民は集まって群をつくり、自分たちの状態を話しあい、しだいに闘争に巻きこまれていった。彼らは、群をなして大地主を襲い、大地主の邸宅や旦那の屋敷に火を放ったり、その貯蔵品を略奪し、穀物その他の食糧を奪い、警察官を免職し、土地、貴族の巨大所有地を人民に引き渡すように要求した。

一九〇五年の春には農民運動はまだ始まったばかりであった。それは、少数の郡を、すなわち郡総数の約七分の一をとらえたにすぎなかった。

だが、都市におけるプロレタリアの大衆的ストライキと農村における農民運動とが結合しただけで、ツァーリズムの最も「強固な」支柱、最後の支柱を動揺させるのに十分であった。私の言うのは、軍隊のことである。

海軍にも陸軍にも、兵士の反乱が始まった。革命期をつうじて、ストライキ運動と農民運動の波の大きな高まりはみな、ロシア各地の兵士の反乱をともなっていた。これらの反乱のなかで最も有名なのは、おそらく、黒海艦隊の戦

艦「ポチョームキン公」号の反乱である。この戦艦は、反乱者の手に落ち、オデッサの革命に参加したが、この革命が敗北し、また他の港（たとえばクリミアのフェオドーシャ）を占領する試みが失敗したのち、コンスタンツァでルーマニアの官憲に降伏したのである。

黒海艦隊のこの反乱の小挿話を、詳しく話すことを許していただきたい。それは、運動の最高潮点に起きた事件の具体的状景を諸君に知らせるためである。

「革命的労働者と水兵の会合が組織された。それはますます頻繁になった。兵士が労働者の集会に出ることは禁じられていたので、労働者が集団的に兵士の集会に出席しはじめた。数千の者が集まった。共同行動の思想は熱狂的に受けいれられた。すすんだ中隊では代表者が選出された。

いまや軍当局は干渉すべきときだと考えた。集会で『愛国的』演説をしようとした個々の将校の試みは、はなはだみじめな結果に終わった。討論に慣れた水兵たちは彼らの上官をやっつけて、ほうほうの体で逃げださせた。この手段が失敗したので、集会をいっさい禁止することが決定された。一九〇五年一一月二四日の朝、海軍兵営の門前には完全武装の戦闘中隊が配置された。海軍少将ピサレーフスキーは、全員に聞こえるように『一人でも兵営から出してはならない！　服従を拒否した場合には銃殺しろ！』という命令を伝えた。この命令を言いわたされた中隊から水兵ペトローフが進みでて、みなの見ているまえで自分の銃に弾をこめ、一発でベロストック連隊の中尉シテインを殺し、次の一発で海軍少将ピサレーフスキーに傷を負わせた。『彼を捕縛しろ！』という将校の命令が響きわたった。だれひとりその場から動かなかった。ペトローフは銃を地上に投げすてた。『なぜじっとしているのか？　さあ、おれをつかまえろ！』彼は逮捕された。四方八方から押しよせた水兵たちは、おれたちが彼の身元を引きうける、と言って、彼の釈放を激しく要求した。興奮は極点に達した。

――『ペトローフ、お前はほんのはずみで発射したのだろう？』――と将校は、逃げ道をつくろうとして、彼にたずねた。

――『なに、はずみだって！　まえに出て、弾をこめて、ねらう。これがはずみなのか？』

――『水兵たちがお前の釈放を要求している。』……そして、ペトローフは釈放された。水兵たちは、これでやめようとはしなかった。勤務中の将校は全部捕縛され、武装を解除されて、事務室に監禁された。……約四〇人の水兵代表は、徹夜で協議した。将校たちを釈放す

るが、今後彼らが兵営にはいるのは許さない、という決議がおこなわれた。……」

この小状景は、大多数の兵士反乱で起こった事件の経過を、諸君に例証している。人民の革命的動揺は、兵士をもとらえずにはおかなかったのである。とくに、海陸軍のうちで、たいてい工業労働者から徴募され、技術的な予備教育を最も必要とするような分子、たとえば工兵が、運動の指導者を出した。しかし、広範な兵士大衆は、まだきわめて素朴な、平和な、お人よしな、キリスト教徒ふうの気分をもっていた。彼らはかなり激高しやすかった。ちょっとした不当行為からでも、将校の態度が苛酷すぎるとか、まかないが悪いなどということからでも、激高が起こりかねなかった。しかし、長つづきがせず、なすべき任務について の明瞭な自覚が欠けていて、武装闘争を最も精力的につづけることだけが、文武の全官憲に勝利することだけが、政府を打倒して全国にわたって権力を掌握することだけが、革命の成功の唯一の保証となりうることを、理解していなかった。

水兵と兵士の広範な大衆は、簡単に反乱を起こしたが、また同じように簡単に、逮捕した将校を放免するというおめでたい愚行をおかした。彼らは当局の約束や説得でなだめられた。――そこで、当局は貴重な時をかせいで、援軍を得て、反乱軍の力をばらばらにし、けっきょく、いつも残忍きわまる鎮圧と指導者の処刑とが起こった。

一九〇五年のロシアの兵士反乱と、一八二五年のデカブリストの軍隊反乱とを比較することは、とくに興味ぶかい。このあとの時には、政治運動を指導したのは、ほとんどまったく将校、とくに貴族出の将校であった。彼らは、ナポレオン戦争のときにヨーロッパの民主主義思想と接触して、それに感染していたのである。当時はまだ農奴的農民からなりたっていた兵士大衆は、消極的な態度をとっていた。

一九〇五年の歴史は、まさにその逆を示している。少数の者を除けば、将校は、ブルジョア自由主義的な気分か、改良主義的な気分か、さもなければまったく反革命的な気分をもっていた。軍服を着た労働者と農民が、反乱の中心人物であった。運動はいっそう人民的になった。ロシアの歴史上はじめて、運動は被搾取者の大多数をとらえた。欠けていたものは、一方では、大衆の堅忍と決断であり――彼らはあまりにも軽信的だという病癖があった――、他方では、軍服をきた革命的社会民主主義的労働者の組織であった。これらの労働者は、指導権を自分の手ににぎり、革命的軍隊の先頭に立ち、政府権力にたいする攻撃に移ることを、あまりにも理解していなかった。

ついでに言っておけば、この欠陥は二つとも、資本主義

の一般的発展によって除去されるだけでなく、また現在の戦争によっても――おそらくはわれわれが希望するよりも緩慢にではあろうが、しかし確実に――除去されるであろう。(五七)……

いずれにせよ、ロシア革命の歴史も、また一八七一年のパリ・コミューンの歴史も、われわれに次のような否みえない教訓をあたえている。すなわち、軍国主義は、国民軍隊の一部分が他の一部分とたたかって勝利をおさめる以外には、どんな方法によっても、けっして、どんな場合にも、これを克服し、廃止することができない、ということである。軍国主義を忌みきらい、呪い、「拒否し」、その有害なことを論証の批判によって立証するだけでは足りない。兵役を平和的に拒否するのも愚かなことである。――プロレタリアートの革命的意識を目ざめさせておくこと、しかも、人民のあいだの激動が最高潮に達した瞬間に革命軍の先頭に立つ準備を、一般的にととのえておかせるだけでなく、プロレタリアートのすぐれた分子に、具体的にととのえておかせることが必要である。

どの資本主義国家の日々の経験も、このことを教えている。このような国家が逢着する「小さい」危機はすべて、大きな危機のさいにかならず大規模に繰りかえされずにはいない闘争の要素と萌芽を、小規模な形でわれわれに示してくれる。ところで、たとえば、どのストライキも、資本主義社会の小さい危機でなくてなんであろうか? プロイセンの内務大臣フォン・プットカンマー氏が、「どのストライキにも革命のヒドラ〔ギリシア神話の多頭の水蛇〕がひそんでいる」という有名な金言を吐いたのは、正しくはなかったか? すべての資本主義国で、最も平和な――というのも、お恥ずかしいが――、また最も「民主主義的な」資本主義国でさえ、ストライキのときに兵士が出動していることは、真の大きな危機のさいにどんなふうになるかを、われわれに証明してはいないだろうか?

だが、ロシア革命の歴史にもどらなければならない。

私は諸君に、プロレタリアのストライキが全国を、また被搾取者の最も広範な、最も遅れた諸層をゆりおこし、農民運動が始まり、この運動が兵士の反乱をともなったありさまを述べようとしたのであった。

一九〇五年の秋には、全運動は絶頂に達した。八月一九(六)日には、帝国国会開設にかんするツァーリの詔書が出された。笑止なほど少数の有権者を定めた選挙法にもとづいて、いわゆるブルィギン国会が創設されたが、この選挙法は、この独特の「議会」になんの立法権もあたえておらず、審議権、諮問答申権をあたえたにすぎなかった!!

ブルジョアや、自由主義者や、日和見主義者は、おじけ

づいたツァーリのこの「贈り物」を、双手をあげて受け取ろうとした。すべて改良主義者はそうであるが、一九〇五年のわが改良主義者も、次のことを理解できなかった。それは、改良が、とくに改良の約束が、人民の動揺をしずめ、革命的階級を説きつけてその闘争を中止させるか、せめて弱めさせる目的しかもっていないような歴史的情勢があるということである。

ロシアの革命的社会民主主義派は、一九〇五年八月にこのように欽定され、下賜されたえせ憲法の真の性格を、まったくよく理解していた。そこで、彼らは間髪をいれず、次のスローガンをかかげた。「諮問」国会を倒せ！　国会をボイコットせよ！　ツァーリ政府を倒せ！　この政府を倒すために革命的闘争をつづけよ！　ツァーリではなく、臨時革命政府が、ロシアにおける最初の、真の人民代議機関を招集すべきである！　と。

そして、ブルィギン国会が一度も招集されなかったという点で、歴史は革命的社会民主主義者が正しかったことを立証した。革命の嵐はブルィギン国会を、それがまだ成立もしないうちに吹きはらってしまった。この嵐は、有権者数をふやしいちじるしく国会の立法機関的性格を承認した新しい選挙法を公布することを、ツァーリによぎなくさせた。(六〇)

一九〇五年の一〇月と一二月は、ロシア革命の上向線の頂点をなすものであった。人民の革命力のあらゆる泉が、それまでよりはるかに広くひらかれた。すでにお話したように、一九〇五年一月に四四万人に達したストライキ参加者数は、一九〇五年一〇月には五〇万人をこえた。注意していただきたいが、これはただ一ヵ月間のことである！しかも、この数は工場労働者しかふくんでいないから、この数にさらに数十万の鉄道職員、郵便・電信従業員等をくわえなければならないのである。

鉄道職員の全国的ゼネラル・ストライキは、鉄道の交通を停止させ、政府の権力をひどく麻痺させた。大学の門はひらかれ、平素は教授の講壇学問で青年をあざむき、青年をブルジョアジーとツァーリズムのおとなしい下僕にすることにしか役だたない講堂は、いまや、政治問題を公然と、自由に討議する数千数万の労働者、手工業者、家事使用人の集会所となった。

出版の自由がかちとられた。検閲はあっさり押しのけられた。出版所はもう官憲にあえて納本しなかったし、また官憲もこれにあえて干渉しなかった。ロシア史上はじめて、ペテルブルグその他の都市で、革命的新聞が自由に発行された。ペテルブルグだけでも、五万—一〇万の発行部数をもつ社会民主党の日刊新聞が三つも出た。

プロレタリアートは運動の先頭をすすんだ。プロレタリアートは、八時間労働日を革命的手段で獲得することをその任務とした。ペテルブルグのプロレタリアートの当時の闘争スローガンは、「八時間労働日と武器！」であった。すなわち、武装闘争だけが革命の運命を決定できるし、また決定するであろうということが、ますます多くの労働者に明らかになった。

この闘争の熱火のなかで、独特の大衆組織がつくられた。有名な労働者代表ソヴェト、各工場の代表者の会議が、それである。そして、この労働者代表ソヴェトは、ロシアのいくつかの都市で、ますます臨時革命政府の役割、蜂起の機関および指導者の役割をになうようになった。兵士と水兵の代表者ソヴェトを組織し、これを労働者代表ソヴェトと統合しようとする試みがなされた。

この当時、ロシアの多くの都市は、さまざまな地方的な、極小「共和国」の時期をとおった。そこでは、政府の権力は廃止されて、労働者代表ソヴェトが新しい国家権力として実際に機能していた。残念なことに、この時期はあまりにも短く、「勝利」はあまりにももろく、あまりにも孤立的であった。

農民運動は、一九〇五年の秋にさらに大規模なものになった。当時、全国の郡の三分の一以上が、いわゆる「農民騒擾」や、本式の農民蜂起を記録した。農民は、約二千の地主屋敷を焼きはらって、貴族の強盗どもが人民から略奪した食糧を自分たちのあいだに分配した。

残念なことに、この活動はあまりにも不徹底であった！残念なことに、当時農民が破壊したのは、貴族屋敷総数の約一五分の一にすぎなかった。すなわち、封建的大土地所有という恥ずべきものをロシアの国土の表面から完全に一掃するためには、当然破壊しなければならなかったものの一五分の一にすぎなかったのである。また残念なことに、農民の行動はあまりにもばらばらで、非組織的で、あまりにも非攻撃的であった。そして、これが、革命の敗北した根本原因の一つであった。

ロシアの被抑圧諸民族のあいだには民族解放運動が燃えあがった。ロシアでは、人口の二分の一以上、ほとんど五分の三（正確には、五七％）が、民族的に抑圧されている。彼らは、母語をつかう自由さえもたず、強制的に「ロシア化」されている。たとえば、ロシアで数千万人にのぼる回教徒は、当時――それは、総じて種々さまざまな組織がすばらしく発達した時期であった――驚くべき速さで回教徒連盟を組織したのである。

お集まりの諸君に、とくに青年諸君に、当時のロシアで、民族解放運動が労働運動と結びついて勃興した実例を示す

ために、小さな一例をあげよう。

一九〇五年一二月にポーランドの学童たちは、数百の学校でロシアの書籍や絵画やツァーリの肖像を全部焼きはらい、ロシア人教師やロシア人の学友をなぐりつけ、「ロシアに帰れ!」と叫びながら、彼らを学校から追いだしてしまった。中学校のポーランド人生徒の要求は、とりわけ次のようなものであった。「(一)すべての中学校は、労働者代表ソヴェトに従属させられなければならない。(二)学校の構内で学生と労働者の合同集会をひらくこと。(三)きたるべきプロレタリア共和国への所属を表示するために、中学校で赤いブラウスを着ること」等々。

運動の波が高まれば高まるほど、反動はますます精力的に、容赦なく、革命との闘争のために武装した。一九〇五年のロシア革命では、カール・カウツキーが一九〇二年にその著『社会革命』のなかで書いたことが(ついでに言うが、彼は当時はまだマルクス主義者であって、今日のような、社会愛国主義者や日和見主義者の擁護者ではなかった)確証された。すなわち、彼は次のように書いている。

「……きたるべき革命は、……政府にたいする突発的暴動というよりは、むしろ長びいた内乱のようなものになるであろう。……」

実際にそうなった! きたるべきヨーロッパ革命でも、たしかにそうなるであろう!

ツァーリズムの憎悪は、とくにユダヤ人に向けられた。一方では、ユダヤ人は、革命運動の指導者をとくに高い割合で(ユダヤ人人口の総数にくらべて)出していた。ついでに言っておくと、いまでもユダヤ人には、ユダヤ人のあいだの国際主義的潮流の代表者の割合が、他の民族の場合よりもいちじるしく高いという功績がある。だが、他方では、ツァーリズムは、最も無教育な住民層の最悪の偏見をユダヤ人に向けて利用することを、りっぱに心えていた。こうして、直接警察に指導されないまでも、たいていは警察の支持をうけて、ポグロム——この時期に一〇〇の都市で、死者が四千人以上、かたわにされたものが一万人以上出た——がおこなわれた。これは、平和なユダヤ人、その婦人や子供の恐るべき虐殺であって、これが血みどろなツァーリズムを全文明世界での非常な憎まれものにしたのである。もちろん、私の言うのは、文明世界の真に民主主義的な分子のあいだでの憎まれものということである。そして、この民主主義的分子とは、もっぱら社会主義的労働者、プロレタリアである。

ところが、西ヨーロッパのどんなに自由な国、どんなに共和主義的な国のブルジョアジーも、この「ロシアの蛮行」を非難する偽善的な空文句と、破廉恥きわまる金融業

務、とくにツァーリズムにたいする財政的援助や、さらに資本の輸出等々によるロシアの帝国主義的搾取とを結びつけることを、まことにみごとに理解しているのである。

一九〇五年の革命の絶頂は、モスクワの十二月蜂起であった。少数の蜂起者、すなわち、組織された武装労働者が――その数は約八千そこそこであった――、九日間ツァーリ政府に抵抗した。政府は、モスクワ守備隊を信頼できず、むしろ反対に、彼らを監禁しておかなければならなかった。そして、ペテルブルグからセミョーノフスキー連隊が到着したおかげで、やっと蜂起を鎮圧できたのである。

ブルジョアジーは、モスクワの十二月蜂起を「人為的なもの」とよんで、これを嘲笑することがお好きである。たとえば、ドイツのいわゆる「科学的」文献のなかでは、教授マックス・ヴェーバー先生は、ロシアの政治的発展にかんする大部の著作『外見的立憲制へのロシアの移行』のなかで、モスクワ蜂起を「一揆」と名づけている。「……レーニンのグループと社会革命党の一部とは、ずっとまえからばかげた蜂起を準備していた……」と、この「学識高い」教授先生は書いている。

臆病なブルジョアジーのこうした教授式の知恵を評価するには、ストライキ統計の無味乾燥な数字を思いだすだけで十分である。一九〇五年一月には、ロシアには、純政治的ストライキへの参加者は一二万三千人しかいなかったが、一〇月には三三万人になり、一二月には最高の数に達した。すなわち、ただ一ヵ月間の純政治的ストライキの参加者が[97]三七万に達したのである！　革命の進展や、農民、兵士の蜂起を思いうかべれば、ただちにつぎのような確信が得られるだろう。すなわち、十二月蜂起についてのブルジョア「科学」の判断は、こっけいなだけでなく、革命的プロレタリアートを自分の最も危険な階級敵とみる臆病なブルジョアジーの代表者の当惑したことばだ、ということである。

実際には、ロシア革命の発展全体が自然的必然性をもって、ツァーリ政府と階級意識あるプロレタリアートの前衛との決定的な武装闘争にみちびいたのである。

革命の一時的敗北をもたらしたロシア革命の弱点がどこにあったかは、これまでの説明のなかですでに暗示しておいた。

十二月蜂起が絞殺されるとともに、革命の下向線が始まった。この時期にも、きわめて興味ぶかい契機がある。とくに、労働者階級の最も戦闘意欲ある分子が革命の全般的な後退を中断して、この後退を新しい攻勢にしようと二度試みたことが、それである。

しかし、私の時間はもう尽きようとしている。私は、聴衆の方がたにあまり長く辛抱していただこうとは思わない。

それに、ロシア革命、その階級的性格と推進力、その闘争方法を理解するうえで最も重要な事柄は、——総じてこのように巨大な主題を短い講演で叙述できるかぎりでは——すでに示したと思う。(一〇)

ただロシア革命の世界史的意義についてだけ、なお二、三簡単な意見を述べておこう。

ロシアは、地理的にも、経済的および歴史的にも、ヨーロッパに属しているだけでなく、アジアにも属している。そこで、ロシア革命がなしとげたことは、ヨーロッパで最大の、また最も遅れた国をその眠りから目ざめさせ、革命的プロレタリアートに指導される革命的人民をつくりだしたということに尽きない。

それだけではない。ロシア革命は、全アジアをうごかした。トルコ、ペルシア、中国の革命は、一九〇五年の偉大な蜂起が深い痕跡を残したこと、数億の人々の進歩にあたえたその影響が消えがたいものであることを、証明している。

間接にではあるが、ロシア革命は、西方の諸国にも影響を及ぼした。一九〇五年一〇月三〇日にツァーリの憲法詔書にかんする電報がウィーンに着いたとき、この報道はオーストリアにおける普通選挙権の決定的な勝利に非常に貢献したことを、忘れてはならない。

オーストリア社会民主党大会の開会中のことであったが、同志エレンボーゲン——当時、彼はまだ社会愛国主義者ではなく、まだ同志であった——が政治的ストライキについて演説していたときに、彼のテーブルのうえにこの電報が置かれた。すぐ議事は中断された。われわれの持ち場は街頭にある！——この叫びがオーストリア社会民主党の代議員たちの会場に響きわたった。そして、それにつづく数日間、ウィーンでは、きわめて盛大な街頭デモンストレーションがおこなわれ、またプラハではバリケードが築かれたのである。オーストリアにおける普通選挙権の勝利は決定された。

このきわめて遅れた国に生じた事件、出来事、闘争手段は、西ヨーロッパの事情とはあまりにも比較にならないので、ほとんどなんの実践的意義ももちえないというような判断を、ロシア革命についてくだしている西ヨーロッパ人を、しばしば見かける。

こういう意見ほど誤ったものはない。きたるべきヨーロッパ革命におけるきたるべき闘争の形態、またそのきっかけは、たしかに、ロシア革命のそれとは多くの点で違っているであろう。

しかし、それにもかかわらず、やはりロシア革命は、ほかならぬそれの——私がすでに述べた特殊な意味での——

プロレタリア的な性格のために、きたるべきヨーロッパ革命の序曲である。つまり、このきたるべき革命もまたプロレタリア的な革命――しかも、はるかに深い意味で、すなわちその内容上でも――でしかありえず、プロレタリア社会主義革命でしかありえないという点で、右のことは争う余地がない！　このきたるべき革命は、一方では、激しい闘争、とくに内乱だけが資本のくびきから人類を解放できるということ、他方では、階級意識あるプロレタリアだけが、大多数の被搾取者の指導者として立ちあらわれることができるし、また立ちあらわれるであろうということを、はるかに大規模に示すであろう。

われわれは、ヨーロッパの現在の墓場のような静けさにあざむかれてはならない。ヨーロッパは革命をはらんでいる。帝国主義戦争の恐るべき惨禍、物価騰貴の恐怖は、いたるところに革命的気分を生みだしている。そして、支配階級であるブルジョアジーと、その手代である各国政府とは、最大の震撼を経ずにはけっして活路を見いだしえない袋小路に、ますますはいりこんでいる。

一九〇五年のロシアに、プロレタリアートの指導のもとに、民主的共和制の獲得を目的として、ツァーリ政府にたいする人民の蜂起が起こったように、ヨーロッパには、この数年のうちに、ほかならぬこの強盗戦争と関連して、プロレタリアートの指導のもとに、金融資本の権力にたいし、大銀行にたいし、資本家にたいする人民の蜂起が起こるであろう。そして、この震撼は、ブルジョアジーの収奪による以外には、社会主義の勝利による以外には、終りをつげることはできないであろう。

われわれ老人たちは、おそらく、生きてこのきたるべき革命の決戦を見ることはないであろう。しかし、私は、固い確信をもって、次のような希望を述べてよいと信じる。それは、スイスや全世界の社会主義運動でこのようにりっぱに活動している青年諸君は、きたるべきプロレタリア革命のなかで闘争するだけでなく、さらに勝利をも得る幸福をもつであろう、ということである。

一九一七年一月九（二二）日以前にドイツ語で執筆
一九二五年一月二二日に新聞『プラウダ』第一八号にはじめて発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第三〇巻、三〇六―三二八ページ所収
邦訳全集、第二三巻、二五九―二七八ページ所収
ドイツ語から翻訳

遠方からの手紙（二）

第一信　最初の革命の最初の段階

帝国主義的世界戦争が生んだ最初の革命が起こった。この最初の革命が最後のものになることは、おそらくあるまい。

この最初の革命、すなわち一九一七年三月一日のロシア革命の最初の段階は、スイスで手にはいる乏しい資料から判断すると、すでに終わった。この最初の段階がわれわれの革命の最後の段階になることは、おそらくあるまい。

何世紀も維持されてきて、一九〇五—一九〇七年の巨大な、全人民的な階級戦の三年間なにがなんでももちこたえた君主制が、たった八日間で——これは、ロシアの在外使節全員にあてた自慢たらたらの電報のなかでミリュコーフ氏があげている期間だ——崩壊するというような「奇跡」が、いったいどうして起こったのだろうか？

自然界にも、歴史にも、奇跡などというものはない。だが、あらゆる革命をふくめて、歴史のあらゆる急転換は、きわめて豊富な内容を示し、たたかう人々の闘争形態と力関係の思いがけない独特な組み合わせをくりひろげるので、俗物の頭には多くのことが奇跡と思えるに相違ない。

ツァーリ君主制が数日間で崩壊するには、世界史的な重要性をもつ諸条件が、いくつか組み合わされることが必要であった。そういう条件のおもなものをあげてみよう。

もし、一九〇五—一九〇七年の三年間の偉大な階級戦と、ロシアのプロレタリアートの革命的エネルギーとがなかったなら、革命のはじめの段階が数日間で終わるほど急速な第二次革命は不可能であったろう。第一次革命（一九〇五年）は、土壌を深く掘りおこし、多年の偏見を根こそぎにし、幾百万の労働者と幾千万の農民を政治生活と政治闘争に目ざめさせ、ロシア社会のすべての階級（とすべての主要な政党）に、その真の本性、その真の利害関係、その勢力、その行動方法、その当面の目標と将来の目標を、たがいに示しあい、また全世界に示すようにさせた。第一次革命とそれにつづく反革命時代（一九〇七—一九一四年）は、ツァーリ君主制の本質をすっかり明るみにだし、その「ぎ

りぎりの姿」をあらわさせ、その腐敗といとわしさ、怪物ラスプーチンを先頭とするツァーリ徒党の破廉恥と堕落、ロマノフ家——ユダヤ人や労働者や革命家の血でロシアの全土をひたしたポグロム組織者、数千万デシャチーナの土地を領有し、自分と自分の階級とのこの「神聖な財産」を守るためには、どんな残虐行為、どんな犯罪もいとわず、どれだけの数にのぼる市民を零落させ窒息させようと意に介しなかった、この「同輩中第一等」の地主——の残忍性を、あますところなく表面化した。

もし一九〇五—一九〇七年の革命がなかったなら、もし一九〇七—一九一四年の反革命がなかったなら、ロシア民族とロシアに住む諸民族とのすべての階級が、一九一七年の二月—三月革命の八日間に見られたような正確な「自決」をおこなうこと、すなわち、これらの階級の相互間の関係とツァーリ君主制にたいする関係とを決定することは、できなかったであろう。この八日間の革命は、もし比喩的に言ってよければ、いわば総稽古や下稽古を十回もやったあとで「演じられた」のであって、「俳優」は、おたがいを知り、自分の役割、自分の持ち場、自分のまわりの舞台装置を細大もらさず、すみずみまで知っており、いくぶんでも重要な政治的傾向と行動方法のあらゆる色合いにいたるまで知りつくしていた。

しかし、グチコーフやミリュコーフらの諸君とその腰巾着どもが「大反乱」だとして非難した一九〇五年の第一次の大革命が、一二年後に、一九一七年の「輝かしい」「名誉」革命——グチコーフやミリュコーフらは、この革命が彼らに(さしあたって)権力をあたえたという理由で、この革命を「名誉」革命とよんでいる——にみちびいたのには、なお一人の偉大な、強力な、全能の「舞台監督」、一方では、世界史の流れを大々的に速めることができ、他方では、かつてなかったほど激しい世界的規模の危機、経済的、政治的、民族的および国際間の危機を生みだすことのできる「舞台監督」が必要であった。世界史の歩みが異常に速められたこと以外に、とくに急激な世界史の諸転換が起こることが、そういう転換の一つのさいに、血と汚物にまみれたロマノフ君主制の荷車が一挙にくつがえされるために必要であった。

この全能の「舞台監督」、この強力な促進者となったのが、帝国主義的世界戦争であった。

これが世界戦争だということは、いまではもう争う余地がない。なぜなら、アメリカ合衆国と中国は、いまでもすでになかば戦争に巻きこまれており、あすは完全に巻きこまれるだろうからである。

この戦争がどちらの側についてみても帝国主義戦争だと

いうことは、いまではもう争う余地がない。資本家と彼らの腰巾着である社会愛国主義者や社会排外主義者だけが――あるいは、一般的な批判的規定をつかうかわりに、ロシアでおなじみの政治家の名まえで言えば、一方ではグチコーフ、リヴォーフ、ミリュコーフ、シンガリョーフら、他方ではグヴォズデフ、ポトレソフ、チヘンケーリ、ケーレンスキー、チヘイッゼらだけが――この事実を否定したり、ごまかしたりすることができるのである。ドイツのブルジョアジーも、イギリス＝フランスのブルジョアジーも、他国を略奪するため、弱小民族を絞殺するため、世界を金融的に支配するため、植民地を分割し再分割するため、また各国の労働者を愚弄し分裂させるというやり方で、滅びかけた資本主義制度を救うために、この戦争をやっているのである。

帝国主義戦争は、客観的な不可避性をもって、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの階級闘争を異常に速め、またかつてなかったほどに激化させずにはおかなかったし、こうして敵対する諸階級のあいだの内乱に転化せずにはおかなかった。

この転化は一九一七年の二月―三月革命で始まった。この革命の最初の段階は、第一に、二つの勢力がツァーリズムに共同の打撃をくわえたことを示している。一方では、その無意識的な腰巾着どもの全員をひきつれ、イギリス＝フランスの大使や資本家というその意識的な指導者の全員をうしろだてとするブルジョア・地主的ロシア全体、他方では、兵士代表と農民代表を味方に引きつけはじめた労働者代表ソヴェト[101]がそれである。

この三つの政治的陣営、三つの主要な政治勢力、すなわち、(一) 農奴主的地主の首長であり、旧官僚と旧将官の首長であるツァーリ君主制、(二) ブルジョア・地主的＝オクチャブリスト＝カデット的ロシア――そのうしろには小ブルジョアジー（その主要な代表者はケーレンスキーとチヘイッゼ）がくっついていた――、(三) 全プロレタリアートと貧しい住民大衆全体とに同盟者を求めている労働者代表ソヴェト――この三つの主要な政治勢力は、「最初の段階」の八日間にさえ、外国の新聞の乏しい電報にあまんじるほかない観察者の目にさえ、あますところなくはっきりと現われた。

しかし、このことを詳しく論じるまえに、私は、この手紙のまえのほうで、最も重要な要因である帝国主義的世界戦争について述べた部分にもどらなければならない。

戦争は、交戦諸国を、資本主義制度の「主人」であり、資本主義的奴隷制の奴隷所有者である資本家の交戦諸グループを、鉄の鎖でたがいに結びつけた。ひとかたまりになっ

た血まみれの糸球――これが、現在の歴史的時機の社会・政治生活である。

開戦当初にブルジョアジーの側へ寝がえった社会主義者たち、ドイツのダーヴィットやシャイデマンら、ロシアのプレハーノフ＝ポトレソフ＝グヴォズデフの一派はみな、革命家の「幻想」に反対し、帝国主義戦争の内乱への転化という「たわけた茶番劇」に反対して、長いあいだ声をかぎりにわめきたててきた。彼らは、資本主義が示した力、生命力、適応性とかいうものを、さまざまに賛美してきた。――彼らは、資本家が各国の労働者階級を「順応させ」、飼いならし、愚弄し、分裂させるのを助けてきた。

しかし、「最後に笑う者が最もよく笑う」。ブルジョアジーは、戦争の生みだす革命的危機を長いあいだ遅らせることはできなかった。最近ドイツを訪れたある観察者の言い方によると「天才的に組織された飢え」があるというドイツをはじめとして、同じく飢えがせまっているが、組織の点でははるかに「天才的」でないイギリスやフランスにいたるまで、あらゆる国で革命的危機が抑えようもない勢いで高進している。

混乱が最もはなはだしく、しかも最も革命的な（彼らの特別の資質によってではなく、「一九〇五年」の伝統が生きているおかげで）プロレタリアートをもつ帝政ロシアで、どこよりもはやく革命的危機が起こったのは、当然である。この危機は、ロシアとその同盟国がこうむった一連の重大な敗戦によって、速められた。敗戦は、古い政府機構全体と旧制度全体をゆるがせ、旧制度にたいする住民のすべての階級の怒りを呼びおこし、軍隊を憤激させ、頑迷な貴族や腐敗しきった官僚からなる旧将校層の大部分を追いはらって、若い、はつらつとした、主としてブルジョア的、ラズノチーネツ的、小ブルジョア的な将校層とおきかえた。これまで「敗戦主義」に反対して叫びたて、わめきたててきたブルジョアジーの露骨な追従者や、まったく無定見な連中は、いまや、最も遅れた、最も野蛮なツァーリ君主制の敗戦と革命の大火の始まりとの歴史的結びつきという事実に直面させられている。

しかし、開戦当初の敗北が、爆発を速める否定的な要因の役割を果たしたのにたいし、イギリス＝フランスの金融資本、イギリス＝フランスの帝国主義と、ロシアのオクチャブリスト＝カデット的資本との結びつきは、直接にニコライ・ロマノフにたいする陰謀を組織することによってこの危機を速める一要因となった。

問題のこのきわめて重要な側面については、イギリス＝フランスの新聞はもっともな理由から口をつぐんでいるし、

ドイツの新聞はそれみたことかと言わんばかりにそれを強調している。われわれマルクス主義者は、帝国主義者の一方の交戦グループの外交官や大臣のうそ、官製の、あまったるい外交的なうそにもまどわされず、また彼らの金融上、軍事上の競争者である他方の交戦グループの目くばせやくすくす笑いにもまどわされずに、真実を冷静に直視しなければならない。二月―三月革命の諸事件の経過全体がはっきり示しているのは、ニコライ二世（われわれは、彼が最後のニコライ帝となることを期待し、またそうならせるために努力するであろう）とヴィルヘルム二世との「単独」協定や単独講和を妨げるために、ずっとまえから必死の努力をはらってきたイギリスとフランスの大使館ならびにその手先や「手づる」が、オクチャブリストやカデットと共謀し、また一部の将官や軍隊およびペテルブルグ守備隊の一部の将校と共謀して、とくにニコライ・ロマノフを更迭するために、直接に陰謀を組織したということである。

われわれは幻想をいだかないようにしよう。グヴォズデフ＝ポトレソフ主義と国際主義とのあいだを動揺して、しょっちゅう小ブルジョア平和主義へ迷いこんでいる「組織委員会派」または「メンシェヴィキ」の一部の連中のように、いま労働者党とカデットとの「協定」や、後者にたいする前者の支持等々を賛美するのをはばからない連中の誤りに、おちいらないようにしよう。自分がまる暗記している古い（しかも全然マルクス主義的でない）学説に都合のいいように、この連中は、イギリス＝フランス帝国主義者が、グチコーフやミリュコーフ一味と共謀して、「武人の筆頭」ニコライ・ロマノフをやめさせ、もっと精力的で、はつらつとしていて、もっと有能な武人たちをあとがまにすえる目的でたくらんだ陰謀に、ベールをかけようとしているのである。

革命があのように急速に、またあのように――外見上では、うわべをちょっと見たところでは――徹底的に勝利したのは、きわめて独特な歴史的情勢の結果、まったく相異なる流れ、まったく異質的な階級利害、まったく対立する政治的および社会的志向が、一つに融合し、それもすばらしく「むつまじく」融合したからにほかならない。すなわち、帝国主義戦争をつづけるため、この戦争をいっそう狂暴に、頑強に遂行するため、グチコーフ一派には……コンスタンティノープルを、フランスの資本家には……シリアを、イギリスの資本家には……メソポタミアを手にいれさせる等々の目的で新たに幾百万人のロシアの労働者と農民を屠殺するために、ミリュコーフやグチコーフの一派を政権の奪取に駆りたてたイギリス＝フランス帝国主義者の陰謀――一方にあるのはこれである。他方には、パンと平和

と真の自由をめざす、プロレタリアートと人民大衆（都市と農村の貧困住民の全体）の深刻な革命的運動がある。

イギリスの金で「縫合された」、ツァーリ帝国主義におとらずいとわしいカデット＝オクチャブリスト的帝国主義を、ロシアの革命的プロレタリアートが「支持」するなどとは、口にするのもばかげている。革命的労働者は、いとわしいツァーリ君主制の破壊にこれまであたってきたし、すでにかなりの程度までそれを破壊しており、やがては根底から破壊しつくすであろう！　ある君主を別の君主と、しかもなるべく同じロマノフ家の一人ととりかえるためのブキャナン、グチコーフ、ミリュコーフ一派のたたかいが、状況の例外的な組合せをもつある短い歴史的時期に自分たちを助けにきたからといって、革命的労働者がそれで有頂天になったり、面食らったりすることはない。

事態はこうであったし、もっぱらこうであった。真実を恐れず、革命における社会勢力の相互関係を冷静にはかりにかけ、およそ「現情勢」の評価にあたっては、現在の、今日の特異性全体の見地から評価するだけでなく、いっそう深い原動力、ロシアならびに全世界におけるプロレタリアートとブルジョアジーのいっそう深い利害関係の見地からも評価する政治家は、このように、ただこのようにしか考えることができない。

ピーテル（ペトログラード）の労働者も、ロシア全土の労働者も、ツァーリ君主制に反対して、自由をめざし、農民のための土地をめざし、平和をめざし、帝国主義的屠殺に反対して、献身的にたたかってきた。イギリス＝フランスの帝国主義資本は、この屠殺をつづけ強めるために、宮廷陰謀を仕組み、近衛将校と共謀して陰謀をたくらみ、グチコーフやミリュコーフらをそそのかし、はげまして、すっかりお膳立てしてあった新政府を押したてた[104]。また実際に、プロレタリアの闘争がツァーリズムに最初の打撃をくわえたあとで権力を奪取したのは、この政府であった。

絞刑吏ストルィピンのきのうの助手であるオクチャブリストや「平和革新派」[105]、リヴォーフやグチコーフの手に真に重要な部署、中枢的な部署、決定的な部署、軍隊、官僚がにぎられているこの新しい政府——そこでは、ミリュコーフその他のカデットは、どちらかといえばお飾りとして、看板として、耳ざわりのよい教授式演説をするために席を占めており、「トルドヴィキ」[106]のケーレンスキーが、労働者と農民をだますためのバラライカの役割を演じている——この政府は、ゆきあたりばったりに人間を寄せ集めたものではない。

これは、ロシアで政治権力をにぎった新しい階級、資本主義的地主とブルジョアジーの階級の代表者である。この

階級は、ずっとまえからわが国を経済的に支配しており、また一九〇五—一九〇七年の革命の時期にも、一九〇七—一九一四年の反革命の時期にも、さらに——しかもとくに急速に——一九一四—一九一七年の戦争中にも、地方自治体やら、国民教育やら、各種の大会やら、国会やら、戦時工業委員会等々やらを自分の手におさめることによって、政治的にきわめて急速に自分を組織してきた。この新しい階級は、一九一七年までにすでに「ほとんど」権力をにぎっていた。だから、ツァーリズムが崩壊してブルジョアジーに席を明け渡すためには、ツァーリズムに第一撃をくわえるだけで十分だったのである。異常な努力を必要とする帝国主義戦争が、遅れたロシアの発展の歩みを非常に速めたために、われわれは、「一挙に」（実際には、外見上でだけ一挙に）イタリアやイギリスに追いつき、またフランスにさえほとんど追いついて、「連立の」、「挙国的」（すなわち、帝国主義的屠殺をおこない、人民をだますのに好都合な）「議会制」政府をもつようになった。

この政府——現在の戦争の見地からみれば、実質上、数十億金を支配する「イギリス＝フランス」商会の番頭にすぎない——とならんで、プロレタリアートと都市および農村住民の貧困層全体との利益を代表する主要な、非公式の、なお未成熟の、比較的弱体な労働者政府が生まれた。それは、兵士や、農民、さらに農業労働者との結びつきを求め、いうまでもないことながら、とりわけ、まず第一に、農民との結びつき以上に、農業労働者との結びつきを求めているピーテルの労働者代表ソヴェトである。

これが現実の政治情勢であって、われわれは、マルクス主義的戦術を、その拠って立つべき唯一の堅固な土台、すなわち事実の土台のうえにすえるために、なによりもまずこの政治情勢をできるだけ客観的な正確さで確かめるようつとめなければならない。

ツァーリ君主制は撃破されたが、まだ打ちのめされてはいない。

オクチャブリスト＝カデット的なブルジョア政府は、「イギリス＝フランス」金融商会の実際上の番頭として、帝国主義戦争を「最後まで」やりぬこうと望んでいるが、人民にたいする自己の権力や帝国主義的屠殺をつづける可能性を維持するのに支障をきたさない範囲で、最大限の自由と施し物を人民に約束せざるをえなくなっている。

労働者代表ソヴェトは、労働者の組織であり、労働者政府の萌芽であり、あらゆる貧困な住民大衆、すなわち住民の一〇分の九の利益の代表者として、平和とパンと自由を求めている。

この三つの勢力の闘争が、革命の最初の段階から第二の

段階への過渡をあらわす現在の情勢を規定している。

第一の勢力と第二の勢力とのあいだの矛盾は、深刻なものではなく、一時的な矛盾であって、もっぱら現在におけ る状況の組合せにより、帝国主義戦争における諸事件の急転換によって呼びおこされたものである。新政府全体が君主制派である。なぜなら、ケーレンスキーの口さきだけの共和主義は、まったくふまじめで、政治家にふさわしくないものであり、客観的には政治術策にすぎないからである。新政府は、ツァーリ君主制を打ちのめしてしまわないうちに、はやくも地主ロマノフ家の王朝との取引を始めた。オクチャブリスト=カデット型のブルジョアジーは、勤労者に対抗して資本の特権を守るために、官僚と軍部の首長としての君主制を必要とする。

ツァーリズムの反動とたたかうために、労働者は新政府を支持しなければならない、と言う者(どうやらポトレソフ、グヴォズデフ、チヘンケーリらがそう言っているようであり、また、いろいろ言葉をにごしてはいるがチヘイッゼもまたそう言っているらしい)は、労働者の裏切者であり、プロレタリアートの大業、平和と自由の大業にたいする裏切者である。なぜなら、実際には、ほかならぬこの新政府は、すでに帝国主義的資本に、帝国主義的な戦争・略奪政策に縛られて動きがとれなくなっており、すでに王朝と取引を始めており(人民に相談もせずに!)、すでにツァーリ君主制を復活させるためにはたらいており、すでにミハイール・ロマノフを新しいツァーリの候補に推しており、すでに彼の帝位をかためるため、正統(適法の、古い法律に依拠する)君主制を、ボナパルティズム的君主制、人民投票君主制(ごまかしの人民投票に依拠する君主制)に代えるために、心を砕いているからである。

そうではないのだ。ツァーリ君主制と、口さきだけではなく、ミリュコーフやケーレンスキーといったおしゃべり屋の口約束においてではなく、ほんとうにたたかうためには、ほんとうに自由を保障するためには、労働者が新政府を支持するのでなくて、この政府が労働者を「支持し」なければならない! なぜなら、自由の唯一の保障、ツァーリズムが徹底的に破壊されるという唯一の保障は、プロレタリアートの武装であり、労働者代表ソヴェトの役割、意義、力を強化し、拡大し、発展させることだからである。

これ以外のものは、すべて空文句とうそであり、自由主義や急進主義の陣営の政治屋の自己欺瞞であり、詐欺行為である。

労働者の武装を援助せよ、せめてこの仕事を妨害するな。——そうすれば、ロシアにおける自由は打ち破りえないものとなり、君主制の復活は不可能となり、共和制は確保さ

れるであろう。

そうしないかぎり、グチコーフやミリュコーフらは君主制を復活させるであろうし、彼らの約束した「自由」をなにひとつ、それこそなにひとつ、実行しないであろう。人民に約束を「たらふくふるまい」、労働者をあざむくことは、あらゆるブルジョア革命ですべてのブルジョア政治屋がやってきたことである。

わが国の革命はブルジョア革命である。だから、労働者はブルジョアジーを支持しなければならない——ポトレソフ、グヴォズデフ、チヘイッゼらはこう言っており、ついこのあいだまでプレハーノフもそう言っていた。

わが国の革命はブルジョア革命である。だから、労働者は、ブルジョア政治屋の欺瞞に人民の目をひらかせ、ことばを信じないように、自分の力、自分の組織、自分の団結、自分の武装だけにたよるように、人民に教えなければならない——われわれマルクス主義者はこう言う。

オクチャブリストとカデットの政府、グチコーフとミリュコーフらの政府は、——たとえまじめにそうしようと思ったところで（グチコーフやリヴォーフがまじめだなどと考えることができるのは、子供だけであるが）——人民に平和も、パンも、自由も、あたえることができない。

平和をあたえることができないという理由は、この政府が戦争の政府であり、帝国主義的屠殺をつづける政府であり、アルメニアやガリチアやトルコを略奪し、コンスタンティノープルを奪いとり、ポーランド、クールラント、リトアニア辺区、等々を奪いかえそうと望んでいる、略奪の政府だからである。この政府は、イギリス＝フランスの帝国主義的資本に縛られて動きがとれなくなっている。ロシアの資本は、数千億ルーブリを支配して「イギリス＝フランス」という商号をもっている世界「商会」の支店である。

パンをあたえることができないという理由は、この政府がブルジョア政府だからである。それは、せいぜい、ドイツがやっているように「天才的に組織された飢え」を人民にあたえるだけであろう。しかし、人民は飢えを辛抱するつもりはないだろう。パンはあるし、手に入れることもできるが、しかし、資本と土地所有の神聖さのまえに膝を屈しない諸方策によらなければ手に入れることはできないということを、人民はさとるであろう、おそらく急速にさとるであろう。

自由をあたえることができないという理由は、この政府が、人民を恐れて、すでにロマノフ王朝と取引を始めている地主＝資本家政府だからである。

この政府にたいするわれわれの当面の態度の戦術的任務については、別の論文で述べることにしよう。そこではわ

れわれは、現情勢——革命の最初の段階から第二の段階への過渡——の特異性がどこにあるか、なぜこの時期のスローガン、「当面の任務」が次のものでなければならないかを示そう。すなわち、労働者諸君、諸君はツァーリズムにたいする内乱でプロレタリア的、人民的英雄精神の奇跡をおこなった。いまや諸君は、革命の第二の段階での自分たちの勝利を準備するために、プロレタリアートと全人民の組織化の奇跡をおこなわなければならない、と。

　いまはわれわれは、革命の現段階における階級闘争と階級間の力関係とを分析するだけにとどめるが、もう一つの問題を提起しなければならない。それは、現在の革命におけるプロレタリアートの同盟者はだれか、という問題である。

　プロレタリアートには二つの同盟者がある。第一は、数千万人をかぞえ、人口の圧倒的多数を占める、半プロレタリアおよび一部は小農民からなるロシアの住民の広範な大衆である。この大衆には、平和とパンと自由と土地が必要である。この大衆がブルジョアジー、とくに小ブルジョアジーからある程度影響を受けることは、避けられないであろう。というのは、彼らは、その生活条件の点でだれよりも小ブルジョアジーに近く、ブルジョアジーとプロレタリアートのあいだを動揺しているからである。グチコーフ、リヴォーフ、ミリュコーフの一派が戦争の遂行に力をいれればいれるほどますますきびしいものになってゆく戦争のきびしい教訓は、不可避的に、この大衆をプロレタリアートのほうへ追いやり、プロレタリアートについてすすむことをよぎなくさせるであろう。われわれはいまや、新制度の相対的な自由と労働者代表ソヴェトとを利用して、なによりもまず、なによりも第一に、この大衆を啓蒙し、組織するようにつとめなければならない。農民代表ソヴェト、農業労働者ソヴェト——これが、最も重大な任務の一つである。この場合、われわれの努力目標は、農業労働者に彼ら独自のソヴェトを別につくらせるだけでなく、無産の貧農にも、富裕な農民とは別個の組織をつくらせることであろう。今日切実に必要とされる組織化の特殊な任務と特殊な形態については、次の手紙にゆずる。

　第二に、ロシアのプロレタリアートの同盟者は、すべての交戦国、一般にすべての国のプロレタリアートである。彼らはいま戦争のためにひどく圧迫されていて、ロシアでプレハーノフやグヴォズデフやポトレソフが寝がえったように、ヨーロッパでブルジョアジーの側へ寝がえった社会排外主義者が彼らを代表してものを言っている場合が、あまりにも多い。しかし、プロレタリアートが社会排外主義者の影響を離脱する過程は、帝国主義戦争のつづくひと月

ごとに前進してきたし、ロシア革命がこの過程を大いに速めることは避けられないであろう。

この二つの同盟者とともに、プロレタリアートは、現在の過渡期の特殊性を利用しながら、まずはじめに、グチコーフ＝ミリュコーフの半君主制に代えて、民主的共和制と地主にたいする農民の完全な勝利との獲得をめざして、ついで、それだけが戦争で疲れはてた人民に平和とパンと自由をあたえることのできる社会主義をめざして、すすむことができるし、また実際にそれをめざしてすすむであろう。

エヌ・レーニン

一九一七年三月七（二〇）日に執筆
一九一七年三月二一日と二二日に新聞『プラウダ』第一四—一五号に要約して発表
全文は一九四九年に『レーニン全集』第四版、第二三巻にはじめて発表
全集、第五版、第三一巻、一一—二二ページ所収
邦訳全集、第二三巻、三三七—三三九ページ所収

第三信　プロレタリア民兵について

きのうチヘイッゼの動揺的な戦術について私がくだした結論は、きょう、三月一〇（二三）日、二つの文書によって完全に裏づけられた。第一の文書は、ストックホルムから『フランクフルト新聞』に送られてきた電報が伝えている、ピーテルのわが党すなわちロシア社会民主労働党中央委員会の宣言からの抜粋である。この文書には、グチコーフ政府を支持するとも、またそれを打倒するとも、一言も言っていない。それは、労働者と兵士にむかって、労働者代表ソヴェトを中心に自己を組織するよう、ツァーリズムに反対し、共和制をめざし、八時間労働日をめざし、地主の土地と穀物の貯えの没収をめざし、そしてこれが肝心な点だが、略奪戦争の中止をめざしてたたかうために、このソヴェトへ代表を選出するようにと呼びかけている。この場合、とくに重要で、とくに切実なのは、平和のために、すべての交戦国のプロレタリアと連絡をもつ必要があるという、わが中央委員会のまったく正しい考えである。

ブルジョア諸政府間の交渉や連絡から平和を期待するのは、自分をあざむき、人民をあざむくものであろう。

第二の文書は、これまたストックホルムから別のドイツ

新聞（『フォス新聞』）に送られてきた電報が伝えている、三月二（一五）日におこなわれたチヘイッゼ派国会議員団と勤労グループ（? Arbeiterfraction）および一五の労働者団体の代表との協議会、およびその翌日に発表された檄についての情報である。この檄の一一の条項のうち、電文は三つの条項しか伝えていない。すなわち、第一項の共和制の要求、第七項の平和および講和交渉の即時開始の要求、そして「ロシアの労働者階級の代表を政府に十分に参加させること」を要求している第三項である。

もしこの条項が正確に伝えられているとすれば、私にはブルジョアジーがチヘイッゼをほめている理由がわかる。私がまえに引用した《Times》（『タイムズ』）紙上のイギリスのグチコーフ派の賛辞に、さらに『タン』紙上でのフランスのグチコーフ派の賛辞がつけくわわったわけがわかる。フランスの百万長者と帝国主義者のこの新聞は、三月二二日にこう書いている。「労働者諸党の指導者たち、とくにチヘイッゼ氏は、労働者階級の願望をおだやかなものにするよう、全力をあげてはたらきかけている。」

じっさい、グチコーフ＝ミリュコーフ政府に労働者を「参加」させるように要求するのは、理論的にも、政治的にもばかげている。少数派として参加すれば、たんなる将棋の駒になってしまうであろうし、「五分五分の資格で」参加することは不可能である。というのは、戦争を継続せよという要求と、停戦協定を結び、講和交渉を始めよという要求とを、和解させることはできないからである。また、多数派として「参加する」ためには、グチコーフ＝ミリュコーフ政府を打倒するだけの力をもっていなければならない。実際上、「参加」の要求は最悪のルイ・ブラン主義で[103]ある。すなわち、階級闘争とその現実の環境とを忘れ、空虚きわまる仰々しい文句に熱中し、労働者のあいだに幻想をひろめることとである。それはまた、真の階級的、革命的勢力であり、人口の圧倒的多数を占める貧困住民層全体の信頼をかちとる能力、彼らが自己を組織するのを助け、彼らがパンのため、平和のため、自由のためにたたかうのを助ける能力をもったプロレタリア民兵をつくりだすためにつかわれるべき貴重な時間を、ミリュコーフやケーレンスキー一味との交渉に空費することとである。

チヘイッゼと彼のグループ（オ・カすなわち組織委員会派の党）については、私は述べない。私の利用しうる資料には、組織委員会のことは一言も述べられていないからである）の檄のこの誤りは、新聞の報じるところでは、三月二（一五）日の協議会でチヘイッゼの最も近い同志であるスコーベレフが次のように述べているだけに、ますます奇妙である。すなわち、「ロシアは第二の、真の（wirklich,

文字どおりには、現実の）革命の前夜にある」と。

これは正しい。スコーベレフとチヘイッゼは、このことから実践的な結論を引きだすのを忘れてしまった。この第二の革命がどれだけ近くせまっているかは、ここからでは、私のいるこのいまいましい遠方からでは、判断できない。そちらの現地にいるスコーベレフには、もっとはっきりわかっているはずである。だから、それに答えるのに必要な具体的資料を自分でもっておらず、またもつこともできないような問題は、私はとりあげないことにする。私はただ、第一信のなかで私が到達した、二月—三月革命は革命の最初の段階にすぎないという事実的結論を、「局外の一証人」つまりわが党に所属しないスコーベレフが確認したということを、強調するだけである。ロシアは、革命の次の段階、あるいはスコーベレフの言いまわしによれば、「第二の革命」への、特異な歴史的過渡期をとおっているのである。

もしわれわれがマルクス主義者であろうと思うなら、また全世界の革命の経験から学ぼうと思うなら、われわれは、この過渡期の特異性がまさにどこにあるか、この過渡期の客観的特質からどのような戦術が出てくるかを理解することにつとめなければならない。

現情勢の特異性は、グチコーフ＝ミリュコーフ政府が、次の三つの主要な事情のおかげで、異常に容易に最初の勝利をおさめたことにある。（一）イギリス＝フランス金融資本とその手先の援助、（二）軍の一部上層の援助、（三）ゼムストヴォ(102)や都市の諸機関、国会、戦時工業委員会などの形で、ロシアのブルジョアジー全体の既成の組織が存在していたこと。

グチコーフ政府は板ばさみになっている。資本の利益に縛られているため、この政府は、略奪的な強盗戦争をつづけ、資本や地主の法外な利潤を守り、君主制を復活させることにつとめないわけにはいかない。自分が革命に由来すること、ツァーリズムから民主主義へと急激に移行する必要があることに縛られているため、また飢えた、平和を要求する大衆の圧力をうけているため、この政府は、うそをつき、ことばをにごし、時をかせぎ、できるだけたくさん「宣言し」約束し（約束は、猛烈な物価騰貴の時代にあってさえ、非常に安価なただ一つの品物である）、できるだけ少なく実行し、一方の手で譲歩して他方の手でそれを取りあげるほかはないのである。

ある種の状況のもとでは、政府にとっていちばん好都合に事がはこんだ場合には、新政府は、全ロシアのブルジョアジーとブルジョア・インテリゲンツィアの組織能力全体にたよって破綻をいくらか先へ延ばすことができるであろう。しかし、その場合でも、政府は破綻をまぬがれること

はできない。なぜなら、ブルジョア的諸関係の地盤を捨てずには、革命的方策に移らずには、ロシアおよび全世界のプロレタリアートの最大の歴史的英雄精神にうったえずには、世界資本主義の生みだした、帝国主義戦争と飢えという恐るべき怪物の爪をのがれることは不可能だからである。

ここから次の結論が出てくる。それは、全ロシアのブルジョアジーとブルジョア・インテリゲンツィア全体のすばらしい組織にたいして、都市農村の貧民、半プロレタリアートおよび小経営主の広大な大衆全体を指導するプロレタリアートの、同様にすばらしい組織を対置しないかぎり、われわれは、新政府を一撃で倒すことはできないし、またたとえできても(革命期には、可能な事柄の範囲が千倍にもひろがる)、権力を維持することはできないであろう、ということである。

「第二の革命」がすでにピーテルで燃えあがっているのか(革命の成熟の具体的なテンポを国外から測ろうなどと考えるのはまったくばかげている、と私は言っておいた)、それともしばらく延期されたか、あるいはすでにロシアのいくつかの個々の地方で始まっているのか(どうやら、いくつかの徴候はそれを語っているようである)、それはどうであってもよい。新しい革命の前夜であろうと、その最中であろうと、その翌日であろうと、いずれの場合にも当面のスローガンはプロレタリアートの組織化でなければならない。

労働者の同志諸君! 諸君はきのうツァーリ君主制を倒して、プロレタリア的英雄精神の奇跡をおこなった。諸君はいずれ近い将来に(もしかすると、私がこの文章を書いているいまにでも)、帝国主義戦争をつづけている地主と資本家の権力を倒すために、かならず、同じような英雄精神の奇跡をふたたびおこなわなければならないであろう。もし諸君がプロレタリア的組織性の奇跡をおこなわないなら、諸君は、次の、この「真の」革命において確固たる勝利をおさめることはできないであろう!

当面のスローガンは組織である。だが、こう言っただけでやめることは、まだなにも言わないのと同じである。というのは、一方では、組織はつねに必要なことだからである。つまり、「大衆を組織する」必要を示しただけでは、まだなにひとつ明らかにしたことにはならないのである。また他方では、こう言っただけでやめる人間は、自由主義者の追随者にすぎない。というのは、労働者が普通の「合法的な」(「正常な」ブルジョア社会の見地からみて)組織をこえてすすまないこと、すなわち、労働者が自分の政党、自分の労働組合、自分の協同組合等々に加入するだけにとどめることこそ、まさに自由主義者が望んでいることだか

らである。

労働者は、革命期には普通の組織だけでなく、まったく別な組織が自分たちに必要だということを、その階級的本能によって理解した。彼らは、一九〇五年のわが国の革命や、一八七一年のパリ・コミューンの経験が示した道を正しくすすんだ。彼らは労働者代表ソヴェトをつくりだした。彼らは、兵士代表や、また疑いもなく農村の賃金労働者の代表や、ついで（なんらかの形で）全貧農の代表を参加させることによって、ソヴェトを発展させ、拡大し、強化しはじめた。

プロレタリア的および半プロレタリア的住民の、例外なくすべての職業と層、すなわち、経済学的にはあまり正確でないが一般にわかりやすい表現を用いるなら、すべての勤労者と被搾取者のために、ロシアの例外なくすべての地方にこのような組織をつくりだすこと——これが第一の、一刻も猶予できない重要任務である。さきまわりして、次のことを指摘しておこう。すなわち、わが党は（新しい型のプロレタリア諸組織内でのわが党の特別の役割については、私はのちの手紙の一つで論じたいと思っている）、農民大衆全体については、富裕な農民から分離して、〔農業〕賃金労働者の独立のソヴェト、ついでまた穀物を売ることのない小農民の独立のソヴェトをつくるように、とくに勧告しなければならない。この条件がなければ、一般的にいって、*真にプロレタリア的な政策をおこなうこともできなければ、また、幾百万の人間の生死にかかわる最も重要な実際問題、パンの公正な配給や穀物の増産等々の問題を正しく取り扱うこともできない。

＊　農村では、いまや小農、部分的に中農の獲得をめぐって闘争が展開されるであろう。地主は彼らを、富裕な農民に依拠して、ブルジョアジーに従属させようとするであろう。われわれは彼らを、農村の賃金労働者と貧農とに依拠して、都市プロレタリアートとの最も緊密な同盟にみちびかなければならない。

しかし、ここで起こる問題は、労働者代表ソヴェトはなにをしなければならないのか、ということである。それは「蜂起の機関、革命的権力の機関と見なされなければならない」と、われわれは、ジュネーヴの『ソツィアル－デモクラート』紙の一九一五年一〇月一三日付、第四七号に書いた。[一〇二]

一八七一年のコミューンと一九〇五年のロシア革命との経験から引きだされたこの理論的命題を、ほかならぬ現在のロシア革命の、ほかならぬ現段階の実践の指示するところにもとづいて解明し、いっそう具体的に発展させなければならない。

われわれには革命的権力が必要であり、(ある過渡的な期間は)国家が必要である。この点で、われわれは無政府主義者と違っている。革命的マルクス主義者と無政府主義者との差異は、前者が集中された、大規模な、共産主義的生産に賛成し、後者が細分された小規模の生産に賛成するという点だけにあるのではない。そうではない。ほかならぬ権力の問題、国家の問題における差異は、われわれが社会主義をめざす闘争のために国家の革命的諸形態を革命的に利用することに賛成し、無政府主義者がこれに反対するという点にある。

われわれには国家が必要である。だが、われわれに必要な国家は、立憲君主制から最も民主的な共和制にいたるまでの、ブルジョアジーがいたるところにつくりだしているような、そういう国家ではない。この点でわれわれは、かのパリ・コミューンの教訓、およびマルクスとエンゲルスがこの教訓についてあたえた分析*をゆがめたり、忘れてしまったりしている古い、腐りかけた社会主義諸党の日和見主義者やカウツキー派と違っている。

* とりわけマルクスの『フランスにおける内乱』、この著作の第三版へのエンゲルスの序文、一八七一年四月一二日付のマルクスの手紙、および一八七五年三月一八―二八日付のエンゲルスの手紙(一〇)にあたえられているこの分析と、さらに、いわゆる「国家の破壊」という問題にかんしてカウツキーが一九一二年にパンネクークと論戦したさいにおこなったマルクス主義の完全な歪曲とについて、私は、のちの手紙の一つか、特別の論文かで、詳しく論じることにしよう。(一一)

われわれには国家が必要であるが、それは、ブルジョアジーが必要としているような国家、すなわち、警察、軍隊、官僚(官吏)というような、人民から分離し、人民に対立する権力機関をもった、そういう国家ではない。いっさいのブルジョア革命は、この国家機構をいっそう完全にしただけであり、それを一つの党派の手から別の党派の手へ移しただけであった。

だが、プロレタリアートは、もし彼らが現在の革命の達成物を守りぬき、さらに前進し、平和とパンと自由をたたかいとろうと望むなら、マルクスのことばを借りていえば、この「できあいの」国家機構を「打ち砕き」、警察や軍隊や官僚を、ひとりのこらず武装した全人民と融合させることによって、これを新しい国家機構でおきかえなければならない。一八七一年のパリ・コミューンと一九〇五年のロシア革命との経験が示した道をすすみながら、プロレタリアートは、住民中の貧しい被搾取層全体を組織し、武装させ、こうして彼らがみずから直接に国家権力の諸機関を自分の手ににぎり、みずからこの権力の諸機関となるように

しなければならない。

そして、ロシアの労働者は、すでに最初の革命の最初の段階のあいだに、すなわち一九一七年二月—三月に、この道にすすんだ。いまや全任務は、この新しい道がどういうものかということをはっきり理解すること、——この道を大胆に、しっかりと、ねばりづよくさらに前進してゆくことである。

イギリス＝フランスの資本家とロシアの資本家は、従来の国家機構、警察、軍隊、官吏には手をふれずにそのままにしておき、「たんに」ニコライ二世を更迭させるか、あるいはむしろ「ちょっとおどそう」と望んだだけであった。労働者はそれ以上にすすんで、この従来の国家機構を打ち砕いた。そこで、いまではイギリス＝フランスの資本家ばかりか、ドイツの資本家までが、たとえばロシアの兵士が自分たちの将校を、それがグチコーフやミリュコーフの味方のネペーニン提督であろうとかまわずに射殺したのを見て、怒りと恐怖でほえたてている。

私はいま、労働者がそれを、従来の国家機構を打ち砕いた、と述べた。もっと正確にいえば、それを打ち砕きはじめたのである。

具体的な例をとってみよう。

警察は、ピーテルその他多くの地方で、一部は破砕され、一部は更迭された。グチコーフ＝ミリュコーフ政府は、人民から分離し、人民に対立し、ブルジョアジーの指揮下にある武装した人間の特別の組織としての警察を復活させずには、君主制を復活させることも、総じて権力をたもつこともできないであろう。このことは、火を見るよりも明らかである。

他方では、新政府は、革命的人民に考慮をはらい、なかばの譲歩や口約束を人民にたっぷりふるまい、時をかせがなければならない。そこで、政府は中途半端な方策にうったえる。政府は、選挙による上官をいただく「人民民兵」を設置する（これはおそろしく体裁よく聞こえる！　おそろしく民主主義的に、革命的に、りっぱに聞こえる！）が——しかし……しかし、しかし、第一に、政府はそれを、ゼムストヴォや都市自治体の監督のもとに、その指揮のもとに、つまり、血帝ニコライと絞刑吏ストルィピンとがつくった法律によって選ばれた地主と資本家の指揮のもとにおこうとしている!!　第二に、「人民」の目をくらますために、民兵を「人民」民兵とよびながら、政府は、実際には、ひとりのこらず全人民にこの民兵に参加するよう呼びかけてはおらず、また、職員や労働者が公務すなわち民兵勤務に従う時間と日にたいして普通の賃金を支払う義務を、雇主や資本家に課してもいない。

これが肝心かなめの点である。グチコーフやミリュコーフらの地主的・資本家的政府は、こういうやり方で「人民民兵」をたんなる紙上のものに終わらせ、実際には、すこしずつ、こっそりと、最初は「八千人の学生と教授」から（外国の新聞は、現在のピーテルの民兵をこういうものとして描いている）――これは明らかなこどもだましだ！――、次にはしだいに新旧の警察から、ブルジョア的、反人民的な民兵を復活させることをねらっているのだ。

警察の復活を許してはならない！　地方権力を手ばなしてはならない！　プロレタリアートに指導される、真に全人民的な、ひとりのこらず全住民を参加させた民兵をつくりだすべきである！――これが今日の任務であり、これが、今後の階級闘争、今後の革命運動の正しく理解された利益にかなった、同様にまた、警察や村巡査や地方警部を憎まずにいられない、人民を支配する権力をあたえられた武装した人間を地主や資本家が指揮するのを憎まずにいられないすべての労働者、すべての農民、すべての勤労被搾取者の民主主義的本能にもかなった当面のスローガンである。

彼らグチコーフやミリュコーフらには、地主や資本家には、どのような警察が必要なのか？　ツァーリ君主制のもとにあったのと同じような警察である。世界のあらゆるブルジョア共和国、ブルジョア民主共和国は、きわめて短い革命期のあとで、まさにそういう警察、人民から分離し、人民に対立し、なんらかの仕方でブルジョアジーに従属した、武装した人間の特別の組織を設立するか、復活させたのである。

われわれプロレタリアートには、すべての勤労者には、どのような民兵が必要なのか？　真に人民的な民兵、すなわち、第一に、ひとりのこらず全住民から、すべての男女成年市民からなり、第二に、人民軍隊の機能と、警察の機能、国家秩序および国家行政の主要な、基本的な機関の機能とを一つに合わせた民兵である。

これらの命題をもっとわかりやすく説明するために、純然たる図式上の例をとろう。どんなものにせよプロレタリア民兵の「計画」をつくろうと考えるのがばかげていることとは、いうまでもない。労働者と全人民がほんとうに大衆的に、実践的にこの仕事にとりくむなら、彼らは、どんな理論家よりも百倍もうまくそれを仕上げ、ととのえるであろう。私は「計画」を提案しようとしているのではなく、ただ自分の考えを例解しようと思うだけである。

ピーテルには約二〇〇万人の住民がいる。その半数以上が一五歳から六五歳までの人々である。これを半数とおさえよう。そうすると、一〇〇万人になる。さらに、病人その他、正当な理由でいまのところ公務に参加できない人々

として、まる四分の一を除外しよう。そうすると、七五万人が残る。この七五万人が、一五日間に一日だけ民兵として勤務する（そして、この一日にたいして、ひきつづき雇主から支払を受ける）と仮定すれば、五万の兵力をもつ軍隊ができあがるであろう。

われわれに必要なのは、まさにこういう型の「国家」である！

まさにこういう民兵こそ、ことばのうえだけでなく、実際に「人民民兵」であろう。

まさにこういう方法で、われわれは、特別な警察であろうと、人民から分離した特別な軍隊であろうと、その復活を不可能にしなければならない。

このような民兵は、九五％まで労働者と農民からなっているであろうし、ほんとうに人民の圧倒的多数の理性と意思、力量と権力を表現するものであろう。このような民兵こそ、ほんとうにひとりのこらず全人民を武装させ、彼らに軍事の訓練をほどこすであろうし、反動を復活させるあらゆる試み、ツァーリの手先のあらゆる奸策から、グチコーフ流でない、ミリュコーフ流でないやり方で、全人民を守るであろう。このような民兵は「労働者・兵士代表ソヴェト」の執行機関となるであろうし、人民の絶対的な尊敬と信頼をかちとるであろう。なぜなら、それ自体、ひとりのこらず全人民の組織だからである。このような民兵は、民主主義を、資本家による人民の奴隷化と人民の愚弄とをおおいかくす美しい看板ではなくならせ、あらゆる国務に大衆を参加させるための真の大衆教育にならせるであろう。このような民兵は、ことばによるだけではなく、行為によって、活動によって未成年者を教育して、彼らを政治生活へ引きいれるであろう。このような民兵は、学者ふうの言い方をすれば、「福利警察」の管轄に属する諸機能、すなわち保健衛生上の監督等を発展させ、すべての成年婦人をこの種の仕事に引きいれるであろう。ところで、婦人を公務へ、民兵へ、政治生活へ引きいれずには、婦人を愚鈍化する家事や、台所仕事の環境から彼女たちを引きださずには、真の自由を保障することはできないし、社会主義はおろか、民主主義さえ建設することはできない。

このような民兵は、プロレタリア民兵であろう。なぜなら、都市の工業労働者は、彼らが一九〇五－一九〇七年にも、一九一七年にも、人民の革命闘争全体のなかで当然かつ不可避的に指導的地位を占めたのと同様に、同じく当然かつ不可避的に、民兵のなかで貧民大衆にたいする指導的な影響力をもつだろうからである。

このような民兵は、絶対的な秩序と、私心なく実現される同志的規律とを保障するであろう。だが、同時にそれは、

すべての交戦国をみまっている重大な危機にあたって、この危機と真に民主的にたたかい、パンその他の物資の公正で迅速な配給を実現し、またフランス人が今日「国民動員」とよび、ドイツ人が「祖国特志勤務」とよんでいる「全般的労働義務」を実施する可能性をあたえるであろう。そして、このような「全般的労働義務」を実施しないでは、恐ろしい強盗戦争でこうむった、またなおこうむりつつある傷手をいやすことは不可能である——不可能なことが判明している。

ロシアのプロレタリアートは、もっぱら政治面だけの民主主義的改良について大げさな約束をしてもらうだけのために、自分の血を流したのだろうか？　自分の暮らしがいくぶんよくなったと、すべての勤労者がいますぐ見てとり、感じるような状態を、プロレタリアートは要求し、またかちとるのではなかろうか？　どの家族にもパンがゆきわたるように、どの幼児にも上等の牛乳が一壜渡るように、そしてこどもたちに牛乳が確保されないうちに、金持の家庭のおとなが一人でも余分な牛乳をとることをあえてなしえないように、ツァーリや上層貴族が残していった宮殿や豪奢な邸宅をむだにあけておかないで、宿なしや無産者の宿にあてるように、要求し、またそれをかちとるのではなかろうか？　婦人も男子と平等の立場でかならず参加する全人民的民兵のほかに、だれがこういう方策を実現できるであろうか？

こういう方策はまだ社会主義ではない。それらは消費の割当にかんするものであって、生産の改造にかんするものではない。それらはまだ「プロレタリアートの執権」ではなく、「プロレタリアートと貧農の革命的民主主義的執権」にすぎないであろう。だが、いま肝心なことは、それらを理論的にどう分類するかではない。理論を、なによりもまず、なによりも第一に行動の手引と考えないで、革命の、複雑な、切実な、急速に発展してゆく実践的諸任務を、狭く解した「理論の」杓子定規にあてはめようとするなら、このうえない大きな誤りであろう。

ロシアの労働者大衆は、直接の革命闘争で勇気と創意と自己犠牲の奇跡をおこなったあとで、「プロレタリアートの組織化の奇跡」をおこなうだけの自覚と堅忍と英雄精神をもっているだろうか？　それは、われわれにはわからないし、それについて臆測をめぐらすことはむだであろう。なぜなら、このような質問にたいする答は、実践によってのみあたえられるからである。

われわれがたしかに知っていること、そして、党として大衆に説明しなければならないこと——それは、一方では、未曽有の危機や飢えや数えきれない災禍を生みだす、きわ

めて強力な歴史的推進力が現存していることである。この推進力というのは、両交戦陣営の資本家が強盗的な目的でおこなっている戦争である。この「推進力」は、きわめて豊かな、きわめて自由な、きわめて開明的な一連の諸民族を、深淵のふちに押しやっている。それは、諸国民に、全力をふりしぼることをよぎなくさせており、彼らを耐えがたい状態におとしいれている。それは、なにかの「理論」を実現することではなく(そういうことは問題にならない。マルクスは、そういう幻想におちいらないように、いつも社会主義者をいましめた)、最も徹底的な、実践的に可能な諸方策を実現することを、日程にのぼせている。というのは、徹底的な方策をとらなければ、滅亡するからである。幾百万の人間が飢えのために、ただちに、無条件に、滅亡するからである。

客観的情勢が全人民に徹底的な方策をとることを要求している条件のもとでは、先進的階級の革命的熱意が多くのことをなしとげうるということは、論証するまでもない。問題のこの側面は、ロシアではみながはっきり目で見ており、身に感じている。

革命期には、総じて生活が急速にながれてゆくものであるが、客観的情勢もまた急速に、急激に移りかわってゆくことを、理解することがたいせつである。そして、われわれは、自分の戦術と自分の当面の任務を、それぞれのあたえられた情勢の特殊性に適応させる能力をもたなければならない。一九一七年二月以前に日程にのぼっていたのは、大胆な革命的、国際主義的な宣伝であり、大衆に闘争を呼びかけ、彼らを目ざめさせることであった。二月—三月事件のさいに必要であったのは、当面の敵であるツァーリズムをただちに粉砕するための、献身的な闘争の英雄精神であった。いまやわれわれは、革命のこの最初の段階から第二の段階への、ツァーリズムとの「格闘」から、グチコーフ＝ミリュコーフの地主的＝資本主義的帝国主義との「格闘」に移る過渡に際会している。いま日程にのぼっているのは、組織上の任務である。だが、それは、けっして、もっぱら型どおりの組織のために活動するという型どおりの意味に解すべきではなく、かつてなかったほど広範な被抑圧階級の大衆を組織に引きいれ、この組織そのものに、軍事上の任務や、全国家および国民経済に関係した諸任務を果たさせるという意味に解すべきである。

プロレタリアートはさまざまな道をとおって、この特異な任務にとりかかっており、またとりかかるであろう。ロシアのある地方では、二月—三月革命はプロレタリアートの手にほとんど完全な権力をあたえた。別の地方では、プロレタリアートは、おそらく「実力で奪取する」というや

り方でプロレタリア民兵を創設し、拡大しはじめるであろう。また別のある地方では、プロレタリア的組織性の成長や、兵士と労働者の相互接近や、農民のあいだの運動や、グチコーフ＝ミリュコーフの帝国主義的戦争政府の適性についての数多くの人々の幻滅によって、この政府を労働者代表ソヴェトの政府におきかえる時が近づくまでは、プロレタリアートは、おそらく、普通等々の選挙権にもとづいて、市議会やゼムストヴォの即時改選をかちとり、こうしてそれらを革命的中心点にするようにつとめるであろう、等々。

われわれはまた、最も進んだ、事実上の共和国の一つ、フィンランドが、ピーテルの間ぢかにあることを忘れないようにしよう。一九〇五年から一九一七年まで、フィンランドは、ロシア国内の革命闘争に掩護されて、比較的に平和のうちに民主主義を発展させ、人民の大多数を社会主義の味方に獲得してきた。ロシアのプロレタリアートは、フィンランド共和国に、分離の自由までをふくむ完全な自由を保障し（ヘルシングフォルスでカデットのローヂチェフが大ロシア人のために特権のかけらをせしめようとしてひどくみっともない取引をやっている現在では、おそらく社会民主主義者のだれひとりとしてこの点で動揺するものはないであろう）、まさにそうすることで、フィンランドの労働者の完全な信頼と、全ロシアのプロレタリアートの事業にたいする彼らの同志的援助をかちとるであろう。困難な大事業では誤りは避けられない――われわれにしても、誤りはまぬかれられない――が、フィンランドの労働者は、よりすぐれた組織者である。彼らはこの方面でわれわれを助けてくれるであろう。彼らは、彼らなりのやり方で、社会主義共和国の設立を推しすすめるであろう。

ロシア本国で幾多の革命的勝利をかちとる――フィンランドで、これらの勝利に掩護されて平和的な組織上の成功をおさめる――ロシアの労働者が新しい規模の革命的な組織上の任務に移行する――プロレタリアートおよび貧困住民層が権力を獲得する――西欧の社会主義革命が鼓舞され、発展する――これが、われわれを平和と社会主義とにみちびく道である。

エヌ・レーニン

チューリヒ、一九一七年三月一一（二四）日

一九二四年に雑誌『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』第三一―四号にはじめて発表
全集、第五版、第三一巻、三四―四七ページ所収
邦訳全集、第二三巻、三五二―三六六ページ所収

現在の革命におけるプロレタリアートの任務について（三）

私は四月三日の夜ペトログラードに着いたばかりなので、四月四日の集会では、もちろん、私個人だけの名義で、しかも準備の足りないことをことわったうえで、革命的プロレタリアートの任務についての報告をおこなうほかはなかった。

私自身に——また善意の反対者たちにも——仕事をやりやすくするために私がやれたただ一つのことは、文書のテーゼを用意することであった。私はこのテーゼを読みあげてから、その原文を同志ツェレテーリに渡した。私はそれをごくゆっくり、しかも二度も読みあげた。はじめはボリシェヴィキの集会で、ついでボリシェヴィキとメンシェヴィキの合同集会で。

以下に、私のこの個人的なテーゼを、ごく短い解説的な注をつけて掲載する。この注は、報告ではずっと詳しく展開しておいた。

テーゼ

一　戦争は、ロシアの側についてみて、リヴォーフ一派の新政府のもとでも、この政府の資本家的性格のために、いまなお無条件に帝国主義的強盗戦争であって、この戦争にたいするわれわれの態度の問題で「革命的祖国防衛主義」にいささかでも譲歩することは許されない。

革命的祖国防衛主義を真に正当なものとする革命的戦争に、自覚したプロレタリアートが同意できるのは、次の条件がみたされる場合に限られる。（a）権力が、プロレタリアートとこれに同調する貧農層との手に移ること、（b）口さきだけでなく、実際に、いっさいの併合を放棄すること、（c）実際に、資本のあらゆる利益と完全に手を切ること。

革命的祖国防衛主義の信奉者の大衆の広範な層は、疑いもなく善意であって、征服の目的からではなく、やむをえないものとして戦争を認めているにすぎないのだから、つまり、彼らはブルジョアジーにだまされているのだから、彼らにたいしては、とくに詳しく、根気よく、忍耐づよく、彼らの誤りを説明し、資本と帝国主義戦争との切っても切

れない結びつきを説明し、資本を倒さなければ、強制的でない、真に民主主義的な講和で戦争を終わらせることは不可能なことを、証明しなければならない。

戦線の軍隊のあいだでこの見解のできるだけ広範な宣伝を組織すること。

交歓。

二　ロシアにおける現情勢の特異性は、プロレタリアートの自覚と組織性とが不十分なために、権力をブルジョアジーに渡した革命の最初の段階から、プロレタリアートと貧農層の手に権力を渡すに相違ない革命の第二の段階への過渡だという点にある。

この過渡期の特徴は、一方では、最大限の合法性があること（ロシアは、いま、すべての交戦国のうちで世界中で最も自由な国である）、他方では、大衆にたいする暴力が存在していないこと、最後に、平和と社会主義との最悪の敵である資本家の政府にたいして、大衆が軽信的で無自覚な態度をとっていることとである。

このような特異性のために、政治生活に目ざめたばかりの、かつてないほど広範なプロレタリア大衆のあいだでおこなう党活動の特殊な条件に適応する能力をもつことが、われわれに必要になっている。

三　臨時政府をいっさい支持しないこと。政府のいっさいの約束、とくに併合を放棄するという約束が、まったくうそであることを説明すること。この政府、資本家の政府にむかって、帝国主義的であることをやめるようにという、幻想をひろめる、許しがたい「要求」をだすのではなく、この政府を暴露すること。

四　ブルジョアジーの影響下におちいっていて、プロレタリアートにブルジョアジーの影響をつたえている、人民社会党[23]や社会革命党から、組織委員会（チヘイッゼ、ツェレテーリその他）やステクローフ等々にいたるまでの、いっさいの小ブルジョア的日和見主義分子のブロックにくらべて、わが党が大多数の労働者代表ソヴェト内で少数派である、しかも、いまのところわずかな少数派であるという事実を、認めること。

労働者代表ソヴェトは革命政府のただ一つ可能な形態であり、したがって、この政府がブルジョアジーの影響下におちいっているあいだは、われわれの任務は、忍耐づよく、系統的に、根気よく、とくに大衆の実践的必要に応じたやり方で、彼らの戦術の誤りを説明するほかにはありえないことを、大衆に説明すること。

われわれが少数派であるあいだは、われわれは、誤りを批判し明らかにする活動をおこなうと同時に、大衆が経験にもとづいて自分の誤りからぬけだすことのできるように、

全国家権力を労働者代表ソヴェトに移す必要を宣伝する。

五　議会制共和国ではなく――労働者代表ソヴェトからそれへもどるのは、一歩後退であろう――、全国にわたる、上から下までの労働者・雇農・農民代表ソヴェトの共和国。

警察、軍隊、官僚の廃止。*

*　すなわち、常備軍に代えて全人民を武装させること。官吏はすべて選挙制により、いつでも解任できるものとし、その俸給は熟練労働者の平均賃金をこえないようにする。

六　農業綱領では、重点を雇農代表ソヴェトに移すこと。

すべての地主所有地の没収。

国内のすべての土地を国有化し、土地の処分を地元の雇農・農民代表ソヴェトにゆだねること。貧農代表ソヴェトを別につくること。大領地（地方的条件その他の条件に応じ、地元の機関の決定にもとづいて、おおよそ一〇〇デシャチーナから三〇〇デシャチーナまでの規模のものとする）はいずれも、雇農代表の統制のもとに、公共の費用で模範農場にすること。

七　国内のすべての銀行をただちに単一の全国銀行に統合し、それにたいする労働者代表ソヴェトの統制を実施すること。

八　われわれの当面の任務は、社会主義を「導入する」ことではなく、たんに社会的生産と生産物の分配にたいする労働者代表ソヴェトの統制にいますぐ移ることである。

九　党の任務。

（a）党大会をただちに招集すること。

（b）党綱領の改訂。そのおもな点は、

（一）帝国主義および帝国主義戦争について、

（二）国家にたいする態度について、および「コミューン国家」*というわれわれの要求、

（三）古くさくなった最小限綱領の改正。

（c）党名の変更。**

*　すなわち、パリ・コミューンを原型とする国家。

**　全世界で社会主義を裏切り、ブルジョアジーの側に寝がえってしまった連中を公式の指導者とする「社会民主党」（「祖国防衛派」と動揺的な「カウツキー派」）という名称をやめて、われわれは共産党と名のるべきである。

一〇　インタナショナルの革新。

革命的なインタナショナル、すなわち、社会排外主義者と「中央派」*とに反対するインタナショナルを創設するためにイニシアチブをとること。

*　国際社会民主主義運動内で「中央派」とよばれているのは、排外主義者（=「祖国防衛派」）と国際主義者のあいだを動揺している潮流のことである。すなわち、ドイツにおけるカウツキー一派、フランスにおけるロンゲ一派、ロシアにおける

チヘイッゼ一派、イタリアにおけるトゥラーティ一派、イギリスにおけるマクドナルド一派、など。

なぜ私が、まれな例外として、善意の反対者の「場合」をとくに強調したのかが、読者に理解できるように、このテーゼとゴリデンベルグ氏の次の反論とを比較することをお勧めしたい。レーニンは「革命的民主主義派のまん中に内乱の旗を押したてた」（プレハーノフ氏の『エヂンストヴォ』(一一六)第五号に引用）と。

なんとこれは珠玉ではあるまいか？

私は次のように書き、読みあげ、噛んでふくめるように説明している。「革命的祖国防衛主義の信奉者の大衆の広範な層は、疑いもなく善意であって、……彼らはブルジョアジーにだまされているのだから、彼らにたいしては、とくに詳しく、根気よく、忍耐づよく、彼らの誤りを説明し……なければならない」と。

ところが、社会民主主義者と自称してはいるが、広範な層にも属さなければ、祖国防衛主義の信奉者の大衆にも属さない、ブルジョアジー出身の諸君が、厚顔にも、私の見解を伝え、次のように叙述しているのだ。「革命的民主主義派のまん中に（!!）内乱」（テーゼには内乱のことは一言も述べていないし、報告でもそれについては一言も述べなかった！）「の旗（！）を押したてた（！）……」と。

いったいこれはどういうことなのか？　これは、ポグロムの扇動とどこが違うのか？　『ルースカヤ・ヴォーリヤ』(一一七)とどこが違うのか？

私は次のように書き、読みあげ、噛んでふくめるように説明している。「労働者代表ソヴェトは革命政府のただ一つ可能な形態であり、したがって、……われわれの任務は、忍耐づよく、系統的に、根気よく、とくに大衆の実践的必要に応じたやり方で、彼らの戦術の誤りを説明するほかにはありえない……」と。

ところが、ある種の反対者は、私の見解を「革命的民主主義派のまん中で内乱」を呼びかけるものとして、叙述しているのだ!!

私は、臨時政府が口約束でお茶をにごして、憲法制定議会招集の日取りを間ぢかにきめることはさておき、およそ日取りを決めることをしなかった点を、攻撃した。私は、労働者・兵士代表ソヴェトがなければ、憲法制定議会の招集は保障されないし、その成功は不可能だということを、論証した。

ところが、まるで私が憲法制定議会をいそいで招集することに反対の意見をもっているように言う者がいるのだ!!!

もし、数十年にわたる政治闘争の教訓によって、反対者の善意はまれな例外だと考えるように教えられていなかっ

たなら、私はこれを「うわごと」とよんだであろう。

プレハーノフ氏は、自分の新聞で、私の演説を「うわごと」とよんでいる。結構だ、プレハーノフ氏よ！　だが、貴下の論戦はなんとぶざまで、拙劣で、勘がにぶいことだろう。もし私が二時間もうわごとをしゃべったのだとすれば、いったいどうして数百人の聴衆がうわごとをがまんして聞いたのだろうか？　さらに、どうして貴下の新聞は、「うわごと」を記述するのにまるまる一欄をさいたのか？　貴下の言うことは、つじつまが合わない。全然つじつまが合わない。

もちろん、マルクスとエンゲルスが、パリ・コミューンの経験について、またプロレタリアートにはどういう国家が必要かについて、一八七一年、一八七二年、一八七五年にどう論じたか(一〇)を語り、説明し、思いだそうとつとめるより、わめきたてたり、ののしったり、金切声をあげたりするほうが、ずっとたやすい。

元マルクス主義者プレハーノフ氏は、どうやら、マルクス主義を思いだしたくないらしい。

私は、一九一四年八月四日にドイツ社会民主党を「悪臭紛々たる屍」とよんだローザ・ルクセンブルクの言葉を引用した。ところが、プレハーノフ、ゴリデンベルグ一派の諸君は「気をわるくしている。」……だれのことで？——排外主義者とよばれたドイツの排外主義者のことで気をわるくしているのだ！

ロシアの社会排外主義者、すなわち、口さきだけの社会主義者、実際上の排外主義者は、あわれにも混乱してしまったのだ。

一九一七年四月四日と五日（一七日と一八日）に執筆
一九一七年四月七日に新聞『プラウダ』第二六号に発表
署名——エヌ・レーニン
全集、第五版、第三一巻、一一三—一一八ページ所収
邦訳全集、第二四巻、三—九ページ所収

戦術にかんする手紙

序文

私は、一九一七年四月四日ピーテルで、標題にあげた主題について、はじめボリシェヴィキの一集会で報告する機会があった。それは、労働者・兵士代表ソヴェト全ロシア協議会(二七)の代議員たちで、わかれて地方へ帰ってゆかなければならない人々であったので、日取りを延ばすことがまったくできなかった。集会が終わったとき、その議長であった同志ゲ・ジノヴィエフは、全集会を代表して私に、すぐつづいて、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの両派代議員の合同集会でくりかえして私の報告をおこなうように提案した。これらの代議員は、ロシア社会民主労働党の統合の問題を討議するつもりだったのである。すぐくりかえして報告をおこなうことが、私にとってどれほど困難であったにせよ、私の同志たちだけでなく、メンシェヴィキもまたそれを要求しているからには、私にはそれを拒絶する権利があるとは思われなかった。彼らは、出発をひかえて、ほんとうに日取りを延ばすことができなかったのである。

この報告のさいに私は自分のテーゼを読みあげたが、これは『プラウダ』(二八)の一九一七年四月七日付、第二六号に発表されている。*

* この手紙の付録として、短い解説的な注釈(二九)をつけたこのテーゼを『プラウダ』の右の号から転載しておく。

このテーゼと、さらに私の報告とは、ボリシェヴィキ自身のあいだでも、また『プラウダ』編集局そのもののなかでも、意見の相違を呼びおこした。幾度も話し合ったのち、われわれは、これらの意見の相違を公然と討論に付し、そうすることで、一九一七年四月二〇日にピーテルにひらかれるわが党(中央委員会のもとに統合されているロシア社会民主労働党)の全国協議会(三〇)のための資料を提供することがいちばん適切であるという、一致した結論に達した。

私が以下のいくつかの手紙を印刷に付するのも、討論をひらくというこの決定を実行するためである。私は、これらの手紙でこの問題を全面的に研究しようとするものでは

なく、労働者階級の運動の実践的諸任務にとってとくに重要な主要な論拠を示したいと願っているだけである。

第一の手紙　現情勢の評価

マルクス主義は、われわれが諸階級の相互関係と、それぞれの歴史的時期の具体的特殊性を、客観的に検証できる仕方で、できるだけ厳密に分析することを要求している。この要求は、およそ政策を科学的に基礎づけるという立場からみて絶対に欠かしえないものであって、われわれボリシェヴィキは、つねにこの要求に添うようにつとめてきた。

「われわれの学説は教条ではなくて行動の手引である」[三一]——マルクスとエンゲルスはつねにこのように言って、「公式」を丸暗記したり、たんに繰りかえすのを嘲笑したが、それはもっともなことであった。「公式」というものは、せいぜい一般的な任務のあらましを示すことができるだけであって、それらの任務は、歴史的過程のそれぞれの特殊な局面における具体的な経済的および政治的状況によって、かならず修正されるのである。

では、現在、革命的プロレタリアートの党が自分の行動の任務や形態を決定するにあたって手引としなければならない、厳密に確かめられた客観的な事実とは、どういうものであろうか？

一九一七年三月二一日と二二日に『プラウダ』第一四号と第一五号にのった、私の『遠方からの手紙』第一信（『最初の革命の最初の段階』）でも、私のテーゼでも、私は、「ロシアにおける現情勢の特異性」は、革命の最初の段階から第二の段階への過渡の局面だという点にある、と規定している。そこで私は、この時期における基本的スローガン、「当面の任務」は次のようなものであると考えた。「労働者諸君、諸君はツァーリズムにたいする内乱でプロレタリア的、人民的英雄精神の奇跡をおこなった。いまや諸君は、革命の第二の段階での自分たちの勝利を準備するために、プロレタリアートと全人民の組織化の奇跡をおこなわなければならない」（『プラウダ』第一五号[三二]）。

では、この最初の段階はどういう点にあるか？

国家権力がブルジョアジーの手に移った点にある。

一九一七年の二月—三月革命以前には、ロシアの国家権力は、一つの古い階級、すなわちニコライ・ロマノフを頭とする農奴主的・貴族的地主階級の手にあった。

この革命以後には、権力は他の新しい階級、すなわちブルジョアジーの手にある。

革命という概念の厳密に科学的な意義においても、その

実践的＝政治的な意義においても、国家権力が一つの階級の手から他の階級の手に移ることが、革命の第一の、主要な、基本的な標識である。

このかぎりで、ロシアのブルジョア革命またはブルジョア民主主義革命は終了した。

この点について、このんで「古参ボリシェヴィキ」と自称している反対者たちが騒ぎたてているのを、われわれは耳にする。いわく、われわれはつねに、「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）」だけがブルジョア民主主義革命を終了させる、と言ってきたのではなかったか？　土地革命もやはりブルジョア民主主義革命だが、それははたして終わったであろうか？　むしろ逆に、土地革命はまだ始まっていないのが、事実ではなかろうか？　と。

私はこれに次のように答える。ボリシェヴィキのスローガンと思想が正しかったことは、一般的には歴史によって完全に確証されたが、具体的には、事態は（だれにも）予想できなかった違った形、より独特な、より特異な、より複雑な形をとった、と。

この事実を無視したり、忘れたりすると、新しい、生きいきとした現実の特異性を研究しようとしないで、丸暗記した公式を無意味に繰りかえすことによって、わが党の歴史上ですでに何度か悲しむべき役割を演じた「古参ボリシェヴィキ」のようになってしまうのである。

「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）」は、ロシア革命ではすでに実現されている。* なぜなら、この「公式」は、諸階級の相互関係を予想したものにすぎず、この相互関係、この協力を実現する具体的な政治的機関を予想したものではないからである。「労働者・兵士代表ソヴェト」——これこそ、実生活によってすでに実現された「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）」である。

＊　ある形態で、またある程度まで。

この公式は、すでに古くさくなってしまった。実生活は、それを公式の国から現実の国に移しいれ、血と肉でつつみ、具体化し、そうすることでそれを修正したのである。

いま日程にのぼっているのは、もはや別の新しい任務である。すなわち、この執権（ディクタツーラ）の内部のプロレタリア的分子（祖国防衛主義に反対し、コミューンへの移行に賛成している国際主義的、「共産主義的」分子）と、小経営主的または小ブルジョア的分子（チヘイッゼ、ツェレテーリ、ステクローフ、エス・エル、その他の革命的祖国防衛派、コミューンへの道をすすむことに反対の人々、ブルジョアジーとブルジョア政府とを「支持する」ことに賛成の人々）とを分裂させる任務である。

いま「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権」だけを論じる者は、実生活に遅れた人々、そのために、実際上プロレタリア的階級闘争に反対して小ブルジョアジーの側に移った人々であって、「ボリシェヴィキ」の革命前記念物保管所（「古参ボリシェヴィキ」保管所と名づけてもよい）にでも収容すべき連中である。

プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権はすでに実現されているが、しかし、きわめて独特な仕方で、いくつかのきわめて重要な修正つきで、実現されているのである。これらの修正については、私はあとの手紙の一つで特別に論じることにしよう。さしあたって必要なことは、マルクス主義者はいつまでもきのうの理論にしがみついていないで、生きた生活、現実の正確な事実を考慮しなければならないという、争う余地のない真理を学びとることである。すべて理論というものがそうであるように、このきのうの理論は、せいぜい基本的なもの、一般的なもののあらましを示すだけであり、生活の複雑性を近似的に把握するだけである。

「ねえ君、理論は灰色で、緑に萌えるのは永遠の生命の樹だ。」(三)

ブルジョア革命の「終了」の問題を古い仕方で提起する者は、生きたマルクス主義を死んだ文字の犠牲にするものである。

古い考え方では、こうである。ブルジョアジーの支配のあとにくることのできるもの、またこなければならないものは、プロレタリアートと農民の支配、彼らの執権である、と。

しかし、生きた生活では、すでにこれとは違ったことが起こっている。できあがったものは、この両者の、きわめて独特な、新しい、前例のない絡みあいである。すなわち、ブルジョアジーの支配（リヴォーフとグチコーフの政府）と、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権との双方がならんで、いっしょに、同時に存在しており、しかも後者は自発的に権力をブルジョアジーに引き渡し、自発的にブルジョアジーの付属物となっている。

なぜなら、ピーテルでは権力は事実上労働者と兵士の手にあり、彼らにたいして新政府は強力を用いてはおらず、また用いることもできないことを、忘れてはならないからである。なぜなら、警察も、人民から分離した軍隊も、人民のうえに立つ全能の官僚もないからである。これは事実である。これこそ、パリ・コミューン型の国家の特徴をなす事実である。この事実は古い図式にはおさまらない。われわれは、もう無意味になってしまった「プロレタリアートと農民の執権」一般という文句を繰りかえすのでなく、

図式を生活に適合させることを知らなければならない。
問題をもっとはっきり解明するために、これを別の側面からとりあげてみよう。
マルクス主義者は階級関係の分析という厳密な基盤から離れないようにしなければならない。権力はなるほどブルジョアジーににぎられている。だが、農民大衆もやはりブルジョアジーではないのか、ただ別の層、別の種類、別の性格のブルジョアジーだというだけで？　この層が権力に到達して、ブルジョア民主主義革命を「完成する」可能性がないという結論は、いったいどこから出てくるのか？どうしてそれは不可能なのか？
以上のように、古参ボリシェヴィキはしばしば論じている。
私はこれには次のように答える。それは十分可能である。しかし、マルクス主義者は、情勢を評価するにあたって、可能なものからではなく、現実に存在するものから出発しなければならない、と。
ところで、現実がわれわれに示しているのは、自由に選出された兵士と農民の代表が、自発的に第二の、副次的な政府にはいり、自発的にこれを補足し、発展させ、完成しているという事実である。彼らはまた、同じように自発的に、権力をブルジョアジーに引き渡している。——この現象は、マルクス主義の理論にすこしも「反する」ものではない。なぜなら、ブルジョアジーは、暴力によって自己を維持するだけでなく、また大衆が無自覚なこと、因襲になずんでおり、打ちひしがれて無気力なこと、無組織なことの結果としても自己を維持するということは、われわれがつねに知っており、たびたび指摘してきたことだからである。
ところで、この今日の現実をまえにして、事実に背を向けて「可能なもの」について論じるのは、まったくこっけいである。
農民がすべての土地と全権力とを奪取することは、可能である。私は、こういう可能性があることを忘れていないばかりではない。私は、きょうのことだけに視界を制限せずに、新しい現象——すなわち、雇農および貧農と、経営主である農民との分裂がいっそう深まっているという——を考慮に入れながら、率直に、また正確に農業綱領を定式化しているのである。
しかし、それとは違ったことも可能である。すなわち、小ブルジョア的なエス・エル党——ブルジョアジーの影響下におちいって、祖国防衛主義に変わってしまい、きょうまで招集の日取りもまだきめられていない憲法制定議会を待つように勧告しているところの——の勧告に、農民が従

うことも、可能である！＊

＊　私の言葉が曲解されるのを防ぐために、すぐこの場で、さきまわりをして言っておこう。私は雇農と農民のソヴェトがいますぐすべての土地を奪取することに無条件に賛成であるが、しかし、ソヴェトはみずから秩序と規律をこのうえなく厳格に守り、機械や建物や家畜がすこしでもそこなわれるのを許してはならないし、経営と穀物生産をけっして解体させないで、かえって強化しなければならないのである。なぜなら、兵士にはいまの二倍のパンが必要であり、人民も飢えてはならないからである。

農民がブルジョアジーとの自分の協定——農民が現在、労働者・兵士代表ソヴェトを仲介として、形式上だけでなく、事実上でも結んでいる協定——をつづけてゆくことも、可能である。

いろいろな場合が可能である。農民運動と農業綱領を忘れることは、きわめて重大な誤りであるにちがいない。しかし、ブルジョアジーと農民との協定の事実、——もっと正確な用語、法律用語でなしに経済的＝階級的な用語で言えば——階級協力の事実を示している現実を忘れることも、やはり誤りであろう。

この事実が事実でなくなるとき、すなわち、農民がブルジョアジーから分離し、ブルジョアジーにさからって土地を奪取し、ブルジョアジーにさからって権力を奪取するとき、それはブルジョア民主主義革命の新しい段階となるであろう。そして、このことについては私は別に論じよう。

そういう未来の段階が可能だという理由で、農民がブルジョアジーと協定を結んでいる現在における自分の義務を忘れるようなマルクス主義者は、小ブルジョアに変わったことになるであろう。なぜなら、彼は、実際上、プロレタリアートにむかって、小ブルジョアジーを信頼せよ、と説教することになるからである（「彼ら、この小ブルジョアジー、この農民は、すでにブルジョア民主主義革命の枠内で、かならずブルジョアジーと分離するであろう」と）。彼は、農民がブルジョアジーのしっぽでなくなり、エス・エル、チヘイッゼ、ツェレテーリ、ステクローフらがブルジョア政府の付属物でなくなるような、快い、甘美な未来が「可能」だという理由で、農民がさしあたってまだブルジョアジーのしっぽになっており、エス・エルや社会民主主義者がさしあたってまだブルジョア政府の付属物の役割、リヴォーフ「陛下」[三一]の反対派の役割を捨てていない不愉快な現在を忘れるものであろう。

われわれが右に仮定したような人物は、あまったるいルイ・ブランやあまみがかったカウツキー派らしくはあってても、革命的マルクス主義者らしいところはすこしもない。

しかし、われわれが主観主義に、すなわち、まだ完成さ

れていない――まだ農民運動を終わっていない――ブルジョア民主主義革命を「とびこえて」、社会主義革命へすすもうとする願望に、おちいるおそれはないであろうか？
もし私が「ツァーリをやめて労働者政府を」(二五)とでも言ったのであれば、そういうおそれがあったであろう。だが、私はそうは言わなかった。私が言ったのは、それとは違っていた。私は、ロシアでは（ブルジョア政府を別にすれば）労働者・雇農・兵士・農民代表ソヴェト以外の政府はありえない、と言ったのである。現在のロシアでは、権力は、グチコーフとリヴォーフからこれらのソヴェトへ移りうるだけだ、と言ったのである。ところで、これらのソヴェト内で優勢を占めているのは、ほかならぬ農民であり、兵士であり、――科学的な、マルクス主義的な用語でいえば、すなわち、通俗の、俗物的な、職業的な表現でなく、階級的な表現を用いれば――小ブルジョアジーである。

　私は、自分のテーゼのなかで、まだ終わりきっていない農民運動や、一般に小ブルジョア的運動を、どんな形にせよとびこえないよう、労働者政府による「権力の奪取」をいっさいもてあそばないように、ブランキ主義的冒険にいっさいおちいらないように、絶対的な予防策を講じておいた。というのは、私は、はっきりとパリ・コミューンの経験を指示しておいたからである。ところで、よく知られているように、またマルクスが一八七一年に、そしてエンゲルスが一八九一年に詳しく示したように(二六)、この経験は、ブランキ主義とはまったくあいいれないものであって、多数者の直接の、無条件の支配と、大衆の積極性とを――多数者自身が意識的に行動するのにおうじてのみ――完全に保障していたのである。

　問題は、けっきょく、労働者・雇農・農民・兵士代表ソヴェトの内部で影響力を獲得するための闘争に帰着するということを、私はテーゼのなかで、完全に明確に述べておいた。この点にすこしの疑念も残らないように、私は、忍耐づよい、根気よい、「大衆の実践的必要に応じた」「説明」活動が必要であると、テーゼのなかで二度も強調しておいた。

　無学な人間や、プレハーノフ氏その他のようなマルクス主義の背教者たちが、無政府主義とか、ブランキ主義などとかわめくなら、わめかせておこう。ものを考え、学ぼうと望む人々なら、ブランキ主義とは少数者による権力の奪取のことであるのにたいし、労働者その他の代表ソヴェトはまぎれもなく人民の多数者の直接の組織であることを、理解しないはずがない。こういうソヴェトの内部での影響力を獲得するための闘争に帰着する活動が、ブランキ主義の泥沼に迷いこむおそれはない、そういうおそれはまった

くない。また、そういう活動が無政府主義の泥沼に迷いこむおそれもない。なぜなら、無政府主義は、ブルジョアジーの支配からプロレタリアートの支配へ移る過渡期に国家と国家権力が必要であることを否認するものだからである。だが、私は、この過渡期に国家が必要であることを、どんな誤解も起こりえないように明瞭に主張している。ただ、それは、マルクスとパリ・コミューンの経験によれば、普通のブルジョア的議会制国家ではなくて、常備軍のない、人民に対立する警察のない、人民のうえに立つ官僚のない国家なのである。

プレハーノフ氏が、彼の『エヂンストヴォ』紙上で、無政府主義だ、と声のかぎりわめきたてているのは、彼がマルクス主義と絶縁したことを、いま一度立証するだけである。マルクスとエンゲルスが一八七一年、一八七二年、一八七五年に国家についてなにを教えたかを言ってみたまえ、と私が『プラウダ』(第二六号)で挑戦したのにたいして(三七)、プレハーノフ氏は、問題の本質については沈黙をまもりながら、立腹したブルジョアジーの流儀でわめきたてるというやり方で答えるほかはなく、今後もそうであろう。

元マルクス主義者プレハーノフ氏は、マルクス主義の国家学説を全然理解しなかったのだ。ついでに言っておけば、この無理解の萌芽は、ドイツ語で書かれた彼の無政府主義についての小冊子(三八)にも認められる。

＊＊＊

こんどは、同志ユ・カーメネフが、私のテーゼおよび以上に述べた私の見解にたいする彼の「意見の相違」を、『プラウダ』第二七号にのせた覚え書のなかでどう定式化しているかを見ることにしよう。それは、この意見の相違をいっそう正確に明らかにする助けになるであろう。

同志カーメネフはこう書いている。「同志レーニンの一般的図式についていえば、この図式は、ブルジョア民主主義革命は終了したという認識にもとづいて、この革命をすぐさま社会主義革命に転化することを予定しているものなので、われわれには承認できないものだと思われる。……」

ここには二つの大きな誤りがある。

第一の誤り。ブルジョア民主主義革命の「終了」という問題がまちがった仕方で提出されている。この問題は、客観的現実に照応しない、抽象的な、単純な、言ってみれば、単色の仕方で提出されている。問題をこのように提出する人、いま「ブルジョア民主主義革命は終了したか」と質問し、しかもそれだけしか質問しない人は、異常に複雑な、すくなくとも「二色からなる」現実を、自分から理解でき

ないようにしているのである。理論の面ではこうである。また実践では、そういう人は、無力にも小ブルジョア的革命主義に降伏するものである。

じっさい、現実は、権力がブルジョアジーの手に移ったこと（普通の型のブルジョア民主主義革命の「終了」）を示しているとともに、ほんとうの政府とならんで、「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）」をあらわす副次的な政府が存在していることをも示している。このあとのほうの「第二の政府」は、みずから権力をブルジョアジーに譲りわたしてしまい、みずからブルジョア政府に自分を縛りつけている。

この現実は、「ブルジョア民主主義革命は終了していない」という同志カーメネフの古参ボリシェヴィキ的公式におさまるであろうか？

おさまりはしない。この公式は古くさくなってしまった。それはなんの役にも立たない。それは死んだ公式である。それを復活させようと努力するのはむだなことであろう。

第二は、実践的な問題である。現在のロシアで、ブルジョア政府から分離した別個の「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）」がいまなお可能かどうかということは、未知のことである。だが、未知のものをマルクス主義的戦術の基礎とするわけにはいかない。

しかし、かりにそれがいまなお可能であるとしても、そこへ到達する道は一つしか、ただ一つしかない。それは、ただちに、きっぱりと、最後的に、運動のプロレタリア的・共産主義的分子を小ブルジョア分子から分離させることである。

なぜか？

なぜなら、小ブルジョアジー全体が排外主義（＝祖国防衛主義）のほうへ、ブルジョアジーを「支持」するほうへ、ブルジョアジーに従属するほうへ、ブルジョアジーから離れるのを恐れる等々のほうへ向きを変えたのは、偶然ではなく、必然だからである。

小ブルジョアジーが、いまでもすでに権力をにぎれるのに、にぎろうと望まないときに、どうすればこの小ブルジョアジーを「押しやって」権力につかせることができるだろうか？

プロレタリア的共産党を分離させることによってのみ、これらの小ブルジョアの臆病さをまぬがれたプロレタリア的階級闘争によってのみ、そうならせることができるのである。口さきではなく実際に小ブルジョアジーの影響をまぬがれたプロレタリアの結束だけが、小ブルジョアジーの足もとに「火をつけて」、彼らがある条件のもとでは権力

をにぎらないわけにはいかないようにすることができるのである。グチコーフやミリュコーフが——これまたある状況のもとでは——チヘイッゼ、ツェレテーリ、エス・エル、ステクローフの完全な権力に、その単独の権力に賛成することさえ、ありえないことではない。なぜなら、この後者もやはり「祖国防衛派」だからである！

ソヴェト内のプロレタリア分子（すなわち、プロレタリア的共産党）を、いますぐ、ただちに、最後的に、小ブルジョア分子から分離させる人は、二つの可能な場合のどちらになっても——すなわち、ロシアが今後なお、ブルジョアジーに従属しない、別個の、独立の「プロレタリアートと農民の執権」をとおる場合にも、小ブルジョアジーがブルジョアジーから分離できないで、ブルジョアジーとわれわれのあいだを永久に（つまり、社会主義になるまで）動揺する場合にも——、運動の利益を正しく表現するものである。

「ブルジョア民主主義革命は終了していない」という単純な公式だけをその行動の手引とする人は、とりもなおさず、小ブルジョアジーはブルジョアジーから独立する能力をたしかにもっているという、ある種の保障をあたえることになる。そうすることで、彼は、現在、無力にも小ブルジョアジーの思うままに身をまかせてしまうのである。

ついでながら、プロレタリアートと農民の執権という「公式」について、私が『二つの戦術』（一九〇五年七月）でとくに強調した点を思いおこすことは、無用ではあるまい（『一二年間』、四三五ページ）。

「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権には、世の中のすべてのものと同じように、その過去と未来がある。その過去は、専制、農奴制、君主制、特権である。……その未来は、私的所有にたいする闘争、賃金労働者と雇主との闘争、社会主義のための闘争である。[三九]……」

同志カーメネフの誤りは、彼が一九一七年においてさえ、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権の過去しか見ていない点にある。だが、実際には、すでにその未来が始まっているのだ。なぜなら、賃金労働者と小経営主の利害と政策は、実際にすでに分かれているからであり、しかも、「祖国防衛主義」、帝国主義戦争にたいする態度といった、きわめて重要な問題で分かれているからである。

ここで、まえに引用した同志カーメネフの議論のなかの第二の誤りにたどりつく。彼は、私の図式は「この（ブルジョア民主主義）革命をすぐさま社会主義革命に転化すること」を「予定している」と言って、非難している。

これは事実ではない。私は、われわれの革命を「すぐさま」社会主義革命に「転化すること」を「予定」している

どころか、そうしてはならない、とはっきり警告しているのであって、テーゼの第八項で、「……われわれの当面の任務は、社会主義を『導入する』ことではない……」(110)と、はっきり言明しているのである。

われわれの革命をすぐさま社会主義革命に転化することを予定している人間ならば、社会主義の導入を当面の任務とすることに反対するはずがないのは、明らかではなかろうか？

そればかりではない。ロシアでは、「コミューン国家」(すなわち、パリ・コミューンの型にしたがって組織された国家)をさえ、「すぐさま」導入することはできない。なぜなら、そのためには、エス・エルや、チヘイッゼ、ツェレテーリ、ステクローフその他の戦術と政策がまったく誤ったものであり、まったく有害だということを、すべての(または大多数の)ソヴェトの代議員の多数者が、はっきり認識しなければならないからである。そして、私は、この分野で私が「予定」しているのは、「忍耐づよい」(「すぐさま」実現できる変化をもたらすのに、忍耐づよくする必要があるだろうか？)説明だけであることを、まったく明確に言明しているのである！

同志カーメネフは、すこしばかり「忍耐を欠いて」羽目をはずしてしまい、パリ・コミューンが社会主義を「すぐさま」導入しようとしたかのように言うブルジョア的偏見をむしかえした。そうではないのだ。残念なことに、コミューンは、社会主義を導入するのに手間どりすぎたのである。コミューンの真の本質は、普通ブルジョアがそれを求めている点にはなく、コミューンが特別の型の国家をつくりだした点にある。ところが、ロシアには、そういう国家がすでに生まれている。労働者・兵士代表ソヴェトがそれである！

同志カーメネフは、事実を、現存するソヴェトの意義をよく考えず、ソヴェトが、その型からみて、その社会的＝政治的性格からみて、コミューン国家と同じであることを、考えてみなかった。そして、事実を研究しようとしないで、私が「すぐあとの」未来に「予定している」とかいうものについて、論じはじめたのである。こうして、残念なことに、多くのブルジョアのやり口をむしかえすことになった。労働者・兵士代表ソヴェトとはいったいなにか、それは、その型からみて、議会制共和制よりもいっそう高度のものかどうか、それは人民にとってより有用なものかどうか、より民主的なものかどうか、たとえば食糧不足等々の克服のための闘争により適したものかどうか、——こういう、生活が日程にのぼせている切実な、現実的な問題から、「すぐさま転化することを予定」しているかどうかという、

空虚な、えせ科学的な、実際には無内容な、教授式の死んだ問題へと、注意をそらせているのだ。

　これは空虚な、まちがった問題の立て方である。私が「予定している」のは、労働者、兵士、農民は、穀物の増産、パンの分配の改善、兵士の給養の改善、等々の困難な実践的問題を、官吏よりもうまく、警官よりもうまく処理するだろうということだけであり、もっぱらそれだけである。

　私は、労働者・兵士代表ソヴェトは、議会制共和制よりも速やかに、よりよく、人民大衆の自主性を実現するであろうと、心の底から深く確信している（この二つの型の国家の比較については、別の手紙で詳しく述べよう）。ソヴェトは、社会主義への歩みをどうすすめるべきか、またどういう歩みをすすめるべきかを、よりよく、より実際的に、より正しく解決するであろう。銀行の統制や、すべての銀行の単一の銀行への統合は、まだ社会主義ではないが、社会主義への一歩である。今日ドイツでは、ユンカーとブルジョアが人民に敵対してこういう歩みをすすめている。もし全国家権力が兵士・労働者代表ソヴェトの手ににぎられるなら、ソヴェトは、あす、人民の利益のために、ずっとうまくこういう歩みをすすめることができるであろう。

　しかし、なにがそういう歩みをすすめるようにせまっているのか？

　飢えである。経済の混乱である。せまりきたる崩壊である。戦争の惨禍である。戦争が人類に負わせている恐ろしい痛手である。

　同志カーメネフは、その覚え書を次の言明で結んでいる。「もし革命的社会民主主義派が、共産主義的宣伝家の一グループとなってしまわないで、最後までプロレタリアートの革命的大衆の党でありたいと望むならば、またそうすべきであるならば、私の見地が党にとってただ一つ可能な見地であることを、私は広範な討論で主張するつもりである。」

　これらのことばには、現情勢のきわめてまちがった評価が現われているように思われる。同志カーメネフは、「大衆の党」と「宣伝家グループ」とを対立させて考えている。しかし、現在「革命的」祖国防衛主義に酔っているのは、ほかならぬ「大衆」ではないか。こういう時期には、大衆とともに「ありたいと望む」よりは、つまり、全般的な流行病に負けるよりは、「大衆的な」酔いに抵抗する能力をもつほうが、国際主義者にふさわしいことではないだろうか？　ヨーロッパのすべての交戦国で、排外主義者が「大衆とともにありたい」という望みで自分の行動を正当化したことを、われわれは見なかったであろうか？　しばらく

のあいだ、「大衆的な」酔いにさからって少数派となることを解することが、義務ではないだろうか？　現在では、ほかならぬ宣伝家の仕事こそ、「大衆的」祖国防衛主義と小ブルジョア的な酔いからプロレタリア的方向を解放するための重点ではないだろうか？　大衆内部の階級的な差異にかかわりなく、大衆が、プロレタリア的な大衆も、非プロレタリア的な大衆も、一つに融合したことが、まさに祖国防衛主義の流行病の条件の一つであった。プロレタリア的方向の「宣伝家グループ」について軽蔑的に語るのは、おそらく、あまり適当なことではあるまい。

一九一七年四月八日から一三日まで
（二一日から二六日まで）に執筆
一九一七年四月に「プリボイ」出
版所から単行の小冊子として発表
全集、第五版、第三一巻、一三一—一四四ページ所収
邦訳全集、第二四巻、一二五—一三八ページ所収

わが国の革命におけるプロレタリアートの任務

（プロレタリア党の政綱草案）

ロシアがいまとおっている歴史的時期は、次のような主要な特徴をもっている。

最近の革命の階級的性格

一　国家機構全体（軍隊、警察、官僚）を指揮するひとにぎりの農奴主的地主しか代表していなかった古いツァーリ権力は打ち砕かれ、取りのぞかれたが、まだとどめをさされてはいない。君主制は正式には廃止されていない。ロマノフ家の徒党は、君主制維持の陰謀をつづけている。農奴主的地主の巨大な土地所有は一掃されていない。

二　ロシアの国家権力は新しい階級の手に、すなわち、ブルジョアジーとブルジョア化した地主との手に移った。そのかぎりで、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命は終わった。

権力をにぎったブルジョアジーは、一九〇六―一九一四年に血帝ニコライと絞刑吏ストルィピンを前代未聞の熱心さで支持したことで著名になったあからさまな君主主義者（グチコーフその他の、カデットより右の政治家）とブロック（同盟）を結んだ。リヴォーフ一派の新しいブルジョア政府は、ロシアに君主制を復活するために、ロマノフ家との交渉をもくろみ、すでにそれを始めている。この政府は、革命的空文句のかげに隠れながら、旧制度の味方を支配的な地位に任命している。この政府は、国家機構全体（軍隊、警察、官僚）をブルジョアジーの手に引き渡し、それをできるだけ改革しないようにつとめている。新政府は、すでに大衆行動の革命的創意や、人民による下からの権力奪取――これは、革命がほんとうに成功するための唯一の保障である――を、極力妨げはじめている。

この政府は、いまだに憲法制定議会の招集の日取りさえきめていないし、農奴制的ツァーリズムの物質的基礎である地主的土地所有に手をつけていない。大銀行や資本家のシンジケート、カルテルなどの独占的金融団体の行動を調査し、公表し、それらを統制することには、この政府は着

手しようとも考えていない。

新政府の最も主要な決定的な大臣の椅子（内務省、陸軍省、すなわち、軍隊、警察、官僚、大衆抑圧機関全体にたいする指揮）は、名うての君主主義者や地主的大土地所有の支持者に占められている。ほやほやの共和主義者、心にもない共和主義者であるカデットには、人民にたいする指揮や国家権力機関に直接関係のない、副次的な椅子があてがわれている。トルドヴィキの代表者で「でも社会主義者」のア・ケーレンスキーは、人民の警戒心と注意を大げさな空文句で鈍らせること以外には、まったくなんの役割も果たしていない。

以上の理由から、新しいブルジョア政府は、国内政策の分野でさえ、まったくプロレタリアートの信頼に値しないし、プロレタリアートがこの政府をすこしでも支持することは、許されない。

新政府の対外政策

三　現在、客観的諸条件によって前面に押しだされている対外政策の分野では、新政府は、帝国主義戦争、すなわち、資本家の獲物の分配と弱小民族の圧殺をめぐって、イギリス、フランスその他の帝国主義的大国と同盟しておこなっている戦争をつづける政府である。

ロシア資本の利益と、それの強力な保護者であり主人である、世界で最も富裕なイギリス＝フランスの帝国主義資本の利益に従属している新政府は、兵士・労働者代表ソヴェトが、ロシアの諸民族の明白な多数者を代表して明確なうえにも明確に表明した希望を踏みにじって、資本家の利益のための民族屠殺をやめさせる現実的な措置をなにひとつとらなかった。だれでも知っているように、ロシアをイギリス＝フランスの略奪的帝国主義資本に結びつけている、明白に略奪的な内容をもつ秘密条約（ペルシアの分割、中国の略奪、トルコの略奪、オーストリアの分割、東プロイセンの奪取、ドイツの植民地の奪取、等々についての）さえ、新政府は公表していない。数百年のあいだほかのどの暴君や専制君主よりも多くの民族を略奪し抑圧してきたツァーリズム——大ロシア民族を抑圧してきたばかりか、さらに、彼らを他民族の死刑執行人にすることで、大ロシア民族を恥ずかしめ、堕落させてきたツァーリズム、そのツァーリズムが結んだこれらの条約を、新政府は承認したのである。

新政府は、これらの恥ずべき強盗条約を承認する一方、ロシアの諸民族の大多数者が労働者・兵士代表ソヴェトをつうじて明瞭に表明した要求を無視して、すべての交戦国

民に即時の休戦を提議しなかった。新政府は、おごそかで、大げさな、仰々しい、そのくせ中味のまったくからっぽな宣言や美辞麗句――ブルジョア外交官の口から出されて、信じやすく、素朴な、抑圧された人民大衆をだますのにつねに役だってきたし、いまでも役だっているような――でお茶をにごしたのである。

四　だから、新政府は、対外政策の分野でいささかも信頼に値しないばかりでなく、この政府にむかって、ロシアの諸民族の平和の意思を声明せよとか、併合を放棄せよとか、等々と、なおも要求することは、実際には、人民をだまし、むなしい望みを人民にいだかせ、人民の意識の明晰化を遅らせ、人民に間接に戦争の継続をがまんさせるものにすぎない。なぜなら、戦争の真の社会的性格を決定するものは、殊勝な願いではなくて、戦争を遂行する政府の階級的性格であり、この政府が代表する階級と、ロシア、イギリス、フランスその他の帝国主義的金融資本との結びつきであり、この階級が遂行している現実の、実際の政治だからである。

――――――

特異な二重権力とその階級的意義

五　わが国の革命の最も主要な特質、ぜひとも熟考しなければならない特質は、革命が勝利した直後に成立した二重権力である。

この二重権力は、二つの政府の存立となって現われている。それは、主要な、ほんとうの、現実の、ブルジョアジーの政府、すなわちすべての権力機関を掌握しているリヴォーフ一派の「臨時政府」と、国家権力機関を掌握してはいないが、人民の明白な絶対多数者、武装した労働者と兵士を直接の拠りどころとしているペトログラード労働者・兵士代表ソヴェトという補足的、副次的な「監督する」政府とである。

この二重権力の階級的起源と階級的意義は、次の点にある。すなわち、一九一七年三月のロシア革命は、ツァーリ君主制全体を一掃しただけでなく、また全権力をブルジョアジーに引き渡しただけでなく、さらにプロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権(ディクタトゥーラ)のまぎわに達したことがそれである。ペトログラードその他の地方の労働者・兵士代表ソヴェトは、まさにこういう執権(ディクタトゥーラ)（すなわち、法律を拠りどころとするのではなく、武装した住民大衆の直接の力を拠りどころとする権力）であり、しかもまさに前記の諸階級の執権(ディクタトゥーラ)である。

六　ロシア革命の第二の、きわめて重要な特質は次の点

にある。すなわち、あらゆる点から考えて大多数の地方ソヴェトの信頼をえているペトログラード兵士・労働者代表ソヴェトが、ブルジョアジーとその臨時政府とに自発的に国家権力を引き渡し、臨時政府を支持する協定を結んで、自発的に臨時政府に優位を譲り、自分は傍観者、憲法制定議会招集（臨時政府は、いまだにその招集の日取りさえ発表していない）の監督者の役割にあまんじているということである。

このきわめて特異な、こういうかたちでは歴史上にまだ例のない状況は、二つの執権《ディクタツーラ》――ブルジョアジーの執権《ディクタツーラ》（というのは、リヴォーフ一派の政府は、執権《ディクタツーラ》、すなわち、法律やあらかじめ表明された民意を拠りどころとするのではなく、力による奪取を拠りどころとしている権力であり、しかも、この奪取は特定の階級すなわちブルジョアジーによっておこなわれたから）と、プロレタリアートと農民の執権《ディクタツーラ》（労働者・兵士代表ソヴェト）とがいっしょに、一つに絡み合ったものを成立させた。

こういう「絡み合い」が長つづきできないことは、いささかの疑いもいれない。一つの国家に二つの権力が存在するわけにはいかない。そのうちの一つは消滅しなければならない。そして、ロシアの全ブルジョアジーは、兵士・労働者代表ソヴェトを取りのぞき、無力にし、消滅させるために、ブルジョアジーの単独権力をつくりだすために、すでに全力をあげて、ありとあらゆるやり方で、いたるところで活動している。

二重権力は、革命の発展途上の過渡的な時期、革命が普通のブルジョア民主主義革命以上にすすんだが、しかしまだプロレタリアートと農民の「純粋な」執権《ディクタツーラ》にはゆきついていない時期をあらわすにすぎない。

この過渡的で、不安定な状態の階級的な意義（と階級的な説明）は、次の点にある。すなわち、すべての革命がそうであるように、わが国の革命も、ツァーリズムとの闘争のために大衆の最大の英雄精神、自己犠牲を要求するとともに、かつてないほど膨大な数の一般庶民を一挙に運動に引きいれたこと、これである。

あらゆる真の革命の主要な科学的および実践的＝政治的な目じるしの一つは、政治生活に、国家建設に積極的、自主的、効果的に参加してくる「一般庶民」の数が、異常に急速に、急激に、激しく増大することである。

ロシアでもそのとおりである。ロシアはいま沸きかえっている。一〇年間も政治的に眠っていた幾百万、幾千万の人々、ツァーリズムの恐ろしい圧制と地主や工場主のための苦役に政治的に打ちひしがれていたそれらの人々が、目ざめて、政治に乗りだしてきた。だが、そういう幾百万、

幾千万の人々とは、どんな人々であろうか？　その大部分は小経営主、小ブルジョアであり、資本家と賃金労働者の中間にある人々である。ロシアは、ヨーロッパのすべての国のうちで最も小ブルジョア的な国である。

巨大な小ブルジョア的な波が、あらゆるものを巻きこみ、数のうえにだけでなく、思想上でも、自覚したプロレタリアートを圧倒した。すなわち、きわめて広範囲の労働者に小ブルジョア的な政治的見解を感染させ、彼らをそれでつつんだのである。

小ブルジョアジーは、生活上ブルジョアジーに依存していて、自分でもプロレタリアとしてではなく経営主として生活しており（社会的生産のうちで占める地位からみて）、考え方のうえでもブルジョアジーに従っている。

平和と社会主義の最悪の敵である資本家にたいする軽信的＝無自覚的な態度――これが、ロシアの大衆の今日の政策を特徴づけるものであり、これが、ヨーロッパのすべての国のうちで最も小ブルジョア的な国の社会経済的な土壌のうえに、革命的な速さでそだってきたものである。これが、臨時政府と労働者・兵士代表ソヴェトとの「協定」（私が言っているのは、正式な協定というよりは、むしろ事実上の支持、暗黙の協定であり、軽信的＝無自覚的に権力を譲渡していることだということを、強調しておく）、グチコーフらにはうまい肉片、すなわちほんとうの権力をあたえ、ソヴェトにはケーレンスキーらの口約束、栄誉（当分のあいだの）、へつらい、空文句、誓言、敬礼をあたえた協定の階級的基礎である。

ロシアではプロレタリアートの数が不十分なこと、プロレタリアートの自覚と組織性が不十分なこと――これが同じメダルの他の面である。

エス・エルをもふくめたナロードニキ諸党はみな、つねに小ブルジョア的であったし、組織委員会の党（チヘイッゼ、ツェレテーリその他）もやはりそうであった。無党派の革命家（ステクローフその他）も同様に、この波に流されてしまったか、あるいはこの波を乗り切らず、乗り切りおおせなかったか、どちらかであった。

以上のことから出てくる戦術の特異性

七　前述したような実際の情勢の特異性から、マルクス主義者――個々の人物等々ではなくて、客観的な事実、大衆と諸階級を考慮にいれなければならないマルクス主義者が、現在の時期にぜひとも守らなければならない戦術の特異性が出てくる。

この特異性によってまず第一に必要になっているのは、「革命的民主主義的空文句の砂糖水に酢と胆汁をつぎこむこと」（私の同僚であるわが党の中央委員テオドローヴィチが、ピーテルでひらかれた全ロシア鉄道従業員大会[三]のきのうの会議で用いた、まことに適切な表現）である。批判の仕事、エス・エルと社会民主党という小ブルジョア諸党の誤りを説明すること、自覚的なプロレタリア的共産党の構成分子を訓練し結束させること、「全般的な」小ブルジョア的な酔いからプロレタリアートをぬけださせること、これである。

これは、宣伝活動に「すぎない」ように見える。実際には、これは最も実践的な革命的活動である。なぜなら、外部的な障害のためではなく、ブルジョアジーが暴力を行使していないためではなく（グチコーフは、いまのところはまだ、兵士大衆にたいして暴力を行使するぞといっておどしているだけである）、大衆の軽信的な無自覚のために立ちどまってしまい、空文句におぼれ、「足踏み」している革命を、前進させることはできないからである。

この軽信的な無自覚とたたかうことによってのみ（ところで、これとたたかうことは、もっぱら思想的に、同志的な説得によって、実生活の経験を示すことによってのみ、おこなうことができるし、またおこなわなければならない）、われわれは、横行する革命的空文句からぬけだし、プロレタリアの意識をも、大衆の意識をも、各地における大衆の大胆な、断固たる創意をも、ほんとうに推しすすめ、自由と民主主義、すべての土地の全人民的所有の原則を自主的に実現し、発展させ、強化する仕事を、ほんとうに推しすすめることができる。

八　ブルジョア政府や地主政府の世界的経験は、人民を抑えつけておく二つの方法をつくりあげた。第一の方法は暴力である。こういう死刑執行人的な方法については、笞帝ニコライことニコライ・ロマノフ一世と血帝ニコライ二世とが、やれること、やれないことのありったけをロシアの人民にやってみせた。しかし、これとは違った方法もある。それは、いくつかの大革命や革命的大衆運動から「教訓を得た」イギリスとフランスのブルジョアジーによって最もうまく仕上げられた方法である。それは、欺瞞、へつらい、空文句、無数の約束と目くされ金の施し、つまらないものを譲ってたいせつなものは手ばなさないという方法である。

ロシアにおける現情勢の特異性は、第一の方法から第二の方法へ、人民にたいする暴力から人民にたいするへつらいへ、約束による人民の欺瞞へと、目まぐるしい速さで移っていった点にある。猫のワシカは小言を聞きながら、食いつづける。ミリュコーフとグチコーフは、権力をにぎり、

資本の利潤を保護し、ロシアとイギリス＝フランスの資本のために帝国主義戦争をやりながら、チヘイッゼ、ツェレテーリ、ステクローフのような「コック」が演説をして、おどしたり、いさめたり、誓ったり、懇願したり、要求したり、宣言したりするのに答えて、口約束や、美辞麗句や、人気とりの声明でごまかしている。……猫のワシカは、小言を聞きながら、食いつづける。

しかし、軽信的な無自覚と無自覚的な軽信とは、とくにプロレタリアと貧農のあいだでは、日一日と消えてゆくであろう。資本家を信じてはならないことを、実生活（彼らの社会経済的地位）が彼らに教えるからである。

小ブルジョアジーの指導者たちは、ブルジョアジーを信頼するよう、人民に教え「なければならない」。プロレタリアは、ブルジョアジーを信頼しないよう、人民に教えなければならない。

革命的祖国防衛主義とその階級的意義

九　「ほとんどあらゆるもの」を巻きこんだ小ブルジョア的な波の最大の、最もいちじるしい現われとみなければならないのは、革命的祖国防衛主義である。これこそ、ロシア革命の進展と成功にとって最悪の敵である。

この点で屈服してしまい、それからぬけだすことのできなかった人々は、革命にとっては滅びさった人間である。だが、大衆は、指導者とは違った仕方で屈服し、また違った仕方で、違った発展の道をとって、違った方法で、それからぬけだす。

革命的祖国防衛主義は、一方では、ブルジョアジーが大衆をあざむいている結果であり、農民と一部の労働者の軽信的な無自覚の結果であるが、他方では、併合や銀行利潤にある程度まで利益をもっている小経営主、大ロシア人を他民族の死刑執行人にして堕落させてきたツァーリズムの伝統を「後生大事に」守っている小経営主の利害と立場の現われである。

ブルジョアジーは、革命にたいする気高い誇りを利用して、革命のこの段階以後は、つまり、ツァーリ君主制がグチコーフ、ミリュコーフのまがい共和制と代えられてから以後は、ロシアについては戦争の社会的＝政治的性格が変わったかのように見せかけて、人民をだましている。人民は、主として、大ロシア以外のロシア国内の諸民族を大ロシア人の財産か世襲領地のようなものと見なす古くからの偏見のおかげで、それを——一時——信じてしまった。ツァーリズムは、他民族を低級なもの、「当然に」大ロシア

に属するものとみるように人々に教えこんだのであって、このツァーリズムによってもたらされた大ロシア民族のあさましい堕落は、一挙に消えさることはできなかった。

戦争の社会的・政治的性格を決定するものは、個々の人物や、グループや、さらには民族の「善意」ではなくて、戦争を遂行している階級の地位、この階級の政治——戦争はこの政治の継続である——、現代社会の支配的な経済力である資本の結びつき、国際資本の帝国主義的性格、イギリスとフランスへのロシアの——財政、銀行、外交の面での——依存、等々であること、このことを大衆に説明する能力がわれわれに必要である。このことをたくみに、大衆に理解できるように説明することは、容易ではない。われわれのうちには、誤りをおかさずにこれをすぐやることのできる者は、ひとりもいないであろう。

だが、われわれの宣伝の方向、もっと正確にいえば、その内容は、右のようなものでなければならないし、もっぱら右のようなものでなければならない。革命的祖国防衛主義にいささかでも譲歩することは、それがどんな美辞麗句で、どんな「実際的」考慮で正当化されていようと、社会主義を裏切るものであり、国際主義を完全に放棄するものである。

「戦争をやめろ」というスローガンは、もちろん、正しい。しかし、このスローガンは、現時期の任務の特異性、広範な大衆に別の仕方で近づく必要を考慮にいれていない。私の考えでは、このスローガンは「ありし良かりし昔」の未熟な扇動家がむぞうさに、いきなり農村にもちこんで、さんざんな目にあった、あの「ツァーリを倒せ」というスローガンに似ている。革命的祖国防衛主義の信奉者の大衆は、個人的な意味ではなく階級的な意味で、善意である。つまり、彼らは、併合や他民族の圧殺によって実際になんの得もしない階級(労働者と貧農)に属しているのである。ブルジョアや「インテリゲンツィア」諸君が、資本の支配を放棄せずには併合を放棄できないことをよく知りながら、恥しらずにも、美辞麗句や途方もない約束や数かぎりない口約束で大衆をだましているのとは、わけがちがう。

祖国防衛主義の信奉者の大衆は、この問題を単純に、一般庶民式の考え方でこう考えている。「私は併合を望んではいない。その私にドイツ人が『襲いかかってきている』のだ。だから、私は正義を守っているのであって、なにかの帝国主義的利益を守っているのではけっしてない」と。こういう人にたいしては、彼個人の願望が問題なのではなく、大衆的、階級的、政治的なもろもろの関係と条件、戦争と資本の利益および国際銀行網との結びつき、等々が問題なのだということを、くりかえしくりかえし説明しなけ

ればならない。祖国防衛主義とのこうしたたたかいだけが、真剣なものであり、成功——たぶん、あまり急速な成功ではないであろうが、確実で永続的な成功——を約束するのである。

戦争を終わらせるにはどうしたらよいか？

一〇　「意のままに」戦争を終わらせることはできない。一方だけの決定で戦争を終わらせることはできない。祖国防衛派の一兵士の言いまわしを借りていえば、「銃剣を地に突きさす」ことで戦争を終わらせることはできない。

諸国の社会主義者の「協定」、万国のプロレタリアの「決起」、諸国民の「意思」、等々で戦争を終わらせることはできない。祖国防衛主義的な新聞や、なかば祖国防衛主義的、なかば国際主義的な新聞の論説をみたしているこの種の空文句、さらには数かぎりない決議、呼びかけ、宣言、兵士・労働者代表ソヴェトの決議、——すべてそうした空文句は、小ブルジョアの空虚な、あどけない、お人よしの願望にほかならない。「諸国民の平和の意思の表明」とか、プロレタリアートの革命的決起の順番（ロシアのプロレタリアートのつぎは、ドイツのプロレタリアートの「順番」だ）などという空文句ほど、有害なものはない。これはすべてルイ・ブラン主義であり、あまったるい夢想であり、「政治的カンパニア」遊びであって、実際には、猫のワシカの寓話の繰りかえしである。

戦争は、疑いもなく、強盗資本家の利益のためだけにおこなわれ、彼らだけを富ませているとはいえ、彼らの悪意の産物ではない。戦争は、世界資本の半世紀にわたる発展、その無数の糸や結びつきの産物である。資本の権力を倒さなければ、国家権力が別の階級、すなわちプロレタリアートの手に移らなければ、帝国主義戦争からぬけだすことはできないし、強制的でない民主主義的な講和をかちとることはできない。

一九一七年二月—三月のロシア革命は、帝国主義戦争の内乱への転化の始まりであった。この革命は、戦争終結への第一歩を踏みだした。第二歩——すなわち、国家権力をプロレタリアートの手に移すこと——だけが、戦争の終結を保障することができる。それは、世界的な規模での「戦線」——資本の利益の戦線——の「突破」の始まりとなるであろう。そして、この戦線を突破することによってのみ、プロレタリアートは、人類に戦争の惨禍をまぬがれさせ、恒久平和の恵みを人類にあたえることができる。

そして、ロシア革命は、労働者代表ソヴェトをつくりだすことによって、すでにこういう資本「戦線」の「突破」のまぎわまで、ロシアのプロレタリアートを連れていったのである。

わが国の革命のなかから生まれでつつある新しい国家の型

一　労働者・兵士・農民その他の代表ソヴェトは、その階級的な意義、ロシア革命におけるその役割が大多数の人々にはっきりしていないという意味で、理解されていないだけではない。さらにそれは、国家の新しい形態、もっと正確にいえば、新しい型であるという点でも、理解されていない。

ブルジョア国家のうちで最も完成し、最も進歩したものは、議会制民主的共和制の型である。そこでは、権力は議会に属するが、国家機構、統治の仕組みと機関はありきたりのものである。すなわち、常備軍、警察、事実上やめさせることのできない、特権的な、人民のうえに立つ官僚である。

しかし、一九世紀末以来の革命の時代は、民主主義国家のいっそう高度の型を押しだしている。これは、エンゲルスの表現によれば、ある点ですでに国家ではなくなろうとしている国家、「もはや本来の意味の国家でない」国家である。〔二三〕それは、人民から分離した軍隊と警察を人民自身の直接の武装に代えるパリ・コミューン型の国家である。この点に、ブルジョア著述家たちによってそしられ、中傷され、とりわけ社会主義をただちに「導入し」ようと意図したものだと誤解されているコミューンの本質がある。

ロシア革命が一九〇五年と一九一七年とにつくりはじめたのは、まさにこういう型の国家であった。全ロシア人民代表憲法制定議会なり、ソヴェト会議等々なりによって統合された労働者・兵士・農民等々代表ソヴェト共和国——これこそ、カデットの教授諸君が議会制ブルジョア共和国のための法律案を書きあげるのを待たずに、またプレハーノフ氏やカウツキー氏のような小ブルジョア「社会民主主義派」の物知り学者や因襲の徒輩が国家の問題についてのマルクス主義学説の歪曲をやめるのを待たずに、自己流に民主主義を自主的につくりだしている幾百万の人民の創意によって、わが国でいま、現在、すでに実現されつつあるものである。

マルクス主義は、一般に革命期には、とくに資本主義から社会主義への過渡期には、国家と国家権力が必要である

ことを認める点で、無政府主義とは違っている。
　マルクス主義は、右のような時期には、普通の議会制ブルジョア共和国のような国家ではなく、パリ・コミューンのような国家が必要であることを認める点で、プレハーノフ、カウツキー一派の諸君の小ブルジョア的、日和見主義的な「社会民主主義」とは違っている。
　このあとのほうの型の国家と古い型の国家とのおもな相違点は、次のようなものである。
　議会制ブルジョア共和制から君主制への逆もどりはきわめて容易である（歴史も証明しているように）。なぜなら、軍隊、警察、官僚という抑圧機構全体が、手つかずに残っているからである。コミューンと労働者・兵士・農民その他の代表ソヴェトは、この機構を打ち砕き、取りのぞく。
　議会制ブルジョア共和制は、大衆の自主的な政治生活を拘束し圧殺し、下から上まで全国家生活の民主的建設への大衆の直接の参加を拘束し、圧殺する。労働者・兵士代表ソヴェトは、その逆である。
　労働者・兵士代表ソヴェトは、パリ・コミューンがつくりだし、マルクスが「労働の経済的解放をなしとげることのできる、ついに発見された政治形態（三）」と名づけた、あの国家の型を再現している。
　ありきたりの反論は、ロシアの人民にはまだコミューンを「導入する」準備ができていない、ということである。これは、農民には自由をかちとる準備ができていない、と語ってきた農奴主の論拠である。コミューンすなわち労働者・農民代表ソヴェトは、経済的現実のなかでも、人民の圧倒的多数の意識のなかでも完全に成熟しきっていないような改革は、どんなものでもそれを「導入する」ものではなく、「導入する」つもりもなく、また導入してはならない。経済的崩壊と戦争の生みだす危機とがひどければひどいほど、戦争が人類におわせた恐ろしい痛手の治癒を容易にする最も完全な政治形態が、ますます切実に必要になる。ロシアの人民に組織上の経験が乏しければ乏しいほど、ブルジョア政治屋や「収入の多い地位」を占めている官吏だけによる組織建設ではなくて、人民自身による組織建設に、ますます断固として着手しなければならない。
　プレハーノフ、カウツキー一派の諸君によって歪曲されたにせマルクス主義の古い偏見を、われわれが捨てさるのが早ければ早いほど、いますぐ、いたるところで人民が労働者・農民代表ソヴェトを建設し、全生活を自分の手ににぎるのを援助することに、われわれが熱心にとりかかればとりかかるほど、また、リヴォーフ一派の諸君が憲法制定議会の招集をさきへ延ばせばのばすほど、人民が労働者・農民代表ソヴェト共和国を選ぶのが（憲法制定議会をつう

じてにせよ、また——リヴォーフがいつまでもそれを招集しない場合には——それをつうじないにせよ)、ますます容易になるであろう。人民自身の新しい組織建設では、はじめは誤りは避けられないが、リヴォーフ氏の招請する法学教授たちが憲法制定議会の招集や、議会制ブルジョア共和制の永続化や、労働者・農民代表ソヴェトの圧殺について の法律を書きあげるのを待つよりは、誤りをおかしながらも前進するほうがましである。

もしわれわれがみずからを組織し、たくみに宣伝をおこなうなら、プロレタリアだけでなく、農民の一〇分の九まで が、警察の復活に反対し、やめさせることのできない特権的な官僚に反対し、人民から分離した軍隊に反対するであろう。新しい国家の型は、もっぱらこの点にある。

一二 警察を人民の民兵に代えることは、革命の歩み全体から出てくる改革であって、現在ロシアの大部分の地方で実現されつつある。普通の型のブルジョア革命の大多数では、こういう改革はきわめて短命に終わったこと、ブルジョアジーは、最も民主主義的、共和主義的なブルジョアジーでさえも、人民から分離した、ブルジョアに指揮される、人民を極力抑圧するのに適した、古い、ツァーリズム型の警察を復活させたことを、われわれは大衆に説明しなければならない。

警察を復活させないためには、手段はただ一つしかない。すなわち、全人民的民兵を創設して、それと軍隊とを融合させる(常備軍を全人民の武装に代える)ことである。こういう民兵には、一五歳から六五歳までのすべての男女市民がひとりのこらず参加しなければならない。ただしこれは、未成年者と老年者の参加を、ここに例示的にあげた年齢の限度で、決めてもよいとしてのことである。資本家は、賃金労働者や家事使用人等が民兵の公務に従った日にたいして賃金を支払わなければならない。婦人を、一般の政治生活だけでなく、全住民にかかわりのある日常の公務にも自主的に参加させなければ、社会主義はおろか、完全で永続的な民主主義さえ口にすることはできない。また病人や浮浪児の世話、食品衛生の管理というような「警察」機能は、名目上だけでなくて実際にも婦人の同権がなければ、満足に実現することはまったく不可能である。

警察の復活を防止すること、全住民的民兵の創設に全人民の組織勢力を参加させること、——これが、革命を守り、打ちかため、発展させるために、プロレタリアートが大衆に提出しなければならない任務である。

農業綱領と民族綱領

一三　近いうちにロシアの農村に強力な土地革命が展開するようになるかどうかを、われわれはいまはっきり知ることはできない。最近疑いもなく深まっている、一方の雇農、賃金労働者、貧農（「半プロレタリア」）と、他方の富農と中農（資本家と小資本家）とへの農民の階級分化が、どの程度に深いものであるかを、われわれは正確に知ることができない。これらの問題を解決するのは、また解決できるのは、経験だけである。

しかし、プロレタリアートの党であるわれわれの無条件の義務は、農業（土地）綱領をただちにかかげるだけでなく、ロシアの農民的土地革命のためにすぐ実行できる実際措置をもただちに宣伝することである。

われわれは、すべての土地の国有化を、すなわち、国内のすべての土地を中央の国家権力の所有に移すことを、要求しなければならない。この権力は、拓植用地の規模その他を決め、森林の保護や土地改良等々の法律を制定し、土地の所有者すなわち国家と、借地人すなわち経営主とのあいだにはいりこむあらゆる仲介行為を絶対に禁止しなければならない（あらゆる土地又貸しを禁止しなければならない）。しかし、土地の処分や、土地の保有と用益の地方的条件の決定はすべて、けっして官僚や官吏の手にまかせずに、そっくり、もっぱら、地方と地区の農民代表ソヴェトの手にゆだねなければならない。

穀物栽培技術の向上と穀物の増産をはかるため、さらにまた、合理的な大経営を公共の統制のもとで発展させるために、われわれは、すべての没収された地主領地に雇農代表ソヴェトの統制のもとに大規模な模範農場をつくらせるよう、農民委員会の内部で努力しなければならない。

エス・エルのあいだにひろくおこなわれている小ブルジョア的な空文句や政策、とくに、「消費」基準をとるかそれとも「労働」基準をとるかとか、「土地の社会化」等々の空疎なおしゃべりに対抗して、プロレタリアートの党は、商品生産のもとでの小経営制度によっては、人類に大衆の貧困と抑圧をまぬがれさせることはできないということを、説明しなければならない。

プロレタリアートの党は、農民代表ソヴェトを、すぐさま、是が非でも分裂させるようなことをせずに、独立の雇農代表ソヴェトと独立の貧農（半プロレタリア農民）代表ソヴェトをつくる必要があること、すくなくとも、全体的な農民代表ソヴェトの内部の特別の派または党として、こういう階級的地位に属する代議員たちの特別の常設的な協議会をもつ必要があることを、説明しなければならない。そうしなければ、農民一般をうんぬんするナロードニキのあらゆるあまったるい小ブルジョア的空文句が、資本家の

一変種にすぎない富農による無産大衆の欺瞞をおおいかくす役をするであろう。

地主の土地を奪取するなとか、憲法制定議会の招集前に土地改革を始めるなとかと、農民に助言している、多くのエス・エルや労働者・兵士代表ソヴェトのブルジョア自由主義的な説教や、まったく官僚的な説教に対抗して、プロレタリアートの党は、自主的に土地改革をただちに実施するように、また地元の農民代表の決定にもとづいてただちに地主の土地を没収するように、農民に呼びかけなければならない。

この場合とくに重要なことは、戦線の兵士や都市のために食糧の生産をふやす必要があること、家畜や農具や機械や建物などをすこしでも傷つけたりそこなったりするのは絶対に許されないことを、強調することである。

一四　民族問題では、プロレタリア党は、まず第一に、ツァーリズムによって抑圧され、暴力的にロシアに編入されたか、あるいは暴力的に国家の境界内に引きとめられている大小すべての民族、すなわち被併合民族が、ロシアから分離する完全な自由をもつことを宣言し、それをただちに実現するよう主張しなければならない。

併合放棄の言明や声明や宣言も、分離の自由の実際の実現をともなわなければ、すべて、ブルジョアの人民欺瞞か、小ブルジョアのあどけない願いになってしまう。

プロレタリア党は、できるだけ大きな国家の創設をめざしている。なぜなら、それが勤労者にとって有利だからである。党は、諸民族を接近させ、やがては融合させることをめざしているが、しかし、この目標を、強制によってではなく、もっぱらすべての民族の労働者と勤労大衆の自由な兄弟的同盟によって達成しようとする。

ロシア共和国が民主主義的になればなるほど、それが労働者・農民代表ソヴェトの共和国としてりっぱに組織されてゆけばゆくほど、すべての民族の勤労大衆がこのような共和国に自発的に引きつけられる力は、ますます強いものになるであろう。

分離の完全な自由、最も広範な地方的（および民族的）自治、少数民族の権利の綿密な保障——これが革命的プロレタリアートの綱領である。

銀行と資本家のシンジケートの国有化

一五　小農の国では、プロレタリアートの党は、住民の圧倒的多数が社会主義革命の必要をさとるようにならないかぎり、けっして社会主義の「導入」を目標とすることは

できない。

しかし、実践的に完全に機が熟していて、戦争中にいくつかのブルジョア国家によってしばしば実施され、せまりくる全面的な経済的乱脈と飢えを避けるために切実に必要とされている緊急な革命的方策をさきへ延ばすような政策を、この真理を根拠にして正当化するのは、「マルクス主義まがい」の言葉のかげに隠れたブルジョア詭弁家だけがやれることである。

土地の国有化や、すべての銀行と資本家のシンジケートの国有化、すくなくともそれらにたいする労働者代表ソヴェトの即時統制の実施などというような方策は、けっして社会主義の「導入」ではないのであって、それを無条件に主張し、できるかぎり革命的な方法で実現しなければならない。これらの方策は、社会主義へ向かって数歩踏みだしたものにすぎず、経済的に完全に実現できるものである一方、これらの方策をとらずには、戦争によっておわされた痛手をいやし、さしせまる崩壊を防止することはできない。革命的プロレタリアートの党は、ほかならぬ「戦争で」特に不埒なやり方で儲けている資本家や銀行家の前代未聞の高い利潤に手をつけることを、けっしてためらわないであろう。

社会主義インタナショナル内の情勢

一六　ロシアの労働者階級の国際的義務は、いまこそ、とくに力づよく前面に押しだされてくる。

今日、国際主義の信奉者だと誓わないものは、無精者だけである。祖国防衛派の排外主義者さえ、プレハーノフやポトレソフの諸君でさえ、ケーレンスキーでさえ、国際主義者だと自称している。それだけに、プロレタリア党が、口さきだけの国際主義に実際の国際主義を、このうえなく明瞭、精密、的確に対置することが、ますます切実な義務となっている。

万国の労働者にあてたたんなる呼びかけや、国際主義を忠実に守るという空疎な確言や、さまざまな交戦国の革命的プロレタリアートが決起する「順番」を直接間接にきめようとする試みや、交戦諸国の社会主義者のあいだで革命的闘争についての「協定」を結ぼうとするむだ骨おりや、平和カンパニアのための社会主義者大会をひらこうとする奔走、その他等々は、そういう考えや試みや計画の発案者たちがどんなにまじめであろうと、その客観的意義からすれば、すべて美辞麗句にすぎないし、せいぜい、排外主義者の大衆欺瞞をおおいかくすに役だつだけの、あどけない、お人よしの願いである。そして、最もぬけ目のない、議会

的いかさまの手口にかけて最も練達なフランスの社会排外主義者は、社会主義とインタナショナルにたいする前代未聞の厚かましい裏切り、帝国主義戦争をおこなっている内閣への入閣に、予算あるいは公債への賛成投票（最近ロシアでチヘイッゼ、スコーベレフ、ツェレテーリ、ステクローフがやったように）、自国内の革命的闘争にたいする反対行動等々と組み合わせた、前代未聞の仰々しい、大げさな、平和主義的な空文句や国際主義的な空文句の点で、久しいまえからレコードを破っている。

この先生がたは、帝国主義的世界戦争の残酷で、凶暴な環境をしばしば忘れている。この環境は空文句を許さない。それは、あどけない、あまったるい望みをあざわらう。

実際の国際主義は一つしか、ただ一つしかない。すなわち、自国内の革命運動と革命的闘争とを発展させるためにひたむきに活動すること、例外なくすべての国でこれと同じ闘争、これと同じ方針を支持し、ただそれだけを支持すること（宣伝により、共感により、物質的援助によって）である。

これ以外のものはすべてごまかしであり、マニーロフ気質[三]である。

二年あまりの戦争のあいだに、国際的な社会主義運動と労働運動は、すべての国に三つの潮流を生みだした。そして、この三つの潮流を認め、分析し、実際に国際主義的な潮流のために一貫してたたかうという現実的な基盤を離れるものは、自分を無力とたよりなさと誤りとに運命づけるものである。

この三つの潮流というのは、次のとおりである。

（一）　社会排外主義者、すなわち口さきでの社会主義者、実際の排外主義者。――これは、帝国主義戦争（まず第一に、現在の帝国主義戦争）での「祖国擁護」を承認する人人である。

この連中はわれわれの階級敵である。彼らはブルジョアジーの側に寝がえった人々である。

すべての国の公認の社会民主党の公認の指導者の大部分が、このような連中である。ロシアではプレハーノフ一派の諸君、ドイツではシャイデマンら、フランスではルノデル、ゲード、サンバ、イタリアではビッソラーティ一派、イギリスではハインドマン、フェビアン派と「レイバリスト」（「労働党」の指導者たち）、スウェーデンではブランティング一派、オランダではトルルストラとその党、デンマークではスタウニングとその党、アメリカではヴィクター・バーガーその他の「祖国擁護派」、等々。

（二）　第二の潮流――いわゆる「中央派」。――これは、社会排外主義者と実際の国際主義者とのあいだを動揺して

いる人々である。

「中央派」はみな誓って言う。自分らはマルクス主義者、国際主義者である、自分らは平和に賛成であり、政府にあらゆる「圧力」をくわえることに、「人民の平和の意思を表明する」ように自国の政府にあらゆる「要求」をつきつけることに、ありとあらゆる講和促進カンパニアに、無併合の講和等々に賛成であり、――そして、社会排外主義者との和平に賛成である。「中央派」は「統一」の賛成者であり、分裂の敵である、と。

「中央派」は、お人よしの小ブルジョア的空文句の世界、口さきでは国際主義、実際には臆病な日和見主義、社会排外主義者へのごきげんとりの世界である。

問題の眼目は、「中央派」が、自国の政府にたいする革命の必要を確信しておらず、それを宣伝せず、ひたむきな革命的闘争をおこなわず、そういう闘争を避けるための俗悪きわまる――しかも超「マルクス主義的」に聞こえる――口実を考えだしている点にある。

社会排外主義者は、われわれの階級敵であり、労働運動内部のブルジョアである。彼らは、客観的にブルジョアジーに買収されて（よりよい賃金、名誉ある地位等々）、自国のブルジョアジーが弱小民族を略奪し、圧殺し、資本主義的獲物の分配をめぐってたたかうのを助けている労働者の層、グループ、部分を代表している。

「中央派」――これは、腐った合法性にむしばまれ、議会主義の環境等々によって腐敗した因襲の徒輩であり、ぬくぬくとした椅子と「平穏無事な」仕事に慣れた官僚である。歴史的および経済的にいえば、彼らは特別の層を代表しているわけではない。彼らは、労働運動の過ぎさった一時期、一八七一―一九一四年の時期、とりわけ、広範な、きわめて広範な規模で徐々の、根気づよい、系統的な組織活動をおこなうというプロレタリアートにとって必要な技術の点で、多くの貴重なものをもたらした一時期から、社会革命の時代をひらいた最初の帝国主義的世界戦争以来客観的に必然的になった新しい一時期への過渡をあらわすにすぎない。

「中央派」の主要な指導者、代表者は、第二インタナショナル（一八八九―一九一四年）の最も著名な権威で、一九一四年八月以後は、マルクス主義者としての完全な破産、未曽有の無定見、最もみじめな動揺と裏切りの模範となったカール・カウツキーである。「中央派」の潮流に属するのは、カウツキー、ハーゼ、レーデブール、ドイツ帝国議会内のいわゆる「社会民主主義同志団」、フランスでは、ロンゲ、プレスマーヌ、総じていわゆる「少数派」（二〇三）、イギリスでは、フィリップ・スノーデン、ラムゼイ・マク

ドナルド、その他「独立労働党」および部分的にイギリス社会党[二三]の多くの指導者、アメリカではモリス・ヒルキットその他多勢、イタリアではトゥラーティ、トレーヴェス、モディリアーニその他、スイスではローベルト・グリムその他、オーストリアではヴィクトル・アードラー一派、ロシアでは組織委員会派の党、アクセリロード、マルトフ、チヘイッゼ、ツェレテーリその他である。

いうまでもなく、個々の人物は、ときおり、自分でも気づかずに、社会排外主義の立場から「中央派」の立場に移ったり、またその逆に移ることもある。個々の人物がある階級から他の階級へと自由に移っているにもかかわらず、階級と階級のあいだには区別があるということは、マルクス主義者ならだれでも知っている。それと同じように、個個の人物が一つの潮流から他の潮流へ自由に移っているにもかかわらず、また、いろいろな潮流を合流させようとする企てや努力がなされているにもかかわらず、政治生活の潮流と潮流のあいだにも区別がある。

(三) 第三の潮流は実際の国際主義者であって、これに最も近い立場を代表しているのは、「ツィンメルヴァルト左派」である(読者がこの潮流の起源を直接もとの文書によって知ることができるように、一九一五年九月の同派の宣言を付録に再録しておく)。

主要な特徴は、社会排外主義ならびに「中央派」との完全な絶縁。自国の帝国主義政府と自国の帝国主義ブルジョアジーとに反対するひたむきな革命的闘争。原則は、「主要な敵は自国内にいる」。あまったるい社会平和主義的空文句(社会平和主義者とは、口さきでの社会主義者、実際のブルジョア平和主義者のことである。ブルジョア平和主義者は、資本のくびきや支配をくつがえすことをぬきにして、恒久平和を夢みる)にたいしても、また現在の戦争に関連してプロレタリアートの革命的闘争とプロレタリア社会主義革命とが可能であり、あるいは適切であり、あるいは時宜を得ていることを否定するためにもちだされているいっさいの逃げ口上にたいしても、容赦なく闘争すること。

この潮流の最も著名な代表者は、ドイツでは、カール・リープクネヒトをその一員とする「スパルタクス団」または「インテルナツィオナーレ」グループである。カール・リープクネヒトは、この潮流と、新しい、ほんとうのプロレタリア・インタナショナルの最もすぐれた代表者である。

カール・リープクネヒトは、ドイツの労働者と兵士にむかって、武器を自国の政府に向けるように呼びかけた。カール・リープクネヒトは、このことを国会(ライヒスターク)の壇上から公然とおこなった。ついで彼は、非合法に印刷したビラをもって、ベルリンの最大の広場の一つであ

るポツダム広場に出ていって、「政府を倒せ」と呼びかけながら、デモンストレーションをおこなった。彼は逮捕されて、懲役を宣告された。彼はいまドイツの監獄につながれているが、同じように、何千人でないまでも何百人という真のドイツの社会主義者が、反戦闘争をしたために監獄につながれている。

カール・リープクネヒトは、自国のプレハーノフやポトレソフら（シャイデマン、レギーン、ダーヴィットらの一派）とだけでなく、また自国の中央派、すなわち、自国のチヘイッゼらやツェレテーリら（カウツキー、ハーゼ、レーデブール一派）とも、演説や手紙で容赦なくたたかった。

一一〇名の代議士のなかで、カール・リープクネヒトとその友オットー・リューレの二人だけが、党の規律を破り、「中央派」や排外主義者との「統一」を破壊し、すべての人にさからった。ひとりリープクネヒトだけが、社会主義を、プロレタリアートの大業を、プロレタリア革命を、代表している。残りのドイツ社会民主党全体は、ローザ・ルクセンブルク（やはり「スパルタクス団」の一員で、その指導者のひとり）の正しい表現によれば、悪臭紛々たる屍である。

ドイツにおける実際の国際主義者のもう一つのグループ（二七）は、ブレーメンの新聞『アルバイターポリティーク』である。

フランスで実際の国際主義者に最も近いのは、ロリオとその同志たち（ブルデロンとメランは、社会平和主義に転落してしまった）、およびジュネーヴで雑誌『ドマン』（二八）を発行しているフランス人アンリ・ギルボー（二九）であり、イギリスでは、新聞『トレイド・ユニオニスト』、イギリス社会党および独立労働党の一部の党員（たとえば、社会主義を裏切った指導者たちとの分裂を公然と呼びかけたラッセル・ウィリアムズ、革命的な反戦闘争をしたというのでイギリスのブルジョア政府によって懲役に処せられたスコットランドの小学校教師で社会主義者のマクレインである。同じ犯罪のかどで何百人ものイギリスの社会主義者が監獄につながれている。彼らが、彼らだけが、実際の国際主義者である。アメリカでは「社会主義労働党」（三〇）と、日和見主義的な「社会党」（三一）内で一九一七年一月以来新聞『インタナショナリスト』（三二）を発行しはじめた分子。オランダでは、新聞『トリビューネ』を発行している「トリビューネ派」（三三）の党（パンネクーク、ヘルマン・ホルテル、ウェインコープ、ツィンメルヴァルトでは中央派だったが、いまはわれわれの味方に変わったヘンリエッタ・ローラント－ホルスト）。スウェーデンでは、リンドハーゲン、トゥーレ・ネルマン、カーレソン、ストレーム、ツィンメルヴァルトで「ツィン

メルヴァルト左派」の創設にみずから参加し、いま革命的反戦闘争のかどで懲役刑に処せられているZ・ヘーグルンドのような指導者をいただく青年派または左派の党。[四四]デンマークでは、大臣スタウニングを先頭に完全にブルジョア化したデンマーク「社会民主党」から脱退したトリールとその僚友たち。ブルガリアでは「テスニャキ」。[四五]イタリアでは、これに最も近いものは、党書記コンスタンティーノ・ラッザリと中央機関紙『アヴァンティ』[四六]の編集者セラーティ。ポーランドでは、ラデック、ハネツキその他の、「辺区指導部」に統合された社会民主党の指導者たちと、ローザ・ルクセンブルク、トィシカその他の、「中央指導部」に統合された社会民主党の指導者たち。[四七]スイスでは、自国の社会排外主義者および「中央派」との闘争のための「全党投票」(一九一七年一月)の趣意文を起草し、一九一七年二月一一日にテースにおけるチューリヒ社会主義者大会で原則的、革命的な反戦決議案を提案した左派。[四八]オーストリアでは、一部はウィーンの「カール・マルクス」クラブ——このクラブは、軽はずみではあるが大胆にも一大臣を狙撃したかどで、フリードリヒ・アードラーの生命を奪おうとしている極反動的なオーストリア政府のために、現在では閉鎖されてしまっている——内で活動してきた、フリードリヒ・アードラーの若い左翼の僚友たち、その他、等々。

問題は、色合いにあるのではない。色合いならば、左派のあいだにもある。問題は潮流にある。肝心かなめの点は、恐ろしい帝国主義戦争の時代に実際の国際主義者となることは容易でないという点にある。こういう人々の数は少ないが、社会主義の未来はすべて彼らだけにかかっている。彼らだけが大衆の誤導者ではなくて、大衆の指導者である。

社会民主主義者のあいだ、一般に社会主義者のあいだの改良主義者と革命家の差異は、帝国主義戦争の状況のもとで、客観的な不可避性をもって変化しないわけにはいかなかった。ブルジョア諸政府にむかって、講和を締結せよとか、「諸国民の平和の意思を表明せよ」とかいった「要求」を出すにとどまる者は、事実上、改良に転落するものである。なぜなら、戦争の問題は、客観的にみて、もっぱら革命的な仕方で提起されているからである。

戦争からぬけだして、強制的でない民主主義的講和を達成し、「戦争」で儲けた資本家諸君への何十億という利子の奴隷制から諸民族を解放する道は、プロレタリアートの革命をおいてほかにはない。

ブルジョア政府に種々さまざまな改良を要求してもよいし、また要求しなければならないが、帝国主義資本の無数の糸に絡まれたこれらの人々や階級にむかって、この糸を

断ち切るように要求するということは、マニーロフ気質や改良主義におちいらないかぎり、やれないことである。ところが、これを断ち切らなければ、戦争にたいする戦争というおしゃべりはみな、空疎なだまし文句になってしまう。「カウツキー派」、「中央派」は、口さきでは革命家、実際には改良主義者であり、口さきでは国際主義者、実際には社会排外主義の助手である。

ツィンメルヴァルト・インタナショナルの崩壊。——第三インタナショナルを創立する必要

一七　ツィンメルヴァルト・インタナショナルは、はじめから動揺的な、「カウツキー派」的、「中央派」的な立場をとった。そこで、ツィンメルヴァルト左派は、ただちにそれと一線を画して別派となり、自分の宣言（スイスで、ロシア語とドイツ語とフランス語とで印刷された）を発表せざるをえなかった。

ツィンメルヴァルト・インタナショナルの主要な欠陥、その崩壊の原因（というのは、それはすでに思想的＝政治的に崩壊してしまったから）は、社会排外主義およびハーグ（オランダ）のヴァンデルヴェルデとユイスマンスその他に率いられる古い社会排外主義的インタナショナルとの完全な絶縁という、最も重要な、実践的にいっさいを決定する問題における動揺、優柔不断である。

ツィンメルヴァルトの多数派がほかならぬカウツキー派であることは、わが国ではまだ知られていない。ところが、これこそ考慮にいれなければならない基本的な事実であり、いまでは西ヨーロッパでは周知の事実である。排外主義者でさえ、超排外主義的な『ケムニッツ新聞』[三六]の編集者で、パルヴスの超排外主義的な『グロッケ』の寄稿者であるドイツの極端な排外主義者ハイルマン（いうまでもなく、「社会民主主義者」で、社会民主党の「統一」の熱心な味方である）でさえ、「中央派」すなわち「カウツキー派」と、ツィンメルヴァルト多数派とは同一のものであることを、出版物の紙面で認めざるをえなかった。

一九一六年末と一九一七年のはじめに、この事実は最終的に確かめられた。キーンタール宣言[三七]が社会平和主義を非難しているにもかかわらず、ツィンメルヴァルト右派全体、ツィンメルヴァルト多数派全体が、社会平和主義に転落してしまった、すなわち、カウツキー一派は、一九一七年の一月と二月におこなったいくつかの発言で、フランスのブルデロンとメランは、社会党の平和主義的決議（一九一六

年一二月）や、「労働総同盟」（すなわち、フランスの労働組合の全国組織）の平和主義的決議（同じく一九一六年一二月）に、社会排外主義者と心を合わせて賛成投票したことによって。またイタリアのトゥラーティ一派についていえば、ここでは党全体が社会平和主義的な立場をとってきたのだが、トゥラーティ自身は、一九一六年一二月一七日の演説で「口をすべらせ」（もちろん、偶然にすべらせたわけではない）、帝国主義戦争を美化する国家主義的な文句を述べるまでになった。

ツィンメルヴァルトとキーンタール両会議の議長ローベルト・グリムは、一九一七年一月に実際の国際主義者に対抗して自党の社会排外主義者（グロイリヒ、プリューガー、グスタフ・ミュラー、その他）と同盟を結んだ。

ツィンメルヴァルト多数派のこの二股的な、表裏ある態度は、一九一七年一月と二月にひらかれた、さまざまな国のツィンメルヴァルト派の二つの協議会で、いくつかの国の左派国際主義者によって、すなわち、国際青年組織の書記で、りっぱな国際主義的新聞『ユーゲントーインテルナツィオナーレ』の編集者であるミュンツェンベルク、わが党中央委員会の代表ジノヴィエフ、ポーランド社会民主党（「地方指導部」派）のK・ラデック、ドイツの社会民主主義者で「スパルタクス団」の一員であるハルトシュタインによって、正式に糾弾された。

ロシアのプロレタリアートには多くのものがあたえられている。世界のどこにも、これまでにロシアほど労働者階級が革命的エネルギーを発揮できたところはほかにない。しかし、多くをあたえられた者には、また多くのものが要求される。

ツィンメルヴァルトの沼地をこれ以上がまんすることはできない。われわれは、ツィンメルヴァルトの「カウツキー派」のために、プレハーノフらやシャイデマンらの排外主義的インタナショナルとの中途半端な結びつきをこれ以上つづけるわけにはいかない。このインタナショナルとは、ただちに手を切らなければならない。ツィンメルヴァルトには、ただ情報を得る目的でのみとどまるべきである。

ほかならぬわれわれが、いまこそ、猶予なく、新しい革命的なプロレタリア・インタナショナルを創立しなければならない。もっと正確にいえば、そういうインタナショナルがすでに創設されていて、活動していることを、公然と認めることを恐れてはならない。

それは、私がさきほど正確に名まえをあげた「実際の国際主義者たち」のインタナショナルである。彼らが、そして彼らだけが、革命的、国際主義的な大衆の代表者であって、大衆の誤導者ではない。

そういう社会主義者は少数だというなら、一九一七年の二月—三月革命の直前にロシアに自覚した革命家がたくさんいたかどうか、ロシアの労働者はみな自問してみるがよい。

重要なのは人数ではなくて、真に革命的なプロレタリアートの思想と政策を正しく表現することである。肝心なことは、国際主義を「声明」することではなくて、どんなに困難な時期にも実際に国際主義者である能力をもつことである。

協定や国際大会への期待で自分をあざむかないようにしよう。帝国主義戦争がつづくかぎり、国際連絡は帝国主義的ブルジョアジーの軍事独裁の鉄の万力で締めつけられている。労働者代表ソヴェトという副次的な政府を受けいれざるをえない「共和主義者」のミリュコーフでさえ、一九一七年四月に、スイスの社会主義者で、党の書記で、国際主義者で、ツィンメルヴァルト、キーンタール両会議の参加者であるフリッツ・プラッテンに、ロシア入国を許さなかった——彼は、ロシア人の婦人を妻としていて、この妻の親戚のところへ行こうとしていたのに、また彼は、リガで一九〇五年の革命に参加し、そのためロシアの監獄につながれたことがあり、釈放してもらうためにツァーリ政府に保釈金を納めていたので、その保釈金を返してもらおうと思っていたのに——とすれば、「共和主義者」のミリュコーフが一九一七年四月のロシアでそういうことをやってのけられたとすれば、無併合の講和等々についてのブルジョアジーの約束や誓言、空文句や宣言にどれだけの値うちがあるか、推して知るべきであろう。

また、イギリス政府がトロツキーを逮捕したのは、どういうことか？　また、マルトフのスイス出国を許さなかったり、トロツキーと同じ運命が待っているイギリスへ彼をおびきだそうとしたがっているのは、どういうことか？

幻想をいだかないようにしよう。自己欺瞞におちいってはならない。

なぜなら、ストックホルムからでさえ、国際主義に忠実な社会主義者がわれわれのところへ来ることは許されていないこと、彼らからの手紙さえ——軍事検閲で統制することは十分に可能であり、また実際に峻烈きわまる軍事検閲が実施されているのに——許されていないことが立証されている以上、国際大会や会議を「待つ」のは、国際主義の裏切者となることを意味する。

わが党は、「待つ」ことなく、いますぐ第三インタナショナルを創立しなければならない。そうすれば、ドイツやイギリスの監獄にいる何百人という社会主義者は、ほっとするであろうし、いま、ならずもので強盗のヴィルヘルム

の肝をひやさせるストライキやデモンストレーションをやっている何千何万というドイツの労働者は、非合法のリーフレットを読んで、われわれの決意を知り、われわれがカール・リープクネヒトに、ただ彼だけに、兄弟としての信頼をよせていること、われわれがいまでも「革命的祖国防衛主義」とたたかう決意でいることを、知るであろう。彼らはそれを読んで、自分の革命的国際主義を強めるであろう。

多くをあたえられている者には、多くのものが要求される。いまロシアほど自由のある国は世界に一つもない。この自由を、ブルジョアジーの支持、あるいはブルジョア的な「革命的祖国防衛主義」の支持を説くために利用するのではなく、第三インタナショナル――裏切者の社会排外主義者にたいしても、「中央派」の動揺者たちにたいしても決定的に敵対するインタナショナル――を、大胆に、誠実に、プロレタリア的に、リープクネヒト的に創立するために、利用しようではないか。

一八　以上にいろいろと述べたあとでは、ロシアでの社会民主主義者の統合が問題にならないことについて、多言を費やすまでもない。

『ラボーチャヤ・ガゼータ』[三二]ではポトレソフとあまんじてブロックを結び、労働者代表ソヴェト執行委員会では公債に[三三]賛成投票して、「祖国防衛主義」に転落してしまった組織委員会派の党との、チヘイッゼやツェレテーリとの統合という考えを一瞬でもいだくよりは、リープクネヒトのように、二人きりになる――そして、これは、革命的プロレタリアートとともにいることを意味する――ほうがましである。

死にたる者は死にたる者をして葬らしめよ。

動揺する者を助けたければ、まず自分で動揺をやめなければならない。

科学的に正しく、政治的にプロレタリアートの意識の明晰化を助けるようなわが党の名称はどのようなものであるべきか？

一九　最後の問題、わが党の名称の問題に移ろう。われわれは、マルクスとエンゲルスが名のったように、共産党と名のらなければならない。

われわれはマルクス主義者であり、『共産党宣言』を基礎とすると、われわれはくりかえして言わなければならない。だが、この『宣言』は、社会民主党によって二つの主要な点でゆがめられ、裏切られている。(一)労働者は祖国をもたず、「祖国擁護」は社会主義

にたいする裏切りであるということ、(二) マルクス主義の国家学説が第二インタナショナルによってゆがめられたということ、これである。

マルクスが再三指摘し、とりわけ一八七五年の『ゴータ綱領批判』のなかで指摘したように、またエンゲルスが一八九四年にもっとわかりやすく述べたように、「社会民主主義」という名称は科学的に不正確である。(三三) 人類は、資本主義から直接には、ただ社会主義に、すなわち生産手段の共有と各人の労働に応じた生産物の分配とに移ってゆくことができるだけである。わが党はもっと先のほうを見ている。すなわち、社会主義は、かならず「各人は能力に応じて、各人には欲望に応じて」を旗じるしとする共産主義へ、徐々に成長転化してゆかざるをえない。

これが私の第一の論拠である。

第二。わが党の名称（社会民主主義者）の後半も科学的に正しくない。民主主義は国家の一形態である。ところが、われわれマルクス主義者はあらゆる国家の反対者である。

第二インタナショナル（一八八九―一九一四年）の指導者であるプレハーノフ氏やカウツキー氏やその同類は、マルクス主義を卑俗化し、ゆがめてしまった。

マルクス主義が無政府主義と違うのは、社会主義へ移るのに国家が必要であること、だが、(この点でカウツキー一派との違いがあるのだが) 普通の議会制ブルジョア民主主義共和国のような国家ではなくて、一八七一年のパリ・コミューンのような、一九〇五年と一九一七年の労働者代表ソヴェトのような国家が必要であることを、認める点にある。

私の第三の論拠。実生活は、革命は、弱い、萌芽的な形態でではあるが、まさにこの新しい、本来の意味の国家ではない「国家」を、すでに実際にわが国につくりだした。

これは、すでに大衆の実践の問題となっており、たんに指導者の理論であるにとどまらない。

本来の意味の国家とは、人民から分離した、武装した人間の部隊が大衆を統率することである。

生まれようとしているわれわれの新しい国家も、やはり国家である。なぜなら、われわれにも、武装した人間の部隊が必要であり、厳格なうえにも厳格な秩序が必要であり、帝制派の反革命であろうと、グチコーフ的＝ブルジョア的反革命であろうと、反革命のあらゆる企てを強力で容赦なく弾圧することが必要だからである。

だが、生まれようとしているわれわれの新しい国家は、もはや本来の意味の国家ではない。なぜなら、ロシアの多くの地点で、この武装した人間の部隊をなしているのは、大衆自身、人民全体であって、人民のうえに立ち、人民か

ら分離した、特権的な、実際上やめさせることのできない人間たちではないからである。

うしろを見ないで、まえのほうを見なければならない。古い君主制的統治機関——警察、軍隊、官僚——によってブルジョアジーの支配を強化した普通のブルジョア型の民主主義のほうを見てはならない。

まえのほうの、生まれようとしている、すでに民主主義でなくなろうとしている新しい民主主義のほうを見なければならない。すでに民主主義でなくなろうとしているというのは、民主主義とは人民が支配することであるが、武装した人民自身が自分を支配することはできないからである。

民主主義ということばを共産党に適用するのは、科学的に不正確なだけではない。一九一七年三月をとおってきた今日では、このことばは、革命的人民の目をふさいで、彼らが新しいもの——すなわち、「国家」内の唯一の権力であり、いっさいの国家の「死滅」の先触れである労働者・農民その他いっさいの代表のソヴェトを、自由に、大胆に、自力で建設するのを妨げる目かくしとなっている。

私の第四の論拠。社会主義のおかれている客観的な世界情勢を考慮しなければならない。

この情勢は、マルクスとエンゲルスが不正確で日和見主義的な用語——「社会民主主義」——を意識して大目に見ていた一八七一—一九一四年における情勢とは違っている。なぜなら、パリ・コミューンの敗北後の当時には、歴史はゆっくりした組織・啓蒙活動を日程にのぼせていたからである。それ以外の活動はなかった。無政府主義者は、理論的にだけでなく、経済的にも、政治的にも、根本的にまちがっていた（また、いまでもまちがっている）。無政府主義者は、世界情勢——帝国主義的利潤によって堕落させられたイギリスの労働者、撃破されたパリのコミューン、勝利したばかりの（一八七一年に）ドイツのブルジョア民族運動、長い眠りにおちている半農奴制的なロシア——を理解せず、情勢の誤った評価をあたえた。

マルクスとエンゲルスは、情勢を正しく考慮し、国際情勢を理解し、社会革命の開始にむかってゆっくりと近づいてゆく任務を理解した。

われわれも、新しい時代の任務と特質を理解しよう。「私は竜を蒔いて、のみを取りいれた」(一五四)とマルクスに言われた、へぼマルクス主義者たちのまねをしないようにしよう。

帝国主義に成長転化した資本主義の客観的必然性は、帝国主義戦争を生みだした。戦争は、全人類を断崖のふちに、全文化の滅亡、さらに何百万の人々、何百万とも知れない人々の野蛮化と滅亡の瀬戸際に、追いつめた。

プロレタリアートの革命をおいてほかに活路はない。

ところが、この革命が始まろうとしているそのときに、革命が最初の、おずおずした、おぼつかない、無自覚な、ブルジョアジーを信じすぎる数歩を踏みだしているそのときに、「社会民主党」指導者、「社会民主党」議員、「社会民主主義」新聞——これらこそ、まさに大衆へのはたらきかけの機関ではないか——の大多数（これはほんとうだ、事実だ）が、社会主義を裏切り、社会主義を売り渡し、「自」国のブルジョアジーの側に寝がえってしまったのだ。

大衆は、これらの指導者によって混乱させられ、迷わされ、だまされている。

もし、第二インタナショナルが腐ったように、これまた腐ってしまった、古い時代おくれの名称にわれわれが執着するなら、われわれはこの欺瞞をはげまし、やりやすくすることになるだろう！

社会民主主義という言葉をまじめに理解している労働者も「多勢」いるというなら、そうとしておこう。それにしても、主観的なものと客観的なものとを区別することを学んでよいころである。

主観的には、これらの社会民主主義的労働者は、プロレタリア大衆の最も忠実な指導者である。

だが、わが党の古い名称が、大衆をあざむくのをやりやすくし、前進運動にブレーキをかけているというのが、客観的な世界情勢のあり方である。なぜなら、いたるところで、どの新聞紙上でも、どの議員団のなかでも、大衆の目に映るのは指導者——すなわち、その言うことが他の人間の言うことよりも声高に聞こえ、そのおこなうことが他の人間のおこなうことよりも遠くから見える人々——の姿であるが、この指導者はみな、「でも社会民主主義者」であり、みな、社会主義の裏切者である社会排外主義者との「統一に賛成」しており、みな「社会民主党」のふりだした古い手形の支払を求めているからである。……

ところで、私に反対してもちだされている論拠は？

「……無政府共産主義者と混同される……」というのだ。

では、社会国家主義者や社会自由主義者と混同されるのを、ブルジョア的な大衆欺瞞にかけてはだれよりもすすんでいてだれよりも老獪な、フランス共和国のブルジョア政党、急進社会党と混同されるのを、どうして恐れないのか？「……大衆はこの名称に慣れている。労働者は自分たちの社会民主党に『愛着している』……」と言う。

これが唯一の論拠である。だが、これは、マルクス主義の科学も、革命のあすの任務も、世界社会主義のおかれている客観的情勢も、第二インタナショナルの恥さらしな崩壊も、プロレタリアをとりかこんでいる「でも社会民主主

義者」の群が実践的事業をそこなっていることも、無視した論拠ではなかろうか。

　これは、旧慣固守の論拠、休眠の論拠、沈滞の論拠である。

　だが、われわれは世界を改造しようと望んでいる。われわれは、何億という人間が引きずりこまれ、何千億何兆という資本の利益が絡みついている帝国主義的世界戦争を終わらせようと望んでいる。この戦争は、人類史上最大のプロレタリア革命によらないかぎり、真に民主主義的な講和で終わらせることはできない。

　それなのに、われわれは自分で自分を恐れている。われわれは、「着なれた」、「なつかしい」、よごれたシャツに執着している。……

　よごれたシャツはもうぬぎすてるべきときだ。きれいな肌着を着るべきときだ。

　ペトログラード、一九一七年四月一〇日

あとがき

　経済的解体と、ペテルブルグの印刷所が作業能力をなくしてしまったためとで、私の小冊子は古くさいものになってしまった。小冊子を書きあげたのは一九一七年四月一〇日で、きょうは五月二八日なのに、小冊子はまだ出ていない！

　この小冊子は、わが党、ボリシェヴィキ派ロシア社会民主労働党の全国協議会をまえにして、私の見解を宣伝するための政綱草案として書いたものである。小冊子はタイプで打って、その何部かは協議会のまえや協議会の席上で党員にくばられたので、とにかくその仕事の幾分かは果たしたわけである。しかし、今日では、一九一七年四月二四―二九日の協議会がすでにひらかれて、その諸決議がもうだいぶまえに出版されたので（『ソルダーツカヤ・プラウダ』[一己]第一三号の付録を見よ）、注意ぶかい読者は、私の小冊子がしばしばそれらの決議の最初の草案となっていることを、たやすく見てとるであろう。

　いまとなっては、この小冊子がそれらの決議との関連で、それらの解説として幾分とも役に立つことを希望するほかはないが、なお二つの点について一言したい。

　私は二七ページ〔本書、二一二ページ〕で、ただ情報を得る目的でのみツィンメルヴァルトにとどまることを、提案している。協議会はこの点について私に同意しなかったので、私はインタナショナルにかんする決議には反対投票せざるをえなかった。いまではもう、協議会が誤りをおかしたこと、また事件の経過が急速にこの誤りを訂正するで

あろうことが、明らかになりつつある。われわれがツィンメルヴァルトにとどまれば、（たとえそういうつもりでなくとも）第三インタナショナルの創設を引きのばすことに加担することになる。すでに思想的＝政治的に死んでしまったツィンメルヴァルトという重荷にしばられて、第三インタナショナルの創設に間接にブレーキをかけることになる。

現在のわが党の立場——全世界のすべての労働者党にたいしての——は、まさに第三インタナショナルをただちに創立することをわれわれの義務としている。われわれのほかには、いまこれをやれるものはだれもいないし、さきへ延ばすのは有害である。情報をえる目的でのみツィンメルヴァルトにとどまることにすれば、われわれは、第三インタナショナルを創立するための行動の自由をただちに獲得するわけである（しかも、それと同時に、ツィンメルヴァルトを利用することが可能であるような事情が生まれれば、それを利用することができる）。

だが、いまのところは、協議会が誤りをおかしたおかげで、われわれは、すくなくとも一九一七年七月五日までは、手をこまねいて待つほかはない（これは、ツィンメルヴァルト会議が招集される日取りである。またしても延期されることがなければ幸いである！　すでに一度延期されたのだから……）[三六]。

しかし、協議会のあとでわが党中央委員会が全員一致で採択し、『プラウダ』の五月一二日付第五五号に発表された決定は、この誤りをなかば訂正した。ツィンメルヴァルトが大臣たちとの協議に応じる場合には、われわれはツィンメルヴァルトから脱退するということが、決定されたのである[三七]。われわれが「左派」（「第三の潮流」、「実際の国際主義者」、本書二二三—二二五ページ〔本書、二〇八—二一〇ページ〕を見よ）の最初の国際的協議会を招集ししだい、この誤りの残りの半分もすぐさま訂正されるものと、私はあえて期待する。

ここで一言しておかなければならない第二の点は、一九一七年五月六日に「連立内閣」[三八]が成立したことである。この小冊子は、この点でとくに古くさくなったように見える。

実際には、ほかならぬこの点でこそ、この小冊子はすこしも古くさくなっていない。この小冊子は、階級的分析——一〇人の資本家大臣に六人の大臣を人質としてさしだしたメンシェヴィキとナロードニキが、火のように恐れているもの——をいっさいの基礎としている。そして、階級的分析をいっさいの基礎としているからこそ、この小冊子は古くさくならなかったのである。というのは、ツェレテーリ、チェルノーフ一派の入閣は、ペトログラード・ソヴ

ェトと資本家政府との協定の形式をほんのわずか変えただけであるが、私は、小冊子の八ページ〔本書、一九五ページ〕で、「私が言っているのは、正式の協定というよりは、むしろ事実上の支持である」と、わざわざ強調しておいたからである。

ツェレテーリ、チェルノーフ一派がまさに資本家への人質にすぎないこと、この「面目を一新した」政府は、対外政策の面でも、国内政策の面でも、自分の仰々しい約束をいささかも履行する気がなく、その能力もないことは、日ましに明らかになっている。チェルノーフ、ツェレテーリ一派は政治的に自殺をとげ、資本家の助手となって実際に革命の圧殺にあたり、また、ケーレンスキーは大衆にたいして暴力を行使するまでに転落してしまった（本書九ページ〔本書、一九六ページ〕の次の言葉を参照せよ。「グチコーフは、いまのところはまだ、大衆にたいして暴力を行使するぞといっておどしているだけである。」ところが、ケーレンスキーは、このおどしを実行しなければならなくなった……（五九））。チェルノーフ、ツェレテーリ一派は、政治的に自殺をとげ、また自分たちの党、メンシェヴィキと社会革命派を政治的に殺してしまった。人民はこのことを日ましにはっきりと見てとるであろう。

連立内閣は、私の小冊子で簡単に分析しておいた、わが国の革命の基本的な階級諸矛盾の発展における過渡的な一時期にすぎない。こういう状態を長いあいだつづけてゆくことはできない。後退して全線にわたって反革命に身を投じるか、前進して権力を他の諸階級の手に移すか、二つに一つである。革命期に、帝国主義的世界戦争の状況のもとで、同じところに立ちどまっているわけにはいかない。

エヌ・レーニン

ペテルブルグ、一九一七年五月二八日

本文は一九一七年四月一〇（二三）日に、あとがきは一九一七年五月二八日（六月一〇日）に執筆
一九一七年九月に「プリボイ」出版所刊の単行の小冊子として発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第三一巻、一四九――一八六ページ所収
邦訳全集、第二四巻、四〇――七六ページ所収

ロシア農村労働者組合を設立する必要について

第一論文

いまピーテルでひらかれている全ロシア労働組合会議(一〇)には、非常に重要な一問題が提出されなければならない。それは、全ロシア農村労働者組合を創設する問題である。

ロシアのあらゆる階級がみずからを組織しつつある。だが、最もひどく搾取され、最も貧しい生活をおくり、最も分散し、抑えつけられているロシアの農業賃金労働者階級は、まるで忘れられたかのようである。非ロシア人の住む一部の辺境地方、たとえばラトヴィア辺区には、農業賃金労働者の組織がある。だが大ロシアとウクライナの圧倒的多数の諸県には、農村プロレタリアートの階級的組織がない。

自分たちの兄弟である農村労働者を援助することは、ロシア・プロレタリアの先進部隊である工業労働者の労働組合の最大の、無条件の義務である。農村労働者を組織するのは、たいへん困難である。そのことは明白である。あらゆる資本主義諸国の経験がそれを立証している。

それだけに、ロシアにおける政治的自由を利用することにできるだけ早く、できるだけ精力的にとりかかり、ただちに全ロシア農村労働者組合を創設することが、いよいよ必要である。まさに労働組合会議こそ、それを実行することができるし、また実行しなければならない。まさにいまこの会議に集まった練達な、進歩的な、自覚したプロレタリアートの代表者こそ、農村労働者に呼びかけて、自分たちの仲間に、独自にみずからを組織しつつあるプロレタリアの隊列に、自分たちの労働組合の隊列にくわわるよう勧めることができるし、またそうしなければならない。まさに工場の賃金労働者こそ、イニシアチブをとって、農村労働者を自主的な生活に目ざめさせ、みずからの生活状態の改善をめざす闘争に活発に参加させ、みずからの階級的利益を守りぬかせるために、ロシア全土に散在している労働組合の細胞や、グループや、分会を利用しなければならない。

たぶん、いま農民がロシア全土でみずからを組織し、土

地の私有制の廃止とその「均等な」用益とを叫んでいるそのときに、農村労働者の労働組合を結成することは時宜に適していないと思う人も多いであろう。おそらく、現在の時点では、それがおもな意見であるかもしれない。

まさにその逆なのである。まさにこういうような時にこそ、そうすることが、とくに時宜に適しており、緊急に必要なのである。一九〇六年のロシア社会民主労働党ストックホルム大会で、[二三]ボリシェヴィキの提唱にもとづき、メンシェヴィキによって承認され、それ以来ロシア社会民主労働党の綱領にとりいれられている命題が正しいことは、プロレタリア的、階級的な見地に立つ人々には一点の疑いもありえないことである。この命題は次のように述べている。

「党は、あらゆる場合に、また民主主義的土地改革の状態がどのような状態にあるかにかかわりなく、農村プロレタリアートを独自の階級的組織に結集するためにたゆみなく努力すること、彼らに彼らの利害と農民ブルジョアジーの利害との和解できない対立を説明すること、商品生産が存続しているかぎりけっして大衆の窮乏をなくすことのできない小経営制度に幻想をいだかないよう彼らに警告すること、最後に、あらゆる窮乏とあらゆる搾取をなくす唯一の手段として完全な社会主義的変革の必要性を示すことを、自己の任務とするものである。」

自覚した労働者、労働組合員で、これらの命題の正しさを認めないような者は、一人もいない。農村プロレタリアートを独自の階級的組織に結集することが問題であるかぎり、これらの命題を実行に移すことは、ほかならぬ労働組合の仕事である。

自分の実力を発揮し、自分の道を切りひらいていきたいという願い、労働者自身が労働問題を自主的に解決することをぬきにして、生活の改造がおこなわれるのを許すまいとする志向が、一般に勤労大衆のあいだに、またとくに労働者のあいだに生きいきと見られる革命的時期——まさにこのような時期にこそ、労働組合は、狭いツンフト的利益に閉じこもることなく、自分たちの弱い兄弟である農村労働者を忘れずに、全力をあげてロシア農村労働者組合の創設に力を貸すであろうと、われわれは信じている。

次の論文で、われわれはこの方向への若干の実践的措置を示すようにやってみよう。

第二論文

まえの論文でわれわれは、ロシア農村労働者組合の問題の原則的意義を検討した。こんどは、この問題の若干の実践的な側面にふれてみよう。

ロシア農村労働者組合には、大部分、あるいは主として、または部分的にでも農業企業での賃労働に従事するすべての者が加入すべきであろう。

このような組合を、純農業労働者の組合と、部分的に賃金労働者となるだけの労働者の組合とに分ける必要があるかどうかは、経験が示すであろう。いずれにしても、それは本質的なことではない。本質的なことは、自分の労働力を売るすべての者の基本的な階級的利害は同一であるということ、たとえ生活費の一部分でも「他人のもとでの」賃仕事から引きだしているすべての人々の団結が無条件に必要であるということである。

都市の工場賃金労働者は、無数の糸で農村の賃金労働者と結びついている。前者の後者への呼びかけは、反響を生まずにはおかない。しかし、たんなる呼びかけにとどまってはならない。都市労働者は、はるかに多くの経験、知識、手段、力量をもっている。この力量の一部は、農村労働者が立ちあがるのを助けることに、直接にさかれなければならない。

ある一日をきめて、すべての組織労働者がその日の賃金を、都市と農村の賃金労働者の統一という事業全体の強化、発展のために提供するようにする必要がある。この金額の一定の部分は、農村労働者の階級的統一の事業への都市労働者の援助に、そっくりあてられなければならない。ごく平易なリーフレットをいくつか出版したり、農村労働者の新聞——はじめは週刊であってもよい——を発行したり、各地に農業賃金労働者の組合をただちに設立するために、たとえ少数でも扇動者や組織者を農村へ派遣したりする費用は、この基金でまかなうべきである。

このような組合がみずから得た経験だけが、この事業をいっそう発展させる正しい道の発見を助けるであろう。このような組合はすべて、いずれも、農業企業に自分の労働力を売る人々の生活状態を改善し、賃金を引き上げ、住宅、食事、等々のよりよい条件を獲得することを、第一の任務としなければならない。

きたるべき土地私有制の廃止が、どの雇農と日雇にも「土地をあたえ」、農業における賃金労働の根底そのものを掘りくずすことができるという偏見にたいしては、断固たる闘争を宣言しなければならない。それは偏見であり、しかもきわめて有害な偏見である。土地私有制の廃止は、偉大な、無条件に進歩的な、経済的発展の利益とプロレタリアートの利益とに無条件にかなった改革である。あらゆる賃金労働者は、心から、全力をあげてこれを支持するであろう。しかし、それだけではまだ賃金労働はけっして排除されない。

土地を食うわけにはいかない。家畜や、農具や、種子がなければ、食糧のたくわえもなく、貨幣もなければ、土地で経営をいとなむことはできない。だれがあたえたものであろうと、「約束」などをあてにするのは――家畜、農具、等々を農村の賃金労働者が手にいれるのを「援助する」という約束をあてにするのは――、最悪の誤りであり、許しがたいおめでたさというものであろう。

あらゆる労働組合運動の基本的な規則、第一のいましめは、「国家」をあてにするな、自分の階級の力だけをあてにせよ、ということである。国家と支配は階級の組織である。

約束をあてにするな、自分の階級の統一と自覚の力だけをあてにせよ！

だから、一般に労働者の生活状態の改善をめざしてたたかうだけでなく、とくにきたるべき偉大な土地改革にさいして階級としての農村労働者の利益を守りとおすことが、農村労働者の労働組合の任務としてただちにとりあげられなければならない。

「働き手は、郷委員会の管理にゆだねられなければならない。」農民とエス・エルはしばしばこう論じる。農業賃金労働者階級の見地はまさにその逆である。郷委員会が働き「手」の管理のもとにおかれなければならない！ と。

このように対置するとき、経営主の立場と賃金労働者の立場とがはっきりわかってくる。

「土地を全人民に」。これは正しい。しかし、人民は諸階級に分かれている。ブルジョアジーが故意にあいまいにし、小ブルジョアジーがたえず忘れているこの真理を、どの労働者も知っており、見ており、感じており、体験している。

ひとりぼっちの貧乏人を援助してくれる者は、だれもいないであろう。農村の賃金労働者、雇農、日雇、貧農、半プロレタリアが自分で自分を助けないなら、どんな「国家」も彼らを助けはしないだろう。そのための第一歩は、農村プロレタリアートを独自の階級的組織に結集することである。

われわれは、全ロシア労働組合会議が最大のエネルギーをもってこの事業にとりくみ、ロシア全国に呼びかけて、農村のプロレタリアに援助の手を、組織されたプロレタリア前衛の強力な手をさしのべるように希望する。

『プラウダ』第九〇号および第九一号、一九一七年
七月七日および八日（六月二四日および二五日）
署名――エヌ・レーニン

スローガンについて

全集、第五版、第三二巻、三七六—三八〇ページ所収
邦訳全集、第二五巻、一二四—一二八ページ所収

歴史が急転換するときには、先進的な諸党でさえ、多少とも長いあいだ新しい情勢に適応できずに、きのうは正しかったがきょうはなんの意味もなくなったスローガン、その歴史の急転換が「突然に」やってきたように、やはり「突然に」意味がなくなってしまったスローガンを繰りかえす場合が、これまであまりにも多かった。

全国家権力をソヴェトに移せ、というスローガンについても、どうやら同じようなことが繰りかえされそうに思われる。このスローガンは、わが国の革命の永久に過ぎさった一時期には、つまり二月二七日から七月四日[六三]までは、正しかった。いまでは、このスローガンは明らかに正しくなくなった。このことを理解しなければ、今日の切実な問題はなにひとつ理解できない。すべてスローガンというものは、特定の政治情勢の特質の総和から引きだされなければ

ならない。ところが、現在の、つまり七月四日以後のロシアの政治情勢は、二月二七日から七月四日までの情勢とは、根本的に違っている。

その当時、革命のこの過ぎさった時期に国家を支配していたのは、いわゆる「二重権力」であった。これは、実質的にも形式的にも、国家権力がどっちつかずの、過渡的な状態にあることをあらわしていた。権力の問題はあらゆる革命の根本問題であることを、忘れないようにしよう。

その当時、権力は動揺状態にあった。臨時政府とソヴェトが、相互の自発的協定にもとづいて、権力を分けあっていた。ソヴェトは、自由な、すなわち外部からのどのような暴力もうけない、武装した労働者と兵士の大衆の代表であった。武器が人民の手にあり、外部から人民にくわえられる暴力がなかったこと――ここに問題の核心があった。革命全体の平和的な発展の道をひらき、また保障していたのは、まさにこのことであった。「全権力をソヴェトに移せ」というスローガンは、この平和的な発展の道に沿っての次の一歩、ただちに実行できる一歩をあらわすスローガンであった。これは、革命の平和的発展のスローガンであった。この平和的発展は、二月二七日から七月四日まではは可能であったし、また、もちろん、最も望ましいものであったが、いまではそれは絶対に不可能である。

「全権力をソヴェトに移せ」というスローガンの支持者たちも、これが革命の平和的発展のスローガンであることを、みながみな十分に熟考したわけではないようである。平和的というのは、その当時には(二月二七日から七月四日までは)、だれも、どの階級も、重要な勢力のどれひとつとして、ソヴェトに権力を移すことに反抗し、それを防止することのできるものはなかった、というだけの意味ではない。それだけではない。さらに、その当時には、国家権力の総体を時機をのがさずソヴェトに移していたなら、ソヴェトの内部での諸階級や諸党派の闘争が、最も平和的に、最も苦痛のない形でおこなわれたであろうという点でも、平和的発展が可能であったろう。

問題のこの、あとのほうの側面にたいしても、やはりまだ十分な注意がはらわれていない。ソヴェトは、その階級構成からみて、労働者と農民の運動の機関であり、彼らの執権(ディクタツーラ)のできあがった形態であった。もしソヴェトが権力の総体をにぎっていたなら、小ブルジョア諸層のおもな欠陥であり、そのおもな過誤である資本家にたいする軽信性は、実践をつうじて克服され、彼ら自身の諸施策の経験によって批判されたであろう。権力をにぎっている諸階級、諸党の交替は、ソヴェトの内部で、ソヴェトの単独、全能の権力を基盤として、平和的におこなうことができたであろう。

また、すべてのソヴェト諸党と大衆との結びつきは、おそらく、引きつづき強固であったろうし、弱まることはなかったであろう。ソヴェト諸党と大衆とのあいだの、きわめて緊密な、自由にひろがり深まってゆくこの結びつきだけが、小ブルジョアのブルジョアジーとの協調政策の幻想を平和的に克服するのを助けることができたであろうということは、かたときも忘れてはならない。権力をソヴェトに移しても、そのこと自体は、諸階級の相互関係を変えなかったであろうし、また変えるはずもなかった。そうしたからといって、農民の小ブルジョア性はすこしも変わらなかったであろう。しかし、それは、農民をブルジョアジーから切り離し、労働者に近づけ、ついで労働者と団結させる方向に、時機をのがさず大幅な一歩を踏みだすものであったろう。

もし権力が時機をのがさずにソヴェトに移されていたなら、こういうふうになったかもしれない。そうなれば、人民にとっては最も楽で、最も有利であっただろう。このような道は最も苦痛のない道であったろうし、したがってそれをめざして最も精力的にたたかわなければならなかった。しかし、いまでは、この闘争、時機をのがさず権力をソヴェトに移すための闘争は終わった。平和的な発展の道は不可能にされてしまった。非平和的な、最も苦痛の多い道が始まった。

七月四日の転換は、まさにこの日以来客観情勢が激変した点にある。権力の動揺状態は終わった。権力は、決定的な箇所で反革命派の手に移った。エス・エルおよびメンシェヴィキの小ブルジョア諸党と反革命的カデットとの協調にもとづく諸党の発展は、この両小ブルジョア政党が反革命的な死刑執行の事実上の共犯者、助手になりはてる結果にみちびいた。資本家にたいする小ブルジョアの無自覚な軽信的態度は、党派闘争の発展につれて、小ブルジョアが反革命派を意識的に支持するところまですすんだ。諸党の関係の発展はその周期を終えた。二月二七日には、すべての階級が一致して君主制に反対した。七月四日以後は、反革命的ブルジョアジーは、君主主義者や黒百人組と手をたずさえて、小ブルジョア的なエス・エルとメンシェヴィキを、なかばおどしつけて味方に引きいれ、実際の国家権力をカヴェニャクの徒の手に、すなわち、戦線では服従しない兵士を銃殺し、ピーテルではボリシェヴィキのたたきつぶしにかかっている軍事的徒党の手に引き渡した。

権力をソヴェトに移せ、というスローガンは、いまでは、ドン・キホーテ式のやり方か、あるいは人を嘲弄するものととられることだろう。客観的には、このスローガンは、人民をあざむくものであり、ソヴェトが権力を獲得するに

は、いまでも権力をにぎろうと望むか、あるいはそう決定しさえすればよいというような幻想、また、ソヴェト内に、死刑執行人の手助けをして自分をけがさなかった政党がまだあるとか、起こったことを起こらなかったことにすることができるとかいうような幻想を、人民にいだかせるものであろう。

ボリシェヴィキの粉砕や、戦線での銃殺や、労働者の武装解除をエス・エルとメンシェヴィキが支持したので、いわばその「復讐」として、反革命に対抗してこれらの党を支持するのを「拒絶する」ようなことを、革命的プロレタリアートがやれると考えるなら、ひどい誤りであろう。そういうふうに問題を立てることは、第一に、俗物的な道徳観念をプロレタリアートにあてはめることであろうし（プロレタリアートは、運動の利益のためなら、いつでも、動揺的な小ブルジョアジーはおろか、大ブルジョアジーをさえ支持するであろうから）、第二に――そして、これが肝心なことだが――、それは、「道徳論議」によって問題の政治的核心をぼかそうとする俗物的な試みであろう。

問題のこの核心は、いまではもう権力を平和的に掌握することができないという点にある。権力の獲得は、いま現実に権力をにぎっている人々、すなわち、ピーテルに移駐させられてきた反動的部隊と士官学校生徒と君主主義者とを拠りどころとする軍事的徒党、カヴェニャクの徒を、断固たる闘争で打ち破ってこそ、はじめて可能である。

問題の核心は、これらの国家権力の新しい保持者たちを打ち破ることのできるのは革命的人民大衆だけだ、という点にある。この人民大衆が運動にはいるための条件は、彼らがプロレタリアートに指導されるだけでなく、さらに、革命の大業を裏切ったエス・エルとメンシェヴィキの諸党に背を向けることである。

政治のなかに俗物的道徳をもちこむ人は、次のように論じる。プロレタリアートと革命的連隊を武装解除しているカヴェニャクの徒をエス・エルとメンシェヴィキが支持したことは、彼らの「誤り」であったと認めよう。だが、彼らには、誤りを「あらためる」機会をあたえてやるべきである。彼らが「誤り」をあらためるのを「やりにくくしてはならない」。小ブルジョアジーが労働者の側に傾いてきやすいようにしてやるべきである、と。こういう議論は、労働者を新たにあざむくものではないにしても、こどもらしい無邪気さか、たんなる愚鈍にすぎないであろう。なぜなら、小ブルジョア大衆が労働者の側に傾いてくるのは、この大衆がエス・エルとメンシェヴィキに背を向けることにほかならないであろうし、まさにそうすることであろうから。いまでは、エス・エルとメンシェヴィキの諸党が

「誤り」をあらためるということは、ツェレテーリとチェルノーフ、ダンとラキートニコフが死刑執行人の助手であることを、それらの党が宣言することのほかにはありえないであろう。こういう「誤りの是正」になら、われわれは完全に、文句なしに賛成である。……

革命の根本問題は権力の問題である、とわれわれは言った。これに、次のようにつけくわえて言わなければならない。一歩ごとに、どこに真の権力があるかという問題があいまいにされるのが見られ、形式上の権力と現実の権力とのくいちがいが見られるのも、まさにもろもろの革命のときである、と。この点にこそ、あらゆる革命期のおもな特質の一つがある。一九一七年の三月と四月には、現実の権力が政府の手にあるのか、ソヴェトの手にあるのか、はっきりしなかった。

だが、いまこそ、国家権力は現在だれの手にあるのかという革命の根本問題を、自覚した労働者が冷静に考えることが、とくに重要である。なにが国家権力の物的な現われであるかを考えたまえ、言葉を事実ととりちがえないようにしたまえ。そうすれば、諸君は答えに苦しむことはあるまい。

国家とは、まず第一に、監獄のような物的付属物をもつ武装した人間の部隊である、とフリードリヒ・エンゲルスは書いている。[一六三] 今日これにあたるものは、士官学校生徒、ピーテルにわざわざ移駐させられてきた反動的カザックである。カーメネフその他を監獄につないでいる者、新聞『プラウダ』を閉鎖した者、労働者と一部の兵士とを武装解除した者、同じく一部の兵士を銃殺している者、同じく軍の一部の部隊を銃殺している者、これがそうである。これらの死刑執行人こそ現実の権力である。ツェレテーリとチェルノーフらは、権力をもたない大臣、ロボット大臣であり、死刑執行を支持している政党の指導者である。これは事実である。なるほど、ツェレテーリもチェルノーフも、個人としては死刑執行を「是認しておらず」、また彼らの新聞はおずおずと死刑執行にたいする責任のがれを書いているが、だからといってこの事実は変わりはしない。このような政治的衣がえをしても、問題の核心は変わらない。

ペトログラードの一五万人の選挙人の機関紙を閉鎖したこと、『小型版プラウダ』[一六四]を印刷所からもちだしたかどで士官学校生徒が労働者ヴォイノフを殺したこと（七月六日）、——これが死刑執行でないとでも言うのか？　これがカヴェニャク派の仕業でないとでも言うのか？　それは政府にもソヴェトにも「責任のない」ことである——こう言う人があるかもしれない。

われわれはこう答えよう。そうだとすれば、政府にとっ

ても、ソヴェトにとっても、事態はますますまずいことになる。というのは、その場合には、両者ともにあって無いにひとしく、両者ともにあやつり人形で、現実の権力をもたないことになるからである。

人民は、まず第一に、なによりも、真実を知らなければならない——国家権力が実際にだれの手にあるかを知らなければならない。人民には真実をあますことなく語らなければならない。すなわち、権力はカヴェニャクの徒の軍閥(ケーレンスキー、ある将軍や将校たち、その他)の手にあり、そしてこの軍閥は、カデット党を先頭とするブルジョアジーの階級と、さらに、あらゆる黒百人組新聞、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』(一六六)、『ジヴォエ・スローヴォ』(一六六)その他によって活動しているすべての君主主義者とから支持をうけている。

この権力を倒さなければならない。でなければ、反革命との闘争についての千言万句も空文句であり、「自分をあざむき、人民をあざむく」ものである。

いまこの権力は、大臣ツェレテーリ、チェルノーフらからも、また彼らの党からも、支持をうけている。われわれは人民に、彼らの死刑執行人としての役割を説明し、これらの党が四月二一日、五月五日、六月九日(一六七)、七月四日に「誤り」をおかした以上、彼らが〔戦線での〕攻勢政策——この政策が、七月のカヴェニャクの徒の勝利を、十中九まで、まえもって決定したのである——に賛成した以上、これらの党のこのような「大詰め」は避けられなかったことを、説明しなければならない。

人民のあいだでの扇動全体をたてなおして、ほかならぬ現在の革命の、とくに七月事件の具体的な経験を考慮にいれたものに変えなければならない。すなわち、人民の真の敵、軍閥、カデット、黒百人組をはっきりと指摘し、また小ブルジョア諸党、エス・エルとメンシェヴィキの諸党が死刑執行の助手の役割をつとめてきたこと、また現につとめていることをはっきりと暴露するように、変えなければならない。

軍閥の権力を倒さないかぎり、エス・エルとメンシェヴィキの諸党を暴露して人民の信頼を失わせないかぎり、農民が土地を受け取る見込みはまったくないことを明らかにするように、人民のあいだでの扇動全体を変えなければならない。資本主義発展の「正常な」条件のもとでは、これはきわめて長い時間を要する、きわめて困難な過程であろうが、戦争と経済的荒廃とは、どちらもこの仕事をすばらしく促進するであろう。これらは、一ヵ月を、それどころか一週間をさえ、一年に等しいものとすることのできる「促進者」である。

たぶん、以上述べたことにたいして、二つの反論がもちだされるかもしれない。第一の反論はこうである。いま決定的闘争を口にすることは分散的な行動を奨励することを意味するが、そういう分散的な行動は、まさに反革命を利するものであろう、と。第二の反論はこうである。反革命を倒すことは、いずれにせよ権力をソヴェトの手に移すことを意味する、と。

第一の反論に答えて、われわれは次のように言おう。ロシアの労働者はすでに十分に自覚しているから、明らかに自分に不利である時点で、挑発にのることはない、と。彼らがいま行動をおこし、反抗することが、反革命を利するものであることは、争う余地がない。また、大衆の最も深い底から革命が新しく高揚してくる場合にはじめて決定的闘争が可能になるということも、やはり争う余地がない。しかし、一般に、革命の高揚とか、革命の上げ潮とか、西欧の労働者の援助とか、等々について語るだけでは足りない。われわれの過去から一定の結論を引きだすことが必要であり、ほかならぬわれわれの得た教訓を考慮にいれることが必要である。ところで、これを考慮にいれるなら、権力を奪取した反革命派にたいする決定的闘争という、ほかならぬこのスローガンが出てくるであろう。

第二の反論も、けっきょく、具体的な真理をあまりにも一般的な議論ですりかえることになる。革命的プロレタリアートをおいては、だれも、どんな勢力も、ブルジョア反革命を倒すことはできない。一九一七年七月の経験のあとでは、ほかならぬ革命的プロレタリアートが、国家権力を独自にその手ににぎらなければならない。――そうせずには、革命の勝利はありえない。プロレタリアートが権力をにぎり、貧農すなわち半プロレタリアがこのプロレタリアートを支持すること、これがただ一つの活路である。そして、どのような事情がこの活路をいちじるしく促進できるかは、われわれがすでに答えておいたとおりである。

この新しい革命のなかで、ソヴェトは出現できるし、また出現するであろうが、それは現在のソヴェトではなく、ブルジョアジーとの協調の機関ではなくて、ブルジョアジーとの革命的闘争の機関である。その場合にも、われわれが国家全体をソヴェトの型にしたがって建設することに賛成するだろうというのは、まさにそのとおりである。だが、これは、ソヴェト一般の問題ではなく、現在の反革命とたたかい現在のソヴェトの裏切りとたたかう問題である。

具体的なものを抽象的なものにすりかえることは、革命における最も主要な過誤の一つ、最も危険な過誤の一つである。現在のソヴェトはエス・エルとメンシェヴィキの諸

党がそのなかで支配的であったために崩壊し、完全に破産してしまった。現在では、これらのソヴェトは、屠所に引かれていって、かざされた斧の下で悲しげに鳴いている羊に似ている。いまは、ソヴェトは、勝利した反革命、また勝利をおさめようとしている反革命をまえにして、無力であり、どうすることもできないでいる。権力をソヴェトに移せ、というスローガンは、ほかならぬ現在のソヴェトに権力を移せという「単純な」呼びかけと理解されかねない。しかし、いまそういうことを言うのは、またそうするように呼びかけるのは、人民をあざむくものであろう。欺瞞ほど危険なものはない。

二月二七日から七月四日までのロシアにおける階級闘争と党派闘争の発展の周期は終わった。いま新しい周期が始まろうとしている。この周期に登場するのは、古い諸階級、古い諸党、古いソヴェトではなく、闘争の鉄火によって革新され、闘争の経過によって鍛えられ、訓練され、つくりかえられた諸階級、諸党、ソヴェトである。われわれは、うしろを見ないで、まえを見なければならない、われわれは、階級および党の古いカテゴリーではなく、新しい、七月以後のカテゴリーを運用しなければならない。新しい周期の開始にあたって、われわれは、ブルジョア反革命が勝利したということ、エス・エルとメンシェヴィキがそれと協調してきたおかげで勝利したということから、また革命的プロレタリアートだけがこのブルジョア反革命を打ち破ることができるということから、出発しなければならない。もちろん、この新しい周期のうちで、反革命が完全に勝利するまでには、エス・エルとメンシェヴィキが完全に敗北する（闘争ぬきで）までには、また新しい革命が新しく高揚してくるまでには、まだ多種多様な段階があるだろう。しかし、それについては、のちになって、これらの段階がそれぞれ輪郭をあらわしてきたときに、はじめて論じることができるであろう。……

一九一七年七月なかばに執筆
一九一七年に単行の小冊子としてロシア社会民主労働党（ボ）クロンシタット委員会から発行
全集、第五版、第三四巻、一〇―一七ページ所収
邦訳全集、第二五巻、一九九―二〇七ページ所収

立憲的幻想について

立憲的幻想とよばれるのは、正常な、法治的な、秩序だった、適法的な、要するに「立憲的な」秩序が、実際には存在していないのに、存在しているかのように考える政治的誤りのことである。ちょっと考えると、まだどんな憲法もつくられていない現在の一九一七年七月のロシアに立憲的幻想が生まれるなどということは問題になりえない、と思えるかもしれない。だが、それは大きなまちがいである。実際には、きわめて広範な住民大衆のあいだに立憲的幻想がしみこんでいるということが、今日のロシアの政治情勢全体の核心なのである。このことを理解しなければ、現在のロシアの政治情勢はまったくなにもわからない。立憲的幻想を系統的に、容赦なく暴露し、この幻想の根源をすべてあばきだし、正しい政治的見通しを回復することに重点をおかなければ、現在のロシアにおける戦術的任務の正しい提起に向かって、まったくただの一歩もすすめることはできない。

現在見られる立憲的幻想を最も典型的にあらわしている意見を三つとりあげて、いくらか注意ぶかく検討してみよう。

第一の意見。わが国は、憲法制定議会を目前にひかえている。だから、いま起こっている出来事は、みな臨時的、一時的な性質のもので、それほど本質的な、決定的な性質をもっていない。万事はじきに憲法制定議会で再検討されて、最後的に確定されるであろう。第二の意見。ある種の政党——たとえば、エス・エルあるいはメンシェヴィキ、または両党の連合——が人民のあいだで、またはソヴェトのような「最も有力な」機関のなかで、明白な、疑う余地のない多数を占めている。だから、共和主義的、民主主義的、革命的なロシアで、これらの党やこれらの機関の意志、また一般に人民の多数者の意志の実行を避けたり、ましてそれにそむいたりすることは不可能である。第三の意見。たとえば新聞『プラウダ』の閉鎖のようなある種の措置は、臨時政府によっても、ソヴェトによっても、適法なものと認められてはいない。だから、これは一つの挿話、偶然の現象にすぎないし、それを決定的なものと見なすことは絶対にできない。

この三つの意見をそれぞれ検討してみよう。

一

憲法制定議会を招集するということは、すでに第一次の臨時政府が約束したことである。この政府は、この国に憲法制定議会をもたらすことを、自分の主要な任務と認めたのであった。第二次の臨時政府は、憲法制定議会の招集の期日を九月三〇日[二六]にきめた。七月四日以後につくられた第三次の臨時政府は、このうえもなくおごそかにこの期日を確認した。

だが、憲法制定議会がこの期日に招集されないことは、九分九厘まで確かである。また、たとえこの期日に招集されたところで、ロシアで第二の[二七]革命が勝利をおさめないうちは、この議会は、第一国会と同じように無力で無用なものになるだろうということも、やはり九分九厘確かである。このことを納得するには、人々の頭に詰めこまれているさわがしい空文句や、約束や、日常の瑣末な雑事から一分間でも目をそらせて、基本的なもの、社会生活においてすべてを決定するもの、すなわち階級闘争を一瞥すれば十分である。

ロシアのブルジョアジーが地主ときわめて緊密に融合していることは、明らかである。すべての新聞雑誌、すべての選挙、カデット党およびそれより右寄りの諸党の全政策、さまざまな「利害関係」者の「大会」のすべての言明が、このことを証明している。エス・エルや、メンシェヴィキ「左派」の小ブルジョア的おしゃべりたちに理解できないことを、ブルジョアジーはみごとに理解している。それは、巨大な経済革命をおこなわなければ、銀行を全人民の統制のもとにおかなければ、シンジケートを国有化しなければ、資本を抑える最も仮借ない一連の革命的方策をとらなければ、ロシアで土地の私有を廃止し、しかも無償で廃止することは不可能だということである。ブルジョアジーはこのことをみごとに理解している。だが、それと同時に、彼らは、ロシアの農民の圧倒的多数がいまでは地主の土地の没収に賛成しているばかりか、チェルノーフよりもずっと左翼化していることを知り、見てとり、感じないわけにはいかない。なぜなら、五月六日から七月二日までだけをとってみても、チェルノーフが農民のさまざまな要求の実行を延ばし削減する点で、どんなにブルジョアジーにたいして部分的な譲歩をかさねてきたか、また農民大会[二八]や全ロシア農民代表ソヴェト執行委員会で、エス・エル右派（チェルノーフは、エス・エルのあいだでは、なんと「中央派」と見なされているのだ！）が、農民を「静め」、空約束で農

民をなだめるためにどんなに苦労してきたかを、ブルジョアジーはわれわれよりもよく知っているからである。

ブルジョアジーが小ブルジョアジーと違う点は、ブルジョアジーが、自分の経済的および政治的な経験から学んで、資本主義制度のもとで「秩序」(すなわち、大衆の奴隷化)を維持するための条件を理解するにいたった、ということにある。ブルジョアは実務家であり、商売の計算に長けた人間である。彼らは、政治問題をも厳密に実務的に取り扱うことに慣れており、言葉を信用せず、物ごとの急所をおさえるのにたくみである。

現在のロシアで憲法制定議会がひらかれれば、エス・エルよりも左翼的な農民が多数を占めるようになるであろう。ブルジョアジーはこのことをよく知っている。このことを知っているから、彼らは、憲法制定議会を速やかに招集することに、徹底的に反対してたたかわないわけにはいかないのである。ニコライ二世の結んだ秘密条約の精神で帝国主義戦争をつづけること、地主的土地所有や、土地の有償買戻しを擁護すること、――すべてこうしたことは、憲法制定議会のもとでは不可能となるか、はなはだしく困難になるであろう。戦争は待ったなしである。階級闘争は待ったなしである。二月二八日から四月二一日までの短い期間すら、このことを明瞭に示している。

革命のそもそものはじめから、憲法制定議会について二つの見解が現われた。骨の髄まで立憲的幻想がしみこんでいるエス・エルとメンシェヴィキは、階級闘争のことなど聞きたがらない小ブルジョアの軽信性でこの問題を見た。憲法制定議会をひらくという宣言がなされた、だから、憲法制定議会はひらかれるだろう、それで十分だ！　これより過ぐるは、悪より出ずるものだ、と！　だが、ボリシェヴィキはこう語った。ソヴェトの力と権力が強まれば強まるほど、憲法制定議会の招集とその成功が保障される、と。メンシェヴィキとエス・エルにあっては、重点は法律行為におかれる。つまり、憲法制定議会を招集するという宣言、約束、声明におかれる。ボリシェヴィキにあっては、重点は階級闘争におかれる。ソヴェトが勝利すれば、憲法制定議会の招集は保障されるであろう。もし勝利しないなら、それは保障されないだろう、と。

じじつ、そのとおりになった。そのあいだずっと、ブルジョアジーは、あるいは隠然、あるいは公然と、憲法制定議会の招集に反対して、たえまなく、一貫してたたかってきた。このたたかいは、戦争が終わるまで憲法制定議会の招集を延ばそうという願いとなって現われた。このたたかいはまた、憲法制定議会の招集の日取りをきめることをなんども延ばしたことに現われた。連立内閣が成立してから

一月以上もたって、六月一八日(一一)のあとで、憲法制定議会の招集の期日がついにきめられたとき、モスクワの一ブルジョア新聞は、これはボリシェヴィキの扇動の影響によるものだ、と述べた。『プラウダ』に、この新聞からの正確な引用文がのっている。

エス・エルとメンシェヴィキが忠勤をはげんだおかげで、また彼らがおじけづいたおかげで、反革命が「勝利」をおさめた七月四日のあとで、『レーチ』に、憲法制定議会の招集の期限が「早すぎるので、実行不可能」という、短いが、きわめて注目すべき表現が、うっかりのせられた!! また、七月一六日には、『ヴォーリャ・ナローダ』(一二)と『ルースカヤ・ヴォーリャ』に、こんなに「短い」期限で憲法制定議会を招集することは「不可能」だという口実で、カデットがその招集の延期を要求している、という記事がのった。この記事によれば、反革命派におもねるメンシェヴィキのツェレテーリは、一一月二〇日まで延期することにすでに同意したという!

疑いもなく、このような記事は、ブルジョアジーの意志に反してうっかりのせられたものでしかありえなかった。ブルジョアジーにとって、このような「すっぱぬき」は不利である。しかし、錐中の錐はおのずから現われるのたとえである。七月四日以後のさばりだした反革命派が、うっかり口をすべらせたのだ。反革命的ブルジョアジーが、七月四日以後はじめて権力を奪取するやいなや、たちまち憲法制定議会の招集にさからう措置(しかも、きわめて重大な措置)がとられたのである。

これは事実である。そして、この事実は、立憲的幻想がまったく空虚なことを暴露している。ロシアに新しい革命が起こらないかぎり、反革命的ブルジョアジー(まず第一にカデット)の権力が倒されないかぎり、人民がエス・エルとメンシェヴィキの諸党、すなわちブルジョアジーとの協調政策をとる諸党への信頼を捨てないかぎり、憲法制定議会は全然招集されないか、たとえ招集されても、「フランクフルトのおしゃべり会議」(一三)になってしまうだろう。すなわち、戦争と、ブルジョアジーが「権力をボイコットする」という見通しとに死ぬほどおびえ、ブルジョアジーぬきで統治しようとする懸命の努力と、ブルジョアジーなしにやってゆくことを恐れる心との板ばさみになって、たよりなくもがいている小ブルジョアの、無力な、無用な会議になってしまうであろう。

憲法制定議会の問題は、ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級闘争の経過と帰結との問題に従属するものである。私の記憶では、あるとき『ラボーチャヤ・ガゼータ』(一四)が、憲法制定議会は国民公会となるであろう、としゃ

べりたてたことがあった。これは、反革命的ブルジョアジーの従僕であるわがメンシェヴィキのからっぽな、みじめな、軽蔑すべきからいばりの見本の一つである。憲法制定議会を「フランクフルトのおしゃべり会議」や第一国会とならせずに、国民公会とならせるには、反革命と協調するのでなく、反革命に無慈悲な打撃をくわえる勇気と能力とをもたなければならない。それには、現代の最も先進的な、最も断固たる、最も革命的な階級の手に権力がにぎられなければならない。それには、都市と農村の貧民（半プロレタリア）の全大衆が、この階級を支持しなければならない。それには、反革命的ブルジョアジー、すなわち、まず第一にカデットと軍隊の高級幹部層を無慈悲にかたづける必要がある。これらが、国民公会のための現実の、階級的な、物質的な条件である。これらの条件を正確に、明瞭に列挙してみるだけで、『ラボーチャヤ・ガゼータ』の空いばりがどんなに滑稽であるか、現在のロシアの憲法制定議会についてのエス・エルとメンシェヴィキの立憲的幻想がどんなに底なしに愚かしいものであるかが、わかるのである。

二

マルクスは、一八四八年の小ブルジョア的「社会民主主義者」を糾弾したさい、「人民」や人民の多数者一般についての彼らの口から出まかせの空文句を、とくに激しく非難した。[一三] 第二の意見を検討するさいには、つまり、「多数者」についての立憲的幻想を分析するさいには、まさにこのことを思いおこすのが適当である。

多数者が現実に国務を決定するためには、一定の現実的な条件が必要である。すなわち、多数決で問題を決定することを可能とするような、そして、この可能性の現実への転化を保障するような国家制度、国家権力が、しっかりと確立されていなければならない。これが一方の面である。他面では、この多数者は、その階級構成からみて、この多数者の内部の（またその外部の）いろいろな階級の相互関係からみて、国家という馬車を協力一致してりっぱに動かしてゆくことができるようなものでなければならない。人民の多数者の問題や、人民の多数者の意志にしたがって国政を運用する問題では、この二つの現実的条件が決定的な役割を演じることは、マルクス主義者ならだれにもはっきりしていることである。ところが、エス・エルやメンシェヴィキの政治的文献全体、彼らの政治的行動全体は、これらの条件の完全な無理解を暴露している。

一国の政治権力が、多数者と利害の一致する階級の手に

あるときには、現実に多数者の意志にしたがって国家を統治することが可能である。これに反して、政治権力が多数者と利害の一致しない階級の手にあるときには、多数決による統治はすべて、不可避的に、この多数者にたいする欺瞞か弾圧かに転化せざるをえないのである。どのブルジョア共和国にも、こうした実例は何百、何千となく見られる。ロシアでは、経済的にも政治的にもブルジョアジーが支配している。彼らの利益は、とくに帝国主義戦争の時期においては、多数者の利益ときわめて鋭くくいちがっている。だから、問題を形式的、法学的に提起せずに、唯物論的、マルクス主義的に提起するなら、問題の要点は、このくいちがいを暴露し、ブルジョアジーの大衆欺瞞とたたかうことにある。

これに反して、わがエス・エルとメンシェヴィキは、ブルジョアジーの大衆(「多数者」)欺瞞の道具であり、この欺瞞の媒介者、助手であるという、彼らの真の役割を、完全に証明し、実証した。エス・エルやメンシェヴィキの個個人がどんなに誠実であっても、彼らの基本的な政治的観念——プロレタリアートの独裁と社会主義の勝利とによらないでも、帝国主義戦争からぬけだし、「無併合・無賠償の講和」をかちとることができるという、また、この同じ条件がなくても、土地を人民に無償で引き渡すことができ、生産を人民の利益のために「統制」することができるという観念——、エス・エルとメンシェヴィキのこれらの基本的な政治的(もちろん、同時にまた経済的)観念は、客観的にみて、ほかならぬ小ブルジョアジーの自己欺瞞か、あるいは、同じことだが、ブルジョアジーの大衆(「多数者」)欺瞞である。

これが、小ブルジョア民主主義者、ルイ・ブラン型の社会主義者であるエス・エルとメンシェヴィキが多数者の問題を提起している仕方にたいして、われわれがくわえる第一の、そして主要な「訂正」である。もし多数者が、それ自体では形式的な要因にすぎず、実質的には、現実には、ブルジョアジーのこの多数者欺瞞を媒介している諸党の多数者であるとすれば、「多数者」ということに実際上どんな値うちがあるだろうか?

もちろん——ここでわれわれは第二の「訂正」に、前述した基本的条件の第二のものにたどりつく——、もちろん、この欺瞞を正しく理解することは、それの階級的根源と階級的意義を明らかにする場合にだけ、可能である。これは、個人的な欺瞞ではなく、「かたり」(あけすけに言えば)ではない。これは、階級の経済的地位から生まれる欺瞞的な観念である。小ブルジョアの経済的地位、その生活条件は、彼らが自分をあざむかざるをえないようにできあがってい

る。小ブルジョアは、心ならずも、不可避的に、ときにはブルジョアジーの側へ、ときにはプロレタリアートの側へ傾く。経済的にみて、彼らには独自の「方針」はありえないのである。

彼らの過去は彼らをブルジョアジーの側へ引きよせ、彼らの未来は彼らをプロレタリアートの側へ引きよせる。彼らの判断は彼らをプロレタリアートの側へ傾かせ、彼らの偏見（マルクスの有名な表現を用いれば）(一六)は彼らをブルジョアジーの側へ傾かせる。人民の多数者が、国家の統治において真の多数者になり、多数者の利益に真に奉仕し、多数者の権利を真に守る等々のためには、一定の階級的条件が必要である。その条件とは、小ブルジョアジーの多数者が、すくなくとも決定的な瞬間に、決定的な場所で、革命的プロレタリアートに味方することである。

これなしには、多数者は一つの擬制である。それは、しばらくは維持され、きらきら光り、ひらめき、ざわめき、賞賛をかちえるかもしれないが、けっきょく、破綻は絶対に避けられない。ついでにいえば、ロシア革命で一九一七年七月に明らかになったエス・エルとメンシェヴィキからなる多数派の破綻は、まさにそれであった。

さらに、革命が国家の「通常の」状態から区別される点は、まさに、国家生活のいろいろな係争問題が、武装闘争までをふくむ諸階級の闘争と大衆の闘争によって直接に解決されるということにある。大衆が自由であり、武装している以上、そうなるほかはないのである。この基本的事実から出てくる結論は、革命期には、「多数者の意志」を表明するだけでは足りない、ということである。そうではなく、決定的な瞬間に、決定的な場所で、強者とならなければならず、勝利しなければならない。中世ドイツの「農民戦争」から、すべての偉大な革命運動と革命時代を経て、一八四八年と一八七一年にいたり、さらに一九〇五年にいたるまで、組織と自覚と武装においてすぐれた少数者が、自分の意志を多数者に強制し、多数者を破った実例は、数かぎりなくある。

フリードリヒ・エンゲルスは、一六世紀の農民蜂起と一八四八年のドイツ革命とにある程度共通している経験の教訓を、とくに強調した。すなわち、被抑圧大衆の行動が細分されていたこと、彼らの小ブルジョア的(一七)な生活上の地位のため、集中が欠けていたことがそれである。この側面から問題をとりあげても、われわれの到達する結論は同じである。すなわち、小ブルジョア大衆の多数者だけでは、まだなにごとも決定しないし、決定することもできないということである。なぜなら、農村の幾百万の分散した小経営主が、組織性、行動の集中（これは、

勝利のために欠かしえないものである）、これらすべてを獲得することができるのは、彼らがブルジョアジーか、それともプロレタリアートか、そのどちらかに指導される場合だけだからである。

周知のように、社会生活の諸問題をけっきょく決定するものは、最も激しい、最も鋭い形態、すなわち内乱の形態をとった階級闘争である。ところで、この内乱で問題を決定するものは、およそどんな戦争の場合とも同じく、経済である。これもまた、原則上はだれひとり異論をとなえる者のない周知の事実である。エス・エルもメンシェヴィキも、「原則上は」このことを否定しておらず、また今日のロシアの資本主義的性格をよく承知していながら、真実を冷静に直視する勇気をもたないということは、きわめて特徴的な、意味深長なことである。彼らは真実を、すなわち、ロシアをふくむあらゆる資本主義国が基本的にブルジョアジー、小ブルジョアジー、プロレタリアートという三つの根本的な、主要な勢力に分かれていることを認めるのを恐れている。この第一の勢力と第三の勢力については、だれもが語っており、だれもが認めている。だが、第二の勢力——すなわち、数のうえではまさに多数者である勢力！——については、経済的見地からも、政治的見地からも、軍事的見地からも、冷静に評価しようとはしないのである。真実は耳に痛い、——エス・エルとメンシェヴィキが自分を認識するのを恐れているのは、けっきょくこれなのである。

三

われわれがこの小論を書きはじめたときには、『プラウダ』の閉鎖は、まだ国家権力から確認されていない「偶然の」事実にすぎなかった。いまでは、七月一六日以後は、『プラウダ』はこの権力によって正式に禁止されている。

この禁止を歴史的に、全体として、この措置を準備し実現した全過程について考察するときには、それは、ロシアの「憲法の本質」と立憲的幻想の危険性をすばらしくあざやかに浮かびあがらせる。

ミリュコーフと『レーチ』を先頭とするカデット党が、すでに四月からボリシェヴィキの弾圧を要求してきたことは、よく知られている。『レーチ』の「為政者的な」論説から、「逮捕せよ」（レーニンその他のボリシェヴィキを）というミリュコーフのたびたびのわめきたてにいたるまで、この種々さまざまな形でなされてきたこの弾圧の要求は、この革命におけるカデットの政治綱領の、最も主要な要求とはいわないまでも、主要な諸要求の一つとなってきた。

六月と七月にドイツのスパイだとか、ドイツから金をもらったとかいう、けがらわしい中傷的非難がアレクシンスキー一派によって考案され、でっちあげられるずっとまえから、また、「武装蜂起」や「暴動」をやろうとしているという、同じように中傷的な、万人周知の事実にも公表された文書にも矛盾する非難がくわえられるずっとまえから、――そういうことのあるずっとまえから、カデット党は、系統的に、一貫して、たえまなく、ボリシェヴィキの弾圧を要求していた。いまこの要求が実現されたとき、この要求の真の階級的および党派的起源を忘れたり、忘れたふりをしたりしている人々の誠実さまたは明敏さを、どう考えたらよいであろうか？　いまエス・エルとメンシェヴィキが、ボリシェヴィキの弾圧の「動機」は「偶然のもの」、またはこの場かぎりのもの、七月四日にはじめて生じたものだと信じているように見せかけるために、骨をおっているとすれば、これを乱暴きわまる偽造か、でなければ、政治では信じられないほどの愚鈍さとよばずにいられようか？　じっさい、争う余地のない歴史的真実を歪曲するにも、ほどがあるというものだ！

四月二〇―二一日の運動と七月三―四日の運動との性格が同様のものであったことは、この二つの運動をくらべてみれば、すぐにわかることである。――大衆の不満とあせりと憤激の自然発生的な爆発、右翼の挑発的な発砲、ネフスキー通りでの死者、「レーニン派がネフスキー通りで発砲した」という、ブルジョアジー、とくにカデットの中傷的なわめきたて、プロレタリア大衆とブルジョアジーとの闘争の極度の激しさと先鋭化、エス・エルとメンシェヴィキの小ブルジョア諸党の完全な呆然自失、その政策や一般に国家権力の問題での彼らのはなはだしい動揺――これらの客観的事実はみな、このどちらの運動にも見られる特徴である。また、六月九―一〇日と一八日も、違った形ではあるが、まったく同じ階級的な状況を示している。

事件の経過はこのうえなく明らかである。大衆の不満、あせり、憤激がますます増大し、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争が、とくに小ブルジョア大衆への影響力をめぐって、ますます激しくなった。そして、これに関連して、二つの巨大な歴史的事件が、反革命的カデットへのエス・エルとメンシェヴィキの従属を準備した。その事件とは次のものである。まず、五月六日の連立内閣。この内閣で、エス・エルとメンシェヴィキは、ブルジョアジーの召使となり、ますますブルジョアジーとの取引や協定に絡みこまれ、ブルジョアジーへの数かぎりない「奉仕」を果たし、必要欠くべからざる革命的方策の引き延ばしに同調するにいたった。第二は、戦線での攻勢。この攻勢は、帝

国主義戦争を再開し、帝国主義ブルジョアジーの影響力、比重、役割をはなはだしく強め、大衆のあいだに排外主義を大がかりにひろめ、最後に——last but not least（順番では最後だが、重要性で最後だというわけではない）、はじめには軍事権力を、ついで国家権力一般をも、反革命的な高級将校層の手に引き渡すことを、不可避的に意味していた。

これが、四月二〇—二一日から七月三—四日までのあいだに階級矛盾を深め、激化させ、また反革命的ブルジョアジーにたいして、すでに四月二〇—二一日に彼らの綱領および戦術、彼らの当面の目標、またこの目標にみちびくべき彼らの「まじりけのない」手段として完全に明瞭にその輪郭をあらわしたものを、七月四日以後に実現する可能性をあたえた歴史的諸事件の経過である。

七月四日事件について、ボリシェヴィキが自分で自分の敗北の「お膳立てをした」のだとか、ボリシェヴィキの「冒険主義」がこの敗北をまねいたのだとか、その他そういうふうの俗物的な泣き言（ついでにいえば、エリ・マルトフもこれを繰りかえしている）ほど、歴史的な見地からみて無内容で、理論的にくだらなく、実践的にこっけいなものは、ほかにない。参加「すべきではなかった」（大衆のきわめて正当な不満と憤激に「平和的かつ組織的な」性格をあたえようとする試みに!!）という、すべてこうした泣き言、こうした議論は、変節——それがボリシェヴィキの口から出た場合には——か、それとも小ブルジョアにもちまえの、いつものおびえと混乱の現われか、そのどちらかに帰着する。実際には、七月三—四日の運動は、春のあとに夏が来るのとまったく同じように、四月二〇—二一日およびそれ以後の運動から、不可避的に成長してきたものである。大衆はまだ最後の一人まで組織されてはいないとか、大衆の運動にはゆきすぎがありがちだ（まるで四月二〇—二一日にはゆきすぎがなかったとでもいうようだ！まるで真剣な大衆運動でゆきすぎをともなわないものが、歴史上にかつてあったかのようだ！）とかいう物知り学者ふうの口実で、傍観していたり、ピラト式に口をぬぐって知らぬ顔をしたりするのではなく、大衆とともにいること、彼らの正当な行動に最も平和的かつ組織的な性格をあたえるようにつとめることが、プロレタリア党の無条件の義務であった。

ところで、七月四日以後のボリシェヴィキの敗北は、まさに次の理由によって、それに先だつ諸事件の経過全体から歴史的に不可避的に生じてきたものであった。すなわち、小ブルジョア大衆とその指導者エス・エルおよびメンシェヴィキは、四月二〇—二一日にはまだ攻勢に縛られておらず、ブルジョアジーとの取引による「連立政府」に絡みこ

まれていなかったが、七月四日には彼らはすっかり縛られ、絡みこまれていたので、反革命的カデットと協力する（弾圧、中傷、死刑執行の仕事で）までに転落せざるをえなかったのである。エス・エルとメンシェヴィキが七月四日に最後的に反革命の汚水溜へ落ちこんだのは、彼らが五月と六月に連立内閣に参加し、攻勢政策を是認するという形で、この汚水溜へ向かってまっしぐらに滑走していったためである。

ちょっと見ると、われわれは本題から、すなわち『プラウダ』の禁止の問題からいくぶんそれてしまって、七月四日事件の歴史的評価の問題に移ってしまったように、思われるであろう。しかし、これはそう見えるだけのことである。なぜなら、前者は後者をぬきにしては理解できないからである。さきほど見たように、『プラウダ』の閉鎖や、ボリシェヴィキの逮捕や、彼らにたいするその他の迫害は、――問題の本質と、諸事件の結びつきとについてみれば――反革命派、とくにカデットの以前からの綱領を実現したものにほかならないのである。

いま、いったいだれが、どういうやり方でこの綱領を実行したかを調べてみると、たいへん教えられるところが多い。

事実を見よう。七月二日と三日に運動は高まっていった。大衆は、政府の無為や物価騰貴や荒廃や攻勢に憤激して、沸きかえっていた。カデット（の大臣たち）は「取らせて取る」手を打って辞職し[16]、エス・エルとメンシェヴィキに最後通牒をつきつけ、権力に縛りつけられていながら権力をもっていないこの人々に、敗戦と大衆の憤激のつぐないをさせた。

ボリシェヴィキは、二日と三日には行動を抑えようとした。これは、『デーロ・ナローダ』[17]の証人たちでさえ、七月二日に擲弾兵連隊に起こった事件を物語ったさいに、認めたことである。三日の夜には、運動は堰を切ってあふれでようとしたので、ボリシェヴィキは、運動に「平和的かつ組織的な」性格をあたえる必要を説いた檄を作成した。七月四日には右翼の挑発的な発砲のために、双方の側で銃撃の犠牲者の人数がふえた。なお、事件を調査し、日に二回通報を発行する、等々という執行委員会の約束が空約束に終わったことを、強調しなければならない！　エス・エルとメンシェヴィキはまったくなにもしなかった。双方の死者の完全な名簿さえ発表していない!!

四日の夜、ボリシェヴィキは行動の中止を呼びかけた檄を作成した。この檄は同じ夜に『プラウダ』に発表された。しかし、この同じ夜に、第一に、反革命的な部隊がピーテルに到着しはじめた（明らかに、エス・エルとメンシェヴ

ィキの、彼らのソヴェトの要請によって、あるいはその同意をえて。なお、この「デリケートな」点については、いまでは秘密にしておく必要がまったくなくなっているのに、このうえない、きわめて厳重な沈黙が守られている!)。第二に、この同じ夜に、明らかに軍司令官ポーロフツェフと参謀本部との委任をうけて、士官学校生徒部隊その他によるボリシェヴィキにたいするポグロムが始まった。四日から五日にかけて、『プラウダ』は破壊され、五日と六日には同紙の印刷所「トルード」が破壊され、『小型版プラウダ』を印刷所からもちだそうとしたという理由で、労働者ヴォイノフが白昼殺され、ボリシェヴィキの家宅捜索や逮捕がおこなわれ、革命的な連隊が武装を解除された。

すべてこれらのことを遂行しはじめたのは、だれなのか? 政府でも、ソヴェトでもなく、参謀本部を中心に集まって、「防諜」を名として行動し、軍隊の「憤怒をかきたてる」等々の目的で、ペレヴェルゼフやアレクシンスキーの捏造文書をばらまいている反革命的な軍事的徒党である。

そこには政府もいなければ、ソヴェトもいない。彼らは自分自身の運命を気づかって、ふるえているのである。やがてカザックがやってきて、自分らを粉砕するかもしれないという情報を、彼らはいくつも受け取っている。ボリシェヴィキ狩りをやっていた黒百人組とカデットの新聞は、ソヴェト狩りを始めようとしている。

エス・エルとメンシェヴィキは、自分の全政策に縛られて身動きができないようになった。縛られた人間として、彼らは、反革命的部隊をピーテルに呼びよせた(あるいは、その呼びよせを黙認した)。ところが、そのために彼らはいっそう強く縛られてしまった。彼らは、鼻持ちならない反革命の汚水溜のどん底までころげおちた。彼らは、ボリシェヴィキ「事件」調査のために任命した自分自身の委員会を、臆病にも解散しようとしている。彼らは、卑劣にも、ボリシェヴィキを反革命に引き渡している。彼らは、卑屈にも、死亡したカザックの葬儀のデモンストレーションに参加し、こうして反革命派の手に接吻している。

彼らは縛られた人間である。彼らは汚水溜のどん底にいる。

彼らはもがきまわっている。ケレンスキーに国政をゆだね、カデットを追ってカノッサに行き(一〇)、モスクワで「ゼムスキー・ソボール」(一一)すなわち反革命政府の「戴冠式」を挙行しようとしている。ケーレンスキーはポーロフツェフを解任する。

しかし、いくらもがいても、もがくだけのことで、事の本質はそれによってすこしも変わらない。ケーレンスキー

はポーロフツェフを解任するが、それと同時に、ポーロフツェフの方策、ポーロフツェフの政策に所定の形式をあたえて法律とし、『プラウダ』を禁止し、兵士にたいして死刑を制定し、戦線での集会を禁止し、アレクシンスキーの筋書にしたがってボリシェヴィキの逮捕（コロンタイをさえ！）をつづけている。

ロシアの「憲法の本質」は、驚くほど明瞭に現われている。戦線での攻勢と、銃後におけるカデットとの連立が、エス・エルとメンシェヴィキを反革命の汚水溜に転落させている。実際には、国家権力は、反革命派の手に、軍事的徒党の手に移ろうとしている。ケーレンスキーとツェレテーリ＝チェルノーフの政府とは、この反革命派の衝立にすぎない。彼らは、反革命派の方策、措置、政策を、あとから法律とすることをよぎなくされている。

ケーレンスキー、ツェレテーリ、チェルノーフと、カデットとの取引は、第十義的とはいわないまでも、第二義的な意義しかもたない。この取引でカデットが勝つにせよ、ツェレテーリやチェルノーフがなお引きつづき「一本立ち」でやってゆくにせよ、事の本質は変わらないであろう。エス・エルとメンシェヴィキが反革命の側に寝がえったということ（この寝がえりは、五月六日以来の彼らの全政策によってよぎなくされたものだ）が、基本的な、主要な、決定的な事実である。

党派の発展はその周期を終えた。エス・エルとメンシェヴィキは、二月二八日のケーレンスキーにたいする「信任」から、彼らを反革命に縛りつけた五月六日へ、さらに彼らが反革命のどん底まで落ちこんだ七月五日へと、一段また一段と、ころげおちていった。

新しい局面が始まろうとしている。反革命の勝利は、エス・エルとメンシェヴィキの諸党にたいする大衆の幻滅を呼びおこし、革命的プロレタリアートを支持する政策へ大衆が移行するための道をひらいている。

一九一七年七月二六日（八月八日）に執筆
一九一七年八月四日と五日に新聞『ラボーチー・イ・ソルダート』第一一号と第一二号に発表
全集、第五版、第三四巻、三三―四七ページ所収
邦訳全集、第二五巻、二二一―二二六ページ所収

ボナパルティズムの始まり

ケーレンスキー、ネクラーソフ、アウクセンチエフ一派の内閣が成立している現在において、マルクス主義者がおかしうる最も大きな、最も致命的な誤りは、言葉を実際ととりちがえ、欺瞞的な外見を本質と、あるいは一般になにか重要なものととりちがえることであろう。

そういう仕事は、メンシェヴィキやエス・エルにまかせておこう。彼らはすでにボナパルティスト、ケーレンスキーの周囲で、ほんとうに道化者の役割を演じている。じっさい、ケーレンスキーが、明らかにカデットの指示にしたがって、彼自身とネクラーソフ、テレシチェンコ、サーヴィンコフからなる一種の秘密の総裁政府(一二)をつくり、憲法制定議会や、総じて七月八日の声明(一三)については沈黙を守る一方、国民にあてた訴えのなかで諸階級の神聖な一致を宣言し、厚かましい最後通牒をつきつけたコルニーロフとだれ

にも知らされていない条件で協定を結び、不埒な、言語道断な逮捕の政策をつづけているときに、チェルノーフやアウクセンチエフやツェレテーリらが空文句にふけり、気どったポーズをとっているのは、道化ではなかろうか？

こういうときにチェルノーフがミリュコーフを仲裁裁判所に召喚しようとして懸命になったり、アウクセンチエフが偏狭な階級的立場は役にたたないと声明したり、ツァーリズムにたいしてカデット的第一国会が無力であった最悪の時代を思わせる、無内容きわまる文句にみちた、空虚きわまる決議案を、ツェレテーリやダンがソヴェト中央執行委員会にかけて通過させたりしているのは、道化ではなかろうか。

一九〇六年にカデットが、強まりつつあるツァーリズム反革命に当面して、ロシア最初の人民代表議会を身売りさせ、それをやくざなおしゃべり会議にしてしまったのと同じように、一九一七年にはエス・エルとメンシェヴィキが、強まりつつあるボナパルティズム反革命に当面して、ソヴェトを売り渡し、それをやくざなおしゃべり会議にしてしまったのである。

ケーレンスキー内閣は、疑いもなく、ボナパルティズムの第一歩の内閣である。

じっさい、ここにはボナパルティズムの基本的な歴史的

標徴がある。すなわち、軍閥（軍隊の最悪の分子）に依拠する国家権力が、多少とも均衡をたもっている二つの敵対的な階級や勢力のあいだを縫って、右に左にジグザグ・コースをとっていることが、それである。

ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争は、極度に激しくなっている。四月二〇―二一日にも、七月三―五日にも、わが国は内乱に紙一重のところまでいった。このような社会経済的条件は、ボナパルティズムの典型的な基盤ではないだろうか？　さらにこの条件に、それとまったく同様な、他のいくつかの条件がくわわっているではないか。ブルジョアジーは、ソヴェトをやっきになって攻撃しているが、まだそれを一挙に解散させるだけの力はない。他方、ソヴェトは、ツェレテーリ、チェルノーフ一派の諸君によって身売りさせられたため、もはやブルジョアジーに真剣な抵抗をするだけの力がない。

地主と農民もまた、内乱直前の状況のもとに生活している。農民は土地と自由を要求している。農民を引きとめることのできる者は――とにかく引きとめることができるとすれば――、最もあつかましい約束をすべての階級にふりまくようなまねがやれ、しかもただ一つの約束も守らないボナパルティズム的な政府だけである。

もしこれらに、攻勢の冒険がまねいた敗戦の要因を、そしてこの情勢のもとで祖国救済の空文句（この空文句のかげには、ブルジョアジーの帝国主義的綱領を救いたいという願いが隠されている）がとくに流行していることをつけくわえるなら、諸君は、ボナパルティズムの社会的＝政治的環境の最も完全な一覧図を見るであろう。

空文句にだまされないようにしよう。われわれがまだボナパルティズムの第一歩を見ているにすぎないということで、迷わされないようにしよう。自分で第一歩を踏みだす助けをしておきながら、第二歩を見てびっくり仰天する愚鈍な俗物のこっけいな状態におちいらないためには、まさに第一歩をしっかり見ぬくことが必要である。

たとえば、いまの内閣は、たぶん、これまでの各内閣よりも左翼的であろうとか（『イズヴェスチヤ』[四〇]を見よ）、ソヴェトの好意的な批判によって政府の誤りをただすことができるだろうとか、勝手な逮捕や新聞の禁止はまれな出来事であって、そういうことはもう繰りかえされないものと期待したいとか、ザルードヌィは誠実な人間で、民主的共和制のロシアでは正しい裁判が可能であり、だれでも裁判所へは出頭しなければならない、などという立憲的な幻想は、現在では愚鈍な俗物根性にほかならないであろう。

このような俗物的な立憲的幻想の愚鈍さはあまりにも明白なので、わざわざ反駁するまでもないであろう。

いや、ブルジョア的反革命とたたかうには、冷静さと、あるがままのものを見、そして語る能力とが必要である。

ロシアでは、ボナパルティズムは偶然のものではなく、かなりに発展した資本主義が存在し、革命的プロレタリアートが存在している小ブルジョア国における階級闘争の発展の自然の産物である。四月二〇―二一日、五月六日、六月九―一〇日、六月一八―一九日、七月三―五日というような歴史的諸段階は、ボナパルティズムの準備がどのようにすすめられてきたかを明瞭に示す道標である。民主主義的な環境はボナパルティズムとあいいれないと考えるのは、はなはだしい誤りであろう。まさにその反対に、ほかならぬ民主主義的な環境のなかでこそ(フランスの歴史は二度もこのことを確証した)、諸階級とその闘争との一定の相互関係のもとで、ボナパルティズムが成長してくるのである。

けれども、ボナパルティズムが不可避だと認めることは、ボナパルティズムの崩壊が不可避だということを忘れることとではけっしてない。

もしわれわれが、ロシアには反革命の一時的な勝利が認められるとしか言わないとすれば、それはお座なりの答でしかないであろう。

もしわれわれが、ボナパルティズムの成立を分析し、恐れることなく真実を直視し、ボナパルティズムの始まりは事実であると、労働者階級と全人民にむかって言うならば、われわれはそのことによって、ボナパルティズムを倒すための、広大な政治的規模でおこなわれ、深い階級的利益に立脚する、真剣でねばりづよい闘争の土台をおくことになろう。

一九一七年のロシアのボナパルティズムは、一七九九年と一八四九年のフランスにおけるボナパルティズムの始まりとは、いくつかの条件で区別される。たとえば、革命の根本的な任務が一つも解決されていないことが、それである。土地問題と民族問題の解決のための闘争は、いまようやく燃えあがりかけているところである。

ケーレンスキーと、このケーレンスキーを将棋の駒として使っている反革命的カデットとが、憲法制定議会をきめられた期日に招集するにせよ、その招集を延期するにせよ、どちらの場合にも、彼らは革命を深めざるをえない。そして、帝国主義戦争が長びいたために生みだされた破局は、以前にくらべてはるかに大きい力と速度でせまりつづけている。

ロシアのプロレタリアートの先進部隊は、大量の血を流さずに、六月と七月の諸事件を切りぬけることができた。プロレタリアートの党は、ボナパルティストの突然の(突

然らしく見える）迫害が、党の存在を中断させたり、党が人民に系統的に話しかけるのを中断させたりすることのけっしてできないような戦術や、組織形態または諸形態を選ぶ完全な可能性をもっている。

党は人民にむかってはっきりと、声高く、あますことなく真実を語るべきである。われわれがボナパルティズムの始まりに際会していること、ケーレンスキー、アウクセンチェフの一派の「新」政府は、反革命的カデットと権力をにぎる軍閥とをおおう衝立にすぎないこと、反革命を完全に一掃しないかぎり、人民は平和をえられず、農民は土地をえられず、労働者は八時間労働日をえられず、飢えた者はパンをえられないだろうということ、――これらのことを党は語るべきである。そうすれば、諸事件の発展は一歩ごとにわが党の正しさを確証するであろう。

人民の大多数がエス・エルとメンシェヴィキの小ブルジョア諸党に信頼をよせていた一時期を、ロシアは驚くべき速さでとおりすぎた。いまではすでに、勤労大衆の大多数が、この軽信性のきびしい報いをうけはじめている。

諸事件がきわめて急速にすすんでいること、勤労者の大多数が自分の運命を革命的プロレタリアートにゆだねざるをえない次の時期にわが国が近づきつつあることは、すべての徴候に現われている。革命的プロレタリアートは、権力を掌握して、社会主義革命を開始し、すべての先進国のプロレタリアを――どんな困難があろうと、またありうべき発展のジグザグがどんなであろうと――この革命に引きいれ、戦争にも、資本主義にも、打ち勝つであろう。

『ラボーチー・イ・ソルダート』第六号、一九一七年七月二九日
全集、第五版、第三四巻、四八―五二ページ所収
邦訳全集、第二五巻、二四一―二四五ページ所収

革命の教訓

およそ革命は、膨大な人民大衆の生活上の急転換を意味する。このような転換の機が熟していないかぎり、真の革命は起こりえない。どの個人の生活上のどんな転換も、その人に多くのことを教え、多くのことを経験させ、さとらせるのと同じように、革命もまた、短期間のあいだに、きわめて内容豊かな、貴重な教訓を人民全体にあたえるものである。

革命の時期には、幾百万幾千万の人々が、普通の、眠ったような生活の一年間に学ぶよりも多くの事柄を、毎週間に学ぶ。なぜなら、全人民の生活が急転換するさいには、人民のどの階級がどういう目標を追求しているか、どんな力をもっているか、またどんな手段で行動するかが、とくにはっきりとわかってくるからである。

自覚した労働者、兵士、農民はみな、ロシア革命の教訓をよく考えてみなければならない。わが革命の最初の局面が失敗に終わったことがはっきり見られる七月末の現在では、とくにそうである。

一

実際のところ、労働者・農民大衆は革命をおこなうさいなにをめざしていたのかを考えてみよう。彼らは革命になにを期待していたのか？　周知のように、彼らは、自由、平和、パン、土地を期待していたのである。

ところで、いまなにが見られるだろうか？

自由ではなくて、以前の専横が復活されはじめている。戦線の兵士には死刑が実施されている。農民は、自主的に地主の土地を奪ったかどで、裁判にかけられている。労働者新聞の印刷所はぶちこわしにあっている。労働者新聞は、裁判によらずに禁止されている。ボリシェヴィキは、しばしばなんの告発もうけずに、あるいは、明らかに誹謗の告発にもとづいて、逮捕されている。

ことによると、次のように反論する者がいるかもしれない。ボリシェヴィキの追及は自由を侵害することにはならない。なぜなら、特定の人間を特定の告発にもとづいて追及しているにすぎないから、と。だが、この反論は、見え

すいた明白なうそである。なぜなら、たとえその告発が立証され、裁判所に認められたとしても、個人の犯罪を理由に印刷所をぶちこわし、新聞を禁止することが、どうしてできるのか？　政府がボリシェヴィキ党全体、党の傾向そのもの、党の見解を、法律上犯罪的であると認めたのなら、話は別である。だが、周知のように、自由ロシアの政府は、そんなふうのことをやるわけにはいかなかったし、またやってはいないのである。

ボリシェヴィキにたいする告発が誹謗であることを、なによりも第一に暴露しているのは、まだただひとりのボリシェヴィキにたいしても、ただひとつの告発もでっちあげられていないころに、ボリシェヴィキが戦争に反対し、地主と資本家に反対してたたかっているという理由で、地主と資本家の新聞がこれを激しく罵倒し、ボリシェヴィキを逮捕し追及するよう公然と要求していたことである。

人民は平和を望んでいる。ところが、自由ロシアの革命政府は、まえのツァーリ・ニコライ二世が、ロシアの資本家に他民族を略奪させるためにイギリスやフランスの資本家と結んだあの秘密条約にもとづいて、略奪戦争を再開したのである。これらの秘密条約はいまなお公表されずにいる。自由ロシアの政府は、言いのがれでごまかし、いまなおすべての国の人民に公正な講和を提議しないでいる。

パンがない。飢えはふたたびせまっている。だれでも見ているように、資本家や金持は、軍需品の納入で恥しらずに国家をあざむき（いま戦争は人民にとって、日に五〇〇〇万ルーブリについている）、高物価によって未曽有の利益をおさめているが、労働者に生産物の生産と分配を真剣に統制させるためには、まったくなにひとつなされていない。資本家はますます厚かましくなり、労働者を街頭に投げだしている——しかも、人民が物資不足に苦しんでいるそのときに。

農民の圧倒的多数は、相つぐ大会で、地主の土地所有は不正であり強奪であることを宣言する、と声高くはっきり言明した。ところが、革命的で民主主義的だと自称する政府が、何ヵ月ものあいだ農民を愚弄し、約束と引き延ばしとでだましつづけている。大臣チェルノーフが土地売買の禁止にかんする法律を出すのを、資本家は何ヵ月も許さなかった。そして、ついにこの法律が公布されると、資本家は、チェルノーフにたいするけがらわしい中傷のけしかけを始め、いまなおそれをつづけている。地主擁護の点で、政府は、「自主的に」土地を奪ったかどで農民を裁判にかけようとするほど厚かましくなった。

彼らは、憲法制定議会まで待つように説きつけて、農民をなぶりものにしている。ところが、資本家は、この議会

の招集をたえず延ばしている。ボリシェヴィキの要求に押されて、その招集の日取りが九月三〇日ときめられた今日でさえ、資本家は、これは短かすぎて「実行不可能な」期限だとおおっぴらに叫びたてて、憲法制定議会の招集を延ばすように要求している。……資本家と地主の党である「カデット」党、別名「人民の自由」党の最も有力な党員たち、たとえばパニナは、憲法制定議会の招集を戦争が終わるまで延ばすよう、露骨に説いている。

土地は、憲法制定議会まで待て。憲法制定議会は、戦争の終わるまで待て。戦争の終結は、完全に勝つまで待て。こういうことになる。政府内で多数を占めている資本家と地主は、農民を頭からばかにしているのだ。

二

しかし、ツァーリの権力が倒された自由な国で、いったいどうしてこんなことが起こったのか？

自由でない国では、ツァーリや、ひとにぎりの地主、資本家、だれに選挙されたのでもない官吏が、人民を統治している。

自由な国では、人民を統治するのは、人民自身がそのために選んだ人々だけである。選挙のさい、人民はいくつかの政党に分かれる。ふつう、住民の各階級は、それぞれ別個の政党をつくる。たとえば、地主、資本家、農民、労働者は、それぞれ別個の政党をつくる。だから、自由な国では、人民にたいする統治は、諸政党の公然たる闘争と政党相互の自由な協定とをつうじておこなわれる。

一九一七年二月二七日にツァーリの権力が倒されてからおよそ四ヵ月のあいだ、ロシアは自由な国として統治されてきた。すなわち、自由に結成された諸政党の公然たる闘争とこれらの政党のあいだの自由な協定とをつうじて統治されてきた。したがって、ロシア革命の発展を理解するためには、どれが主要な政党であったか、それらの政党はどの階級の利害を擁護していたか、それらすべての政党の相互関係はどうであったかを研究することが、なによりも必要である。

三

ツァーリの権力が倒されたのち、国家権力は第一次臨時政府の手に移った。これは、ブルジョアジーすなわち資本家の代表者からなっていて、地主も資本家に同調した。主要な資本家政党である「カデット」党が、ブルジョアジーの支配的な政府党として第一位に立っていた。

ツァーリの軍隊とたたかい、自由のために血を流したのは、もちろん資本家ではなくて、労働者と農民、水兵と兵士であったのに、権力がこの党の手にはいったのは、偶然ではない。権力が資本家の党の手にはいったのは、この階級が富と組織と知識の力をもっていたからである。ロシアで、一九〇五年以後に、とくに戦時に、自己を組織するうえでだれよりも大きな成功をおさめたのは、資本家とこれに同調した地主の階級であった。

カデット党は、一九〇五年にも、一九〇五年から一九一七年までの時期にも、つねに君主主義の党であった。人民がツァーリの圧政に勝利したのち、この党は、共和主義の党と自称した。人民が君主制に勝利すると、資本家の党は、資本家の特権と人民にたいする彼らの全能の権力とを守るためでさえあれば、いつでも共和主義の党になるのに同意したことは、歴史の経験が示している。

口さきでは、カデット党は「人民の自由」に賛成している。実際には、この党は資本家を支持している。そして、地主、君主主義者、黒百人組はみな、たちまちこの党の味方になった。その証拠は新聞と選挙である。革命後には、すべてのブルジョア新聞と黒百人組新聞がカデットに声を合わせた。君主主義政党はみな、公然と進出する勇気がなくて、たとえばペトログラードでは、選挙のさいカデット党を支持した。

カデットは、政権を獲得してからは、ツァーリ・ニコライ二世がイギリスやフランスの資本家と秘密の略奪条約を結んで始めた侵略的略奪戦争をつづけることに全力をそそいだ。これらの条約によれば、勝利のあかつきには、コンスタンティノープル、ガリチア、アルメニア、等々を奪取するという約束が、ロシアの資本家にあたえられていたのである。他方、人民にたいしては、カデットの政府は、空疎な言いのがれや約束でごまかし、労働者と農民に欠くことのできない重要問題の解決は、すべて憲法制定議会まで延ばしながら、この議会の招集の日取りさえきめなかった。

人民は、自由を利用して自主的に自己を組織しはじめた。ロシアの人口の圧倒的多数を占めている労働者と農民の主要な組織は、労働者・農民・兵士代表ソヴェトであった。これらのソヴェトは、はやくも二月革命のときにつくられはじめ、それから数週間後には、ロシアの大多数の大都市と多くの郡とで、労働者階級と農民の自覚した先進分子はすべてソヴェトに統合されていた。

ソヴェトは、完全に自由に選挙された。ソヴェトは、人民大衆、労働者と農民の真の組織であった。ソヴェトは、人民の圧倒的多数者の真の組織であった。軍服をまとった労働者と農民は武装していた。

いうまでもなく、ソヴェトは全国家権力をその手中ににぎることができたし、またにぎるべきであった。憲法制定議会が招集されるまでは、国内にソヴェト以外のどんな権力もあってはならなかった。そうであってこそはじめて、わが革命は、真の人民革命に、真の民主主義革命になったであろう。そうであってこそはじめて、真に平和を求め、真に略奪戦争に利益をもたない勤労大衆は、略奪戦争を終わらせ平和をもたらす政策を、断固として、確実に実行しはじめることができたであろう。そうであってこそはじめて、労働者と農民は、「戦争で」とほうもない金を儲け、国を荒廃と飢えにおとしいれた資本家を、抑制することができたであろう。だが、ソヴェト内で、全国家権力をソヴェトの手に移すことを要求した革命的労働者の党、ボリシェヴィキ派社会民主主義者の党に味方したのは、代議員の一小部分であった。他方、ソヴェトの代議員の大部分は、権力をソヴェトに引き渡すことに反対していたメンシェヴィキ派社会民主主義者の党とエス・エル党とに味方していた。これらの党は、ブルジョアジーの政府を取りのぞき、それをソヴェト政府に代えるかわりに、ブルジョアジーの政府を支持し、この政府と協定し、それと共同の政府をつくることを主張した。人民の多数者の信頼をえたエス・エルとメンシェヴィキの諸党によって遂行されたこのブルジョアジーとの協定政策が、革命の開始後まる五ヵ月間の革命の発展の歩み全体のおもな内容をなしている。

四

われわれは、まずはじめに、エス・エルおよびメンシェヴィキとブルジョアジーとの協調がどうすすんできたかを見、ついで人民の多数者が彼らを信頼した理由を説明してみよう。

五

メンシェヴィキおよびエス・エルと資本家との協調は、ロシア革命のすべての時期をつうじて、いろいろのかたちでおこなわれてきた。

人民が勝利をえて、ツァーリの権力が倒されたばかりの一九一七年二月末、資本家の臨時政府は、ケーレンスキーを「社会主義者」としてその閣員にくわえた。実際には、ケーレンスキーは、かつて社会主義者だったことはなく、トルドヴィキであったにすぎず、「社会革命党員」の一人にかぞえられるようになったのは、ようやく一九一七年三月以後、そうしてももう危険がなく、損でもないようにな

ってからのことである。資本家の臨時政府は、すぐさまペトログラード・ソヴェトの副議長としてのケーレンスキーをつうじて、ソヴェトを自分に結びつけ、手なずけようとつとめた。ソヴェトは、つまりソヴェト内で優勢を占めていたエス・エルとメンシェヴィキは、資本家の臨時政府が成立するとすぐ、政府がその公約を果たす「かぎり」、「これを支持する」ことに同意して、手なずけられてしまったのである。

ソヴェトは、自分が臨時政府の行動を点検し、監督しているものと考えていた。ソヴェトの指導者たちは、いわゆる「連絡委員会」(一五)、すなわち政府との連絡、接触のための委員会をつくった。エス・エルとメンシェヴィキのソヴェト指導者たちは、この連絡委員会で資本家政府とたえず交渉をおこなってきたが、彼らは、実をいえば、無任所大臣または非公式の大臣の地位にあったわけである。

三月いっぱいと四月のあらかた全部とをつうじて、このような状態がつづいた。資本家は、時をかせごうとして、引き延ばしと言いのがれにうったえた。このあいだ、資本家政府は、革命を発展させるためのいくぶんでも真剣な措置は、ただのひとつもとらなかった。政府は、自分の直接当面の任務である憲法制定議会の招集のためにさえ、まったくなにひとつせず、この問題を地方に移牒することもせず、問題の下準備のための中央の調査委員会をつくることさえやらなかった。政府が心をつかったのは、ただひとつのことだけであった。すなわち、ツァーリがイギリスやフランスの資本家と結んだ略奪的国際条約をこっそり更新し、できるだけ用心ぶかく、気づかれないように革命にブレーキをかけ、どんなことでも約束するが、なにも実行しないということである。エス・エルとメンシェヴィキは、「連絡委員会」のなかで、大げさな文句や口約束や「空手形」で釣られる鈍物の役割を演じた。あの有名な寓話に出てくるカラスのように、エス・エルとメンシェヴィキは、おべっかに乗せられてしまい、資本家が、自分たちはソヴェトを尊重しているので、ソヴェトをさしおいてはどんな措置もとらない、とうけあうのを、満足げに聞いていた。

実際には、時は過ぎていったが、資本家政府は革命のためにまったくなにひとつしなかった。それどころか、革命に対抗して、政府はこの期間に、秘密の略奪条約を更新することに、より正確にいえば、これらの条約を確認し、イギリス＝フランス帝国主義の外交官たちとのやはり秘密な補足的交渉によってそれに「活を入れる」ことに、成功した。革命に対抗して、政府はこの期間に、作戦軍の将軍や将校の反革命的組織（すくなくともその相互接近）の基礎をすえることに成功した。革命に対抗して、政府は、工

業家、工場主たちの組織化を始めることに成功した。この連中は、労働者の圧力でよぎなく譲歩に譲歩をかさねてきたのであるが、それと同時に、生産のサボタージュ（妨害）、生産停止の準備を始めようとしており、その好機をうかがっていたのである。

しかし、ソヴェトにおける先進的な労働者と農民の組織化も着々とすすんだ。被抑圧諸階級のあいだのすぐれた人人は、政府とペトログラード・ソヴェトとの協定にもかかわらず、ケレンスキーの美辞麗句にもかかわらず、「連絡委員会」にもかかわらず、この政府が依然として人民の敵、革命の敵であることを、さとった。大衆は、資本家の抵抗を打ち砕かないなら、平和の大業、自由の大業、革命の大業はかならずかならず破れることを、さとった。大衆のなかにあせりと怒りが高まっていった。

六

このあせりと怒りは、四月二〇―二一日に爆発した。運動は、だれが準備したということもなく、自然発生的に勃発した。運動は、はっきりと政府に向けられていて、ある連隊などは、武装して行動をおこし、大臣たちを逮捕するためにマリーヤ宮殿に押しかけたほどであった。政府がもちこたえられないことは、だれの目にも明らかになった。ソヴェトが権力をにぎろうと思えば、だれからもなんの抵抗もうけずに、にぎれたはずである（またにぎるべきであった）。エス・エルとメンシェヴィキは、そうはしないで、倒れかけている資本家政府を支持し、この政府との協調にいっそう深くはまりこみ、革命を滅ぼすいっそう致命的な措置をとった。

革命は、普通の平和な時には見られないほど速やかに、徹底的に、すべての階級を教育する。最もよく組織されており、階級闘争と政治にかけて最も経験をつんでいる資本家は、他の者よりも速やかに学んだ。彼らは、政府の地位が支えきれなくなったことを見てとって、他の国々の資本家たちが、労働者を愚弄し分裂させ無力にするために、一八四八年以来何十年ものあいだ実行してきた手口にうったえた。この手口とは、いわゆる「連立」内閣、すなわちブルジョアジーと社会主義の変節者とからなる、共同の連合内閣である。

自由と民主主義が、革命的労働運動とならんで、どこよりも長いあいだ存在している国々、すなわちイギリスとフランスでは、資本家は、たびたびこの手口を用いて、大きな成功をおさめた。「社会主義的」指導者たちは、ブルジョアジーの内閣にはいると、かならず資本家のあやつり人

形、ロボット、衝立となり、労働者をあざむく道具となった。ロシアの「民主主義的、共和主義的な」資本家は、ほかならぬこの手口を用いた。エス・エルとメンシェヴィキはたちまち愚弄されてしまい、五月六日には、チェルノーフ、ツェレテーリ一派の参加する「連立」内閣が事実となった。

エス・エルとメンシェヴィキの諸党の鈍物たちは大喜びをし、自分たちの指導者がかちえた大臣の栄誉の光にうっとりと浴していた。資本家は、「ソヴェトの指導者」という形で、人民を抑えるための助手を獲得し、彼らから「戦線での攻勢行動」すなわち一時休止状態にあった帝国主義的略奪戦争の再開を支持するという約束をとりつけて、満足してもみ手をした。資本家は、この指導者どもがうぬぼれてはいるがまったく無力であることを知っており、またブルジョアジーの側からあたえた約束――生産を統制し、それどころか組織するという約束、また平和政策、等々についての約束――がけっして実行されないことを、知っていたのである。

事実そのとおりになった。五月六日から六月九日または一八日にいたる革命の発展の第二の局面は、エス・エルとメンシェヴィキを愚弄するのはたやすいことだと考えていた資本家たちの思惑の正しさを、完全に裏書きした。

ペシェホーノフやスコーベレフが、資本家から利潤の一〇〇%を取りあげるとか、資本家の「抵抗は打ち砕かれた」などという大げさな空文句で自分をあざむき、人民をもあざむいているあいだに、資本家はひきつづき地歩をかためていった。この期間に、資本家を抑制するためには、事実上なにひとつ、まったくなにひとつなされなかった。社会主義の変節者の大臣たちは、被抑圧階級の注意をそらすためのおしゃべり機械であることがわかった一方、国家統治の全機関は、実際には官僚（官吏）とブルジョアジーの手に残されていた。悪名高い工業次官パリチンスキーは、この機関の典型的な代表者であって、資本家に不利な方策は、なににようらず妨害した。大臣はおしゃべりをし――万事は昔のままであった。

大臣ツェレテーリは、ブルジョアジーによって革命との闘争のためにとくに利用された。クロンシタットの革命家たちが、任命された司政委員をあえて更迭するという大それたことをやってのけたとき、このツェレテーリがクロンシタットを「静める」ために派遣された。ブルジョアジーは、その新聞紙上で、クロンシタットにたいして信じられないほど騒々しい、悪意ある、猛烈な、うそと中傷と悪扇動のカンパニアを始めて、クロンシタットは「ロシアからの分離」を望んでいると言って非難し、手をかえ品をかえ

でこの種のたわごとを繰りかえし、小ブルジョアジーや俗物をおどしつけようとした。愚鈍な、おびえた俗物の最も典型的な代表者であるツェレテーリは、だれよりも「りちぎに」ブルジョアのけしかけの罠にかかって、クロンシタットを「粉砕し、鎮定する」点でだれよりも熱心だったが、自分が反革命的ブルジョアジーの従僕の役割をつとめていることがわからなかった。こうして彼は、クロンシタットの司政委員は、政府があっさり任命するのではなく、現地で選挙して政府がそれを承認することにするという、革命的クロンシタットとの「協定」[166]を押しとおす道具になった。社会主義を捨ててブルジョアジーの側に寝がえった大臣たちは、こういうやくざな妥協に時間をつぶしていたのである。

ブルジョア大臣が自分で出むいて政府を弁護するわけにいかないようなところ、すなわち革命的労働者の前や、ソヴェトへは、「社会主義的」大臣スコーベレフ、ツェレテーリ、チェルノーフなどが出むいていって（もっと正確にいえば、ブルジョアジーから派遣されて）、ブルジョアジーの仕事を誠実に実行し、大骨をおって内閣を弁護し、資本家の潔白のあかしを立ててやり、約束、約束、また約束を繰りかえすことにより、待て、待て、ちょっと待て、と忠告することによって、人民を愚弄してきた。

大臣チェルノーフは、とくに彼のブルジョア出身の同僚たちとの取引を仕事としていた。じつに七月にいたるまで、七月三—四日の運動のあとで新しい「権力の危機」が始まるまで、カデットが内閣を脱退するまで、そのあいだずっと大臣チェルノーフは、自分のブルジョア的な同僚たちを「説得し」、せめて土地の売買取引の禁止だけにでも同意するよう彼らに忠告するという、有益な、興味ぶかい、たいへん人民のためになる仕事に従事していた。この土地売買の禁止は、ピーテルの農民代表全ロシア大会（ソヴェト）でいともおごそかに農民に約束されたことである。だが、約束はあくまで約束にとどまった。チェルノーフは、けっきょく、五月にも六月にもこの約束を果たすことができず、カデットの内閣脱退と時を同じくして、七月三—四日の自然発生的爆発の革命的な波が高まって、この方策が実行できるようになるまで、ついに果たすことができなかったのである。しかし、実行されたときでさえ、この方策は、それ一つきりにとどまって、地主に反対し土地の獲得をめざす農民のたたかいを大幅に促進する力はなかった。

そのあいだに、戦線では、帝国主義的略奪戦争を再開するという反革命的、帝国主義的な任務、人民に憎まれていたグチコーフが果たすことのできなかったその任務を、社会革命党のほやほやの党員である「革命的民主主義者」ケ

ーレンスキーが、首尾よく、みごとに果たした。ケーレンスキーは、自分自身の雄弁に酔い、将棋の駒として彼をあやつってきた帝国主義者からほめちぎられ、お追従を言われ、あがめられたが、それもみな、彼が誠心誠意資本家の御用をつとめ、ツァーリ・ニコライ二世がイギリスやフランスの資本家と結んだ条約を履行するための戦争、コンスタンティノープルとリヴォーフ、エルズルムとトラブゾンをロシアの資本家が手にいれるための戦争の再開に同意するよう、「革命的部隊」に説きつけたからである。

五月六日から六月九日にいたるロシア革命の第二局面は、こうして過ぎさった。反革命的ブルジョアジーは、「社会主義的」大臣たちにかばわれ、守られながら、力を強め、地歩をかためて、外敵にたいしても、内敵すなわち革命的労働者にたいしても、攻勢の準備をととのえたのである。

七

六月九日、革命的労働者の党、ボリシェヴィキ党は、抑えようのない勢いで高まってきた大衆の不満と憤激を組織的に表明させるために、ピーテルでデモンストレーションを準備していた。ブルジョアジーとの協定に絡みこまれ、帝国主義的な攻勢政策に縛られたエス・エルとメンシェヴィキの指導者たちは、大衆のあいだで自分たちの影響力が失われたと感じて、恐怖におそわれた。デモンストレーションの非を鳴らす叫びがいっせいにあげられた。こんどはそれは、反革命的カデットと、エス・エルおよびメンシェヴィキとがいっしょになった叫びであった。彼らの指導のもとで、そして彼らのとった資本家との協調政策の結果として、小ブルジョア大衆が反革命的ブルジョアジーとの同盟へ転換したことが、すっかり明確になり、驚くほどはっきり現われた。ここに、六月九日の危機の歴史的意義があり、その階級的意味がある。

ボリシェヴィキは、この時点でカデット、エス・エル、メンシェヴィキの連合勢力を相手として、労働者を向うみずなたたかいに引きいれる気はまったくなかったので、デモンストレーションをとりやめた。しかし、エス・エルとメンシェヴィキは、いくらかでも大衆の信頼の名ごりをとりとめようとして、六月一八日にいっせいのデモンストレーションをおこなうことをきめざるをえなかった。ブルジョアジーは、これが小ブルジョア民主主義派のプロレタリアートの側への動揺であることを正しく見てとって、われを忘れんばかりに激怒し、戦線における攻勢によって民主主義派の行動を麻痺させようと決心した。

じじつ、六月一八日には、革命的プロレタリアートのス

ローガン、ボリシェヴィズムのスローガンが、ペテルブルグの大衆のあいだで目ざましい大勝利をおさめ、そして六月一九日には、ブルジョアジーとボナパルティスト*・ケーレンスキーが、ほかならぬ六月一八日に戦線で攻勢が開始されたことを、おごそかに発表したのである。

* ボナパルティズム（フランスの二人の皇帝、ボナパルトの名から出た言葉）というのは、資本家の党と労働者の党のあいだのきわめて激しい闘争を利用して、超党派をよそおうことにつとめるような政府のことである。この種の政府は、実際には資本家の御用を勤めながら、口約束とわずかな施しものとで労働者をだれよりもひどくあざむくのである。

攻勢は、事実上、勤労者の圧倒的多数の意志にそむいて、資本家の利益のために、略奪戦争を再開することを意味していた。だから、攻勢にともなって、不可避的に、一方では排外主義がはなはだしく強まり、軍事権力が（したがってまた国家権力も）ボナパルティストの軍事的徒党に移り、他方では、大衆にたいする暴力、国際主義者の追及、扇動の自由の廃止、戦争反対者の逮捕と射殺が始まった。

五月六日はエス・エルとメンシェヴィキをブルジョアジーの凱旋車にロープで結びつけたが、六月一九日は彼らを資本家の召使として鉄鎖でつないだのであった。

八

略奪戦争が再開された結果、大衆の怒りがますます速くかつ強力に高まったのは、当然であった。つづいて、七月三―四日には、ボリシェヴィキが抑えようとつとめたにもかかわらず、大衆の憤激が爆発した。いうまでもなく、ボリシェヴィキは、この爆発にできるだけ組織的な形態をあたえるように努力しなければならなかった。

エス・エルとメンシェヴィキは、ブルジョアジーの奴隷として、その主人の鎖につながれているので、どんなことにでも同意した。反動的な部隊をピーテルに呼びよせることにも、死刑の復活にも、労働者と革命的部隊の武装解除にも、裁判によらずに逮捕し、追及し、新聞を禁止することにも、同意したのである。ブルジョアジーが政府内で完全にはにぎることができず、またソヴェトがにぎろうとしなかった権力は、軍閥、ボナパルティストの手中にころがりこんだ。そして、彼らは、もちろん、カデットと黒百人組、地主と資本家から完全に支持されていた。

一段、また一段。ひとたびブルジョアジーとの協調政策の斜面に足を踏みだしたがさいご、エス・エルとメンシェヴィキは、とめどもなくころげおち、どん底まで落ちこん

でしまった。二月二八日には、彼らは、ペトログラード・ソヴェトで、ブルジョア政府を条件づきで支持すると約束した。五月六日には、この政府の崩壊を救い、また攻勢に同意することによって、あまんじて政府の召使となり擁護者となった。六月九日には、反革命的ブルジョアジーと結んで、革命的プロレタリアートにたいする猛烈な敵意とうそと中傷のカンパニアにくわわった。六月一九日には、始まった略奪戦争の再開に承認をあたえた。七月三日には、反動的部隊を呼びよせることに同意したが、これは、権力をボナパルティストに最後的に引き渡す手はじめであった。一段、また一段である。

エス・エルとメンシェヴィキの諸党のこのような恥さらしな大づめは、偶然ではなく、ヨーロッパの経験が何度も確証しているように、小経営主、小ブルジョアジーの経済的地位の結果である。

九

小経営主が「出世」をし、本式の経営者になり、「しっかりした」経営者の地位、ブルジョアジーの地位になりあがるために、どんなにあくせくと苦労し、骨をおるかは、もちろん、だれでも見て知っている。資本主義が支配するかぎり、小経営主にとっては、次のもの以外に別の活路はない。自分も資本家の地位にのぼるか（だが、これは、せいぜい小経営主の百人に一人がなれるだけである）、それとも、零落した小経営主、半プロレタリアの地位に落ち、やがてはプロレタリアの地位に落ちるか、どちらかである。政治でも同じことである。小ブルジョア民主主義派、とりわけその指導者たちは、ブルジョアジーのあとを追う。小ブルジョア民主主義派の指導者たちは、大資本家と協定することが可能であると約束したりうけあったりして、彼らの大衆を慰める。――うまくいった場合には、彼らは、ほんの短いあいだ、資本家から、勤労大衆の少数の上層分子のためにささやかな譲歩を獲得するが、すべて決定的な事柄、すべて重要な事柄では、小ブルジョア民主主義派は、いつでもブルジョアジーの尻にくっついて、その無力な付属物、金融王の手ににぎられた意のままになる道具になってきたのである。イギリスとフランスの経験は、何度もこのことを確証した。

諸事件が、とりわけ帝国主義戦争とこの戦争によって引きおこされた深刻きわまる危機に影響されて、異常な速さで発展してきたロシア革命の経験、一九一七年二月から七月にいたるこの経験は、小ブルジョアジーの地位の不安定性についての古くからのマルクス主義の真理を、すばらし

くあざやかに、はっきりと確証した。

ロシア革命の教訓は次のとおりである。勤労大衆が戦争、飢え、地主と資本家への隷属という鉄の万力からぬけだす道は、エス・エルとメンシェヴィキの諸党と完全に手を切り、彼らの裏切的役割をはっきりと認識し、ブルジョアジーとの協調はどんなものでもことごとくしりぞけ、断固として革命的労働者の味方となるほかにはない。ひとり革命的労働者だけが、貧農に支持されるならば、資本家の抵抗を打ち砕き、土地の無償獲得へ、完全な自由へ、飢えの克服へ、戦争の克服へ、公正で永続的な平和へ、人民をみちびくことができる。

あとがき

この論文は、本文を見ればわかるように、七月末に書いたものである。

八月中の革命の歴史は、この論文に述べたことを十分に確証した。ついで八月末のコルニーロフの反乱[二七]は、反革命的将軍と同盟したカデットがソヴェトの解散と君主制の復活につとめていることを、はっきりと全人民に示すことによって、革命の新しい転換を生みだした。革命のこの新しい転換がどれほど力づよいものであるか、それがブルジョアジーとの有害な協調政策をやめさせることに成功するかどうか、——それは近い将来が示すであろう。……

エヌ・レーニン

一九一七年九月六日

本論は一九一七年七月末に、あとがきは同年九月六（一九）日に執筆

本論は一九一七年九月一二日と一三日（八月三〇日と三一日）に新聞『ラボーチー』第八号と第九号に発表

署名——第八号ではエヌ——コフ、第九号ではエヌ・レーニン

あとがきは、一九一七年に小冊子、エヌ・レーニン著『革命の教訓』、「プリボイ」出版所、に発表

全集、第五版、第三四巻、五三—六九ページ所収

邦訳全集、第二五巻、二四六—二六一ページ所収

妥協について

政治上で妥協とは、他の政党と協定するために、若干の要求を譲ること、自分の要求の一部を捨てることである。ボリシェヴィキを中傷する出版物によって維持されている、ボリシェヴィキについての俗物の通念は、ボリシェヴィキはどんな相手とのどんな妥協にもけっして応じない、というのである。

こういう見方は、革命的プロレタリアートの党としてのわれわれにとって悪い気はしない。というのは、これは、社会主義と革命との基本原則をわれわれが忠実に守っていることを、敵でさえ認めざるをえないということを証明しているからである。だが、それでもやはり、われわれは真実を語らなければならない、こういう見方は事実に一致しない、と。エンゲルスがブランキ派コミューン戦士の宣言を批判したなかで（一八七三年）、「絶対に妥協しない！」という彼らの声明をあざ笑ったのは、正しかった。エンゲルスは言った。これは空文句である。なぜなら、たたかう党は、しばしば情勢によって不可避的に妥協をやむなくされるからである。「分割払」を頭から拒否するのは、愚かなことである（一八）、と。真に革命的な党の任務は、あらゆる妥協を拒否するというような不可能事を宣言することではなく、すべての妥協をつうじて——それらの妥協が避けられないかぎり——、自分の原則、自分の階級、自分の革命的任務、革命を準備し人民大衆を革命の勝利にむかって訓練する自分の事業にたいする忠実さをつらぬく能力をもつことである。

例をあげよう。第三および第四国会に参加することに同意したのは、一つの妥協であり、革命的要求を一時捨てたものであった。しかし、それは、絶対にやむをえない妥協であった。なぜなら、力関係からして、われわれが大衆的革命闘争をおこなうことは、しばらくのあいだ、まったく不可能であったが、そういう闘争を長期にわたって準備するには、このような「家畜小屋」の内部からも活動する能力をもたなければならなかったからである。ボリシェヴィキが、党として、このように問題を立てたのが完全に正しかったことは、歴史が証明した。

いまは、やむなくされた妥協ではなくて、自発的な妥協

の問題が、日程にのぼっている。

わが党は、他のあらゆる政党と同じように、政治的支配権を自分の手におさめようとつとめている。われわれの目標は、革命的プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）である。この要求がほかならぬ現在の革命の利益からみて正しいものであり、避けられないものであることは、革命の半年間によって、非常にあざやかに、力づよく、感銘ふかく確証された。なぜなら、人民は、これ以外のやり方では、民主主義的な講和も、農民への土地の引渡しも、完全な自由（完全に民主主義的な共和制）も、獲得することができないからである。わが国の革命の半年間の事件の経過、諸階級と諸政党の闘争、四月二〇—二一日、六月九—一〇日、一八—一九日、七月三—五日、八月二七—三一日の危機の発展は、このことを証明し、実証した。

いまロシア革命にはきわめて急激な、きわめて独特な転換が起こっており、そこでわれわれは、党として、自発的な妥協を申し入れることができるのである。——もっとも、この申入れは、われわれの直接の、主要な階級敵であるブルジョアジーにたいしておこなうのではなく、われわれの身ぢかな反対者である「支配的な」小ブルジョア的民主主義政党、エス・エルとメンシェヴィキにたいしておこなうのではあるが。

われわれがこの両党に妥協を申し入れることができ、そして私の考えでは、申し入れなければならないのは、もっぱら例外としてであり、もっぱら特殊な情勢——明らかにきわめて短期間しかつづかないと思われる情勢——によるものである。

妥協は、われわれの側では「全権力をソヴェトへ」、ソヴェトにたいして責任を負うエス・エルとメンシェヴィキの政府、という七月以前の要求へ、われわれが復帰することにある。

いまならば、それもいまだけ、おそらく数日か、一—二週のあいだだけ、このような政府をまったく平和的につくり、そして、確立することができるであろう。この政府は、十中九まで、ロシア革命全体の平和的前進を保障し、平和と社会主義の勝利をめざす世界的運動の巨大な前進のための、異常に有利な機会を保障することができるであろう。

世界革命の味方であり、革命的方法の信奉者であるボリシェヴィキは、もっぱら革命のこのような平和的発展をはかるためにだけ——歴史上きわめてまれな、またきわめて貴重な機会、例外的に起こるまれな機会のためにだけ、こういう妥協に応じることができるし、そして、私の考えでは、応じなければならないのである。

この妥協は次のような点にあるだろう。ボリシェヴィキ

のほうでは、政府への参加を要求することなしに（これは、プロレタリアートと貧農の諸条件が実際に実現されていないかぎり、国際主義者にとって不可能なことである）、プロレタリアートと貧農に権力を引き渡せという要求を当面の要求としてかかげることをやめ、またこの要求を貫徹するための革命的な闘争方法を放棄する。この場合、扇動の完全な自由と、憲法制定議会をこれ以上延期せず、むしろ繰りあげて招集することとは、自明の条件であろうし、エス・エルとメンシェヴィキにとって新しい条件ではない。

政府ブロックとしてのメンシェヴィキとエス・エルのほうでは（妥協が成立したと仮定して）、もっぱらソヴェトにたいしてだけ全幅的に責任を負う政府をつくるとともに、地方でも全権力をソヴェトの手に引き渡すことに同意する。「新しい」条件といえば、これがそうであろう。ボリシェヴィキがこれ以外の条件をもちだすことはないだろうと、私は考える。というのは、実際に扇動の完全な自由が実現され、そしてソヴェトの構成（改選）やその機能のうえに新しい民主主義がただちに実現されれば、革命の平和的な前進が、またソヴェト内部での党派闘争の平和的な克服が、おのずから保障されるであろうと、ボリシェヴィキは期待しているからである。

おそらく、これはもう不可能ではあるまいか？　そうかもしれない。しかし、百に一つの見込みしかなくとも、とにかく、こういう可能性を実現するように試みる値うちはあるであろう。

「協定」の両当事者、すなわち、一方ではボリシェヴィキ、他方ではエス・エルとメンシェヴィキのブロックは、この「妥協」によってどういう得をするであろうか？　もし両当事者がなにも得をしないとすれば、妥協は不可能と認めなければならないし、それなら、妥協について論じてもなにもならない。この妥協が、現在（「平和な」、眠ったような時期の二〇年にも匹敵する、七月と八月という二ヵ月をとおってきたあとの）においてどんなに困難であっても、それを実現できるという一つのささやかな見込みがあるように、私には思われる。この見込みは、カデットといっしょの政府にはいらないという、エス・エルとメンシェヴィキの決定[(二〇)]によって生まれたのである。

ボリシェヴィキは、自分の見解を完全に自由に扇動することができ、真に完全な民主主義の条件のもとで、ソヴェト内で影響力の獲得につとめることができるようになるという点で、得をするであろう。いま、口さきでは「みなが」ボリシェヴィキにたいしてこの自由を認めている。実際には、これは、ブルジョア政府、またはブルジョアジー

の参加する政府のもとでは、すなわちソヴェト政府以外のどんな政府のもとでも、不可能である。ソヴェト政府のもとでは、このような自由は可能であろう(確実に保障されているとは言わないが、とにかく可能である)。このような困難な時期に、ソヴェトの現在の多数派との妥協に応じるべきであろう。真の民主主義のもとでは、われわれにとってなにひとつ恐ろしいものはない。なぜなら、実生活はわれわれに味方しているし、われわれに敵対するエス・エルとメンシェヴィキの諸党の内部の諸潮流の発展の経過でさえ、われわれの正しさを確証しているからである。

メンシェヴィキとエス・エルは、人民の明白な圧倒的多数に依拠し、ソヴェト内の多数派としての地位を「平和的に」利用することを保障されて、自分のブロックの綱領を実行する完全な可能性を一挙に獲得するという点で、得をするであろう。

もちろん、このブロック――それは、ブロックであるという理由からも、また小ブルジョア民主主義派がブルジョアジーやプロレタリアートにくらべていつでも等質性の点で劣っているという理由からも、等質的ではない――からは、おそらく二つの声があがるであろう。

一つの声はこう言うであろう。われわれと、ボリシェヴィキ、革命的プロレタリアートとでは、すすむ道がまったく違う。とにかく、プロレタリアートは法外な要求を出すだろうし、デマゴギーで貧農をまどわすだろう。彼らは、講和や連合国との絶縁を要求するだろう。これはできない相談だ。われわれには、ブルジョアジーのほうが近しくもあり、ブルジョアジーといっしょのほうがまちがいがない。われわれは、ブルジョアジーと縁を切ったわけではなく、ちょっとのあいだ喧嘩しただけではないか。それも、ただコルニーロフ事件一つのためだ。喧嘩はしたが、仲直りしよう。それに、ボリシェヴィキはわれわれになにひとつ「譲っている」わけではない。なぜなら、彼らが蜂起を企てても、どのみち、一八七一年のコミューンと同じように、敗北するにきまっているからだ、と。

もう一つの声はこう言うであろう。コミューンを引合いにだすのは、ひどく浅薄で、ばかげてさえいる。なぜなら、第一に、一八七一年以後に、ボリシェヴィキはとにかく、なにかを学んだはずだ。彼らは、銀行を奪取せずにほうっておきはしまいし、ヴェルサイユ進撃を断念しもしないであろう。コミューンにしても、もしそうしていたなら、勝利したかもしれないのだ。そのうえ、ボリシェヴィキが権力についた場合に提供できるもの――土地を農民へ、即時講和の提案、真の生産統制、ウクライナ人、フィンランド

人その他との誠実な仲直り——を、コミューンはただちに人民に提供することができなかった。俗な表現でいえば、ボリシェヴィキはコミューンの十倍もの「切り札」を手の内にもっている。第二に、コミューンは、なんといっても、激しい内乱を、それにつづいて平穏な文化的発展が長期にわたって阻害されることを意味し、あらゆるマクマオンやコルニーロフのような連中の策動や奸計がやりやすくなることを意味するが、そういう策動はわがブルジョア社会全体を脅かすものだ。いったい、コミューンの危険をおかすのは、分別のあることだろうか？

ところで、もしわれわれが権力を掌握しないとすれば、もし五月六日から八月三一日までのような困難な事態がそのままつづくとすれば、ロシアではコミューンは避けられない。あらゆる革命的な労働者と兵士は、かならずコミューンを考え、コミューンを信じるだろうし、かならずコミューンを実現しようと試みるだろう。彼らはこう考える。人民は滅びようとしている。戦争と飢えと零落はますますひどくなっている。救いの手はコミューンだけだ。よし、死のう。みな命を捨てよう。だが、コミューンを実現しよう、と。労働者がこう考えることは避けられないし、今日では、一八七一年のときのように、そうやすやすとコミューンを打ち破ることはできまい。ロシアのコミューンは、一八七一年にくらべて百倍も強力な同盟者を全世界にもつだろう。……いったい、われわれがコミューンの危険をおかすのは、分別のあることだろうか？　また、ボリシェヴィキは、妥協しても、じつのところ、それによってなにひとつわれわれに譲るわけではないという説にも、同意できない。なぜなら、戦時には、どの文明国の文化的大臣も、どんなものでも、どんなにわずかなものでも、プロレタリアートとの協定を非常に重視しているからである。彼らはそれを非常に、非常に重視している。ところで、彼らは、実務家であり、ほんとうの大臣ではないか。またボリシェヴィキは、弾圧にもかかわらず、その出版物が弱体であるにもかかわらず、かなり急速に勢力をましている。……いったい、コミューンの危険をおかすのは、分別のあることだろうか？

われわれは確実に多数派の地位を占めている。貧農が目ざめるのは、まだそれほど近いことではない。われわれの生きているあいだは大丈夫だ。農民国で、多数者が極左派のあとについてゆくなどとは、私には信じられない。しかも、真の民主的共和国では、明白な多数者に刃むかって蜂起することは不可能だ。以上のように第二の声は言うであろう。

もしかすると、マルトフかスピリドーノヴァの支持者と

いったところから、第三の声があがるかもしれない。それはこう言うであろう。――「同志諸君」、君たち二人とも、コミューンやコミューンの可能性について論じながら、ためらうことなくコミューンの敵の側に立っているのは、憤慨にたえない。形は違っても、二人とも、コミューンの弾圧者に味方しているのだ。私は自分でコミューンのために扇動しようとは思わないし、ボリシェヴィキならだれでもやっているように、コミューンの隊列にくわわってたたかうと、あらかじめ約束することはできないが、それでも、次のように言わなければならない。もし、私の努力にもかかわらず、コミューンが出現したなら、私はコミューンの敵よりも、むしろコミューンの防衛者をたすけるだろう、と。……

「ブロック」のあいだの意見の不一致は大きく、またそれは避けられない。なぜなら、小ブルジョア民主主義派には、完全に大臣級の完全なブルジョアから、プロレタリアの立場にまだ移りきれない半窮民まで、無数の色合いが代表されているからである。そして、この意見の不一致からそのときどきにどういう結果が生まれるかは、だれにもわからない。

＊＊

右の文章は、九月一日の金曜日に書いたものであるが、ある偶然の事情のために（ケーレンスキー政府のもとでは、かならずしもボリシェヴィキのだれでもが、居住地選択の自由をもっていたわけではないと、歴史は述べるであろう）、その日のうちに編集局の手に渡らなかった。そこで、土曜日と、きょう、日曜日の新聞を読んでから、私はひとりごとでこう言った。たぶん、妥協を申し入れるのはもう遅すぎるだろう。たぶん、平和的発展がまだ可能であったあの数日も、同じように過ぎてしまったのだろう。さよう、すべての点からみて、その数日は過ぎさったようである。ケーレンスキーは、なんらかの仕方でエス・エルの党から脱退するとともに、エス・エルたちからも離れるであろうし、エス・エルの無為のおかげで、エス・エルぬきで、ブルジョアの援助のもとに自分の地歩をかためるであろう。……さよう、はからずも平和的発展の道が可能となったあの数日は、すべての点からみて、すでに過ぎさったようである。いまとなっては、私はこの覚え書を編集局に送って、それに「時機おくれの考え」という標題をつけるようにお願いするだけである。……時機おくれの考えを知っておくことも、ときには、たぶん、興味がなくもないであろう。

一九一七年九月三日

一九一七年九月一─三（一四─一六）日に執筆
一九一七年九月一九（六）日に新聞
『ラボーチー・プーチ』第三号に発表
署名──エヌ・レーニン
全集、第五版、第三四巻、一三三─一三九ページ
邦訳全集、第二五巻、三三三─三四〇ページ所収

さしせまる破局、それと どうたたかうか

飢えがせまっている

避けようのない破局がロシアにせまっている。鉄道運輸は、信じられないほど乱脈になっており、しかもますます乱脈になろうとしている。鉄道は止まってしまうだろう。工場への原料や石炭の輸送は止まってしまうだろう。穀物の輸送も止まってしまうだろう。資本家は、わざと、たえまなく、生産をサボタージュしている（そこない、停止させ、ぶちこわし、妨げている）。彼らは、未曽有の破局が起これば、共和制と民主主義は崩壊し、ソヴェトや、一般にプロレタリアと農民の団体は崩壊し、君主制への復帰と、ブルジョアジーと地主の全能の権力の復活が、容易になるだろうと、期待しているのである。

これまで見たこともないほど大規模な破局と飢えが、避けようもなくせまっている。このことについては、すでにあらゆる新聞が、数えきれないほどたびたび書いている。諸政党や、労働者・兵士・農民代表ソヴェトは、信じられないほどたくさんの決議を採択した。それらの決議では、破局が避けられないこと、破局が間ぢかにせまっていること、破局との死にものぐるいの闘争が必要であり、破滅をくいとめるには人民の「英雄的な努力」が必要だということ、などを認めている。

みながこのことを語り、認め、決議している。

それなのに、なにもなされていない。

革命の半年間が過ぎさった。破局は、いっそう間ぢかにせまってきた。大量失業が生まれるまでになった。まあ、考えてもみたまえ。国内では商品が不足している。穀物や原料は十分あるのに、生産物の不足と労働力の不足のために、国は破滅に瀕している。――それなのに、そういう国で、こうした危急の時機に、大量失業が生じたのだ！革命（この革命のことを大革命とよぶ人もいるが、どうやら、いまのところ、腐った革命とよぶほうが正しいようだ）の半年間に、民主的共和国で、えらそうに「革命的民主主義的」と自称している団体や機関や施設がいっぱいあ

るところで、実際には、破局を防ぎ、飢えを防ぐために、ほんとうになにひとつ真剣になされなかったということを、このうえ証明する必要があるだろうか？　われわれは、ますます急速に崩壊に近づいてゆく。なぜなら、戦争は待ったなしであり、戦争によって引きおこされる国民生活のあらゆる面の乱脈は、ますますひどくなってゆくからである。

　ところが、ほんのすこし注意をはらい、考えてみさえすれば、破局や飢えを防ぐ方法はあること、しかも、それを防ぐ方策はまったく明瞭な、簡単な、十分に実行でき、人民の力で十分にやれるものであること、また、それらの方策がとられていないただ一つの理由は、それを実行すると、ひとにぎりの地主と資本家の前代未聞の利潤にひびくからであり、もっぱらそのためであることを、確信できるであろう。

　じっさい、うけあってよいが、どの演説を聞いても、どの派の新聞のどの論説を読んでも、どの集会や機関のどの決議を見ても、破局と飢えを防ぎ、くいとめるための基本的で主要な方策を、まったくはっきりと、明確に認めていないようなものは、見つからないであろう。その方策というのは、国家が統制し、監督し、記録し、規制すること、生産物の生産と分配とに労働力を正しく配分すること、国民の労力を節約し、労力のむだづかいをいっさいなくし、労力をはぶくこと、これである。統制、監督、記録――これこそ、破局や飢えを防ぐうえでいちばん肝心なものである。これは、議論の余地のない、だれもが認めていることである。しかも、まさにそのことがおこなわれていないのであって、それというのも、地主と資本家の全能の権力を傷つけはしないか、彼らの莫大な、前代未聞の、とほうもない利潤、物価騰貴と軍需品の納入（いまでは、ほとんどすべての人間が、直接間接に、戦争のために「働いている」）で稼ぎだしている利潤、みなが知っており、みなが見ており、みなが溜息をついてながめているあの利潤を、そこないはしないかと心配しているためなのである。

　だから、国家がいくぶんでも真剣に統制し、記録し、監督するためには、まったくなにひとつなされていないのである。

政府の完全な無為

　およそいかなる統制、監督、記録も、国家がそれを実行しようとするいかなる企ても、すべて、いたるところで、系統的に、たえずサボタージュされている。信じられないほど素朴な人間でないかぎり、だれがこのサボタージュをやっているのか、それがどういう手段でなされているのか

がわからないはずはなく、また、よほどひどい偽善者でないかぎり、それがわからないふりをやれるものではない。というのは、銀行家と資本家がやっているこのサボタージュ、彼らがやっているあらゆる統制、監督、記録のこのぶちこわしは、民主的共和制の国家形態に適応させられ、「革命的民主主義的」機関の存在に適応させられているからである。科学的社会主義の支持者ならだれでも口さきでは認めている一つの真理、しかもメンシェヴィキやエス・エルが、自分たちの仲間が大臣や次官などのちょっとした地位を占めるとさっそく忘れるようにつとめてきたその真理を、資本家諸君はりっぱにのみこんでいる。その真理とは、君主制の統治形態が民主的共和制の形態に代わっても、資本主義的搾取の経済的本質はすこしも変わらないということ、したがって、逆に、民主的共和制のもとでも、専制君主制のもとでやってきたのにおとらずうまく資本家の利潤を維持してゆくためには、この利潤の不可侵と神聖を守る闘争の形態を変えるだけでよいということである。

あらゆる統制、記録、監督をサボタージュする現在の、最新式の、共和主義的＝民主主義的なやり方は、資本家が、口さきでは統制の「原則」とその必要を（もちろん、メンシェヴィキやエス・エルがみなやっているように）「熱烈」に認めながら、ただこの統制を「漸進的に」、計画的に、「国家調整によって」実施するように主張するということにある。実際には、この見てくれのよいことばのかげに隠れて、統制をぶちこわし、それを無効にし、架空のものにし、統制のまねごとをし、あらゆる実務的な、実際に重要な措置の実行を延ばし、異常に複雑な、かさばった、官僚的で役に立たず、なんでも資本家の言いなりになる、まったくなにもせず、なにもやれない統制機関をつくろうというのである。

これが根も葉もない主張でないという証拠に、メンシェヴィキとエス・エル、すなわち、革命のはじめの半年のあいだソヴェト内で多数を占めていて、「連立政府」に参加してきた人たち、したがって、資本家にしたいほうだいのことをさせたことや、資本家があらゆる統制をぶちこわしたことについて、ロシアの労働者と農民にたいして政治的責任を負わなければならない人たちのなかから、証人を立てることにしよう。

「革命的」民主主義派のいわゆる「全権をもった」（ご冗談でしょう！）諸機関のうちでも最高の機関の公式の機関紙、つまり『中央執行委員会』（すなわち労働者・兵士・農民代表ソヴェト全ロシア大会中央執行委員会）の『イズヴェスチヤ』の一九一七年九月七日付第一六四号に、この同じメンシェヴィキとエス・エルによってつくりだされ、

彼らの手ににぎられている統制問題の専門機関の決定がのっている。その専門機関とは、中央執行委員会「経済部」のことである。この決定のなかに、「政府のもとにつくられた経済生活規制のための中央諸機関の完全な無為」が、事実として、公式に認められている。

じっさい、メンシェヴィキとエス・エルの政策の破産を証明するのに、メンシェヴィキとエス・エルの自筆の署名のある証言以上に雄弁なものが、考えられるであろうか？

すでにツァーリズム時代にも、経済生活を規制する必要のあることが認められて、そのための機関がいくつかつくられた。しかし、ツァーリズムのもとでは荒廃は強まるばかりで、ついには恐るべき規模に達した。この荒廃を克服するための真剣な、断固たる方策をとることが、はじめから共和国政府、革命政府の任務であると認められた。メンシェヴィキとエス・エルをくわえた「連立」政府が生まれたとき、この政府は、五月六日付の全国民にあてたおごそかな声明(一九一)で、国家の統制と規制を実施することを約束し、そうする義務を負った。ツェレテーリ一派も、チェルノーフ一派も、同様にまたメンシェヴィキとエス・エルのすべての指導者たちも、自分たちは政府について責任を負うだけではなく、自分たちがにぎっている「革命的民主主義派の全権をもった諸機関」に実際に政府の活動を監視させ、点検させると、神かけて誓ったのである。

五月六日から四ヵ月が、四ヵ月という長い月日がたった。このあいだに、ロシアは、ばかげた帝国主義的「攻勢」で何十万という兵士を殺したし、荒廃と破局は大股に近づいてきた。それでも、この夏には、水運の面やら、農業の面やら、鉱業の試掘の面やら、その他いろいろの面で、たくさんの仕事をするまたとない機会があったのだ。――しかも、四ヵ月もたってから、いまメンシェヴィキとエス・エルは、政府のもとにつくられた統制機関の「完全な無為」を、公式に認めざるをえないのだ!!

それなのに、いま（われわれはこの一文をまさに民主主義会議(一九二)の直前の九月一二日に書いている）これらのメンシェヴィキとエス・エルは、政治家気どりのしかつめらしい様子で、カデットとの連立政府をリャブシンスキー、ブーブリコフ、テレシチェンコといった商工業界のキート・キートィチ(一九三)たちとの連立政府に代えれば、事態はよくなるはずだ、としゃべっている！

メンシェヴィキとエス・エルのこの驚くべき盲目ぶりを、いったいどう説明したらよいのか？　彼らは政治家として青二才で、ひどく無知で素朴なために、なにをしたらよいのかわからずに、善意をもちながら迷っているのだと、考えるべきだろうか？　それとも、大臣、次官、総督、司政

委員などというポストに大量にありつくことは、特殊な「政治的」盲目性を生む性質をもっているのだろうか？

統制の方策はだれでも知っていて、やりやすいものである

こういう疑問が起こるかもしれない。統制の方法と方策は、なにか恐ろしく複雑で、むずかしく、まだためしたこともなく、それどころか、だれも知ってさえいないようなものではないのか？　その実行が延ばされているのは、カデット党や、商工業階級や、エス・エルとメンシェヴィキの諸党の政治家たちが、もう半年ものあいだ額に汗して、統制の方策と方法の探究、研究、発見に骨をおっているのだが、この任務が信じられないほどむずかしいので、いまなお解決できずにいるためではないのか？

とんでもない！　この連中は、無知な、文盲の、打ちひしがれた百姓や、なんでも信じ、なにごともつっこんで考えない俗物の「目をくらませて」、そういうふうに見せかけようとしているのである。実際には、ツァーリズムでさえ、「旧体制」でさえ、戦時工業委員会をつくったとき、統制の基本的な方策、その主要な方法と手段を知っていた。すなわち、住民を職業、仕事の目的、労働部門などの別にしたがって結合することがそれである。だが、ツァーリズムは、住民を結合することを恐れていた。そこで、このだれでも知っている、ごくやりやすい、完全に実行できる統制方法と手段を、極力制限し、わざと抑えたのである。

どの交戦国も、戦争のひどい重荷と災害をこうむって、程度の差はあれ荒廃と飢えに苦しんでいるので、ずっとまえから、一連の統制方策を立案し、決定し、実施し、ためしている。その方策は、ほとんどつねに、住民を結合すること、国家の代表を参加させ、国家の監督等々のもとに、各種の団体をつくるか、あるいは奨励することに帰着する。すべてこういう統制方策は、だれでも知っていて、それについては多くのことが言われたり書かれたりしており、先進的な交戦諸国が公布した統制関係の法規は、ロシア語に翻訳されるか、あるいはロシアの刊行物に詳しく紹介されている。

もしわが国家が、ほんとうに実務的に、真剣に統制を実施することを望んだなら、もしこの国家の諸機関が、資本家に屈従してみずからを「完全な無為」に運命づけることがなかったなら、国家は、すでに世間に知られ、すでに実施ずみの統制方策の豊かな貯えのなかから、どれでも思いのままに汲みとってきさえすればよかったのである。そうするのを妨げたただ一つの障害――そして、カデットや

エス・エルやメンシェヴィキは、この障害をひたかくしに隠して、人民の目にふれさせないようにしているのだ――は、統制を実施すると、資本家の法外な利潤が明るみにだされ、この利潤がだめになるという事情であったし、いまでもそうである。

このきわめて重要な問題（この問題は、実質上、戦争と飢えからロシアを救おうとするあらゆる真の革命政府の綱領の問題に等しい）をもっと明瞭に説明するため、これらの最も主要な統制方策を列挙し、それを一つひとつ検討してみよう。

ほんのお笑い草に革命的民主主義と名のっているのでない、ほんとうの革命的民主主義的政府が、成立後一週間以内に最も主要な統制方策の実施を布告し（決定し、命令し）、欺瞞的なやり方で統制をまぬかれようとする資本家には、冗談ごとでない、本気の処罰を決め、住民自身に、資本家を監督するよう、統制にかんする諸決定を資本家が誠実に履行しているかどうかを監督するように呼びかけただけで、ロシアではとっくの昔に統制が実現されていたはずだということが、わかるであろう。

その最も主要な統制方策とは次のものである。

（一）すべての銀行を一つに統合し、その業務を国家が統制すること、すなわち銀行を国有化すること。

（二）シンジケート、すなわち資本家の巨大独占団体（砂糖、石油、石炭、冶金などのシンジケート）を国有化すること。

（三）営業の秘密を廃止すること。

（四）工業家、商人、一般に経営者を強制的にシンジケート化すること（すなわち、強制的に組合に結合すること）。

（五）住民を強制的に消費組合に結合するか、またはそういう結合を奨励し、それを統制すること。

これらの方策が革命的民主主義的に実現される場合にそれにどんな意義があるかを、それぞれの方策について検討してみよう。

銀行の国有化

銀行は、周知のように、現代の経済生活の中心であり、資本主義的国民経済制度全体の主要な神経中枢である。「経済生活の規制」を口にしながら、銀行の国有化の問題にふれないのは、ひどい無知をさらけだすことであるか、でなければ、はじめから実行しないつもりで、はでな文句や大げさな約束をならべたてて「庶民」をだますことを意味する。

銀行業務を統制し、規制しないで、パンの供給や、一般に生産物の生産と分配を統制し、規制しようとするのは、ナンセンスである。それは、なにかのはずみでころげこんでくる「コペイカ貨」をつかまえようとして、幾百万ルーブリに目を閉ざすようなものである。現代の銀行は、商業（穀物その他あらゆる種類の）や工業ときわめて密接に、切り離せないように癒着しているので、銀行に「手をつけ」ずには、真剣なこと、「革命的民主主義的」なことは、まったくなにひとつやれないのである。

だが、この、国家が銀行に「手をつける」ということは、なにか非常に困難な、こみいった操作なのではあるまいか？　まさにそういうふうに見せかけて、俗物をおどしつけようとつとめるのが、普通のやり方である。もちろん、そうつとめているのは、資本家とその擁護者どもである。なぜなら、そうすることが、彼らには有利だからである。

実際には、銀行の国有化は、ただ一人の「所有者」からもただの一コペイカも取りあげるものではけっしてなく、その実行には、技術的にも、文化的にも、絶対にどんな困難もなく、その実行が遅れているのは、まったくほんのひとにぎりの金持のけがらわしい貪欲のためである。銀行の国有化は、私有財産の没収とよく混同されるが、こういう概念の混同がひろまったのは、公衆をだますことを利益としているブルジョア新聞の責任である。

銀行が運用する資本、銀行に集まってくる資本の所有権は、株式、債券、手形、受取証などと名づけられる印刷または手書きの証書によって証明される。銀行が国有化されても、つまり、すべての銀行が一つの国立銀行に合同しても、それらの証書の一枚でも、なくなりもしなければ、変化するわけでもない。貯金通帳に一五ルーブリもっていた人は、銀行が国有になったのちも、やはり一五ルーブリの所有者であり、一五〇〇万ルーブリもっていた人の手には、銀行が国有になったのちも、株式とか債券とか手形とか荷物証券とかのかたちで、やはり一五〇〇万ルーブリが残る。

では、銀行を国有化する意義は、どこにあるのか？

それは、個々ばらばらの銀行とその業務をほんとうに統制することは、（たとえ営業の秘密その他が廃止されたとしても）まったく不可能だという点にある。なぜなら、貸借対照表を作成したり、架空の企業や支店をつくったり、替え玉の名義人を立てたりなどするときにつかわれる、きわめて複雑な、こみいった、巧妙な手口を追求することは、とてもできない相談だからである。すべての銀行を一つに合同させても、それだけでは、所有関係はすこしも変わらないし、繰りかえして言うが、ただ一人の所有者も一コペイカでも取り上げられはしないが、そうすることによって

はじめて、ほんとうに統制できるようになるのである。もちろん、これは、まえにあげた他の諸方策がすべて実施されるとしての話である。銀行が国有化される場合にはじめて、国家は、どこへ、どのように、どこから、いつ、何百万何十億の金が流されるかを、国家が知りうるようにすることができる。また、資本主義的流通の中心、主軸、基本機構である銀行を統制することによってはじめて、口さきではなく、実際に、経済生活全体の統制、すなわち重要生産物の生産と分配の統制を組織し、「経済生活の規制」を組織することができるのであって、銀行を統制しなければ、「経済生活の規制」は、かならずや庶民をだますための大臣流の空文句に終わる運命にある。銀行を一つの国立銀行に統合したうえで、銀行業務を統制することによってはじめて、たやすく実行できる他の諸方策とあいまって、財産や所得の隠匿を防いで、所得税のほんとうの徴収を組織することができるのである。というのは、現在では、所得税はあらかた架空のものだからである。

　銀行を国有化するには、まさにそれを布告しさえすればよい。そうすれば、重役と職員とが、自分たちでそれを実行するだろう。それには、どんな特別の機関も、国家がなにか特別の準備措置をとることも、必要ではない。この方策は、まさに政令ひとつで、「一挙に」実現できるものである。なぜなら、こういう方策の経済的可能性は、資本主義がいったん手形、株式、債券その他を生みだすまでに発展すれば、まさに資本主義そのものによってつくりだされるからである。この場合になおやらなければならないことは、簿記法の統合だけであって、革命的民主主義国家が、すべての銀行を遅滞なく一つの国立銀行に統合する目的で、ただちに電報で各都市に重役と職員の会議を招集し、各州および全国の規模で彼らの大会を招集することを決定すれば、この改革は数週間で実現されるだろう。いうまでもないことだが、反抗し、国家をあざむき、改革の実行を延ばそうとするのは、まさに重役と高級職員であろう。なぜなら、これらの諸君は、それによって、特別に収入の多いポストを失い、特別に儲かるいんちき操作をすることができなくなるだろうからである。ここに問題の核心がある。だが、銀行の統合には技術上の困難はなにもなく、もし国家権力が口さきだけで革命的なのでないなら（すなわち、不活動や因襲と手をきることを恐れないなら）、もしそれが口さきだけで民主主義的なのでないなら（すなわち、ひとにぎりの金持のためではなく、人民の大多数のために行動するなら）、重役や取締役や大株主がすこしでも実行を延ばしたり、文書や決算報告を隠そうとするときには、罰として彼らの財産を没収し投獄することを、布告しさえすれば

よい。また、たとえば貧しい職員を別個に結合して、彼らが金持の欺瞞や引き延ばしを摘発した場合には、賞金をあたえることにしさえすればよい。——そうすれば、銀行の国有化は、このうえなく円滑に、このうえなく急速にすむであろう。

全人民、とくに、労働者ではなく(なぜなら、労働者は銀行にあまり縁がないから)農民や小工業者の大衆が、銀行の国有化から得る利益は莫大なものであろう。労働の節約は非常なものであろうから、国家がこれまでどおりの人数の銀行職員を維持すると仮定すれば、このことは、銀行利用の普遍化(一般化)、支店数の増加、銀行業務の簡便化などにむかって、きわめて大きな一歩をすすめることを意味するであろう。ほかならぬ小経営主や農民にとって、信用がきわめて簡便となり、得やすくなるであろう。他方、国家ははじめて、まずはじめに、なんの隠された部分も残らないようにすべての主要な貨幣業務を観察し、つぎにそれを統制し、さらにそのつぎには経済生活を規制し、最後に資本家諸君の「奉仕の代償として」とほうもない「手数料」を支払わなくても、国家の大規模な取引に要する何百万何十億という金額を手に入れることができるようになるだろう。この方策は、国の「防衛」という見地、すなわち軍事的見地からみてさえ大きなプラスになり、国の「軍事力」をすばらしく高めるだろうと思われるのに、すべての資本家、すべてのブルジョア教授、ブルジョアジー全体、ブルジョアジーの御用をつとめるプレハーノフやポトレソフの一派の全員が、口から泡をとばして、銀行国有化に反対し、このきわめてやりやすく緊急を要する方策に反対する無数の口実を考えだすことに汲々としているのは、右の理由に、もっぱら右の理由によるものである。

こう言うと、おそらく、つぎのように言って反論する者があるだろう。ドイツやアメリカ合衆国のような先進諸国家は、みごとな「経済生活の規制」を実行しているのに、それでも銀行国有化を実施しようなどと考えていないのは、いったいどういうわけか、と。

われわれはこう答えよう。この二つの国家は、一方は君主国で、他方は共和国であるが、どちらも資本主義国であるだけでなく、帝国主義国でもあるからだ、と。そこで、この二つの国は、彼らに必要な改革を反動的＝官僚的な方法で実施している。ところが、われわれがいま問題にしているのは、革命的民主主義的な方法のことである。

この「ちょっとした違い」には、きわめて重大な意義がある。たいていの場合、この違いについて考えることは「しきたりではない」。「革命的民主主義的」ということばは、わが国では(とくにエス・エルやメンシェヴィキのあ

いだでは)、「おかげさまで」とか、「尊敬すべき市民」とかいう言いまわしと同じように、ほとんどきまり文句になってしまった。この「おかげさまで」という言いまわしは、神を信じるほどに無学でない人間もつかっているし、「尊敬すべき市民」という言いまわしは、ときによると、『デーニ』[193]または『エヂンストヴォ』の寄稿家に話しかけるのにさえつかわれている。そのくせ、これらの新聞が資本家の利益のために、資本家によって創刊され維持されているのだということ、したがって、自称社会主義者がそれに参加していることに「尊敬すべき」点などあまりないことは、ほとんどだれもが推量しているのだ。

「革命的民主主義派」ということばを、型にはまった儀礼文句として、慣用の呼び名としてつかうのでなく、その意義を考えるなら、民主主義者だということは、実際には、人民の少数者ではなくて多数者の利益を重んじることを意味し、革命家だということは、すべて有害なもの、時代おくれのものを、真に決然と、真に仮借なくぶちこわすことを意味している。

われわれの知るかぎり、アメリカでもドイツでも、政府にせよ支配階級にせよ、わが国のエス・エルやメンシェヴィキがおこがましくも名のっている(そして、けがしている)「革命的民主主義派」という名称を名のってなどいないのである。

ドイツには、全国的な意義をもった巨大民間銀行は四つしかなく、アメリカには二つしかない。これらの銀行の金融王たちにとっては、私的に、こっそりと、革命的ではなくて反動的なやり方で、民主主義的ではなくて官僚的なやり方で手を結び、この国家の官吏を買収し(これは、アメリカでもドイツでも普通のことである)、まさに業務の秘密をたもつことのできるよう、まさに何百万何千万という「超過利潤」を国家からせしめることのできるよう、まさにいんちきな金融上のぺてんをやれるように、銀行の私的な性格を維持するほうが、やりやすく、好都合で、有利である。

アメリカでもドイツでも、労働者には(いくぶんは農民にも)軍事的苦役を、銀行家や資本家には楽園をつくりだすような仕方で、「経済生活の規制」がおこなわれている。これらの国でおこなわれている規制は、労働者を飢えすれすれのところまで「締めつけ」、資本家には(こっそりと、反動的=官僚的なやり方で)戦前よりも高い利潤を保障する点にある。

こういう方法は、共和制の帝国主義的ロシアでもまったく実行可能である。じじつ、それは、ミリュコーフやシンガリョーフのような連中が実行しているだけではなく、ケ

ーレンスキーもまた、銀行の「不可侵」や銀行が法外な利潤を手に入れる神聖な権利を同じように反動的＝官僚的なやり方でかばっているテレシチェンコ、ネクラーソフ、ベルナツキー、プロコポーヴィチの一派と組んで、それを実行している。むしろ真実を言ったほうがよい。共和制のロシアでは、人々は反動的＝官僚的なやり方で経済生活を規制したいと思っているのだが、「ソヴェト」があるため、「しばしば」その実行が妨げられているのである。この「ソヴェト」を解散することに、コルニーロフ第一号は失敗したが、コルニーロフ第二号がそれを解散するよう努力するであろう、と。……

これが真実であろう。そして、この苦くはあるが単純な真実は、「わが」「偉大な」「革命的」民主主義についてのあまったるいうそよりも、人民を啓発するうえで有益である。……

＊＊＊

銀行が国有化されれば、それと同時に、保険事業を国有化することが、すなわち、すべての保険会社を一つに統合、その業務を集中し、国家がそれを統制することが、非常にやりやすくなるだろう。ここでも、革命的民主主義国家がその統合を布告し、取締役や大株主に、すこしの遅滞もなく統合を実行するように命令し、その一人ひとりにきびしい責任を負わせれば、保険会社の職員大会が、ただちに、なんの苦もなく、その統合を実行するだろう。保険事業には、何億という金が資本家によって投下されており、仕事はすべて職員によっておこなわれている。この事業が統合されれば、保険料は引き下げられて、すべての被保険者が多くの便益と便宜を得るであろうし、これまでどおりの労力と資金の支出で、被保険者の範囲をひろげることができるだろう。この改革もまた、人民の労働を節約し、口さきではなくて実際に「経済生活を規制する」ための多くの重要な可能性をひらくことによって、国の「防衛力」を高めるにちがいないのに、その実行が遅らされているのについては、収入の多いポストを占めているひとにぎりの人間の惰性と因襲と貪欲以外には、絶対にどんな理由もないのである。

シンジケートの国有化

資本主義が、資本主義以前の古い国民経済制度と違っている点は、資本主義がさまざまな国民経済部門のあいだにきわめて密接な結びつきと相互依存関係を生みだした点である。ちなみに、こういうものが生みだされていなかったなら、社会主義にむかってすすむことは、技術的に実行不

可能であったろう。銀行が生産を支配する現代資本主義は、さまざまな国民経済部門のこの相互依存関係を極度に強めた。銀行と商工業の主要な諸部門とは、切り離せないように癒着してしまった。このことは、一方では、商工業シンジケート（砂糖、石炭、鉄、石油その他のシンジケート）を国家独占にする措置をとらずに、つまりそれらのシンジケートを国有化せずに、銀行だけを国有化することはできないということを意味する。また他方では、経済生活の規制を本気に実行しようと思えば、銀行とシンジケートを同時に国有化する必要があることを意味する。

一例として、砂糖シンジケートをとってみよう。これは、すでにツァーリズム時代につくられて、当時すばらしい設備のある諸工場のきわめて大規模な資本主義的合同をもたらした。その場合、この合同が徹頭徹尾、極反動的で官僚的な精神でつらぬかれていて、とほうもない暴利を資本家に保障し、職員と労働者をまったく無権利な、恥ずかしめられ、しいたげられた奴隷の状態におとしいれたことは、いうまでもない。すでにその当時、国家は、大資本家、金持の利益になるように、生産を統制し、規制していたのである。

ここでなおやらなければならないことは、職員、技師、役重、株主の大会を招集し、同一の簿記法を採用し、労働者団体による統制その他についての簡単な布告をだすことによって、反動的＝官僚的規制を革命的民主主義的規制に変えることだけである。これは、まったく簡単なことであるが、しかもまさにそれがなされずにいるのだ!!　民主的共和制のもとでも、砂糖工業の反動的＝官僚的規制は、実際上そのまま残っており、人民の労働のむだづかいも、因襲も、停滞も、ボーブリンスキーやテレシチェンコの一味の金儲けも、みなもとのままである。官僚ではなく民主主義派にむかって、「砂糖王」ではなく労働者と職員にむかって、自主的にイニシアチブをとるように呼びかけること、これは、エス・エルとメンシェヴィキがほかならぬこれらの砂糖王との「連立」、ほかならぬ金持とのこの連立の計画で人民の意識をくもらせさえしなかったなら、一挙に、数日でやれたことだし、またやるべきことであったろう。他方、そういう連立からは、そういう連立の結果としては、経済生活を規制する点での政府の「完全な無為」が生まれてくることは、まったく避けられない。*

* この一文をすでに書いてしまってから、私は新聞で、ケーレンスキー政府が砂糖の独占を実施しようとしていること、もちろん、反動的＝官僚的なやり方で、職員や労働者の大会をひらかずに、内輪で、資本家を抑制せずに、実施しようとしていることを知った!!

石油業をとってみよう。この事業は、資本主義のこれま

での発展によってすでに大規模に「社会化」されている。二人の石油王——これが、利札切りを仕事とし、この「事業」、すでに事実上、技術的、社会的に、全国的な規模で組織されており、すでに何百人何千人という職員、技師などによって運営されている「事業」から、うそのような利潤をかき集めて、何百万何億という金を自由にしている人間である。石油産業の国有化は、すぐ実行できることであり、革命的民主主義国家としては、とくにこの国家が重大な危機に際会していて、ぜがひでも人民の労働を節約して、燃料を増産しなければならないときには、ぜひやらなければならないことである。この場合、官僚的統制がなんのたしにもならず、なにひとつ変えないことは、明らかである。なぜなら、「石油王たち」は、以前ツァーリの大臣たちを意のままにしたのと同じように、テレシチェンコ、ケーレンスキー、アウクセンチエフ、スコーベレフなどという連中をやすやすと意のままにするだろうし、引きのばしや、言いのがれや、口約束や、さらにブルジョア新聞の直接間接の買収(これが「世論」とよばれて、ケーレンスキーやアウクセンチエフの一味に「尊重」されているものである)や、官吏(そっくりもとのままにのこされた国家機関内のもとのポストに、ケーレンスキーやアウクセンチエフ一味が留任させている官吏)の買収という手段で、意のままにするだろうからである。

なにかちゃんとしたことをやるには、官僚主義から民主主義へ、それも、ほんとうに革命的なやり方で移らなければならない。すなわち、石油王や株主に宣戦を布告して、もし彼らが石油業の国有化の実行を引き延ばしたり、所得や決算報告を隠したり、生産をサボタージュしたり、増産の措置をとらなかったりするなら、彼らの財産を没収して懲役にやると、布告しなければならない。労働者と職員のイニシアチブにうったえ、彼らの協議会や大会をただちに招集し、全面的な統制をおこない増産を実行することを条件として、利潤の若干部分を彼らの手に引き渡さなければならない。もしすぐに、ただちに、一九一七年四月に、このような革命的民主主義的方策をとっていたなら、液体燃料の埋蔵量の点で世界でいちばん豊かな国のひとつであるロシアは、夏のあいだに、水運を利用して、必要量の燃料を人民に供給するうえで、非常に多くのことをやれたであろう。

ブルジョア政府も、エス・エル＝メンシェヴィキ＝カデットの連立政府も、まったくなにひとつせず、官僚的な改革遊びをするにとどまった。ただの一つも、革命的民主主義的方策をとる勇気がなかった。同じ石油王、同じ停滞、同じ搾取者にたいする労働者と職員の同じ憎悪、このような基

盤のうえでの同じ崩壊、人民の労働の同じむだづかい、万事がツァーリズムの時代と同じであり、変わったものといえば、ただ「共和国」の役所に出はいりする書類の標題だけである！

技術的、文化的に国有化の「準備ができあがっている」点で、また人民の略奪者である石炭王たちによって恥しらずに経営されている点で、石油産業にひけをとらない炭鉱業では、業者が露骨にサボタージュし、生産をあからさまに阻害し、停止させている明白な事実がたくさんある。政府系のメンシェヴィキの新聞『ラボーチャヤ・ガゼータ』でさえ、それらの事実を認めている。それで、どうしたか？　労働者と石炭シンジケートの強盗どもとの同数の代表で構成された、あいもかわらぬ反動的＝官僚的な「半々の」審議会をつくったほかは、まったくなにもしなかった!!　ただ一つの革命的民主主義的方策もとらなかったし、国を滅ぼし生産をとめている炭鉱業者にたいするテロルにうったえて、職員組合による、労働者による、ただひとつ現実的な、下からの統制を打ちたてようと試みた形跡さえない！　また、どうしてそんなことがやれよう。われわれは「みな」、カデットとの「連立」ではないまでも、商工業界との「連立」に賛成しているではないか。そして、連立とは、資本家の手に権力を残し、彼らの罪を罰せずにおくこと、彼らが仕事を妨げ、なんでも悪いことは労働者のせいにし、荒廃をひどくし、こうして新しいコルニーロフ反乱を準備するのを、そのままやらせておくことを意味するのだ！

営業の秘密の廃止

営業の秘密を廃止せずには、生産と分配の統制は、カデットがエス・エルとメンシェヴィキをだまし、そしてエス・エルとメンシェヴィキが勤労諸階級をだますためだけに必要な、まったくの空約束にとどまるか、でなければ、もっぱら反動的＝官僚的な方法と方策によって実施するほかないものか、どちらかとなる。このことは、偏見のない人ならだれにでもまったく明らかなことであるにもかかわらず、そして『プラウダ』(一六〇)が営業の秘密の廃止を頑強に主張してきたにもかかわらず（資本の御用をつとめるケーレンスキー政府が『プラウダ』を禁止したのは、まさにこのためであった）、わが共和政府も、また「革命的民主主義派の権能ある諸機関」も、真の統制のこの第一の要件のことは、考えてもみなかったのである。

ここにこそ、いっさいの統制の鍵がある。ここにこそ、人民を略奪し生産をサボタージュしている資本のいちばん

の急所がある。だからこそ、エス・エルとメンシェヴィキは、この点にふれるのを恐れているのである。

資本家がいつももちだし、そして小ブルジョアジーがよく考えもせずに繰りかえしている論拠は、次のようなものである。資本主義経済では、一般に営業の秘密を廃止することは絶対に不可能である。なぜなら、生産手段が私有となっており、各経営は市場に依存しているので、帳簿や商取引――もちろん、銀行取引もふくめて――の「神聖不可侵」がぜひとも必要だからである、と。

これやこれに類した論拠をなんらかの形で繰りかえしている人々は、現代の経済生活の二つの基本的な、きわめて重大な、周知の事実に目を閉じることによって、自分もあざむかれ、自分のほうからも人民をあざむいているのである。その第一の事実は、大規模資本主義である。すなわち、銀行、シンジケート、大工場などの経済の特殊性である。第二の事実は戦争である。

いたるところで独占資本主義に転化しつつある現代の大規模資本主義のもとでこそ、営業の秘密を正当とする一片の理由もなくなり、営業の秘密は偽善に、もっぱら大資本の金融上のぺてんや、うそのような利潤を隠すたんなる道具になってしまう。大規模資本主義経済は、その技術的な性質そのものからみて、社会化された経済である。すなわち、この経済は、何百万の人々のためにはたらくとともに、その業務によって、直接間接に、何百何千何万の家族を結合する。これは、帳簿などは全然つけず、したがって営業の秘密の廃止にはなんのかかわりもない小手工業者や中農の経済とは、違ったものである！

大経営では、業務は、どのみち何百という人、あるいはもっと多くの人に、知られている。ここでは、営業の秘密を保護する法律は、生産または交換の必要に役だつのではなくて、最もあくどいかたちの投機や金儲けに、あからさまなぺてんに、役だつのである。だれでも知っているように、こういうぺてんは、株式企業ではとくにひろまっており、公衆をだますようにつくられた決算報告や貸借対照表によって、とくにうまく隠されている。

小商品経済では、すなわち生産そのものが社会化されておらず、分散し、細分されている小農民と手工業者のあいだでは、営業の秘密は避けられないが、大規模資本主義経済では、この秘密を保護することは、全人民に対立して、文字どおりひとにぎりの人間の特権と利潤を保護することである。株式会社の決算報告の公開制が実施されているという点で、すでに法律もこのことを認めているわけである。しかし、この統制――すべての先進国で、ロシアでもまた、すでに実施されている統制――は、まさに反動的＝官僚的

な統制であって、人民の目をひらくようなものではなく、それによっては、株式会社の業務の実態をあますず知ることはできない。

革命的民主主義的に行動するためには、この点について、大経営や金持に最も完全な報告の提出を要求し、民主主義的な見地からみて有効な人数からなるあらゆる市民グループ（たとえば、千人または一万人の選挙人）に、どの大企業の文書でもかならず点検する権利をあたえるようにしなければならない。こういう措置は、簡単な布告で十分に、たやすく実行できる。こういう措置をとるときにだけ、統制をおこなう面での人民のイニシアチブが、職員組合をつうじ、労働組合をつうじ、すべての政党をつうじて、発揮されるようになるであろう。こういう措置をとるときにだけ、統制は真剣な、民主的なものとなるだろう。

これにくわえて、さらに戦争がある。商工業企業の圧倒的多数は、いまでは、「自由市場」のためではなくて、国家のため、戦争のためにはたらいている。だから、私はすでに『プラウダ』でこう言ったのである。社会主義を導入することは不可能だという理由でわれわれに反論している人々は、うそを、ひどいうそを、ついているのだ。なぜなら、ここで問題になっているのは、いま、ただちに、きょうあすじゅうに社会主義を導入することではなく、官金私消を暴露することだからである、と。(一五三)

資本主義的な「戦争」経済（すなわち、軍需品の納入と直接間接に結びついた経済）は、組織的な、合法的な官金私消である。そして、カデットの諸君は、営業の秘密の廃止に反対しているメンシェヴィキやエス・エルともども、官金私消の助手、隠匿者にほかならない。

現在、戦争は、ロシアに一日五千万ルーブリを費やさせている。この一日あたり五千万ルーブリの金は、大部分、軍需品納入者のふところにはいる。この五千万ルーブリのうち、すくなくとも毎日五百万ルーブリ、おそらくは一千万ルーブリ以上が、資本家や、なにかの形で資本家と結託している官吏の「潔白な所得」となっている。とくに大きな商社や、軍需品納入の取引に金を貸し付ける銀行は、この仕事で前代未聞の利潤をあげており、まさに官金私消で儲けている。というのは、戦争の惨禍を「たね」に、何十万何百万という人々の死を「たね」に、このように人民からだましとり、はぎとることは、官金私消としかよびようがないからである。

軍需品の納入で稼いだ、このとほうもない利潤のこと、銀行が隠している「保証状」のこと、また生活費のうなぎのぼりの騰貴でだれが儲けているかということ、これらに

ついては「みな」が知っており、「社交界」ではうす笑いをうかべながらそのことを話しており、「外聞のわるい」事実は知らぬ顔をしてすませ「きわどい」問題は避けてとおるのが通例のブルジョア新聞にさえ、それについての個個の正確な報道がかなりたくさんのっている。だれでもみな知っているのだが——みながだまっており、みなが大目に見ており、「統制」だの「規制」だのと雄弁をふるっている政府と、みなが仲よく折れあっている!!

革命的民主主義者が、ほんとうに革命家で、民主主義者であるなら、彼らは営業の秘密を廃止し、官品納入者や商人に報告の義務を課し、彼らがいまたずさわっている事業活動の分野を当局の許可なしに離れることを禁止し、隠しだてしたり、人民をあざむいたりするものには財産没収と銃殺*でのぞみ、点検と統制を人民自身の手で、職員組合、労働組合、消費組合などの手で、下から、民主的に組織する法律を、ただちに公布するはずである。

* 死刑反対論は、搾取者が搾取を維持する目的で勤労大衆にたいしてこの刑を適用している場合についてのみ、正しいものと認めることができると、私はすでにボリシェヴィキの新聞で指摘しておいた(六六)。どんな革命政府も、搾取者（つまり、地主と資本家）にたいする死刑なしにすますことは、とうていできないだろう。

わがエス・エルやメンシェヴィキには、おびえた民主主義者という呼び名が、まったくふさわしい。なぜなら、この問題では、彼らは、すべてのおびえた俗物たちが言っていることを繰りかえしているからである。すなわち「きびしすぎる」措置をとると、資本家が「逃げだしてしまうだろう」とか、資本家がいなければ「われわれ」はこの場を乗りきれないだろうとか、われわれを「支持してくれている」イギリス＝フランスの百万長者もおそらく「腹をたてるだろう」などというのがそれである。こういうことを聞くと、ボリシェヴィキが提案しているのは、人類の歴史上で前代未聞の、一度もためされたことのない「ユートピア的な」事柄なのだと、思えるかもしれない。ところが、実際には、すでに一二五年まえのフランスで、ほんとうの「革命的民主主義者」であった人たち、自分たちの戦争が正義の戦争、防衛戦争だということをほんとうに確信していた人たち、心からこの確信をともにしていた人民大衆にほんとうに立脚していた人たち——こういう人たちが、金持にたいする革命的な統制を打ちたて、全世界が頭をさげるような成果をあげることができたのである。そして、それ以後の一世紀と四分の一のあいだに、資本主義の発展が銀行や、シンジケートや、鉄道や、その他いろいろのものをつくりだしたので、労働者と農民が搾取者、地主や資本

家をほんとうに民主主義的に統制するための方策は、百倍もやりやすくなり、単純になった。

実質上、統制の問題全体は、せんじつめれば、だれがだれを統制するか、すなわち、どの階級が統制する階級で、どの階級が統制される階級かという問題である。わが共和国ロシアで、これまで自称革命的民主主義派の「権能ある諸機関」の参加のもとに、統制者の役割をになうものと認められ、いまなおその役割をたもっているのは、地主と資本家である。そのことの不可避の結果は、人民の全般的な憤激を呼びおこしている資本家の強奪であり、資本家が人為的に維持している荒廃である。われわれは、古いものと手を切ることを恐れず、新しいものを勇敢に建設することを恐れずに、断固として、きっぱりと、労働者と農民による地主と資本家にたいする統制に移らなければならない。だが、わがエス・エルとメンシェヴィキは、そうすることを火よりも恐れているのである。

組合への強制的結合

強制的なシンジケート化、すなわち、たとえば工業家の組合への強制的な結合は、すでにドイツで実際におこなわれている。ここにも、新しい点はなにもない。そして、ここでも、共和制のロシアは、エス・エルとメンシェヴィキのおかげで、完全に停滞しきっている。これらのあまり尊敬できない諸党は、あるときはカデットと、あるときはブーブリコフ一味と、あるときはテレシチェンコやケーレンスキーと組んでカドリールを踊ってみせて、ロシアの「座興をとりむすんでいる」。

強制的なシンジケート化は、一方からいえば、国家が資本主義的発展を独特の仕方で促進することである。というのは、資本主義的発展がすすめば、どこでも、階級闘争が組織的になり、組合の数や種類や重要性が増大するようになるからである。また他方からいえば、強制的な「組合化」は、いくぶんでも真剣な統制をおこない、人民の労働をすこしでも節約するための必要な前提条件である。

ドイツの法律は、たとえば、ある地方の、または全国の皮革工場主に、一つの組合に結合する義務を課しており、そのさい、その組合の役員会には、国家の代表が監督のために参加することになっている。このような法律は、直接には、すなわち、それだけでは、いささかも所有関係にふれるものではなく、ただ一人の所有者からもただの一コペイカも取りあげるものではない。統制が反動的＝官僚的な形態、方向、精神でおこなわれるか、それとも革命的民主主義的な形態、方向、精神でおこなわれるかは、このよう

な法律を出しただけでは、まだまえもって決定されない。

こういう法律ならば、わが国でも、一週間といえども貴重な時間をむだにせずに、すぐさま公布できるであろうし、また公布すべきであろう。そのさい、この法律の実施のより具体的な形態や、その実施の速度や、その実施を監督する方法などをどうきめるかは、社会情勢そのものにまかせるべきである。この場合、国家は、そういう法律を公布するのに、特別の機関も、特別の研究も、どんな事前の調査も必要としない。必要なのは、そういう干渉に「慣れておらず」、なんの統制もうけずに昔ふうの経営をやることで確保される特別利潤を手ばなす気持のない資本家のある種の私的利益と手をきる決心をすることだけである。

こういう法律を公布するためには、どんな機関も、どんな「統計」（チェルノーフは、農民の革命的イニシアチブをこういうものとすりかえようとしたのだが）も、必要ではない。なぜなら、この法律を実行する義務を当然負わせられるのは、工場主または工業家、つまり既存の社会勢力であり、それを統制するものも、やはり既存の社会勢力（つまり、政府外の勢力、非官僚勢力）だからである。ただし、この後者は、ぜひとも、いわゆる「下層身分」、すなわち、英雄精神や自己犠牲心や同志的規律の能力にかけて、搾取者にはるかにまさっていることを歴史上つねに示してきた被抑圧、被搾取諸階級に属する社会勢力でなければならない。

いまわが国に、ほんとうに革命的民主主義的な政府があって、その政府が、それぞれの生産部門で、たとえば二名以上の労働者を使っているすべての工場主や工業家に、ただちに郡別および県別の組合に結合する義務を負わせることを決定したとしよう。この法律を厳格に遂行する責任は、なによりもまず工場主、重役、取締役、大株主に負わされる（なぜなら、彼らはみな、現代工業のほんとうの指導者であり、そのほんとうの主人公だからである）。彼らがこの法律をただちに実施するための仕事を避けるときは、彼らは軍務からの脱走兵と見なされて、そういうものとして処罰されるし、全員が各人について、各人が全員について、その全財産によって連帯責任を負うことになる。そのつぎに責任を負わされるのは、職員の全員——彼らもやはり、一つの組合をつくる義務がある——と、労働組合にはいっている労働者の全員とである。「組合化」の目的は、最も完全で、厳格で、詳細な報告制を確立することであるが、おもな目的は、原料の購入、製品の販売、国民の資金・労力の節約のために、業務を結合することにある。経済科学が教えているところでは、またすべてのシンジケート、カルテル、トラストの実例が示しているところでは、分散し

た企業を一つのシンジケートにまとめることによってもたらされるこの節約は、莫大な額にのぼる。この場合、もういちど繰りかえして言わなければならないが、このようにシンジケートに結合することは、それだけでは、所有関係を毛筋ほども変えるものではなく、ただ一人の所有者からもただの一コペイカも取りあげるものではない。このことは、力をこめて強調しておかなければならない。なぜなら、ブルジョア新聞は、一般に社会主義者、とくにボリシェヴィキが、中小経営者を「収奪する」つもりでいるかのように言って、たえず中小経営者を「おどしている」からである。この主張は、明白なうそである。社会主義者は、完全な社会主義的変革の場合にさえ、小農民を収奪するつもりではなく、収奪することもできず、また収奪しないだろうからである。われわれが終始論じているのは、すでに西ヨーロッパで実施されており、わが国でも、さしせまった避けがたい破局とたたかうためには、多少とも一貫した民主主義派なら、ただちに実施しなければならないような、当面の、さしせまった方策にすぎない。

零細経営者や小経営者の企業は、極端に細分されていて、技術的に原始的で、その企業主は文盲だったり、無教育だったりするので、これを組合に結合するさいには、技術的にも、文化的にも、重大な困難にぶつかるであろう。だが、まさにこれらの企業こそ、（まえのほうでわれわれが仮定としてあげた例ですでに言っておいたように）この法律の適用から除外してもよいのである。そして、それらの企業の結合が遅れることはさておいて、たとえ全然結合しなかったとしても、そのために重大な障害をきたすことは、まずありえない。なぜなら、膨大な数の小企業の役割は、生産総額のうちに占める割合からいえば、国民経済全体にとっての意義からいえば、とるにたりないものであり、そのうえ、それらの小企業はなんらかのかたちで大企業に依存していることが多いからである。

決定的意義をもっているのは大企業だけである。そして、大企業には、「組合化」に必要な技術的および文化的な手段と勢力が現存しており、不足しているのは、それらの勢力と手段を動かそうとする革命的権力の確固たる、断固とした、搾取者にたいして容赦なくきびしいイニシアチブだけである。

ある国に技術的素養のある勢力、一般にインテリゲンツィア勢力が乏しければ乏しいほど、強制的結合をできるだけ速やかに、できるだけ断固として布告し、巨大企業や大企業からその実行を始めることが、ますますさしせまった必要となる。なぜなら、結合してこそ、インテリゲンツィアの勢力は節約され、彼らをあますところなく利用し、よ

り正しく配分することができるからである。片田舎に住むロシアの農民でさえ、一九〇五年以来、ツァーリ政府のもとで、この政府がつくりだした数々の障害とたたかいながら、各種の組合をつくりだす点で巨大な進歩をとげることができたのであるから、「下層」の、民主主義派の、職員と労働者の支持、参加、関心、利益に立脚して、彼らに統制の実行を呼びかける、ほんとうに革命的民主主義的な政府がそれを強制すれば、大中の商工業の結合はおそくも数ヵ月で実行できるであろうことは、いうまでもない。

消費の規制

戦争のために、すべての交戦国と多くの中立国は、やむをえず消費を規制するようになった。パンの切符が出現し、ありふれた現象になり、つづいてほかの配給切符も現われた。ロシアもそのそとにとどまっていないで、やはりパンの切符制を実施した。

しかし、おそらく、まさにこの例によって、破局とたたかう反動的=官僚的方法――これは、改革を最小限にとどめようとつとめるものである――と、革命的民主主義的方法――これは、その名に値しようと思えば、時代おくれになった古いものと力ずくで手をきって、できるだけ前進を速めることを、自分の直接の任務としなければならない――とを、最も明瞭に比較することができるだろう。

パンの切符制は、現代の資本主義国家における消費規制の典型的な見本であるが、これは、ただ一つのこと、パンの現在量を全員に足りるように分配することを、その任務とし、かつ実現する(うまくいけば実現する)ものである。消費の最高の限度は、けっしてすべての生産物についてきめられるわけではなく、主要な「人民用の」食料品についてだけきめられる。それでおしまいである。それ以上のことは、だれも気にかけていない。官僚的なやり方でパンの現在量を計算し、それを頭割りにし、配給基準をきめ、それを実施し、それでおしまいにする。奢侈品には手をふれない。なぜなら、それらは「どのみち」少量であり、「どのみち」非常に高価で、「人民」には手がでないからである。だから、例外なくすべての交戦国で、最も几帳面で、最も煩瑣で、最も厳重な消費規制の見本と見なしてもおそらく異論はないと思われるあのドイツでさえ、金持は、どんな消費「基準」をも、たえずくぐっている。このこともまた「みな」が知っており、このことについても「みな」がうす笑いをうかべながら話している。ドイツでは兵営ふうに厳重な検閲が荒れくるっているにもかかわらず、ドイツの社会主義新聞では――ときによるとブルジョア新聞で

さえ——、金持の「献立表」についての記事や報道、どこどこの保養地では（金をたくさん持っている者は……みな、病気にかこつけてそこへ行く）金持が好きなだけ白パンを手に入れているとか、金持は庶民的な食料品のかわりに、よりぬきの、珍しい奢侈品を用いているとかいう報道が、たえず目につくのである。

資本主義の土台、賃金奴隷制の土台、金持の経済的支配の土台をそこなうことを恐れ、労働者や一般に勤労者の自主活動を発展させるのを恐れ、彼らの要求を「あおる」のを恐れている反動的な資本主義国家、こういう国家には、パンの切符制のほかはなにもいらない。こういう国家は、なにをするにも、反動的な目的、すなわち、資本主義を強化し、資本主義がそこなわれないようにし、一般に「経済生活の規制」、とくに消費の規制にあたっては、人民に食わせてゆくのに絶対に必要な方策だけに限ろうという目的を、一瞬間もけっして忘れず、金持にたいする統制という意味での、すなわち、平時によりよい生活をおくり、特権的な地位を占め、食いあき、食いすぎていた人間に、戦時により大きな負担を負わせるという意味での、ほんとうの消費規制には、けっして手をつけない。

戦争が各国民に当面させた課題の反動的＝官僚的な解決は、パンの切符制だけに、食ってゆくのに絶対に必要な「人民用」食料品の均等な分配だけに限られていて、官僚主義と反動性から毛筋ほどもそれない。つまり、貧民、プロレタリアート、人民大衆（「デモス」）の自主活動を高めないようにし、彼らが金持を統制するのを許さないようにし、金持が奢侈品で埋合せをつけるための抜け道をできるだけたくさん残しておこうという目的から、毛筋ほどもそれないのである。そして、すべての国で、繰りかえして言うが、ドイツでさえも——ロシアは言うにおよばず——、抜け道はたくさん残されていて、「庶民」は飢えているけれども、金持は保養地へ行って、乏しい政府の配給基準を、裏口から手に入れた各種の「追加物」で補っており、自分を統制させないのである。

自由と平等のためにツァーリズムにたいする革命をやったばかりのロシアで、その実際の政治諸制度の点で一挙に民主的共和国になったロシアで、とくに人民の目をひき、とくに大衆の不満、いらだち、怒り、憤激を買っているのは、金持が「パンの切符制」をやすやすとくぐっているのをみなが見ていることである。これは、じつにやすやすとなされている。「内証で」、特別高い値段を支払えば、とりわけ「手ずるがあれば」（それがあるのは金持だけである）、なんでも、いくらでも手にはいる。人民は飢えている。消費の規制は、このうえなく狭い、官僚的＝反動的な枠を設

けるだけにとどまっている。政府には、ほんとうに革命的民主主義的な原則にもとづいてこの規制を組織しようという意向や心づかいは、みじんもない。

「みな」が行列に悩まされている、だが……だが、金持は召使を行列に立たせており、そのための専門の召使さえ雇っている！　これが「民主主義」というものなのだ！

国が前代未聞の災禍をこうむっているときに、さしせまる破局とたたかうためには、革命的民主主義的政策は、パンの切符制だけにとどめずに、それに次のものをつけくわえるべきであろう。第一に、全住民を消費組合に強制的に結合すること。というのは、こういう結合をおこなわなければ、消費の統制を完全におこなうことはできないからである。第二に、金持に労働義務を課して、これらの消費組合のために、書記その他それに類した労働をただでやらせること。第三に、ほんとうにすべての消費用生産物を住民に平等に分配し、戦争の負担をほんとうに均等に分担させるようにすること。第四に、住民中の貧しい諸階級がほかならぬ金持の消費を統制するような仕方で、統制を組織すること。

この分野でほんとうの民主主義を打ちたて、人民のうちでまさに最も困窮している諸階級が、統制を組織する面でほんとうの革命精神を発揮するなら、現存のすべてのインテリゲンツィア勢力にその全力をふるいおこさせ、全人民の真の革命的エネルギーを発展させるための、きわめて大きな刺激となるだろう。というのは、いま、共和制の革命的民主主義的ロシアの大臣たちは、他のすべての帝国主義国の真のその仲間たちとまったく同じように、「国民の福祉のために協力して働く」だの、「総力をふるいおこす」だのと、大げさなことばを述べたてているが、これらのことばが偽善だということを、ほかならぬ人民が見ぬき、感じ、気づいているからである。

こうして、足踏みがつづけられ、崩壊が抑えようのない勢いですすみ、破局が近づいている。なぜなら、わが国の政府は、コルニーロフ式に、ヒンデンブルク式に、帝国主義の一般的手本にしたがって、労働者にたいして軍事的苦役を実施することもできないし——そうするには、人民のあいだに、革命の伝統、思い出、痕跡、習慣、制度がまだあまりにも強く生きのこっているので——、他方、革命的民主主義へむかってほんとうに重大な歩みをすすめることも、わが国の政府は望んでいない——ブルジョアジーへの依存、ブルジョアジーとの「連立」の関係が、ブルジョアジーの実際上の特権をおかすのを恐れる気分が、この政府の骨の髄までしみとおっており、それを上から下まで絡みこんでいるので——からである。

政府は民主主義的組織の活動を破壊している

われわれは、破局や飢えとたたかうさまざまな手段と方法を検討してきた。われわれがいたるところで見たのは、一方の民主主義派と、他方の政府とのあいだ、また政府を支持するエス・エルおよびメンシェヴィキのブロックとのあいだの矛盾が非和解的なものであることであった。これらの矛盾がわれわれの叙述のなかに存在しているだけでなく、現実に存在していること、またこれらの矛盾の非和解性が全人民的な重要性をもった衝突によって実際に立証されていることを示すには、わが国の革命の半年の歴史がもたらした二つの、とくに典型的な「結果」と教訓を思いだすだけで十分である。

パリチンスキーの「統治」の歴史が一つの教訓である。ペシェホーノフの「統治」と没落の歴史がもう一つの教訓である。

破局や飢えとたたかう上述の諸方策は、実質上、住民の、まず第一に民主主義派、すなわち住民の大多数者——つまり、まず第一に被抑圧階級である労働者と、農民とくに貧農——の「組合化」を全面的に（強制を用いることさえふくめて）奨励する、ということにまとめられる。そして、これは、住民自身が、戦争のもたらした前代未聞の困難、負担、災禍とたたかうために、自然発生的にとりはじめている道である。

ツァーリズムは、住民が自主的に、自由に「組合」に結合するのを、あらゆる方法で妨げてきた。だが、ツァーリ君主制が倒れてからは、民主主義的諸組織がロシア全土に生まれ、急速に成長しはじめた。自主的にできた民主主義的諸組織、各種の配給委員会、食糧委員会、燃料協議会などが、破局とたたかった。

ところで、ここで検討している問題について、わが国の革命の半年の歴史全体をつうじて最も目だっていることは、共和主義的で革命的だと自称する政府、「革命的民主主義派の全権をもった諸機関」を代表してメンシェヴィキとエス・エルが支持している政府、この政府が、民主主義的諸組織に反対してたたかい、それらに打ち勝ったということである!!

パリチンスキーは、このたたかいによって、最も悲しむべき、最も広範な、全ロシアに聞こえた悪名をはせた。彼は、人民のまえに公然と姿をあらわさずに、政府のかげに隠れて行動した（総じてカデットはこういうふうに行動するほうを選んでおり、「人民向けには」このんでツェレテー

りを押しだし、自分はすべての重要問題をこっそりとかたづけてきたのであるが、ここでもそれとまったく同様に)。パリチンスキーは、自主的にできた民主主義的諸組織のあらゆる真剣な方策を妨げ、それをぶちこわした。なぜなら、およそ真剣な方策で、キート・キートィチたちの法外な利潤や専横を「そこなわ」ずに実施できるものは、一つもなかったからである。ところが、パリチンスキーは、まさにキート・キートィチたちの忠実な擁護者であり召使であった。パリチンスキーは、自主的にできた民主主義的諸組織の命令をあからさまに破棄する——この事実は新聞にものった——までになった!!

パリチンスキーの「統治」の全歴史——彼は何ヵ月ものあいだ、しかもまさにツェレテーリ、スコーベレフ、チェルノーフが「大臣」をしていたころ、「統治」していた——は、乱脈な醜悪事につぐ醜悪事でつづられており、資本家の気にいるように、資本家のけがらわしい私欲をみたすために、民意を、民主主義派の決定をぶちこわした歴史である。新聞になんとかのせることができたのは、いうまでもなく、パリチンスキーの「功業」のほんの一部にすぎず、彼が飢えとのたたかいをどんなに妨げたかを完全に取り調べることは、プロレタリアートが権力を獲得して、パリチンスキーやその同類どもの事件を洗いざらい人民の裁判にかけるときにはじめて、プロレタリアートのほんとうの民主主義的政府だけがおこなうことができる。

パリチンスキーはなんといっても例外であったとか、けっきょく彼は罷免されたではないかとか言って、反論する者があるかもしれない。……だが、パリチンスキーは例外ではなく通則であり、パリチンスキーが罷免されても事態はすこしも改善されなかったし、彼のあとがまにすわったのは、名まえが違うだけでパリチンスキー同様の連中であったし、資本家の「影響力」、資本家の気にいるように飢えとのたたかいをぶちこわす政策は、そのまま残されたのが、実状である。なぜなら、ケーレンスキー一派は、資本家の利益を守る衝立にすぎないからである。

その最もはっきりした証拠は、食糧大臣ペシェホーノフが大臣をやめたことである。だれでも知っているように、ペシェホーノフは、ごくごく穏健なナロードニキである。だが彼は、食糧供給事業を組織するさい、民主主義的諸組織と連絡をたもち、それらに立脚して良心的に活動しようとした。ペシェホーノフの活動の経験と彼の辞職とは、ブルジョアジーとのどんな妥協にでも応じる用意のあるこのしごく穏健なナロードニキ、「人民社会」党の党員さえ、けっきょく辞職しなければならなかったという点で、ますます興味ぶかい! というのは、ケーレンスキー政府が、

資本家、地主、クラークの気にいるように、穀物の公定価格を引き上げたからである!!

次にかかげるのは、エム・スミートが、『スヴォボードナヤ・ジーズニ』(七七)の九月二日付第一号にこの「措置」とその意義について書いたことである。

「政府が公定価格の引上げをきめる数日まえのことであるが、全国食糧委員会で次のような場面が演じられた。私的商業の利益の頑強な擁護者で、穀物専売や、経済生活への国家の介入の猛烈な反対者である右派の代表ロローヴィチが、ほくそ笑みながら、自分のもっている情報によれば穀物の公定価格は近いうちに引き上げられるだろうと、公言した。

労働者・兵士代表ソヴェトの代表は、これに答えて、次のように言った。自分はそんなことはなにも聞いていないし、ロシアに革命がつづいているかぎり、そんな措置がとられるはずがない、いずれにせよ、政府は、民主主義派の権能ある機関である経済会議や全国食糧委員会と相談せずに、そういう措置をとることはできない、と。この声明には、農民代表ソヴェトの代表も同調した。

ところが、なんということだろう！　現実は、まことに無残な仕方でこの論争に修正をくわえた。正しかったのは、民主主義派の代表たちではなくて、選挙有資格分子〔有産分子〕の代表であったことがわかった。民主主義派の代表たちは、民主主義派の権利が侵害されることなど絶対にありえない、と憤慨して断言したにもかかわらず、有資格分子の代表は、そういう侵害の準備がすすめられていることについて、すばらしく情報に通じていたのである」。

つまり、労働者の代表も農民の代表も、人民の圧倒的多数を代表して、はっきりと自分の意見を述べているのに、ケーレンスキー政府は、資本家の利益をはかって、それとは反対の行動をとったのである！

資本家の代表であるロローヴィチは、民主主義派をつんぼさじきにおいて、すばらしくよく情報に通じていたことがわかった。——ケーレンスキー政府のなかでどういうことが起こっているかについて、ブルジョア新聞の『レーチ』や『ビルジョーフカ』(七八)が、だれよりもよく情報に通じていることを、われわれはいつも見てきたし、いまも見ているが、この場合もそれとまったく同じである。

この驚くべき情報通ぶりは、なにを示すものであろうか？　明らかに、資本家が「手ずる」をもっていて、事実上権力を手中ににぎっていることを示している。ケーレンスキーは傀儡にすぎず、資本家はこの傀儡を、必要なときに、必要なようにあやつるのである。何千万の労働者と農

民の利益は、ひとにぎりの金持の利潤の犠牲にされているのである。

　わがエス・エルとメンシェヴィキは、このけしからぬ人民嘲弄に、どう答えているだろうか？　たぶん、彼らは、こんなことをやったケーレンスキーとその同僚たちを監獄に入れるほかはないと、労働者と農民に呼びかけたのではなかろうか？

　とんでもない！　エス・エルとメンシェヴィキは、その手中にある「経済部」の名まえで、さきにあげたあのおどかしの決議を採択しただけであった！(二九)　この決議では、彼らは、ケーレンスキー政府が穀物の価格を引き上げたことは、「食糧供給事業にも、国の経済生活全体にも、きわめて重大な打撃をあたえた破滅的な措置」であり、こういう破滅的な措置をとったのは、法律にあからさまに「違反する」ものであった、と言明している!!

　これが、協調政策の結果であり、ケーレンスキーとなれあう政策、彼を「大目にみ」ようとする政策の結果である！

　政府は、金持、すなわち地主と資本家の気にいるように、統制や、食糧供給や、極度にぐらついている財政を健全化する仕事全体を破滅させるような措置をとり、法律に違反しているのだが、エス・エルとメンシェヴィキは、あいかわらず商工業界との協定を口にし、あいかわらずテレシチェンコとの協議会に出席し、ケーレンスキーを大目にみ、政府が平然としてにぎりつぶすのが関の山の、一片の抗議の決議をするだけにとどめている!!

　この点にこそ、エス・エルとメンシェヴィキが人民と革命を裏切ったという真実、ボリシェヴィキがエス・エルやメンシェヴィキ系の大衆までもふくめて大衆の真の指導者になりつつあるという真実が、とくにはっきりと現われている。

　なぜなら、ボリシェヴィキ党を先頭にしたプロレタリアートが権力を獲得してこそはじめて、ケーレンスキー一派の不法行為を終わらせ、ケーレンスキーとその政府がぶちこわしている民主主義的な食糧組織、物資配給組織等々の活動を復活させることができるだろうからである。

　ボリシェヴィキは、――右にあげた実例でまったくはっきりわかるように――この穀物価格の引上げのような恥さらしに国をおとしいれたエス・エルとメンシェヴィキの動揺的な、ぐらぐらした、真に裏切的な政策に反対して、全人民の利益の代表者として、食糧および配給の事業を確保するため、労働者と農民のさしせまった必要をみたすために行動しているのである！

財政破綻とそれを防ぐ方策

穀物の公定価格の引上げの問題には、まだもう一つの面がある。この引上げは、紙幣が新たに無秩序に増発され、物価騰貴の過程がさらに一歩すすみ、財政の乱脈が強まり、財政破綻が近づくことを意味している。だれでも認めているように、紙幣の発行は、強制借款の最悪の形態であり、まさに労働者や、住民の最も貧しい部分の状態をいちばんひどく悪化させるものであり、財政紊乱から生まれるおもな害悪である。

ところが、エス・エルとメンシェヴィキの支持をうけているケーレンスキー政府は、まさにこの方策にうったえているのだ！

財政の乱脈や避けがたい財政破綻と真剣にたたかうためには、資本の利益と革命的に手をきって、ほんとうに民主主義的な統制、すなわち「下からの」統制、資本家にたいする労働者と貧農の統制を組織するほかには道がない。すなわちこの論文でこれまでずっと述べてきた道である。

際限のない紙幣発行は、投機を奨励し、資本家が投機で幾百万ルーブリも儲けられるようにし、ぜひとも必要な生産の拡大に非常な障害をつくりだす。なぜなら、材料、機械その他の値上りがひどくなって、うなぎのぼりに上がってゆくからである。金持が投機で手に入れた富が隠匿されているとき、事態を収拾するにはどうすればよいか？

多額の、巨額の所得にたいしては、きわめて高率な累進所得税を設けることもできる。わが国の政府も、他の帝国主義諸政府につづいて、それを実施した。だが、それは、たぶんに有名無実で、空文にとどまっている。というのは、第一に、貨幣価値がますます急速に下落しているからであり、第二に、投機が所得の源泉であればあるほど、また営業の秘密が確実に守られていればいるほど、それだけ所得の隠匿もひどいからである。

租税を有名無実でない、ほんとうのものにするためには、紙上の統制にとどまらない、ほんとうの統制が必要である。ところで、統制が官僚的なものであるかぎり、資本家を統制することは不可能である。なぜなら、官僚そのものが、何千という糸でブルジョアジーと結びつき、絡みあっているからである。だから、西欧帝国主義諸国では、君主国であろうと共和国であろうとまったく同様に、労働者にとって軍事的苦役または軍事的奴隷制となるような仕方で「労働義務制」を実施することによってはじめて、財政の整備が達成されている。

反動的＝官僚的な統制――これこそ、戦争の重荷をプロ

レタリアートと勤労大衆に転嫁するために、フランスやアメリカのような民主的共和国もふくめて、帝国主義国家が心えている唯一の手段である。

わが国の政府の政策の基本的な矛盾は、――ブルジョアジーと争いを起こさないため、ブルジョアジーとの「連立」をこわさないため――反動的＝官僚的な統制を実施せざるをえないのに、それを「革命的民主主義的な」統制とよび、ことごとに人民をだまし、ツァーリズムを倒したばかりの大衆をいらだたせ、憤激させている、という点にある。

他方、ほかならぬ革命的民主主義的な方策は、まさに抑圧されている階級である労働者と農民、まさに大衆を組合に結合することによって、金持にたいする最も有効な統制を打ちたて、所得の隠匿と最も効果的にたたかうことを可能にするであろう。

紙幣の濫発を抑えるために、人々は小切手取引を奨励することにつとめている。この方策は、貧民にはなんの意味もない。なぜなら、貧民は、どのみちその日暮しをしており、どのみち一週間で自分の「経済循環」を完了して、やっと稼いだわずかばかりの金を資本家に返上してしまうからである。金持については、小切手取引は大きな意義をもつことができよう。とくに、銀行の国有化や営業の秘密の廃止のような方策が併用されれば、国家は、小切手取引によって資本家の所得をほんとうに統制し、彼らにほんとうに課税し、財政制度をほんとうに「民主化する」（同時にまた整備する）ことができるようになるだろう。

だが、ここで障害になっているのは、ほかでもなく、ブルジョアジーの特権を侵害し、ブルジョアジーとの「連立」を破棄するのを恐れる気持である。なぜなら、真に革命的な方策をとらないかぎり、きわめて真剣な強制をくわえないかぎり、資本家は、どんな統制にも服さず、自分の経理を公開せず、たくわえた紙幣を「決済のために」民主主義国家に引き渡しはしないだろうからである。

組合に結合された労働者と農民は、銀行を国有化し、法律ですべての金持に小切手取引を義務化し、営業の秘密を廃止し、所得の隠匿にたいしては財産の没収でのぞむことをきめる、等々によって、じつにやすやすと、統制を有効でしかも普遍的な統制、ほかならぬ金持にたいする統制に変えることができるであろう。それは、国庫の発行した紙幣を、それを持っている者の手から、それを隠している者の手から、国庫に還流させるような、まさにそういう統制である。

そのためには、革命的プロレタリアートに指導される民主主義派の革命的執権（ディクタツーラ）が必要である。

すなわち、そのためには、民主主義派が実際に革命的にならなければならない。この点に問題の核心がある。わがエス・エルとメンシェヴィキは、まさにそうなるのを望まないで、「革命的民主主義派」の旗印で人民をだます一方、実際には、ブルジョアジーの反動的＝官僚的な政策――例によって《après nous le déluge》あとは野となれ山となれ、という原則に従う政策――を支持しているのだ！

ブルジョア的所有の「神聖」についての反民主主義的な習慣や偏見がどんなに深くわれわれのなかにくいこんでいるか、われわれは、普通、気づいてさえいない。技師または銀行家が労働者の所得と支出、労働者の賃金とその労働生産性についての資料を発表するときには、これはまったく合法的で、公正なことと見なされる。このことを、労働者の「私生活」の侵害だとか、技師の「スパイ活動ないし密告」だとか見なそうと考えるものは、だれもいない。ブルジョア社会は、賃金労働者の労働や賃金を自分の公開の帳簿だと見ており、どのブルジョアでも、いつでもそれに目をとおして、労働者のしかじかの「ぜいたく」とか、しかじかの「怠惰」などと称するものを、いつでも暴露してさしつかえないもののように考えている。

では、これと反対の統制はどうか？　もし職員、事務員、家事使用人の組合に、民主主義国家が、資本家の所得と支出を点検し、それについての資料を公表して、所得の隠匿とたたかう政府を援助するように要請したとすれば、どうであろうか？

ブルジョアジーは、「スパイ活動」や「密告」反対を、どんなに猛烈にわめきたてることだろう！　「主人」が家事使用人を統制し、資本家が労働者を統制するのは、あたりまえのことと見なされ、勤労者や被搾取者の私生活は不可侵のものとは見なされない。ブルジョアジーは、「賃金奴隷」の一人ひとりに報告を要求し、彼の所得と支出をいつなんどき公表してもさしつかえない。ところが、抑圧されている人々が抑圧者を統制し、彼の所得と支出を明るみにだし、彼の奢侈をあばこうとしようものなら、たとえそれが戦時であって、この奢侈が戦線の軍隊の文字どおりの飢えと斃死を引きおこしていようと――おお、とんでもない、ブルジョアジーは「スパイ活動」や「密告」を許さない！

問題は、いつも同じ一つのことに帰着する。すなわち、ブルジョアジーの支配は、真に革命的な、真の民主主義とはあいいれない、ということである。二〇世紀の資本主義国では、社会主義にむかってすすむことを恐れて、革命的民主主義者であることはできない。

社会主義にむかってすすむことを恐れて前進できるか？

以上に述べたことにたいして、流行のエス・エルとメンシェヴィキの日和見主義思想で教育された読者から、さっそく次のような反論が出そうである。ここに述べられている方策の大部分は、実質上、民主主義的な方策ではなくて、すでに社会主義的な方策である、と！

ブルジョア新聞や、エス・エル、メンシェヴィキの新聞で（いろいろな形で）よく見かけるこの流行の反論は、遅れた資本主義の反動的な擁護論であり、ストルーヴェふうの装いをした擁護論である。彼らは言う。われわれは社会主義に移れるまでに成熟してはいない、社会主義を「導入する」のは時機尚早である、われわれの革命はブルジョア革命である、と。――だから、われわれはブルジョアジーの召使でいなければならない、というのである（フランスの偉大なブルジョア革命家たちは、一二五年まえに、地主であろうと、資本家であろうと、すべての抑圧者にたいしてテロルを行使することによって、自分の革命を偉大なものにしたのに！）。

エス・エルもふくめて、ブルジョアジーの御用をつとめるへぼマルクス主義者たちは右のように論じているが、帝国主義とはなにか、資本主義的独占体とはなにか、国家とはなにか、革命的民主主義派とはなにか、ということが、彼らにはわかっていないのである（彼らの意見の理論的基礎を調べてみれば）。もしそれがわかっていたなら、社会主義にむかってすすまずには前進できないことを、認めないわけにはいかないからである。

だれでも帝国主義のことを口にする。だが、帝国主義とは、独占資本主義にほかならない。

ロシアでもやはり資本主義が独占資本主義になったことは、「プロドウーゴリ」（「石炭シンジケート」）、「プロダメト」（「冶金シンジケート」）、砂糖シンジケートその他が、十分明らかに立証している。この同じ砂糖シンジケートは、独占資本主義が国家独占資本主義に成長転化したことを、目のあたりに示している。

ところで、国家とはなにか？　それは、支配階級の組織であり、たとえば、ドイツではユンカーと資本家の組織である。だから、ドイツにおけるプレハーノフ流の人間（シャイデマン、レンシュその他）が「戦時社会主義」とよんでいるものは、実際には、戦時国家独占資本主義であり、もっと簡単明瞭に言えば、労働者にたいする軍事的苦役、資本家の利潤の軍事的保護である。

さて、試みに、ユンカー＝資本家国家のかわりに、地主＝資本家国家のかわりに、革命的民主主義国家、すなわちあらゆる特権を革命的に破壊する国家、最も完全な民主主義を革命的に実現することを恐れない国家を、もってきたまえ。そうすれば、ほんとうに革命的民主主義的な国家のもとでは、国家独占資本主義は、不可避的に、必然的に、社会主義への一歩、いな数歩を意味することがわかるだろう！

なぜなら、巨大な資本主義企業が独占体になるとすれば、つまり、それは全国民の必要をみたすために働くことになるからである。もしまたそれが国家独占体になるとすれば、つまり、それは全国民の必要をみたすために働くことになるからである。もしまたそれが国家独占体になるとすれば、つまり、国家（すなわち、革命的民主主義がある場合には、住民、まず第一に労働者と農民の武装組織）がこの企業全体を指導することになる。——だれの利益のためにか？

——地主と資本家の利益のためにか。それなら、そこにあるのは、革命的民主主義国家ではなくて、反動的官僚国家、帝国主義的共和国だということになる。

——それとも、革命的民主主義派の利益のためにか。それなら、これは社会主義への一歩である。

なぜなら、社会主義は、国家資本主義的独占からさらに一歩をすすめたものにほかならないからである。いいかえれば、社会主義とは、全人民の利益に奉仕するようにされた、そしてそのかぎりで資本主義的独占でなくなった、国家資本主義的独占にほかならない。

そこには中間の道はない。社会主義にむかってすすまずには、独占体（戦争はその数と役割と意義を十倍にも高めた）からさきへすすむことはできないというのが、客観的な発展行程である。

実際に革命的民主主義者になるか。それなら、社会主義にむかって歩みをすすめるのを恐れてはならない。

それとも、社会主義にむかって歩みをすすめるのを恐れ、プレハーノフ式、ダン式、チェルノーフ式に、わが国の革命はブルジョア革命であるとか、社会主義を「導入する」ことはできないとか、等々の論拠でこの歩みを非難するか。

——それなら、ケーレンスキー、ミリュコーフ、コルニーロフのところまで転落することは、避けられない。すなわち、労働者農民大衆の「革命的民主主義的な」願いを反動的＝官僚的に弾圧することは、避けられない。

その中間の道はない。

ここにこそ、わが国の革命の基本的な矛盾がある。

一般に歴史では、とくに戦時には、立ちどまっていることはできない。前進するか、それとも後退するか、どちら

かにしなければならない。共和制と民主主義を革命的な方法でたたかいとった二〇世紀のロシアでは、社会主義にむかってすすまずには、社会主義にむかって歩みをすすめずには、前進することはできない（この歩みは、技術と文化の水準によって制約され、規定される。農民農業に大規模機械制経営を「導入する」ことはできないが、砂糖生産では、それを廃止することはできない）。

前進を恐れるとすれば、それはつまり、後退することである。これこそ、ケーレンスキー一味の諸君が、ミリュコーフやプレハーノフ一味を大喜びさせながら、ツェレテーリやチェルノーフ一味の愚かな手助けをうけながら、やっていることである。

戦争が、独占資本主義から国家独占資本主義への転化を非常に速め、それによって人類をいちじるしく社会主義に近づけたこと、これが歴史の弁証法である。

帝国主義戦争は社会主義革命の前夜である、そしてこれは、戦争がその惨禍によってプロレタリアの蜂起を引きおこすからだけではなく——もし社会主義の経済的条件が成熟していないなら、どんな蜂起も社会主義を生みだしはしないであろう——、また、国家独占資本主義が社会主義のきわめて完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義とよばれる一段とのあいだにはどんな中間の段もないような歴史の階段の一段であるからである。

**

わがエス・エルとメンシェヴィキは、社会主義の問題を空論的な仕方でとりあげ、丸暗記はしたがよく理解できなかった教義の立場からとりあげている。彼らは、社会主義をなにか遠い先の、未知の朦朧とした未来のように考えている。

だが、社会主義は、いまでは、現代資本主義のすべての窓ごしにわれわれを見ている。この最新の資本主義にもとづいて一歩をすすめる大きな方策の一つひとつに、社会主義が直接に、実践的に、くっきりと現われている。

全般的労働義務制とはなんであるか？

それは、最新の独占資本主義にもとづいて一歩をすすめたものであり、一定の総合的な計画にしたがって経済生活全体を規制する方向への一歩であり、人民の労働の節約への、資本主義による人民の労働のばかげたむだづかいを防止する方向への一歩である。

ドイツでは、ユンカー（地主）と資本家が全般的労働義務制を実施している。この場合には、それが労働者にたいする軍事的苦役になることは、避けられない。

だが、革命的民主主義国家のもとにこれと同じ制度があ

るものとして、その意義をよく考えてみたまえ。労働者・兵士・農民代表ソヴェトによって実施され、規制され、指導される全般的労働義務制は、まだ社会主義ではないが、もはや資本主義ではない。これは、社会主義への巨大な一歩であり、完全な民主主義が維持されるという条件のもとでは、大衆に前代未聞の暴力をくわえずには、もはやそれから資本主義へあともどりすることは不可能であるような一歩である。

荒廃との闘争と戦争

さしせまる破局とたたかう方策の問題を考えるとき、われわれは、もう一つの、きわめて重要な問題の解明に取りくむことになる。それは、国内政治と対外政治の結びつきの問題、いいかえれば、帝国主義的略奪戦争とプロレタリア的革命戦争の関係、犯罪的な略奪戦争と正義の民主主義的戦争との関係の問題である。

以上に述べてきた破局とたたかう方策はすべて、すでに指摘したように、国の防衛力、言いかえれば軍事力を非常に強めることになるだろう。これが一つの面である。他の面からいえば、これらの方策は、略奪戦争を正義の戦争に転化し、資本家の利益のために資本家がおこなう戦争を、すべての勤労者と被搾取者の利益のためにプロレタリアートがおこなう戦争に転化せずには、実現することができない。

じっさい、営業の秘密の廃止や、資本家にたいする労働者の統制と結びつけて、銀行とシンジケートが国有化されれば、人民の労働がすばらしく節約され、労力と賃金がはぶけるだけにとどまらないであろう。それは、住民中の勤労大衆、すなわち住民の大多数の状態が改善されることをも意味するだろう。周知のように、現代の戦争では経済の組織が決定的な意義をもっている。ロシアには、穀物、石炭、石油、鉄が十分にある——この点では、わが国の状態は、ヨーロッパの交戦国のどれにもまさっている。そして、右に示したような手段で荒廃とたたかい、この闘争において大衆の自主活動を発揮させ、大衆の状態を改善し、銀行とシンジケートの国有化を実施するなら、ロシアは、自国の革命と自国の民主主義とを利用して、国全体を経済的組織性のはるかに高い水準に引き上げることができるであろう。

もしエス・エルとメンシェヴィキが、あらゆる統制の方策を妨げ生産をサボタージュしているブルジョアジーと「連立」したりせずに、四月にソヴェトへの権力の移行を実現していたなら、そして、「大臣のたらいまわし」遊び

に熱中したり、大臣、次官その他のポストにカデットとならんで官僚としてすわりこむことに懸命になったりせずに、労働者と農民が資本家を統制するのを、彼らが資本家と戦うのを指導することに努力していたなら、ロシアは、いまごろは完全に経済的に改造され、農民が土地をもち、銀行が国有化された国になっていたであろうし、そのかぎりで(そして、これらは、現代生活のきわめて重要な経済的基礎である)他のどの資本主義国よりも高度の国になっていたであろう。

銀行が国有化されている国の防衛力、軍事力は、銀行が私人の手に残されている国よりもまさっている。土地が農民委員会の手にある農民国の軍事力は、地主的土地所有の国よりもまさっている。

一七九二年と一七九三年におけるフランス人の英雄的な愛国主義と軍事的勇敢さの奇跡は、たえず引合いにだされている。しかし、この奇跡をはじめて可能にした物質的、歴史的＝経済的な諸条件のことは、忘れられている。寿命のつきた封建制をほんとうに革命的にかたづけたこと、国全体をより高度の生産様式に、自由な農民的土地所有に移行させたこと、しかも真に革命的民主主義的な急速さと、断固さと、精力と、献身とで移行させたこと、これらが、フランスの経済的基礎を改変し、革新して、「奇跡的」な速さでフランスを救った物質的、経済的な諸条件であった。

フランスの例は、われわれに一つのこと、ただ一つのことを示している。それは、ロシアを防衛力をもった国にするには、またロシアにおいても大衆的英雄精神の「奇跡」をなしとげるには、「ジャコバンふうの」[100]容赦なさで、古いものをすべて一掃し、ロシアを経済的に改変し、革新しなければならない、ということである。だが、二〇世紀においては、ツァーリズムを一掃しただけでは(一二五年まえのフランスは、それだけにとどまりはしなかった)、これをなしとげることはできない。地主的土地所有を革命的に廃止したとしてさえ(われわれは、それさえやっていない。エス・エルとメンシェヴィキが農民を裏切ったからである!)、それだけでは、土地を農民に引き渡しただけでは、これをなしとげることはできない。なぜなら、われわれは二〇世紀に生きているのであって、銀行を支配せずに土地を支配しても、人民の生活に改変と革新をもたらすことはできないからである。

一八世紀末におけるフランスの物質的革新、生産上の革新は、政治的および精神的な革新を、革命的民主主義派およびプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)(民主主義派はプロレタリアートから分離しておらず、後者はまだほとんど前者と融合していた)をともなっていたし、すべて反動的なも

のにたいする容赦ない戦いの宣言をともなっていた。全人民、とくに大衆、すなわち被抑圧諸階級が、限りない革命的熱情に燃えていた。すべての人が、戦争を正義の戦争、防衛戦争と見ていたし、また実際にそうであった。革命的フランスは、反動的＝君主主義的ヨーロッパにたいして、自己を防衛したのであった。ナポレオンの反革命的独裁が戦争を、フランス側についてみて防衛戦争から征服戦争に変えたのは、一七九二―一七九三年のことではなく、それから何年もたってからのこと、すなわち、国内で反動が勝利をおさめたのちのことであった。

ところで、ロシアでは？　われわれは、資本家の利益のために、帝国主義者と同盟して、ツァーリがイギリスその他の資本家と結んだ秘密条約――これらの条約では、ツァーリは、他の諸国、コンスタンティノープル、リヴォフ、アルメニアなどをかすめとると、ロシアの資本家に約束しているのだ――にもとづいて、いまなお帝国主義戦争をつづけている。

ロシアが公正な講和を提議せず、帝国主義と手をきらないあいだは、ロシアの側についてみて、戦争は、不正義の戦争、反動的な戦争、征服戦争である。戦争の社会的性格、その真の意義は、（無知な百姓の卑俗な水準に落ちこんだエス・エルとメンシェヴィキが考えているように）敵の軍隊がどこにいるかできまるのではない。この性格は、戦争がどんな政治の継続かで（「戦争は政治の継続である」）、どの階級がどんな目的で戦争をしているかで、きまるのである。

秘密条約にもとづいて大衆を略奪戦争に引きこんでおいて、大衆の熱情を期待することはできない。革命的ロシアの先進的な階級であるプロレタリアートは、この戦争が犯罪的なことをますますはっきりと認識している。そして、ブルジョアジーは、大衆にこの確信を捨てさせることができなかったばかりでなく、この戦争が犯罪的だという認識はかえって強まっている。ロシアの両首都のプロレタリアートは、最後的に国際主義的になった！

それなのに、どうして戦争にたいする大衆的熱意などを語ることができようか！

国内政治と対外政治――この二つは、たがいに切り離せないように結びついている。大胆に、断固として、偉大な経済的改革を実現している人民の最大の英雄精神がなければ、国に防衛力をあたえることはできない。また、帝国主義と手をきらずには、すべての国の人民に民主主義的講和を提議し、こうして戦争を、征服戦争、略奪戦争、犯罪的な戦争から、正義の戦争、防衛戦争、革命戦争に変えずには、大衆のあいだに英雄主義を呼びおこすことはできない。

国内政治でも、対外政治でも、無条件に、徹底的に資本家と手をきることによってのみ、われわれの革命と、帝国主義の鉄の万力に締めつけられているわが国とを救うことができる。

革命的民主主義派と革命的プロレタリアート

現代のロシアの民主主義派は、ほんとうに革命的であろうと思えば、最後まで革命を支持して、革命的なただ一つの階級であるプロレタリアートの闘争を支持して、プロレタリアートと最も緊密に同盟してすすまなければならない。

これが、未曾有の大規模な、避けがたい破局とたたかう手段の問題の検討から出てくる結論である。

戦争は、はかりしれない危機を生みだし、人民の物質的な力と精神力をふるいおこさせ、今日の社会組織全体に深刻な打撃をあたえたので、人類は、滅びるか、それともより高度の生産様式に最も急速に、最も徹底的に移行するために、自分の運命を最も革命的な階級にゆだねるか、二つに一つを選ばなければならなくなった。

いくつかの歴史的な原因——ロシアが他の国々よりも遅れていたこと、戦争がロシアに特別の困難をもたらしたこと、ツァーリズムが極度に腐敗していたこと、一九〇五年の伝統が異常に生きいきと残っていたこと——のため、ロシアでは、他の国々にさきがけて革命が起こった。革命の結果、ロシアは数ヵ月で、政治制度の点で先進諸国に追いついた。

だが、それだけではない。戦争は仮借ないものであり、容赦ない鋭さで次の問題を提起している。すなわち、滅びるか、それとも経済的にも先進諸国に追いつき、追いこすか、という問題である。

これは可能である。なぜなら、われわれは、多くの先進諸国の既得の経験、それらの国の技術と文化の既得の成果を、目のまえに見ているからである。ヨーロッパで高まっている戦争反対の抗議、成長しつつある世界労働者革命の雰囲気が、われわれに精神的援助をあたえてくれる。帝国主義戦争の時期にあってはきわめてまれな革命的民主主義的自由が、われわれをふるいたたせ、駆りたてている。

滅びるか、それとも全力をあげて突進するか。歴史は、問題をこのように提出している。

こういう時代にプロレタリアートが農民にたいしてとる態度は、農民をブルジョアジーの影響から切り離すという ボリシェヴィキの従来の方針を——適当な修正をくわえながら——確認するものである。これだけが、革命を救う保

障である。

そして、農民は、小ブルジョア大衆全体のなかで、最も人数の多い要素である。

わがエス・エルとメンシェヴィキは、農民をブルジョアジーの影響のもとに引きとめ、農民をプロレタリアートとの連立へではなく、ブルジョアジーとの連立へみちびくという、反動的な役割を引きうけた。

革命の経験は、大衆を急速に教育している。こうして、エス・エルとメンシェヴィキの反動的な政策は、破綻しつつある。彼らは、両首都のソヴェトで敗北をなめた(一〇三)。この両小ブルジョア民主主義政党の内部には、「左翼」反対派が成長しつつある。ピーテルでは、一九一七年九月一〇日のエス・エル党市協議会で、プロレタリアートとの同盟のほうに傾き、ブルジョアジーとの同盟（連立）を拒否するエス・エル左派が(一〇四)、三分の二の多数を占めた。

エス・エルとメンシェヴィキは、ブルジョアジーと民主主義派というブルジョアジーのお気にいりの対置を繰りかえしている。だが、このような対置は、実質上、重さと長さを比較するのと同様に、無意味である。

この世には民主主義的ブルジョアジーというものがあり、ブルジョア民主主義派というものがある。このことを否定できるのは、歴史も経済学もまったく知らない人間だけである。

エス・エルとメンシェヴィキには、ブルジョアジーとプロレタリアートとのあいだに小ブルジョアジーがいるという、争う余地のない事実をおおいかくすために、こういうまちがった対置が必要であった。小ブルジョアジーは、その経済的、階級的地位のため、不可避的に、ブルジョアジーとプロレタリアートのあいだを動揺する。

エス・エルとメンシェヴィキは、小ブルジョアジーをブルジョアジーとの同盟のほうへ引きよせようとする。このことが、彼らの「連立」全体、連立内閣全体、典型的な半カデットであるケーレンスキーの政策全体の核心である。革命の半年のあいだに、この政策は完全に破綻した。

カデットは、それみたことかとばかりにほくそえんでいる。彼らは言う。革命は破綻した、革命は、戦争をも荒廃をも克服することができなかった、と。

うそである。破綻したのは、カデットと、エス・エルおよびメンシェヴィキである。なぜなら、このブロック（同盟）は、半年のあいだロシアを統治し、その半年のあいだに荒廃を強め、軍事情勢を混乱させ、悪化させたからである。

ブルジョアジーとエス・エルおよびメンシェヴィキとの同盟の破綻が完全であればあるほど、人民はそれだけ急速

に学ぶであろう。人民は、それだけ容易に正しい活路を、貧農すなわち大多数の農民とプロレタリアートとの同盟という道を、見いだすであろう。

一九一七年九月一〇—一四日

一九一七年九月一〇—一四日(二三—二七日)に執筆
一九一七年一〇月末に単行の小冊子として「プリボイ」出版所から発行
全集、第五版、第三四巻、一五一—一九九ページ所収
邦訳全集、第二五巻、三四八—三九三ページ所収

革命の一根本問題

あらゆる革命の最も主要な問題は、疑いもなく、国家権力の問題である。権力がどの階級の手にあるかということ、これがすべてを決定する。ロシアの主要な政府党の新聞『デーロ・ナローダ』は、最近(第一四七号)、権力についての口論に気をとられて憲法制定議会の問題も穀物の問題も忘れている人々がいると、苦情を言ったが、エス・エルにはこう答えるべきであろう。——その苦情は自分自身に言いたまえ。「大臣のたらいまわし」がいつまでたっても終わらないのも、憲法制定議会が際限なく延期されているのも、すでに採択され、きめられた穀物の専売制や、国に食糧を確保する諸方策を、資本家が阻害しているのも、なによりもまず、ほかならぬ諸君の党の動揺、不決断のせいではないか。

権力の問題は、避けることも、さきへ延ばすこともでき

ない。というのは、これこそ、革命の発展において、革命の内外政策において、すべてを決定する基本問題だからである。わが国の革命が、権力の構造をめぐって動揺して半年間を「空費した」ことは、争えない事実であるが、これは、エス・エルとメンシェヴィキの動揺的な政策によって引きおこされたことである。そして、これらの党の政策を最終的に規定したものは、小ブルジョアジーの階級的地位であり、労資の闘争のなかでの小ブルジョアジーの経済的不安定性である。

現在における全問題は、非常に内容ゆたかなこの偉大な半年間に、小ブルジョア民主主義派がなにかを学んだか、それとも学ばなかったか、ということにある。もし学ばなかったとすれば、革命は滅びるであろうし、革命を救うことができるのは、プロレタリアートの蜂起の勝利だけであろう。もし学んだとすれば、安定した、動揺しない権力をすぐさま創設することに着手しなければならない。人民革命の時期、すなわち大衆、労働者と農民の多数者を生きいきとした活動にふるいたたせた革命の時期には、明白に、無条件に住民の多数者に依拠する権力だけが、安定したものとなることができる。ロシアでは、いまのところ、国家権力は事実上引きつづきブルジョアジーの手ににぎられている。ただ、ブルジョアジーは、部分的な譲歩をあたえたり（あす、それを取りもどしにかかるだけの話だ）、約束をふりまいたり（それを実行しないだけの話だ）、自分の支配をつつみかくすありとあらゆる掩蔽物をさがしもとめたり（「誠実な連立」という外観で人民をだますためだ）等々するのをよぎなくされているだけである。口さきでは人民的、民主主義的、革命的な政府であるが、実際には、反人民的、反民主主義的、反革命的なブルジョア政府――これが、今日まで存在してきた矛盾であり、権力のまったくの不安定性と動揺との源泉となり、エス・エルとメンシェヴィキの諸君があの嘆かわしい（人民にとって）熱心さでやってきた「大臣のたらいまわし」の源泉となった矛盾である。

ソヴェトの解散と不名誉な死か、それとも全権力をソヴェトに移すか、どちらかである――私は、一九一七年六月はじめの全ロシア・ソヴェト大会でこう述べた[一〇三]。そして、七月と八月の歴史は、あますところのない説得力でこのことばの正しさを確証した。ただひとつソヴェトの権力だけが、安定した権力、人民の多数者に明白に依拠した権力となることができる。――権力を国民中のわずかな少数者、ブルジョアジー、搾取者に事実上引き渡すことを、権力の「基盤の拡張」とよんでいるブルジョアジーの従僕、ポトレソフ、プレハーノフその他が、どんなにうそをつこうと、

同じことである。

ソヴェト権力だけが、安定した権力となることができるであろう。このうえなく激烈な革命の、このうえなく激烈な時機にさえ、倒すことができないのは、このような権力だけであろう。このような権力だけが、革命のたえまない、幅広い発展を、ソヴェトの内部での諸党派の平和的な闘争を、保障することができるであろう。このような権力がつくりだされるまでは、不決断や、不安定や、動揺や、際限のない「権力の危機」や、いつ終わるともない大臣のたらいまわし喜劇や、右翼や左翼の爆発は、避けることができない。

しかし、「権力をソヴェトへ」というスローガンは、たいていの場合といわないまでも、きわめてしばしば、「ソヴェトの多数派諸党からなる内閣」という意味に、まったく誤って理解されている。私は、このはなはだしくまちがった意見を、すこし詳しく論じてみたい。

「ソヴェトの多数派諸党からなる内閣」とは、従来の政府権力機関全体を手つかずに残しておいて、大臣の首のすげ替えをやることである。この機関は、骨の髄まで官僚的であり、骨の髄まで非民主主義的であって、真剣な改良は、エス・エルやメンシェヴィキの綱領にのっている程度のものでさえ、実行する能力がないのである。

「権力をソヴェトへ」とは、従来の国家機関全体、およそ民主主義的なものをいっさい阻止するこの官僚機関を徹底的に改造することであり、この機関を取りのぞいて、それを新しい、人民的な、真に民主主義的なソヴェト機関、すなわち、組織され、武装している人民の多数者、労働者、兵士、農民の機関に代えることであり、代議員の選挙のさいだけでなく、国家の政治や、改良や改革の実行においても、人民の多数者の創意と自主性を発揮させることである。

この差異をもっと明白に、明瞭にするために、さきごろ、政府党であるエス・エル党の新聞『デーロ・ナローダ』がおこなった、一つの貴重な告白を思いおこそう。同紙はこう書いた。——社会主義者の大臣にまかされている諸省でさえ（これはメンシェヴィキとエス・エルが大臣となっていた、あの悪名たかいカデットとの連立時代に書かれたものである）、そういう諸省でさえ、全行政機関は昔のままに残され、あらゆる活動を妨げている、と。

それももっともである。行政の実際の仕事は膨大な官僚軍の手ににぎられているので、大臣の更迭がたいした意味をもたないことは、ブルジョア議会制の国の全歴史が示しており、ブルジョア立憲制の国の歴史もまた、かなりの程度までそれを示している。そして、この官僚軍は、骨の髄まで反民主主義的な精神にみちみちており、何千、何百万

という糸で地主やブルジョアジーに結びついており、あらゆる仕方で彼らに隷属している。この官僚軍は、ブルジョア的諸関係の雰囲気にとりかこまれ、この雰囲気だけを呼吸している。彼らは凍りつき、こりかたまり、こちこちになっていて、この雰囲気からぬけだす力がない。彼らは、これまでどおりに考え、感じ、行動することしかできない。この官僚軍は、上役への服従関係、「国家」の職務にともなうある種の特権関係に縛られており、官僚軍の上層部は、株式と銀行を媒介として、完全に金融資本に隷属していて、自分でも、ある程度まで金融資本の代理人、その利益の実行者、その影響の伝達者となっている。

このような国家機関の手で地主の土地所有の無償廃止や、穀物の専売制などのような改革を実行しようと試みるのは、このうえない幻想であり、このうえない自己欺瞞であり、人民の欺瞞である。この機関は、フランスの第三共和制のような、「君主のいない君主制」としての共和制をつくりだして、共和主義的ブルジョアジーに奉仕することはできるが、資本の権利、「神聖な私的所有」の権利を一掃しないまでも、せめて真剣にそれを削減し制限するような改良を実行することは、このような国家機関には絶対にできない。だから、「社会主義者」が参加した「連立」内閣のどれをとってみても、これらの社会主義者は、個々人としてきわめて誠実であった場合でさえ、いつも、実際には、ブルジョア政府のからっぽな装飾または衝立となり、この政府から人民の憤激をそらす避雷針、この政府が大衆をあざむく道具になっている。一八四八年のルイ・ブランもそうであったし、それ以来イギリスやフランスで社会主義者が入閣した何十という場合もそうであったし、一九一七年のチェルノーフやツェレテーリらの場合もそうであったし、ブルジョア制度が存続し、従来のブルジョア的、官僚的な国家機関が手つかずに残っているあいだは、いつでもそうであったし、これからもそうであろう。

労働者・兵士・農民代表ソヴェトは、それが新しい、はかりしれないほど高度の、くらべものにならないほど民主主義的な国家機関の型であるからこそ、とくに貴重なのである。エス・エルとメンシェヴィキは、このソヴェト（とくにピーテルのソヴェトと、全ロシア・ソヴェトすなわち中央執行委員会）を、「監督」という名目で無力な決議をおこない、希望を述べるのを事とする、つまらないおしゃべり会議に変えるために、あらゆることをやり、およそやらないことはなかった。そして、政府はその決議や希望を、丁重きわまる、いんぎんきわまる笑顔で棚にしまいこむのであった。だが、本式の嵐を予告する、コルニーロフ陰謀という「さわやかなそよ風」が吹いただけで、ソヴェトの

なかのかぴくさいものはみな一時に吹きとばされて、革命的大衆の創意が壮大な、強力な、無敵の本領を発揮しはじめた。

信念の乏しい者はみな、この歴史上の実例に学ぶがよい。「わが国には、かならずブルジョアジーの擁護に傾かざるをえない従来の機関に代わるべき機関はない」と言う者は、恥じるがよい。なぜなら、この機関はあるからである。ソヴェトがそれである。大衆の創意と自主性を恐れるな。大衆の革命的組織を信頼せよ。そうすれば諸君は、コルニーロフ陰謀に反対する団結、決起となって現われた、労働者と農民のあの同じ力、偉大さ、無敵性を、国家生活のすべての分野に見いだすであろう。

大衆を信頼しないこと、大衆の創意を恐れること、大衆の自主性を恐れること、大衆の革命的エネルギーに無条件の、全面的な支持をあたえるかわりに、そのまえで恐れおののくこと、――これが、エス・エルとメンシェヴィキの指導者の最大の過誤であった。ここにこそ、彼らの不決断、彼らの動揺、従来の官僚的な国家機関の古い革袋に新しい酒を盛ろうとする彼らのはてしない、またはてしなく無益な試みの最も奥ぶかい根源の一つがある。

一九一七年のロシア革命における軍隊の民主化の歴史、大臣チェルノーフの歴史、パリチンスキーの「統治」の歴史、ペシェホーノフの辞職の歴史をとってみたまえ。そうすれば、右に述べたことの最も明瞭な確証を、いたるところに見いだすだろう。選挙による兵士の組織を完全に信頼せず、兵士による上官の選挙制の原則を厳重に実行しなかったため、コルニーロフ、カレーヂンらや反革命的な将校が軍隊の首脳部を占める結果になってしまった。これは事実である。そして、コルニーロフ陰謀のあとで、ケーレンスキー政府が万事をもとのままに残し、実際にはコルニーロフ体制を復活していることは、わざと目を閉じようとしない者なら、だれでも見ないわけにはいかない。アレクセーエフの任命、クレンボーフスキー、ガガーリン、バグラチオーンらや、その他のコルニーロフ派との「和睦」、コルニーロフおよびカレーヂンその人にたいする寛大な処置、これらはみな、ケーレンスキーが実際にはコルニーロフ体制を復活していることを、このうえなくはっきりと示している。

中間の道はない。経験は、中間の道などないことを示した。全権力をソヴェトに引き渡し、軍隊を完全に民主化するか、それとも、コルニーロフ体制か、どちらかである。

ところで、チェルノーフの大臣づとめの歴史はどうか？この歴史は、農民の必要を真に満足させるための多少とも真剣な措置のすべて、農民への信頼、農民自身の大衆組織

と行動への信頼を立証するどの措置のすべてが、全農民のあいだに最大の熱情を呼びおこしたことを、証明しなかっただろうか？　ところで、チェルノーフは、カデットや官僚を相手にほとんど四ヵ月も「取引に」「取引を」かさねなければならなかったが、後者による際限のない引き延ばしと奸策とのため、けっきょく、なにもせずに辞職せざるをえなかった。この四ヵ月だけ、またこの四ヵ月のあいだに、地主と資本家は「勝負に勝ち」、地主の土地所有を守りぬき、憲法制定議会を引き延ばし、土地委員会にたいする一連の弾圧さえ始めたのである。

中間の道はない。経験は、中間の道などないことを示した。中央でも地方でも全権力をソヴェトに引き渡し、憲法制定議会が決定するまでの措置として、いますぐすべての土地を農民に引き渡すか、それとも、地主と資本家がすべてを阻止し、地主の権力を復活し、農民を怒らせて、極度に激烈な農民蜂起をおこさせるところまでいくか、どちらかである。

資本家が（パリチンスキーの援助によって）いくぶんでも真剣な生産統制をみなぶちこわしたことについても、商人たちが穀物の専売制をぶちこわし、ペシェホーノフがやろうとしたパンその他の物資の規制された民主主義的分配の手はじめをぶちこわしたことについても、事情はまったく同じである。

現在のロシアの当面している問題は、「新しい改良」を考案したり、なにか「包括的な」改革の「計画」にたずさわったりすることではけっしてない。そんなことではない。「社会主義を導入すること」に反対し、「プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）」に反対している資本家や、ポトレソフ、プレハーノフらは、問題をそういうふうに描いている――あからさまなうそをついて、そういうふうに描いている。実際には、戦争のもたらした未曽有の重荷と災厄、前代未聞の、このうえなく恐ろしい、荒廃と飢えの危険が、おのずから活路を示唆しており、おのずから改良や改革を指示しており、しかも、指示するだけでなくて、絶対に猶予できない改良や改革として、すでに穀物の専売制、生産と分配の統制、紙幣発行の制限、穀物と工業製品との公正な交換、等々を提起しているのが、ロシアの現状である。

この種の措置、しかもまさにこの方向での措置が避けられないことは、だれもみな認めている。そうした措置は、多くの地方で、種々さまざまな方面から着手されている。それらの措置はすでに着手されているが、しかし、どこでも、地主や資本家の反抗のために阻止されており、また阻止されてきた。この反抗は、あるいはケーレンスキー政府（実際には、まったくブルジョア的な、ボナパルティズム

の政府）を媒介として、あるいは従来の国家の官僚機関を媒介として、あるいはまたロシアと「連合国」の金融資本の直接間接の圧力によって、おこなわれている。

比較的最近のことだが、イ・プリレジャーエフが『デーロ・ナローダ』（第一四七号）に、ペシェホーノフの辞職や、公定価格の破綻、穀物専売制の破綻を嘆いて、次のように書いていた。

「勇気と決断――これが、その構成にかかわりなく、わが国の歴代の政府に不足しているものである。……革命的民主主義派は、手をつかねて待っていてはならない。自分で創意を発揮して、経済的混沌に計画的に介入しなければならない。……確固たる方針と、断固たる権力が必要なところがあるとすれば、それはまさにここである。」

真実は、だれが言っても真実である。これは金玉のことばである。ただ、この筆者は、確固たる方針、勇気と決断の問題が、個人的な問題ではなくて、勇気と決断を示す能力のある階級の問題であることを考えなかった。そういうただひとつの階級は、プロレタリアートである。勇気と決断をもった権力、確固たる方針をもった権力とは、プロレタリアートと貧農の執権（ディクタトゥーラ）にほかならない。イ・プリレジャーエフは、自分では意識せずに、この執権（ディクタトゥーラ）にあこがれているのである。

なぜなら、こういう執権（ディクタトゥーラ）は実際になにを意味するであろうか？ コルニーロフ派の反抗が打ち砕かれ、軍隊の完全な民主化が復活され完成されることにほかならない。このような執権（ディクタトゥーラ）が樹立されてから二日もすれば、軍隊の九分九厘まで、この執権（ディクタトゥーラ）の熱狂的な支持者となるであろう。この執権（ディクタトゥーラ）は、農民に土地をあたえ、各地の農民委員会に全権力をあたえるであろう。農民がこの執権（ディクタトゥーラ）を支持するだろうということは、気でも狂わないかぎり、どうして疑うことができよう？ この執権（ディクタトゥーラ）は、ペシェホーノフがたんに約束しただけの事柄（「資本家の反抗は粉砕された」――ペシェホーノフは、ソヴェト大会での有名な演説のなかで、文字どおりこう言った）を実行し、現実とするであろうし、すでに生まれはじめている民主主義的な食料組織や、統制組織その他をけっして排除せずに、かえって支持し、発展させ、その活動の妨げとなっている障害をすべて取りのぞくであろう。

プロレタリアと貧農の執権（ディクタトゥーラ）だけが、資本家の反抗を打ち砕き、権力の真に偉大な勇気と決断を発揮し、軍隊内でも、農民のあいだでも、大衆の熱狂的な、無条件の、真に英雄的な支持を確保することができる。

権力をソヴェトへ――ただひとつこれだけが、今後の発

展を、漸進的な、平和な、穏やかなものに、人民大衆の多数者の意識と決意の水準、彼ら自身の経験の水準に完全にふさわしいものにすることができるだろう。権力をソヴェトへ――これは、国の統治と国の経済の統制とを労働者と農民に完全に引き渡すことを意味する。だれひとり、あえて彼らに反抗するものはないであろう。そして、彼らは、経験にもとづいて、自分自身の実践にもとづいて、土地と生産物とパンを正しく分配することを、急速に学びとるであろう。

『ラボーチー・プーチ』第一〇号、一九一七年九月二七(一四)日
署名――エヌ・レーニン

全集、第五版、第三四巻、二〇〇―二〇七ページ所収
邦訳全集、第二五巻、三九四―四〇一ページ所収

事項注

(一)　ツィンメルヴァルト左派——一九一五年九月にスイスのツィンメルヴァルトで国際社会主義者会議（注六九を参照）がひらかれたさい、レーニンの提唱で結成されたもの。この派は、ロシア社会民主労働党中央委員会、スウェーデン、ノルウェー、スイス、ドイツ各国の社会民主党左派、ポーランド社会民主党反対派、ラトヴィア辺区社会民主党などの組織の代表者を統合していた。レーニンに指導されるツィンメルヴァルト左派は、会議の中央派的多数派とたたかって、決議案や宣言案を提出し、それらのなかで帝国主義戦争を非難し、社会排外主義者の裏切行為を暴露し、積極的な反戦闘争の必要を指摘した。これらの草案は会議の中央派的多数派によって否決された。しかし、ツィンメルヴァルト左派は、自分たちの決議案の一連の重要な命題を、会議で採択された宣言に取りいれさせることができた。ツィンメルヴァルト左派は、この宣言を帝国主義戦争反対闘争の第一歩と評価して、宣言に賛成票を投じ、特別の声明のなかで宣言の不十分さ、非一貫性を指摘し、宣言に賛成する理由を説明した。それと同時に、ツィンメルヴァルト左派は、ツィンメルヴァルト連合全体のなかにとどまりながらも、国際的な規模で独自の活動をおこない、その見解をひろめる、と声明した。左派は、指導機関として、レーニン、ジノヴィエフおよびラデックをメンバーとするビューローを選出し、機関誌『フォールボーテ』をドイツ語で発行した。ツィンメルヴァルト左派の主導力は、ボリシェヴィキであった。ツィンメルヴァルト左派を中心として、国際社会民主主義運動の国際主義的分子が結集しはじめた。

一九一六年四月にキーンタールでひらかれた第二回国際社会主義者会議では、ツィンメルヴァルト左派が会議の代議員四三名のうち一二名を占め、問題によっては代議員の約半数が左派の提案に賛成票を投じた。ツィンメルヴァルト左派に加盟した一連の国の左派社会民主主義者は、それぞれの国で革命的活動をおこない、共産党の創立に重要な役割を果たした。

『フォールボーテ』（『先駆者』）——一九一六年にベルンで発行され、二号だけ——第一号は一月、第二号は四月に——出た。二

(二)　『ソツィアル・デモクラート』（『社会民主主義者』）——ロシア社会民主労働党の中央機関紙、非合法新聞。一九〇八年二月から一九一七年一月まで発行された。一九〇九年二月以後は国外で発行され、レーニンの指導のもとにあった。第一次世界大戦のときには、国際日和見主義、民族主義および排外主義とたたかい、ボリシェヴィキのスローガンを宣伝し、帝国主義戦争とその張本人、専制と資本主義に反対してたたかうよう、労働者階級と勤労大衆に呼びかけた。二

(三)　『ガゼタ・ラボトニチア』（『労働者新聞』）——ポーランド＝リトアニア社会民主党ワルシャワ委員会の非合法機関紙。一九〇六年五月から一〇月まで発行され、一四号出たのちに停刊された。一九一二年のポーランド社会民主党の分裂後、同党内に二つのワルシャワ委員会が生まれ、『ガゼタ・ラボトニチア』という題名の機関紙が二つ発行された。すなわち、一つはワルシャワの中央指導部の支持者が出したもの（一九一一年七月—一九一三年七月）、もう一つは在クラカウの反対派ワルシャワ委員会が出したもので ある（一九一一年九月—一九一六年二月）。ここでは、レーニンは後者を

念頭においている。二

(四) 第一のテーゼ――レーニン『社会主義革命と民族自決権(テーゼ)』、全集、第二二巻、一六五―一八一ページを参照。二

(五) 第二のテーゼ――『ガゼタ・ラボトニチァ』編集局によって作成されたテーゼ『帝国主義と民族的抑圧について』をさす。二

(六) 『ノイエ・ツァイト』における民族問題についての討論――第二インタナショナルのロンドン大会に先だっておこなわれたもので、一八九五―一八九六年の『ノイエ・ツァイト』第三二号、第三三号に発表されたローザ・ルクセンブルクの論文『ドイツとオーストリアにおけるポーランド人の社会主義運動内の新しい諸潮流』がこの討論の口火を切った。この論文は、ポーランド社会党(ぺ・ぺ・エス)の指導者たちの民族主義的立場に反対するものであったが、後者は、ポーランド独立闘争という旗印のもとに、ポーランド人労働者のあいだで分離主義的民族主義の宣伝をおこない、ロシアのプロレタリアートと協力してツァーリズムおよび資本主義とたたかうことから彼らをそらせようとしていたのである。ルクセンブルクは、オーストリア、ドイツおよび帝政ロシアの支配下にあったポーランドの各部分とこれらの国との密接な経済的結びつきを指摘して、ポーランドの社会主義者はポーランドの独立を要求してはならないと考えた。それにともない、彼女は一般に民族自決権の要求にたいして否定的な態度をとった。

討論でルクセンブルクの見地に反対したのは、「ニェポドレグロシチョフツィ」(「独立派」)――ぺ・ぺ・エス右派――のS・ヘッカーで、彼は、『ポーランドの社会主義』という論文を『ノイエ・ツァイト』第三七号に発表し、ぺ・ぺ・エスの指導者たちの民族主義的立場を擁護して、インタナショナルがその綱領でポーランド独立の要求を承認するように要求した。ルクセンブルクは、『ノイエ・ツァイト』第四一号に掲載された『ポーランドの社会愛国主義』という新しい論文で、ヘッカーに反論した。

第三の見地は、『ノイエ・ツァイト』第四二号と第四三号に『ポーランドの終末』という論文をのせたカウツキーによって展開された。ロシアにおける民主主義の勝利だけがポーランドの民族的解放をもたらす、というルクセンブルクの命題に同意しながらも、カウツキーは、同時に、ポーランドの社会民主主義者はポーランド独立の要求をもちだしてはならないという彼女の命題に反対し、民族的抑圧のもとで民族解放の任務を無視するのは、社会主義者の立場からみて絶対に誤りである、と指摘した。

一八九六年のロンドン国際社会主義者大会で採択された決議『労働者階級の政治行動』には、レーニンが書いているように、「あらゆる民族の完全な自決権の、まったく率直な、曲解の余地のない承認、他方では、労働者の階級闘争の国際的統一についての労働者への同じく明確な呼びかけ」がふくまれていた(全集、第二〇巻、四六二ページを参照)。

『ノイエ・ツァイト』(『新時代』)――ドイツ社会民主党の理論雑誌。一八八三年から一九二三年までシュトゥットガルトで発行されていた。エンゲルスの死後、一八九〇年代の後半から、同誌は修正主義者の論文を系統的に掲載するようになった。第一次世界大戦中は、同誌は中央派的立場をとり、社会排外主義者を事実上支持した。

『ポーランド社会党』(ぺ・ぺ・エス)――一八九二年に創立された小ブルジョア的な民族主義政党。二

(七) 一九〇三年と一九一三年の討論――一九〇三年、ロシア社会民主労働党第二回大会の準備中と、大会の席上で、『イスクラ』編

集局の作成した党綱領草案を審議したさい、民族自決権の要求について討論がおこなわれた。ポーランドの社会民主主義者は、この要求をポーランドの民族主義者に手を貸すものと考えて、これを文化的民族的自治という要求に代えることを提案した。同様な立場をとったブンド派は、当時まっこうから民族自決に反対はしなかったが、文化的民族的自治についての条文を綱領草案第九項に補足することを提案した。それと同時に、ブンド派は、党建設上の国際主義に反対し、党組織の連合主義をもちだした。大会は、ポーランド社会民主主義者の見解とブンド派の民族主義的要求とを否決し、民族自決についての条項と党組織の国際主義的原則とを採択した。

一九一三年から一九一四年にかけて、一方では民族運動の高揚、他方では大国的排外主義と地方的民族主義の強化にともない、ふたたび民族問題について討論がおこなわれた。解党派メンシェヴィキ、ブンド派、ウクライナの日和見主義者は、民族問題についてのマルクス主義的綱領に反対し、分離にいたるまでの民族自決権の要求に反対し、この要求に対抗して文化的民族的自治という民族主義的要求をもちだした。ルクセンブルクもこの問題について正しくない立場をとり、その論文『民族問題と自治』(一九〇八—一九〇九年)やその他の諸労作のなかで、民族自決権についての条項をロシア社会民主労働党の綱領から削除する必要を論証しようと試みた。レーニンは、その諸労作『民族問題についての論評』、『民族自決権について』のなかで、日和見主義者の民族主義的立場とルクセンブルクの誤った見解とを批判した(全集、第二〇巻、一—三四ページ、三六五—四二四ページを参照)。

レーニンが、戦争中における民族問題についての「わが党員のあいだの思想上の動揺」と言っているのは、一九一五年の春にベルンでひらかれたロシア社会民主労働党在外支部会議におけるブハーリンの演説、およびブハーリン、ピャタコーフおよびボーシの共同テーゼ『民族自決権のスローガンについて』(一九一五年秋)をさす。これらのなかでは、民族自決権についての党の綱領的要求が否認されていた。三

(八) オクチャブリスト——一九〇五年一〇月一七(三〇)日にツァーリの詔書が発布された直後、ロシアで結成されたオクチャブリスト党(あるいは「一〇月一七日同盟」)の党員のこと。これは、大ブルジョアジーと資本家的経営をおこなっていた地主との利益を代表し、それを擁護する反革命政党であった。オクチャブリストは、ツァーリ政府の内外政策を全面的に支持し、二月革命後は与党となって、成熟した社会主義革命と積極的にたたかった。一三

(九) レーニン全集、第二二巻、一六五—一六六ページを参照。一三

(一〇)「経済主義」——一九世紀末—二〇世紀はじめのロシア社会民主主義派内の日和見主義的潮流、国際日和見主義の一変種。「経済主義者」は、労働者階級の任務を、賃金の引上げや、労働条件の改善などをめざす経済闘争に限り、政治闘争は自由主義的ブルジョアジーのやるべきことだと主張し、労働者階級の党の指導的役割を否定した。労働運動の自然発生性のまえに拝跪する「経済主義者」は、革命的理論の意義を軽視し、マルクス主義党が社会主義的意識を外部から労働運動のなかにもちこむ必要を否定し、それによってブルジョア・イデオロギーに道をひらいた。「経済主義者」は、社会民主主義運動内のばらばらな状態と手工業性を擁護し、労働者階級の中央集権的な党を創立する必要に反対した。レーニンは著書『なにをなすべきか?』のなかで、「経済主義」を思想的に粉砕しつくした。一三

(一) マルクス＝エンゲルス全集、第一九巻、二八―二九ページを参照。一三

(二) レーニン全集、第二二巻、一七二―一七四ページを参照。一四

(三) マルクス＝エンゲルス全集、第一三巻、二七二ページを参照。一四

(四)「文化的民族的自治」――民族問題解決の反マルクス主義的、ブルジョア民族主義的な綱領。オーストリアの社会民主主義者O・バウアーとK・レンナーによってつくりあげられ、オーストリア社会民主党その他の第二インタナショナルの諸党で採用された。この綱領は、分離にいたるまでの民族自決権を否認し、労働者を民族別に区分し、プロレタリアートの国際的統一を破壊するものであった。それは、プロレタリアと勤労農民がブルジョア民族主義の思想的影響下におちいるのを容易にし、自民族の搾取階級にたいする闘争から、また国家全体の一貫した民主主義的改造の任務から、彼らをそらせるものであった。一五

(五) レーニン全集、第二二巻、一七六―一七七ページを参照。一八

(六) レーニン全集、第二二巻、一七〇ページを参照。一九

(七)『ベルナー・タークヴァハト』(『ベルンの哨兵』)――スイス社会民主党の機関紙。一八九三年にベルンで創刊された。第一次世界大戦の初期には左派社会民主主義者の論文を掲載した。一九一七年からは、公然と社会排外主義者を支持するようになった。一九

(八) レーニン『戦争とロシア社会民主党』、同、第二一巻、一三―二一ページ、および『ロシア社会民主労働党在外支部会議』、同一五三―一五四ページを参照。二一

(九) レーニン全集、第二二巻、一七一―一七二、一七三―一七四ページを参照。二一

(一〇)「インテルナツィオナーレ・グループ」(スパルタクス団)――ドイツ社会民主党左派の革命的組織。一九一五年四月、R・ルクセンブルクとF・メーリングが雑誌『インテルナツィオナーレ』を創刊したが、それを中心にしてドイツ社会民主党左派の大部分が結集した。一九一六年一月一日にベルリンでひらかれた社会民主党左派の全国協議会で、このグループの組織ができ、「インテルナツィオナーレ」グループと名のる決定を可決した。一九一六年からは、一九一五年に発行された政治的リーフレットのほか、「スパルタクス」の署名で『政治的書簡』を非合法に刊行し、普及させはじめた。それにともない、このグループは「スパルタクス」団とよばれるようになった。二二

(一一) レーニン『ユニウスの小冊子について』、全集、第二二巻、三五三―三七一ページを参照。二二

(一二) ストルーヴェ主義――マルクス主義の自由主義的、ブルジョア的な歪曲。ロシアにおける「合法マルクス主義」の主要な代表者ペ・ベ・ストルーヴェの名にちなんでこうよばれた。「合法マルクス主義」は、一九世紀の九〇年代に社会政治的潮流としてロシアの自由主義的ブルジョア・インテリゲンツィアのあいだに生まれた。ストルーヴェを先頭とする「合法マルクス主義者」は、マルクス主義を利用してブルジョアジーの利益をはかろうと試みた。ストルーヴェ主義は、マルクス主義のうちから自由主義的ブルジョアジーに受けいれられるものばかりをとりだし、マルクス主義の生きた魂――その革命性、資本主義の不可避的な没落についての学説、プロレタリア革命とプロレタリアートの独裁についての学説――を捨てさせるものであった。二三

(一三)『グロッケ』(『鐘』)――隔週刊のドイツの雑誌。一九一五―

一九一五年に、はじめはミュンヒェンで、のちにはベルリンで、ドイツ社会民主党員の社会排外主義者パルヴスが出していたもの。二四

(二四)　レーニン全集、第二一巻、一七三ページを参照。二九

(二五)　エンゲルス『民主的汎スラヴ主義』、全集、第六巻、二六六—二八四ページを参照。二九

(二六)　エンゲルス『労働者階級はポーランドについてなにをなすべきか?』、全集、第一六巻、一五九ページを参照。三二

(二七)　レーニン全集、第二二巻、一七三—一七五ページを参照。三六

(二八)　『リヒトシュトラーレン』(『光線』)——月刊雑誌、ドイツ社会民主党左派の一グループ(「ドイツ国際派社会主義者」)の機関紙。一九一三年から一九二一年まで、不定期にベルリンで発行されていた。三六

(二九)　ローザ・ルクセンブルクの論文『民族問題と自治』をさす。この論文は、ポーランド語の雑誌『プシェグロント・ソツィアルデモクラトィチヌィ』(『社会民主主義評論』)の一九〇八—一九〇九年の諸号に連載された。三九

(三〇)　「フラキ」(「分派」)——改良主義的民族主義政党であるポーランド社会党(ペ・ペ・エス)の右派。ピルスツキ一派に率いられるペ・ペ・エスは、ポーランド独立闘争というスローガンのもとに、ポーランドの労働者のあいだで分離主義的民族主義の宣伝をおこない、ロシアの労働者と協力して専制および資本主義とたたかうことから彼らをそらせようとした。

一九〇六年にペ・ペ・エスが分裂して、ペ・ペ・エス「左派」と、ペ・ペ・エスの民族主義を踏襲するペ・ペ・エス「右派」(「フラキ」)とが成立した。第一次世界大戦中から戦後にかけて、「フラキ」は民族排外主義の政策をとった。三九

(三一)　マルクス＝エンゲルス二巻選集、第八巻、五三七—五三八ページを参照。四一

(三二)　『ナーシェ・スローヴォ』(『われわれの言葉』)——メンシェヴィキの新聞。『ゴーロス』(『声』)に代わって、一九一五年一月から一九一六年九月までパリで発行されていた。トロツキーも編集者のひとりであった。四三

(三三)　カデット——ロシアの自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの主要な政党であった立憲民主党の党員のこと。同党は、一九〇五年一〇月に結成され、ブルジョアジーの代表者、地主のなかのゼムストヴォ活動家、ブルジョア・インテリゲンツィアが、これに参加した。その後、カデットは帝国主義ブルジョアジーの政党となった。第一次世界大戦中、カデットはツァーリ政府の侵略的対外政策を積極的に支持した。二月革命のときには君主制を救おうとつとめた。ブルジョア臨時政府内で指導的な地位を占めたカデットは、アメリカ、イギリス、フランスの帝国主義者に有利な反人民、反革命の政策を推しすすめた。十月革命が勝利すると、ソヴェト権力に敵対し、あらゆる反革命的武力行動や干渉軍の軍事行動にくわわった。彼らの多くは国外に亡命して、反ソ活動をつづけた。四三

(三四)　『レーチ』(『言論』)——カデット党の日刊の中央機関紙。一九〇六年にペテルブルグで創刊され、一九一七年一〇月二六日(一一月八日)に閉鎖されたが、翌年八月までいろいろな題名で発行された。四三

(三五)　『リーブル・ベルジック』(『自由ベルギー』)——ベルギー労働党の非合法雑誌。一九一五年から一九一八年までブリュッセルで発行されていた。四三

(三六)　レーニン『ロシア社会民主労働党中央委員会と党活動家の

一九一三年夏の会議の諸決議』、全集、第一九巻、四五四―四五六ページを参照。四七

(三七)『ナーシ・ゴーロス』(『われわれの声』)——メンシェヴィキの合法新聞。一九一五―一九一六年にサマラで発行され、社会排外主義の立場をとった。四八

(三八)『ペ・キエフスキー(ユ・ピャタコーフ)への回答』——この論文は、一九一六年八月に書かれたゲ・エリ・ピャタコーフ(ペ・キエフスキー)の論文『金融資本の時代におけるプロレタリアートと「民族自決権」』にたいする回答であった。論文の手稿には、『自決についてのキエフスキーの論文とそれにたいするレーニンの回答』という、レーニンの書きこみ。レーニンの回答はピャタコーフに送られた。四九

(三九)　**軍備撤廃を支持する多くの人々**——レーニンが念頭においているのは、まずオランダの左派社会民主主義者ローラント・ホルストの論文『民兵か、それとも軍備撤廃か?』である。この論文は、スイス社会民主党の雑誌『ノイエス・レーベン』(『新生活』)第一〇―一一号(一九一五年一〇月―一一月)、第一二号(一二月)に掲載された。

レーニンがスイスの青年と言っているのは、主として、当時スイスで発行されていた雑誌『ユーゲント・インテルナツィオナーレ』(注六四を参照)をさす。同誌を中心として、スイスの左派社会民主主義者が結集していた。同誌第三号に、『人民軍か、それとも軍備撤廃か?』という編集局論文が掲載されている。

この問題についてのスカンディナヴィア(スウェーデン、ノルウェー)の社会民主党左派の立場は、『ソツィアル-デモクラート論集』第二号に掲載されたK・チルブームや、A・ハンセンの論文に現われていた。

「軍備撤廃」のスローガンについては、レーニンの論文『プロレタリア革命の軍事綱領』、本書、一〇五―一一五ページを参照。五〇

(四〇)「イスクラ」派——新聞『イスクラ』(旧『イスクラ』)を中心とするレーニン派のこと。

『イスクラ』(『火花』)——一九〇〇年一二月にレーニンが創刊した最初の全国的な非合法のマルクス主義新聞で、経済主義の克服、党のマルクス主義的綱領と組織原則の確立、統一的な革命党の建設などに決定的な役割を果たした。『イスクラ』は党勢力の団結の中心、党幹部の結束と教育の中心となった。一九〇三年七―八月にひらかれたロシア社会民主労働党第二回大会後、メンシェヴィキはプレハーノフの支持をえて、『イスクラ』をその手ににぎった。第五一号までのレーニンのボリシェヴィキ的『イスクラ』を旧『イスクラ』、第五二号からのメンシェヴィキの日和見主義的『イスクラ』を新『イスクラ』と言う。五三

(四一)　**ナロードニキ主義**(人民主義)——一八六〇年代のロシアに生まれ、地主の抑圧および農奴制の遺物にたいする農民の抗議を反映した社会的潮流。ナロードニキ主義は、資本主義的発展の合法則性が理解できないで、人類社会をいっそう発展させるうえでプロレタリアートの果たす革命的役割を否認した。それは、農民共同体を社会主義の萌芽と見なし、また農民を主要な革命勢力と見なした。ナロードニキ主義は、農民国にとって典型的なユートピア社会主義の一変種であった。

一八七〇年代のはじめに、ナロードニキのあいだにバクーニン、ラヴローフおよびミハイローフスキーの観念論的折衷主義理論がひろまった。彼らは、歴史における人民大衆の役割を過小評価し、少

数の「批判的に思考する個人」が人類社会の発展を規定するという見解をとった。ここからしてまた、ナロードニキのあいだに無政府主義的な傾向が生まれた。その後、ナロードニキは、ツァーリズムと妥協する自由主義的コースをたどった。

こうしてはじめ進歩的だった運動は、反動的な運動に転化し、一八七〇年代には民主主義的な革命運動の発展を妨げるようになった。ナロードニキのイデオロギーを粉砕して、ロシアにマルクス主義が普及する道をひらいたのは、プレハーノフおよびとくにレーニンであった。五五

(四二)　これは召還派と最後通牒派をさしている。

召還派――一九〇八年にボリシェヴィキのあいだに生まれた日和見主義的グループ。召還派は、革命的言辞に隠れて、第三国会から社会民主党議員団を召還し、合法団体内での活動をやめるように要求した。召還派は、反動期には党は非合法活動だけをおこなうべきだと声明し、国会、労働組合、協同組合、その他の合法・半合法の大衆団体に参加することを拒否し、党活動をすべて非合法団体に集中することが必要だと考えた。

最後通牒派は、召還派と外形が違うだけであった。社会民主党議員を革命的精神で教育し、彼らの誤りを克服する面倒な仕事の必要を認めない最後通牒派は、党中央委員会の決定に無条件に服従せよという最後通牒を国会議員団に提示し、それが履行されない場合には社会民主党議員を国会から召還することを提案した。最後通牒主義は、実際には隠蔽された召還主義、偽装した召還主義であった。五五

(四三)　民族自決権についてのキエフスキー(ピャタコーフ)の論文を、レーニンは『ソツィアル-デモクラート論集』第三号にのせることを提案した。そして同じ号に、ピャタコーフの日和見主義的立場を暴露したレーニンの論文『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」について』がのるはずであった。しかし、この第三号は発行されなかった。五六

(四四)　レーニン全集、第二一巻、一五三―一五四ページを参照。五七

(四五)　同、一五六―一五七ページを参照。五八

(四六)　同、三〇六―三〇七ページを参照。五八

(四七)　ベルン執行委員会――一九一五年九月五―八日にツィンメルヴァルトにおける国際主義者の第一回社会主義者会議で創設された国際社会主義委員会のこと。その機関紙『在ベルン国際社会主義委員会。通報』は、英語、フランス語、ドイツ語で、一九一七年一月までに六号出た。六四

(四八)　『ソツィアル-デモクラート論集』――レーニンが創刊したもので、『ソツィアル-デモクラート』編集局から発行され、全部で二号出た。第一号は一九一六年一〇月に、第二号は同年一二月に発行された。

なお、レーニン『ユニウスの小冊子について』、全集、第二二巻、三五六―三六三ページを参照。六四

(四九)　レーニン『社会主義革命と民族自決権(テーゼ)』、全集、第二二巻、一七四―一七五ページを参照。六五

(五〇)　エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』、マルクス=エンゲルス選集、第七冊、二六八―二六九ページを参照。七四

(五一)　レーニン『社会主義革命と民族自決権(テーゼ)』、全集、第二二巻、一六七ページを参照。七四

(五二)　全集ドイツ語版では、「実現可能」となっている。七五

(五三)　レーニン全集の四版以前の版では、「実現可能であるが」となっている。七六

（五四）　黒百人組――極反動の暴力団体（ロシア国民同盟、大天使ミカエル会議）がこうよばれていた。一九〇五年に結成され、そのなかではルンペン・プロレタリア、小商人、小手工業者の出身者が多かった。大地主、大商人に指導され、官憲の支持をえて、解放運動の弾圧やユダヤ人の虐殺、革命家の暗殺などの暴力行為をはたらいた。ここからして、極右派を総称して黒百人組とよぶようになった。八〇

（五五）　ダモクレスの剣――あすとも知れぬ運命、いつなんどき危険がふりかかってくるかもしれないことを示すたとえ。紀元前四世紀のころ、シチリアのシラクーザの僭主ディオニシオスは、酒宴のさい、その臣ダモクレスの頭上に一筋の馬の毛で一本の剣をつるし、歓楽と満足のむなしさを示したという故事による。八一

（五六）　エンゲルス『反デューリング論』、全集、第二〇巻、四二ページを参照。八三

（五七）　レーニン『社会主義革命と民族自決権（テーゼ）』、全集、第二二巻、一六七ページを参照。八四

（五八）　同、一六五ページを参照。八五

（五九）　本書、四〇―四二ページを参照。八六

（六〇）　ギリシア暦のカレンダスの日――カレンダスは、古代ローマで月の第一日のことであるが、ギリシア暦にはそういう名称がない。つまり「ギリシア暦にカレンダスがめぐってくるまで」というのは、いつまでもけっしてこない（あるいは、しない）という意味。八六

（六一）　レーニン全集、第二一巻、一五六―一五七ページを参照。九六

（六二）　レーニン『いくつかのテーゼ』、全集、第二一巻、四一八ページを参照。九九

（六三）　組織委員会――メンシェヴィキの指導的中央部。一九一二年、解党派の八月協議会で創設された。第一次世界大戦中、組織委員会は社会排外主義の立場をとり、ツァーリズムの側についてみた戦争を正当化し、民族主義と排外主義の思想を宣伝した。ロシア国内で活動していた組織委員会のほかに、その在外書記局があって、中央派に近い立場をとり、国際主義的言辞に隠れて、実際にはロシアの社会排外主義者を支持した。組織委員会は、一九一七年八月にメンシェヴィキ党の中央委員会が選出されるまで活動した。

　レーニンがここで言っているセムコーフスキーの論文は、一九一五年三月二一日付の新聞『ナーシェ・スローヴォ』第四五号に掲載された『ロシアの崩壊か？』をさすものと思われる。

『ゴーロス』（『声』）――メンシェヴィキの日刊新聞。一九一四年九月から一九一五年一月までパリで発行され、トロツキーが指導的役割を果たしていた。はじめの五号は『ナーシ・ゴーロス』（『われわれの声』）という名称で発行された。一〇一

（六四）　『ユーゲント・インテルナツィオナーレ』（『青年インタナショナル』）――ツィンメルヴァルト左派に同調していた国際青年社会主義組織連合の機関誌。一九一五年九月から一九一八年五月までチューリヒで発行されていた。一〇五

（六五）　グリムのテーゼ――R・グリムが作成し、新聞『グリュートリアーナー』（『グリュートリ派』）一九一六年七月一四日および一七日付、第一六二号、および一六四号に発表された軍事問題についてのテーゼをさす。

　スイスが戦争に巻きこまれる危険が強まったので、スイス社会民主党内では戦争にたいする態度の問題について討論が起こった。一九一六年四月、スイス社会民主党指導部は、党の有力な活動家――グリム、ミュラー、ネーヌ、プリューガーその他――に、この問題についての意見を述べるよう要請した。彼らはそれぞれ論文やテー

ゼを書き、党の諸新聞に発表した。レーニンは討論の経過を注意ぶかく跡づけ、資料を分析し、テーゼについて自分の意見を書いた。一〇五

(六六)『ノイエス・レーベン』(『新生活』)――スイス社会民主党の月刊の機関誌。一九一五年一月から一九一七年一二月までベルンで発行されていた。ツィンメルヴァルト右派の見解を説いたが、一九一七年のはじめからは社会排外主義の立場をとった。一〇五

(六七) 本書、四〇―四二ページを参照。一〇七

(六八) 本書、一四五―一四八ページを参照。一〇九

(六九) スイスのツィンメルヴァルトとキーンタールでひらかれた国際社会主義者会議をさす。

ツィンメルヴァルト(または第一回)国際社会主義者会議は、一九一五年九月五―八日にひらかれた。ヨーロッパの一一ヵ国(ドイツ、フランス、イタリア、ロシア、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア、スウェーデン、ノルウェー、オランダ、スイス)の代表三八名が出席した。ロシア社会民主労働党中央委員会の代表団は、レーニンが指導した。

会議で討議された問題は、(一) 各国代表の報告、(二) ドイツおよびフランス代表の共同声明、(三) 原則的決議の採択についてのツィンメルヴァルト左派の提案、(四) 宣言の採択、(五) 国際社会主義委員会の選挙、(六) 戦争犠牲者と被迫害者にたいする同情決議の採択であった。

会議は宣言――『ヨーロッパのプロレタリアに訴える』檄を採択した。そのなかには、レーニンと左派社会民主主義者の強い要請で、革命的マルクス主義の一連の基本命題が取りいれられた。会議は、前記の共同声明と同情決議を採択し、国際社会主義委員会を選出した。会議で結成されたツィンメルヴァルト左派は、会議の中央派的多数派と積極的にたたかったが、左派のなかでは、ボリシェヴィキ党の代表だけが最後まで一貫した立場をとった。

キーンタール(または第二回)国際社会主義者会議は、一九一六年四月二四―三〇日にスイスのキーンタールでひらかれた。一〇ヵ国(ロシア、ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ポーランド、ノルウェー、オーストリア、セルビア、ポルトガル)の代表四三名が出席した。それ以外に、来賓としてイギリス代表、青年インタナショナル書記局代表も出席した。ロシア社会民主労働党中央委員会は、レーニンほか二名の代表を出席させた。

会議で討議された問題は、(一) 戦争を終わらせるための闘争、(二) 講和問題にたいするプロレタリアートの態度、(三) 宣伝と扇動、(四) 議会活動、(五) 大衆闘争、(六) 国際社会主義ビューローの招集であった。

レーニンを先頭とするツィンメルヴァルト左派は、キーンタール会議では、ツィンメルヴァルト会議のときよりも強固な地歩を占めた。これは、国際労働運動内の力関係が国際主義に有利に変化したことを反映するものであった。

会議は宣言――『荒廃と死にいたらしめられている諸国民へ』の訴え――を採択し、平和主義と国際社会主義ビューローとを批判する決議を可決した。レーニンは、会議の諸決定を、帝国主義戦争とたたかう国際主義者を結集するうえでさらに一歩を前進したものと評価した。なお注一を参照。一一一

(七〇)「社会民主主義同志団」――ドイツの中央派の組織。社会民主党国会議員団から脱退した国会議員が、一九一六年三月に結成したもの。このグループの指導者は、H・ハーゼ、G・レーデブール、

W・ディットマンであった。グループは、ベルリン組織の過半数を制していた。「社会民主主義同志団」は、一九一七年四月に結成されたドイツ独立社会民主党の中核となったが、この党は、公然たる社会排外主義者を是認し、彼らとの統一を維持することを主張した。一二一

（七一）　**イギリス独立労働党**――ストライキ闘争が激化し、ブルジョア政党からの独立を求めるイギリス労働者階級の運動が強まるなかで、一八九三年に「新労働組合」の指導者たちによって創立された改良主義的組織。入党したのは、「新労働組合」員、一連の古い労働組合員、フェビアン派の影響下にあったインテリゲンツィアおよび小ブルジョアジーの代表者たちであった。独立労働党は、創立以来ブルジョア改良主義の立場をとり、議会的闘争形態や自由党との議会取引にあけくれた。一二一

（七二）　**戦時工業委員会**――一九一五年五月に帝国主義的大ブルジョアジーがツァーリズムの戦争遂行を助けるためにロシアに創設したもの。ブルジョアジーは、労働者を自分たちの影響下におき、彼らに祖国防衛の気分を植えつけようとして、この委員会に「労働者グループ」をつくり、それによって労資の「階級平和」が確立されたかのように見せかけようと考えた。ボリシェヴィキは、戦時工業委員会のボイコットを宣言し、労働者の大多数の支持をえてボイコトに成功した。一二三

（七三）　**バーゼル宣言**――一九一二年一一月二四―二五日にバーゼルでひらかれた臨時国際社会主義者大会で採択された戦争にかんする宣言。宣言は、せまりくる帝国主義世界戦争の脅威を諸国民に警告し、「この戦争の略奪目的を暴露し、プロレタリアートの国際連帯の威力を資本主義的帝国主義に」対置することによって断固たる平和擁護闘争をおこなうよう、万国の労働者に呼びかけた。バーゼル宣言には、一九〇七年のシュトゥットガルト大会の決議のうちから、帝国主義戦争が起こった場合には、戦争によって引きおこされた政治的・経済的危機を利用して社会主義革命のためにたたかうように、社会主義者に勧告していた一節が取りいれられた。一二三

（七四）　**『サンティネル』**（『哨兵』）――スイスのヌシャテル州の社会民主党組織の機関紙。一八八四年にショー－デ－フォンで創刊された。第一次世界大戦の初期には、国際主義の立場をとった。一二五

（七五）　**『フォルクスレヒト』**（『人民の権利』）――スイス社会民主党の日刊の機関紙。一八九八年からチューリヒで発行されている。第一次世界大戦中は、レーニンをはじめツィンメルヴァルト左派の論文を掲載した。一二五

（七六）　**アーラウ党大会**――一九一五年一一月二〇―二一日にアーラウでひらかれたスイス社会民主党大会をさす。大会の中心議題は、国際主義者のツィンメルヴァルト連合にたいする同党の態度であった。この問題をめぐって、党内の三つの流派――（一）反ツィンメルヴァルト派（グロイリヒ、プリューガーなど）、（二）ツィンメルヴァルト右派の支持者（グリム、グラーバーなど）、（三）ツィンメルヴァルト左派の支持者（プラッテン、ノブスなど）――の闘争が展開された。

グリムの提出した決議案では、スイス社会民主党はツィンメルヴァルト連合に加入して、その右派の政治方針に同調するように、という提案がなされていた。スイスの左派社会民主主義者は、ローザンヌ支部の名でグリムの決議案への修正動議を提出した。修正案は、大衆的な革命的反戦闘争を展開する必要を認めることを提案し、またプロレタリアートの革命の勝利だけが帝国主義戦争を終結させることができる、と言明していた。ローザンヌ支部の修正動議がグリ

ムの圧力で撤回されると、ボリシェヴィキのエム・エム・ハリトーノフ（スイスの社会民主党組織の一つから議決権をもつ代議員として出席していた）が、それをもう一度提出した。グリム一派は、戦術的考慮から修正動議を支持しないわけにはいかなかった。大会は、大多数（二五八票対一四一票）で左派の修正動議を採択した。一二五

（七七）マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』第二版（一八六九年）への序文』、全集、第八巻、五四三ページを参照。一二七

（七八）『コンムニスト』（『共産主義者』）――レーニンが組織した雑誌。『ソツィアル－デモクラート』編集局が、資金を提供したピャタコーフ、ボーシと共同で発行した。編集局にはブハーリンもはいった。一号（合併号）だけ出たが、これにはレーニンの論文が三篇発表された。

　雑誌の出版計画は、一九一五年の春、レーニンによって立てられた。レーニンは、この雑誌を左派社会民主主義者の国際的機関誌にするつもりであった。だが、まもなく『ソツィアル－デモクラート』編集局とブハーリン、ピャタコーフ、ボーシとのあいだの意見の相違が表面化し、最初の号が出たあとでそれが激化した。このグループは、民族自決権、民主主義的要求、最小限綱領一般など、党の綱領および戦術の原則的諸問題について誤った立場をとり、分派的目的に雑誌を利用しようとしたのである。

　このグループの反党的行動を考慮して、『ソツィアル－デモクラート』編集局は、レーニンの提案にしたがって、雑誌の発行の打ち切りを声明した。一二八

（七九）『ロシア社会民主労働党組織委員会在外書記局通報』――メンシェヴィキの新聞。一九一五年二月から一九一七年三月までジュネーヴで発行され、全部で一〇号出た。中央派的立場をとった。一三一

（八〇）マルクス＝エンゲルス二三巻選集、第六巻、四九〇－四九一ページを参照。一三三

（八一）マルクス＝エンゲルス二三巻選集、第八巻、五三七ページを参照。一三三

（八二）マルクス＝エンゲルス二三巻選集、第一七巻、一九六ページを参照。一三三

（八三）マルクス＝エンゲルス全集、第二巻、六六四－六八〇ページを参照。一三四

（八四）トーリ党――一七世紀の七〇年代から八〇年代にかけて成立したイギリスの政党、のちの保守党の前身。トーリ党は、大土地所有者とイギリス国教会の上層聖職者を代表し、封建制の過去の伝統を擁護し、自由主義的な要求や進歩的な要求とたたかった。自由党の前身であるホイッグ党と交互に政権の座についた。ここでは、保守党そのものをさす。一三八

（八五）チヘイッゼ派議員団――エヌ・エス・チヘイッゼを団長とする第四国会のメンシェヴィキ議員団。第一次世界大戦中、チヘイッゼ派議員団は中央派的立場をとり、実際にはロシア排外主義者の政策を全面的に支持した。一三九

（八六）『ナーシェ・デーロ』（『われわれの事業』）――メンシェヴィキの月刊雑誌、ロシア国内における解党派、社会排外主義者の主要な機関誌。一九一五年にペトログラードで発行され、六号出た。一三九

（八七）『ゴーロス・トルダー』（『労働者の声』）――メンシェヴィキの合法新聞。一九一六年にサマラで発行され、全部で六号出た。一三九

（八八）フェビアン派――一八八四年に創立されたイギリスの改良

主義的団体、フェビアン協会の会員をさす。この協会の名は、ハンニバルとの戦争で決戦を回避する待機戦術をとってクンクタートル(ぐずぐずする者)の異名を得た、紀元前三世紀のローマの司令官ファビウス・マクシムスの名にちなんだもの。フェビアン協会員は、主として学者、作家、政治家など、ブルジョア・インテリゲンツィア(ウェッブ夫妻、ラムジ・マクドナルド、バーナード・ショー等)であった。彼らは、プロレタリアートの階級闘争と社会主義革命との必要を否定し、小さな改良を積みかさね、徐々に社会を改造してゆく方法によってのみ、資本主義から社会主義への移行は可能である、と主張した。一九〇〇年、フェビアン協会は労働党に加盟した。「フェビアン社会主義」は、労働党イデオロギーの一源泉となっている。第一次大戦中、フェビアン派は社会排外主義の立場をとった。一三一

(八九) イギリス労働党——議会に労働者の代表を送りこむ目的で、労働組合、社会主義団体およびグループの連合体(「労働者代表委員会」)として、一九〇一年に創立されたもの。この委員会が一九〇六年に労働党と改称された。労働組合員は自動的に党員となり、党費を支払うことになる。労働党は、労働者からなる政党として発足した(その後、小ブルジョア分子が大量に入党した)が、イデオロギーと戦術の点では日和見主義的な組織である。党の創立以来、党幹部はブルジョアジーとの階級協調の政策をとっている。第一次世界大戦中、党幹部(A・ヘンダソンなど)は社会排外主義の立場をとり、入閣した。彼らの積極的な支持のもとに、一連の反労働者法(国の軍事化などについての法律)が可決された。一三一

(九〇) グリュトリ同盟——一八三八年に結成されたスイスのブルジョア改良主義的組織。一九〇一年、組織上の自立性をもったまま、スイス社会民主党に加盟した。第一次世界大戦中は、極端な排外主義の立場をとった。一三一

(九一) 社会革命党(エス・エル)——ロシアの小ブルジョア政党。一九〇一年末から一九〇二年のはじめにかけて、各種のナロードニキ主義的グループおよびサークルの合同によって成立したもの。第一次世界大戦中、エス・エルの大多数は社会排外主義の立場をとった。

二月革命後、エス・エルは、メンシェヴィキとともに臨時政府の主要な支柱となり、同党の指導者(ケーレンスキー、アウクセンチエフ、チェルノーフ)は同政府に入閣した。エス・エル党は、地主的土地所有の一掃という農民の要求を支持することを拒否し、地主的土地所有の存続を主張した。エス・エルの臨時政府閣僚たちは、地主の土地を占拠した農民にたいして討伐隊を派遣した。

外国の軍事干渉と内戦の時期には、エス・エルは反革命的破壊活動をおこない、干渉軍と白衛軍を積極的に支持し、反革命陰謀に参加し、党と国家の活動家にたいするテロル行為を組織した。内戦の終了後も、国の内外で敵対活動をつづけた。なお注二〇二を参照。一三二

(九二) レーニン『軍備撤廃のスローガンについて』、全集、第二三巻、一〇〇—一一一ページを参照。なお本書、一〇五—一一五ページ所収の論文『プロレタリア革命の軍事綱領』をも参照。一三三

(九三) 『一九〇五年の革命についての講演』は、一九一七年一月九(二二)日にチューリヒ公会堂でひらかれたスイス青年労働者の集会で、ドイツ語でおこなわれた。一三五

(九四) この段落は手稿で抹消されている。一三八

(九五) ここまでの四つの段落は手稿で抹消されている。一四〇

(九六) デカブリストの反乱をさす。一八二五年一二月一四日、進歩的思想をもつ一団の人々が、ニコライ一世の即位の日を期して、ツァーリズムと農奴制の打倒を目的として反乱を起こした。反乱はただちに鎮圧され、参加者は重刑に処せられたが、この事件は、ロシアにおける革命運動の端緒をひらいたものとして、重要な出来事であった。この一団の人々が、反乱をおこした一二月（デカーブリ）にちなんで、デカブリストとよばれる。一四〇

(九七) ここまでの三つの段落は手稿で抹消されている。一四四

(九八) ここまでの四つの段落は手稿で抹消されている。一四五

(九九) この論文のドイツ語原文では「反革命」であるが、ロシア語全集版で「革命」と訂正されている。一四八

(一〇〇) 「私は聴衆の方がたに……」からこの段落の終りまでは、手稿で抹消されている。一四九

(一〇一) 『遠方からの手紙』――レーニンがスイスで書いたもので、五通ある。第一―第四信は三月七日から一二日（二〇日から二五日）に書かれ、未完の第五信は、スイスからロシアへ出発する直前の三月二六日（四月八日）に書きはじめられた。

これらの手紙で、レーニンは、ロシア革命の推進力、性格および傾向を評価し、革命、国家、戦争および平和の理論の諸問題を検討し、党の戦術的任務を定めている。

第一信は、『プラウダ』編集局によって大幅に省略され、いくらか変更されて、一九一七年三月二一、二二両日の『プラウダ』第一四号、第一五号に掲載された。省略されたのは、主として、ブルジョアジーに追随する協調主義諸政党――メンシェヴィキ、エス・エル――の指導者たちを暴露した箇所や、強盗戦争をつづけていた臨時政府の君主主義的、帝国主義的野望を暴露した箇所であった。第二信以下は、一九一七年には発表されなかった。一五一

(一〇二) 労働者代表ソヴェト――二月革命の当初に成立したペトログラード労働者代表ソヴェトをさす。ソヴェトの選挙は、まず個個の工場で自発的におこなわれ、それから数日中にすべての企業にひろがった。二月二七日（三月一二日）の昼、ソヴェトの第一回会議の開会にさきだって、解党派メンシェヴィキのグヴォズデフ、ボグダーノフ、国会議員のチヘイッゼ、スコーベレフその他は、ソヴェト内で指導権をにぎろうと考えて、ソヴェト臨時執行委員会と自称した。同日夕刻の第一回ソヴェト会議で、議長団（チヘイッゼ、ケーレンスキー、スコーベレフ）がつくられた。議長団のメンバーのほか、シリャープニコフ、スハーノフ、ステクローフが執行委員会にはいり、社会主義諸政党の中央委員会、ペトログラード委員会の代表にも席があたえられた。エス・エル党は、はじめはソヴェトの設立に反対したが、あとで自党の代表をソヴェトに出した。

ソヴェトは、みずからを労働者・兵士代表の機関と宣言し、事実上、第一回ソヴェト大会（一九一七年六月）まで全国的な中央機関となった。三月一（一四）日、執行委員会は兵士の代表で補充された。

ソヴェトの指導権が協調派の手中にあったにもかかわらず、革命的な労働者、兵士の圧力に押されて、ソヴェトは一連の革命的措置をとり、旧権力の代表者たちを逮捕し、政治犯を釈放した。三月一（一四）日、ソヴェトは『ペトログラード軍管区守備隊にかんする命令第一号』を布告したが、この命令によって、部隊の政治行動はソヴェトの指揮下におかれ、兵器は中隊および大隊委員会の管理と統制下に移され、国会臨時委員会の各命令は、ソヴェトの命令に反しない場合にかぎって実行すべきものとされた。

ところが、決定的な時機である三月一（一四）日の夜半、ソヴェト執行委員会の協調派は、すすんでブルジョアジーに権力を譲りわたし、ブルジョアジーと地主の代表からなる臨時政府の顔ぶれを承認した。一五三

（一〇三）　**ラズノチーネツ**——一九世紀ロシアの貴族出身でない知識人のこと。一五四

（一〇四）　**二月革命直後の新政府**——国会臨時委員会とペトログラード労働者・兵士代表ソヴェト執行委員会のエス・エル＝メンシェヴィキ的指導者との協定によって、一九一七年三月二（一五）日に組織されたブルジョア臨時政府をさす。閣僚には、リヴォーフ公、カデット党首ミリュコーフ、オクチャブリスト党首グチコーフその他、ブルジョアジーと地主の代表がはいった。「民主主義派」の代表としては、エス・エルのケーレンスキーがはいった。臨時政府の顔ぶれは、それ以後何度も変わった。一五六

（一〇五）　**「平和革新派」**——「平和革新」党のこと。一九〇六年の第一国会解散後に最終的に成立した、大ブルジョアジーと地主の立憲君主主義団体。「オクチャブリスト左派」と「カデット右派」とを統合したもので、オクチャブリストに近い綱領をかかげていた。第三国会中、「平和革新」党はいわゆる「民主改革党」と結んで「進歩派」議員団を結成した。一五六

（一〇六）　**トルドヴィキ**（勤労グループ）——各国会における、ナロードニキ主義的な農民やインテリゲンツィアの代表からなる小ブルジョア民主主義者のグループ。トルドヴィキ議員団は、一九〇六年四月に第一国会の農民議員によって結成された。国会内で、トルドヴィキは、カデットと革命的社会民主主義者とのあいだを動揺した。第一次世界大戦中、その大多数は社会排外主義の立場をとった。二月革命後、トルドヴィキは臨時政府を積極的に支持した。トルドヴィキは十月革命に敵対し、ブルジョアジーの反革命に参加した。一五六

（一〇七）　**ルイ・ブラン主義**——レーニンは、論文『ルイ・ブラン主義』のなかでこれを次のように特徴づけている。「フランスの社会主義者ルイ・ブランは、一八四八年の革命のさい、階級闘争の立場から小ブルジョア的幻想の立場に移って、悪名をはせた。この幻想は、自称『社会主義』の美辞麗句で飾りたてられてはいるが、実際には、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの影響を強めることにしか役だたないものである。ルイ・ブランは、ブルジョアジーの援助を期待し、労働者が『労働を組織する』——この不明確な用語は『社会主義』的志望を表現するはずであった——のを、ブルジョアジーが援助することが可能だと期待し、またそういう期待を呼びさました。」（全集、第二四巻、一七ページ）一六三

（一〇八）　**ゼムストヴォ**——一八六四年に設けられたロシアの地方自治体。郡および県の二段階があった。ゼムストヴォの設置は、クリミア戦争敗北後の社会的憤激と革命的攻勢の圧力によってツァーリズムがよぎなくされたブルジョア的改革の一つであって、わずかな譲歩によって穏健自由主義者を買収することを目的とするものであった。ゼムストヴォの権限は、経済、保健、教育、行刑、土木、消防などの純地方的な問題に限られ、国の政治を動かすうえにはきわめて無力であった。一六三

（一〇九）　レーニン『いくつかのテーゼ』、全集、第二一巻、四一七ページを参照。一六五

（一一〇）　マルクスの『フランスにおける内乱』および同書第三版へのエンゲルスの序文については、マルクス＝エンゲルス全集、第

一七巻、二九三―三四四ページ、および五八三―五九六ページを参照。あとの二つの手紙については、マルクス『一八七一年四月一二日付のL・クーゲルマンへの手紙』、マルクス＝エンゲルス選集、第八冊、一九三―一九五ページ、およびエンゲルス『一八七五年三月一八―二八日付のA・ベーベルへの手紙』、マルクス＝エンゲルス全集、第一九巻、三―一〇ページを参照。一六六

（一二一）　これについては、レーニン『国家と革命』、全集、第二五巻、三五三―五三二ページを参照。一六六

（一二二）『現在の革命におけるプロレタリアートの任務について』――この論文の内容は、レーニンの四月テーゼである。このテーゼは、レーニンがペトログラードに到着する前夜に列車中で書いたものらしい。

レーニンはテーゼを、四月四（一七）日に二つの集会（タヴリーダ宮殿でひらかれた、労働者・兵士代表ソヴェト全ロシア協議会のボリシェヴィキ代議員の集会と、ボリシェヴィキおよびメンシェヴィキ代議員の合同集会）で読みあげた。

レーニンの四月テーゼは、一九一七年四月一〇（二三）日に書かれた著作『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務（プロレタリア党の政綱草案）』（本書、一九一―二二〇ページを参照）のなかで詳しく展開され、具体化された。一七三

（一二三）「人民社会党」（エヌ・エス）――一九〇六年に社会革命党（エス・エル）右派から分離した小ブルジョア的な勤労人民社会党の党員のこと。エヌ・エスはカデットとのブロックを主張した。レーニンは彼らを「社会カデット」、「小市民的日和見主義者」、カデットとエス・エルとのあいだを動揺する「エス・エルのメンシェヴィキ」とよんだ。第一次世界大戦中、「人民社会主義者」は社会排外主義の立場をとった。二月革命後は、トルドヴィキと合同し、その代表者を入閣させて、ブルジョア臨時政府の活動を積極的に支持した。十月革命後、エヌ・エスは反革命の陰謀と武力行動にくわわった。外国の軍事干渉および内戦の時期に消滅した。一七四

（一二四）『エヂンストヴォ』（『統一』）――プレハーノフを指導者とする祖国防衛派メンシェヴィキの極右グループの機関紙。一九一七年三月から一一月までペトログラードで発行されていた。同紙は、臨時政府を支持し、帝国主義戦争を「完全な勝利まで」つづけるように要求した。一七六

（一二五）『ルースカヤ・ヴォーリャ』（『ロシアの意志』）――ツァーリの内相プロトポーポフによって創刊され、大銀行の資金で維持されていたブルジョア日刊新聞。二月革命後は、ボリシェヴィキ中傷のカンパニアをおこなった。一九一七年一〇月二五日、ペトログラード・ソヴェト軍事革命委員会によって閉鎖された。一七六

（一二六）　マルクス『フランスにおける内乱』、全集、第一七巻、二九三―三四四ページ、マルクス＝エンゲルス『「共産党宣言」一八七二年ドイツ語版の序文』、全集、第四巻、五九〇―五九一ページ、マルクス『ゴータ綱領批判』、全集、第一九巻、一一―三二ページ、エンゲルス『一八七五年三月一八―二八日付のA・ベーベルへの手紙』、全集、第一九巻、七ページ、およびマルクス『一八七一年四月一二日付および一七日付のL・クーゲルマンへの手紙』、マルクス＝エンゲルス選集、第八冊、一九三―一九七ページを参照。一七七

（一二七）　労働者・兵士代表ソヴェト全ロシア協議会――ペトログラード・ソヴェト執行委員会の招集により、一九一七年三月二九日―四月三日（四月一一―一六日）にペトログラードでひらかれた。協議会には、ペトログラードおよび地方のソヴェト、前線および

後方の部隊の代表が出席した。協議会は次の問題を審議した。戦争について、臨時政府にたいする態度について、憲法制定議会について、農業問題、食糧問題、その他。

エス・エルとメンシェヴィキが圧倒的な影響力をもっていたこの会議は、「革命的祖国防衛主義」の立場をとり、臨時政府を支持する決定を採択した。一七八

(二八)『プラウダ』(『真理』)――ボリシェヴィキの合法的な日刊新聞。一九一二年四月二二日(五月五日)にペテルブルグで創刊された。『プラウダ』はたえず警察の追及をうけ、一九一四年七月八(二一)日に閉鎖された。

二月革命後、『プラウダ』は復刊され、三月五(一八)日からは党中央委員会およびペテルブルグ委員会の機関紙となった。一九一七年七月から一〇月まで、臨時政府の追及をうけた『プラウダ』は、再三題名を変えて(『小型版「プラウダ」』、『プロレタリー』、『ラボーチー』、『ラボーチー・プーチ』)発行された。十月革命の勝利後、新聞は『プラウダ』という元の題名で発行されるようになった。一七八

(二九) 本書、一七三―一七七ページを参照。一七八

(三〇) **ロシア社会民主労働党第七回(四月)全国協議会**――一九一七年四月二四―二九日(五月七―一二日)にペトログラードでひらかれた。これは、最初の合法的な党協議会であった。協議会には、議決権をもつ代議員一三三名と、評議権をもつ代議員一八名が、七八の党組織から出席した。協議会は、党大会の役割を果たし、全党の政治方針を確立し、党指導部をつくった。

協議会の議題は、現在の情勢(戦争と臨時政府その他)、講和会議、労働者・兵士代表ソヴェトにたいする態度、党綱領の改正、インタナショナルの状態と党の任務、国際主義的社会民主主義諸組織の統合、農業問題、民族問題、憲法制定議会、組織問題、各地方の報告、中央委員会の選挙であった。

レーニンは、協議会の全活動を指導した。現在の情勢、党綱領改正の問題、農業問題についての主報告をおこなったほか、他の議題についてもそれぞれ演説し、また協議会に提出された決議案を作成した。

第七回(四月)協議会の歴史的な意義は、これがロシア革命の第二段階への移行というレーニン的方針を採択し、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化のための闘争計画を立て、全権力をソヴェトに移せという要求をかかげたことにあった。一七八

(三一) エンゲルス『一八八六年一一月二九日付のF・A・ゾルゲへの手紙』、二三巻選集、第一七巻、二五一ページを参照。一七九

(三二) 本書、一六〇ページを参照。一七九

(三三) **「ねえ君、理論は灰色で、緑に萌えるのは永遠の生命の樹だ」**――ゲーテの『ファウスト』第一部、書斎の場に出てくるメフィストフェレスの言葉をいくらか言いかえたもの。一八一

(三四) **「陛下の反対派」**――カデット党の指導者ミリュコーフが用いた表現。一九〇九年六月一九日(七月二日)にロンドン市長の歓迎昼食会であいさつしたとき、ミリュコーフは、「……ロシアに予算を統制する立法院が存在するかぎり、ロシアの反対派は陛下の反対派であって、陛下にたいする反対派ではない」と述べた(『レーチ』一九〇九年六月二一日(七月四日)付、第一六七号)。一八三

(三五) **「ツァーリをやめて労働者政府を」**――一九〇五年にパルヴスがはじめてもちだした反ボリシェヴィキ的スローガン。このスローガンは、トロツキーの永続革命「理論」の基本命題の一つであった。この農民無視の革命「理論」は、全人民運動の内部でのプロ

レタリアートのヘゲモニーのもとでブルジョア民主主義革命を社会主義革命に成長転化させるというレーニンの理論に反するものであった。一八四

(二二六) マルクス『フランスにおける内乱』、全集、第一七巻、三一二―三二七ページ、およびエンゲルス『〔マルクス「フランスにおける内乱」(一八九一年版)の〕序文』、全集、第一七巻、五八三―五九六ページを参照。一八四

(二二七) 本書、一七七ページを参照。一八五

(二二八) レーニンはプレハーノフの労作『無政府主義と社会主義』を念頭においている。これは、一八九四年にベルリンではじめて出版された。一八五

(二二九) レーニン『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』、全集、第九巻、七八ページを参照。一八七

(二三〇) 本書、一七五ページを参照。一八八

(二三一) **全ロシア鉄道従業員大会**――一九一七年四月六―二〇日(四月一九日―五月三日)にペトログラードでひらかれた。大会には二二〇名の代議員が出席した。協調主義諸政党に指導された大会は、祖国防衛の立場をとり、ブルジョア臨時政府の全面的支持を声明した。一九六

(二三二) エンゲルス『一八七五年三月一八―二八日付のA・ベーベルへの手紙』、全集、第一九巻、七ページを参照。二〇〇

(二三三) マルクス『フランスにおける内乱』、全集、第一七巻、三一九ページを参照。二〇一

(二三四) **マニーロフ気質**――マニーロフは、ゴーゴリの作品『死せる魂』に出てくる地主。意気地のない空想家で、無能なおしゃべり屋の典型。二〇六

(二三五) **少数派またはロンゲ派**――フランス社会党の少数派で、一九一五年に形成された。社会改良主義者ロンゲを支持する同派は、中央派的見解をとり、社会排外主義者にたいして妥協政策をとった。第一次世界大戦中は、社会平和主義の立場をとり、十月革命後は、プロレタリアートの独裁の味方と称しながら、実際にはそれに反対した。一九二〇年一二月、トゥールでひらかれたフランス社会党大会で左派が勝利したとき、ロンゲ派は公然たる改良主義者とともに党から脱落して、いわゆる第二半インタナショナルに参加し、その崩壊後は第二インタナショナルに復帰した。二〇七

(二三六) **イギリス社会党**――一九一一年に社会民主党とその他の社会主義グループとが合同して、マンチェスターで創立されたもの。マルクス主義思想に立って扇動をおこない、「日和見主義的な党ではなく、実際に自由主義者から独立している」党であった(レーニン全集、第一九巻、二八一ページ)。しかし、党員が少なく、大衆との結びつきが弱かったので、党はいくらかセクト的であった。第一次世界大戦中、国際主義的潮流(W・ギャラチャー、A・インクピン、J・マクレイン、エフ・ロートシテインその他)とハインドマンを指導者とする社会排外主義的潮流との激しい闘争が、党内に展開された。一九一六年四月にソルフォードでひらかれた社会党年次会議で、ハインドマン一派は脱党した。

イギリス社会党は十月革命を歓迎した。同党の党員は、外国の武力干渉からソヴェト・ロシアを守るイギリス勤労者の運動に大きな役割を果たした。一九一九年、党組織の圧倒的多数(九八対四)は共産主義インタナショナルへの加入に賛成した。社会党は、共産主義統一グループとともに、イギリス共産党の結成に主要な役割を演じた。一九二〇年にひらかれた第一回合同大会で、社会党地方組織

の圧倒的多数は共産党にくわわった。二〇八

（一三七）『アルバイターポリティーク』（『労働者政治』）——科学的社会主義の週刊誌。一九一九年にドイツ共産党に加入したブレーメンの左派急進主義者の機関誌。一九一六年から一九一九年までブレーメンで発行されていた。二〇九

（一三八）『ドマン』（『明日』）——月刊の文芸・評論・政治雑誌、フランスの国際主義者で、作家兼ジャーナリストのアンリ・ギルボーが創刊したもの。はじめジュネーヴで、のちモスクワで、一九一六年一月から一九一九年まで出ていた（一九一七年一月から四月まで休刊）。一九一九年九月からは在モスクワのフランス人共産主義者のグループの機関紙。二〇九

（一三九）『トレイド・ユニオニスト』（『労働組合員』）——イギリスの労働組合新聞。一九一五年一一月から一九一六年一一月までロンドンで発行されていた。二〇九

（一四〇）**アメリカ社会主義労働党**——第一インタナショナルのアメリカ支部とその他の社会主義団体とが合同して、一八七六年にフィラデルフィアの合同大会で創立されたもの。党員の圧倒的多数は亡命者で、アメリカの地元労働者とあまり結びついていなかった。初期の党内で指導的地位を占めていたラサール派は、セクト的＝教条主義的な誤りをおかした。

九〇年代には、D・デ・レオンを指導者とする左派が社会主義労働党の指導権をにぎったが、アナルコ・サンディカリズム的な誤りをおかした。同党は、労働者階級の部分的要求のためにたたかうことや、改良主義的労働組合内で活動することを拒否し、そうでなくても弱かった大衆的労働運動との結びつきをますます失っていった。第一次世界大戦中、同党は国際主義に傾いた。十月革命の影響をうけて、党の最も革命的な部分は、アメリカ共産党の創立に積極的に参加した。現在の社会主義労働党は、労働運動にたいして影響力をもたない少数者の組織である。二〇九

（一四一）**アメリカ社会党**——社会主義労働党やアメリカ社会民主党から分離したグループが合同して、一九〇一年七月にインディアナポリスの大会で結成されたもの。ユージーン・デブズがその創立者のひとりであった。党の社会的構成は雑多で、アメリカ人労働者の一部も、移民労働者も、また小農場主や小ブルジョア出身者も入党した。党の中央派的、右翼日和見主義的な指導部は、プロレタリアートの独裁の必要を否定し、革命的な闘争方法を拒否し、党活動を主として選挙運動への参加に限った。第一次世界大戦中、社会党内には三つの潮流——政府の帝国主義政策を支持した社会排外主義者、口さきだけで帝国主義戦争に反対した中央派、国際主義の立場をとって反戦闘争をおこなった革命的少数派——が生まれた。

C・ルーゼンバーグ、W・フォスター、W・ヘイウッドなどを先頭とする社会党左派は、プロレタリア分子に依拠して、党の日和見主義的指導部に反対し、プロレタリアートの自主的な政治行動のため、階級闘争の原則にもとづく産業別労働組合の創設のためにたたかった。一九一九年、社会党は分裂した。脱党した左派は、アメリカ共産党創立の主唱者となり、その中核となった。現在の社会党は小人数のセクト的な団体である。二〇九

（一四二）『インタナショナリスト』（『国際主義者』）——左派社会主義者の週刊の機関紙。アメリカの社会主義宣伝連盟が一九一七年のはじめにボストンで発行したもの。同紙の編集局には、アメリカその他の国際主義者が参加した。二〇九

（一四三）**トリビューネ派**——新聞『トリビューネ』を機関紙とす

るオランダ社会民主党の党員のこと。トリビューネ派の指導者は、D・ウェインコープ、H・ホルテル、A・パンネクーク、H・ローラント－ホルストであった。トリビューネ派は一貫した革命党ではなかったが、オランダ労働運動の左翼を代表し、第一次世界大戦中はだいたい国際主義の立場をとった。一九一八年、トリビューネ派はオランダ共産党を結成した。

『トリビューネ』(『演壇』)――一九〇七年にオランダ社会民主労働党の左派によって創刊された新聞。一九〇九年に左派が党から除名されてオランダ社会民主党を組織したのち、この党の機関紙となった。『トリビューネ』は、一九一八年以後オランダ共産党の機関紙となり、一九四〇年までこの名称で発行されていた。二〇九

(一四四) **スウェーデンの青年派または左派の党**――スウェーデン社会民主党内の左翼的潮流をさす。第一次世界大戦中は国際主義の立場をとり、ツィンメルヴァルト左派にくわわった。一九一七年五月、同派はスウェーデン左派社会民主党を結成した。一九一九年の党大会では、共産主義インタナショナルに加入する決定が採択された。党の革命的部分は、一九二一年にスウェーデン共産党を結成した。二一〇

(一四五) **「テスニャキ」**(『偏狭派』)――ブルガリアの革命的な社会民主労働党のこと。社会民主党が分裂したのち、一九〇三年に創立された。「テスニャキ」の創立者かつ指導者は、デ・ブラゴエフであったが、ついでゲ・ディミトロフ、ヴェ・コラロフその他が「テスニャキ」の先頭に立った。一九一四―一九一八年には、「テスニャキ」は帝国主義戦争に反対した。一九一九年に共産主義インタナショナルに加入し、ブルガリア共産党を結成した。二一〇

(一四六) **『アヴァンティ！』**(『前進！』)――イタリア社会党の日刊の中央機関紙。一八九六年一二月にローマで創刊された。第一次世界大戦中、同紙は改良主義者と手をきらずに、不徹底な国際主義の立場をとった。一九二六年、ムッソリーニのファシスト政府によって閉鎖されたが、国外で続刊された。一九四三年からは、ふたたびイタリア国内で発行されている。二一〇

(一四七) **辺区指導部と中央指導部**――それぞれポーランド王国＝リトアニア社会民主党の二つの派の指導機関。

ポーランド王国＝リトアニア社会民主党――まずポーランド王国社会民主党として一八九三年に成立したが、一九〇〇年八月からリトアニアの一部の社会民主主義者をくわえて、ポーランド王国＝リトアニア社会民主党とよばれるようになった。同党の功績は、ポーランドの労働運動をロシアの労働運動との同盟に向かわせ、民族主義とたたかったことにある。

一九〇六年のロシア社会民主労働党第四回(合同)大会で、同党は地域組織としてロシア社会民主労働党に加入した。一九〇五―一九〇七年の革命が敗北したのち、党内問題をめぐる意見の相違が同党内に現われ、その結果、一九一二年はじめにポーランド社会民主党は、中央指導部派(いわゆる「ザジョンドヴィエッ」)――この派は、解党派にたいして妥協的な方針をとり、一時ロシア社会民主労働党内の反ボリシェヴィキ的潮流を実質的に支持した――と、ワルシャワおよびルジの党組織に依拠した辺区指導部派(いわゆる「ロズラモヴィエッ(分裂派)」)とに分裂した。辺区指導部は、ボリシェヴィキと連絡をとり、ロシア社会民主労働党中央委員会の方針を支持した。

第一次世界大戦のとき、ポーランド社会民主党の両グループは合同して、国際主義の政綱にもとづく単一の党をつくった。

ポーランド王国＝リトアニア社会民主党は、十月革命を歓迎し、ポーランドでプロレタリア革命の勝利をめざす闘争をすすめた。一九一八年一二月、同党はポーランド社会党左派と合同して、ポーランド共産主義労働者党を結成した。二一〇

（一四八） この決議案はレーニンが書いたもの（全集、第二三巻、三一三ページを参照）。決議案は、一九一七年二月一一―一二日（新暦）にテースでひらかれたチューリヒ社会民主党組織州大会に、スイスの左派社会民主主義者の名で提出された。二一〇

（一四九） 『ケムニッツ新聞』――ドイツ社会民主党の機関紙『フォルクスシュティンメ』（『人民の声』）をさす。この新聞は、一八九一年一月から一九三三年二月までケムニッツで発行されていた。二一一

（一五〇） キーンタール宣言――注六九を参照。二一一

（一五一） 『ラボーチャヤ・ガゼータ』（『労働者新聞』）――メンシェヴィキの日刊新聞。一九一七年三月から一一月三〇日（一二月一三日）までペトログラードで発行されていた。八月三〇日（九月一二日）からはメンシェヴィキ中央委員会の機関紙。二一四

（一五二） 「自由公債」――ペトログラード・ソヴェト執行委員会は、一九一七年四月七（二〇）日、帝国主義戦争の継続の戦費をまかなうために臨時政府が発行したいわゆる「自由公債」を積極的に支持する決定を、二一票対一四票の過半数で採択した。ボリシェヴィキの執行委員たちは公債に反対した。問題はついでソヴェト総会に移された。総会では、代議員二〇〇〇名が公債に賛成票を投じ、一二三名が反対票を投じた。二一四

（一五三） マルクス『ゴータ綱領批判』、全集、第一九巻、二一―三二ページ、およびエンゲルス『「フォルクスシュタート」（一八七一―一八七五年）国際問題論文集の序文』、二三巻選集、第一三巻、七一―七五ページを参照。二一五

（一五四） 「私は竜を蒔いて、のみを取りいれた」――これはH・ハイネのことばで、一八九〇年八月二七日付のエンゲルスのポール・ラファルグへの手紙に引用されている（マルクス＝エンゲルス二三巻選集、第一七巻、二二八ページを参照。ただし、そこではこの手紙は一八九〇年一〇月二七日付になっているが、これははじめにこの手紙を発表した『ノイエ・ツァイト』一九〇〇―一九〇一年、第一巻、第一四号の誤記によるもの）。二一六

（一五五） 『ソルダーツカヤ・プラウダ』（『兵士の真理』）――ボリシェヴィキの日刊新聞。一九一七年四月一五（二八）日にロシア社会民主労働党（ボ）ペテルブルグ委員会付属軍隊内組織の機関紙として発刊され、五月一九日（六月一日）の第二六号からは党中央委員会付属軍隊内組織の機関紙となった。一九一八年三月、党中央委員会の決定で廃刊された。二一八

（一五六） 第三回ツィンメルヴァルト会議――国際社会主義委員会の招集で、一九一七年九月五―一二日（新暦）にストックホルムでひらかれた。はじめ一九一七年五月三一日にひらかれる予定が、再三延期されたのである。レーニンは、中央派がすべての地歩を社会排外主義に明け渡す方向にすっかり転換してしまった以上、ボリシェヴィキはツィンメルヴァルト連合と手をきって、ただちに第三インタナショナルの創立にとりかかるべきだと考え、ただ情報を得るだけの目的で、第三回ツィンメルヴァルト会議に出席するよう主張した。ボリシェヴィキからは、ヴォローフスキー（オルローフスキー）とセマシコ（アレクサンドロフ）が会議に出席した。

会議の出した宣言は、戦争に反対し、ロシア革命を擁護する国際的ゼネストを万国の労働者に呼びかけていたが、それぞれの交戦国

で帝国主義戦争を内乱に転化し、「自国」政府を敗北させるという革命的社会民主主義のスローガンは、宣言には反映されていなかった。この会議は、ツィンメルヴァルト連合の最後の会議であった。三二九

（二五七）　レーニン『社会排外主義者の参加する国際自称社会主義者会議の招集について』、全集、第二四巻、四一一ページを参照。三二九

（二五八）　**「連立内閣」**——第一次の連立臨時政府（第二次臨時政府）のこと。この政府は、四月の政治的危機のあとで五月五（一八）日に組織された。

四月の政治的危機は、一九一七年四月一八日（五月一日）に臨時政府の外相ミリュコーフが同盟諸国に送った覚え書によって引きおこされた。この覚え書は、臨時政府が、ツァーリ政府の結んだすべての条約を守ること、最後の勝利をえるまで戦争をつづけることを確認したものであった。臨時政府の帝国主義政策は、広範な勤労大衆の憤激をまねいた。四月二一日（五月四日）、ボリシェヴィキ党の呼びかけにこたえて、ペトログラードの労働者は仕事をやめ、平和を要求するデモンストレーションに出ていった。これには一〇万をこえる労働者、兵士が参加した。抗議のデモンストレーションや集会は、モスクワ、ウラル、ウクライナ、クロンシタットその他の都市や地方でもおこなわれた。ミリュコーフの覚え書にたいする抗議の決議が、多くの都市のソヴェトからペトログラード・ソヴェトに送られてきた。

四月のデモンストレーションは、政府危機の始まりとなった。大衆の圧力に押されて、外相ミリュコーフと陸相グチコーフは辞職せざるをえなかった。新しい連立政府には、一〇人の資本家大臣とならんで、エス・エルのケーレンスキー、チェルノーフ、メンシェヴィキのツェレテーリ、スコーベレフ、その他が入閣した。三二九

（二五九）　**ケーレンスキーによるおどしの実行**——一九一七年五月一一（二四）日に陸相ケーレンスキーが「兵士の権利宣言」を内容とする命令を公布したことをさす。この宣言には、戦闘状況のもとで命令を遂行しない部下にたいしては、上官が武力を行使する、という一項があった。この一項は、攻勢に出ることを拒否する将兵を対象としたものであった。ケーレンスキーは、命令を公布すると同時に、連隊の改編組を開始し、上官への「不服従を扇動した」将兵を裁判にかけはじめた。七月事件後の七月一二（二五）日、臨時政府は、前線での死刑を実施し、各師団に「軍事革命裁判所」を設置した。三三〇

（二六〇）　**全ロシア労働組合会議**（第三回）——一九一七年六月二一—二八日（七月四—一一日）にペトログラードでひらかれた。これは、全国的な規模で合法的にひらかれた最初のロシア労働組合会議であった。議決権をもつ代議員二一一名が、一四〇万の労働組合員を代表して会議に出席した。ロシアの大工業中心地から派遣されたボリシェヴィキの代議員は七三名であった。会議の議題は、労働組合運動の任務について、労働組合の建設について、経済建設について、その他であった。

ボリシェヴィキは、国際派メンシェヴィキの小グループとともに、最初からすべての主要議題についてメンシェヴィキ、エス・エル、ブンド派その他にたいする激しい思想闘争を展開した。会議は、一〇—一二票の小差で、祖国防衛派メンシェヴィキから提出された諸決議案を可決した。臨時労働組合暫定中央評議会を選出した。三三一

（二六一）　**ロシア社会民主労働党第四回（統一）大会**——一九〇六年四月一〇—二五日（四月二三日—五月八日）に、スウェーデンの

ストックホルムでひらかれた。

大会には、党の五七の地方組織を代表する議決権をもった一一二人の代議員と、評議権をもった二二人の代議員が出席した。そのほかに、非ロシア民族の社会民主主義政党の代表が次の割合でくわわった――ポーランド＝リトアニア社会民主党、ブンド、ラトヴィア社会民主労働党から各三名、ウクライナ社会民主労働党、フィンランド労働党から各一名、およびブルガリア社会民主労働党の代表一名。大会の主要な問題は、農業問題、現情勢とプロレタリアートの階級的任務の評価の問題、国会にたいする態度の問題、組織問題であった。すべての問題について、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとのあいだに激しい闘争がおこなわれたが、この大会ではメンシェヴィキが優勢を占めていたため、いくつかの問題でメンシェヴィキ的な決議が採択された。大会は、党員の資格にかんする党規約第一条において、レーニンの定式を採択した。大会は、ポーランド＝リトアニア社会民主党、ラトヴィア社会民主労働党をロシア社会民主労働党に加盟させ、またブンドの加入を決定した。

大会で選ばれた中央委員会は、ボリシェヴィキ三名、メンシェヴィキ七名からなっていた。中央機関紙編集局はメンシェヴィキが独占した。三三

(一六二) **七月事件**――一九一七年七月三―四(一六―一七)日のペトログラードにおける大衆的デモンストレーションのこと。この事件は、国内のきわめて深刻な政治的危機の現われであった。ケーレンスキーが六月一八日(七月一日)に開始した戦線でのロシア軍の攻勢の失敗、帝国主義者のためにはらった新しい犠牲、資本家の企業閉鎖にともなう失業の増大、高進する物価騰貴、ひどい食糧不足――これらはみな、臨時政府の反革命的政策にたいする憤激を広範な労働者・兵士大衆のあいだに爆発させた。運動は、七月三(一六)日に第一機関銃連隊の行動によってヴィボルグ地区で開始された。デモンストレーションは臨時政府にたいする武装行動に転化しようとした。

ボリシェヴィキ党は、国内の革命的危機はまだ成熟しておらず、軍隊と地方は首都の蜂起を支持する心がまえができていないと考えたので、この時点での武装行動には反対であった。七月三(一六)日に党のペテルブルグ委員会および中央委員会付属軍隊内組織と合同で招集された中央委員会会議では、行動をさしひかえることが決定された。このときにひらかれたボリシェヴィキの第二回ペトログラード全市会議も同様な決定を採択した。同会議の代議員は、大衆に行動を思いとどまらせるために各地区へ派遣された。それにもかかわらず行動は開始され、それを阻止することはもはや不可能となった。

中央委員会は大衆の気分を考慮して、ペテルブルグ委員会および軍隊内組織とともに、七月三(一六)日の夜おそく、デモンストレーションを平和的で組織的なものとするために翌日のデモンストレーションに参加することを決定した。

七月四(一七)日のデモンストレーションには五〇万人以上が参加した。それは「全権力をソヴェトへ!」などのボリシェヴィキのスローガンをかかげて進んだ。デモ参加者は九〇人の代表を選出し、代表たちは全権力をソヴェトの手に移せという要求をソヴェト中央執行委員会に伝えた。しかし、エス・エルとメンシェヴィキの指導者たちは権力をにぎることを拒否した。

臨時政府は、メンシェヴィキ＝エス・エルに牛耳られる中央執行委員会の同意をえたうえで、士官学校生徒と反革命的カザック兵の

部隊を平和なデモンストレーションにさしむけた。これらの部隊はデモンストレーション参加者にむかって発砲した。反動的な気分をもつ部隊が前線から呼びもどされた。

七月四日の夜半にレーニンの指導のもとにひらかれた中央委員会およびペテルブルグ委員会の会議で、デモンストレーションを組織だった仕方で中止する決定が採択された。これは正しい措置であって、党は適時に後退して、革命の主力を壊滅から守ることができた。ブルジョア臨時政府は組織的な弾圧に移った。政府はボリシェヴィキ党に襲いかかった。『プラウダ』、『ソルダーツカヤ・プラウダ』その他は閉鎖され、「トルード」印刷所は破壊された。労働者の武装解除、逮捕、家宅捜索、ポグロムが始まった。ペトログラード守備隊の革命的部隊は解体されて、戦線に送られた。メンシェヴィキとエス・エルは、事実上、反革命的残虐行為の参加者となり、その共犯者となった。七月事件以後、権力は完全に反革命的臨時政府の手に移った。三三五

(一六三) エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』、マルクス=エンゲルス選集、第七冊、二六五―二六六ページを参照。三三九

(一六四) 『小型版「プラウダ」』――七月事件のさいに禁止されたボリシェヴィキの日刊新聞『プラウダ』の後継紙。七月六(一九)日に一号だけ出た。三三九

(一六五) 『ノーヴォエ・ヴレーミャ』(『新時代』)――一八六八年から一九一七年までペテルブルグで発行されていた日刊新聞。一九〇五年からは黒百人組の機関紙。二月革命後は反革命の立場をとり、ボリシェヴィキに狂暴な迫害をくわえた。三三〇

(一六六) 『ジヴォエ・スローヴォ』(『生きた言葉』)――低俗な黒百人組的日刊新聞。一九一六年から一九一七年一〇月までペトログラードで発行され、ボリシェヴィキにたいして猛烈な中傷カンパニアをおこなった。三三〇

(一六七) **四月二一日、五月五日**――四月の政治的危機とそれにつづく第一次連立臨時政府の成立をさす。注一五八を参照。

六月九日――第一回全ロシア・ソヴェト大会が一九一七年六月九(二二)日に、ボリシェヴィキ党によって六月一〇(二三)日に予定されていたデモンストレーションを禁止する決定を採択したことをさす。このデモンストレーションは、六月八(二一)日に党中央委員会とペトログラード委員会が各地区、各部隊、各労働組合、各工場委員会の代表と合同でひらいた拡大会議で、決定された。デモンストレーションは、全国家権力をソヴェトの手に移すことを要求するペトログラードの労働者、兵士の意志を、第一回全ロシア・ソヴェト大会にたいして表明するためのものであった。メンシェヴィキとエス・エルは、デモンストレーションを阻止することにきめ、デモンストレーション禁止の決議を大会で通過させた。

ボリシェヴィキ党の中央委員会は、ソヴェト大会の決定に反することはしたくなかったので、レーニンの提案にしたがい、六月九日の夜半にデモンストレーションの中止を決定した。中央委員やペトログラード委員、積極的な党活動家たちが、工場や兵営に派遣されて、行動をおこさないように労働者と兵士を説得した。党の説得活動は成功し、労働者と兵士は、この時機に行動するのが適当でないことに同意した。

メンシェヴィキ=エス・エルに牛耳られるソヴェト大会の指導部は、六月一八日(七月一日)にデモンストレーションを組織し、これを自分たちの指導下に、臨時政府信任を表明するためにおこなうことを決定した。

六月一八日（七月一日）、ペトログラードの約五〇万の労働者と兵士がデモンストレーションに参加した。デモ参加者の圧倒的多数は、ボリシェヴィキ党の革命的スローガンをかかげて行進した。臨時政府を信頼せよという協調主義諸政党のスローガンをかかげたのは、いくつかの小グループにすぎなかった。このデモンストレーションは、大衆の革命的精神の高まりと、ボリシェヴィキ党の影響力、権威のいちじるしい増大とを示した。同時にそれは、臨時政府を支持する小ブルジョア的な協調主義諸政党の完全な失敗を示した。三三〇

（一六八）**第三次の臨時政府**――七月事件後の一九一七年七月二四日（八月六日）に、エス・エルのケーレンスキーを首相としてつくられた第二次連立臨時政府のこと。ケーレンスキーは陸海軍相を兼ね、カデットのネクラーソフが副首相兼蔵相、エス・エルのアウクセンチエフが内相となったが、主導権はカデットにあった。三三四

（一六九）**第一国会**――一九〇五年一二月の武装蜂起が敗北したのち、一九〇六年四月二七日（五月一〇日）にツァーリによって召集された。この国会は、国会をつうじて自分たちの要求を実現できるかのような幻想を大衆のあいだにひろめ、とくに農民に、国会をつうじて土地を獲得できるかのように信じこませることによって、農民を労働者階級から切りはなし、革命にとどめの打撃をあたえることをめざしたものであった。議員四七八名のうち三分の一以上がカデットであった。それにもかかわらず、国会は、主として農業問題についてツァーリ政府の政策をしばしば批判したため、一九〇六年七月八（二一）日に解散させられた。三三四

（一七〇）**農民代表第一回全ロシア大会**をさす。この大会は、一九一七年五月四―二八日（五月一七日―六月一〇日）にペトログラードでひらかれた。エス・エルが大会の主催者であった。大会には、県農民大会および軍農民組織から一一一五名の代議員が出席した。その社会的構成からみると、大会代議員の大多数は富裕な農民であって、貧農は軍の代議員によって代表されていた。

大会の議題は、連立臨時政府の問題、食糧問題、戦争と平和の問題、農業問題などであった。大会は、農民大衆の獲得をめぐるボリシェヴィキとエス・エルとのたたかいの舞台となった。ボリシェヴィキ代議員団の活動は、農民大会に多大の注意をはらったレーニンの直接の指導のもとにおこなわれた。それにもかかわらず、エス・エルの指導者は自分たちの決議案を大会で通過させることに成功した。三三四

（一七一）**六月一八日**――一九一七年六月一八日（七月一日）のデモンストレーションをさす。注一六一を参照。三三六

（一七二）**『ヴォーリャ・ナローダ』（『人民の意志』）**――エス・エル党右派の日刊の機関紙。一九一七年四月からペトログラードで発行され、同年一一月に閉鎖された。その後も別の題名で出ていたが、翌年二月に最終的に禁止された。三三六

（一七三）**「フランクフルトのおしゃべり会議」**――フランクフルト議会（ドイツ国民議会）のこと。一八四八年の三月革命後に招集され、五月一五日にフランクフルト・アム・マインで開会された。議会の主要任務は、ドイツの政治的細分状態を一掃して、全国的憲法を作成することにあった。しかし、自由主義的多数派の臆病と動揺、小ブルジョア的左派の不決断と不徹底のために、議会は国の最高権力をその手におさめることを恐れ、一八四八―一八四九年のドイツ革命の基本問題で断固たる立場をとることができなかった。議会は、一八四九年六月、ヴュルテンベルク政府の軍隊によって解散させら

れた。二三六

(一七四) 国民公会——フランス大革命の当時、一七九二年九月に立法議会に代わって普通選挙で選ばれた革命的議会。共和制を宣言し、国王を裁判にかけて処刑した。はじめ国民公会のなかでは、大ブルジョアジーを代表するジロンド派が優位を占めていたが、一七九三年六月二日、急進小ブルジョアジーの党、ジャコバン派がジロンド派を追放して、革命的民主主義的独裁を樹立した。一七九四年七月二七日(テルミドール九日)、大ブルジョアジーはクーデタをおこない、ジロンド派が国民公会に復帰した。一七九五年一〇月二六日、国民公会は解散され、権力は総裁政府に移された。二三六

(一七五) マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』、全集、第八巻、一〇五—二〇四ページを参照。二三七

(一七六) 同、一九五—一九六ページを参照。二三九

(一七七) エンゲルス『ドイツ農民戦争』、全集、第七巻、三三三—四二三ページを参照。二三九

(一七八) カデットの大臣の辞職——カデットの閣僚シンガリョーフ、マヌイーロフ、シャホフスコイは、一九一七年七月二(一五)日に臨時政府を脱退した。彼らは脱退の理由として、ウクライナ問題で政府の立場に不同意だということをあげた。しかし、カデットが政府を脱退した真の理由は、「社会主義者」の閣僚たちに圧力をくわえ、彼らにカデットの反革命的計画——赤衛隊の武装解除、革命的部隊のペトログラードからの転出、ボリシェヴィキ党の禁止——の実行に同意させるために、政府危機をつくりだすことにあった。二四三

(一七九) 『デーロ・ナローダ』(『人民の事業』)——エス・エル党の日刊の機関紙。一九一七年三月から一九一八年七月まで、何回か題名を変えて、ペトログラードで発行されていた。のち復刊されたが、反革命活動のかどで閉鎖された。二四三

(一八〇) カノッサに行く——カノッサは北部イタリアの城。一〇七七年、ドイツ国王ハインリヒ四世は、ローマ法王グレゴリウス七世と争って破門され、無帽、裸足で修道衣をまとっただけで雪の城門のまえに三日間立ちつづけて、破門の解除と皇帝権の返還とを願った。そこで「カノッサに行く」とは、敵に屈服する、という意味になる。二四四

(一八一) 反革命政府の「戴冠式」——反革命勢力を動員して革命を粉砕するために臨時政府が準備していた国政会議をさす。会議は一九一七年八月一二—一五(二五—二八)日にモスクワでひらかれた。会議には、地主、ブルジョアジー、将官の各代表、元国会議員、カデット党の指導者たちが出席した。ソヴェトや一部の職業団体からは、メンシェヴィキとエス・エルが代表として送られた。会議では、コルニーロフ将軍、カレーヂン将軍その他が革命鎮圧の計画を述べた。彼らは、ソヴェトの一掃、軍隊内社会組織の解散、前線での死刑の復活、最後の勝利をえるまでの戦争遂行を要求した。ボリシェヴィキ党の中央委員会は、この会議に反対して大衆的に抗議するよう、労働者、兵士、農民に呼びかけた。党モスクワ委員会の決定で八月一二(二五)日にモスクワでおこなわれたストライキには、四〇万人以上が参加した。抗議集会とストライキは他の諸都市でもおこなわれた。

ゼムスキー・ソボール——字義は「全国会議」で、一六—一七世紀に国政上の重要問題を決定するためツァーリが召集した一種の等族議会。専制君主に従属していた。一九世紀に自由主義者が人民代表議会の要求をあらわすスローガンとして、このことばをつかった。

二四

（一八二）　**総裁政府**——フランス大革命のさい、テルミドール反動政府（注一七四を参照）のあとをうけて成立した大ブルジョアジーの政府（一七九五—一七九九年）。五人からなっていた。総裁政府は、革命的人民運動および王党派反動の両者とたたかった。総裁政府の内政上および外交上の失敗と腐敗は、一七九九年一一月九日（ブリュメール一八日）のナポレオン・ボナパルトのクーデタに道をひらいた。二六

（一八三）　**七月八日の声明**——一九一七年七月八（二一）日に出された臨時政府の宣言をさす。宣言には、七月事件のあとで大衆をなだめるための一連のデマゴギー的な約束が盛られており、とくに、憲法制定議会の選挙を所定の期日——九月一七（三〇）日——に施行すると約束していた。しかし、これらの公約はなに一つ実行されなかった。二六

（一八四）　『**イズヴェスチヤ**』——『ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェト通報』のこと、一九一七年二月二八日（三月一三日）に発刊された日刊新聞。第一回全ロシア・ソヴェト大会で労働者・兵士代表ソヴェト中央執行委員会が成立してからは、その機関紙となった。この時期には、新聞はメンシェヴィキとエス・エルの手中にあって、ボリシェヴィキ党にたいする激しい闘争をおこなった。第二回全ロシア・ソヴェト大会後、『イズヴェスチヤ』編集局の顔ぶれは交替し、新聞はソヴェト権力の公式の機関紙となった。二七

（一八五）　**連絡委員会**——協調主義的なペトログラード・ソヴェト執行委員会の決定により、三月八（二一）日、臨時政府の活動に「影響をあたえ」、それを「監督する」ために設置されたもの。連絡委員会は、臨時政府がその反革命的政策を偽装するためにペトログラード・ソヴェトの権威を利用するのに役だった。メンシェヴィキとエス・エルは、この委員会によって、大衆が全権力をソヴェトの手に移すために積極的な革命闘争をおこなうのを阻止しようとはかった。連絡委員会は一九一七年四月中旬に廃止され、その機能は執行委員会ビューローに移された。二五

（一八六）　**革命的クロンシタットとの「協定」**——一九一七年五月一七（三〇）日、クロンシタットのソヴェトは、臨時政府の司政委員ポペラーエフと紛争を生じ、司政委員の職を廃止しクロンシタット・ソヴェトに全権を付与する決議を採択した。ボリシェヴィキの支持をうけたこの決議は、労働者代表ソヴェトがクロンシタットにおける唯一の権力であり、すべての国務についてペトログラード労働者・兵士代表ソヴェトと直接に連絡をとる、と述べていた。ブルジョア新聞や、エス・エルおよびメンシェヴィキの新聞は、クロンシタットの人民とボリシェヴィキにたいして中傷カンパニアを開始し、クロンシタットがロシアから分離した、などと書きたてた。

ペトログラード・ソヴェトと臨時政府から、クロンシタット事件を処理するために代表団が派遣された（前者からはチヘイッゼその他、後者からは大臣スコーベレフおよびツェレテーリ）。二人の大臣は、クロンシタットの司政委員をクロンシタットのソヴェトが選挙し、その選挙を臨時政府が確認するという趣旨の妥協的な決定を、ソヴェトに受けいれさせることに成功した。二六

（一八七）　**コルニーロフの反乱**——一九一七年八月に起こったブルジョア・地主の反革命的反乱。反乱の先頭に立ったのは、ツァーリの将軍で最高総司令官のコルニーロフであった。陰謀者一味のねらいは、ペトログラードを占領し、ボリシェヴィキ党を粉砕し、ソヴェトを解散させ、国内に軍事独裁を打ちたて、帝政の復活を準備する

ことにあった。臨時政府の首相ケーレンスキーも陰謀に参加したが、反乱が始まると、自分がコルニーロフもろとも一掃されることを恐れて、彼と手をきり、彼を臨時政府にたいする反乱者と宣告した。

反乱は八月二五日（九月七日）に開始された。コルニーロフは第三騎兵軍団をペトログラードに進撃させた。当のペトログラード市内では、コルニーロフ派の反革命組織が行動の準備をととのえていた。

ボリシェヴィキ党は、コルニーロフにたいする大衆の闘争の先頭に立つと同時に、臨時政府とその手先であるエス・エルやメンシェヴィキの暴露をやめなかった。ボリシェヴィキ党中央委員会の呼びかけにおうじて、ペトログラードの労働者と革命的な兵士・水兵は、反乱軍とのたたかいに立ちあがった。首都の労働者から赤衛軍部隊が急速に編成されはじめた。多くの地方に革命委員会が結成された。コルニーロフ軍部隊の前進は阻止された。ボリシェヴィキの扇動の影響をうけて、それらの部隊のあいだに解体が始まった。

コルニーロフの行動は、ボリシェヴィキ党に指導される労働者、農民によって鎮圧された。大衆の圧力に押されて、臨時政府はやむなく、コルニーロフ一味を逮捕して、反乱のかどで裁判にかける命令を出した。二六二

（二八八） エンゲルス『亡命者文献。二、ブランキ派コミューン亡命者の綱領』、全集、第一八巻、五二一―五二八ページを参照。なお「分割払」ということばは、一八九四年一月二六日付のエンゲルスからF・トゥラーティにあてた手紙からとったもの。二六三

（二八九） カデットといっしょの政府にははいらないというエス・エルとメンシェヴィキの決定――コルニーロフの反乱が鎮圧されたのち、臨時政府の改組が問題となったが、はじめの予定では、メンシェヴィキやエス・エルといっしょにカデットも入閣するはずであった。メンシェヴィキとエス・エルは、大衆の信頼を完全に失うことを恐れて、カデットの参加する政府には入閣しないと声明した。一九一七年九月一（一四）日、臨時政府は、ケーレンスキー、ヴェルホーフスキー、ヴェルデレーフスキー、ニキーチン、テレシチェンコの五名からなる総裁政府の組織を決定した。公式にはカデットはこの政府にはいらなかったが、組閣にはカデットとの舞台裏の協定があった。その翌日の九月、二（一五）日にひらかれた労働者・兵士代表ソヴェト中央執行委員会と農民ソヴェト執行委員会の合同総会は、新しい政府の支持を決定した。こうして、口さきではカデットと手をきると称しながら、メンシェヴィキとエス・エルは、こんども地主と資本家がその手に権力を維持するのを助けた。二六五

（二九〇） 五月六日付の連立政府の声明――一九一七年五月六（一九）日に中央の各新聞に発表されたもの。その第三節にはこう述べていた。「臨時政府は、生産物の生産、運輸、交換、分配にたいする国家的および社会的統制をひきつづき計画的に遂行することによって、国の荒廃とたゆむことなく、断固としてたたかうであろうし、必要な場合にはまた生産の組織化を実施するであろう。」二六五

（二九一） 全ロシア民主主義会議――権力の問題を解決するためにメンシェヴィキ＝エス・エルに牛耳られるソヴェト中央執行委員会によって招集されたが、会議主催者の真の目的は、革命の発展から人民大衆の注意をそらせることにあった。会議は一九一七年九月一四―二〇日（九月二七日―一〇月五日）にペトログラードでひらかれた。会議の出席者は一五〇〇名をこえた。会議では、住民の小部分を代表する市議会やゼムストヴォや協同組合に、住民の圧倒的多数を代表する労働者・兵士代表ソヴェトよりも多くの議席があたえ

られていた。ボリシェヴィキは、メンシェヴィキとエス・エルを暴露する演壇としてこれを利用するために、同会議に参加した。

民主主義会議は予備議会（共和国臨時議会）の創設についての決定を採択した。これは、ロシアに議会制度が制定されたと見せかけるたくらみであった。だが、臨時政府の承認した規定によると、予備議会は政府の諮問機関にすぎなかった。

民主主義会議のボリシェヴィキ代議員団会議は、七七票対五票で予備議会への参加を決定し、党中央委員会もこれを承認した。レーニンは、民主主義会議にたいするボリシェヴィキの戦術の誤りを批判した。彼は、ボリシェヴィキが予備議会から脱退することを断固要求し、蜂起の準備に全力を集中する必要があると強調した。党中央委員会はレーニンの提案を審議し、ボリシェヴィキの予備議会脱退についての決定を採択した。一〇月七（二〇）日の予備議会開会の初日に、ボリシェヴィキは宣言を読みあげて退場した。二七三

（一九二） キート・キートィチ――オストローフスキーの戯曲『他人の酒宴で二日酔』の登場人物ティート・ティートィチ・ブルースコフのあだ名。粗野で頑迷で専制的な商人の典型。二七三

（一九三）『デーニ』（『毎日』）――ブルジョア自由主義的傾向の日刊新聞、一九一二年からペテルブルグで発行されていた。二月革命後、解党派メンシェヴィキの手に移った。一九一七年一〇月二六日（一一月八日）、ペトログラード・ソヴェト軍事革命委員会によって閉鎖された。二七九

（一九四） レーニン『資本家を暴露せよ』、全集、第二四巻、五四七―五四九ページ、『空にある鶴か、手のなかにある山雀か』、全集、第二五巻、六一ページ、『社会主義の導入か、それとも官金私消の暴露か』、同、六二―六四ページ、『空文句と事実』、同、一三九―一四一ページ、『資本家諸君は利潤をどうやって隠しているか』、同、一四二―一四七ページ、『危機はせまり、荒廃は激しくなる』、同、一四五―一四七ページを参照。二八三

（一九五） レーニン『社会主義の導入か、それとも官金私消の暴露か？』、全集、第二五巻、六二―六四ページを参照。二八五

（一九六） レーニン『紙のうえの決議』、全集、第二五巻、二八三―二八七ページを参照。二八六

（一九七）『スヴォボードナヤ・ジーズニ』（『自由な生活』）――臨時政府によって閉鎖された新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』（『新生活』）のかわりに、一九一七年九月二（一五）日から八（二一）日まで、ペトログラードで発行されていた日刊新聞。

『ノーヴァヤ・ジーズニ』――一九一七年四月一八日（五月一日）から一九一八年七月までペトログラードで発行されていた日刊新聞。創刊者は、国際派メンシェヴィキと雑誌『レートピシ』（『年代記』）を中心に集まっていた作家たちとのグループであった。新聞は十月革命とソヴェト権力の樹立とに敵意を示し、一九一八年七月に閉鎖された。二九五

（一九八）『ビルジョーフカ』――『ビルジェヴィエ・ヴェードモスチ』（『取引所通報』）のこと、一八八〇年に創刊されたブルジョア新聞。ペテルブルグで発行されていた。この新聞は、金しだいの迎合、無定見の代名詞となった。一九一七年一〇月末、ペトログラード・ソヴェトの軍事革命委員会によって閉鎖された。二九五

（一九九） 本書、二七二―二七三ページを参照。二九六

（二〇〇） ジャコバン――フランス革命時代の民主主義政党、革命的ブルジョアジーの最も大胆な代表者。ジャコバン派は、一七九三年六月二日、その独裁を樹立した。ジャコバン派は、封建制の遺物

を一掃して資本主義の発展に道をひらく一連の措置をとり、革命的テロルによって国内の反革命を鎮圧し、革命軍を創設して外国の侵略軍からフランスを救った。反革命的大ブルジョアジーの陰謀によって、その独裁は一七九四年七月二七日（テルミドール九日）に打倒された。三〇四

（三〇一）　**両首都のソヴェトでの小ブルジョア諸党の敗北**――一九一七年八月三一日（九月一三日）、ペトログラード・ソヴェトの総会は、その成立以来はじめて、ボリシェヴィキ代議員団の提出した決議案を二七九票対一一五票（棄権五〇票）の大多数で採択した。この決議はブルジョアジーとの協調政策を断固として拒否するものであった。決議は、全権力をソヴェトの手に移すことを呼びかけ、国の革命的改造の計画を定めた。さらに九月五（一八）日、モスクワの労働者・兵士代表ソヴェトも、ボリシェヴィキの提出した同様の決議を、三五五票の大多数で採択した。三〇七

（三〇二）　**エス・エル左派**――社会革命党左派（国際派）は、一九一七年の七月事件後、農民の左翼的気分の進展を反映して急速に成長しはじめた。十月革命当時の第二回全ロシア・ソヴェト大会で、エス・エル左派は、ボリシェヴィキと表決をともにした。一九一七年一一月一九―二八日（一二月二―一一日）にひらかれた第一回全ロシア大会で、エス・エル左派は独立の党を結成した。

一九一七年一一月―一二月はじめ、ボリシェヴィキとエス・エル左派との交渉の結果、後者の政府参加について協定が成立した。エス・エル左派は人民委員会議の共同政策を遂行する義務を負い、一連の人民委員部の参与会にはいった。ボリシェヴィキと協力するようになったエス・エル左派も、社会主義建設の根本問題についてボリシェヴィキと意見を異にし、プロレタリアートの執権に反対した。一九一八年夏以後、エス・エル左派のあいだに反ソヴェト権力の気分が高まり、同年七月彼らは武装反乱をおこし、ソヴェトから除名された。大衆の支持を失ったエス・エル左派は、その後ソヴェト権力にたいする武装闘争の道をとった。左派のうちのボリシェヴィキと協力する立場をとった部分は、おおむね共産党に入党した。三〇七

（三〇三）　**労働者・兵士代表ソヴェト第一回全ロシア大会**――一九一七年六月三―二四日（六月一六日―七月七日）にペトログラードでひらかれた。大会には一〇九〇名の代議員が出席した。ボリシェヴィキはそのころにはソヴェト内の少数派で、一〇五名の代議員しかもっていなかった。圧倒的多数の代議員は、メンシェヴィキ＝エス・エルのブロックとこれを支持する小グループに属していた。大会の議題は、革命的民主主義派と政府権力、戦争にたいする態度、憲法制定議会の準備、民族問題、土地問題などであった。

レーニンは、大会の席上、六月四（一七）日に臨時政府にたいする態度について、また六月九（二二）日に戦争について演説した。ボリシェヴィキは大会の演壇を大いに利用して、臨時政府の帝国主義政策およびメンシェヴィキとエス・エルの協調戦術を暴露し、全権力をソヴェトの手に移すことを要求した。

大会のエス・エル＝メンシェヴィキ的多数派は、採択された諸決議のなかで、臨時政府を支持する立場をとり、臨時政府が準備していた戦線での攻勢を是認し、権力をソヴェトに移すことに反対した。大会は、第二回ソヴェト大会まで存続した中央執行委員会を選出したが、そのなかではエス・エルとメンシェヴィキが圧倒的多数を占めた。ここにあるレーニンのことばについては、レーニン『労働者・兵士代表ソヴェト第一回全ロシア大会。臨時政府にたいする態度についての演説』、全集、第二五巻、三―五ページを参照。三〇九

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名を示す）

アウクセンチエフ、エヌ・デ（一八七八—一九四三）——エス・エル党員。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一七年、ケーレンスキー連立政府の内相。のち国外に亡命。

アクセリロード、ペ・ベ（一八五〇—一九二八）——メンシェヴィキの指導者、第一次大戦中、はじめ社会排外主義者、のちツィンメルヴァルト中央派。十月革命後、反ソ活動をおこなう。

アードラー、ヴィクトル（一八五二—一九一八）——オーストリア社会民主党の創立者で指導者、修正主義者。オーストリア・マルクス主義の代表者。

アードラー、フリードリヒ（一八七九—一九六〇）——ヴィクトルの息子、オーストリア社会民主党員、同党書記。のち第二半インタナショナルの創立に参加。

アレクサンドル二世（ロマノフ）（一八一八—一八八一）ロシアのツァーリ（在位一八五五—一八八一）。

アレクシンスキー、ゲ・ア（一八七九生）——はじめボリシェヴィキ。第一次大戦中は排外主義者。一九一七年七月、レーニンやボリシェヴィキを中傷する偽造文書を発表。翌年、国外に亡命して極反動派に参加。

アレクセーエフ、エム・ヴェ（一八五七—一九一八）——ツァーリの将軍、君主主義者で反革命家。二月革命後、最高総司令官、ついで参謀総長。のち白衛派「義勇軍」を指揮した。

イリイーン、ヴェー——レーニンの筆名。

ヴァンデルヴェルデ、エミル（一八六六—一九三八）——ベルギー労働党および第二インタナショナルの指導者。極端な修正主義者で日和見主義者。

ウィリアムズ、ラッセル——イギリスの社会主義者、独立労働党員。第一次大戦中、反軍国主義の立場をとり、第二インタナショナル指導者の政策を批判した。

ヴィルヘルム二世（一八五九—一九四一）——ドイツ皇帝ならびにプロイセン国王（在位一八八八—一九一八）。

ウェインコープ、ダーヴィット（一八七七—一九四一）——オランダの社会民主主義者、のち共産党員。第一次大戦中はツィンメルヴァルト左派。社会民主党の創立者のひとり。

ウェッブ夫妻（夫シドニ、一八五九—一九四一、妻ビアトリス、一八五八—一九四三）——イギリスの改良主義的社会活動家、フェビアン協会の創立者、労働党員。イギリス労働運動史の著者。

ヴェーバー、マックス（一八六四—一九二〇）——ドイツの経済学者、社会学者、新カント派。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』など多数の著書がある。

ヴォイノフ、イ・ア（一八八四—一九一七）——一九〇九年からのボリシェヴィキ。一九一七年七月六（一九）日、『小型版プラウダ』の配布中にカザック兵と士官学校生徒に殺された。

エレンボーゲン、ヴィルヘルム（一八六三生）——オーストリア社会民主党の指導者、修正主義者。「文化的民族的自治」の支持者。一九〇一年から国会議員、第一次大戦中は社会排外主義者。のちファシズムを鼓舞した。

エンゲルス、フリードリヒ（一八二〇—一八九五）

カヴェニャク、ルイ・ウジェーヌ（一八〇二―一八五七）――フランスの将軍、反動政治家。一八四八年の二月革命後、アルジェリア総督、ついで陸相。同年六月から軍事独裁の先頭に立ち、パリ労働者の六月蜂起を苛酷に鎮圧した。

カウツキー、カール（一八五四―一九三八）――第二インタナショナルおよびドイツ社会民主党の指導的理論家、日和見主義者。第一次大戦中は中央派。十月革命後はソヴェト権力の激しい敵。

カ・エル →ラデック、カール

カガーリン、ア・ヴェ――ツァーリの将軍、公爵。二月革命後、カフカーズ原住民師団の旅団長、コルニーロフ反乱の積極的参加者。

ガポン、ゲ・ア（一八七〇―一九〇六）――聖職者、挑発者、ツァーリ保安部の手先。一九〇五年一月九日、ペテルブルグ労働者のツァーリ請願行進を挑発した。

カーメネフ（**ローゼンフェリド**）、**エリ・ベ**（**ユーリー**）（一八八三―一九三六）――一九〇一年からボリシェヴィキ党員。第七回（四月）全国協議会で党中央委員。二月革命後、社会主義革命をめざす党のレーニン的方針に反対。十月革命後、人民委員会議副議長、党中央委員会政治局員。のちトロツキー＝ジノヴィエフ反党ブロックの指導者、党から除名された。

ガリフェ、ガストン・アレクサンドル（一八三〇―一九〇九）――フランスの将軍、パリ・コミューンの圧殺を指揮した。

カーレソン、カール（一八六五―一九二九）――スウェーデン社会民主党左派。第一次大戦中は国際主義者。一九一七―一九二四年、スウェーデン共産党員。脱党して社会民主党に復帰。

カレーヂン、ア・エム（一八六一―一九一八）――ツァーリの将軍、ドン地方のカザックのアタマン。コルニーロフ反乱の積極的な参加者。十月革命後、カザックの反革命を指導、白衛派「義勇軍」の創設に参加。敗戦して射殺された。

キエフスキー、ペ →ピャタコーフ、ゲ・エリ

ギルボー、アンリ（一八八五―一九三八）――フランスの社会主義者、ジャーナリスト。第一次大戦中は中央派。一九一六年、キーンタール会議に参加。のちトロツキスト。

グヴォズデフ、カ・ア（一八八三生）――解党派メンシェヴィキ。第一次大戦中は社会排外主義者、中央軍事工業委員会の労働者グループの議長。二月革命後、ペテルブルグ・ソヴェト執行委員、ブルジョア臨時政府の労働次官、ついで労働相。

グチコーフ、ア・イ（一八六二―一九三六）――大資本家、オクチャブリスト党の創立者で指導者。二月革命後、第一次臨時政府の陸海軍相、コルニーロフ反乱の組織に参加。十月革命後はソヴェト権力とたたかい、のち亡命。

クーノー、ハインリヒ（一八六二―一九三六）――ドイツの歴史家、社会学者、人類学者。はじめはマルクス主義者、ついで修正主義者。第一次大戦中は社会帝国主義者。

クリシェル、ア――カデット。第一次大戦中、カデット党の中央機関紙『レーチ』に寄稿。

グリム、ローベルト（一八八一―一九五八）――スイス社会民主主義党の指導者、同党書記。第一次大戦中は中央派、ツィンメルヴァルト、キーンタール両会議の議長、国際社会主義委員会議長。中央派（第二半）インタナショナルの創立者のひとり。

グリューンベルク、カール（一八六一―一九四〇）――オーストリアの社会民主主義者、法学者、経済学者、歴史家。第一次大戦中は平和主義者。十月革命に共感、「ソヴェト友の会」の積極的な会員。

グールヴィチ、イ・ア（一八六〇—一九二四）——ロシアの経済学者、ナロードニキ。一八八九年アメリカに亡命。同地の労働組合運動、社会民主主義運動に参加。一九〇〇年代には修正主義者。

クレンボーフスキー、ヴェ・エヌ（一八六〇—一九二一）——ツァーリの将軍。二月革命後、北部方面軍総司令官、コルニーロフ反乱の積極的参加者。十月革命後、赤軍に勤務、反逆罪で銃殺された。

グロイリヒ、ヘルマン（一八四二—一九二五）——スイス社会民主党の創立者、同党右派の指導者。一九〇二年から国会議員。第一次大戦中は社会排外主義者。

ゲード、ジュール（一八四五—一九二二）——フランス社会主義運動および第二インタナショナルの組織者で指導者。マルクス主義思想の普及と社会主義運動の発展に貢献したが、セクト主義的な誤りをおかした。第一次大戦が始まると、社会排外主義の立場をとり、ブルジョア政府に入閣した。

ケーレンスキー、ア・エフ（一八八一—生）——エス・エル党の指導者、第一次大戦中は熱狂的な祖国防衛派。二月革命後、臨時政府の閣僚、ついで首相兼最高総司令官。十月革命後、ソヴェト権力とたたかい、一九一八年に国外へ亡命。

ゴリデンベルグ、イ・ペ（一八七三—一九二二）——社会民主主義者。はじめボリシェヴィキ、第一次大戦中は祖国防衛派、プレハーノフの支持者。一九一七—一九一九年、「ノーヴァヤ・ジーズニ」グループに所属。のちボリシェヴィキ党に復帰。

コルニーロフ、エリ・ゲ（一八七〇—一九一八）——ツァーリの将軍、帝政派。一九一七年七—八月、ロシア軍最高総司令官、反革命的反乱の先頭に立つ。反乱鎮圧後、逮捕されたが、ドン地方へ逃亡し、白衛派「義勇軍」を組織し、戦死した。

コロンタイ、ア・エム（一八七二—一九五二）——はじめメンシェヴィキ、一九一五年からボリシェヴィキ。第一次大戦中は革命的国際主義者。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト執行委員。十月革命後、国家扶養人民委員、のち党中央委員会婦人部長、コミンテルン国際婦人書記局の書記。

サーヴィンコフ、ベ・ヴェ（ロープシン）（一八七九—一九二五）——エス・エル党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後、陸軍次官、ついでペトログラード軍事総督。十月革命後は一連の革命的反乱の組織者。のち逮捕され、獄中で自殺。

ザルードヌィ、ア・エス（一八六三—一九三四）——弁護士。二月革命後、「人民社会」党に入党。七—八月、ブルジョア臨時政府の法相。十月革命後は政治活動から離れた。

サンバ、マルセル（一八六二—一九二二）——フランス社会党の改良主義的指導者、ジャーナリスト、下院議員。第一次大戦中は社会排外主義者、公共事業相として帝国主義的「国防政府」に入閣した。

シスモンディ、ジャン-シャルル-レオナール・シモンド・ド（一七七三—一八四二）——スイスの経済学者、歴史家。小ブルジョア経済学の創始者。

ジノヴィエフ、ゲ・イエ（一八八三—一九三七）——ボリシェヴィキ。第一次大戦中は国際主義者。一九一七年一〇月には武装蜂起に反対した。第一次大戦中は国際主義者。十月革命後は党、ソヴェトおよびコミンテルンの指導的活動に従事。のちカーメネフ、ついでトロツキーと反党ブロックを結び、党から除名された。

シャイデマン、フィリップ（一八六五—一九三九）——ドイツ社会民主党の日和見主義的極右派の指導者。一九〇三年から国会議員。第一次大戦中は猛烈な社会排外主義者。一九一八年一一月革命当時、

スパルタクス団員虐殺の張本人。ドイツ労働運動の血なまぐさい弾圧の組織者。

ジョージ五世（一八六五―一九三六）――イギリス国王（在位一九一〇―一九三六）。

シンガリョーフ、ア・イ（一八六九―一九一八）――カデット、ゼムストヴォ活動家。第二、第三、第四国会議員。二月革命後、ブルジョア臨時政府の農相、ついで蔵相。

スコーベレフ、エム・イ（一八八五―一九三九）――メンシェヴィキ。第一次大戦中は中央派。二月革命後、ペトログラード・ソヴエト副議長、第一次全ロシア中央執行委員会副議長、ブルジョア臨時政府の労働相。十月革命後、メンシェヴィキから離れ、のちボリシェヴィキ党員。

スタウニング、トールヴァル・アウグスト・マリヌス（一八七三―一九四三）――デンマーク社会民主党および第二インタナショナルの右翼的指導者のひとり。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一六年からブルジョア政府の無任所相、のち首相。三〇年代以後ファシスト・ドイツに協力した。

ステクローフ、ユ・エム（一八七三―一九四一）――ボリシェヴィキ。二月革命後は「革命的祖国防衛派」、ペトログラード・ソヴエト執行委員、のちボリシェヴィキ党に帰る。十月革命後、全ロシア中央執行委員。

ストルィピン、ペ・ア（一八六二―一九一一）――帝政ロシアの政治家、大地主。一九〇六―一一年、首相。革命運動を苛酷に弾圧し、いわゆるストルィピン反動期を出現させた。

ストルーヴェ、ペ・ベ（一八七〇―一九四四）――ブルジョア経済学者、評論家、カデット党の指導者。「合法マルクス主義」の著名な代表者。ロシア帝国主義の思想的代弁者。十月革命後はソヴエト権力の狂暴な敵。

ストレーム、フレデリク（一八八〇―一九四八）――スウェーデンの左派社会民主主義者、作家、評論家。第一次大戦中は国際主義者。一九二一―二四年、スウェーデン共産党書記。脱党して社会民主党に復帰。

スノーデン、フィリップ（一八六四―一九三七）――イギリスの政治家、独立労働党右派の指導者。一九〇六年から下院議員。第一次大戦中は中央派、ブルジョアジーとの連立を支持した。のち無任所相。共産主義の狂暴な敵。

スピリドーノヴァ、エム・ア（一八八四―一九四一）――エス・エル党の指導者。二月革命後はエス・エル左派、同党中央委員。一九一八年七月のエス・エル左派の反革命的反乱に積極的に参加。のち政治活動から離れた。

スペクタートル　↓ナヒムソン、エム・イ

スミート、エム　↓ファリクネル、エム・エヌ

セムコーフスキー、エス（**ブロンシテイン、エス・ユ**）（一八八二生）――社会民主主義者、メンシェヴィキ。民族自決権に反対した。第一次大戦中は中央派。一九一七年、メンシェヴィキ中央委員。のちメンシェヴィキと手をきる。

セラーティ、ジャチント・メノッティ（一八七二―一九二六）――イタリア労働運動の著名な活動家、社会党の指導者。第一次大戦中は国際主義者。ツィンメルヴァルト、キーンタールの両会議に参加。のちイタリア共産党内で積極的に活動。

ゾルゲ、フリードリヒ・アードルフ（一八二八―一九〇六）――ドイツの社会主義者、国際労働運動、社会主義運動の著名な活動家。

マルクス、エンゲルスの親友。第一インタナショナル総評議会書記。

ダーヴィット、エドゥアルト（一八六三—一九三〇）——ドイツの経済学者、社会民主党員、国会議員、ベルンシュタイン主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九—一九二〇年、内相。

ダン（グールヴィチ）、エフ・イ（一八七一—一九四七）——メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は祖国防衛派。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト執行委員。第一次中央執行委員会幹部会員。十月革命後、ソヴェト権力とたたかい、国外へ追放された。

チェルノーフ、ヴェ・エム（一八七六—一九五二）——エス・エル党の指導者で理論家。一九一七年、ブルジョア臨時政府の農相、地主の土地を占拠した農民にたいして苛酷な弾圧政策をとった。十月革命後、反ソ反乱の組織者。

チヘイッゼ、エヌ・エス（一八六四—一九二六）——メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派。二月革命のときは国会臨時委員、祖国防衛派。ついでペトログラード・ソヴェト議長、第一次中央執行委員会議長。十月革命後、メンシェヴィキの反革命政府であるグルジア憲法制定議会の議長、のち亡命。

チヘンケーリ、ア・イ（一八七四生）——メンシェヴィキ。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後、ブルジョア臨時政府のザカフカーズ駐在代表。一九一八—二一年、グルジアの反革命的メンシェヴィキ政府の外相、ついで亡命。

ツエレテーリ、イ・ゲ（一八八二—一九五九）——メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト執行委員、第一次の中央執行委員、ブルジョア臨時政府の郵政相、ついで内相。十月革命後、グルジアの反革命的メンシェヴィキ政府の指導者。のち亡命。

テオドローヴィチ、イ・ア（一八七五—一九四〇）——古くからのボリシェヴィキ。第五回党大会で中央委員。十月革命後は食糧人民委員。内戦時代にはパルチザン部隊に参加。のちクレスティンテルン（農民インタナショナル）書記長。

デューリング、オイゲン（一八三三—一九二一）——ドイツの経済学者で哲学者、講壇社会主義者。マルクスおよび科学的社会主義の反対者。

テレシチェンコ、エム・イ（一八八八生）——ロシアの百万長者、大製糖工場主。二月革命後、ブルジョア臨時政府の蔵相、ついで外相。十月革命後、亡命。

トィシカ、ヤン（ヨギヘス、レーオ）（一八六七—一九一九）——ポーランドおよびドイツ労働運動の著名な活動家。第一次大戦中は国際主義者、「スパルタクス団」創立者のひとり。のちドイツ共産党の創立に参加。

トゥラーティ、フィリッポ（一八五八—一九三二）——イタリア社会党の改良主義的右派の指導者。第一次大戦中は中央派。十月革命に敵意を示した。

トマ、アルベール（一八七八—一九三二）——フランスの政治家、社会改良主義者。第一次大戦中は社会排外主義者、ブルジョア政府の軍需相。二月革命後、ロシアに来て戦争継続を扇動した。

トリール、ゲルソン（一八五一生）——デンマーク社会民主党左派の指導者。第一次大戦中は国際主義者。一九一六年九月、党代表のブルジョア政府入閣にかんする党大会の決定に反対、抗議のしるしとして脱党した。

トルストイ、エリ・エヌ（一八二八—一九一〇）——ロシアの大作家、思想家。

トルルストラ、ピーテル・イェレス（一八六〇―一九三〇）――オランダ労働運動の指導者、右翼社会主義者。第一次大戦中は親ドイツ的傾向の社会排外主義者。

トレーヴェス、クラウディオ（一八六八―一九三三）――イタリア社会党の改良主義的指導者。第一次大戦中は中央派。十月革命に敵意を示した。

トロツキー（ブロンシテイン）、エリ・デ（一八七九―一九四〇）――メンシェヴィキ。第一次大戦中は中央派。二月革命後、第六回党大会でボリシェヴィキ党に入党。つねに党の一般方針に反対する分派闘争をおこない、一九二七年に党から除名された。

ナヒムソン、エム・イ（スペクタートル）（一八八〇生）――経済学者、評論家、ブンド派。第一次大戦中は中央派。

ニコライ一世（ロマノフ）（一七九六―一八五五）――ロシアのツァーリ（在位一八二五―一八五五）。

ニコライ二世（ロマノフ）（一八六八―一九一八）――ロシア最後のツァーリ（在位一八九四―一九一七）。

ネクラーソフ、エヌ・ヴェ（一八七九生）――カデット、第三および第四国会議員。一九一七年、ブルジョア臨時政府の交通相、無任所相、蔵相。同年夏、カデットから脱党。

ネペーニン、ア・イ（一八七一―一九一七）――海軍中将、一九一六年からバルト艦隊司令長官。翌年三月、蜂起した水兵に殺された。

ネルマン、トゥーレ（一八八六生）――スウェーデンの左派社会民主主義者、作家。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一七―一九二九年、共産党員。のち社会民主党に復帰。

ノターベネ　↓ブハーリン、エヌ・イ

ハイルマン、エルンスト（一八八一―一九四〇）――ドイツの右翼社会民主主義者、評論家。第一次大戦中は極右の社会排外主義者。のちナチの収容所内で殺された。

ハインドマン、ヘンリ・メアズ（一八四二―一九二一）――イギリスの社会主義者、改良主義者。イギリス社会党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。十月革命に敵意を示した。

バウアー、オットー（一八八一―一九三八）――オーストリア社会民主党および第二インタナショナルの指導者。いわゆる「オーストリア・マルクス主義」の代表者。

バーガー、ヴィクター・ルイ（一八六〇―一九二九）――アメリカの社会主義者、社会党創立者のひとり。第一次大戦中は平和主義の立場をとった。

バグラチオーン、デ・ペ（一八六三生）――公爵、将軍。二月革命後、カフカーズ原住民師団長、コルニーロフ反乱の積極的な参加者。

ハーゼ、フーゴー（一八六三―一九一九）――ドイツ社会民主党の指導者。第一次大戦中は中央派。カウツキーとともに「ドイツ独立社会党」を創立。

パニナ、エス・ヴェ――伯爵夫人、カデット党中央委員。二月革命後、ブルジョア臨時政府の次官。十月革命後、国外に亡命。

ハネツキ（フュルステンベルグ）、ヤ・エス（一八七九―一九三九）――ポーランドおよびロシア革命運動の著名な活動家。第一次大戦中はツィンメルヴァルト左派。一九一七年、ボリシェヴィキ党中央委員会在外ビューロー員。

パリチンスキー、ペ・イ（一九三〇死）――銀行界と密接なつながりをもっていた技師。二月革命後、ブルジョア臨時政府の商工次官。十月革命当時、冬宮防衛長官。

パルヴス（ゲリファンド、ア・エル）（一八六九—一九二四）——一八九〇年代末からロシアおよびドイツの社会民主主義運動に参加、メンシェヴィキ。第一次大戦中は排外主義者、ドイツ帝国主義の手先。のち運動から離れた。

ハルトシュタイン　→レーヴィ、パウル

パンネクーク、アントン（一八七三—一九六〇）——オランダの社会民主主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一八年からオランダ共産党員、コミンテルンの活動に参加。一九二一年に脱党、のち政治活動から離れた。

ピサレーフスキー——一九〇五年革命当時、黒海艦隊の海軍少将。

ピッソラーティ、レオーニダ（一八五七—一九二〇）——イタリア社会党の創立者、同党の改良主義的極右派の指導者。一九一二年、社会党から除名されて「社会改良党」を結成。第一次大戦中は社会排外主義者、参戦論者。一九一六—一九一八年、無任所相。

ピャタコーフ、ゲ・エリ（一八九〇—一九三七）——一九一〇年以来の党員。一九一五—一九一七年には、民族問題その他で反レーニン的立場をとった。一九二七年にトロツキストとして党から除名された。

ビュキャナン、ジョージ・ウィリアム（一八五四—一九二四）——イギリスの外交官。一九一〇—一九一八年、ロシア駐在大使、革命とたたかう反動勢力を援助した。

ピラト——聖書によるとキリストを死刑に処したローマのユダヤ総督。

ヒルキット、モリス（一八六九—一九三三）——アメリカ社会党の創立者、改良主義者、日和見主義者。第一次大戦中は社会愛国主義者。国際社会主義ビューロー員。

ヒルファディング、ルードルフ（一八七七—一九四一）——ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの理論家、日和見主義者、経済学者。第一次大戦中は中央派。

ヒンデンブルク、パウル・フォン（一八四七—一九三四）——ドイツの将軍、政治家。一九一六—一九一七年、ドイツ軍総司令官、ついで主戦派を指導。一九二五—一九三四年、大統領。

ファリクネル、エム・エヌ（スミート、エム）（一八七八生）——経済学者、統計学者（婦人）。二月革命後、「メジライオンツィ」グループに加盟。十月革命後、ボリシェヴィキ党員。のちソ連邦科学アカデミー準会員。

プットカンマー、ローベルト・フォン（一八二八—一九〇〇）——ドイツの反動政治家。一八八一—一八八八年、内相。社会民主主義運動、労働組合運動の弾圧政策をとった。

ブハーリン、エヌ・イ（一八八八—一九三八）——ボリシェヴィキ。第六回党大会で中央委員。十月革命後、党中央委員会政治局員、『プラウダ』編集者、コミンテルン執行委員。のち反党活動のために党から除名された。

ブーブリコフ、ア・ア（一八七五生）——商工業ブルジョアジーの代表者、技師、第四国会議員、進歩派。一九一七年八月、モスクワの国政会議に参加し、ブルジョアジーとメンシェヴィキとの連立を支持した。

プラッテン、フリードリヒ（フリッツ）——スイス社会民主党左派、共産党創立者のひとり。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一七年四月、レーニンをスイスからロシアへ送りこむ仕事に参加。

ブラン、ジャン-ジョゼフ-ルイ（一八一一—一八八二）——フ

ランスの小ブルジョア社会主義者、歴史家、階級協調主義者。一八四八年革命のときに臨時政府の閣員。

ブランキ、ルイ-オギュスト（一八〇五—一八八一）——フランスの革命家、ユートピア共産主義者。革命的陰謀家の小グループによる権力奪取をめざし、大衆の組織が革命的闘争に果たす決定的な役割を理解しなかった。

ブランティング、カール・ヤルマル（一八六〇—一九二五）——スウェーデン社会民主党首、日和見主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九年、連立政府に入閣、対ソ軍事干渉を支持した。

プリューガー、パウル・ベルンハルト（一八六五生）——スイスの右翼社会民主主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。

プリレジャーエフ、イ・ア——エス・エル。同党の新聞『デーロ・ナローダ』に寄稿。一九一七年一二月以後エス・エル党中央委員。

ブルィギン、ア・ゲ（一八五一—一九一九）——一九〇五—一九〇六年、内務大臣。一九〇五年八月六（一九）日に発表された国会法案の起草者。

ブルキン、エフ・ア（一八八八生）——社会民主主義者、解党派メンシェヴィキ。第一次大戦中は祖国防衛派。十月革命後、ボリシェヴィキ党員。

ブルデロン、アルベール（一八五八—一九三〇）——フランスの社会主義者、サンディカリズム運動左翼の指導者。一九一五年、ツィンメルヴァルト会議に参加、中央派的立場をとる。のち革命的労働運動の反対者。

プルードン、ピエール-ジョゼフ（一八〇九—一八六五）——フランスの小ブルジョア社会主義者。無政府主義の理論的創始者のひとり。

プレスマーヌ、アドリアン（一八七九生）——フランスの社会主義者。一九一二年、国際社会主義ビューローにおけるフランス社会党の常任代表。第一次大戦中は中央派。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（一八五六—一九一八）——ロシアおよび国際労働運動のすぐれた活動家、ロシア最初のマルクス主義宣伝家。メンシェヴィキ。第一次大戦中は社会排外主義者。

プロコポーヴィチ、エス・エヌ（一八七一—一九五五）——極右派の「経済主義者」。一九〇六年にはカデット党中央委員。二月革命後、ブルジョア臨時政府の食糧相。のち国外に亡命。

ヘイルズ、ジョン（一八三九生）——イギリス労働運動の活動家、第一インタナショナル総評議会書記。自由主義的ブルジョアジーに接近し、総評議会とその指導者マルクス、エンゲルスに反対した。

ヘーグルンド、カール・Z・コンスタンティン（一八八四—一九五六）——スウェーデンの社会民主主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一七—二四年、スウェーデン共産党の指導者。党から除名されて社会民主党に復帰。

ペシェホーノフ、ア・ヴェ（一八六七—一九三三）——自由主義的ナロードニキ、人民社会党の指導者。一九一七年にはブルジョア臨時政府の食糧相。のち白衛派亡命者。

ベルナツキー、エム・ヴェ（一八七六生）——経済学教授。一九一七年九月からブルジョア臨時政府の蔵相、デニーキン、ヴランゲリ両反革命政府の蔵相。のち白衛派亡命者。

ペレヴェールゼフ、ペ・エヌ——弁護士、トルドヴィキ。二月革命後、第一次連立臨時政府の法相。一九一七年七月、レーニンとボリシェヴィキを中傷するアレクシンスキーおよび軍防諜機関の偽造文書を公表した。

ヘンダソン、アーサー（一八六三—一九三五）——イギリス労働党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者、ブルジョア政府に入閣。二月革命後、ロシアに来て戦争継続を扇動した。

ポアンカレ、レモン（一八六〇—一九三四）——フランスのブルジョア政治家、首相、大統領。フランス帝国主義の指導者。

ポトレソフ、ア・エヌ（一八六九—一九三四）——メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一七年、悪質なボリシェヴィキ攻撃をおこなう。十月革命後、国外に亡命。

ボナパルト、ナポレオン（ナポレオン一世）（一七六九—一八二一）——フランスの皇帝（在位一八〇四—一八一四、一八一五）。

ボナパルト、ルイ（ナポレオン三世）（一八〇八—一八七三）——フランスの皇帝（在位一八五二—一八七〇）。一世の甥。

ホブソン、ジョン・アトキンソン（一八五八—一九四〇）——イギリスの経済学者、ブルジョア改良主義および平和主義の典型的な代表者。晩年には公然たる帝国主義弁護論に移り、「世界国家論」を説いた。

ボーブリンスキー、アル・ア、アン・ア、ヴェ・アー——ともに伯爵、大地主、製糖業者、反動政治家。

ホルテル、ヘルマン（一八六四—一九二七）——オランダの社会民主主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九一八—一九二一年、オランダ共産党員。のち政治活動から離れた。

ボルヒャルト、ユリアーン（一八六八—一九三二）——ドイツの社会民主主義者。第一次大戦中はツィンメルヴァルト左派、戦争末期にはサンディカリズムの立場に移った。

ポーロフツェフ、ペ・ア（一八七四生）——将軍。一九一七年夏、ペトログラード軍管区司令官。七月事件当時、平和なデモンストレーションへの発砲と『プラウダ』編集局の破壊とを指揮した。

マイエラス、バルテルミ（一八七九生）——フランスの社会主義者、下院議員。第一次大戦中は中央派的平和主義者。第二インタナショナルの復活を主張した。

マクドナルド、ジェイムズ・ラムジ（一八六六—一九三七）——イギリスの政治家、労働党首、日和見主義者。第一次大戦の後期には帝国主義ブルジョアジーを公然と支持した。のち再三首相。

マクマオン、モリス（一八〇八—一八九三）——フランスの軍人、政治家、王党派。一八七〇年、フランス＝プロイセン戦争に破れて捕虜となる。釈放後、パリ・コミューンの圧殺に参加。のち大統領。

マクレイン、ジョン（一八七九—一九二三）——イギリス労働運動の著名な活動家。第一次大戦中、国際主義の立場をとった。一九一六年、社会党指導部員。晩年は政治活動から離れた。

マルクス、カール（一八一八—一八八三）

マルトィノフ、ア（ピケル、ア・エス）（一八六五—一九三五）——「経済主義者」、メンシェヴィキ、のち共産党員。第一次大戦中は中央派。二月革命後、国際派メンシェヴィキ。十月革命後、メンシェヴィキから離れた。

マルトフ、エリ（ツェデルバウム、ユ・オ）（一八七三—一九二三）——メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派。二月革命後、国際派メンシェヴィキのグループを指導。十月革命後はソヴエト権力に反対し、ドイツに亡命。

マン、トム（一八五六—一九四一）——イギリス労働運動の著名な活動家。独立労働党の創立に参加、同党左派。第一次大戦中は国際主義者。創立以来のイギリス共産党員。

ミュラー、グスタフ（一八六〇—一九二一）——スイスの右派社会民主主義者。第一次大戦中は社会排外主義者、ツィンメルヴァルト運動とたたかう。

ミュンツェンベルク、ヴィルヘルム（一八八九—一九四〇）——スイスおよびドイツの労働運動に参加。第一次大戦中は国際主義者。のちドイツ共産党中央委員、国際共産主義青年同盟書記。三〇年代には反ファシズム統一戦線の戦術に反対し、一九三九年に党から除名された。

ミリュコーフ、ペ・エヌ（一八五九—一九四三）——カデット党首、ロシア帝国主義ブルジョアジーの代弁者。二月革命後、第一次臨時政府の外相。十月革命後は外国の対ソ武力干渉の組織者。

メラン、アルフォンス（一八八一—一九二五）——フランスの労働組合活動家、サンディカリスト。第一次大戦中はツィンメルヴァルト右派。一九一八年以後は公然たる社会排外主義者、改良主義者。

モディリアーニ、ヴィットーリオ、エマヌエーレ（一八七二—一九四七）——古くからのイタリア社会党員、改良主義者。第一次大戦中は中央派、ツィンメルヴァルト左派に反対した。

ユイスマンス、カミユ（一八七一生）——ベルギー労働運動の活動家。一九〇四—一九一九年、国際社会主義ビューロー書記。第一次大戦中は中央派。のち下院議長、首相。

ユニウス　→ルクセンブルク、ローザ

ユルケーヴィチ、エリ（一八八五—一九一八）——ウクライナ社会民主労働党中央委員、ブルジョア民族主義者。

ラキートニコフ、エヌ・イ（一八六四生）——ナロードニキ、ついでエス・エル。二月革命後、農務次官。一九一九年、エス・エル党中央委員会から脱退。のち政治活動から離れた。

ラスプーチン（ノーヴィフ）、ゲ・イェ（一八七二—一九一六）——ニコライ二世の宮廷で大きな影響力をもっていた山師、聖職者。帝政派の一団に殺された。

ラッザリ、コンスタンティーノ（一八五七—一九二七）——イタリア社会党創立者のひとり、同党書記長。第一次大戦中は中央派。十月革命後、ソヴェト国家を支持し、コミンテルン第二回、第三回大会に参加した。

ラデック、カール（一八八五—一九三九）——一九〇〇年代のはじめからガリチア、ポーランドおよびドイツの社会民主主義運動に参加。第一次大戦中、国際主義の立場をとったが、中央派への動揺を示した。一九一七年からボリシェヴィキ党員。のち反党活動のために党から除名された。

リヴォーフ、ゲ・イェ（一八六一—一九二五）——公爵、大地主、カデット。二月革命後、三月から七月までブルジョア臨時政府の首相兼内相。十月革命後は白衛派亡命者。

リープクネヒト、カール（一八七一—一九一九）——第一次大戦中、国会で軍事予算に反対した唯一の議員。一九一五年スパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者。ドイツ革命に活躍中、白色テロルに倒れた。

リープマン、エフ（一八八二生）——ブンドの指導者。第一次大戦中、ツァーリズムの侵略政策を支持した。

リャザーノフ（ゴリデンダッハ）、デ・ベ（一八七〇—一九三八）——メンシェヴィキ。第一次大戦中は中央派。一九一七年、ボリシェヴィキ党に入党。一九三一年までマルクス=エンゲルス研究所長。

リャブシンスキー、ペ・ペ（一八七一生）——モスクワの大資本家で銀行家。一九一七年八月、コルニーロフ反乱の鼓舞者、組織者

のひとり。
リューレ、オットー（一八七四生）——ドイツ社会民主党左派。一九一二年から国会議員。第一次大戦中は国際主義者。一九一九年、ドイツ共産党に入党。のち社会民主党に復帰。
リンドハーゲン、カール（一八六〇—一九四六）——スウェーデンの社会主義者、ストックホルム市長。第一次大戦中は国際主義者。一九一九年、コミンテルンに加入した社会党左派の一員。のち第二インタナショナルに復帰。
ルクセンブルク、ローザ（一八七一—一九一九）——ポーランド生まれの婦人革命家、経済学者、ドイツ社会民主党左派の指導者。第一次大戦中は国際主義者、スパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者。ドイツ革命に活躍中、白色テロルにたおれた。
ルノデル、ピエール（一八七一—一九三五）——フランス社会党の改良主義的指導者。『ユマニテ』主幹。第一次大戦中は社会排外主義者。
レーヴィ（ハルトシュタイン）、パウル（一八八三—一九三〇）——ドイツの社会民主主義者。第一次大戦中、ツィンメルヴァルト左派、スパルタクス団に加入。ドイツ共産党創立大会で党中央委員。のち党から除名されて社会民主党に復帰。
レギーン、カール（一八六一—一九二〇）——ドイツの労働組合指導者、社会民主党国会議員、修正主義者。第一次大戦中は極端な社会排外主義者。戦後はブルジョアジーの政策を支持し、プロレタリアートの革命運動とたたかった。
レーデブール、ゲオルク（一八五〇—一九四七）——ドイツの社会民主主義者、国会議員。第一次大戦中はツィンメルヴァルト右派。独立社会民主党の指導者のひとり。
レンシュ、パウル（一八七三—一九二六）——ドイツ社会民主党員。第一次大戦中は社会排外主義者。一九二二年、一般党員の要求によって社会民主党から除名された。
ロイド＝ジョージ、デーヴィッド（一八六三—一九四五）——イギリスの政治家、自由党首。一九一六—一九二二年、首相。十月革命後、対ソ武力干渉および封鎖の唱道者で組織者。
ローヂチェフ、エフ・イ（一八五六生）——地主、カデット党中央委員、全四期をつうじて国会議員。二月革命後、臨時政府のフィンランド司政委員。
ロマノフ家——ロシアのツァーリの王朝（一六一三—一九一七）。
ロマノフ、ミハイール・アレクサンドロヴィチ（一八七八—一九一八）——大公、ニコライ二世の弟。
ローラント＝ホルスト、ヘンリエッタ（一八六九—一九五二）——オランダの婦人社会主義者、作家。第一次大戦の初期には中央派、ついで国際主義者。一九一八—一九二七年、オランダ共産党員、コミンテルンの活動に参加。一九二七年に脱党。
ロリオ、フェルディナンド（一八七〇—一九三〇）——フランスの社会主義者。第一次大戦中は国際主義者、ツィンメルヴァルト左派。一九二〇—一九二七年、フランス共産党員。右翼日和見主義者として除名。
ローヴィチ（ロホーヴィチ）、ゲ・ヤ——一九一七年に全国食糧委員会の一員。
ロンゲ、ジャン（一八七六—一九三八）——フランス社会党および第二インタナショナルの活動家、カール・マルクスの孫。第一次大戦中、中央派的＝平和主義的立場をとった。